

# 柿園嵐牛 俳諧資料集

加藤 定彦  
倉島 利仁  
編著



嵐牛俳諧資料館

# 柿園嵐牛 俳諧資料集

加藤 定彦  
倉島 利仁  
編著

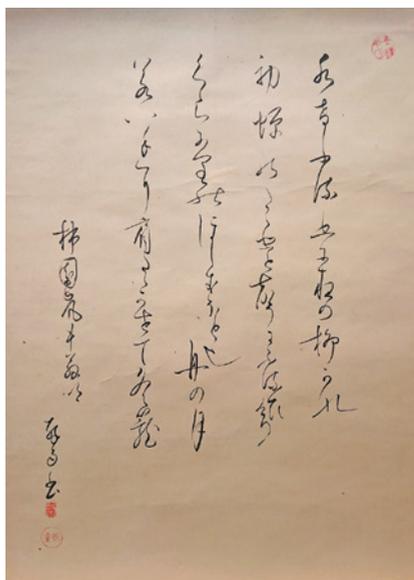
嵐牛俳諧資料館

柿園嵐牛  
俳諧資料集

加藤 定彦  
倉島 利仁

編著

嵐牛俳諧資料館



(印)

水けふる上に夜(明)の柳かな

初蟬のたゞひと声にふるびけり

くらがりのほしきほど也舟の月

若い手に肩たゝかせて冬籠

柿園風牛翁吟

酔雨書(印「酔雨」「摠重」)

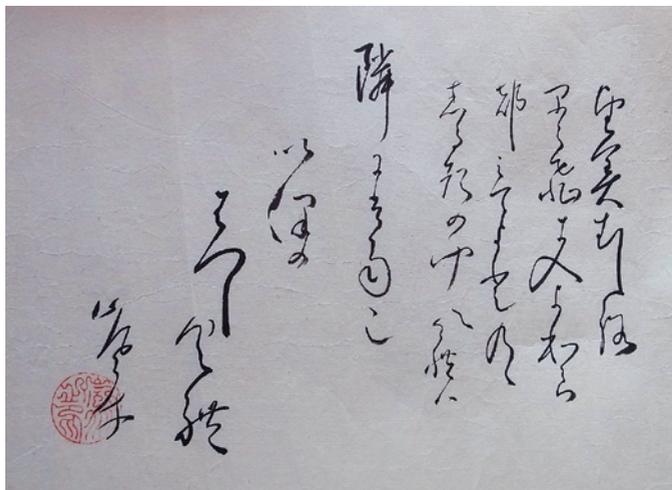
岩水寺住職行慶、俳号月查が師嵐牛の没後に描いた肖像画。追善興行で掛けるために筆を執ったもの。肖像上部の四季の遺吟を書いた酔雨は、名古屋の俳人。書家としても知られる。



柿園嵐牛肖像—月查画—

もみむしろ／早々ひき入よ、わら  
 つみてよ、とのゝ／しる声の聞えければ  
 隣には雨也／いほの／はつしぐれ

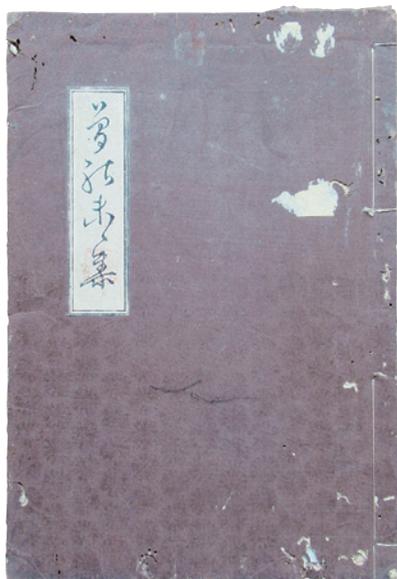
嵐牛（印「嵐牛之印」）



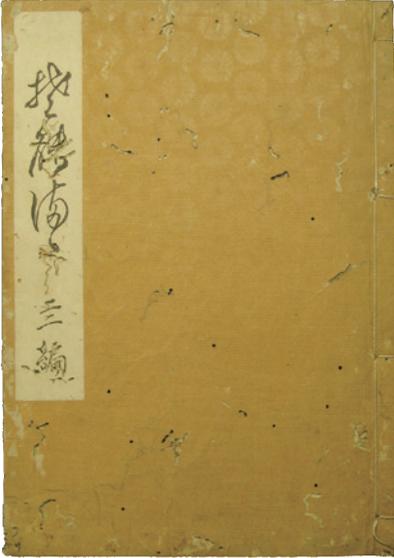
嵐牛筆「隣には」発句懐紙



其俣集 二編



そのまゝ集（初編）  
 —鈴木健治氏蔵—



そのまゝ 二二編  
—大竹裕一氏蔵—



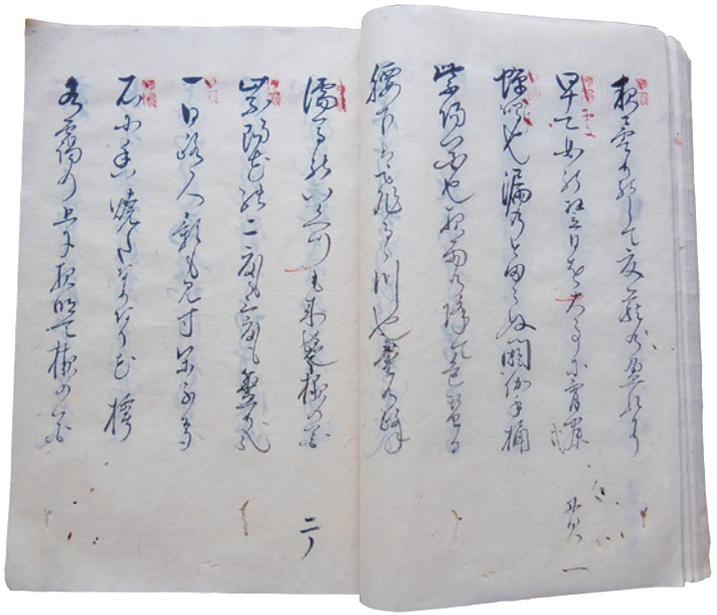
そのまゝ (三編)  
—鈴木健治氏蔵—



其儘集 六編

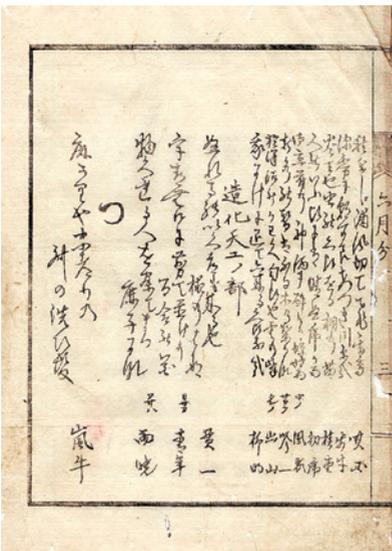


其まゝ (五編)



\* 貫一の応募句を記した部分で、五点以上の句に作者名が書き込まれる。「二ノ」は貫一の二組目の応募句であることを示す。

柿園評月並句合清書巻  
—嘉永六年六月分・鈴木健治氏蔵—



同 右  
—巻末—



柿園嵐牛評月並六月分  
—巻首・故田中明氏蔵—

●  
目  
次

凡例

発句の部

嵐牛発句集

平台編 明治十三年

3

そのまます集 初編

柿園社中編 安政三年

30

そのまます集 二編

柿園社中編 安政四年

42

そのまます集 三編

柿園社中編 安政五年

58

そのまます集 四編

柿園社中編 文久元年

75

そのまます集 五編

柿園社中編 文久四年

94

そのまます集 六編

柿園社中編 明治四年

112

柿園嵐牛評月並句合抄

嵐牛評 嘉永二年〜慶応三年

128

柿園摺物集 一〜十三

嵐牛ほか編 安政七年〜明治五年

159

連句の部

於青々処連句抄

嵐牛編 天保十四年

175

夏ごもり

完伍編 安政二年

180

およびごし

曲川編 文久元年

185

あられ灰

杜水編 文久元年

192

ともすゞめ

柿園社中編 文久二年

200

..... i

俳文の部

嵐牛文集

平台編 明治十三年

207

嵐牛文集拾遺抄

嵐牛著

227

日記の部

柿園日記抄

嵐牛著 元治二年、慶応三・四年

255

書簡の部

嵐牛書簡集

嵐牛ほか著

341

追善の部

柿園嵐牛悼控

松夫編 明治九年

367

山月集

柿園社中編 明治十一年

378

柿供養

松里ほか催 明治二十二年

389

付録

柿園門人録

..... 396

俳諧どめ連句一覽

..... 415

柿園評月並地名別作者一覽

..... 426

嵐牛略年譜

..... 428

あとがき

伊藤鋼一郎 ..... 429

(1) (3) (14) (33)

## 凡例

### 【構成について】

一、柿園嵐牛に關係する書冊・資料を「発句」「連句」「俳文」「日記」「書簡」「追善」の五部に分類し、ほぼ時代順に翻刻・収録した。

一、巻末に「柿園門人録」「俳諧どめ連句一覽」「柿園評月並地名別作者一覽」「嵐牛略年譜」を付録、参考とした。

一、作品収録に際しては、【書誌】【解題】【翻刻】の順とした。

### 【翻刻について】

一、活字に翻刻するに際し、旧字体・異体の漢字は原則として通行の字体に改め、変体仮名および変体仮名としての片仮名は通行の平仮名に改めた。ただし、俳号などは原表記を尊重した。

一、踊り字は、平仮名は「ゝ」「ゞ」、二字は「く」「ぐ」、片仮名は「ゝ」「ゞ」、漢字は「々」、二字は「々々」に統一した。

一、虫損・破損などで難読の部分は「    」・「    」で示し、推読の部分は「    」入りで示した。

一、丁移り、改行、字配りは無視し、所定の書式に統一して追い込んだ。

一、読みやすいよう、句読点を施し、書名は『』で括り、引用語句も「    」で括り、和歌・発句は、引用の句頭へを付した。難読の漢字にはルビを振った。

一、漢詩文には、原則として返り点・送り仮名を施した。

### 「校異・注記について」

一、諸本と校合して異同のある作品については、【解題】で校合本を明記し、異同を傍記した。  
一、原文の誤記・誤刻、平仮名表記で難解と判断される部分には、正しいと判断される漢字を（ ）入りで傍記した。

一、その他難解と判断される語句には、注番号を（ ）入りで付し、翻刻の末尾に一括して簡略な説明文を掲げた。

一、日記・書簡に登場する人物・地名には、読解の補助として住所や所属する市・地名・関係などを（ ）入りで記した。

### 「執筆分担・底本について」

一、故田中明・倉島利仁両名が『俳諧静岡』（103～109、111～115号）に連載した「嵐牛蔵美術館（嵐牛俳諧資料館）蔵俳書目録稿 版本の部」及び「同上写本の部」（草稿）に依拠しつつ本資料集の編纂作業を進めた。資料の撮影・複写は、他の所有者のものも含めて、主に倉島利仁が担当し、伊藤鋼一郎と加藤定彦がそれを補った。資料の解読・校訂・注の執筆入力は主に加藤が担当し、倉島がそれを助けた。  
一、底本は嵐牛俳諧資料館（嵐牛蔵美術館を改称）蔵本を原則として使用したが、校合本もしくは底本として他の図書館・文庫・機関・所有者のものも使用し、その場合には各作品の【書誌】の欄にその旨を明記した。所蔵者各位には改めて深甚の謝意を表します。

# 発句の部

## 嵐牛発句集

【書誌】「題簽」「嵐牛発句集」。「内題」「嵐牛句集」。「書型・冊数」半紙本一冊。全五十丁。「編者」平台。「序」「庚辰(明治十三)年三月 弘庵春湖」、「明治十三年三月 平台誌」。「跋・刊記」なし。平台筆の稿本では平台の序が「跋」とされ、奥の日付はない。

なお、内山真龍資料館蔵本には送り状が挟み込まれている。「辰三月」付で、発信者名は「柿園社徒」。洋々・平台・湛水・知碩・十湖の発句各二章を添え、文音所として小築庵春湖・伊藤清一郎両名の住所・氏名を摺る。

【解題】十湖らが朱で○や△の印を付した嵐牛自選自筆の『柿園句集』(半紙本四冊)、平台(?)編『句集草稿初編』『句集草稿二編』(半紙本各四冊)を踏まえ、平台が遺句を四季別四巻に精選したもので、巻末の十六丁に「嵐牛文集」を付す。校合が不十分のところがあり、自筆稿本類と照合し、訂正・注記した。平台筆の稿本(発句

の部のみ、半紙本一冊)も残る。

なお、掛川の土族佐山房永により、発句を増補し、前書や「嵐牛文集」を省いた『嵐牛先生発句集』(明治二十五年刊、金花堂蔵板、中本一冊)も刊行されている。

### 【翻刻】

凡<sup>およそ</sup>俳諧に従事する者を見るに品々有<sup>これあり</sup>之<sup>(注1)</sup>。我翁、是を三等に分ちたまへり。誠に古今に度<sup>わた</sup>りて褒貶<sup>ほうへん</sup>を定むるの確言ながら、其本は従事の精神より持来<sup>もってきた</sup>るもの也。柿園老人、道に心を尽して五十年一日の如しとす。老人の遺稿・発句・文章のたぐひ家に伝へたるを彼是摘とりて上木の事あり。斯て風致<sup>かき</sup>を一掬<sup>いっき</sup>するに、奇に驚くもの、悲しきもの、喜笑<sup>きしょう</sup>すべきものあり。物に応じて自在也。従事の功なくして豈<sup>あた</sup>よく此境に至らん。時に刻<sup>こく</sup>なりぬと告ぐ。此一くだりを識<sup>しる</sup>して洋々ぬしにおくる。

庚辰年三月

弘庵春湖

嵐牛居士、姓は伊藤、諱<sup>いみな</sup>は豊蔭<sup>とよかげ</sup>、通称清右衛門、柿園<sup>かきのの</sup>

と号し、又白童子と呼ぶ。累世、我遠江国佐野郡塩井川原の村の一農也。(注2)若きより業を励み、俳諧を好めり。壮に及びて青々処草池の門に入る。晩年、家を長子洋々に譲りて、邸内の柿樹の間に別室を造営して居す。性、温和にしてよく人を容る故に、同好の来訪するもの続々として絶ず。其盛なりしこともおもふべし。実に此国に正風の道を起せし祖といはんも誣言にあらざる也。さるを、浮生限りあり。明治九年五月廿八日、病て没す。行年七拾有九なり。於是諸弟子と議り、遺稿そこばくの句を得て桜木にものし、霊前に備へ、かつ吟花嘯月の情をしたふ社友に頒ちて、永く柿の実のまことを拾ふかたみ草とはせんとす。見ん人よくこれをおもひてよ。

明治十三年三月

平台誌

嵐牛句集卷之一

春之部

けふの初日まことに今日の初日哉  
かゞやきをおうて出かゝるはつ日かな

草の戸も火打ならして明の春  
織て着てつくりて喰うて御代の春  
行灯をけすひと吹や去年今年  
継子とは継子もしらず(注3)そはじめ  
田作やなまぐさめかぬからびやう  
尾をすそのころでひくか嫁が君(注4)  
ひと日づゝ立やたしかに三ヶ日

いかで似合しきと心にかゝりたるころ、平台  
が妻むかへたるを訪ひて

笑ふ家は門も入よし松かざり

(注5)ほつくとあらず相手も持ねば、嵐雪翁のつ  
れぐにはいとまさりて

喰つみも鼠まかせの庵かな

大根のきざみ臍や蔵びらき

客つれてうかれ女のつむ若菜かな

百とせの望あらば

夜あらしをとものに侘うぞ子の日松  
朝川や梅にむかうて歩行わたり

村中へ咲うつりけりうめの花

大家おほいえのあひの小家や梅のはな

来るほどの日がめでたくて梅の花

広き野の朝日に梅のひと樹き哉

ひと月の須磨の仮屋にうめの花

梅が香にかどのとれたる月夜かな

夢中

薄月や梅ちるころの嵯峨もどり

(注6) とうらふみのむねとらう  
鳥海宗任

髭づらの口先にくしうめのはな

福者のたのしむ所貧者はおよばず、貧者のた

のしむ所は福者はしらず。

梅のはなぬすませておく夜は月夜

水けぶるうへに夜明の柳かな (口絵図版参照)

隣から雫をにくむやなぎかな

遅かれとおもふ灯見ゆる柳かな

鶯や声をまろめる口のうち

うぐひすや近う鳴なても折目高

夕くるゝ頃かならず来鳴けば、此簞たかぢらねぐらに搦する

ならんとおもふを、人もさならんといふにた

のしみて

黄鳥うぐひすと枕はちかし草の庵

(注7) 「訪ウラ「隠者」不レ遇ハ」

木戸おせば雉はしり出る軒端かな

子供等の耳にも入りぬ御忌(注8)ぎよきの鐘

鶏(注9)はこの挨拶はざわて来るよかむかな

包丁に餅うち砕く余寒かな

鶯のうちへ舞こむよかんかな

がぶくくと夕波よする霞かな

ぼくくと田槌たづちの音や遠がすみ

東風こちふくや遠くながれて鳴なかもめ

正月のものくふ庵の二月かな

過た日のことばかりする二月哉

わすられぬ時也日也西行忌

苗代やどうならべても色紙形なり

(注10) きがのせき  
気賀関

とほれとは嬉しすみれをふむ山路  
火を焚たきのふのあとも春の草

寿老

いざめせと膝をる鹿やはるの草

(注11) 椽先の日のあたゝかさに、ひとり虱を捫ること

ろおもしろき折から、飛かふ蝶のかげのひら

つくに

てふくよ人にしらすな此日和

(注12) 「騎馬似乗船」と老杜があざけりし人の画に

蝶よりもやすき眠りや鞍のうへ

うれしさをかくさぬ蝶の羽振かな

くらがりに飛腹しろき蛙かな

雨夜から口ばやになる蛙かな

一はいのちからを水に飛かはづ

ふりかへる細みもあるや猫の恋

うかれ猫婢の箒くらひけり

(注13) 一來法師

橋桁やあそびごゝろに飛つばめ

ひとり旅にて、心のまゝならぬ折から  
ゆふ乙鳥我は立べき軒もなし

(注14) 明禪法師曰、「唯よく念仏すべし、石に水をか

くるやうなれども、申せば益ある也」といふ

を題にて発句せよとあるに

似我蜂は巢も子もおのがものでなし

(注15) 蓑毛の滝

佐保姫の織たあまりか滝の糸

何日ともおもはで見るや春の月

清水の連歌すみけり春の月

野をもどる公家の馬上やはるの月

鶴啼や江は東雲のおぼる月

日和さへよければ吹やはるの風

てらくと日南をゆくや春の水

(注16) 底ぐさも五形すみれやはるの水

笹ぐゞり来るやさらく春のみづ

御留場の鶴ふえにけり春の雨

合宿の鳥屋は起ぬ春のあめ

紙たこ鷹こくれて繋ぎ柱にひゞきけり

丸々とうちとけ兒かほや紙なひゝな

〔身(注17)に替るもの無りけり〕とは、むかしも今も

雛すてごひとつそふや棄子のまくらもと

平家、西海没落のかたに

綾にしき入日の漁やながし雛

初花や我庵にとはしらで居し

はつ花や出ればおもはぬ事はかり

夜はよくも明ずほちくく花の露

来るほどの人がいふなり花ざかり

焚つけに(注18)しら箸をるや花のかげ

ちる花やされば昨日のからす啼な

水しまぬ花ながれ来る日和かな

おのれ老ぬるとしらざるにはあらねど、かく

までとはおもひきや、嗚呼ああ。

花に來れば達者と人にほめらるゝ

薄うすぐれ、宇都の山を越こるに、(注19)ゆふるる雲の宿

やからまし、と堯たう尋法師の吟に感じて

裾すそにおかばあたゝかさうに花の雲

三聖人(注20)の図をひとひらの紙に書て、三人に贊

せよと望まるゝに、我は釈迦を

うちとけて咄はなせと花に胡座あぐらかな

今年はいかでとこゝろがまへしたる岩水精舎(注21)

の花のちりがたにはせつけて、わがおこたりの

いさゝかおもてぶせなれど、(注22)花は盛、月は

隈なきをのみ見るものかは」とある兼好法師

のひとことを、けふの己が荷担のこゝちして

一昨日(注23)の盛も見えつ花のゆき

建徳寺(注24)より帰るさに

かへり見もとゞかぬ頃や花に鐘

静岡二丁花見(注25)

ちる花に扇さし出す二階かな

賤しづはた機山の落花を思ふ

嶺はもうちるか花まふ町の空

福祿寿の花を見て立る画に

つむりには袖もとゞかず花のつゆ

(注26) 源義家朝臣

ちる花にゆるめぬ関の手綱かな

(注27) 備後三郎

花よりも芳し幹のひと言は

(注28) 忠度

下臥をこゝろに花の首途かな

妄語戒

雲を花歌には罪もなきものか

(注29) 柳の枝に咲せてし哉、と洒落せられしを

梅が香はともあれかくも糸ざくら

散出して盛さだまる桜かな

折て来て桶もたらひもつゝじかな

(注30) 俊寛僧都

声かなしかへるにもれし雁一羽

(注31) 弓削道鏡

鷹化して堂もる鳩と成にけり

(注32) 木曾義仲姜巴

網鷹の巢ごもる迄に馴にけり

(注33) 母の老病、今はたのみなくみえければ

立ちかぬる我に声かせよぶこ鳥

けしき見てをれば撞也春のかね

行春にひと寂もつやあらし山

嵐牛句集卷之二

夏之部

卯月野や老をはりあふきじ雲雀

よき水の遣ひたき日やころもがへ

病中

家中にきげんとられて更衣

小法師の横川出て来る袷かな

はしちかく嵯峨など見えて青すだれ

仮の世と説たまひながら

又しても仮に生るゝ仏かな

どちへ膝むけて待うぞ不如帰

わが声をくゞり歩行やほとゝぎす

古戦場

うら切のむかしのすちを蜀魂ほとこま

輪藏(注34)や女の声の若葉もる

柴屋寺(注35)にて、いくわか葉の懐紙を拝するに、

三百年の墨色あざやかなれば

墨色や猶ゆくすゑのいく若葉

宮守の錆錠たゞく茂りかな

水かげに藤ひとふさや木下閨こしたやみ

つれぐ

桜の実拾ふやそれもやがてあく

人生五十、一瞬の間といへども、物の変化な

どおもへば、又さもあらぬふしもおほかり。

菽まうゑや舟もかよひし泓(注36)のあと

卯の花や道々ありて折おくれ

桜見しこゝろしづまるぼたにかな

剪きりたさをけふもこらへる牡丹かな

尾張(注37)の棗地ぬし身まかりぬと聞きて後、其人の

『一法師』と題せる集のおくれて来たれるを

ひらき見て、かくても人ははかなきものは、

といとゞかなしくて

ちるけしやおもかげにたつ一法師

草の戸も浮世めく日やはつ鯉

田子浦大鯉(漁)

門並かどなみに堅魚かつをきる火や夜もすがら

今朝もまた水にあるなり夏の月

夏の夜は常よりちかき隣かな

雫ちる軒に端午の朝日哉

門立(注38)も薬ふる夜のかごとかな

つくる手の合せごゝろやかしはもち

藤原広嗣(注39)

身をうつとしらでむかひし印地いんぢかな

飛咲とびさきのひとつすぐれてかきつばた

砂川も薄いろ時やあやめ草

『狭衣』(注40)をよむ

車にもあやめほしげや夕げしき

うかれ女めのはなかむさま書かきたる画上の衣に、

あやめの摺すりがたあるを着たり。

いつはりの露にもぬるゝあやめ哉  
 麦秋むぎあきや雲よりうへの山びより

ものにさはる音してちるや竹の皮  
 常盤木の常のしづかを落葉かな

柿のはなちるや蛙にぬるゝ庭  
 月までもしたゝる山(注41)の夜明かな

とりくちを明るもをしき早苗かな  
 こぼすともみゆる田植の手もとかな

庵にもひと日はほしき田うゑ哉  
 植る田や神のをしへのまゝらしき

達磨面壁の画に

苔咲こけさきもしらでおはすや膝回り

伯夷(注42)叔斉

葉わらびをかむ齒はしろき二人哉  
 さみだれや鹿伸かのびあがる草の中

鹿の乳によごるゝ軒や五月雨

あさはかな蝶の寝ぐらやさつき雨

松崎(注43)築一見

入梅つゆめじほの濁りもよせず鯛の紅

庵いんの夜や水鶏みづけいがなけば水鶏みづけいの夜

また鳴なとひとりおもふやかんこ鳥

いつも図ずにのつた声也こゑ行々いりいり子

昼ひるの灯あかりに蝙蝠かろうもりまよふ御堂かな

初蟬はつせみのたゞ一日にふるびけり(口絵図版参照)

蟬せみのすふほども風なし古榎ふるえのき

今朝はゝや塵ほこに掃はかれて火とりむし

でゝむしや垣越うともせぬしづか

「紅顔多薄命(注44)」

月花げっかに舞まうた扇あふぎや蠅あぶたゝき

曾我兄弟

ねらひ狩得かりたりの声ぞいさましき

秋野竹明(注45)が造られたる榮寿丸といふ船を、は

じめて浮べるを祝して

帆ふに風を薫からせかよへ西ひがし

軒のきかればあるじ戻りぬ夏の雨

のしむくや蟹あまにも清きき業わざは有(注46)

うかれ女の贅

裏おもて有とは見えず絹うちは

〔万物皆有主〕  
(注47)

我ものにはせば水無月の夜明哉

麻かりや祭のいみのあらひ髪

石菖あよや扇あふいだ風のやゝたもつ

ひと樹づゝ風のなきゆく夏野哉

伐きつた手にくるりと撫なつ瓜の砂

泊は瀬せをがむ隙もをしてみて瓜づくり

ゆふがほやひとりごゝろの二人住

夕た兒ちにのぞかれにけり古女房

よしもなく立た日ちうれしき暑かな

すゞしさや筆とる事もなき独

月(注48)が瀬を過れば松が瀬も近し

里の名を聞てもすゞし此あたり

貧交(注49)

くめといふ清水もほそき隣かな

巢父(注50)

牛はくち鳴らして戻るしみづかな

許由(注51)

何聞きかうとて坎清水にあらふ耳

高天神(注52)の古趾こし一見の折から、本間・丸尾の古

墳つかを尋けるに、山の端に三百年の星霜を経な

がら、陵谷の変にもかゝはらざるは(諸本)、実に誠

忠の感ずる所あるべしと、しばらくなみだを

おさへて

春夏もかはらぬ苔のみどりかな

ひゝやりとひと風うけて御祓みえぎ哉

嵐牛句集卷之三

秋之部

立秋や膳なすびは茄子のひと夜漬

はつ秋や起てよいかと見に起る

恋

星にさへ今宵はあるをわびまくら

ひとゝせの夜よが明ある也あまの川

稲づま(注53)や月夜の闇をくゞりゆく

趙雲(注54)

稲妻や子はふところ(注55)に高軒(たかひき)

実盛(注55)

鬢髭(びんひげ)もつくりて木曾の踊かな

亡妻新盆(注56)

我老(わがおい)を人に見られて魂むかへ

楠(注57)(木)正成、天王寺にまうでゝ、太子の『未

来記』拝見のかたに

袖の露今を未来と見る世かな

秋かぜの衣をとほすゆふべかな

秋風(注58)や狩倉(かりくら)すみし山のあれ

源義朝(注59)

鼻(はな)の親にせまるや秋のかぜ

鏡(注60)にも吹入(ふきいれ)にけりあきの風

葉のゝちは枝もこぼるゝ柳かな

灯(ひ)に來れば風に成けりをぎの声

けぶり見るまでの隣やすゝき原

ざわついて秋のこたへぬ(注61)芒(すすき)かな

葉のもつれ穂(のぐわ)に伸分(のびわ)るすゝき哉

僧正遍昭(注61)

をみなへし馬は鹿相をのがれけり

熊野(注62)とも仏とも、はた祇王祇女とも見わけが

たき中昔めきたる美人の画に

秋風が吹ぞよふくぞをみなへし

おもふことうたふに似たり鳴蚯蚓(注63)

おもひつゞくれればやすくも眠らず

いつそ我(わが)ふとんへはひれきりゝす

遊君何がしが文の言葉をつみて

きりゝくす啼(な)て嬉(うれ)しき夜もあるか

仏の道いたく尊む人の、人にもほど(注64)こさばや

と心にて粹行(し)せしとて、因果(注65)経といふを送ら

れたり。いかなる事にやとみもてゆくに、先

己がうへをかへり見るにかしこきふしゝく数

行あり。折ふしあたりのむしの声聞(き)えければ

後の世はともに鳴うぞきりぐす

泣男なきおとこ

こゝろにはわらふもしらずきりぐす

橘逸勢娘(注66)

雨風に身はすてはてゝ父恋し

「南方之強興」(注67)、北方之強興(興)

蟪蛄ちゆうこの己が羽をかむいかりかな

ひぐらしの寒い夕べにしたりけり

三日たてば三日月のある葉月かな

見処ゆかりを譲て退くや二日月

木がくれてひらく明りあかや三日の月

帰り来て戸あくる庵や初月夜

くらがりもほしきほど也舟の月(口絵図版参照)

八月はじめつかた、彗星(注68)の見えるに

月の空清めんとて坎はき星

布袋ほてい

世に出れば月にも雲とさす指か

ある人月見の座に、さまざまの瓢に酒をもち

出てもてなざる。やがて其ふくべども銘を

題にて人々に句をのぞむ。おのれは鶴首とい

ふをとりにて

月待やふくべの首も空をむく

めい月の下に更ふけたる大河かな

野のすえも山の端もなしけふの月

満月やひとかさあがる湖の水

放生にあふた鳩なく月夜哉

源三位頼政(注69)

木がくれをきのふは侘わびて今日の月

去年の葉月十六日の月を見をさめに、夜台に

枕をあらし給ふ海老々人の追悼のむしろ(注70)に通

夜して、かゝなべみれば三十余年の旧識、更

に夢うつゝをわかたず

おもかげや月に無言のうしろつき

小夜中山

いざよひの闇わけのぼる小笹せざさかな

大井川にて

残月や水へ吹こむ砂の音

清水より三保へ渡る舟中

不二すむや月も亥中を過るかぜ

昨日は外道、今日は迦葉

きのふまでとらへたものを放生会

佐久良の池の宮の御祭にまうで、

贅櫃のうづしばらくや秋の水

我のみと人もおもふか秋のくれ

貧女

かたみ子をふところにうつ礎かな

「断続寒礎、断続風」

山姥もうつか月夜の遠きぬた

よき空や便舟もらふ稲のうへ

閑やすき日かげをもちて秋海棠

日の照ながら雨の降けるを、我里のことはざ

に「狐のよめりす也」といひならはせり。大

井川の堤下る日、その雨すでに降出しけるに

曼珠沙花狐の聲のかざし哉

百舌の尾や遠眼たのしむ捻りぶり

鳴すてし口奇麗なるうづらかな

鳴の行むかふの岸もゆふべかな

賛せよとある画は、ひとり弱法師の杖笠もち

て鳴のゆくへを見おくりたてり。その法師の

ころになりて

宿なしの鳴にもおとる夕べかな

初雁やたもと軽しとおもふ朝

市原晴霞女身まかりしと、観山居の訃音にお

どろきて

かなしさは雁にもならぬ使かな

ひく先に夕雲かゝる鳴子哉

うそ寒や座敷子僧の消たあと

朝寒や蝶の羽浮し遣ひ水

はじめて妻の塚にまうで、

朝寒やおもひ回せば苔の下

おもふことなくて眼覚て夜寒かな

ほ句ものする時は必見せもし、又見もして、

褒貶互にわたくしなかりし二十年來の文音も  
いたづらごとく成し、(注83) 觀山居のなきあとに一  
句をおくるとて

(注84) 一棒にならぬ筆とる夜寒かな

米くさき酒強られて菊のはな

(注85) 無咎をあるが塵なりきくの庭

(注86) 楠(木)氏

菊の香や末もにこらぬみなと川

三河の国に有ける頃、(注87) 何某亭に十日余り雨籠

して、朽葉にそゞぐ軒の雫にうちわびつゝ、

ふとおもひ出る句は、「梧桐深夜雨、(注88) 尊鱸異郷

心」とは、彼朝翰が呉中をしのばれし雅情を

おもひはかりての作意なるべし。時にとりて

感ずるのあまり、いく度も吟じ返すに、いさゝ

か客中のこゝろ動きて

ほど過ん雨に庵の菊なます

(注89) 焼味噌きらふ隣は富貴に、さてそれにたがひ

て草庵の朝夕は紫蘇、生姜とうつり来り。此

頃は又柚の木末をあふぎ見て、(注90) かの呂洞賓が

「雖(注91)貧樂有(注92)余」といはれたる貧のたのしみは

我眼には黄金(注93)也けり柚の黄み

末(注94)がれやまだ見えぬ日の当る山

焚あとに早火の気なき紅葉哉

秋葉山中

日を下に柴橋わたるもみぢかな

鹿聞んとてある山寺にやどりける夜、更(注95)たけ

てひそくと門過る人有。かゝる山中、何者

なればにやと囁くを、あるじの僧聞居て、「是

なんかの鹿を得まくほりするさつ(注96)をの友也け

り」と語るを聞て、あはれさもいとゞ身にし

みて

(注97) 今にしれぬ命としらで鳴鹿か

そのものともおもはぬまで、ちかき声のあら

くしければ

鳴しかの咽(注98)に吹こむ嵐かな

露しぐれ夜はかたよるこゝろかな

(注94) 我娘のなく成し時

わすれよと人はいふ也露しぐれ  
田畑はもたねどうれし秋日和  
しら雲の秋といふべき天気かな

嵐牛句集卷之四

冬之部

茶畑にすそひく富士や神無月  
十月や庭はもみちの曠日和  
人舟の大河くだる小春かな

(注95) 「鈍者寿」

みのむしや小春の花にあふ梢  
朝やけやしぐれ侮るもずの声  
夕しぐれ牧のあげ貝聞えけり

「靱むしろ早う引入よ、藁つみてよ」と、  
のゝしる声の聞えけるに

隣には雨也庵のはつしぐれ（口絵図版参照）

(注97) 吉原の月栖が木綿島の別荘にいたり、不二の

笠雲を見て

笠雲のしづくしぐるや伊豆相模  
(注98) 「餽内已無三合粟、裏中何有半文錢」  
盗人に異見して遣る霜夜かな  
(注99) 「高砂」、尉と姥のかた

霜に焚むつみもあらん松葉搔

(注100) 源渡が妻袈裟

声のむや今はの霜のきりくす

辻君

我かげを終は添寝や霜の月

こがらし 夙やけふもから手の獵もどり

よし野にははなしも聞ずかへり咲

(注101) 常盤女

あぢきなや花と見らるゝかへり咲

(注102) 椎が脇の山下に舟待するほど、霜葉眼もあや

に散みだれて、水面錦をはりわたしたるやう

也。猶、待人もすくなからぬ中より、渡らば

錦なかや絶なん、とうち上たる、中々に蜂腰

よみ出しにはまさりて哀におぼえて

棹なざけとりの情なさけしらはやちるもみぢ

郊外

まだ明ぬ空に不二見る寒さむかな

(注105)月あけ 一日あまり、そこ爰こゝと遊びさまよひ庵にかへ

るに、独身(注106)不自由なる調度どもを灯の明りに

かなぐりまはりて

(注107) 留主の戸にだまりて居たる寒かな

若い手に肩たゝかせて冬籠(口絵図版参照)

明日が来ればあすの事せん冬ごもり

(注108) 達磨忌や眠て見れば世は丸き

初雪をうそにしたがる朝寝かな

入船やいづくの澳おきの雪ゆきの篷とま

をる指に我をも入るゝ雪見かな

ふくろふの愚痴なぐを鳴也夜の雪

(注109) 定家卿、佐野のわたりにて雪にあひたまへる

かた

(注110) 口とりのいらち兒也くるゝゆき

(注11) 「大疑下有二大悟」

夜の明て見ればすすきせぞ雪女

(注12) 北条時頼入道

雪の柴火しばびふきくゝむかし語りかな

(注13) 新田義貞

踏かへす道なし雪の金が崎

(注14) 勾当内侍

雪にまであふつれなさやをみなへし

恋

払はずに妹が手持まや袖の雪

(注15) 「瓦と成て全まからんよりは、玉と成て碎まけんに

はしかず」とかや。聞さへいさぎよけれど、

愚なる心には思ひもかけず。

雪霜や無事を手からの古瓦

岩角に驚のねぢむく霰かな

豆腐きる薄刃にひゞく氷かな

刈株からすを鴉からすひきぬく氷かな

ありあけ 有明て日に照れけりふゆの月

入る山もあたりにはなし冬の月  
みな水にむかふ小家や枯すゝき  
葉ゆるみにして水仙の咲にけり  
寒菊や凍のもどりのひとしづく

目白等も朝日が好か冬のうめ

〔注116〕ク「一鳥過二寒水」

隼や暮かゝる江を一文宇

木兎や昼は耳さへうときふり

二つゐる日はしづか也池のをし

火を焚て妻はかへりぬ網代小家

〔注117〕ク「恵心寺に奉公はせで、とある古人の吟に返

しのこゝろを、あじろ守にかはりて

黄檗にしらぬ閑ありあじろ小家

凍てふや哀れ凍ぬが来てさそふ

ふぐ汁や刀投出す壁の際

人を見て子の膝つゝむゐるりかな

寝おかれて寒さを夢の巨燧哉

恋

こたつにも風の入るまで待夜かな

着る紙衣ほめられ好に成にけり

宮つかへ仏にかへて綿ぼうし

青空に鶴舞入ぬ寒の入

寒声や荻にさはれば荻のこゑ

昼あへば会釈もするや鉢たゝき

歳暮

福ははやうちのやう也豆の音

我垣間煤すむかとして覗きけり

約束の厚綿にして衣くばり

掛とりに我家をしへて歛遣ひ

右のもの左へおくをとし用意

待ものは遅きならひを年の春

〔注120〕ク「しろがねもこがねも玉もなにせんに、とは

山上憶良の詠也。実にく子にまさるたから

の何かあるべき

年の夜を寝倦て孫とはなし哉

雑

(注11)  
髑髏

月雪の今を誠のすがたかな

雪にさへ包みかねけりふじの山

国へだつこゝろも付ず富士の山

(注12)  
鶴からりころり空よし朝目よし

(注1) 我翁：蝶夢注、可笛ら編『芭蕉翁三等之文』（寛政十

年・一七〇）で知られる芭蕉の教説。門人曲翠宛書簡の中

で、俳諧作者を姿勢の上から三等級に分けている。

(注2) 一農：農と鍛冶の兼業が正しい。卓池・蓬宇の人名

録も鍛冶屋と付記する。

(注3) きそはじめ：着衣始。正月三ヶ日のうち吉日を選ん

で、新しい着物を着始めること。またその儀式。

(注4) 嫁が君：正月三ヶ日の間、単をいう忌み言葉。

(注5) ほつくと：『玄峰集（嵐雪句集）』に「題しらず／

ほつくと喰摘あらず夫婦哉。「喰摘」は正月に年賀客  
に儀礼的に出す取り肴で、三方などに米、餅、昆布、熨

斗鮑、勝栗などの縁起物を飾ったもの。

(注6) 鳥海宗任：安倍宗任とも。『平家物語剣卷』によれ

ば、前九年の役で源頼義と戦い捕らえられて上洛したと

き、梅を見せて「これは如何に」と尋ねた貴族たちに対

し、「我が国の梅の花とは見たれども大宮人はいかが言ふ

らん」と見事に答えた。

(注7) 訪隠者不遇：『三体詩』所収、寶翠詩の題。芭蕉が

愛用した関防印「不耐秋」の典故で、俳人には馴染みが

深い。

(注8) 御忌の鐘：「御忌」は法然上人の年忌で、知恩院で

は陰暦一月十八日から二十五日まで鐘を鳴らした。

(注9) 撥：はご。また「はが」とも。竹や木の枝に繻をつ

け、罎をおいて小鳥を捕らえる仕掛け。

(注10) 気賀関：江戸時代、現在の浜松市北区細江町気賀に

設置されていた関所。箱根、新居と並ぶ東海道三関所の

一つ。本坂通り（姫街道）の往來をチェックした。

(注11) 椽先：「椽」の音は「テン」で、訓は「たるき」だ

が、近世には「縁（えん）」として通用。

(注12) 騎馬似乗船：杜甫は、李白と同じく酒浸りの詩人賀

知章を「飲中八仙歌」冒頭に、「知章騎馬似乗船」、眼

花落<sup>レ</sup>井水底眠<sup>（</sup>知章馬に騎るは船に乗るに似て、眼は花  
み井に落ちて水底に眠る<sup>）</sup>」と擲<sup>（</sup>掬<sup>）</sup>して詠<sup>（</sup>んでいる。

(注13) 一来法師：源三位頼政が平家と宇治橋で戦った際、  
三井寺の僧兵筒井浄妙（浄妙坊）とともに奮戦、細い橋  
桁の上で浄妙房の頭を飛び越えて敵に飛び込み討ち死に  
した。

(注14) 明禪法師：鎌倉時代の僧。「一言芳談抄」上巻に「明  
禪法印云、たゞよく念仏すべし。石に水をかくるやうな  
れども、申は益あるなり」とある。

(注15) 蓑毛の滝：瀧の本連水の自宅裏にある滝。「柿園日記  
抄」慶応四年一月二十二日の記事参照。

(注16) 五形：自筆半切に「もりの里より袋井へ行処々、野  
水の堪たるをわたりて／底草もげんげすみれやはるのく  
さ 柿園老人」とある。「五形」（通俗志）三月。

(注17) 身に替るもの無りけり：「仏説無量寿経」に「身自  
当<sup>レ</sup>之、無<sup>レ</sup>有<sup>レ</sup>二代者（身自ら之を当<sup>（</sup>げ、代わる者有るこ  
と無し<sup>）</sup>」。苦しみは自分で堪える外はない、の意。

(注18) しら簪：使い捨ての白木の簪。

(注19) ゆふゐる雲の：「里まではまだはるかなるうつつの山  
夕ゐる雲に宿やとほまし 堯尋法師」（新後拾遺和歌集）

卷十。

(注20) 三聖人：老子、莊子、釈迦の三人。

(注21) 岩水精舎：浜松市浜北区根堅にある高野山真言宗別  
格本山岩水寺。山号は龍宮山。住職月查、寺僧半醉は風  
牛の門人（「柿園門人録」）。

(注22) おもてぶせ：「面伏せ」で、面目を失うこと。

(注23) 花は盛：「徒然草」一三七段に「花は盛りに、月は  
隈なきをのみ見るものかは」。

(注24) 建穂寺：静岡市葵区建穂にあった真言宗の寺院。安  
倍七観音の一として徳川幕府の庇護を受けた大寺だった  
が、明治三年の火災で焼失、廢寺となった。

(注25) 静岡二丁町：静岡市葵区駒形通五丁目付近にあった  
遊郭。なお、駿府（府中）が静岡と改められたのは明治  
二年。

(注26) 源義家：源頼義の長男。前九年の役で父とともに活  
躍、のち陸奥守兼鎮守府將軍となり、東国に源氏の基盤  
をきざいた。「吹く風をなこそその関と思へども道もせに散  
る山桜かな 源義家朝臣」（千載和歌集）卷二）。

(注27) 備後三郎：児島高德。南北朝時代の武将。隱岐に流  
される後醍醐天皇の救出に失敗、院庄の行在所の桜の

木に「天莫空勾踐、時非無范蠡（天勾踐を空しうするこ  
と莫れ、時に范蠡の無きにしも非ず）」と記した（『太平  
記』巻四）。

（注28）忠度：平清盛の末弟。薩摩守。和歌をよくしたが、  
勅勘の身なので「よみ人しらず」で『千載和歌集』に一  
首のみ入集。一ノ谷の合戦で岡辺六野太に討たれたとき、  
籠に「行かれて木の下かげをやどとせば花やこよひのあ  
るじならまし」と書いた文が結ばれていた（『平家物語』  
巻九「忠度最期」）。

（注29）柳の枝に：「梅が香を桜の花にはほせて柳が枝に  
咲かせてしかな 中原致時朝臣」（『後拾遺和歌集』巻一）。  
（注30）俊寛僧都：平氏討伐の謀議を企てたが俊寛、丹波少  
将成経、平判官康頼とともに鬼界ヶ島に流された。翌年  
の大赦にも俊寛だけは許されず、島に残された（『平家物  
語』巻三「足摺」、謡曲「俊寛」）。

（注31）弓削道鏡：奈良時代の僧。孝謙上皇に寵愛され、上  
皇が称徳天皇として再度即位すると太政大臣禪師、つい  
で法王となり、権力を振るった。放鷹司を廢して放生司  
を置き、狩獵を禁じる。皇位につこうとして失脚、下野  
国薬師寺別当に左遷された。なお、句は七十二候の一つ

「鷹化して鳩となる」（出典は『呂氏春秋』）、すなわち仲  
春の二月十一日～十五日の五日間をいう季語による。

（注32）木曾義仲妻巴：源義仲の愛妾で女武者。武勇にすぐ  
れ、義仲に従ってたびたび戦功をたてた。

（注33）母の老病：嵐牛生母は文政六年（一八三三）三月二十五  
日の没。『自筆柿園句集』はこの前書で「ちからなや抱  
かへても散さくら」を収め、続いて「臨終に」の前書  
で「折は花の御旅ながらも別かな」と当該句「立かぬる  
我に声かせ呼子どり」の二句を収める。平台らの判断で  
底本に採録された後者は芭蕉の「うき我をさびしがらせ  
よかんこどり」に着想したと判断され、「呼子鳥」「閑古  
鳥」はともに古今伝授の三鳥で郭公の異名だが、呼子鳥  
は三月、閑古鳥は四月で季の扱いが異なる。

（注34）輪藏：回転する八角形の書架に一切経を収納した経  
藏。回転させれば読経に相当する功德があるという。

（注35）柴屋寺：駿河国丸子の吐月峰柴屋寺。連歌師宗長の  
草庵柴屋軒を基とする臨濟宗妙心寺派の寺院。懐紙は、  
宗長が柴屋軒に嵯峨の竹を移植したときの発句「幾若葉  
はやしはじめの園の竹」を記したものだ。

（注36）泓：『草稿初編』に「泓」は「測」とある。近世の

字書『四声字林集韻』（享和三年・一八〇三）に音は「ワウ」、訓は「フカシ、フチ」とある。

(注37) 棗地：尾張国愛知郡下一色（名古屋市中川区下之一色町）の服部林左衛門。通称綿屋。六句町（西区幅下一丁目）で、綿商を営む。芝石門。足助の塞馬が「探花紀行」（板倉塞馬全集）所収）のとき、元治二年（慶応元年・一八六五）弥生十日、名古屋の梅裡、羽洲、土前とつづけて両吟中の棗地を旅亭に訪ね、「李曠更棗地」と改号を明記して近詠二句を筆録している。棗地は、三名と両吟した歌仙三巻を『一法師』と命名・出版、吉田（豊橋）の蓬宇のところには四月十二日に届く（『此夕集三十四』元治二年）。しかし、その三日後の十五日に棗地は急逝する（『夏花集』）。寄贈俳書メモ帳の元治二年五月の二冊目に「一法師」〃（尾州）棗地」と記入されているので、嵐牛宅には訃報の後に届いたらしい。

(注38) 葉ふる：陰曆五月五日を「葉日」といい、この日の午の時に雨が降ることをいう。「かごと」は言い訳。

(注39) 藤原広嗣：奈良時代の公卿。天平十二年（七四〇）大宰少弐となったが橘諸兄と対立、その顧問である玄助・吉備真備を政界から除こうと反乱を起こしたが、大野東

人の追討軍に敗れ、肥前国松浦郡で捕えられ処刑された（『続日本紀』）。

(注40) 狭衣：『狭衣物語』巻一に、五月四日の夕暮、狭衣大将が内裏からの帰途、一筋ずつ菖蒲を葺く小庵を牛車の中から眺める場面がある。

(注41) したゝる山：夏山は「蒼翠にして滴るが如し」（『臥游録』）と形容され、近世後期、滴るような若葉の茂る夏山をいう季語となった（『俳諧小づち』ほか）。

(注42) 伯夷叔齊：中国殷代の高潔な兄弟。周の武王が殷の紂王を討とうとするのを諫め、聞き入れられず、首陽山に隠れ餓死した。

(注43) 松崎：西伊豆加茂郡松崎町で、古来、漁船の集散する松崎港がある。

(注44) 紅顔多薄命：慣用句「佳人（美人）薄命」による。「紅顔」は美しい顔。

(注45) 秋野竹明：中野の門人（『柿園門人録』参照）。

(注46) のしむく：熨斗鮑は、夏季、鮑の皮を剥くように薄く切って干して作る。

(注47) 万物皆有主：『孟子』（尽心・上）の「万物皆備於我」による。

(注48) 月が瀬：伊豆国の修善寺から下田に至る天城街道の途中に松ヶ瀬、月ヶ瀬がある。

(注49) 貧交：杜甫の詩「貧交行」が著名。とくに蕉風初期、その影響を受けた其角編『虚栗』（天和三年・一六八三）の自跋によって俳諧作者に浸透した。

(注50) 巢父：中国の伝説上の高士。堯から天下を譲ると言われた許由が拒絶して潁水で耳を洗うのを見て、そのような汚れた水は牛に飲ませることができなと言いつつ、引いていた牛を連れて帰ったという。

(注51) 許由：中国の伝説上の高士で、箕山に隠棲した。

(注52) 高天神：掛川市上土方嶺向にある高天神城址。天正九年（一五八一）まで武田と徳川の攻防が繰り返された。「本間・丸尾」は徳川方武將の兄弟。天正二年（一五七四）、二の丸を守っていた本間八郎三郎氏清が櫓の上で指揮していたところを武田軍に狙撃され、後を引き継いだ弟の丸尾修理亮義清も銃弾に倒れ、まもなく開城した。二の丸奥、堂の尾曲輪の近くに兄弟の墓碑がある。

(注53) 月夜の闇：自筆句集や短冊に「月夜の松」とあるのが正しい。

(注54) 趙雲：中国、三国志の武将。劉備に仕え、関羽・張

飛に匹敵する待遇を受けた。荊州で曹操に敗れた際、単身で敵軍のただ中に駆けこみ、逃げ遅れた阿斗（のちの劉禪、劉備の跡継ぎ）とその生母甘夫人を救出、白馬に乗った趙雲は阿斗を懐に抱いて戦った。

(注55) 実盛：平安末期の武將。初め源為義・義朝に、のち平宗盛に仕える。寿永二年（二二八三）平維盛が北陸に源義仲を攻めたときこれに従い、加賀国篠原の合戦で大将にふさわしい赤地の錦の直垂を着用し、老齡をかくすため白髪を黒く染めて奮戦、討死した（謡曲「実盛」）。

(注56) 亡妻新益：後妻やすは、明治七年九月二十一日没。戒名、得室妙牛大姉。この時、嵐牛七十六歳。水音の「終焉之記」（「柿園嵐牛悼控」所収）には「同庵植田氏」とあり、旧姓が判明する。

(注57) 楠木正成：南北朝期の武將、楠木正成。後醍醐天皇の鎌倉幕府討伐計画に参加。建武の新政府で中央政界で活躍するとともに河内、和泉の守護となった。のち建武政権に反した足利尊氏と湊川で戦い敗北、弟正季とともに自刃した。聖徳太子の予言書『未来記』を見た話は、『太平記』卷六「正成天王寺、未来記披見事」にある。

(注58) 狩倉：狩獵。特に鹿狩のこと。

(注59) 源義朝：平安末期の武将（二三〇～二六〇）。保元の乱

では父為義と反対に後白河天皇側について奮戦、夜襲を献策して勝ったが、信西（藤原通憲）の命で崇徳上皇方の父と弟たちを処刑した。のち、藤原信頼と組んで平治の乱を起こし敗走中、尾張野間で長田忠致に殺された。

(注60) 鏡裏本来無避処：白居易「鏡換」孟（鏡を盃に換ふ）に「鏡裏老来無避処、樽前愁来有消時」（鏡裏には老来避くる処無く、樽前には愁至りて消ゆる時有り）（『白氏文集』巻五十六）とある。鏡に映る老醜を避けられないが、酒で愁いが消える時はある、との意。底本の「本来」は「老来」の誤刻。

(注61) 僧正遍昭：平安初期の歌人。六歌仙の一人で、俗名良岑宗貞。句は、代表歌「名にめでて折れるばかりぞ女郎花我落ちにきと人に語るな」（『古今和歌集』仮名序・巻四）を踏まえる。

(注62) 熊野とも仏とも：熊野は遠江国池田宿（磐田市池田）出身で、平宗盛の愛妾（謡曲「熊野」）。仏と祇王・祇女とともに白拍子で、祇王と仏は平清盛の寵愛を受け、その後出家した（『平家物語』巻一「祇王」）。

(注63) 鳴蚯蚓：秋の夜、地中でケラの鳴く声をミミズが鳴

くとし、秋の季語とした（『誹諧通俗志』享保二年）。

(注64) ほどこさばやと：「ほどこさばやの」（『自筆柿園句集』）がよい。誤刻か。

(注65) 因果経：『過去現在因果経』。釈迦の前世における善行から現世で悟りを開くまでの伝記を釈迦自らが説いた形で記す経典。

(注66) 橘逸勢娘：橘逸勢は平安初期の能書家で三筆の一人。承和の変に連座し伊豆配流の途中、遠江板築駅（浜松市北区三ヶ日町本坂）で承和九年（八四二）に没した。逸勢娘は伊豆に流される父に従い、父没後はその埋葬地に庵を結んで尼となり、妙冲尼と称した。嘉祥三年（八五〇）帰葬をゆるされ、遺骨をだいて帰京した（『日本文徳天皇実録』）。

(注67) 南方之強與、北方之強與：「南方の強坎、北方の強坎」で、『中庸』に見える。孔子が弟子の子路に「強」を問われ、訊ね返した言葉。底本の「興」は「與」の誤刻。

(注68) 彗星：『武江年表』安政五年（八五八）に「八月初旬より彗星、宵は乾の方、暁は良の方に現はる事毎夜也。光芒北に靡きて甚だ長し」とある。

(注69) 源三位頼政：平安時代末期の武将。文武両道に秀で、

「人知れず大内山の山守は木がくれてのみ月を見るかな」の歌により昇殿をゆるされた（『平家物語』巻四「鶴」）。治承四年（二八〇）、以仁王<sup>もろひとぎょう</sup>を奉じて反平家の兵を興し、宇治平等院で自害した。

〔注70〕海老々人：相良（牧ノ原市）の俳人、蘭英堂（松風園とも）少風。俗名は長野治郎右衛門。晩年、海老庵と号する。雪門で、地元遠州の判者として活躍した。安政六年（一八五九）七月十三日没、八十一歳。

〔注71〕亥中：亥の上刻と下刻との間。午後十時頃、東の空に出るので、陰曆二十日の月を「亥中の月」という。

〔注72〕迦葉：釈迦の十大弟子の一人。釈迦がもつとも信頼し、没後教団を統率した。

〔注73〕佐久良の池の宮：御前崎市佐倉の桜ヶ池畔にある池宮神社。比叡山の皇円阿闍利が弥勒菩薩の出世を待った。め桜ヶ池で竜身となつたと伝える。赤飯を詰めたお櫃を池に沈めて竜神に供える、秋の彼岸中日の行事「お櫃納め」が有名。

〔注74〕我のみと：「さびしさに宿を立ちいで詠むればいづくも同じ秋の夕ぐれ 僧良暹」（『小倉百人一首』）。

〔注75〕断続寒礎、断続風：南唐の李煜<sup>りよく</sup>の詞「搗練子令其の

二」の一節。

〔注76〕便舟：「便船」（『俳諧どめ』、『自筆柿園句集』ほか）が正しい。

〔注77〕日の照ながら：『日本伝承童謡集成』第二巻に「日が照って雨が降る、狐の嫁入」（山口ほか）とあって、近世から全国的に流布した俗信。

〔注78〕弱法師：「三夕」の一つとして有名な西行法師の詠「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕ぐれ」に拠り、画題とされた。「弱法師」はヨロヨロした乞食法師。自筆の句集（一冊本、四冊本）の「一人法師の画に／宿なしの見てある鳴の行方かな」が初案か。

〔注79〕市原晴霞女：須賀川の女流俳人、市原多代女。晴霞は庵号。慶応元年（一八六五）八月四日没、九十歳。『柿園日記抄』慶応三年二月二十八日に、多代女追悼の大摺「露明り」が届いた記事が見え、嵐牛の悼句も所収。

〔注80〕観山居：須賀川の俳人、山辺清民。名は頼之。是非庵とも号した。多代女門。

〔注81〕座敷小僧：旧家の奥座敷などにいるという童形の妖怪。座敷坊主、座敷童子ともいい、これがいると家は栄え、去ると衰退するという。東北地方に多く伝承される。

(注82) 妻の塚に…水音の「終焉之記」(「柿園嵐牛悼控」所収) 参照。

(注83) 観山居のなきあと…清氏は慶応三年(一八六七)十二月九日没、七十五歳。『柿園日記抄』慶応四年一月四日の記事参照。

(注84) 一棒…座禪で、眠りを催した者を警醒のため、棒で叩くこと。添削批評の譬喩的表現。

(注85) 無箬を…芭蕉の「白菊の目にたてゝ見る塵もなし」を踏まえるか。

(注86) 楠木氏…楠木正成まさしげは(注57)参照。建武三年(一三三六)、摂津国湊川(兵庫県神戸市中央区)で、九州から東上する足利尊氏らの軍と、迎え撃つ後醍醐天皇方の新田義貞・楠木正成の軍とで行われた湊川合戦の直前、正成は桜井駅(大阪府三島郡島本町)で十一歳の嫡子正行に別れを告げ、形見に菊水の紋が入った短刀を授けた(『太平記』巻十六、ほか)。謡曲「楠露」に「清き名を千代に伝へて、菊水の流れ久しき湊川」。

(注87) 梧桐深夜雨、尊鱸異郷心…「尊鱸」は「尊羹鱸膾」の略で、尊菜のあつものと鱸すずめのなます。「尊鱸」(陳普・秋興詩)とも。晋の張翰が、秋風が立つと故郷の呉の料

理の味を思い出し、官を辞して郷里に帰った故事から、望郷の念を意味する。詩句の出典は未詳。『そのまま集 五編』(注13)参照。

(注88) 焼味噌きらふ隣は…ことわざ「焼味噌を好者は金得延ばさぬ」(「譬喩尽」)による。焼味噌好きは金持ちになれない、との俗信。

(注89) 呂洞賓が「雖貧樂有<sub>レ</sub>余」…呂洞賓は中国の八仙の一人。呂祖とも称し、その「過湖州沈東老家以榴皮画字題於庵壁」に「西隣已富憂不<sub>レ</sub>足、東老雖貧樂有<sub>レ</sub>余(西隣已に富み憂ひ足らず、東老貧なりと雖ども樂余り有り)」(『呂祖編年詩集』巻二)とある。

(注90) ある山寺…初出『そのまま集 二編』には「居尻の御寺」とある。『二編』の(注15)参照。

(注91) さつを…獵師。狩人。

(注92) 語るを…底本は「語ることを」とする。

(注93) 今にしれぬ…「今も知れぬ」(『そのまま集 二編』)。

(注94) 我娘…明治三十年(一八九七)、知傾が認めた句文に、「豊浜の里なる伊藤源作氏は、祖父の代より酒造業をうけ嗣で、醸蔵などいときらやかに建つらねて繁栄せり。此母たる人は塩井河原伊藤嵐牛氏の二女にして、当家へ嫁

したりしが、君幼なかりし頃、惜い哉、世をはかなくせり。」とあり、豊浜（磐田市）の伊藤家に嫁した嵐牛の次女が嘉永三年（一八五〇）に亡くなったことがわかる。源作は弘化二年（一八四五）生まれ。

〔注95〕鈍者寿：唐子西「古硯の銘」〔古文真宝後集〕所収

に「鈍者寿而鋭者天、静者寿而動者天（鈍き者は寿にして、鋭き者は天なり、静かなる者は寿にして、動く者は天なり）」とある。

〔注96〕あげ貝：軍勢を引き揚げる時に吹く合図の法螺貝だが、ここでは牧場で用いるそれ。

〔注97〕月栖：吉原（富士市）の俳人、近藤月栖。甲斐国南部宿の生まれ。二十代半ばに故郷を出て、吉原宿本町で質屋を営んだ。通称右平、梅栖とも号した。元治元年（一八四九）五月十四日没、五十六歳。木綿島は富士市今泉一丁目の和田川寄りの旧名。

〔注98〕甑内已無三合粟：甑こしの中にはもう三合の粟もない。袋の中に、どうして半文の銭があるだろうか、いやあるはずもない、の意。出典未詳。

〔注99〕高砂：謡曲の一つ。播磨国高砂の浦で松の落ち葉を搔く老人夫婦（尉じょうと姥うば）が、高砂と住吉の相生の松のい

われや松のめでたさなどを語る祝言曲。

〔注100〕源渡が妻袈裟：北面の武士源渡の妻。同じ北面の武士遠藤盛遠もりとよに横恋慕された袈裟は、わざと夫の身代わりとなり殺される。盛遠は出家して文覚もんかくと称した（『源平盛衰記』巻十九「文覚発心付東婦節女事」）。「今はの声」を虫の声にたとえる。

〔注101〕常盤女：常盤御前。源義朝の妾で、牛若ら三人の男の子を生む。平治の乱で、自首し、母子の赦免を条件に平清盛の寵愛を受けた。

〔注102〕椎が脇：浜松市天竜区二俣町鹿島にある椎ヶ脇神社。神社北側にある天龍川の深淵は、崖上に椎の木があったので椎ヶ淵と呼ばれた。椎ヶ脇神社は古来天龍川の船の安全航行の守り神として流域各地に祀られた。

〔注103〕渡らば錦：「竜田川もみぢ乱れて流るめり渡らば錦中や絶えなむ 詠み人知らず」（『古今和歌集』巻五）。

〔注104〕蜂腰：漢詩を作るとき避けるべき八病はちびょうの一。一句の第二字と第五字、または第二字と第四字の平仄が同じであること。『自筆柿園句集』には「腰折」とある。

〔注105〕一日あまり：『自筆柿園句集』『句集草稿初編』に「二月あまり」とあるのが正しい。

(注106) 不自由なる…「不具なる」(『句集草稿初編』)。

(注107) 留主の戸に…『自筆柿園句集』『句集草稿初編』に同

じ前書で「ものに迄さむさしみけり留主十日」と二句収録、平台らは本句のみを底本に採録する。

(注108) 達磨忌…禅宗で、始祖達磨大師の忌日である十月五日に行なう法会。

(注109) 定家卿佐野のわたりにて…「駒とめて袖うちはらふ

かげもなし佐野のわたりの雪の夕暮 藤原定家」(『新古今和歌集』巻六)で知られる「佐野の渡り」は、『万葉

集』巻三に収められる長奥麿の歌による本歌取りで、「狭野」は新宮市の地名であったが、中世以来、一般的には

奈良県の三輪、あるいは群馬県高崎市との説が有力であった。(注112) 参照。

(注110) 口とり…馬の轡につけた指繩を引く役目。「いらち兒」は、いらいらした表情。

(注111) 大疑下有大悟…中国の禅僧蒙山の語で、「公案上、有疑。大疑之下、必有大悟」(『蒙山和尚法語略録』)。

(注112) 北条時頼…鎌倉中期、第五代執権で、康元元年(三二五)出家、最明寺殿と呼ばれる。回国の途次、上野国佐

野で大雪に遭い、零落した佐野源左衛門常世の家に泊め

てもらい、秘蔵の鉢の木を焚いてもてなされた逸話が謡曲「鉢木」で有名。

(注113) 新田義貞…鎌倉末から南北朝初期の武将。元弘三年(二三三)鎌倉幕府を滅ぼし、建武新政で重用されたが、

やがて足利尊氏と対立して各地に転戦。建武三年(二三三)から翌年にかけて越前国金ヶ崎城に籠城して北朝方と戦い、のち越前国藤島で討死した。

(注114) 勾当内侍…新田義貞の妻。琵琶湖畔の今堅田で義貞に別れた内侍は、後に義貞を追って北陸へ向かうが再会

できず、義貞没後は出家し、嵯峨の草庵で義貞の菩提を弔って余生を過ごした(『太平記』巻二十「義貞ノ首獄門

ニ懸クル事付勾当内侍ノ事」)。

(注115) 瓦と成て全からんよりは…平賀源内「神靈矢口渡」三にも「瓦と成て全からんより、玉と成て碎よとは古人

の金言」とあってよく知られる格言で、出典は『北齊書』(「元景安伝」)の「大丈夫寧可玉碎、不能瓦全」。

(注116) 一鳥過寒木…趙師秀の五律「巖居僧」に「一鳥過寒木、数花搖翠藤」(『宋詩別裁集』巻四)とある。嵐牛

は「寒木」を「寒水」と享受していたか。

(注117) 恵心寺に…『白陀羅尼』(元禄十七年)に「恵心寺に

奉公はせいで網代守支考』、『誹諧温故集』(延享五年)等に中七「奉公はせで」。

(注118) 仏：物故者。ここは亡くなった亭主などを指す。「綿ぼうし」は真綿を薄く引き伸ばして作った被り物で、多く防寒用に老女が用いた。

(注119) 年の春：年内立春。

(注120) しろがねもこがねも玉も：「銀も金も玉も何せむに勝れる宝子に及かめやも 山上憶良」(『万葉集』巻五)。

(注121) 髑髏：類想の先作に「煩惱あれば衆生あり／骸骨のうへを粧うて花見かな」(『鬼貫句選』明和六年刊)がある。

(注122) からりころり：古来、花札の絵柄など鶴はコウノトリと混同され、コウノトリが嘴を叩いて鳴く仕種(クラッタリング)を表現したオノマトペ(擬音語)。「からころ」ともいい、鶴夫編の明治中期の歳旦一枚摺(鶴二羽の挿絵入り)には「閑良(から)ころ」の袋題がある。「朝目よし」は『古事記』中巻に見える「阿佐米余玖(朝目吉)を踏まえ、目覚めた朝の爽快な光景を詠むか。

そのまま集 初編

春

おこさねどせぬ元日の朝寝かな  
(宵)よひ鳴をしたふりもなし初がらす  
 春谷 仁風

やごとなき御わたりに候して

しんとした座敷構やうたひぞめ  
 鶴明 耕齋

水いはひ済て伏家の宵寝かな  
 雨竹

万歳や雪の箱根を足駄がけ  
 嵐牛

庭かまどちとは煙るもにぎはしき  
 嵐牛

舞猿や折々首尾を見つころひ  
 嵐牛

狙公さるまはの猿とはなすやもどり道  
 鳳嶺

試さぐるまはに狙舞さるまはせ見る出立かな  
 鶴明

朝東風あさごちにむいて踏ふみばる鏡あぶみかな  
 石翠

養父入やふいりの身み蟲むし眞まことがちのはなし哉  
 雷雪

明屋敷あきとほりぬけく梅見うめみかな  
 々々

大空や梅のうめにほひにひとくもり  
 野乙

こつそりと山やまを出ぬけておぼろ月  
 芦角

山やまを見て日和沙汰さたするしほひかな  
 々々

どちらへも靡なびてのびる柳やなぎかな  
 々々

【書誌】「題簽」「そのまゝ集」(鈴木健治氏本)。「内題」  
 「其まゝ集」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」本文二  
 十丁、跋二丁、計二十二丁。「序」なし。「跋」柿園社友。  
 「刊記」なし。

【解題】柿園社中の年次発句集の最初の一冊で、跋によれ  
 ば社中の毎年詠んだ句がそのまま紙魚しめの栖すまになつて朽ち  
 果てるのを惜しみ、一切添削・校合を加えることなく、  
 そのまま版に彫つて出版した故の集名という。四季順に  
 収め、巻末は前書を付した四季混雑句となつている。成  
 立年次は記されていないが、三編が「安政五戊午歳」の奥  
 なので同三年(一八五〇)の成立と判断される。

【翻刻】

其まゝ集

入舟のいはひに更すよかんかな  
 手出して埃かぶりぬみそとんど  
 吹おこすたびに見わたす柳かな  
 原宿にて  
 薄暮や山焼うつる人のかほ  
 見はる眼に糸引空やあげ雲雀  
 灯に蝶の来てさわぎたつ一間かな  
 ひくころに成て殖けり浦の鶴  
 引鶴や羽をかゞやかしく  
 きじ啼やひと雪降てもどる雲  
 道間に町へもどるやおぼろ月  
 見ゆる火も月も朧や岩屋道  
 梅が香や闇を撫々ぬける木戸  
 遊ぶやら引やら鶴のみだれ舞  
 いたいけや寝言にいふも凧のこと  
 ながれ来る花や外山のちるたより  
 白浜や東風そよくと薄月夜  
 夕東風や早火のみゆる小笹原

物外  
 々々  
 晴笠

行雲と一致になるや揚ひばり  
 海にむく一岨梅の盛かな  
 今日も東風々々とつゞきぬ旅日記  
 ゆたくと東風に浮寝のかもめ哉  
 (注1) 飛鳥山にて  
 人のちる中へ花ちるゆふべかな  
 ごろくと寝てゐる鹿や春(の)山  
 松風の俄にとほき潮干かな  
 行水をとめて水口まつり哉  
 出代のいひおく菊のこやしかな  
 水鷺のふかき木の間や鳥さかる  
 かりられて客殿明るさくらかな  
 梅あてに山を下れば小寺かな  
 あと連を待る日南やうめのはな  
 引鶴や岸は朝日の波もなし  
 顔をふく東風や矢橋の朝わたし  
 田畑にも成たあととなり花齋  
 さゞ浪をけしとおよぐかはづかな

々々  
 文一  
 々々  
 々々  
 々々  
 平台  
 々々  
 知石  
 々々  
 石翠  
 々々  
 々々  
 くにめ  
 くにめ  
 くにめ  
 鶴明  
 々々  
 仁風  
 耕斎

出替でかひりやものかふてゐる市の中  
々

ところ／＼山焼見えて夕ぐもり  
雨竹

海土が家に炬みえて宵の東風  
桂堂

ほの／＼や紙衣かみこを通す花の雨  
々

雲うらに早のぼりけりはるの月  
々

かりうゑの松に鳥なく春日かな  
々

霨冷けりに水札みづがはの音ね冴ぬ谷の花  
々

どちらからも月のそひよき野梅かな  
完立

今朝は田も濁りて厓ゑのわかれ哉  
々

まけほどはこぼしてはかる蛭しじみかな  
竹女

野の雨は夕日にはれて啼なひばり  
々

あけてゐる月にもかゝる臙しかな  
々

夕東風すそに裾すそおろしゆく堤つとみかな  
菅書改 素竹

出てみれば一つ也けりはるの猫  
々

明ちかく月の出でありうめの花  
洋々

降雨の一日おきやおぼろ月  
々

折て来て桶かじも盥みもつゝじかな  
嵐牛

あるうへに餅もちをつきけりうめの花  
新助

御前崎追遥

青ぬたやひろふた貝かいへもりならべ  
石翠

行春や舟で花さく野菜もの  
々

ゆくはるやさげてかわかすあらひ髪  
貫一

行春や鳴た噂うわさのほとゝぎす  
晴笠

行春や大和めぐりの無事むじ日より  
鶴明

夏

酒の座あはせに袷あはせ着て来て直りけり  
野乙

多賀たがにて  
物外

吹こぼす杉の雫や卯月冷  
雷雪

ひと雨は来る勢いきほひやほとゝぎす  
々

飢うをなく浜はまのからすやくもの峰  
々

咲ゆりの花底はなぞこふかきにほひかな  
々

夕立ゆふだちや威儀いきの崩くづる僧そうの鷲しゆ  
野乙

一本の柿かきの茂りや麦あわのあと  
々

禮れいの茶碗ちawanならべて算かぞけり  
芦角

又また蛇へびにさゝれて笑わらふ安居あんこかな  
々

宴さかもちり やばたんの影のまはるころ

物外

木兔みづつぐの眼にちからあるしげり哉

桂堂

笛吹て雀をこらす牡丹かな

々々

残り餌に糞する鷹や五月雨

々々

道もなき浅篠原や鳴くひななく

春谷

すくふ手のつたなくみゆるしみづかな

々々

夕立に降ふちれてさめつ舟の酔

々々

帆柱(向)をねかすむかふやくものみね

文一

川狩のすて火にこげる小笹哉

々々

子規石につまづく夜也けり

々々

から入梅づゆや暮て鳴出す田井の亀

貫一

仮着して田植に出たり尼法師

々々

八重葎はつむらすぐれて入梅をふくみけり

々々

川狩のあとすみきるや廿日月はつかづき

々々

夕雨や御成のあとをなく水鶏くひな

完牛

光明山(注3)にて

々々

ゆふがほや留主とおもへば尼ひとり

々々

峰々や夏のゆふへの薄ぐもり

平台

見物(籠)も行義たゞしき矢数かな

鳳嶺

そら立をして又はしる鹿子かな

松和

暮ぬうち鳥の寝にくる茂かな

々々

夕ばえや羽をならしとぶ不如帰ほしききり

知石

舌だみる鶯老のはじめかな

晴笠

明方や湖うみと雲との入梅げしき

々々

水滴おとしを重石おもしにおくや薄羽織

々々

ぬれて見ん昨日うゑたる竹の雨

石翠

柿園閑話

々々

薄羽織たゝんだまゝによごれけり

々々

夜の明るころや水鶏もみだれ啼

々々

うすすぎて針もこたへぬ羽織哉

国女

おなじく

桂堂

晴口や茂りゆり出す夕月夜

々々

味はへるほど身にしみる清水哉

桂堂

蜀(注2)魂舟をわすれしさわぎかな

鶴明

ひゞ沢楠一見の時

々々

ほとゝぎすつまみ落せし服紗哉

々々

網提てもどる夜明や鳴くひな

々

竹うゑて己にほこるころ哉

嵐牛

処女等を追ちらしけりさうぶ太刀

鶴明

能見ゆる日ははやからの浮巢かな

々

砂もはや踏よくなりぬ夕すゞみ

耕齋

自慢する手元あぶなし瓜の皮

五岳

とぎれぐく風の来る夜や火取虫

雨竹

「人家何処在 雲外一声鶏」  
鶏啼や木の間ぐくの夏の雲

五岳

温泉の山や方角とへばほととぎす

々

魚店にひときれもなし初がつを

石坡

画眉鳥の古巢さし出す茶摘哉

々

ひとはなは寺から出たり御祓人

芦角

見らるゝや麦の中ゆく日傘

々

蜻蛉のおふやみそぎの流しもの

完牛

わか竹や北野詣のまはりみち

仁風

大粒に雨ばらついて御祓かな

くにめ

紫陽花のゆさくすける簾かな

完立

老の手を引々くぐる茅の輪哉

平台

祇園会や木かげくのをがみ処

々

秋

平台

蓮の香やしらぐく明の靄に雨

々

ぬれ笹に秋たつ朝のけしきかな

晴笠

しどろなき花のくぼりや咀の葛

竹女

水にさす煙のかけや今朝の秋

耕齋

川狩や小供の智慧の先ばしり

素竹

初秋の日のもりそむる葎かな

春谷

蚊のかけのちらくさすや写しもの

々

棚機や風呂もしてまつ女客

平台

一枚におし水白し血吐鳥

洋々

田の方へ行灯むけて星まつり

竹明

見人乗人我をわすれてくらべ馬

々

子供等にまかせておくや星祭

竹明

おされあるうちに眼先や競馬

々

子供等にまかせておくや星祭

竹明

秋風や厚朴<sup>ほ</sup>の葉末に日のよわり

石坡

火の数のおほき中にも大文字

竹明

市中に売かつ芋のはつ荷かな

々

小夜砧庵のばせをにひゞきけり

々

こ<sup>麹</sup>にやくを肴に強る新酒かな

々

落鮎や雨そびく<sup>く</sup>の朝あらし

々

むつまじかりし人の身まかりぬと聞て

風牛

きりく<sup>く</sup>す片隅くらき机かな

風牛

〔彼<sup>注6</sup>ものくらふたる日は毛髪もそ<sup>く</sup>けず〕

とかきけば、おとろへたる鬢先も、今朝

は撫るもいさゝかたのみある心持のして、

鮮鯉のあるじにあへる桐園にて

きくの香や先起<sup>おき</sup>タの水かゞみ

々

明寺や石垣たる<sup>く</sup>菊白き

洋々

居<sup>みの</sup>残し仏事の客や木の子がり

々

庵<sup>注7</sup>崎逍遙

家もなくおもふ洲先の掃衣<sup>きぬ</sup>哉

々

むし鳴<sup>なく</sup>や仮寝もさめて又更<sup>ふか</sup>す

々

朝冷の際だつ里や軒の芋

洋々

梶の葉やこゝろ限りのちらし書

素竹

さび鮎の横におさるゝ早瀬かな

々

草の根に夜すがら秋のほたるかな

竹女

立ていとさびしき秋のひゝな哉

々

向あうてどちらも啼ず峰のしか

々

漁火<sup>いさりび</sup>のちらく<sup>く</sup>見えて秋のあめ

完立

ぬけ道やはらりとあびる露しぐれ

々

五位のゆく方<sup>かた</sup>はあかるし雨の月

桂堂

残月や干冴まはりて啼かもめ

々

風の鹿尻<sup>しか</sup>ごゑばかり聞えけり

松和

日のかげと月影とあるもみぢかな

々

高巖にかゞやきうける紅葉哉

雨竹

おろしたる簾にさすやのちの月

々

霧雨やばく<sup>く</sup>ならず墓<sup>ひき</sup>の口

々

駿河<sup>注8</sup>の国大崩れといふ処にて

すさまじや巖あらひし波のあと

平台

早稲の香やよごるゝ庭の賑しき

耕齋

こへば筆出して貸けり鹿の宿

仁風

是にさへしなくのあり唐がらし

鶴明

白(注9)がねもこがねも玉も何せんに

むつまじき兄弟どもや生身魂

国女

日にまけし枝ふりはなし唐辛

々

うそ寒やまたほちくくと紫蘇の花

々

秋葉詣(注10)、三倉の宿を立て

残月や先へも往たる人の声

知石

おなじ御山にて

雲ふくやもみぢひと葉も見ぬ木間(このま)

々

天竜川遠望

朝すぎや霧のあとふく砂けむり

々

茸狩や一日誰も山は見ず

文一

新米や室の子供か状の中

晴笠

洗鮎(さいあゆ)について鮎(は)まで下りけり

々

立どまる通夜のもどりや露時雨

風嶺

ほし稲やぬかつた形(なり)にかわく道

完牛

浦風やかたぶく月を世ごし

々

星とふや露をあかりの唄づたひ

々

降ものゝ様におもはず草のつゆ

々

立鳴のあとや野風の吹だるみ

完牛

夕やけやそよく風の秋日和

々

あと舟の噂してゐる新酒かな

貫一

大文字や見ごろになれば風のたつ

々

蝕とれてひと声鳴ぬ月の鳩

々

(注11) 大野夜泊

うそ寒や音(ね)を試る獵師笛

春谷

夕(ゆう)暈(や)をおしてのぼるやけふの月

々

菊の香や客も有げな門さうぢ

々

三日月や入際見ゆる雨の中

物外

月代(つきしろ)やあらそふうちに松見ゆる

々

代(しろ)のみで雨に成けり十六夜

々

大文字の火や佛の二夜三夜

芦角

搗(つき)止(やめ)て仕丁(じちやう)になるやことし米

々

暮秋述懐

露じもや我もひとつの裸むし

々

道とへば二人出にけり芒かげ

野乙

冬

草庵

むしなくや日を経て捨る水一荷いっか

々

いとなみや此しぐれにも水馴棹みなれざを  
刈のこる田づらさらく時雨けり

鶴明  
仁風

みだれあふ葉のさうくし露しぐれ

々

翁忌

山ばなれするまでつよし月のあめ

野乙

しぐるゝや軒のすゞめも通夜の声

々

底意地のある誉やうやきくの花

雷雪

ちらくとしぐるゝ鷺のゆくへかな

完立

すゝけたる簾まばゆし菊のはな

々

(注12)  
石坡居士一市忌追悼

雨竹

山谷月楼鐘

名月やかねのこだまも鼻の先

々

夕空や去年の時雨もおもはるゝ

仁風

かへり端のなくてふかしぬ月の舟

々

浪花にて

野風

おとうとの養子するにしめす

平台

十月の見ものや芦の刈のこり

平台

香に匂へうゑ替らるゝ藪の菊

平台

十月や道にまたがる倒れ松

くにめ

腰かけに来る川冷や草のみぢ

石翠

青空に山のすわるや神無月

竹明

おし水のあとや冷もつ草の花

々

綿殻を束ねてはこぶ寒かな

雷雪

引鹿ひくの日にむいてたつ峠かな

々

空よりも野山の広しけさの雪

々

ぬれ色を見せてかつちる紅葉哉

石坡

鶴啼や水からもたつ霜けむり

野乙

秋葉山に詣るほど、はしご板といふ処にて

耕齋

霜風しもかぜやともし明るきかゝり舟

々

行秋や昇る日はやきはしご板

耕齋

おしあうて羽をほす朝のちどり哉

物外

次の間を隣ごころや冬ごもり

戸一重に笹の雨きく巨燧かな

風呂吹や外は月夜に何か降

冬にはや散たもあるや蟹が梅

かれぐくなる滝音や寒ざらし

寒声やはりあげすぎて出ぬ唱歌

鳴かはず鴉や霜の月夜ざし

くるゝ空有てあかるし雪の門

黙止ては鴉もをらずゆきの朝

子をはこぶ鼯のあとや霜ばしら

牛にまで楽させておく御講かな

踏で来た雪に酔けり風呂あがり

かこひ鶺鴒に夜飼の声やつもる雪

霜の月かたぶきもせず明にけり

澄月や山根はるかに十夜鐘

(注13) 岩水の御寺に詣て

気がしまり付て御堂の寒かな

円山をむかふに町のさむさかな

春谷

々

貫一

鳳嶺

々

晴笠

々

文一

々

知石

石翠

々

々

平台

鶴明

耕齋

雨竹

旅に居て日取ちがへる小春哉

寒き夜や笹にかけひく水の月

落る日の雲切もるゝ寒かな

町幅のひろく見ゆるや冬の月

古沢や日は関ながら芦の霜

素袍着てまつる吹革の埃哉

段畑やそば刈ひとり暮のこり

麦時の暮てもあるや山ばたけ

(注14) 法多山大悲閣拜礼

しぐるゝや入日見てゐる番ひ鳩

昼とおもふうちのみじかき寒かな

蒔しより先へ生けりこぼれ麦

水仙や垣根をとほす日のぬくみ

ひとむしろ洪柿ほすや雪びより

かきまぜて眠をさます火鉢かな

朝風や網代見まはるひとり言

草庵

人の田を門先にもつさむさかな

々

得岳

松和

々

桂堂

完立

鳳嶺

竹女

々

物外

素竹

々

洋々

新助

五岳

平台

女子どものはなすをきけば

をかしさや心だけなる春をまつ

おもひ出もなければ春は待れけり

山守や春待かねて市まちに出る

春ちかき声になりけり籠かごの鳥

朝酒の顔に出にけり衣きぬくばり

節せきごころ季候の拍子あぶらにつれる歩あるき行哉

捨すてはり鶏とりの人をしたふや札納

〔注15〕  
「名利耀前心念忙」

宿しゆく構かまや翌あすの花見の夕ながめ

梅に月翌あすを大事の旅寝かな

〔注17〕  
「紅顔多薄命」

是も又秋にあふたるひあふぎか

朝風あそかぜやしむ花にはそひやすき

月花つきはなに舞た扇あふぎや蠅はたゝき

西行上人

花の世をすてるまことの花見哉

嵐嶺

芦角

文一

貫一

国女

知石

嵐牛

石翠

芦角

知石

嵐牛

貫一

文一

国女

知石

嵐牛

貫一

人造るすさびはかなしかんこ鳥

〔注18〕  
「雨奇晴好」

雨に見た色や晴てもわか楓

すゞしさや先に夕立あとに月

〔注19〕  
「遁世者は何ごともなきに、ことかゝぬ様

をおもひつけふるまひつけたるが能也」

とある上人の詞を題にて

見ればをるこゝろおこるや梅（の）花 嵐牛

かれ枝に蟬せみいさまし（き）さ高音哉 芦角

〔注20〕  
「雖レ貧モ楽リ有レ余リ」

梅（の）ちるやほろくあへの膳（の）うへ 平台

〔注21〕  
「護ル短ク」

うつむいて百合は咲也笹の中 文一

〔注22〕  
「毛（を）吹キて疵（を）もとむ」

近道（の）に深みへ入ぬ秋の川 竹明

毛虫（を）焼キて終（を）からしたる庭樹（の）かな 貫一

〔注23〕  
「孤（の）村野水斜陽（の）好（外） 無数（の）帰鴉（の）落（外） 晚風（の）」

日は西に水さわくと落にけり 野乙

魚名五

瀬ぐちさす筏あぶなき納涼かな  
 酒さめてこひしきふりやほとゝぎす  
 雨の日をきゞすのあゆむ畑かな  
 平台

辻君

我がげに終はそひ寝か霜の月  
 嵐牛  
 ふる雪にかざすもせまき袂かな  
 知石  
 夕月にすける姿や柳かげ  
 雨竹

此とぞ巻は、日頃、柿園に行かよふ誰かれ、花にうそむき、月にさまよふ且ゆふべ、うたひ出たるも、はた、折にふれたる団居にもおしたるも、己がじゝしるしおける一帖也。としぐに斯はものし来れども、なしの果はなほざりにのみして、紙魚にあらされ、鼠の巢に引ちらされて跡かたもなくのみなれり。いかなるえせ句にまれ、おのれ等ごときものゝ一句をすうる事はたはやすからぬを、今年も亦例のごとく成ゆか人も本意なしと、二三子うなづきあうて、かく梓にのぼせつるはをこがましかれ

ど、いさゝかも能はよきにはこらせ、あしきはあしきにまばゆからしめば、いよゝ互に風月に情をゆだぬべき一助ともならむかしと、校合をさへくはへずして、唯有のまゝにものしたる、おのれ等がさかしらごとになむ。

柿園社友

(注1) 飛鳥山：東京都北区王子一丁目にある丘陵で、江戸時代の中頃から桜の名所となった。

(注2) ひゞ沢：日比沢は現在の浜松市北区三ヶ日町にあった地名で、日比沢城があった。

(注3) 光明山：浜松市天竜区山東にある山。曹洞宗金光明山光明寺があり、景勝地として知られた。

(注4) 篠原：浜松市西区篠原町。遠州灘に面する。

(注5) 人家何処在：宋代の詩人梅堯臣の五言律詩「魯山ノ山行」の七・八句目で、七句目は「人家在何許」が正しい。

(注6) 彼ものくらふたる日は：『徒然草』百十八段に、「鯉の羹(あつもの)を喰ひたる日は鬢そそげずとなん」とある。

(注7) 庵崎：いおさき。東京都墨田区向島二丁目辺。江戸中期から名所視された虚構の地名。五百崎とも書く。

(注8) 大崩：静岡市駿河区石部から焼津市浜当目はまとうめにかけての急崖の海岸で、崩落しやすい地勢からの名称。

(注9) 白がねもこがねも玉も何せんに：下の句は「まされる宝子にしかめやも」で、『万葉集』に収められる山上憶良の有名歌。

(注10) 三倉：森町三倉みくら。掛川から犬居いぬいまで、秋葉詣で賑わった秋葉街道の中継地点に当たる宿場。相良から信州への塩の道も通っていた。

(注11) 大野：掛川市大野か。日坂宿のやや北、粟が岳の麓にあたる。

(注12) 石坡：二俣の門人。米山忠英、和右衛門。「柿園門人録」参照。

(注13) 岩水の御寺：『嵐牛発句集』の(注21)参照。

(注14) 法多山大悲閣：袋井市豊沢にある高野山真言宗別格本山、法多山尊永寺。本尊は厄除観音で知られる。

(注15) 名利：以下は、一休宗純が靈山徹翁和尚の「示栄銜徒法語」を書いた末尾に付した偈頌に見える語句。

(注16) 宿構：しゆくこう。あらかじめ詩文を作っておく

と。右脇に細字で「句」と記し、「宿構」が発句のそれであることを示す。

(注17) 紅顔多薄命：『嵐牛発句集』の(注44)参照。

(注18) 雨奇嗜好：策彦の詩句「晴シ得雨奇嗜好シ」による語。蘇東坡が西湖を絶世の美女西施せいしになぞらえ、晴天・雨天で美しさの異なる景を称えた詩にもとづき、「おくのほそ道」象潟の条に「雨も又奇也」と引用され、俳諧作者に知られた。

(注19) 遁世者：以下は、『徒然草』九十八段に引用される「一言芳談」の一条による。

(注20) 雖貧樂有余：『嵐牛発句集』の(注89)参照。

(注21) 毛を吹て疵をもとむ：『漢書』に依拠する諺。

(注22) 孤村野水：以下は宋代の詩人游九言の七言絶句「秀州道中」其二の後半で、異同を（ ）入りで示した。前半は「漠漠秋原禾黍空 藤蘿古木梵王宮」。

そのまま集 二編

【書誌】「題簽」「其俣集 二編」。「序題」「其俣集」。

【書型・冊数】半紙本一冊。「丁数」序一丁、本文二十七丁、計二十八丁。「序」芦角。「跋・刊記」共になし。【備考】鈴木健治氏蔵本と校合した。

【解題】初編に次いで刊行された柿園社中の年次集で、四季と題詠の発句を収める。成立・刊行の年記はないが、三編が安政五年奥なので同四年の成立と推定される。

序者の芦角は須々木（牧之原市）の人で、俗名は香川真種。はじめ相良の蘭英堂少風の有力な門人で、前号は芦雀（鶴）。天保前期、須々木の文一とともに少風（蘭英）評月並句合の催主もしている。安政二年（一八五五）、嵐牛を自亭に迎えて文一とで歌仙を三吟、それを機に柿園の一員となった。和歌を佐倉の水野真邦、儒学を横須賀藩士片倉又右衛門に学んだ。文久三年（一八六三）四月二十六日の没（61）。塚本五郎「相良俳諧史（その三）」（『俳諧静岡』一一二号、平成20・5・5）参照。

【翻刻】

其俣集

柿園の軒に行かよふ友垣相はかりて、百鳥のおのがさま  
くくうたひ出たる言の葉どもをひろひあつめて、ことし  
もさくら木にもものして、そのまゝ集の編をつけるは、鳴  
呼がましかるしわざになむ。しかはあれど、ながく此道  
のさかえひろごり、犬うつ童もえものをかいやり、月花  
に心をうつし、つひは上つ代の学びにも入ぬべきしをり  
ともならましやと、ひたすらねがふ心緒になむ有ける。

芦角

春

草の戸も火打ならしてあけの春  
人の来て初春めかす門辺かな  
初春といふ所作もなし片在処  
はつはるや供具の眼にたつ蛭子棚  
はつはるや寝じたくすれば人のくる  
峰々をひとかゞやきのはつ日哉

嵐牛  
龍枝  
鶴明  
石翠  
々  
貫一

一声に空さだまりぬ初がらす

桂堂

正月や樽からうつす酒の音

雨竹

寒いとはいはぬ寒さや着衣始きそはじめ

莞立

左義長のさわぎにつるゝ鴉かな

四山

初夢や見んとおもへば眠られず

雨竹

麦ふんだ鹿相もいはず梅もらひ

平台

蓬菜もはやひと日たつほこり哉

一笑

ひぢかさにと雪とほす梅見哉

晴笠

旅にある人にもすゑる雑煮かな

杏林

朽た木の梢になりてうめの花

桃寿

門にまつ人呼入るいるさうにかな

貫一

薄月や梅にひそく人の声

一笑

杯と引かへに出す雑煮哉

知碩

舟に出て見ても能日よきひぞ梅のはな

々々

二日居た客の立端たちばに雑煮哉

洋々

夢中

太ばしにそへて出しけり常の箸

雨竹

薄月や梅ちるころの嵯峨もどり

嵐牛

ほろ酔やすゝめられての筆はじめ

桂堂

〔枕(注1)の草紙〕をよむ

万歳やもどりの顔は常の人

岳丈

ちりのこる梅や四五軒北おもて

三牛

買った顔見てとられけり懸想文けんそうぶん

嵐牛

大竹氏(注2)にて即事

桃寿

猿ふたつ鎖に繋がれて、撞木やうのもの

をおり登りして人に愛せらるゝ、茶店の

前に狙公さるひま、猿を舞せけるに

知碩

幹へみな雫のもどる柳かな

完牛

繋がるも舞も浮世や猿の知恵

知碩

雨の火の遠くうつるや江の柳

四山

正月や何をもせずにいそがしき

静斎

旅人を連つれに見て居るやなぎ哉

幼鯉

正月や氷ふむ子の足袋白き

洋々

頃あひな柳の風や夜舟風炉

雨竹

貫一

舟おりて酔のうきたつ柳哉  
 青柳にふんしに来るや藪雀  
 挿残る柳さしけり坪のうち  
 うぐひすの餌がひをしへて旅出哉  
 鶯を聞々うぐひすこゆる山路かな  
 黄鳥にとめる釣瓶の手操（縁）かな  
 はつ東風や明あけ計ばかりの空をふく  
 東風ふくや市にゆとりのみゆる朝  
 岨そばの火の水田にさすや宵の東風  
 灸居きうすゆるころにもどる寒かな  
 雨だれの音もそろはぬ雪解哉  
 馬の尾をむすびあげたる雪解哉  
 洒掃さいさうに隣かしこきゆきげかな  
 布そゝぐ先をながるゝ氷かな  
 ねはん会みやちさくすわる鯨とり  
 教をしへたり聞たりもして涅槃像  
 出代でがはりのあとおうて行小犬かな  
 畑打や人の仕事のやうにする

石 翠  
 野 乙  
 国 女  
 杏 林  
 柳 月  
 国 女  
 四 山  
 平 台  
 一 笑  
 晴 笠  
 柳 月  
 龍 枝  
 雷 雪  
 静 嘉  
 芦 角  
 国 女  
 得 岳  
 雷 雪

畑打や雨も日和もほしき頃  
 畑打とはなしてゐるや藻かき舟  
 橙だいだいのおちし音也はるの月  
 入際に片空はれて春のつき  
 餌さし衆の酔てもどるや春（の）月  
 五位のたつあとの洲先やおぼろ月  
 飛蝶につれて動くや馬の耳  
 おもしろうなればほぐるゝ胡蝶哉  
 笠ほしうなるや蝶とお浦づたひ  
 供あすに傘わたすや空に鳴ひばり  
 翌あすはとる飯家としらで雀の巢  
 菜の花やけしき見えゝ黄昏たぐかるる  
 芽をふくむ樹々に雪降鈴鹿哉  
 雨水に古根かくれてあしの角  
 あしの芽や田へ来る砂のとめ処  
 白魚や盆にもり出す網の口  
 底沼もあらふ早瀬や小鮎よな飛

小夜中山にて

洋 々  
 々  
 野 乙  
 四 山  
 鶴 明  
 春 谷  
 芦 角  
 野 乙  
 く に め  
 四 山  
 完 牛  
 莞 立  
 物 外  
 洋 々  
 石 翠  
 雷 雪  
 耕 齋

海遠しあたゝかな日の松をもる

耕 齋

桃さくや回り道する舟ぎらひ

一 笑

長居した茶屋ふみ出せは春(の)風

国 女

不作法なやうで京めく茶摘かな

莞 立

はるの山後見ながらのぼりけり

平 台

笹の家のともし火すけて夏近し

晴 笠

どこからか来て溜けりはるの水

々

野の末やいくすぢもくる春(の)水

物 外

夏

四 山

遊ぶ日といふではなくて日永哉

雷 雪

里遠くうぐひすの鳴四月かな

幼 鯉

永日や楽寝してゐる市の鹿

静 嘉

着てはぬぐうちに風の袷かな

石 翠

敷革をあげて掃出す日永哉

雨 竹

滝まはり袷着た日の出来こゝろ

々

かけ綿をとれば完尔と箱の雛

莞 立

着ればぬぐことをわするゝあはせ哉

々

咲さかぬ噂の中や初ざくら

杏 林

勢ひにつり合声やほとゝぎす

雨 竹

寝にもどる鴉小にくし花のうへ

竹 明

雨になじむ色おもしろし若楓

竹 明

平台がもとより「いかでとへかし」と文

春韭はるにらはすがれ、瓜はまだしけれど

晴 笠

もて折々まねかるれど、公務にいとまな

うのはなや雨かこつつけの客まうけ

晴 笠

き身は、心にもあらでかいやり置つれば

〔寸善尺魔〕

晴 笠

ちる花に動くこゝろやひとり言

々

持かへて貰たけしをこぼしけり

石 翠

眼にしむや此荒磯に花ひと樹

完 牛

如月末つかたより病に臥て、花の弥生も

空しくすぎ、子規やゝすがれ行ころ、い

花さくや壁ぬりながら店開

一 醒

さゝか怠(り)けるに、友人の来りて、

知 碩

ほろ酔や花見ごゝろに先成し

知 碩

「いかに日をおくり玉ふにや」など、念頃  
にいはるゝに

永日ながひの暮てみじかき夜のうれし

春谷

魚うりに紛れぬ声やあやめうり  
水色にそうて暮けりかきつばた  
長雨や仰山落る柿のはな

洋々  
杏林  
均堂

夏の夜や遠き火かげの更かるまで

四山

青梅のころがり込や膝の下  
竹うゑていひ当にけり宵の雨

春谷  
々

会后、柿園に一夜ざこねして

幟かやごしに語あひけり己が恥

岳丈

手あごゝろの有とは見えぬ田植かな  
後へふむ足さへ揃ふ田うゑ哉

桂堂

蚊屋つれば舟のこゝろもせざりけり

嵐牛

雨はれて寝ると起るやゆりの花  
百合折て鼻先かゆくなりにけり

嵐牛

かや釣し夜を算(ふ)るや山の家

龍枝

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

完牛

幟かやうりのけふも来てゐる御寺哉

杏林

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

芦角

雨しぶく音する舟の蚊遣かな

静嘉

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

莞立

蚊ばしちや木魚聞ゆる藪隣

石翠

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

莞立

青鷺や羽をのしに來る城の松

得岳

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

物外

よぶ声にからまつて飛ほたる哉

可樂

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

嵐牛

見もなれぬ人にもらひし蜜かな

龍枝

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

完牛

さみだれの晴間を虹の小雨かな

晴笠

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

芦角

五月雨や土のなまはるゝ燕の巢

岳丈

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

莞立

五月雨やものなまはる市の鹿

幼鯉

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

物外

酒の座へ見せかけてふくあやめ哉

晴笠

〔注4〕ヒテニク  
〔選〕リテニナリ  
「千峰随レ雨暗 一径入レ雲斜」

日光山へ詣まうづる記行の中

せと川

夏めくや浅き流のさゝにぎり

(注5)  
薩埵

耕齋

無風もあるけしき也青すだれ

々

日光山大日堂

朝冷の中や遠音のほとゝぎす

々

不二白し海は四月のさゞれ波

々

慈悲心や紫ふくむ雲に声

雨竹

ほのくくと明わたる頃、原の宿を出て

々

関宿より舟にて下るに、みじか夜ながら

朝不尽や屑家のけぶりにぎはしき

々

人込の不自由さにも寝られねば、苦の

箱根

透よりさし覗て

早夏の雲はこび也二子山

雨竹

三日月の返るも夏のけしきかな

耕齋

宮の下わたり

(注7)  
群(郡)内地にて

山ふかし卯月の花に夕あらし

耕齋

桑畑や五月の朝の薄みどり

雨竹

江のしま

六月やわすれてゐれば草の露

すゞ風や岩屋へかよふ波の隙

雨竹

椀の葉の朝から眠る暑かな

鶴明

金沢八景のうち七景を見つくして、のこ

竹握り下る川辺のすゞみ哉

野乙

る小泉をのぞむ。

すゞしさや頃日伸し竹の風

貫一

落かゝる夜雨のさまや不如帰

々

すゞしさや髪撫あげる松のかげ

芦角

大師河原

行もどり木屋町通る納涼かな

四山

葉柳をもる日のかげや竹床几

耕齋

すゞしさやまよひ込たる海士が門

石翠

向島

(注8)  
「脱レ巾掛ニ石壁ニ露頂酒ニ松風ニ」

すゞしさやつるりとのおぼる草の露  
 歛入て茂る菽生や青あらし  
 吹こぼす鳥の産毛や青あらし  
 青東風やひと雨こぼす浦げしき  
 消やすう見えて一日くものみね  
 白雨や雀のひそむ藪の中  
 むしぼしや物見かゝりてはかどらず  
 虫干や下におかれぬもの計  
 むし干の断きかぬ庭見かな  
 むしぼしや系図ばなしの聞にくき  
 一雨は鳴とほしけり森のせみ  
 蝉鳴や滝にうたれに行もどり  
 蓮の香やほのくゝ白き人の顔  
 夕月や蓮見をかけて通夜詣  
 風下へ幕張せたる蓮見かな  
 打水や二階の客のおりて来る  
 蒼海を木かげになして心太  
 瓜むいた手際うつくし尼法師

杏林 杏林 知碩 岳丈 春谷 平台 野乙 晴笠 貫一 洋々 雷雪 雷雪 一醒 貫一 芦角 完牛 鶴明 野乙 杏林

どの客も瓜で済すや旅見舞 幼鯉  
 おくの間はみな旅人のひる寝かな 一笑  
 水無月未つかた、不尽まうでせんと同行  
 の者を誘引て先浜垢離す。  
 炎天や潮あびたる身のしまり 鳳嶺  
 大井川肩車  
 みそぎする心持や足をはらふ水 々  
 見つゝ来し不二とおもはず不尽の上 々  
 江の島 々  
 くはず魚見せに来にけり夏座敷 々  
 鎌倉  
 何が谷、これの丘と見まはりて、むかし  
 の繁栄をおもへば  
 何となく泪うかびぬ草もみぢ 鳳嶺  
 おなじ浜に出て 々  
 波際に踵をひやす残暑哉 々  
 帰路  
 有渡浜やあくる方より霧はるゝ 々  
 (注9)

(注10)  
九能山おいしの間拝見

ついた手にかゞやきうつるもみぢ哉

々

鈴音のしてちる露や水のうへ

桃寿

霧雨や牛呵るゝもどり道

雷雪

塩畑に蟹のかゞむや初あらし

可楽

(秋)

感ずること有折に

立秋や水さびをながす池の雨

知碩

戸にもたれるればぼつとり一葉哉

々

しき砂をせぬばかり也星むかへ

野乙

柿園にて

子を抱て立まじりけりほし祭

国女

今朝のまゝひと葉も落す月の桐

貫一

盆月や気をつけてやる牛の飼

仁風

朝がほや二度の使に明かゝる

静嘉

指折て盛そろへけり蓮のめし

可楽

舜やひそかに客の起てゐる

鶴明

撰待や茶よりも水の一茶碗

々々

上置に朝がほ鉢や家ごし舟

知碩

宿とりて灯籠見に出る道者哉

芦角

それと気のつけば寝られず荻(の)声

々

大文字の明りにくらきあたりかな

物外

舟おりて道うしなひぬをぎの声

野乙

気に叶ふ様になしけり生身魂

可楽

溝へ来るひたくじほや荻のこゑ

耕齋

稲妻や寝た門かりてわける魚

春谷

かたぐ日のきらりくと花すゝき

くにめ

いなづまやひらりと猿の枝うつり

完牛

葉のもつれ穂に伸わける芒哉

嵐牛

いなづまや旅立宵の神詣

桃寿

飛蝨火によるまでに弱けり

知碩

稲妻や石にほろく木の雫

四山

客ひとりあるじ一人やむしの声

四山

稲づまの落たあたりや網の音

洋々

手ぢかくに薪もよせてむしの声

くにめ

〔注11〕南方之強與、北方之強與

蜻蛉の己が羽をかむいかりかな

嵐牛

潮先にみゆるやう也卅日月

芦角

初月や水面ばかり風のたつ

物外

仰山な葉に似ぬ花や秋海棠

可楽

見るうちにたしかになるや二日月

々

樹の鳥もともに立けりはなし鳥

桃寿

立かへり見るや物見の三日(の)月

三牛

又一羽又おどろきぬ暮のしぎ

一笑

待宵や道もしらずに先に立

雨竹

初雁を聞し夜からの寝酒かな

四山

まつよひや舟の中にもつく曲突

晴笠

西風のけふもふく也いわし浜

龍枝

名月やゆたりくくと浮かもめ

莞立

喧嘩さへはげみのはしよ鬮引

芦角

名月や岸にひそく鳩一羽

桂堂

朝寒や焚すてゝある手取鍋

平台

〔注12〕独坐幽篁裡 弹琴復长嘯

名月や竹の奥には竹の風

雷雪

朝寒や舟から舟へ飛からず

可楽

草の戸や月見ながらの業もする

雷雪

はだ寒やよく寝入子を撫て見る

四山

宿かりし礼にもかく月見哉

物外

あし高や殊にそばだつ秋のかぜ

平台

筆硯舟からも出る月見かな

杏林

三島明神社頭

々

吹かける雲さへ月のけしき哉

竹林

箱根権現法楽

々

新宅の賀

うつし樹の早似合しや庵の月

平台

ぐるりより秋の声ふくやしる哉

曾我山

字音の仮名を考れば、ことごとく皇国の

松に風はや月かげもかたぎけり

々

かなづかひと悉曇の格にあることを

江の島おくの院参詣

ひと雫まづ先身にしむや洞の口

々

七里が浜にて

何ひとつ眼にとまらねど秋(の)暮

々

咲ぬのも見せて回るや菊(の)花

四山

常に似ぬ風ふく菊の垣間かな

竹明

空寒くおもふはじめや後の月

耕齋

漁やすみするひと浦(注14)や御難餅

晴笠

御難もち御難語て呉にけり

一醒

配先ふやしたがるやおなんもち

貫一

青々と空の晴けり御遷宮

得岳

そのものともおもはぬまで近き声のあら

嵐牛

くしければ

鳴鹿の咽に吹こむあらしかな

嵐牛

鹿聞んと居尻(注15)の御寺にやどりける夜、更

たけて門過る人有あり。「かゝる山中、いかな

る者なればにや」など囁(く)を、ある

じの僧、「是なん鹿をほりする殺男なり」、

とかたるをきゝて、あはれさもいとゞ身

にしみければ

々

今もしれぬ命としらで鳴鹿なくか

すさまじき水の青みや紅葉かげ

竹明

ものいはぬ人へのみあふもみぢ哉

岳丈

雨ざれし募灯籠や草もみぢ

洋々

酔醒の冷をこらえて夕もみぢ

鳳嶺

光明山(注16)

しんとした幣ぬさのそよぎや夕紅葉

石翠

小夜中山さよのなかやま

撫て見る石の雫や草もみぢ

鶴明

芋畑やわけて眼にたつ露しぐれ

三牛

「かねて望まれし筆草見よ」、と柿園老人(注17)

より二三茎おくりたり。そのつゝみ紙に

田子の浦と有あり。

筆草やそれにもおもふ浦の秋

竹明

うら枯や中洲をはしる水鮑みづいたち

桂堂

柴垣や冬近き日のさし通す

桃寿

行秋や来なれてのかぬ迷ひ猫  
行秋や鳩の罫にもる夕日  
山彦やそれも秋行ものゝ数  
ゆく秋と成し日脚や谷の町

冬

ふらで日の立も本意なし時雨月  
当分の日和見ゆるや神おくり  
初しぐれけふはとおもひつく日かな  
鱧うつ音のはげしや初しぐれ

翁忌

蹲踞てきくばかり也はつ時雨  
ひとしぐれ五位の出て行藪根かな  
独言いふや時雨にとめた客  
しぐるゝや呼るを知てもどる駒  
干てある糶に日中のしぐれ哉  
しぐるゝや思ひくゝのもどり舟  
今切にて

一醒  
鶴明  
龍枝  
完牛

完牛  
幼鯉  
杏林  
々々

鶴明  
野乙  
岳丈  
一醒  
静嘉  
洋々

庭帆や時雨追風にひとはしり  
白米を鶏の餌にやる玄猪哉  
灯の際へおされて出たり御取越  
衽巻も縫て十夜のしたくかな  
いれてやる栗や十夜の引袋

庫裏はみな寝転である十夜哉  
部屋方の犬を背おうて十夜哉  
近みちの橋かけかへる十夜哉  
江の岸や氷ならしてのぼり汐  
蛸壺やつくねた形に薄ごほり  
こほりたる癖の直らず舟の綱

秋葉山

蓑の雨やがてつらゝと成にけり  
苔ながらつらゝになるや杉の雨  
から凍や水にかけひく草の鷲  
はなれたる馬おうてゆくかれ野哉  
枯野見や畑の人のふしん顔  
枯菊や花の時分のおとしもの

嵐牛  
仁風  
物外  
龍枝  
々々

芦角  
雷雪  
三牛  
桃寿  
桂堂  
々々

一笑  
静斎  
物外  
晴笠  
洋々  
春谷

日をゝもにむれる鴉や冬木立  
 道聞きたしほに折けり茶のつぼみ  
 大根引妻子のあとを荷に(ひ)けり  
 はね炭に寝た子いざらすひと間哉  
 松風に裾をふかるゝ襖ふすまかな  
 繕(う)た手際見せけり紙ぶすま  
 三畏老人と終日閑語  
 火かげんもぬるい同士のこたつ哉  
 灰ならず癖の付けり冬ごもり  
 子祭ねまつりや庭子やさしき茶の給仕  
 昼過ひるまや又雪らしき山のそら  
 鼻かのなくやふぶぶききのつり口  
 ゆきををれを起しおこくや水もらひ  
 一(注20)大疑下有二大悟一  
 夜の明て見れば芒むぎ雪女  
 のぼる日に煙るや岸の霜崩  
 葉はのもげて牛房うしむらのひけぬ寒ひやかな  
 ほし綿わたのひと簀すいにたらぬ寒ひやかな

晴 笠  
 鳳 嶺  
 可 楽  
 仁 風  
 桃 寿  
 三 牛  
 竹 明  
 可 楽  
 仁 風  
 得 岳  
 岳 丈  
 桃 寿  
 嵐 牛  
 静 嘉  
 雷 雪  
 平 台

木がらしや夜すがら吹て朝月夜  
 こがらしや夕やけさめぬ闇の空  
 宵月や蛙ひと声冬日より  
 往いた倍もゝつとも来るや鳥ちどり  
 朝浜や千鳥みつよつ声もなし  
 旅人の控てゐるや合せ鷹  
 をし来ぬも又ひとわびや夜の池  
 みそさゞいおはるゝ処とこへ来てはゐる  
 一(注21)驕者則忘、々者則忘一  
 養過やまひて撥はにかゝりぬみそさゞい  
 突とめた欲にちひさき鯨かな  
 二日月いつかくぢらは沈けり  
 麦蒔てしまつてもよき日和哉  
 見るうちも関せきやすき日(注22)や唐花  
 母親に喰たふりせずふぐと汁  
 約束たがへを違たがてくふや河豚汁ふぐと  
 すゝめたる人は見もせず葉喰  
 はじめから飽あたこゝちやくすり喰

知 碩  
 完 牛  
 鳳 嶺  
 春 谷  
 一 笑  
 物 外  
 幼 鯉  
 知 碩  
 貫 一  
 龍 枝  
 鶴 明  
 一 笑  
 仁 風  
 可 楽  
 完 牛  
 貫 一

(注23) 唐子をつれて歩行や寒念仏

表家おもやから人かりに来る師走哉

雁鴨(注24)のさやす師走の月夜かな

我垣間すむ煤濟かとして覗けり

立のぼるそばやの湯気や年(の)市

懸乞かはやのぞいの廁覗けりてかへり梟

白いほど梅咲にけりとしの春

富士

ついそこのころで見ると不二の山

夜も見ゆるまでに澄けり秋の不尽

ふじの山霞のとぎれくかな

笠雲あすや翌の長閑もみゆるふじ

眼をふさぎ、口を覆ふたる猿の画に

月花や猿にもおとる我ころ

布袋

人ごとに福引とらすちかひかな

身薬とおぼえて敷やはるの草

可楽

春谷

貫一

嵐牛

幼鯉

岳丈

洋々

春谷

々々

芦角

国女

平台

知碩

雷雪

おなじく川をわたる処

つり上る臍(注25)すりくくや雪解川

「身窮志逸(注26)」

うゑし田を又草とるも夫婦かな

夕月の涼してゝらを棹さざの先

朝寒やかしきに拾ふこぼれ米

回文

桃の酒しろしや白しけさのもゝ

松の戸や菊に見にくき宿のつま

長茎のむたいにいたむ野菊かな

ふいと喰くて味あじし仕舞しまうて鰻うなぎといふ

述懐

吾こゝろに似て爰こゝもうしとかきりくす

人待をりに

くるゝかと出ては見る也荻すゝき

「風入(注27)馬蹄リテ軽シ」

朝風や馬も青あせまをふむきほひ

恋

嵐牛

鶴明

芦角

平台

完牛

野乙

知碩

龍枝

野乙

野乙

平台

平台

嵐牛

嵐牛

嵐牛

鳴かはず水鶏うらめし門わたり

平台

〔三<sup>注28</sup>界不安、猶如火宅〕

鳩<sup>には</sup>の巢やたのむちからも根なし草

貫一

手枕も夢のゆるさぬひる寝かな

一醒

燃しさる楣<sup>ほた</sup>にも蟻<sup>ゆきき</sup>の行来かな

知碩

鶴

鶴啼や日すがら磯は小春<sup>こはるなご</sup>風

野乙

海原や鶴ひと声にかゞやく日

貫一

〔注29〕八丁繩手にて

つる鳴やすかし見るまで夜は明<sup>あや</sup>し

晴笠

〔注1〕枕の草紙：百九段に「殿上より梅の花みな散りたる

枝を、これはいかかと言ひたるに、云々」とある。

〔注2〕大竹氏：福田<sup>ふくで</sup>（磐田市）の大竹晴笠の此君園<sup>しくんえん</sup>には、

嵐牛や知石らが屢々参集し、俳席が持たれた。

〔注3〕寸善尺魔：格言。よいことは少しで、悪いことは沢

山<sup>み</sup>ありがちなこと。

〔注4〕千峰随雨暗：以下、晩唐の詩人温庭筠<sup>おんていこん</sup>の五言律詩「処士盧岵山居」〔温飛卿詩集〕卷下および「事文類聚前

集〕卷三十三「退隱部」所収〕による。

〔注5〕薩埵：薩埵峠は、富士山の眺望随一の地。

〔注6〕関宿より舟にて下る：江戸後期、夕方、境・関宿河

岸から乗船、江戸川を下り、新川・小名木川を経て日本

橋小網町に朝着く夜船があった。

〔注7〕郡内地：甲斐国の東部を郡内（群）は誤記）と呼

び、絹織物の特産地として知られた。

〔注8〕脱巾掛石壁：以下、李白の五言絶句「夏日山中」に

よる。「巾」は頭巾、「露頂」はむき出しの頭部。

〔注9〕有渡浜：うどはま。静岡市の久能山東麓、三保の松

原から南西に延びる浜。歌枕。

〔注10〕九能山おいしの間：久能山東照宮の「石の間」。本殿

と拝殿をつなぐ、一段低くなっている部屋。もと石の廊

下であったところからの呼称。

〔注11〕南方之強與：『嵐牛発句集』の（注67）参照。

〔注12〕独坐幽篁裡：以下、『唐詩選』所収、王維の五言絶句

「竹里館」の前半。

〔注13〕字音：漢字の発音。「悉曇」は梵字の字母、インドの

音声で、漢字の音韻学とむすびつき、我が国の五十音図

を成立させた。

(注14) 御難餅：日蓮が文永八年(三七)九月十二日、相模国竜の口で処刑されそうになったとき、刑場への途中、老婆が差し出した餅。この故事に因んで日蓮宗では、九月十二日、日蓮上人の像に餅を供える。

(注15) 居尻の御寺：掛川市北部で、大尾山(671m)の山頂下にある顕光寺。真言宗醍醐派。本尊は千手観音で、遠江国三十三霊場の十三番札所。遠州八坊の一つに数えられる修験道場。

(注16) 光明山：『そのまま集初編』の(注3)参照。

(注17) 筆草：カヤツリグサ科の多年草。弘法麦とも。海辺の砂地に生え、高さ一〇センチほど。

(注18) 今切：いまぎれ。浜名湖が、明応七年(四九八)の大地震で遠州灘とつながったと伝える決壊箇所。

(注19) 犬：原表記は「燠」の偏「火」を「犸」に替えた字で、享和三年(一八〇三)の『四声字林集韻』に「ドウノウ／イヌ／イカル」と読みが記される。「部屋方」は御殿女中が自費で雇って使った少女のことで、それを「お」犬ともいう(『日本国語大辞典』参照)。

(注20) 大疑下有大悟：『風牛発句集』の(注11)参照。

(注21) 驕者則怠、々者則忘：『古文精選今訳』などに「驕

則怠、怠則亡」とある。

(注22) 唐花：未詳。唐花草か。クワ科の蔓草で、多年草。ただし、晩夏から秋に開花。

(注23) 唐子：「からこ」をここでは「からのこ」と読ませる。中国の子供たちと同じような髪型・服装をした子供。とくに幕末から明治初期には、唐子遊びの絵が一般に浸透した。

(注24) さやす：「冴ゆ」の他動詞形。賑やかに騒がせる。

(注25) すり／＼：『自筆柿園発句集』も同様。『日本国語大辞典』二刷に「すれすれ」の訛りに「すりすり」「荅岐続」を挙げる。

(注26) 身窮志逸：『文選』卷五十六に収める潘岳の「楊荊州誄」中の「位賤道行、身窮志逸」に拠る。

(注27) 風入馬蹄軽：『唐詩選』所収、杜甫の五言律詩「房兵曹胡馬」中の「風入四蹄軽」によるが、直接は「風入馬蹄軽」と前書する蕪村の「木の下が蹄のかぜや散さくら」(『蕪村句集 前篇』所収)に拠っている。「馬蹄」は誤記でなく、蕪村の意識的な改変であろう。なお、嵐牛旧蔵書のなかに同句集を見出す。

(注28) 三界不安、猶如火宅：『法華経』譬喩品の「三界無

安、キコトホシ猶如「火宅」による。

(注29) 八丁繩手…浜松市南区東若林町にあった、長い直線の畦道をいう。

そのまま集 三編

【書誌】「題簽」「そのまゝ」。「書型・冊数」半紙本一冊。

「丁数」序二丁、本文二十八丁、計三十丁。「序」「そのまゝ集」と題し、「社中」と署名。「跋」なし。「奥」「安

政五戊午歳」。「所蔵者」寺田良毅氏及び鈴木健治氏。

【解題】柿園社中年次集の三編。柿に因んだ序につづき、四季・雑の順に発句を収め、奥に年記がある。「伊豆入湯記行」中の作は、職業上、遠くに遊ぶことの少なかった嵐牛には珍しい。

なお、序文は嵐牛の俳文集稿本『文章』（諸本）に「其まゝ集三編序 社中（に）替て作」と題して収録、ほぼ同文で、末尾に「安政五戊午のとし」との年記がある。

【翻刻】

そのまゝ集

梢、嵐山（注1）に近からずして、爰（注2）に独の柿ぬし有。いまだみ

づくしき若木どもを集て、いと念頃に土かひ養へども

はかぐしからずと、常に嘆息のみしたまひぬ。しかは

あれど、もとよりまめくしき質にしおはすれば、彼郭（注3）

橐駝（注4）が種樹（注5）にはやう替りて、且（注6）に顧ゆふべになで、頻

に茂からん事を欲するに、年（注7）ぎれもおほきながら、となり

かくなり、己がじゝなり出るをもてはやされつゝ、甘干（注8）、

樽ぬき、あるは串ざしと、さまぐくに心を尽し手をつく

されて、甘み渋みもさだかならぬをさへ撰（注9）（び）おかるゝ

を、例のことゝて、強（注10）にこひ得て、今年も又ひとゝぢに

かいつらぬる事にはなりぬ。さるうひくしきことにし

あれば、若是（注11）を味ひ見ん人ありとも、もとより老（注12）々（注13）文に

代（注14）かゆるの佳品にはあらざる事をことほる而已（注15）。

社中

春

あら壁に添る屏風やはなの春

平 台

たゞ広くおもふ計（注16）や四方（注17）の春

一 笑

かゞやきに鶴たちむかふ初日哉

晴 笠

はつ空にくばりまはるや鶴の声	知	碩	うめ咲やどの道往ても京へ出る	平	台
御降 <small>おさがり</small> やほしとおもふた田にあまる	嵐	牛	おせばあくとは気も付ず梅の木戸	千	影
蓬菜 <small>ほうさい</small> にならべてあるや古兜	雨	竹	梅さげた人うらやまし旅の空	一	笑
いねつむや封切てある長手紙	岳	丈	念入て梅見る人の無言かな	岱	中
いねつむや障子明れば雨の降	一	笑	ひと樹でも見らるゝものは柳哉	鶴	明
元腹 <small>まみえ</small> も目見も済てとし男	野	乙	曙のけしき柳にたちけり	耕	斎
よ所からも世話をいはれてとし男	得	岳	風のそふほど提て来る柳かな	知	碩
踏頃の低いふそくやとしをとこ	雨	竹	柳見 <small>(雲)</small> や雲ながらの預け傘	一	々
入海や帆のある方にはつ霞	四	山	ゆひあげし柳又地にとゞきけり	一	笑
<small>(注6)</small> ほつくとあらず相人 <small>あひて</small> もゝたねば、彼嵐			ゆふべく		
雪翁のつれづれにはいとまさりて	嵐	牛	遅かれとおもふ火 <small>(灯)</small> 見ゆる柳かな	嵐	牛
くひつみも岨まかせの庵かな	一	笑	黄鳥 <small>うみす</small> や往たかと思れば筐 <small>かぶた</small> がくれ	燕	居
人の日やたゞにぎはしき野の往来 <small>ゆきき</small>	柳	月	礫 <small>つがひ</small> かと思見るや氷のとける岸	々	々
前だれを入物にしてわかなくつみ	完	牛	昼頃になれば風たつ雪解哉	洋	々
隙 <small>(暇)</small> らしう見ゆるや在 <small>ざい</small> の齋 <small>さい</small> 過 <small>か</small>	莞	立	汲おけばすむ濁也ゆきげ水	平	台
不拍子や競ひかゝりてうつ齋	燕	居	来ると見し舟そのまゝに霞けり	杏	林
松引てそれなりそこら回りけり	其	常	<small>(注7)</small> 稻佐細江眺望	石	翠
引しあと見てゆかしがる小松哉			東風 <small>こち</small> ふくや有明月 <small>うらみ</small> を湖 <small>うみ</small> のうへ		

桶狭間(注8)

木瓜ほけさくやおせば水うく塚の苔

々

名護屋本願寺にて(注9)

どの樹ともなしに花ちる御堂かな

石翠

桑名渡海

かすむ日や昨日の事を舟の夢

々

山田(注10)に遊びける頃、桃山の酒楼にて杓(酌)と

り女の眠るを見て

撫上る前髪おもき柳かな

々

うらゝかや朝から見ゆる島の果

其常

糸遊や風に成日はさわがしき

桃寿

撥鳥はしらをつひうしなうて路みち(の)臺たい

燕居

欲のない目にかゝりけりふきのたう

均堂

今朝までも霜と見し野の胡蝶哉

野乙

吹れ来た(注12)けふらいもなし庭の蝶

鶴明

はつ午や数の鳥居をおされ行

貫一

初午や被かきにもれる杉の色

芦角

はる風の出よとこそぐる膝の下

均堂

帆を巻てみな浮舟やはるの風

得岳

石のけてながして見るや春(の)水

石翠

降よりも漏(る)音のしてはるの雨

一笑

絵馬堂へぬれてはひるやはるの雨

芦角

何となく火を(退)のく春の雨夜かな

秀齋

夜までも長くおぼえてはるの雨

燕居

春雨や友なつかしきひとり言

杏林

うかくとおりて仕舞やはるの山

石翠

頂はおぼろも澄てふじの山

雨竹

玄鳥つばくろに行ちがひけり旅もどり

莞立

今日(注13)らはと巢も釣て待乙鳥哉

春谷

かれが来るを見て農事をおこせば、彼は

農事をしれる鳥か、殊に子をも慈しみ、

人にも親まるゝは、あゝいつくしの此鳥や。

つばくらの糞捨くに行門田かな

雨竹

降事にしてゐる夜半よはや初かはづ

燕居

それと気のつけば又鳴かはづ哉

均堂

軒下に蛙きく夜や小手まくら

静嘉

水音や苔にすくんで鳴かはづ

雲うらの月しづか也啼かはづ

山の灯の夜々見えて鳴蛙

鳴はれた目かどするどき牡猫かな

飯せつく声も小にくしうかれ猫

客の座へ飛して見るや雀(の)子

こぼす手に又摘(み)てやる土筆かな

菜の花や日あしに付てまはる風

芽出しから富貴に見ゆる牡丹かな

苗代や先にしておく鳥おどし

舟棹のとまらぬ岸やあしの角

大あ川

川越の焚さしけぶるかすみかな

小よし田

鮮しめる音にさめけり駕の夢

後にはうぐひす鳴て清見寺

堀の内にて

藤棚や直に汲出す茶の飴

松和

野乙

松寿

雷雪

完牛

桃寿

均堂

燕居

可楽

三牛

莞立

国女

々々

々々

国女

大和が原

熊笹のいちめん白しはるの霜

待花や馬につけこむ下り酒

はつはなや昨日も越し山のみち

初花やいひわけたゝぬものわすれ

花見えて尻をふまるゝ草履かな

花見かといへば脇むく笑顔かな

披露して回るや花のこぼれ口

はなの雨何の覚悟もなかりけり

ちる花やむしり肴にひとり酒

踏しめてある岩たりや山ざくら

馬に鞍おけ

花咲と柴うり婆々のたより哉

無常

入相や鳥もきよろつく花ふゞき

安禅製ニ毒竜

花としり風とおもへば何もなし

昼近き空や弥生のめじか舟

鶴明

野乙

雷雪

岳丈

其常

三牛

晴笠

四山

静嘉

野乙

野乙

野乙

莞立

莞立

雷雪

雷雪

耕斎

訪先も留主がちなれどやよひかな

鳳嶺

松山のあとしさりする潮干かな

可楽

見たさまの事をしほ干のはなし哉

桃寿

ちりかゝる人や潮干も風に成

静嘉

寒食もよし此ごろの酒の味

芦角

おとし行角を見てゐるめじか哉

岱中

しる波沔潮干一見の道すがら

鳳嶺

東風ふくや出立せきたつ朝ぐもり

鳳嶺

のどかさや釣する先のかいつぶり

々

さくらの池

々

川骨に池もせまりて暮の春

々

御前崎

岩にゐる鶺も連にして潮干哉

々

浮しづみ瀬をながれ行椿かな

春谷

接骨木の咲や寒さのあともどり

岱中

蚊所や桃ちる宵を二つ三つ

々

雨後の日はつと当るやもゝの花

静齋

舟つくというておこすや桃の花

三牛

おくらるゝ駕にもならずつゝ山

平台

手にうけてゐて伐するやふぢの花

岱中

ほとゝぎすの落し文といふものゝ落ちり

岱中

たるを見て

桑つみの麓相らしさやむすび文

嵐牛

長春の花ほろつくやわかれ霜

莞立

霜除をのけたゆふべやわかれ霜

完牛

けしき見てゐればつく也春のかね

嵐牛

人にあなづらるゝもの

貫一

梟や春にほこりしとまり処

貫一

降たびに春を深める小雨かな

鶴明

夏をまつはなしの合や病上り

三牛

夏待や置処替る植木鉢

貫一

樹もうゑて夏待家のけしき哉

晴笠

夏まつや客の見に来る別座敷

虚庵

夏近きけしきぞ河岸の夜商ひ

石翠

夏ちかし声きれぐくに虻の啼

岳丈

古郷千里復万里

那得いなかん音書いんしょ托雁たくえん伝でん

ゆく春しゅんの頬ほにをしき旅寝りよ哉

夏

草踏くさふみてうぐひすのなく四月しがつ哉

ころもがへ昨日けふをとほくおもひけり

水音みづねももう時めくや更衣かへぎ

飯いよりもまた急いそにいふ裕あゆかな

舟ふねの出たとして巻ませけり青簾せいれん

この闇やみに此深霧ここのふかきやほとゝぎす

棚たなはしや聞きはづしたる不如帰ふじかへ

つゞけ鳴なして江えをこしぬ子規しき

江えをへだつ斧きりぎりすの光ひかりやほとゝぎす

蜀魂しやくこん月夜げつやながらの夜明よあけかな

どち向むかて往いたかひと声時鳥こゑときどり

秋葉山にて

麓ふもとには鶯啼うぐいすてほとゝぎす

卯うのはなは月夜げつやをくらく咲さにけり

莞立

岱中

々々

耕齋

静齋

山竹

春谷

鶴明

虚庵

耕齋

石翠

一笑

四山

々々

々々

陶すへものに葉はぬる日ひやけしの花はな

こぼれある神馬じんまの豆まめやわか楓かへ

葉はざくらや掃除はらひしかけて留主りゆうしゅの家いへ

あらひ場の只生ただうまぐさし若葉わかばかげ

川かわすぢのひと里さとはやきわか葉は哉

茂しげり樹きに親おやをはごくむ鴉からすかな

うこん桜

さびしさや春はるを昨日けふの花はなひと木き

(注26) 葛布くわふにて

滝たきの末すえ四月しがつのさくらながれけり

みじか夜よや人の眼まなこにつく庵いほりの灯ひ

幟かざに寝ねた自慢こゝろばなしや山家やまがもの者もの

丈はかりしたれた雨あめとてうける日傘ひがさかな

かせる気きで団扇あふぎのせおく床几とこざし哉

茨あざてから表うらえらむや花御堂はなごどう

てらくと日影ひかげにほふや花御堂はなごどう

ふた夜よめは灯あかりをさし出すや水鶏くひなきき聞き

ゆれるたび燃もえつく舟ふねの蚊遣かきかな

洋々

岳丈

晴笠

静齋

平台

くにめ

耕齋

耕齋

四山

貫一

莞立

山竹

々々

三牛

杏林

静嘉

桃寿

桃寿

立次第吹ちらさるゝ羽蟻かな

々

留主の戸にたてかけ行や植る竹

野乙

枝かはづ鳴ば水のも啼にけり

山竹

植やうも書てある也おくり竹

杏林

ぬれ笹に影ひく朝の螢かな

春谷

竹うゑて替たがりけり家の向

四山

伝言をしつゝ算る干鱧かな

芦角

晴てゆく雨のにほひや瓜ばたけ

晴笠

伊豆入湯記行の中

芦角

さし汐に親の付そふ浮巢かな

柳月

途中

嵐牛

からと聞ても覗たきうき巢哉

知碩

掛茶屋も軒のかをりの飡かな

嵐牛

蚤まけの朝湯の戸口たゝき梟

岱中

月か瀬を過れば、松が瀬もちかし。

嵐牛

捨に行心ちひさき毛むしかな

雷雪

里の名を聞ても涼し此あたり

嵐牛

はみ飽て毛虫のおつる小屋かな

完牛

田子大獵(漁)

嵐牛

垣ぬける智恵も早つくかの子哉

々

門並に松魚(灯)きる火や夜もすがら

々

(注30)ウテ「訪隠者不逢」

平

雲見嶽(注28)

々

もの申(まう)の声に出て来る鹿子かな

岱中

夏寒し雲の端ふむ巖つたひ

々

ぬあがる鯿(ぼら)のひかりや夏の月

国女

松崎藥一見(注29)いけす

々

草鞋(わらぢ)とく片かげもなしくもの嶺

桃寿

入梅(うめ)じほの濁もよせず鯛の紅

々

炎天(えんてん)や笹(ささ)に干あがる梅のつや

桃

葺立(かきだて)てにぎはしうなるあやめ哉

得岳

(注31)ノ「二万里晴江万里天」

雷

竹植て奇麗な机なほしけり

雷雪

青東風(あをこち)に一日見ゆる白帆かな

雷

うゑ過て小菽めきけり門の竹

々

夕立の雲まで降てしまひけり

岳丈

三日月や白雨すぎの田のそよぎ

千影

大洞院(注34)

「田畔枯苗皆闊沢 人間火宅頓清凉」

暑日や砂に羽ふるふ数の鳩

桃寿

夕立やかり着をかきすまひとり

完牛

暑さにもそまらぬものや水の音

雷雪

「勢如銀漢傾天塹」

夏と冬とのあらしひに

貫一

疾似雲帆過海門疾キコトテ 似ニ雲 帆ニ過ニ海 門ニ

寒さよりうれし暑は昼ばかり

平

ゆふだちや川からはしるはだか馬

静嘉

何につけかにつけすゞし草まくら

貫一

蓮の香や根のきれかゝる朝の霧

春谷

見なくした火の又見えて雨すゞし

四山

ひるがほやひと歙づゝに畑ほこり

完牛

台所へ来て涼しがる給仕かな

岱中

昼顔や網を日よけに舟大工

洋々

すゞしいというて出て行畑かな

山竹

くらき火や簀にかゝへし鶴のねぶり

千影

秋葉山にて仏法僧鳥の鳴をきゝて

三牛

焚立る篝にあせる新鶉かな

春谷

月すゞしことなる鳥を通夜の友

三牛

むし干に琴を来てふむ雀かな

静嘉

嘆くことのあるをりに

岳丈

打水や輿昇衆の身ごしらへ

杏林

つれづれやすゞしき月を待ばかり

平台

汗ぬぐひく／＼かけこむ出舟かな

野乙

昼寝した顔来てのぞく使かな

桃寿

汲ほすもたまるも早きしみづ哉

々々

ひる寝して起てこつそり帰けり

一笑

飼をしの頻にあがく暑かな

杏林

夏の夜や草にそよ／＼根なし風

耕斎

磯あれの居ついて暑し舟の中

杏林

魚をはむ鳥ひと群や夏げしき

耕斎

しら浜の暮ても白きあつさ哉

杏林

耕斎

夏ゆきの磯いそおもひくゝの往来ゆきまき哉

大森田甫

ものおぢをするふりもなし夏の鶴

水(注36)無月十二日、古今稀なる洪水にて、

水のたゝへる事五日六日

里々を島に見なして夏悲し

秋

草庵

はつ秋や庭掃せやるはゝき売

とりしまる鶏うぶけの産毛うぶげやけさの秋

草家くさやにも行灯あんどん見えてほしこよひ

ほし合あひや汐木拾しほぎうて夜もすがら

澄々すみすみて宵よから白しろし天あまの川

独ひとりごとこゝろにういて魂たままつり

更かるほど拍子うたのそろふをどり哉

後座ござは早朝はやあさざけになる踊おどかな

客きやくのゐるうちにとおもふひと葉は哉

々

々

知碩

野乙

杏林

貫一

芦角

春谷

野乙

晴笠

朝あさがほやいくら咲てもあかぬ花

刈かりとればちひさき株かぶの尾花おなかな

麦雀(注37)の先まへをかしみやみだれぶり

稲妻いなづまに岩端いわはまはる筏いかだかな

霧きりながら日の出見ひのゆるや海のうへ

秋暑あきあつし切きてはすつる真桑まぐさうり

おく露つゆやかざせばうとき隣となりの灯

市ひけ引ひてむし鳴町なりまちと成なりにけり

耳みみにつく我われあし音ねや虫むしえらみ

蕙かほおる拍子うたにつるゝいとゞかな

降ふるもやむも雨あめまた早はやし秋あきのせみ

誰たれためぞ機はたおりむしの終夜よしまつ

ほし草くさに蝻いなせほちくゝ天氣あまかな

飛と付つた形なりのあぶなきいなご哉

さびしさや初月はつげごろの竹たけの雨

初月はつげや川がは一ひとぱいに舟ふねのかげ

木きばなれの木兎うさぎ一声ひとこゑや初月はつげ夜

はつ月はつげや外そとから明ある窓(障子)さうじ

国女

三牛

知碩

山竹

山竹

莞立

春谷

可楽

岳丈

静嘉

桃寿

木がくれてひらくあかりや三日(の)月 嵐牛

竹つたふ単のかげや三日のつき 静嘉

鶴一羽横ぎり行や月の中 雷雪

出る月やおもはずしらず跡じさり 貫一

寝て起てよい月をがみ直しけり 三牛

名月や飼鳩よべばふはと来る 莞立

常よりも樹きの闇ふかしけふの月 四山

古戦場

月澄やむかしかなしき小松原 知碩

天竜川

ひと瀬こすうちやほのく十六夜 静嘉

有明や客ひそくと芋いもばたけ 洋々

残月やとく起てゐる漁いさぎむら 晴笠

残月や風にふかるゝ浜もどり 静嘉

花見(注38)の座ならば七兵衛、ともよびかけ

みんな

誰もみな同じ顔して月見かな 一笑

放しやる雀をあつで案じけり 岳丈

鶴鴿や尾をふるたびに日のちぢむ

下るかと見えしは影か月の雁

何気なき隣歩行とよりあるきや鳴しきの声

大磯にて

夕ぐれや鳴はたゝねど沢の音

入月の足もとにさす暴風のわきかな

入江まで泡立ってくるのわき哉

野狐の鳴てははしる野分かな

笠伏かさふせた際からすむや秋の水

捨鶏すてどりの声のみありて秋の山

夢に古人を見て

ひと声は鶴か夜すがら秋の雨

直道すえみちは深瀬也けりちる柳

よ所よの子が植たまゝ也鳳仙花

枯みまひ見舞いはるゝ松や蔦かづら

洲先(崎)かとおもふ夜更よのきぬた哉

にぎはしく盛もろや折敷せしきの今年米

夜鴉もひと声もらせ後(の)月

杏林

柳月

耕齋

雨竹

平台

柳月

完牛

知碩

三牛

芦角

得岳

莞立

山竹

松寿

平台

鶴明

鶴明

鶴明

また山に日はつるくやのちの月

空寒くおもふはじめや後(の)月

露霜やかけはづしする橋のうへ

露しぐれ夜は片よるこゝろかな

(注39) ひさまり御神事にまうでゝ

聞はしる神輿にそふや秋の声

館山寺にて

江にあまる江の曙や秋日より

雲ひとつなき青空や秋のくれ

塩竈をのぞく鴉や秋の暮

島までも澄わたる日やいわし引

霜踏し鹿さへ道の葉かな

蔓引ば垣も来さうや種ふくべ

末がれやよき日のあたる谷の家

わが影のさすもみじかし草もみぢ

(注40) 光明山奥院鏡巖

いはにてる日の入際や草黄葉

山寺

松和

耕斎

雨竹

嵐牛

完牛

洋々

杏林

雨竹

晴笠

貫一

千影

可楽

平台

石翠

暇乞する人もゐず夕もみぢ

九月晦日、二又石翠亭にて翁忌とりこし

秋をしむ夜を折からのしぐれ哉

嵐牛

冬

何となく薮ぬけて見る小春哉

釣舟のいくつも並ぶ小はるかな

朝やけや時雨侮る百舌の声

しぐるゝや鱸舟もどるひとさわぎ

引窓の一日くらきしぐれ哉

蟹が家の朝からけぶるしぐれ哉

海苔柴をさしてもどるや夕時雨

焚たほどわかぬとり温泉や夕時雨

しぐれねど空はくもりぬ翁の日

柿店の先に眼のつく十夜哉

する気でもなしにつひく冬籠

冬籠はじめひと日のながさかな

ものいはぬ日のおもしろし冬ごもり

洋々

洋々

嵐牛

平台

秀斎

嵐牛

松寿

松和

晴笠

鶴明

平台

定雍

くにめ

杏林

貫一

洋々

寝おくれて寒さを夢の巨燵かな  
 首出して舟都合きくこたつ哉  
 旅寝してふとんの着なし覚けり  
 夜を深く炭わる音や壁隣  
 炭俵とゞけがてらや里がよひ  
 朝はれや遠をらこち近わかる炭けぶり  
 槽はたひと夜誉て身のうへ語けり  
 ほたの主射た鳥提てもどりけり  
 初雪や御堂の軒の鳩一羽  
 はつ雪や文台ひける夜明方  
 つもる雪覗いて来ては寝酒かな  
 つもる雪降りけしき也島の山  
 けふも雪降りけしき也島の山  
 台所だいどや翌あすの雪はく人くばり  
 入山いりを見てつゝ立ぬ雪のしか  
 二階から支度して出る雪見哉  
 日当りへ出しておきけり雪仏  
 雪ふくや木の葉ごもりに鳴すゞめ  
 宿えらみする間に雪は止にけり

嵐牛 一笑 其常 々 春 谷 鶴 明 虚 庵 々 定 雍 知 碩 々 桃 寿 岳 丈 其 常 々 柳 月 静 嘉 四 山

「江山一色三千里 酒力消時正倚楼」  
(注42)  
 降かれて眼先になりぬ雪の山  
 常盤(注43)が落行かたに  
 ふりかゝる雪にたゆまぬ操かな  
 ぬれ衣ぎぬに撫やる雪の額かな  
 例(朝寝)のあさいに  
 起ぬ間にまろげられけり門の雪  
(注44)「玉と成て碎けんにはしかじ」とかや、聞  
 にさへいさぎよけれど、おろかなること  
 ろにはおもひもかけず。  
 雪霜や無事を手がらの古瓦  
 ふゞく夜や寝覚勝なる帛宿  
 臘月十五日、姥捨山に登りて  
 月のことというて田毎のゆき見かな  
 川中島  
 降つもる雪にもつよし枯木立  
 諏訪  
 鈴音のこほりにひゞく御池かな  
 々 々 可 楽 岳 丈 知 碩 平 台 嵐 牛 可 楽 々 可 楽 々

(注45) 岩水寺の岩屋にまうでゝ、真淵翁のこと  
ばをおかす。

つらゝいは昼もつらくく氷けり

(注46) 法多山中

拾ひ来る薪にまじる氷かな

(注47) 大くづれ

息ふくやつらゝを嚙ばしほからき

鳴尽す夜を聞あかす千鳥哉

月のさす方へ向けり浮寝鳥

暮際やひと声藪に冬の鴟(もす)

すぐな葉もなくて真直や水仙花

から風を握てもどるかれ野かな

すげもなく寝鳥のいかぬ冬木立

岨(さば)かけて広し小寺の冬こだち

三遠の境(注48)ほんざんなる本坂峠にて

吹かける木の葉や風の裏おもて

豊川

敷石や塵と見ゆるも霜の花

柿園うしに伴はれて、三牛庵(注49)に仮寝の折  
から

夜ばなしや霜置頃としりながら

吹よせた砂のかしらやけさの霜

ひと村がひと眼に見えて冬(の)月

ぎら付て寒し月夜の水の色

十年(じねん)枯のからつく朝の寒かな

日表に兀山(わつざん)ひとつ寒哉

方丈の咲ひ聞ゆる冬至哉

から風の薙(むしろ)めくるや寒ざらし

いふる火の側に斬(かき)むく親子哉

かき汁や雫ながらのつるし網

葱(ねぎ)じるや砂吹かゝる窓(障子)さうじ

古網(ふるあみ)にからげてはほす大根(だいこん)哉

(注50) 冠菜公(かむらぎ)曰、「酔後狂言、醒時悔(よめ)。」

亦酒をたつもをかしや鉢たゞき

灰汁(あぐがら)殻をちらして行ぬみそさゞい

閑窓

知 碩

松 和

洋 々

四 山

晴 笠

春 谷

石 翠

静 斎

虚 庵

々

石 翠

雨 竹

三 牛

虚 庵

々

ふい／＼とさす影せはしみそさざい

平台

懺悔

今しるや父母はわがぬくめ鳥

知碩

臘八やいつものに替る松のこゑ

定雍

上の間は春待ものに塞けり

得岳

身にしみる寒さも年の仕舞哉

国女

雑

くるゝ日に心もつかずふじの山

雨竹

(注51) 三日ころりてふ病にて身まかる人のおほ

かりける時

草鞋も藻屑もかけて松一本

芦角

安政五戊午歲

(注1) 嵐山：去來の「落柿舎記」（『本朝文選』所収）の句

「柿ぬしや木ずるはちかきあらし山」を踏まえる。

(注2) 郭橐駝：唐の柳宗元の「種樹郭橐駝伝」（『唐宋八家

文読本』ほか所収）に記される植木の名人。

(注3) 年ぎれ：年によつて果実が生らないこと。

(注4) 甘干・樽ぬき・串ざし：柿の実の皮をむいて干した

り、樽に漬けたり、串に刺して干し渋を抜いたもの。

(注5) 壹文：一貫文。錢貨で千文。金壹分。

(注6) ほつ／＼とあらず：『嵐牛発句集』の（注5）参照。

(注7) 稲佐細江：引佐細江。浜名湖の東北隅の入江。『万葉

集』卷十四の東歌以来の歌枕。

(注8) 桶狭間：織田信長が今川義元を破つたことで知られ

る古戦場のある地。豊明市栄町ほか諸説がある。

(注9) 名護屋本願寺：「東本願寺掛所」（真宗大谷派東別

院）と隣接する「西本願寺掛所」（西本願寺別院）、ともに

橘町（現、名古屋市中区橘と門前町）。

(注10) 山田：伊勢、外宮神前の町で、『伊勢参宮名所図会』

卷四には、「人家九千軒許り」とある。

(注11) 撥鳥：「撥（はぎ）」は『嵐牛発句集』の（注9）参照。

(注12) けぶらい：「気振り」に同じ。気配。素振り。

(注13) 今日ら…今日辺り。

(注14) 小よし田…小吉田(静岡市駿河区国吉田)。東海道の立場(休憩や馬継ぎをする場所)の酒屋で、長門鮭と称する小桶に漬けたちらし鮭を食べさせた。

(注15) 堀の内…遠江国小笠郡の村名。現在、菊川市堀之内。

(注16) 大和が原…未詳。

(注17) 岩だり…岩垂草。ただし、海岸の砂に生えるという

から、岩場に登るため垂らした綱などをいうか。

(注18) 馬に鞍おけ…「花咲かば、告げんといひし山里の、

く、使は来たり馬に鞍、云々」(謡曲「鞍馬天狗」)による。

(注19) 安禅制毒章…『唐詩選』卷三所収、王維の五言律詩

「香積寺に過る」の最終句。安らかに坐禅すれば、煩惱を

コントロールできる、の意。

(注20) めじか舟…めじかはソウダガツオ。駿東郡では、マ

グロの子をいい、その漁をする舟。

(注21) する波汚…『東海道名所図会』に「志留波磯、榛原

郡横洲賀と相良の間にあり。云々」と解説し、挿絵に「土人、しろはといふ」と書き込み、『万葉集』所収の山部赤人の歌を引く。

(注22) さくらの池…『嵐牛発句集』の(注73)参照。

(注23) ほとゝぎすの落し文…夏季、葉巻虫(ソウムシ科のオトシブミともいう)の作る筒状の葉を「ほととぎすの落し文」とか「サギの落し文」などという。「落し文」は江戸期の歳時記には見えず、作例も稀で、近代になつてから夏の季語とされた。

(注24) 人にあなづらるゝもの…日中目が利かない木菟を林中の止まり木に止まらせて置き、愚弄しに集まって来る小鳥を捕獲した。近世初期の『尤之双紙』下巻の十三「笑ふ物のしなじな」に「一、左繩。みづづくに小鳥」と記される。

(注25) 古郷千里復万里…出典未詳。胡国に幽囚された前漢の臣蘇武が、雁に手紙を託し、十九年を経て郷国に帰ることが出来た故事(『漢書』)による。

(注26) 葛布…かつぶ。森町葛布村。葛布の産地であるところからの地名。本宮山頂近くの葛布の滝を源流とする葛布川が流れる。

(注27) 月が瀬…『嵐牛発句集』の(注48)参照。

(注28) 雲見嶽…西伊豆、加茂郡松崎町雲見にある山。

(注29) 松崎…『嵐牛発句集』の(注43)参照。

- (注30) 訪隠者不逢：『嵐牛発句集』の(注7)参照。
- (注31) 万里晴江万里天：明代の書家傅山の『詩文手跡鑑賞 百科詞条』の七言詩軸に見えるが、出典未詳。
- (注32) 田畔枯苗皆闊沢：以下の対句、出典未詳。
- (注33) 勢如銀漢傾天塹：以下の七言対句は『西遊記』第四十五回に見える。
- (注34) 大洞院：森町橋にある曹洞宗の古刹。遠州三十三観音霊場二番札所。門前に森の石松の墓がある。
- (注35) 千邪不如一直：「千斜不如一直」とも(『仏門諺語摘要』)。
- (注36) 水無月十二日、云々：静岡県交通基盤部「太田川水系河川整備計画」に掲載される「太田川の災害史」によれば、安政五年(一八五)六月十二日、太田川の支流原野谷川の堤防が決壊、知碩の住む中野周辺は洪水となった。
- (注37) 麦雀：ムギガラ。麦稈(むぎがら・むぎわら)とんぼ。シオカラトンボの雌。
- (注38) 花見の座ならば七兵衛：芭蕉の発句「景清も花見の座には七兵衛」による。
- (注39) ひさまり御神事：比佐麻利祭。矢奈比売神社、通称見付天神の祭り。町中灯火を消した闇の中、神輿を奉じ

た裸の男たちが淡海国玉神社(総社)に向かつて疾走する。

- (注40) 光明山：『そのまま集初編』の(注3)参照。
- (注41) 石翠亭：石翠については「柿園門人録」参照。
- (注42) 江山一色三千里：以下、高子文の七言絶句「雪」の後半(『続新編分類諸家詩集』「天文」に所収)。「東洋画題綜覧」では「かうざんせきせつ 江山積雪」の題で詩が引かれ、「この画題の作、古来少からず、渡辺崋山にも名作がある」と解説される。
- (注43) 常盤：源義朝の愛妾。平治の乱で義朝が敗死したとき、今若・乙若・牛若の三児を擁し、雪中、大和国竜門の里に落ちる場面は画題として知られる。
- (注44) 玉と成て砕けんにはしかじ：『嵐牛発句集』の(注115)参照。
- (注45) 岩水寺：『嵐牛発句集』の(注21)参照。境内に岩窟「しづくの洞」があり、入口に真淵の歌碑「岩水のしづくの洞のつらら石いくつらつらの世をか経ぬらむ」がある。「つららい」は「氷柱石」(鍾乳石)の略であろう。
- (注46) 法多山中：法多山尊永寺。『そのまま集初編』の(注14)参照。

(注47) 大きくつれ：『そのまま集初編』の(注8) 参照。

(注48) 本坂峠：浜名湖の北を通る姫街道の、三河と遠江の  
国境にあった峠。

(注49) 三牛庵：この頃、三牛は新出(磐田市)に居住した。

(注50) 寇萊公：寇準こうしゆん。北宋の政治家で詩人。『増補和漢名  
数』所収「寇萊公六悔」の五番目に「醉発狂言、醒時悔」  
を挙げる。

(注51) 三日ころり：コレラのこと。安政五年(一八五八)の夏  
から秋にかけて全国的に流行した。句に「草鞋も……か  
けて」と詠んだのは、健康の象徴として仁王の門に大き  
な草鞋を掛ける風習があり、その連想からであろう。『柿  
園日記抄』慶応四年閏四月十日の記事及び(注)を参照  
のこと(321ページ)。

そのまま集 四編

【書誌】「題簽」「そのまゝ 三編」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序二丁、序詩一丁、本文三十四丁、計三十七丁。「序」柿園（嵐牛）。俳文集稿本『文章』所収のものには「酉年（文久元年・一八六一）冬」の年記がある。序詩は「文久紀元春三月／城東小隠／静寿山人（印）」。「奥」「安政六つちのとひつじのとし（一八五九）」。「刊記」なし。【備考】鈴木健治氏藏本と校合した。

【解題】安政六年（一八五九）の柿園一門の年次集。四季・雑に部立てし、春と夏の間には五吟歌仙一巻を収める。同巻は『俳諧どめ』（写43）にも収められ、それとの異同を7ポで傍記した。序詩や稿本『文章』所収の序の年記からすると、成立は文久元年冬で、刊行は翌年か。

【翻刻】  
（注1）  
 源とし頼朝臣のうたを、くゞつのうたひ回りしを羨て、

びは法師にさまぐのものとなせなとして、我うたをうたはせし好事かうずの僧正も、むかしおはせしとかや。此発句集は、こゝにひとむれの俳士たちの、花もみぢのあしたゆふべ、蝶鳥てふとりのはかなき風情の見すごしがたき折々、うたひ出せる鄙び言をしるし置るものなれば、くゞつうたふべき金玉にあらざることともよりにして、めくら法師にもとらせねば、又うたはるべき様もなし。よしかほどのものとなせたりとも、かゝる俚言のうたはるべきものかは。さるはしたなき言種ことばぐさを、斯冊子かまくらしだつものに物しつるはをこがましけれど、こはくゞつうたふをもまたず、警こぜにもものとなせず。又来む春秋、例の俳士達をつどへて、花もみぢのかけにたえず怠らず、うたひ遊ばせんよすがにとの仕業しわざにして、彼金玉と俚言とうたはせ樂ぶと、自みづかうたひたのしぶと、貴と賤とあめつちのへだてはあれど、うたひ樂処たのしみのいさゝか似似かよひよりたりとおもへば、こゝにひきしるしつ。

柿園

聞<sup>キ</sup>其<sup>ニ</sup>俛<sup>レ</sup>集<sup>ル</sup>刻<sup>ヲ</sup>成<sup>ス</sup>賦<sup>シテ</sup>之<sup>ヲ</sup>贈<sup>ラ</sup>焉

君<sup>ノ</sup>自<sup>ラ</sup>諱<sup>ム</sup>門<sup>ノ</sup>老<sup>シ</sup>謫<sup>シ</sup>仙<sup>ト</sup>

蕉<sup>ノ</sup>翁<sup>ノ</sup>余<sup>ノ</sup>韻<sup>ヲ</sup>当<sup>リ</sup>珍<sup>ク</sup>然<sup>ル</sup>

早<sup>ク</sup>知<sup>リ</sup>其<sup>ノ</sup>促<sup>ク</sup>一<sup>ニ</sup>新<sup>ク</sup>著<sup>ス</sup>

独<sup>リ</sup>執<sup>ル</sup>山<sup>ノ</sup>川<sup>ノ</sup>風<sup>ノ</sup>月<sup>ノ</sup>権<sup>一</sup>

右

文久紀元春三月

城東小隱

静寿山人 印

春

着<sup>キ</sup>重<sup>カ</sup>テ丸<sup>ク</sup>なる子<sup>ノ</sup>やはな<sup>ノ</sup>春

是<sup>ト</sup>いふおもひ出<sup>も</sup>な<sup>し</sup>やど<sup>の</sup>は<sup>る</sup>

玉<sup>多</sup>く書<sup>た</sup>る画

ことばにも眼<sup>に</sup>も余<sup>る</sup>や玉<sup>の</sup>春

雌<sup>鳥</sup>にもそ<sup>ゝ</sup>なか<sup>さ</sup>れ<sup>ず</sup>は<sup>つ</sup>八<sup>声</sup>

むつきは<sup>じ</sup>め、<sup>あ</sup>た<sup>ご</sup>の<sup>さ</sup>と<sup>荒</sup>鉏<sup>大明</sup>神

に<sup>ま</sup>う<sup>で</sup>けるに、<sup>鳥</sup>居<sup>も</sup>社<sup>祠</sup>も<sup>な</sup>く、<sup>只</sup>

巖<sup>上</sup>に賽<sup>銭</sup>箱<sup>を</sup>居<sup>たり</sup>。

いはほ吹<sup>風</sup>すが<sup>く</sup>し注<sup>連</sup>飾

太<sup>は</sup>しや一<sup>度</sup>に<sup>な</sup>るゝ持<sup>ご</sup>ゝる

御<sup>降</sup>や潤<sup>ひ</sup>見<sup>ゆる</sup>二<sup>葉</sup>麦

取<sup>ち</sup>らし有<sup>ても</sup>見<sup>よし</sup>年<sup>始</sup>物

ふり袖<sup>の</sup>長<sup>き</sup>を<sup>い</sup>もが着<sup>衣</sup>は<sup>じ</sup>め

一<sup>日</sup>づゝ立<sup>や</sup>た<sup>し</sup>か<sup>に</sup>三<sup>ヶ</sup>日

置<sup>床</sup>に<sup>し</sup>ま<sup>り</sup>の<sup>つ</sup>くや福<sup>寿</sup>草

松<sup>引</sup>の<sup>出</sup>立<sup>か</sup>ら<sup>し</sup>て<sup>酔</sup>に<sup>け</sup>り

は<sup>や</sup>し<sup>菜</sup>や<sup>年</sup>季<sup>か</sup>さ<sup>ね</sup>し<sup>寺</sup>男

つ<sup>み</sup>出<sup>し</sup>て<sup>霜</sup>ま<sup>け</sup>の<sup>止</sup>わ<sup>か</sup>な<sup>か</sup>な

子<sup>供</sup>等<sup>の</sup>耳<sup>に</sup>も<sup>入</sup>ぬ<sup>御</sup>忌<sup>の</sup>か<sup>ね</sup>

朝<sup>川</sup>や<sup>う</sup>め<sup>に</sup>む<sup>か</sup>う<sup>て</sup>歩<sup>行</sup>わ<sup>た</sup>り

う<sup>め</sup>折<sup>の</sup>さ<sup>そ</sup>く<sup>や</sup>ひ<sup>と</sup>の<sup>肩</sup>車

網<sup>代</sup>守<sup>顔</sup>も<sup>せ</sup>ぬ<sup>也</sup>う<sup>め</sup>の<sup>ぬ</sup>し

ぬ<sup>す</sup>ま<sup>る</sup>ゝ手<sup>の</sup>か<sup>げ</sup>さ<sup>す</sup>や<sup>梅</sup>に<sup>月</sup>

う<sup>め</sup>を<sup>折</sup>う<sup>ち</sup>は<sup>明</sup>置<sup>障</sup>子<sup>か</sup>な

雨竹

松溪

千影

三牛

龍枝

嵐牛

鶴明

椿谷

三牛

均堂

梅春

嵐牛

々々

知碩

野乙

涼雨  
雨好

邪魔なともおもはでくゞる柳かな	山竹	何処やらへ流れてゆきぬ浮ごほり	桃寿
青柳に風つゞまらぬ日和かな	秀山	鳥のかね長閑な風に聞えけり	虚庵
もたれものほし氣にのびる柳哉	平台	長閑さや古びたまゝのかけ簾	燕居
比良はかすみのおくにそびえ、城は湖中		家根茸の長閑ほめるやいかのぼり	然山
に出て閑なり。		のどかさに行気になるや浜びさし	杜逸
舟よせて我をものせよしゞみかき	然山	長閑さやゆるむ帆繩に帆のたれ	里桂
雨の日もうぐひすなくや篠ごもり	耕斎	養父入の暈てみするはかまかな	梅春
黄鳥 <small>うぐひす</small> や裾は波うつ磯の山	四山	墨付たのみですますや二日灸	敬山
夕東風に吹れて来るや貝ひろひ	燕居	二日灸山眉ひらけかゝりけり	芦角
朝東風や洲先の鶴のまたふえる	晴笠	門前の犬も尾をふる彼岸かな	々々
魚につく鳥むらがるや朝がすみ	敬山	行となく峠もすぎぬはるのつき	晴笠
かすむ山大かたまるく見ゆるなり	秀山	明るみにさはらぬ雲やはるの月	其常
小夜の中山にて		暮 <small>く</small> るかと思回す空や春のつき	三千丸
うみはたゞおもむきに見る霞かな	々々	駕立てゆれをさまるやはるの月	梅春
わかき人の身まかりけるに		鮎のぼる水音ちかし春の雪	雨好
消どきもをしめば早し庭のゆき	春谷	長雨や巢口に鳩のふくれ啼	松溪
雪達磨垣にもたれて崩れけり	平台	囀や松のみどりのかたなびき	里桂
凍どけの樋口にあさるかもめかな	貫一	きじ鳴や点頭 <small>うなづく</small> やうな石地藏	芦角

雉子鳴や松原ごしに見ゆる波

春谷

旅立の案内らしさや門のてふ

雨好

入舟のうら帆を見せぬきじの声

静嘉

ひとつ鳴ばひとつ止けり初かはづ

山竹

きじの鳴下に根の有ふもとかな

岱中

田四五枚先や蛙のうけこたへ

みがく

きじなくや赤う日のさす雨の中

龍枝

虻せはし乗かけ馬の右ひだり

松溪

ほろゝ打外に遠音のきゞす哉

椿谷

たよくとさゝわけ行や孕じか

桃寿

雉子鳴や跡になりたる火縄もち

みがく

此頃は眼にもかゝらずはらみ鹿

杜逸

秋葉山

雉子鳴やひと峰づゝに夜の明る

石翠

陽炎や荷うてもどる土のうへ

岳丈

呼る手へ来さうにするやすゞめの子

知碩

眼をふさげば(注5)十万億度、

一言

すゞめ子の育つや眼にも見ゆる程

岱中

めをひらけば今日只今

々々

子につれてともになるゝやすゞめの子

虚庵

陽炎や消るそばから又もゆる

敬山

客の座へ放して見るや雀の子

桃寿

雇人も酔てもどるや種おろし

山竹

乙鳥つばくろや巢立した氣に啼かはず

燕居

成ほどゝおもふ処なき接穂哉

山竹

雲に入鳥や日中に替るかぜ

里桂

あたりを見れど、乞べき人もをらざれど

山竹

引つるや雲に入までまぎれなき

一言

いかで一枝をとおもふまゝに、(注6)季下に冠

山竹

引をしむ鶴か小雨にぬれて立

燕居

をたゞさず」と有おそれもわすれて

石翠

行くもの明るきかたや揚雲雀

其常

ふと折た音に恥るやはつざくら

石翠

笠提るまでの雨間やあげ雲雀

石翠

朝起に花待こゝろ見られけり

貫一

はつはなやおもへばものゝいそがしき 四山

末女すゑむすめの病あつかりしも、ほどなく床払ひ

する今日に成て

初はなやあらしが止ば雨もなし 鶴明

天下泰平

酔ば寝る迄とろみけり花の酒 然山

松を見てゐる人もあり花の山 三千丸

葉に書

ひとすぢにゆけく花のつたひみち 梅春

よしの川に鮎釣わらべに、「のうく山の

花はいかゞ」と問ふに、「此頃の雨に名残

もなくちりはてぬ。今年ははな豊年にて、

三日四日前迄は此川原も花だらけにて雪

の如く也しを」と答ふ。野童とは見ゆれ

ども、そのこたへのいさゝか風骨有ば、

彼がことばを其俣に

二三日前は川原もはなだらけ 野乙

自他のけぢめもいかゞなれど、うち出た

るまゝにするす。

やど引の提灯くらしはなの中

花提た人のみ通る日ぐれかな

風呂を焚さわぎやはなの客主

（注7） 県居翁の靈社にまうづるに、へ身の春秋

も終つひの夕風、とよまれし事などきゝおき

ければ

ちる花やむかし仰げば袖さむき

ほろ酔をさましにもゝの花見哉

雨の峰をふくむ静や夕ざくら

いつ出来た家に桜を前うしろ

片寄て見ても居られぬさくら哉

くるゝともなくて蔭もつ桜かな

しみぐとはなにそひけり雨の月

ほかくくと夜の雨かわくさくらかな

出もよひて出れば桜のちる日かな

雲迄もうかれ歩行や花の暮

出るまでもつれのきまらず遅ざくら

々

素涼

龍枝

春谷

然山

然山

国女

鶴明

雨竹

三千丸

石翠

瑩

杜逸

岳丈

くに女

つや／＼と葉もひらきけりおそ桜  
 貝の音の先わけ入や順の峰  
 みね入や形もこゝろもひとそろひ  
 峰入や爺がはなしのとり声  
 みね入や情(情)一ぱいを法螺(ほら)のくち  
 ふさぐ炉も嬉し又をし朝(あさ)こゝろ  
 塞(ふさぐ)日のいつか来てゐる囲炉裏かな  
 ふさがむと離れては見るあろりかな  
 桃咲や町をはなれてひと構  
 竹馬にあれたる庭や桃のはな  
 もゝさくや都を出(いで)したの中  
 又留主をつかふは古し桃の主  
 二度目には折てもどるやふぢの花  
 何処からか来てあふれけり春の水  
 あゆ見ゆる川やてんでに歩行渡り  
 はる雨や留主へ来てゐる旅馴染  
 春雨や降ほどふらぬ揚りやう  
 つかぬかとおもふ日もあり春のかね

敬山 芦角 虚庵 石翠 然山 知碩 貫一 椿谷 国女 鶴明 椿谷 涼雨 雨竹 春谷 晴笠 春谷 其常 四山

桃もさくちも降くらしして、やう／＼天気  
 つゞきければ  
 春をしむ空に成けり昨日けふ  
 麦秋や雲よりうへの山日和  
 老を頻りにうぐひすのなく  
 切飯(きりめし)うる折敷(をしき)に広き柴敷て  
 みそこなうたる人に手をうつ  
 笛つゞみかゝへて月のふなあかり  
 青花つみは露もいとはず  
 山冷に巣こぼれ蜂のころ／＼と  
 ちよつとで済まぬ庫裏(くり)の上茨(つばき)  
替(推敲)  
 剛張(こはばり)し画の具の手塩そゝぐなり  
 少しの雨もさはる芭蕉布(ばせうふ)  
 隼(はやぶさ)の拳(こぶし)おろせば羽をのして  
 すゝきに丸い月の出かゝる  
(注8)  
 御謝(ごせ)(射)山の祭りはいつも蕎麦旅籠  
例の(推敲)  
 諸味(もろみ)にせよと袂(たもと)ひかゆる

嵐牛 石翠 鶴明 雨竹 耕斎 嵐牛 石翠 鶴明 雨竹 耕斎 鶴明 雨竹

機織が娘誰にも名の立て

わびる硯の欠はもうなし

あてにせぬ花も沢山見てもどり

愛興つきし籠のすゞめ子

適たままのぬくさものさはる病あがりつはる病づかれ

よんべの雨に道具屋も来ず

わやくくとばくち始る伊丹船

躰しげもぬかず広袖てを着る

いつはりと知て通ふもおもしろみ

たしなき鴨いを入る雑炊

皿ほどの雪かさらく降つのもり

出立(注9)にぎはふ経宗の葬

小拳こあひとりまでも吹する名古屋風かぜ

店熟は孰柿に尻もまはらず

釣捨(中)しまゝに月さすほたる籠

みむ(ん)なをどりに付て行けり

辻堂の時なしかねに眼を覚し

拵こしらへのいつか落やむ

雛ひな迄節句の過し御顔にて

茶山はじむるめひとのさしくり

ほくくとはなのかげふむ孕鹿

高み低みもおなじあたゝかのどかさ

夏

江の風に眠気やしなふ四月かな

時めくやさとも四月のさらし布

そこらから水汲そめる卯月かな

野のさまも見所出来る卯月かな

うみぞひの遠山くらき卯月哉

病後

おくれてもうれし着る日が初袷

絵馬さげて畑道ゆくやはつ袷

袷まで問あはせけりものまうで

おもふほど行処ゆきどころのなきあはせかな

はづれたる接穂引ぬく袷かな

谷の声雲井の声やほととぎす

鶴 明

雨 竹

耕 斎

筆

耕 斎

四 山

虚 庵

く に 女

松 寿

春 谷

石 翠

燕 居

四 山

々

鶴 明

鶴 明

姿まで見せて初音のほとゝぎす

々

秀山

釣上るうなぎの先や不如帰

芦角

卯のはなの夕あかりさす小庭かな  
葩はなびらにしまぬ雨ふるぼたにかな  
つ(円)ふら家のおほい在処ばとや茨の花

知碩

ほとゝぎすあととは只降夜雨哉

虚庵

中々に風も返してけしのはな

晴笠

蚕おこに目のはなされぬ夜や不如帰

松溪

ちるけしに今朝迄ながき手入かな

三千丸

明くらみする空癖やほとゝぎす

里桂

橋かけて通す案内やかきつばた

秀山

蜀魂なくや茶船の雨用意

々

和らかに若葉にうける小雨かな

龍枝

ほとゝぎす啼や嵐の月夜ざし

耕齋

むつかりと雨後の日当る若葉哉

国女

(注10)  
むかはせはしくおもひける折から、

柿園

鶯のすたり音高しわかばやま

春谷

うしがとぶらはれけるに

国女

山間やまあひや雨もわかばのいろに降

静嘉

噂してをればちらりと不如帰

無常

吹中にある静さや若葉山

梅春

昨日見し人もけむりぞ子規

晴笠

河かじか啼若葉の冷や鈴鹿越

々

魚店や銭ならべてもはへのよる

岳丈

東雲やわかばぬらして雲の行

松溪

いうてへる蚤ならねども語りけり

均堂

葉ざくらや一人長ゐの竹床几

平台

狩衣かりぎぬのたもとに光るほたるかな

静嘉

葉ざくらやけふは戸のあく谷の坊

龍枝

はしられぬほど顔へ来るほたる哉

松寿

端近う机置けりわか楓

涼雨

石山夜泊

野乙

漁火の川にも見ゆる茂りかな

四山

夜明ても蛍(大)おほきし湖うみのへり

野乙

昼もなく木兔なみづ遠きしげり哉

石翠

下闇や杖うる児の付て来る  
 筭や竹にはせねど伸したき  
すず篠の子や祢宜が鞠場の立ぐさり  
かるしゆん刈匂のみな過て有山の麦  
 麦秋の片づく日和続けり  
あすまう翌の旅人行や夏の月  
 夏の月入江のくちにしらみけり  
 淀川  
 夏の夜や船もさらくくとまらず  
(注11)「駒隙応<sub>レ</sub>堪<sub>レ</sub>惜 螢窓宜<sub>レ</sub>勉<sub>レ</sub>施」

其常 椿谷 瑩 山竹 桃寿 石翠 平台 野乙 知碩 三牛 芦角 虚庵 完牛 山竹 嵐牛 雪丸

晴る夜は常より晴て五月雨  
 火を打ば蛙の来るや五月雨  
(注12)さみだれや<sub>こま</sub>猫の舞羽の渋り出す  
 梅雨晴る声に也けり夕ひばり  
 瀬一ぱい尻水来るやねぶのはな  
 門川も汐の満干や楢のはな  
きつ剪てから重みのつくやゆりの花  
 生ぬるき露踏でゆく夏野かな  
まじ夏くさや鶏になじまぬ子飼きじ  
 石莖や机まであるかし座敷  
(注13)「万事不<sub>レ</sub>求<sub>二</sub>温飽<sub>一</sub>外 漫然清世二閑人」  
 閑里 々々 くにめ 素涼 雨好 其常 松寿 みがく 送雨 々々 山竹 晴笠 貫一 桃寿 敬山 平台 貫一

閑里 々々 くにめ 素涼 雨好 其常 松寿 みがく 送雨 々々 山竹 晴笠 貫一 桃寿 敬山 平台 貫一

冷酒をひと壺明てくひなき、	岳丈	おもき煩も一日二日とおこたりけるに、	
藪かげや鳴ぬくひなの尻高き	千影	日頃うるはしかりける友の、枕ちかく訪	
溝川や昼の水鶏のこそばしり	龍枝	はるゝ、そのおくり物にめでゝ	
鳴水鶏闇になる夜のはじめ哉	雪丸	すしの香に軽うもたげる頭かな	くに女
(注14) 人もいへばや、と有佐屋船中		水無月望ばかり、妻をうしなうて	
昼舟や人はいはねど鳴くひな	梅春	起ふしの幟にもかゝる泪かな	雨竹
さみだれいたく降つゞきて、原の谷川の		祇園会や立葉浮葉の日傘	松寿
洪水、家々の床をひたしゝも、夕つかた		炎天や歛立て有畑の中	敬山
は水落かゝりていささか心易かりければ		くもの峰見やる暈につかえけり	然山
流れ来た藻屑拾うて蚊遣かな	閑里	地ぼこりに風もよごれつ雲の峰	中葉
帷子をかけてやりけり子の寝顔	涼雨	挽ぬ樹も大鋸にゆるゝや雲の峰	みがく
船からも往来せられて夏ざしき	秀山	ふと浮て雌を追ふ鳩や青風	送雨
落葉ほどくひちらしけり柏もち	三千丸	泡を吹盪の魚や青あらし	敬山
上茨の裏白そよぐ氷室かな	々々	昼中や餌の出来て風かをる	芦角
月も日も梢までなり氷室山	然山	かぜかをる柳がくれのすだれかな	岳丈
負た子の手をさし出すや嘉定喰	里桂	夏の雨夕ぐれかけて降にけり	平台
干梅のつやくしさを西日かけ	松溪	夕立や瓜小家せまきひと頻り	千影
有限りふりならべけりひと夜ざけ	々々	暑さうななりや川原を歩行人	岳丈

〔注16〕  
「火雲相続千峰上」

ころがりて猫のくさはむ暑かなあつさ

すゞ風の眼にふれて来る浅茅かなあさち

すゞしさや岩にぬれ鶉の羽づくろひ

雨ふるふ毛いる涼しや牧の駒

涼風や見ゆるかぎりは絞り町

すゞかぜや笠の重石にたらぬ杖

〔注17〕  
気多川

朝涼や船底くゞる鮎のむれ

夕兒や湯肌かわかす椽の先

裸火のてかく見ゆる青田かな

沢瀉おろかや釣つるる魚の見えてゐる

いひ込（経緯）のいくたてもある蓮見かな

深霧の中からはすの夜明かな

花咲と見れば葎もおもしろし

今朝ははや塵に掃れて火取虫

手紙よむ鼻摺行や火とりむし

川狩のもどればしらむ東かな

里 桂

雪 丸

涼 雨

石 翠

静 嘉

雨 竹

燕 居

然 山

完 牛

其 常

三 牛

中 葉

知 碩

嵐 牛

芦 角

敬 山

まぐれては蟬の来るなり夜の灯よまと

瓜持て井をかりに来る真昼かな

客通すままでにしてあり夏座敷

とり回しして試（注18）る竹奴哉ちくぬ

昼寝する積り（注19）で着つくや片（注19）はたご

ひるねする処さへなきわが家かな

こしかけて足のはしゐる清水かな

ある人男子（注20）うませたる（注20）に（注20）珉（岷）

楚（楚）といふ事をおもひよせて

わく清水末の深さのおもはるゝ

形代（たしろ）や流して見れば風（風）のそふ

二日降雨と成けり秋隣

秋

鶏（鶏）のから巢やめけりけさの秋

撫上る髪もこぼれて今朝の秋

来る秋をしらせがましや鐘の声

はつ秋や何はともあれ笹のつゆ

杜 逸

三 牛

松 寿

中 葉

桃 寿

雨 竹

山 竹

江入（江）

中 葉

雨 好

山 竹

鶴 明

雨 竹

千 影

然 山

初秋とおもふ寝覚や身のしまり

中葉

鳴止としりつゝ覗く虫籠かな

桃寿

よき人に門掃れけりほし祭

平台

むしの声風過る夜と成にけり

閑里

あとからも遣ふ硯やほしの歌

嵐牛

秣まききる音にはなれてきりぐくす

里桂

嫁よめ入してわすれがちなり星の歌

瑩

秋の蚊のよそくしくもくらひけり

秀山

萩の花松をこぼるゝ日の暑し

静嘉

夜すがらや似よりし声を蟻けむみゝず

春谷

桐ひとは波もかぶらずながれ来る

其常

芋むしや雫ある葉へにじり出る

貫一

桐一葉ふたはといつかみなに成

均堂

よくみれば露も見時の有夜あ哉

三牛

葉の後は枝もこぼるゝ柳かな

嵐牛

明近し音のしてちる竹の露

静嘉

あと迄も露けき草の市場哉

岳丈

空ばかり風ふく露の夜明かな

素涼

蛩が火の見えがくれして萩の声

燕居

竹切の音からくゝと霧の中

龍枝

洪水(注21)に不作勝なる天竜川のほとりを過て

燕居

霧おりぬ内とせかする滝見哉

然山

萩よりもかなしき声や稗わらの殻

貫一

ついそこに畑打おとやきりの中

鶴明

芒ほどまねきはせねどをみなへし

みがく

稲妻や伽藍へもどる鳥の声

静嘉

『大和(注22)ものがたり』をよむ

みがく

秋あつし垣はむぐらの咲さすがれ

々々

どちらへもなびかでかなし女郎花

平台

おし返す程はづみ出すをどりかな

其常

野遊の帰るさ雨にあうて

晴笠

夜の明てあとかたもなし辻をどり

均堂

風なまはなや折おれし萩笠すゝきがさ

晴笠

来ぬといふ内や俄に盆わらをどり

杜逸

邪魔な火の藪やぶからもるやむし撰

三牛

とばかりや煙の形かたちも大文字

嵐牛

にぎやかにするほどさびし魂祭

脱替る羽織にのせておく扇

掃あとへ投やる秋のうちはかな

秋風や杭にとりつく水すまし

鶉遣の瘦顔ふくや秋のかぜ

秋風やすゝきくひ折る野良嵐

〔涼生一枕清〕

秋風や水簾のおくの水のいろ

三日月や窓の趣向のふつとつく

名月や茶を汲人もなき勝手

名月や蠶も出てはふ芝のうへ

名月やねずみのぬける船のまど

見返せば明鴉なりけふの月

残月やしぶく起て船上り

残月や一ぱいきりのわかれざけ

入際に又起出るや月の客

世にあらまほしき事

戸もさゝで寝る夜おほかれ月の秋

虚庵

々

千影

知碩

桃寿

松寿

四山

晴笠

秀山

涼雨

龍枝

四山

素涼

燕居

然山

々

権現御社にこもるかたのどももの吹笛か、き

こゆ

足柄の湖やきらくあきのつき

鶴明

〔对花吟月自由身〕

寝る人は寝せて月見るひとりかな

敬山

溝口其常子、こたびさがたき事の有て

武江におもむかれけるを見はやして、

出るにも入にも同じ、とよまれたる武蔵

野の有明見はづし玉ふな、

き鳥のすむ流にも必(ず)船うかべてよ、

と笠のうちに顔さし入て

このもしき旅寝や月もいくげしき

知碩

鶏頭やほこり払うて伐てやる

山竹

茸狩やいうた通りのからもどり

々

辛みつく手造酒やはつ紅葉

岳丈

初雁や湯肌をさます椽の先

素涼

雁啼や吹かけ雨に笠もなし

晴笠

可愛くもをしくも有や放し鳥

送雨

今も行さうに来て鳴玄鳥かな

乙鳥つばらや羽はをしごいては行をしみ

苦舟くまねや秋の雨夜のはなし声

月のもる雲くも脚し早し秋の雨

雨もりも秋の音也銅だらひ

高き日の峰つるくくや秋の山

こそくくと帛紙ひく夜寒かかな

風邪ひきと泊り合せし夜寒哉

朝寒や湖のあなたに低き月

椎茸しづのから木にせるや秋のくれ

(注25)レバ ヲ「送目江楼ノ上ニ」溶々トシテ水拍ツ天ヲ

ながめ出す島のけぶりや秋の暮

新蕎麦あきや向はぬ膳にひと称美

好すき不好すき聞きて仕立る柚味かな

西瓜くふ内にやみけり通り雨

顔なで酔ふり見る新酒哉

貫ふ日の折からもよき新酒かな

生壁に看板かる新酒かな

々

々

鶴明

杜逸

石翠

梅春

々

知碩

里桂

雨竹

桃寿

貫一

中葉

杜逸

然山

均堂

々

神事

幣持ぬさもちも色に出けりことしざげ

明方のしかやちらりと後かげ

鹿啼かやたらに高き夜の山

峰に立背骨の高し朝の鹿

しか鳴や頻りにおろす山の冷

後のひな立てさびしさまさりけり

きく酒や卑下した男先に酔ふ

ほどくに菊の香さそふ小雨かな

ひと徳利あさげ添る朝餉や十日きく

十日までつゞく日和やきくのはな

残ぎくや花にうつろふ灯の寒き

仕そこねたこにやく喰て十三夜

有あり処じこを不足にいふや櫛はもみぢ

川音も昨日にちがふ紅葉かな

滝迄は見る日のたらぬもみぢ哉

焚跡に早火の気なき黄葉哉

天井の画もかゞやくや夕紅葉

春谷

敬山

三千丸

々

雨好

送雨

石翠

四山

平台

秀山

野乙

三牛

梅春

完牛

雪丸

嵐牛

燕居

末うらがれや月の細りの眼にしみる

団栗どんぐりや水に落おこむ小くらがり

落稚しかつや呵あた人も拾ひろふひと

木の間の柿あひにつくく入日いかな

(注26)「貨悖ルトキハ而入者さかツテ亦悖さか而出ツ」

生次第なり殖ふゆるや柿の配あり先

古戦場

鼻はなよそれほど秋がさびしいか

秋深あきし鳩ねぐらの峙たかにもるゆふ日

冬隣風ふゆや木の葉の裏うらおもて

冬

十月(注27)や小松すいばやしの翠雀さいほ類あか赤

海苔柴うめを刈出かりだす山の小春こはるかな

藁積わらに鳥船とりふねかよふ小はるかな

ぐるりから起る時雨ときや三上山

しぐれては時ときにさわぐ鴉からかな

荷ににそうて馬走うまらするしぐれかな

雨竹

晴笠

均堂

涼雨

みかく

野乙

春谷

中葉

平台

桃寿

春谷

岳丈

梅春

里桂

降中に日ひのをがまれて時雨ときけり

しぐるゝや秋もかたづく野ののわら火

ばせを忌(注28)、終焉しゆげんの記きをよむ

今更いまに身みに答こたけり初はつしぐれ

霜しもふるひく束つかね真柴まかな

水霜みづしもや昨日きのうから来きる番ばんひ鳩

蟬せみや壁かべにはさまるしもの声こゑ

棚たなの火ひの歩行あるけばゆれるしも夜よかな

霜折しもやすゞめ啼立な瓦屋根わらやね

雀等すずめが踏ふならせけり霜しもばしら

明あわたる月つきより白しろし霜しもの千木ちぎ

木きがらしや岩いわに鼻はなつく手ておひ猪じ

凧たかや地方ちかたふくほど舞まぬ雲くも

こがらしや遠とほき友ともよぶ牧まきの駒こま

さゞ波なみに成なも本意ほんいなしうす氷こおり

降雨こもりは流ながれてもとの水みづかな

早はやうから起たて寒ふせがる隣となりかな

伝言でんごんをわすれてもどる寒ふせかな

涼雨

みかく

完牛

岳丈

其常

然山

秀山

里桂

素涼

平台

春谷

送雨

其常

山竹

々々

々々

々々

々々

立る戸に棲先はさむ寒かな

郊外

まだ明ぬ空にふじ見る寒かな

撥おうた鴨おひまはるさむさかな

一軒の店屋もひけて神の留主

鳩計お留主る顔のやしろ哉

御留主とは知つゝ百社まうでかな

いひ合す隣も有て冬がまへ

人を見て子の膝つゝむ囲炉裏かな

薙髪の人を祝す

画ても見せばや似合ふ丸頭巾

枯草の霜ふるひたつ小鳥かな

土居敷の杭のみ高し枯をばな

山茶花や朝冷のかぬ机の間

葛かれて幹のあらびぬ古榎

新宮の遷宮済て啼ちどり

吹かける波やちどりの朝屯

聞うともせぬ耳につく千鳥かな

雪丸

嵐牛

石翠

然山

石翠

虚庵

晴笠

嵐牛

平台

松和

万里

梅春

嵐牛

鶴明

松寿

其常

をし鳥の来さうな宵や水明り

落る日や浮寝静に並ぶ鴨

土もつや神迎日の水たまり

買を見てかうてもどるや子灯心

櫂や町の子供のかりたがる

櫂や踏よくなればひとに逢ふ

櫂の履やう案内をしへけり

ぬくくくと日の当りけり雪仏

並(び)たるまゝに暮けり雪の船

起出るや火も出来雪も降さたに

木の鳥の折ふし鳴てふゆの月

竹原や早う出てすむ冬(の)月

真夜中や只しんとして月冴る

鶯の鳴てとろけつ冬日和

袴着や日毎来る子を見違る

若い声して来るも有鉢たつき

後から見るかげ細しはちたつき

撰々て終風の日や大根引

四山

梅春

みがく

三牛

々々

三千丸

敬山

々々

万里

嵐牛

万里

野乙

送雨

々々

貫一

里桂

岳丈

石翠

ほし糶のうへにからく落葉哉

龍枝

麦蒔や鍬さへもてばつれて出る

均堂

山畑や木のはまじりの仕付麦(注29)

平台

叩き人に手柄ゆづりぬ納豆汁(注29)

松溪

水底の働き見たき海胤(注29)かな

雪丸

何もなき網とおもへば海胤かな

松寿

追風得て鱧舟はしる日和かな(注29)

秀山

もう寄と人の集るくぢらかな

杜逸

先立や夜興の犬の合点(注29)ぶり

然山

(注30) 王照(昭)君

聞人もなき音を鳴やぬくめ鳥

三千丸

夕風や冬田の鷺の立をしみ

涼雨

つゝじなど咲て過よき冬野かな(注31)

平台

亜墨利加漂流人を見て(注31)

貫一

文おくる雁もをらぬかふゆのいそ

雨竹

寒声や川をかぎりの行もどり

雨竹

椽の日にほれて長みや曆壳

みがく

試も稽古もいらぬ岡見かな

雨竹

済際に足音あらし鬼やらひ

三千丸

掛乞に恨がましきはなしかな

山竹

「足らざるをたるとす」、といふもをこが(注32)

ましき己が薄身(注32)は

かけとりや寢覚の指に折て待

千影

行としや市におさるゝ松葉壳

雪丸

雑

似た声のなくて聞よし仏法僧(注33)

完牛

安政六つちのと

ひつじのとし

(注1) 源とし頼朝臣：以下は源俊頼の『無名抄』の説話を

踏まえた文章で、「くゞつのうたひ回りし」歌は、「世の

中はうき身にそへるかげなれや思ひすつれどはなれざり

けり」(『堀河百首』ほか)。

(注2) 老謫仙：老仙人。

(注3) 璆然：響きが美しいこと。

- (注4) あたごのさと…浜松市天竜区上野・石神あたりの旧地名、阿多古。杉峠を南に越えた浜北区堀谷には荒鑑の神を祀る磐座いわくらがあり、現在は拝殿と鳥居が立つ。
- (注5) 十万億土…この世から西方の極楽浄土に行くまでにある無数の仏土。転じて極楽浄土をいう。
- (注6) 季下に冠をたゞさず…『文選』に見える格言で、嫌疑を受けるような振る舞いは慎め、との意。
- (注7) 県居翁の靈社…浜松市中区東伊場一丁目にある賀茂真淵あがたいを祭る県居神社。
- (注8) 御射山の祭り…諏訪神社の祭りで、七月二十七日にススキやカヤの穂で作った小屋、穂屋に籠もって神様を迎え、奉仕する。
- (注9) 経宗…読経よみよを主とする宗派。日蓮宗など。
- (注10) むかはせはしく…「迎はせ燥ほく」で、待望していることが実現しそうな情況。
- (注11) 駒隙こまひら応堪惜…以下、出典未詳。寸暇を惜しんで勉強に励め、の意。前書とともに句を書いた知碩自筆の半切りまくりが福田ふくだの大竹裕一宅に襲蔵される。知碩は明治六年、地元よこに開校された大鳥学校の授業生(教員)となるが、それ以前から近隣の児童を教導していたか。
- (注12) 狼の舞羽…天窓を開閉するために付けられた綱を通す滑車の様なものをコマといい、その綱を巻き取る十字形の枠をマイバ、マイノハという。
- (注13) 万事不求温飽外…以下は、張横渠の「土牀どじやう」(「聯珠詩格」所収)による。「土牀」はオンドルのこと、「温飽」は衣食に不足のないことをいう。
- (注14) 人もいへばや…芭蕉の「水鶏なくと人のいへばやさや泊り」(「有磯海」)による。
- (注15) 原の谷川…袋井市と磐田市の境界を流れる太田川の支流、原野谷川。安政五年(二八五八)の洪水については『そのまま集三編』の(注36)参照。
- (注16) 火雲相繞千峰上…出典未詳。「火雲」は夏の雲。
- (注17) 気多川…気田川。浜松市天竜区を流れる一級河川。天竜区小川で天竜川に合流する。鮎釣りで知られる。
- (注18) 竹奴…竹夫人に同じ。
- (注19) 片はたご…朝食か夕食か、一食だけの宿泊。
- (注20) 岷江入楚…岷山に発する岷江がはじめはわずかな流れだが、楚の辺りでは極めて深い流れとなること。黄山谷の詩句、「岷江初濫觴、入楚無底」による。
- (注21) 天竜川…崩れやすい中央構造線の山間部を流れ下る

ため、古来、暴れ川として恐れられた。この頃では天保

三年（一八三二）の洪水が被害甚大であった。

（注22）大和ものがたり：『大和物語』百四十七段に見える

菟原<sup>うない</sup>処女<sup>おとめ</sup>の伝説で、二人の男から求愛され、罪深さ故に

自ら命を絶つ。

（注23）出るにも入にも同じ：「出るにも入にもおなじ武蔵

野の尾花を分る秋の夜の月 法印能海」〔『玉葉和歌集』

雑一〕による。

（注24）髻と足とが赤き：『伊勢物語』の東下りで有名な、

主人公主従が隅田川を渡る場面を指す。

（注25）送目江楼上：以下、出典未詳。

（注26）貨悖而入者：『大学』を出典とする格言。収入が多

いときには、必ず出費も多くなる。

（注27）翠雀：翡翠<sup>かわせみ</sup>。

（注28）終焉の記：追悼集『枯尾華』（元禄七年・一六九四）所

収の其角著「芭蕉翁終焉記」。

（注29）仕付妻：仕付け<sup>しつけ</sup>は、種をまくこと。

（注30）王昭君：前漢の元帝の宮女。匈奴との親和政策のた

め匈奴の王、单于<sup>だんす</sup>の后として遣わされた。

（注31）亜墨利加漂流人：遠州灘での該当する具体的な事例

は未詳。

（注32）足らざるをたるとす：「足る事を知れば不足なし」

（『世俗俚諺集』）など類似の格言は多い。

（注33）仏法僧：ブツボウソウと鳴く鳥は木葉木菟<sup>このはづく</sup>で、学術

名「仏法僧」は別の鳥。ともに夏の季語。『そのまま集

三編』は夏の部に入れ（65ページ）、『柿園日記抄』慶応

三年四月二十三日にも、森の試雪からの情報として「五

月中頃、さかり鳴よしなり」（291ページ）の言と句を書き

留める。

そのまま集 五編

【書誌】「題簽」「其まゝ」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序一丁、本文三十二丁、計三十三丁。「序」「文久甲子（四年・一八六四）春 一庵塞馬」。「跋」なし。「刊記」なし。【備考】足立順司氏蔵本と校合。

【解題】柿園一門の年次発句集で、四季別に収める。嵐牛と同じ卓池門の先輩、三河足助の塞馬が序を寄せている。『そのまま集』には他門の作者の参加はほとんど見られないが、卓池亡き後、その遺句集の刊行や門派継承で協力した誼よしみもあって、とくに依頼したのであろう。なお、本編から各年編集という原則が一気に崩れるが、その事情は不明である。

【翻刻】

花は情の動く処にして求やすく、実は心のまことにして得がたし。なべて、もとむるに過れば榮耀えいようにいたり、亦

もとめざれば、卒然として只事也。今はたゞ流行にのみはしりて、不易の玄妙をしらざる斗省（注1）笈の輩多し。そを我盟友（注2）ほあふ朱筆とをつみの嵐牛、としごとくに一集を綴りて其俣集と名づく。こは過たるをはぶき、不おほ及せざるを棄て、花実の間をわたり、知足のこゝろをふくみて、その撰いたれり尽せり。嗚呼あこれや此、花も実もある柿ぞのゝ主なりけりと、そのまゝそのおもむきをはじめにするす。

（注3）  
文久甲子春

一庵 塞馬

春

元日や朝湯すませて昼になる	蒼古
元日の町ひつそりとくれにけり	三千丸 <small>みちまる</small>
元日や俄にめだつふるぶすま	然山
元日や吹てよきほど風もふく	素涼
元日とおもへば空もたゞならず	四山
元日やかはればかはるきのふ今日	均堂
知命の春をむかへて	
人の上をいうてゐる間に今朝（の）春	知碩

ゆるやかな声のはこびや初がらす

尺波

万才や最ひとつほしき柱数

均堂

二の声はやみをはなれてはつ鶉

閑里

舟にて伊勢へ詣る記行の中

若水をくむやはや澄人の顔

晴笠

荒井澳にて

舟もみな船そろへて初日(の)出

雨洗

江のかすみ海へ吹出す日和かな

素涼

御降や蛙までとは気も付ず

素涼

亀島近くこぎ行ほど、あしかの声の処々に聞えて、月は波上に見えかくれな

おさがりや下駄のよごるゝ足袋の紺

春谷

る頃

ふくわらや音のするほど敷ておく

知碩

東風吹や闇にみすかすあしか島

蛤にかはりてふとし雑煮箸

均堂

白はまや東風そよくと薄月夜

まだ起ぬ門へ付込はつ荷哉

蒼古

吹ば吹けしきにかすむ広野哉

門松や明家もなき町つゞき

一得

足なへの車も花にむけて行

輪かざりや吹ちりやすき懸処

みがく

目白等が吸からしたる野うめ哉

初夢や先あらましをひとはなし

桂翠

盛砂や風の継尾にひとさらへ

書ぞめや筆子の礼を請ながら

鶴明

山吹や流してかへすかり壘

初春や雪の鈴鹿もつれの有

春谷

こがれるて蚤もとらせず膝の猫

ゆるしても裏道はせぬ礼者かな

雨竹

蜷はふや水にのつとり移る雲

筋違に居る机も恵方かな

岳文

春風をうけてふり立赤熊哉

初東風や雪に濡たる松をふく

野乙

戸もわざとさゝぬ宵寝や鳴蛙

里ばなしゝて更しけり年をとこ

涼雨

山の井や沈（ん）だ蛙見えてゐる

梅 春

庵の戸もまだ明てあり夕がすみ

遠く往た留主とはみえずもゝの花

かゝりたる風落てある夜風哉

蒼 古

もゝの戸や留主かと呼べば猫の来る

今朝迄もなき川越ぬ雪解時ゆきげとき

三千丸

別れじとおもふ霜ふむ山路かな

串疵に汐ふく馬刀まてのよわり哉

貫 一

畑打のつれてもどるや野飼牛

銅網をぬけくかよふ巢鳥哉

きははるゝ処ところへかけるや鴉の巢

今朝は名の替る蚕こごのきげんかな

賀ス還曆ヲ

春の松二ばの色にかへりけり

雀子や床のあたりを飛ならひ

子娘の飼てみたがる蚕かな

若草や船は有のにかち渡り

ぬり畔あせの乾かわもやらず訝かへる

尺 波

鳴蛙ねこゑ寝転ころぶ頃ときになりなりにけり

雨 洗

かたよらぬまでをひがんのこゝろ哉

川越て手がらめかすやわかな摘

なの花や車（車）やへ行水はゞむ

凍どけや水盛なほす柱いし

巢放れの雀や声のくるゝまで

東風吹や棟上やね済し家根ねの幣ぬさ

雲に入鳥やゆふ日のもるゝあめ

声のあとうぐひす首をかたげゝり

閑 里

花に行朝やこゝろの先ばしり

己が家の能よすにはあらねど

万才のほめてくれけり家造り

豊川

見上るやいらかくの花ぐもり

はゞきめや二月の庵の朝じめり

塩がまやけぶりの上のひとかすみ

若もちやみてゐる人もとりはやし

柴の戸を明れば吹や春の風

四 山

暮るとていねつむ枕たゝきけり

送 雨

正月も墨のゆがみに立日数

松 夫

もたれものほしき広間や雨の花  
齒がためもいらぬ齡と成にけり

鶴 明

春のよや壁の穴からぬけ参

初午やかざる娘の縁遠き

山寺

しんくくと落込水や夜の花

眠い眼をさまして寝るや春の雨

素湯たぎる音や寝積枕もと

わすれ行すみれ植るや舟の中

花守の呵てまはる笑顔かな

ぬれた気の寝ても直らず春の雨

家聞て来る礼者あり睦月過

月はとく出し雲色やはるのよひ

鮎くみのあぶながるなり覗く人

つかひては手ぬるかりけり梅もらひ

散かゝるうめや蛙の出頭に

知 碩

春 谷

其 常

打くだき見るや種井の氷様

初花は見付し時の名なりけり

にくいほど鳴まはりけり花に鳥

春はこゝろの身にそはぬ哉

花といへば近し西山東山

尻嗅で牡のつき行や孕じか

池ひとつ残して沈む蛙かな

折らるゝかかげのゆらつく月の梅

わるいとも能ともしれず猫の中

樽の香の有酒くれつもゝの宿

雁風呂や汐風よける葎すだれ

いらぬ水まで汲でみる柳かな

駕の酔若草踏でわすれけり

吹井戸の音も静やおぼろづき

茶ばかりでおかれぬ客や梅もらひ

のどかさは何処の鐘やら聞えけり

供待をするうち降やはるの雪

灯のちらつくよひやつめにほふ

桃 寿

岱 中

雨 好

岳 丈

水 音

ねはん会（会）や参人（参）のつくかねの音

椿 谷

松並ぶ先からはこきかすみかな

花明り松にも持てくれにけり

常は眼のとゞかぬ鳥やいかのぼり

畑打のもどれば暮（暮）る山路哉

のどかさや煙ほかつく野火の跡

昼過や日永の顔の唯ひとり

雪の山かすみのおくに静なり

大空のはしづくに鳴かはづ哉

のどかにもあくる一日庭づくり

染汁の椽にかわくやもゝの花

天竜暮景

一瀬（瀬）こすうちやいつしか春の月

馬つれて出るつれも有子（有）日哉

鳴きじ（鳴）の傍（傍）からはしる兔かな

花守や腰を打々はなし行

案内者（案内）のかへるや梅に指さして

花くれて出（出）かし顔なり坊が妻

石 翠

山 竹

燕 居

朝月や柳にはかりのこるくま

舟着た音に鵜の立よかんかな

澄しとて月をほめれば冴かへる

着かざりて花にめだつや角力取

ひたくと音なき汐や春の月

重ね着もうす着もしよき弥生哉

のどかさや板間ころがる盆の音

人中へまたもそれ込はま矢哉

有かぎり見えつ畑のもゝの花

夜ざくらや雨そふ月のひとげしき

膳中や巢立（巣）つばめのこぼすちり

ちらくと散花（散）見ゆる小窓かな

今朝もまた桃の酒出すとめや哉

〔春風春水一時来（注5）〕

朝風やひたくよするうき水

梅がゝや行はゆかるゝやみのみち

初てふや水田の上を吹れゆく

蛙鳴あとは嵐にしらみけり

一 湖

秀 山

杜 逸

遠のけば水もけしきのやなぎ哉

均 堂

まだ角の生ぬ犢うしやもゝの花

龍 枝

暮かゝる野に人おほきやよひ哉

鳴かはづいつもの寝酒あましけり覺

山吹くみや汲くみて人ぬ水いづか一荷

松 寿

野に出て子日ごゝろの遊かな

すみれ野も有とて駕かをすゝめ覺

一 得

うぐひすに頭かしらもたげつ二日酔

朝々にかすむ江を汲くみ小家かな

うぐひすのひまつくるふやちゞみ炭

出替でがはりや泪ながらの部屋へしなへ

柱 翠

前(注6)に海うしろに山やきじの声

書写しやうてう性空上人、生身しやうじんの普賢ふけんぼさつを拜

み奉らん事を年としごろ念ねんじおはしけるを、

御仏おんぶつの教しよによりて、神崎かみさきの遊君あそびきみ(の)長

者もののもとに至るに、彼かの「さゝら波なみたつ」

の声こゑにほゐとげたまひて帰かへられしとかや。

己おのれ、いかなる随縁ずいゑん有てか、ある人にそゝ

なかされて、神崎にはあらぬ、此吉原に

一夜あそぶ。其どよみの中にさゝら波の

事ふとおもひ出して眼を閉、眼を開きみ

るに、(注)けしかる普賢ふけんぼさつ並びおはして、

さまゞの妄相まがらみをおこさせ玉はんとする

をかしさに

夜ざくらや人の情も八重ひとへ

中 葉

上野

能なしの蕙あやめふさげや花のかげ

浅草の花盛あさくさやいかにと人のそゝのかすを、

さががたき事有てひと日二日とおくれけ

るに

過る日はいうてかへらず散さくら

雪ふるひ置や床几とこざしに桜の枝

静 嘉

松まつひきや身みごしらへする芝の上

花の客一日雨あめにすわりけり

柳 月

もゝの花馬はなうまの唇くちびるならしけり

桜はらくちりけり風の吹だるみ

そよ／＼と風をこゝろのやなぎ哉

松引や小さけれども男の子

向て行方ゆくから来るや春の風

氏神詣

御扉も左右へさつと明の春

競はれて撰えらびにひく小松かな

朝寝とも留主ともしれずもゝの宿

雨だれの音に春ぞとおもひけり

物おもふこと無なりけり松のうち

焚付たきに白簪なをるや花のかげ

草の戸や一本有も遅おくから

春をしむこゝろは無なかてふと鳥

夏

端近はなぢう机こおきけりわか楓

夕ゆふやけや出いそこねてゐる雲の峰

一寸いちゆん来てすゞしくおもふ隣となかな

木蓮きれんのひとひらちりぬ昼ひるの鐘

千影

虚庵

座釣

嵐牛

岳丈

涼雨  
梅春

打水たきずに尾おをふり回まる家鴨あひる哉

木の下や夕立通ゆふだちす二三さん人

撫ならるゝ迄までに馴なたる鹿か児こ哉

杉深すぎふかしひらく扇あふぎも雲くもじめり

鶉うずらの首くびも退屈たいくつらしや五月ごがつ雨

伐きりてしる花はなの重おもみやかきつばた

葉はざくらや来きもせぬ人ひとを今日けふも待まち

空そらはまだひばりも上ある四月しがつかな

待日まちひには音ねもせぬなり氷こうり

峰みねを降雨ふるのけしきや夏なつの夕

葉はざくらやたまの山路さんじゆにすくむ股また

〔涼生一枕清〕

瓜うり冷ひやるうちを敷居しきいのまくら哉

〔八面疎櫺八面風〕

遠とほき水汲みづくみにやりけり更衣ころもがへ

〔半刻清閑値万金〕

膳たねにおく蓼れいにも風かぜや小酒こさけ盛さか

入梅いりうめやてふのひらつく水みづのうへ

蒼古

然山  
三千丸

晴笠

尺波

枯枝に二羽ならび並けり羽ぬけ鳥

日盛も過ぬ門田の藺あひのそよぎ

日の向にさせば裏吹日傘哉

夏籠げこもりや誰にてもあふ若目がね

川狩や戻る用意のなきかゞり

眼病中

呼声の勢ひにくし初松はつがつ魚

かよひ道明あけたれば来ぬかの子哉

朝起をして掛にけり青簾

寝てをれば鹿に嗅かかるゝ夏野哉

今日あす翌と入梅ゆも送るや借座敷

高椽たかえんや若葉から来る夜の冷

水鶏なく宿や潮さすひさく井戸

白雨ゆふだちのあとや葎つを出る小てふ

ある学生に申(し) おくる

叢くさむらやひとり伸出でてさく葵

霽もやわけてすゞし浜名の朝わたし

聞くひなわけて短き此一夜

雨洗

貫一

松夫

四山

送雨

鶴明

すゞしさや扇畳あふてひぢまくら

宵月の出いでてわかれけり印地打いんぢうち

(注9)  
通天

そよぐと風も見頃みころやわか楓

追れ来しかの子や親にあまへつく

釣たれば風もかよふや青すだれ

手のひらに物おいて呼かの子哉

灸居すゆるか(香)の遠く来るあつさ哉

蓮剪きりてゐれば池の名とはれけり

すゞ風の眼にふれて来る浅茅あさぢ哉

朝のけしゆれるとみれば吹にけり

田畑にも身にも葉ぞ夏の雨

「いかでほ句してよ、此盛をなとて唯  
にやは」と仁風君の引とゞめらるゝに

恥かしや牡丹にむけるひざ頭

往いて鳴て来て鳴宵のくひな哉

鹿の子や打たつぶた礫つぶを嗅てのく

入舟の土産配るや夏の月

座釣

送雨

鶴明

其常

春谷

知碩

富士丸

水音

雨竹

岳丈

雨好

雨好

すゞしさや計こぼせし酔の匂ひ

桃 寿

跨また(ぎ)こすやうな夜に成四月かな

麻かりのよごして行ぬ起ぬ門  
暑あつさにもなるれば馴なて海士が業わざ

均 堂

さゝすれば子の先に立日傘哉

椿 谷

植る田や日直る風の吹さそふ

炎天や羽をくひこぼす枝の鳶

燕 居

かゞり火の空に立夜やほととぎす  
雨後の日の頻しきりにつよしねぶの花

糸きれた鶴の来てゐるや夜明方

山 竹

夕立のはやかかゞりけり三笠山

洞の灯のひとつ邪魔なり靨ねらひがり

山 竹

「炎雲相続千峰上」

船頭のひるねの人を算へけり

山 竹

たけの子や根からほらねばものたらず

山 竹

葦(注10)麻草に土かぶせるや溝みぞ浚とらへ

山 竹

橙だいだいのころりと落るあつさかな  
湖うみくまや四月雲を鳥のなく

松 寿

返事したなりにまたねる昼寝哉

秀 山

門先やわかれをいへば水鶏なく鳴

くれた子の分も形代流しけり

杜 逸

朝市の魚あたらしき四月哉  
日まけ柚ゆの毎日落る梅雨ばいりゅう哉

「塞サシ耳ミミ如シ盗ヌス鈴スズ」

杜 逸

若桐のすらりと伸て五月雨

鳴せみをかくす心か児この袖

杜 逸

一色ひとしほが一畦ひとあぜづゝやけしの花

水無月の日の出気味よし海の上

野 乙

二つ宛づつ来る日は鳴なぬくひな哉

そこから日かけ移るや花はな標めし

野 乙

腰かけの一日ぬれて夏柳

降中にもるゝ日かけや茸かぶあやめ

野 乙

日傘ひがさそむけてはさす女かな

更衣あらみ勝手て歩ありてすわりけり

野 乙

江の島

けし切て挨拶もなくかへりけり

野 乙

中 柳 葉 月

中 柳 葉 月

静 嘉 其 常

魚はねる俎板きよし島の夏

朝比奈の切通しといふは、三良義秀の名

の残れるにや

世々経ともつきぬ巖や苔の花

六月やいひ出しもせぬ流行神

からといひながらものぞく浮巢哉

茂から鴉の追や木兎一羽

すゞしさや藪もれて来る経の声

心得た顔してふくや花御堂

雨ごひや降た噂も有ながら

白

瓜ひとつ白し茄子の籠の中

膝過る水あやぶみてあやめ刈

野店

くひ明て直にまくらやすしの箱

秋

早鳴や橋こすまでは見えし鹿

さゞ波のさそひ出しけり月の虜

御前崎

駒形や引まとめ行波の月

旅の夜や聞ゆるものは遠砧

初月や歩行てみれば人に逢

あら海に日は入はてぬ秋の風

ゆふべくく見る瘡つきぬあきの空

仲国

仲国

秋風や笛になほすむ月の色

人声や野分しづまる夜半過

蹴ごころの鞠にも出来て今朝の秋

初月や穂かげさびしき狗子草

木の間もる月や男鹿の歩行影

暗がりに夜田刈人のひとり哉

木(の)原に日のさし入や冬隣

鳴立た方に見付る野守かな

酒匂川とまれりと聞て小田原にやどる

梅春

梅春

然山

然山

尺波

尺波

雨洗

雨洗

素涼

貫一

聖靈も立によしなき泊哉

松夫

(注15) 大磯沢立庵を訪うて

草の戸や鳴はともあれ此ゆふべ

(注16) 道灌山

行先を取巻やうに秋の声

(注17) 吾妻の森

夕ぐれや蓮のみの飛音計

(注18) 東台

はくちりも楓さくらのもみぢ哉

(注18) ころりといふ病にて人多くなくなりける頃

此頃の人やまことに草の露

妻の兄頼に身まかりぬと、家族人たち

より文もて告おこしつるに驚て

旅に有我に亦この秋のくれ

菊咲や里は豊かな東ね藁

板の間にこぼれ胡粉や菊の花

青花のまた咲なほす残暑哉

(注19) 「赤壁の賦」をよむ

空にそふ心持のす也月の舟

「つれぐ草」をよむ

馬洗ふ声なつかしや芦の花

聞まじとする耳にすむいとゞ哉

稲妻や閉てゐる眼も待心

(注20) 二又、信康君の御旧跡を拝す

古き世の木立やしかも秋の色

(注21) 「蒼茫 黛色晴山曉」

空ももう果なき秋を山かづら

晴口の風や梢の鴟をふく

初月やほろく降の木間より

手渡しにせぬばかり也麻殻簪

残月や網をのがれし鷺四五羽

しどけなく酸漿の咲残暑哉

行秋や庵のすだれの片さがり

燕居が亡祖父因あれば、初盆会に詣ける

(注22) に、其仕へまつるさま、いと念頃也。「祭

る時は在がごとし」といへるも、こゝら

其常

春谷

知碩

ふじ丸

水音

ならんとひとりごちつゝ

玉棚に立てはきゆるけぶりかな

天高而氣清クシテ

すがれ頃谷一ぱいのもみぢ哉

風邪引も月額撫て今日のきく

ひやくくと乾の風や菊の花

更行や机の先の露しぐれ

をどり見の透間から夜の白みけり

尻に矢をのがるゝ猪や秋の風

宵迄は出ぬ気でゐたり盆踊

月あかし鶉鳴野の朝ぼらけ

放し鳥見てゐる森のからす哉

十六夜のほのめく磯や五位の声

水音の水にながるゝ鳴子哉

ひやくくと苔ふみ来ればもみぢ哉

灯にさはるや萩のあまり風

つゝ立て来雨見るや峰のしか

心得に成事もいふきく見哉

岳丈

雨好

岳丈

岱中

桃寿

〔注23〕「淡雲如レ幕、月如レ鉤」

島の灯をながめ出しけり初月夜

初秋や力のある戸のあまり

さし出た山を月見の上座哉

浦松や鳴ばからすも月の鳥

飛もせではねる音する蝨かな

十六夜やまたねは早きむかひ舟

稲妻や浴捨て湯に雨の降

日和山

何となく明るき海や秋日和

奈良

物くれた鹿とおもはず夜半声

松本村にて廓上人にわかる

提て立笠の重たし朝の露

大坂にて

名月やどちらへ往ても橋へ出る

錦帯橋

朝霧や連見失ふ橋のうへ

椿谷

燕居

山竹

菊咲や隣の爺らほめに来る

秀山

棚経や何の為にもならぬほど

龍枝

汲置ば冷たき水となりにけり

かまきりや何を相人に其いかり

月の出るやうすに成ぬ山の雲

秋暑し太蘭の花の咲こぼれ

(注24)  
しるはわたりにて

秋風や吹もよわらずくるゝまで

雁鳴やほのかに白きよるの山

石翠

かぎり有声とは見えず秋の蟬

娘をうしなうて

たのみにもせしかげながら散柳

寝ても秋覚ても秋ぞ露の袖

木の葉には交らぬ色やちる楓

初月やすこしはそよぐ小松原

一湖

はきものを捜す手もとや露明り

かり着したまゝにもどるや朝の月

水底にながれてゐるや昼の月

眼覚れば宵の処にきりぐゝす

草市のあと掃てゐる小僧哉

(注25)  
「半夜灯前十年事 一時随雨到心頭」

秋の暑さ扇のうへに消にけり

雨一夜声のつれあふいとゞ哉

野乙

おろすのが有てさわぐや磯の雁

大魚の波づらははしる残暑哉

野乙

梶の葉を書てはかくす娘哉

人声や芒にかたぐ夕月夜

均堂

蚊の通す朝かたびらや萩の花

見て回るうちに日の入る花野哉

均堂

吹て来る笛の近よるもみち哉

蓮のみの今飛さうに動きけり

蜻蛉の立ばへげるや壁の土

二三日はちらばりもせずわたり鳥

ちりをたくけぶりの先や三日の月

拾ふ氣のやめばおそろし栗の毬

釣するも月の出を待こゝろ哉

千影  
座釣

初雁や袂軽しとおもふあさ

嵐 牛

賛せよ(と) ある画は、(注26)ひとり法師の杖

笠持て鳴の行方見送りたてり。其法師の

こゝろに成て

やどなしの鳴にもおとるゆふべ哉

(注27)「尺もみじかき処有、寸も長き処有」

朝がほの咲さへまてばもどかしき

雨風にまけぬそぶりや女郎花

くにめ

冬

夕風や冬田の鷺の立をしみ

涼 雨

吹あれの後のさうぢや小春風

梅 春

凍どけや板橋わたる雁齒先(注28)

蒼 古

子供等に名を呼れけり鉢たゝき

蒼 古

放されしはづみの声かぬくめ鳥(注29)

三千丸

車井の響に年もはてにけり

三千丸

おし合たほど用もなしとの市

三千丸

麦蒔のかゝし束ねてもどりけり(注30)

三千丸

霜晴や凧上てゐる上総ぶね(注31)

ひろひての有迄待やとしの豆

まげられて白買にけり年の市

牛曳て邪魔がらるゝやとしの市

日のかげも寒し物なき畑つゞき

客のあと炭継たして話しけり

背を高くみする鯨の弱りかな

積上る藁や玄猪も過しさま(注32)

埋火や皆寝たあとの更しよき(注33)

十月や合ぬ時計もかけておく(注34)

「安心起ニ懈怠」

覚悟なき枕のほしきこたつ哉

柴おねやとしの尾らしき売言葉(注35)

「貧交」

相借家火鉢の火さへかりいらひ(注36)

日の入てちどりの浦となりにけり

洗濯のつくねたなりに氷けり

笹啼のきげんや地にも下るまで(注37)

然 山

尺 波

然 山

尺 波

然 山

尺 波

雨 洗

素 涼

松 夫

送 雨

其 常

其 常

其 常

春 谷

知 碩

知 碩

ふじ丸

ふじ丸

縫ものにあぶながりけり走り(炭)ずみ

水音

冬枯や戸口からなる桑ばたけ

松寿

行あうて懸乞はなす山路かな

水汲の井の鎖鳴らす寒さ哉

一得

浮島とすれ違ひよるくぢら哉

地車のずり込音やとしの市

射たはづの鳥落て来ぬしぐれ哉

冬の日の入端際立外山かな

桂翠

伊豆山の夕日たしかに冬至かな

試(ころも)にして其なりや冬(ごもり)

桂翠

枯声や夜はものゝ降音(ふる)のする

更るほど高き霜夜の時計かな

初冬の日かげ撫るや膝の上

山宮や神樂のあとの一さうぢ

我形(わがなづ)を木兔(つづ)さびしげや昼の枝

薄ぐれや時雨交りの山おろし

中葉

遠い気で寝れば来にけり鉢たゝき

一年の夢はさめけり初しぐれ

行先も見ぬ飛やうぞぬくめ鳥

(注31) 寛(ルハ)心(ニ) 応(ニ) 是(ニ) 酒(ナルベク)

麦蒔の昼から出るや漁村(いさりむら)

遣(ルハ)興(ヲ) 無(シ) 過(シ) 詩(ハニ)

目勝

汐引たあとのあやうし雪の芦

ふぐ汁や雪もしとく降出し

みがく

追風や頭巾かぶりて一走り

ひえ鳥の一声はづむしぐれ哉

雪踏だ足ほこくとぬくみけり

荷ふ道引た大根(だいこん)にふさぎけり

結うてゐる生笹垣(いけささかき)や初しぐれ

おつるかとゆすつてみるや冬椿

ちよろくと兎のかけやもちむしろ

持とげぬほどに冷たき生海崩(なまなこ)哉

大雪や日のくるゝやら鳴すゞめ

砂道の歩(あちく)行心も小春かな

寝た人のうへからあたるほど火哉

たゝむには薄団(薄)を広くおもひけり

均堂

大むれに退た跡にもちどり哉

ふみなれぬ蛆そばやつゝじのかへり咲

人込ひしこみをすれく行や柴竹莞

「もみむしろ引いれよ、わらつみてよ、

とのゝしる声の聞えけるに

隣には雨なり庵の初しぐれ

浅漬の箸に移らぬかをりかな

木兔かみうや昼は耳さへうときふり

打たまゝ今朝も有也庵の豆

国子

嵐牛

(注1) 斗簪：つまらない人。

(注2) とをつみ：塞馬書留の序の草稿には「遠つみ」とある

(深津三郎編『板倉塞馬全集』)。底本は朱筆で「とほ

つあふみ」と訂正。

(注3) 文久甲子春：塞馬書留の序の草稿には年記なく、前

後の書留記事から前年文久三年冬の執筆と判断される。

(注4) 春はこゝろの身にそはぬ哉：「花さかりよもの山べ

にあくがれて春は心の身にそはぬかな 藤原公衡朝臣」

(前書略、『千載和歌集』巻一・春上)。

(注5) 春風春水一時来：白居易著『白氏文集』巻二十八所

収七言絶句「府西池」の結句。

(注6) 性空上人：生身の菩薩を拝みたいと念じていた書写

山の性空上人は、夢のお告げに従って神崎かみざきの遊君の長者

のところへ出掛け、歌舞を見守っていると遊君が白象に

乗った普賢菩薩に化身し、上人を濟度した。「さゝら波た

つ」は長者が唄う乱拍子の一節(『十訓抄』三ノ十五)。

(注7) 涼生一枕清：『そのまま集 四編』秋の部にも同じ前

書(題)が見える(87ページ)。

(注8) 疎櫓そろ：連子れんじの間隔がまばらな窓。風通しがよい。

(注9) 通天：紅葉の名所、京都東福寺境内にある通天橋辺

りの楓の種類名をいう。

(注10) 葦麻草あしあし：苧麻草。「花」及び「刈る」は、夏の季語。

(注11) 塞耳如盜鈴さいじりくとうりやう：中国の格言、「耳ヲ掩おほイテ鈴ヲ偷ぬすムガ如

シ」(『古今名諺』)による。

(注12) 炎雲相繞千峰上：『そのまま集 四編』に同じ前書が

見え、「火雲」と小異がある。『四編』(注16) 参照。

(注13) 張翰ちやうかん蓴鱸そんりゆう：以下、『蒙求』の「張翰敵意」陶潜たうせん婦去」

による。張翰は役人として洛陽にいたが、秋風に郷里の

魚菜をなつかしみ、故国呉に帰った。陶潜こと淵明は俸

給のために腰を折ることを潔しとせず、「帰去来辞」を賦して郷里の田園に帰り住んだ。

(注14) 仲国：源仲国。高倉天皇の寵愛を受けながら、平清盛に憎まれて嵯峨野に隠れ住んだ小督を琴の音をたよりに探し出す逸話で知られる。笛の名手(『平家物語』)。

(注15) 鳴立庵：「三夕」の和歌の一つとして有名な「心なき身にもあはれは知られけり鳴立つ沢の秋の夕ぐれ 僧西行」(『新古今集』巻四、秋上)が詠まれた大磯、鳴立沢の畔りに築かれた草庵。元禄期に行脚俳人大淀三千風が創設、はじめ秋暮亭と称した。明和期に白井鳥酔が再興、鳴立庵と改称、以後、代々俳人が庵主となり、文久の頃は十代目の島田立宇が庵主であった。

(注16) 道灌山：江戸の日暮里にある。江戸に城を構えた太田道灌が砦を築いたところと伝え、寛永寺のある上野台地(後出句の前書では「東台」と表現)から西へ続く台地上で眺望が利き、江戸郊外の行楽地となっていた。

(注17) 吾妻の森：東京都墨田区立花にある吾妻権現社(現在、吾妻神社)の森。広大なことで知られ、「吾妻森碑」が建てられている。

(注18) ころり：『そのまま集三編』の(注51)参照。

(注19) 赤壁の賦：北宋の蘇軾作の前後二編からなる有名な賦。呉の孫権と蜀の劉備の連合軍が魏の曹操の水軍を破った戦いを懐古した作だが、実際は赤鼻山を古戦場の赤壁と誤って詠んでいる。

(注20) 信康：信康は徳川家康の長男で、織田信長の娘徳姫を妻とした。姫が姑と不和で、父信長に手紙で武田方とも通じているなどと母子を悪口、信康は二俣城で自害させられ、その廟が城下の清瀧寺にある。

(注21) 蒼茫黛色晴山暁：浜松市の方広寺に、山岡鉄舟が詩を揮毫した六曲の屏風があり、その七言六句の内の第五句に見える。出典未詳。

(注22) 祭る時は在がごとし：「神ヲ祭ルコト、神ノ在ガ如クス」(『論語』)による。

(注23) 淡雲如暮月如鉤：宋代の詩人、白玉蟾の七言律詩「悲秋」の第八句。

(注24) しるはわたり：『そのまま集三編』の(注21)参照。

(注25) 半夜灯前十年事：以下、『三体詩』に見える杜荀鶴の詩「旅懐」による。ただし、「一時随雨」は「一時和雨」と異同がある。

(注26) ひとり法師：『嵐牛発句集』の(注78)および本編

の(注15) 参照。

(注27) 尺もみじかき処有：「尺有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>短、寸有<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>長」(『古今名諺』、原典「楚辞」)。

(注28) 雁齒<sup>がんし</sup>：雁木におなじ。船着場の階段状になつたところ。

(注29) 安心起懈怠：信仰上、安心を得ると、懈怠(なまけ)心が生じる。

(注30) 貧交：『嵐牛発句集』の(注49) 参照。

(注31) 寛心応是酒：以下、杜甫の五言律詩「可<sub>レ</sub>惜<sup>をしむべし</sup>」による。ただし、二句目の「無」は「莫」が正しい。

そのまま集 六編

【書誌】「題簽」其俱集 六編。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序一丁、本文三十一丁、計三十二丁。「柱刻」なし。「序」「明治四未年 水音識」。「跋」なし。「刊記」なし。「袋題」藤枝市郷土博物館蔵の青島流翠手沢本は袋付きで、表の枠の中に「そのまゝしふ／六編／柿園社中」と摺られる。

【解題】柿園一門最後の年次集で、吉田の蓬宇、名古屋の章和各一句など例外も僅かに含む。序に「明治四未年の年記があり、「今年も例のしふめくもの」と述べているが、世情のためか各年刊行の原則は大幅に崩れている。四季別に部立てし、巻末二丁に発句を追加する。

なお、編集のため句稿を作者・季別に書留めて朱地点を掛けた『其まゝ書ぬき』が伝存、それによると句の採択率は低く、添削して載せている例も二、三ある。水音宛嵐牛書簡（「嵐牛書簡集」所収、水音宛書簡①）によれ

ば、版下浄書は水音の筆で、編集を手伝ってもらった縁でまだ若い（二十九歳）水音に序も書かせたのである。翻刻に当たり『其まゝ書ぬき』との句形の異同を傍記し、依拠した校合本を（ ）入りで「書ぬき」と記した。

【翻刻】

花の春ごとひらき、鳥の暁ごとにさへづる、皆造化のおのづからにして、見るまゝきくまゝにあはれなるふしはそひぬめり。されば、柿園に遊べる友どち、其あはれさの折にふれたるすさみ言を、今年も例のしふめくものとはなしぬれど、見る眼きく耳の珍しからぬをいかにかはせむ。桜に梅が香を匂はせ、（注）ちどり衛に鶴の毛衣をかるのたく工むれば、只よくもあしくも有のまゝなるぞ此集のおもむき也ける。

明治四未年

水音識

春

夜はよくも明ずほちく／＼花の露

嵐牛

椽に出てゐれば貰ひぬはなの枝

さかづきを紙につゝむやはなもどり

遊<sup>フ(注リ)</sup>丹霞楼<sup>ニ</sup>

あけぼのをいはぬもにくし花の主

見ふるした花や小雨に見てまはる

はなに来てものしり顔ぞ古くさき

笹からもそよぎ出しけり花の塵

机から引ぱり出してはな見かな

弁当に大寺かりる花見かな

はなのかげさして汲よき夜水哉

上臈<sup>じやうらふ</sup>のうかれあるきや花の山

ちるはなの中なり駒の高嘶<sup>たかばひ</sup>

工風<sup>くふう</sup>して杯おくや花むしろ

はたぐとたつは鳩なり明の花<sup>あけ</sup>

水に火をけしてもどるや花の山

振あるく袂<sup>たもと</sup>の軽しはなの山

水いろもかはるや花の下ながれ

大粒にしむや羽織にはなの雨

ふじ満<sup>まろ</sup>

雪香

水音

尺波

習静

其常

秋江

阿笠

珍種

試雪

楽水

九如

琴雅

砂白

湖山

洗我

雪香

にくからぬ自慢やいほの初桜

木兔<sup>みみづ</sup>も啼やさくらの朝月夜

霽<sup>もや</sup>くさき風のふくなり遅ざくら

むつまじき隣も持て花のはる

船頭の衣着<sup>きぬ</sup>ぶくれてはなの春

半百<sup>なんひゃく</sup>に垂<sup>なん</sup>とする春を迎ふ

はつとりや両の手にをる己がとし

どこまでも空の声也初がらす

ひとこゑは嗚<sup>なぐさ</sup>はなれやはつ鳥

成人の児<sup>こ</sup>をほめぐの御慶<sup>ごけい</sup>哉

暮あひに酔て又来る年始かな

万歳や常の名をよぶとまりやど

広々としたこゝろ也蔵<sup>くら</sup>びらき

買人はさうじの内<sup>(障子)</sup>やけさう文

かど松の外は世間の往来<sup>ゆきき</sup>哉

追咲<sup>おひざき</sup>もなき盛なり福寿草

手をのべて駕<sup>かじ</sup>からもつむ齋<sup>なづな</sup>かな

梅が香にかどのとれたる月夜かな

故目勝

阿笠

石清

秋江

均堂

雨竹

秋江

龍枝

鶴明

婦童

試雪

習静

山江

旦雅

岳丈

婦童

嵐牛

窓ははや暮けり梅はよく匂ふ 一圭

雪のふるけしきに似たりうめに月 湖洲

来て見れば月はなれし野梅哉 土口

偷盜戒(注3) 貫一

をる梅やおもはぬ雪の顔に散る 均堂

うめ散るやさうじにほつと釜の湯気 且雅

焚おろす麦めしの香や梅の花 素涼

梅くさくなるやさうじの透間より 春谷

うめ咲て誰をもとほす座しき哉 閑窓

散ぐちや梅もかをりのさわがしき 水音

汐ぬきに綱うつ岸のやなぎ哉 素水

あゝおもしろの柳やな、眠を催し、ねぶ

りをさます、嗟面白の柳やな、酔をすゝ

め、ゑひを醒す、あゝおもしろの柳やな

人の来ぬ日はまれくの柳哉 故山竹

行水に影ふき流すやなぎかな 何羨

柿園即事

街道の夕暮は此やなぎかな 羽洲

大事(削)とるそぎやうでなき接穂哉 椿谷

ころびしもはなしになるや蕨(わらび)をり 均堂

菜の花や坂なき道を(終日書ぬき)小一日 松寿

美濃路途 為舟

あを麦の果は雪也多度伊吹 清風

春の草風呂しき敷て休けり 阿笠

伯夷(注4) 叔斉 鶴明

草摘(つん)だあとさへ道のしをり哉 尺樹

曆さへ種おろしよし日和よし 流翠

もゝちるや参宮むかひのかざり馬 野風

山焼やとむる工風もしておいて 梅明

うぐひすの雪にさらせし初音哉 蒼古

黄鳥(きうきう)やきれいにいけし蕨(わらび)の火 砂白

ころくとなくや田螺(たにし)の水はなれ 柳月

うつくしき空へきえゆく小蝶かな

水のうへすりゆくてふのきげん哉

わかい衆はまだ聞つけずはつ蛙

たしかにはあらねどたしか初蛙  
 家うつりをいはうたよひのかはづ哉  
 鳴倦たやうに只うくかはづ哉  
 あひたがる猫たてこむるひと間哉  
 いそ山やしほぐもりしてきじの声  
 おほゐ川  
 おりつかで上るひばり(注5)や白川原しろがはら  
 夜の蜂やともしうつれば巢がうごく  
 落角おとしのやひろうた人の当てる  
 さ々なみのさまにちらつく小鮎哉  
 正月の炭火にぬききひと間哉  
 淡雪やぬれくあるく海雲もづくうり  
 用もなく隙もなくたつ(書ぬき)睦月哉  
 ひまもなく用もなくたつ睦月哉  
 柴垣のおほき在所の雪間哉  
 解る音雨よりぬくし軒の雪  
 こそくと音して笹の雪解哉  
 初午やつき山ながら九折つづらせり  
 霞まんとしてはあらしの干渉かな

積山 島桂 為舟 竹醉 古勢 章和 得水 梅城 得水 杜堂 一圭 素凉 水音 梅裡 小竹 醉雨 静処

うきあしに浮橋越るかすみかな  
 たぶくと畔あぜこす水や風霞む  
 舟つけてあがる広野のかすみかな  
 田にあまるおとは左右や春の水  
 ぬるむほどぬるみて清しいほの水  
 流るゝはながれてあとのこほりけり  
 今朝ははや鳥も来てうく氷哉  
 傘さした舟も下るやはるの川  
 わたる気になれば橋あり春の川  
 高い気もなくのぼるやはるの山  
 しほにする砂も見て来る日永かな  
 春の夜や膝を崩せば人の来る  
 見るこゝろつきし空よりはるの月  
 おぼろ月樹にもかゝらず消にけり  
(注6)  
 見付台  
 さはるものなきが不尽ふじなり春の空  
 やぶ入いりの覗のぞくやうばが家  
 藪やぶいりや友を待せてひとときぬた

春谷 知碩 尺波 湖洲 亀命 玉見 水音 喜齋 小竹 椿谷 何羨 雨竹 尺波 平台 章和 知碩 湖洲

二月やくだくしくも年始状はつごのしじょう

習静

霏をふく風や間近き杜宇もや ほととぎす

春谷

ひな市にあふやむかしの娘づれ

なほき

手枕の肱のばしけりほととぎす

円友

〔身に替るもの無りけり〕とは昔も今も(注7)

嵐牛

新宅やはへの殖たも愛度がるふえ めぐた

岳丈

雛ひとつそふや捨児の枕もとすてこ

均堂

たちさわぐうへをふわくく螢哉

積山

主づかぬ店のひなも節句かなぬし

梅城

あしらひに風のふく夜のほたる哉

松里

やはらかに来てすわる也雛の前

雪香

気もつかで草かる先やとほし鴨

琴雅

草もちやむしろのあとの裏おもて

得水

かるの子や舟あつかへば又一羽

玉見

沢山にないが味なり蓬もちよもぎ

九如

泉水を出て行く朝のくひな哉

士口

切くちに手際も見えてくさの餅きり

梅城

をりくは雨も来る夜の水鶏哉

龜命

化粧した手つだひ出たり草のもち

竹醉

朝晴やくひなこそく藪かせぎ

之碩

ほろくくに酔て汐干のもどりかな

習静

くらがりや螢とぶ瀬をかちわたり

然山

折角の日をふられけり西行忌

玉見

たふれ木の切口のぞくかの子哉

草雨

さげにつけ茶につけ春を、しみけり

竹雨

鹿の子や撫て呉れば寝て見するなで くれ

雪竹

川ぞひや近よるなつの風がふく(牡丹)

杜水

山にすむものとも見えぬかの子かな

雨竹

ぼたにまで咲せて春のくれにけり

喜齋

得手勝手向たふたつや臺むい ひきがへ

玉見

夏

きくときはふた夜も三夜も時鳥

晴笠

川がりやひるのおもいれ皆ちがふ(注8)

然山

五峰庵即事

垣草もいろよきころの新茶哉  
 ひきよする硯かわきぬ夏ざくら  
 はれしとて明るさうじ(障子)や若かへで  
 ぬれいろは日にも乾かぬわか葉哉  
 巢ばなれの鳥の寒がる若葉哉  
 つゆをふるわかばの雨や朝しぼし  
 橋づたひゆくも座しきや杜若かきつばた  
 一八いちぼの屋根にもさくやふもと町  
 はざくらやまだ暮ぬ灯ひのいほ(庵)につく  
 葉桜やぬれたまゝある竹床几  
 すこしでも桶一ぱいの蓴ぬなほかな  
 そよ／＼とかぜも根のなき早苗かな  
 若竹のしなへに馴し雀かな  
 ほち／＼としろき夜明や菱の花  
 竹うゑしゆふべは月も待れけり  
 掖ねぶさくやぬれ手ぬぐひにたかる蛸ぶゆ  
 朝虹に日よりそこねし掖の花  
 砂はらやまばらな麦のかりおくれ

水音 石清 琴雅 松里 一勢 水巖 葛谷 文外 梅春 松寿 松寿 なほき 松寿 尺樹 秋山 秀山 知碩 梅春 一勢

京入まの先見まものなり軒あやめ  
 ひるがほや筏をおりるあなご釣  
 間ぢかくになくて見頃や蓮の花  
 ひる顔や馬の口とりうまに酔ふ  
 枯葉より外にもなし苔の花  
 となりから手紙もそへてけしもらひ  
 ひるぶねや手に持てみて瓜冷す  
 鯨くじらうりを河末(馳)はして出舟かな  
 はさまりし柳のひくや青すだれ  
 清水汲てよい衆のはひるいほり哉  
 待かねる時分に來たり氷うり  
 声わかきうぐひすきくや苔清水  
 石とればすこし流るゝ清水哉  
 柚が家は庭をながるゝしみづ哉  
 暮かけて黄鳥うぐいすなくや五月雨  
 火のきえた火鉢いたき抱てさつき雨  
 降々といふもひさしや皐月雨  
 棚橋の草に沈むやさつき雨

水巖 梅明 完牛 送雨 一勢 丸山 貫一 古勢 駿嘉 嵐牛 為舟 十湖 惟石 晴山 雨石 なほき 柳月 砂白

旅泊

往いて遊トリぶ知ち己おのもなし五月雨

夕風ゆふかぜやしばらく入梅つゆめの晴はを吹か

白雨ゆふぐさやふねへ移うつらぬ小荷せうか駄馬だば

軒のきかればあるじもどりぬ夏の雨

涼すずしさやひざに敷敷こむ青松葉

浅茅あさち生なや眼まなこにもふれ来る風涼かぜし

朝涼あさずきや遣やうて見たみたき筆ふでごゝろ

郊外

草鞋わらじの和わらぐほどや夏の露

風かぜそよぐ月つきは幟かざまでとゞきけり

又また天窓あたま打うた不足ふそくやふねのかや

生醉なまやせつかく釣つた幟かざの外

夏座なつざしきあるじと見みゆる人もなし

二階にがいからふうわりもどす扇あふぎかな

炎天えんてんやありのこぼるゝ古榎こえの

ひつそりとした間覗まのぞけば夏書なつがき哉

おのれが貧ひしきに、妬ねたき心の有あにはあら

ざれども、(注9)我わがさへこゝろ二つ有あけり、  
と昔人もよまれたれば、もしくはあるに

や我はしらねど

眼まなこにふれてあつしとなりの瓦わらぶき

蕨わづなどそよぎて暑あつし裸山

秋

さまぐくに月つきとりなすや雲くもひと夜

見る念ねんも降ふながしけり月の雨

ひざ組くみにはなしも出来きて月の客

庭掃にわはらてゐる間まや竹たけに三日さんじつの月

蚊かみひとつもかげさすつきの暈かげかな

暁あけぼのの雨あめにあひけり月見つきみぶね

むつくりと出でかゝる月つきや松林しょうりん

あと先の争まじひもなし月見つきみ舟

名月なづきや植うて見たみたきは松しょうひと木

名月なづきやふけて音ねする松しょうの露

かゝりてもはなれてもよしまつ月の

平 台

石 清

花 月

嵐 牛

蕭 風

旦 雅

九 如

為 舟

晴 笠

然 山

貫 一

尺 樹

其 常

蒼 古

清 風

尺 波

水 音

水 音

水 音

知 碩

送 雨

晴 笠

夢 南

清 風

丹 峰

春 園

雨 石

眺 江

駿 嘉

雲けした風のふく也月の松

柿園即事

はつ月と出れば夕やけ計也ばかり

三日月の祭してありすゞみ台

秋もはやあちらむきなり十六夜

不知宵や待ばまたるゝ酒の爛いざよひ

玉浦眺望注10

いざよひの闇に出はるや伊豆の岬さき

三日たてば朧のある八月かな

秋たつや歯ぎれ気味よき漬茄子つひなすび

鶏も露をひろうてけさの秋

箸紙もあらたまりけり今朝の秋

秋たつや慰らしき朝蚊遣なぐさめ

眠うなるころが大事ぞ星祭

目葉の利きた朝なり初あらし

〔注11〕 処きにありて生をたつことは非なし、と

古人も哀がりしを

おくり火の戻に網の夜干かな

長風

素涼

葛谷

水音

楽水

水音

楽水

坦々

嵐牛

ふじ満

蓬宇

月彦

一圭

其常

素溪

と

岳丈

岳丈

をどり子の親よせつけぬ出立哉

貫ふ名ををかしがりけり鬼辻づまひ

白浜や何もなけれど露の朝

つゆの音聞くまでぞ夜の静なる

詠史

注12 福原は露の玉しく都かな

あさはかな蜘蛛の巣にまでけさの露

皆露に成て消しか明の星

根のきれる霧ふきこむや谷の町

霧と見るうちに吹まく日和かな

秋かぜやもろく成たる松の皮

あき風や蓋ふたのこぼるゝうるしまけ

朝さむや乳ちにくゞりこむ犬の声

あさ寒や箒にかゝるいぼむしり

注13 佐倉の御祭過るころその御社に詣で、

の池をさしのぞきて

嘘さむやから櫃びつひとつ吹れるる

うそ寒し夜雨の芒書ぬきにさはる傘笠

春園

可応

素涼

十湖

嵐牛

雨石

嵐牛

雨石

穎川

完牛

晴笠

晴笠

可応

晴笠

か

か

雨竹

富松里春

〔注14共〕「秋水与長天一色」、といふことを

おほぞらにゆづらぬ色や秋の水  
 濁らして見ればにごるやあきの水  
 初しほや橋の裏おすかゝりぶね  
 酌とりにひき居られて今年酒  
 宿の児を抱てもどるやすまひ取  
 おきるころに成て眠たき夜長哉  
 箒とるまでの手ひまや秋の暮  
 見えかくれする追門の火やあきのくれ  
 いつまでもふじは見えつゝ秋の暮  
 蛩が家のあからさまなり秋のくれ  
 垣なりにくぼむ葎やあきの霜  
 いなづまや湖へ落こむ鳥一羽  
 筆とれば一日立けり秋のあめ  
 両の手にのせて見するや桐ひと葉  
 朝がほや女づくりの寺小性  
 もらひ来し西瓜捨たき途中哉  
 柿うりや寺へ貢もすまぬうち

顯川 知碩 青水 水巖 青水 雨竹 尺波 湖洲 平台 拳文 玉見 静岸 晴山 簫風 然山 貫一 雲眠

ひつそりと夜は明にけり萩に月  
 今朝見れば何ごともなし荻の声  
 雨聞て出れば月夜のばせを哉  
 ことし米焚て貧しきいはひ哉  
 雀麦注16やそれと見るまで只の草  
 実をもたぬ秋軽げなる尾花哉  
 かげも最う秋ぞ入江の夕柳  
 乱れねばならぬ姿の芒かな  
 汐けぶりなびくむかふのすゝき哉  
 釣ざをに逃馬とめる芒かな  
 〔注17〕「林間煖酒焚紅葉」  
 たく人も紅葉してゐる木の間哉  
 寝はぐれの鳥の来てゐるもみぢかな  
 うそぐらき滝にひと樹の紅葉かな  
 御堂へもさすやもみぢの夕あかり  
 からりつと夜の雨上る紅葉哉  
数寄屋之文書ぬき  
 わび人の露路をつたひて  
 竹椽たぐえや色ながら散る鳶ひと葉

花月 珍種 顯川 茶烟 旭齋 月彦 半醉 可応 丹峰 顯川 ふじ満 之碩 露碩 竹雨 湖山 其常

きく畑に日向ひなたとられぬ裏うらすまひ

遊びよきころ也日なり菊の花

着せ綿わたをはづせば白しきくの花

きくしりあひの香や知己あひにあふ心地する

もとめては見ねど眼まなこにつく木むくけ槿ぎん哉

(注18)  
楠くすのぎ(木)氏

いさぎよし此世を鷹たかの山やまわかれ

虫むしの音も闇やみもきえきる広野ひろのかな

雨漏あめずみを友ともらしう啼なくいとゞ哉

あめの日の啼な出し早はやきいとゞ哉

明あきらるまで鳴なくことにしてきりぐくす

火ひを焚いば竈いしとど馬うまなく也わたし小屋

ふわくくと垣かきをも越こて秋あきのてふ

まだくらし夜明よあけの嶺ねやわたる雁

雨あめの日は俄にはかぐれして鹿かの声

篠しのをふむ音ねきこえけり宵よのしか

にはとりとひと声こゑおきや明あけの鹿

秋葉山

青水

なほき

積山

ふじ満

旭齋

嵐牛

梅春

送雨

半酔

岳丈

之碩

丸山

龍枝

長風

古勢

亀命

鹿かの声こゑわれも霜しもふむ山路さんろかな

張衣はりぎぬを踏ふよごしけり秋あきのはへ

明あきらる夜よをひき立たてて啼なく鶉うずら哉

ひと気色きしきある夕暮ゆふぐや鳴なるの音

蜻蛉せみや引ひかへすとき羽根うぶねの音

箱根湖

萍ふきもうかで冷さし水みづの色いろ

大磯

ねるのみに床とこも敷敷せて后のちの月

冬

下したからも雪ゆきの埋うむや嶺ねの松

雪ゆきをはく人に盃さかさしにけり

ゆきに明あきらて塵ちりもなけれど芥川

訪まつ山居やまゐ

跨またがれもくゞられもせず雪ゆきの竹

雪ゆきふかしくと庵いほへ人の来きる

空青そらあおく明あきらつゝ雪ゆきの野山のやまかな

水音

丹峰

竹雨

湖山

旭齋

松台

々

平台

雲眠

言之

春谷

楽水

島桂

はつ雪と盆さし出すや局部つばなや  
 遠山の雪を日よりの見物哉  
 熊突くまてもどるふもとや雪の丈  
 ほちくくと芦踏をるや雪の鶴  
 我いほをさして来る也ゆきの人  
 初雪や火ともして見る石灯籠  
 折あとのきくの咲けり初しぐれ  
 笠とりに残る日あしや夕時雨  
 時雨めく中やちらく二日月  
(注19)  
 攤にはづむ声やしぐれのかり船  
(通)  
 はつ時雨傘ともいはずとほしけり  
 しぐるるや一つもたらぬ納屋の用  
 撫て見た峠の松もしぐれけり  
 残月や北はしぐるゝ雲はこび  
 野は白う霰ふりゆく日暮哉  
 味噌豆のおとや霰ににえまじる  
 みぞるゝや鼻ははや夜の声  
 田をはたにうつ初冬の日和かな

駿嘉 米室 小竹 玉見 佩玉 茶烟 秀山 半仙 なほき 簫風 島桂 貫一 婦童 雲眠 之碩 米室 長風 春園

かねの音や翌あつも小春とおもふ空  
 山鳩のこる居すまて啼小はる哉  
 ごろくくと鹿のねてゐる小春哉  
 暗きうち水汲む音や冬日和  
 山の色水田のいろや冬至風  
 ぬくい日の眺ながめものなり冬の山  
 折あとに花さく富や冬日和  
 宝おほくもたる人の、おのれもえたのし  
 まで、それを薬とするはいかにぞやおもへ  
 るを、草堂、書にふけるゆふべ、あやし  
 の火桶にうちよりて感ずること有。

雲眠 琴雅 晴山 流翠 秋夢 華岳 夢南 水音 堆山 丹峰 茶烟 円友 素節 々々

とり次に娘の出たり冬籠	流翠	寒空や月有明て何もなし	雲眠
起臥の気促過けり冬ごもり	坐釣	くれぎはの不思議 <small>(識)</small> に風 <small>(ない)</small> で寒の入	可応
火せゝりもよき慰やふゆ籠	々々	寒声はもうひけにけり <small>(と)</small> 鶏 <small>(と)</small> のこゑ	栄山
ひらく日にさうじも張て巨燧 <small>(こたつ)</small> の間	珍種	賽銭の袂 <small>(たもと)</small> にのこるさむさかな	草雨
一たんは涸 <small>(かれ)</small> たる池のこほりかな	指石	寒月を裸にうけて神参り	梅城
遣ふだけくたく手桶の水哉	佩玉	いま月の入たあかりや冬木立	ふじ満
<small>(注20)</small> 「独坐寒齋二万感生」		こがらしや鳶おろし来る塩畑	夢南
素湯 <small>(さゆ)</small> に水さす也鐘も氷る頃	ふじ満	繕うた足袋や片足入て見る	乙雅
みのゝ雨音するまでにこほりけり	雪竹	肝 <small>(ひ)</small> の手を泣 <small>(な)</small> て藁 <small>(わら)</small> うつをとこ哉	露碩
豆腐 <small>(とうふ)</small> きる鮑 <small>(包)</small> 丁にさはる氷かな	乙雅	櫓 <small>(か)</small> や歩行 <small>(ある)</small> よきかとあるき見る	水巖
吹よせの松葉つくねて厚氷	十湖	老師にまみえばかうよと、東武よりたの	
<small>(災)</small> 息才 <small>(さい)</small> で寝てもゐられぬ寒さ哉	月彦	しみ来りしを、往復両度まで「他に杖を	
砂を吹風にかげあるさむさかな	九如	曳れ玉 <small>(たま)</small> ひし」と聞 <small>(き)</small> 、こは誠に本意なしと	
ひなるれば寒し日南 <small>(ひなた)</small> も晴曇	尺波	もほいなければ	
<small>(注21)</small> 長庚 <small>(ちやう)</small> の常より赤き寒さ哉	楽水	踏替るあしのおもたし霜の道	其常
あらゐの宿 <small>(しゆく)</small> にやどりて、御関の開門を待		古郷 <small>(こきやう)</small> 夜	
てふねに入る。		霜の夜の味をわすれぬ焚火哉	々々
さむけれど嬉 <small>(たの)</small> し高師 <small>(注22)</small> の朝いなさ	松里	大根のことくゝにゆるしも夜かな	積山

こぼれたる土竜もぐらの土や霜の花

水からも今朝は立也しも煙

夜の更るおとや踏行く霜の上

ありくくと明残りけり霜の月

笹の葉の重かさなるうへやしもの月

大原や霜のうへなる朝月夜

橙の撓なむはしものおもみかな

朝々の霜よりしろし水仙花

すゐせむの日にやはらぐや椽の先

水仙の葉もそれくの捻り哉

草庵

かれ菊やみな口くちだま焚たきにをり尽す

枯くぎくもさうぢしてある野寺かな

寝てさへも明兼る夜をあじろ守

網(打)うちを火に当にけり網代もり

直ねをつける顔にらみけり市の鰻うなぎ

さゝやいて河豚の料理にかゝりけり

垣の目へふかれこみけりみそさゞい

山江

素涼

露碩

泰阿

秋山

故馳道

文外

雪香

水音

松寿

嵐牛

松里

竹醉

梅明

駿嘉

試雪

延松

いかな日も来れど一羽ぞ三十三才みそさざい

眼のさめし時か羽たゞく浮寝鳥

水鳥の暁さわぐ入江かな

朝月のあかりゆるまず啼千鳥

こゑ絶るまで往いてもどる(衝)かな

木枕のかたき旅寝や啼千どり

鳴の声聞にも奥のある夜かな

戸明ればおもはぬ月や木づ鬼くの声

浪(隈)くまにきゆる行ゆくへや鯨おね

ほしてある布団ふくれぬ冬のはへ

来た人にすゝめて見るや葉ぐひ

かれ菊や昼は留主ぬもをらぬ寺

寒さぎくや枯葉もとらず伐て遣る

踏しめる土竜の土や冬の菊

のびあがり見るや花(尾)の枯る果

齒にしみる風の吹也枯野原

柿の木があれば家有る枯の哉

大根も引てまことのかれ野哉

蒼古

為舟

晴山

雨石

素節

尺波

泰阿

月彦

延松

眺江

梅明

春谷

乙雅

春園

素節

栄山

円友

眺江

戸にあたる音も夜ぶかき落葉かな	雪香	口上も念の入り衣くばり	鶴明
おち葉たくのみとて宿をかしに梟 <small>けり</small>	月彦	ゆくとしや炭の小口の柴あをき	雨石
小僧等の弱馬つれて大根曳	為舟	除夜の灯も単出るまで更にけり	水音
河豚汁のさめてある也客の跡	佩玉		
ふぐくうた昨日をけふは笑ひけり	習静	追加	
さら割た音は隣かゑびす講	砂白	花にゆく気は俄にもそろひけり	青溪
手短な朝あきなひや蛭子講	晴笠	つむまゝに若菜の野とは成にけり	々々
常盤女 <small>(注23)</small>		はなは皆さく動也朝の内	蝸堂
あぢきなや花と見らるゝ帰り咲	嵐牛	花見をば吼ぬ見わけや寺の犬	春園
かぞえ日を言ひふくめ遣る使かな	岳丈	ゆふ雨の虹降かくす柳かな	々々
病の枕 <small>こゝろ</small> 横 <small>よこ</small> に埋りながらおもひめぐらせ		羽子 <small>はこ</small> つきやにくき口きく男の子	鶯後
ば、早、師走も半過にたり。		白 <small>しろ</small> はしにものくひなれて梅の花	其水
算え日と指をるもと日わすれけり	梅春	さゆる夜もある町口の蛙哉	其水
提灯の帛紗 <small>ふくさ</small> づゝみや年忘	竹涯	初蛙 <small>きい</small> 聞てわすれてしまひけり	五拙
となりから煤をはく日のきまりけり	秀山	ある朝は雉 <small>ききす</small> 子も鳴て藪やしき	々々
取やうもないほどにつむ年木 <small>としぎ</small> かな	茶烟	つむことはともあれ野辺は土筆	倚石
節季 <small>せきせう</small> 候や曆くばりと入かはり	雪香	投やりにかけた橋あり春の水	々々
とほくのが聞はじめなり餅の音	知碩		

萍のうきく夏に成にけり  
 かんこ鳥人も木がくれ草がくれ  
 吹落る軽みに成ぬ竹の皮  
 よく晴た闇はうるはしとぶ螢  
 朝さむや夏明の僧の旅じたく  
 是からの来る夜はたのし二日月  
 八月やおもへば長き中十日  
 色数はしろのたすけや菊の花  
 這止て染はじめけり壁の蔦  
 きりくす鳴や客なき客座しき  
 明である家にも秋のゆふべかな  
 散る音に小雨降そふ紅葉哉  
 勢田に日を見せつゝ比良の時雨哉  
 灯のうとき蕎麦屋の門のしぐれ哉  
 ふた葉三は氷のうへの紅葉哉  
 夜をほめて小屋に入り網代守

蝸堂 夕堂 青溪 曉嵐 千広 野風 舒堂 曉嵐 春彦 玉見更為 一 柳月 然山 尾正 流翠

(注1) 衛に鶴の毛衣をかる：歌林苑の月例会で、祐盛法師が「寒夜千鳥」という題が出され、「千鳥も着けり鶴の毛衣」という歌を詠んだところ、鳥のサイズが違うと難じられた話が『無名抄』に見える。

(注2) 丹霞楼：「丹霞」は中国の山名で、そこに住んだ天然禅師の別称。「丹霞烧仏」の故事で有名(『五灯会元』)。ここは、入出(湖西市)の俳人丹霞こと山田佐平(蓬宇人名録)ほか)宅のことか。

(注3) 偷盜戒：仏の説いた五戒の一つ。

(注4) 伯夷叔齊：中国殷代の高潔な兄弟。『嵐牛発句集』の

(注42) 参照。

(注5) 白川原：水の勢いで流されて何もな川原。

(注6) 見付台：『東海道名所図会』の「遠江／日坂」に、「富士山、あらはに見ゆるゆへ見付台といふ」との割注がある。現在、見付の東隣が富士見町と呼ばれる。

(注7) 身に替るもの無りけり：『嵐牛発句集』の(注17)参照。

(注8) 五峰庵：見付住杜水亭の別称。『あられ灰』(連句の部)の解題参照。

(注9) 我さへこゝろ：上の句は「かくばかりうしと思ふに

- こひしきは」で、『拾遺集』に見える読み人知らずの和歌。
- (注10) 玉浦眺望：句の内容に照らして焼津港の南端にある船玉神社からの眺望をいうのであろう。「柿園評月並句合」に玉浦連の作者が見える。
- (注11) 処にありて：荷兮編『あら野』（元禄二年・二六八九）卷六所収の鳥獣魚虫の五句に付された前書。生業のためには殺生もやむを得ない、の意。
- (注12) 福原：治承四年（一一八〇）、平清盛が安徳天皇を奉じ、一時、遷都した地。公家の反対が強く、半年で京都に復した。今の神戸市兵庫区。
- (注13) 佐倉の御祭：御前崎市にある池宮神社の祭り。『嵐牛発句集』（注73）参照。
- (注14) 秋水与長天一色：『古文真宝後集』に収められる王勃作「滕王閣序」の一節。「与」は「共」が正しい。
- (注15) 迫門：背戸。家の裏口。
- (注16) 雀麦：イネ科の一年草。カラスムギと呼ぶのが一般的だが、スズメムギともいう。
- (注17) 林間煖酒焼紅葉：白居易の「送王十八归山寄題仙遊寺」と題する詩の一句で、『和漢朗詠集』や謡曲「紅葉狩」などで知られる。
- (注18) 楠木氏：南北朝期の武将、楠木正成・正行父子で、後醍醐天皇の政権樹立に功があった。足利尊氏の追討に向かう西国街道の宿駅桜井で父子が別れる場面はとくに有名。「鷹の山わかれ」は秋の季語で、桜井の別れを鷹の巢立ちに比喻する。
- (注19) 攤にはづむ：「攤（たん・だん）」は「攤（だ・な）」に同じ。追攤、鬼やらい、豆撒き。
- (注20) 独坐寒齋万感生：『聯珠詩格』所収、項雲庵の七言絶句「江南」の転句。
- (注21) 長庚：金星のこと。
- (注22) 高師：浜名湖を新居に渡った西側、東海道沿いにある高師山。歌枕。「いなさ」は南東から吹く風をいう地方が多い。
- (注23) 常盤女：『嵐牛発句集』（注101）参照。

柿園嵐牛評月並句合抄

【書誌】「書型」大竹裕一、鈴木健治、加藤定彦、故田中明各氏蔵の半紙合本及び西原勲氏提供の合本複写より抜粋。「内題」「柿園（嵐牛）評月並正月分（〜十月分、十一月分）」（ただし、年により多少の異同がある）。「柱刻」「正月分（〜十二月分） 一（〜二、もしくは三）」。「慶応二年分は、正月分「寅一（〜二）」、二月分「とら三（〜六）」、四月分「とら七（〜十三）」、五月分「とら十四（〜十七）」、六月分「とら十八（〜廿六）」、八月分「とら廿七（〜三十）」、九月分「とら三十一（〜三十四）」、十月分「とら三十五（〜三十七）」、十一月分は三丁、四時六句合は二丁で、ともに柱刻なし。ただし、同年「三月分」一丁半と「七八両月分」一丁は別途催され、柱刻なし。「匡郭」四周単郭。「催主」はじめ応山の単独、以降は二名に減っている年もあるが、応山・螢（桂堂・素来、幼鯉・静斎・桂堂、静斎改杜逸・四山・静嘉、山竹・

送雨・杜逸、山竹・素涼・涼月、素涼・松里・長風の原因各三名で推移。「刊記」なし。軸の嵐牛句と『俳諧とめ』などを照合、刊年を推定した。嘉永二年（一八四九）〜慶応三年（一八六七）の内から三十六回分を収録した。

【解題】天保末頃、東遠地域では塩井川原の応山が卓池評の寺社奉納の句合を度々催していた。卓池（弘化三年・一八四六没）が亡くなると、卓池門の嵐牛が評を継承して好評を博し、定期的な句合の要望が高まり、ひき続き応山が催主の「柿園評月並」が誕生する。最初に翻刻収録する「五柿園評三四月分」から判断すると、その開始は嘉永元年（一八四〇）で、「五」の数字は五回目で二ヶ月毎の催しとすれば翌二年のものとなる。当初、巻頭に勝者天地人の点数と句を挙げ、「○」を付けて五点以上の句を収録する方式で、「雪中庵評月次三題句合」や同派の先輩、相良の少風、金谷の曙山らの月次句合（丁摺）に倣ったのであろう。月毎の催しとなったのは、家督を譲り、本格的な宗匠活動を始めた嘉永六年（一八五三）頃からで、催主も原則三名と増員された。

月並句合の応募句稿は参加費とともに集めた後、催主

が句のみを冊子に清書し、判者がそれに評点を加え、六

点以上の秀句は判者が巻末に抜き書きした。その後、催

主が五点以上の評価を得た句の作者名を記入し、作者別

に点数を合計して——柿園評では五句合か四句合が標準——

天地人などの勝者を巻末に記し、最高点の勝者に清書本

が贈られる。成績発表は、催主名、応募句数、勝者名・

点数、五<sup>(印)</sup>点から七<sup>(印)</sup>点までの高点句、巻軸に催主と判者の

句を摺った二、三枚の丁摺を発行——参加者が少ない場合

は手書きで配布——、それと一緒に評点を転記した句稿を

応募した作者たちに返却、それを「返草」という。地域

別に取り纏め役がいて、句稿を集め、また返草した。

なお、催主山竹・送雨・杜逸の三名で催した三月分と

七八月分の二回分は年次推定の手がかりがなく、仮に

慶応二年のところに収めた。月並句合や奉納句合に関する

記事は『柿園日記抄』にも頻繁に登場し、とくに「嵐

牛書簡集」所収の玉見宛書簡には、彫工の病気で月並(丁

摺)の発行が大幅に遅れ、困惑したことが記されている。

【翻刻】

五柿園評月並(嘉永二年頃) 三四月分

催主 応山

音のして散けり夜の竹の皮

○来ついても人にこはがる鹿の子哉

ミホハマ 「藤」園

竹椽に脱捨てあるゆかた哉

四四

田の中の森はきに行春日哉

カナヤ 楓 橋

花守へたゝみてかへすむしろ哉

四四四

気に入の丁稚相手や根分菊

土方 一 七

はな先に雲雀のあがる渡し哉

々

五点之部——四十二句掲出、○印のみ翻刻——

○わる鳴をして追れけりうかれ猫

カナヤ 松 雨

○行た程連の揃はず花もどり

アサハ 我 之

○ひらくと浅みを走る小鮎かな

、 鳳 嶺

○麦糠や蚊遣をかねて焚竈

ナカヤ 綺 月

○長う見て居れば冷つく若葉哉

アサハ 知 石

○ひとつゝみ舟ちん「に」置小鯨哉

小シマ方如柳

○軒先やあやめ落して鳴すゞめ

ワロ千里

○咲てから葉をちさく見る牡丹哉

梅里

卷中秀逸ノ部

とぼし火のむかふに高き柳哉

ヨコスカ一水

青柳やつき流しやる御酒の樽

イケ下竹塙

たるむだる所から見えず風の糸

カマタ紫石

貫人にとらせてやるや露の臺(蓋)

マツバラ器友

焚付て囃はやしにのくやみそとむど

ウメ田竹子

植かへた木の芽出揃ふ四月哉

ハツクラ甫山

隙さへて助てやりぬ火とり虫

山ナシ義彦

ながれ藻が咲たもへ来てかゝりけり(藻)

松雅

六印ノ部

出代でがはりの跡おひするや疱瘡やみ

知石

もりさうで苞つとにしにくき蜩哉

五秀

おもふ事なげに雛ひなの並びけり

義彦

○

溝口や只一株のかきつばた

応山

取次もせうじ一重や菊の花

嵐牛

柿園嵐牛評月並(嘉永六年)四月分

当季乱五句合

催主

応素堂  
山来堂

天ヌキトバノ五知草

地ヌキ小ジマカタ三二鶴

人ヌキ中ノ五鳳嶺

秀逸ノ部 五点ノ部—百五十五句掲出、翻刻省略—

秀逸ノ部

明行や夏山ふかき鶏の声

スンシマダ頃雨

啼なぐくひな馬かふ寺にとまりけり

カナヤ天真

水づらを蛇のはしるや夏の雨

山ハナ吟昇

朝涼や起ぬ立たて場にひと休

ヨコスカ岨雲

あふほしと剪て呉けり燕子花

中方如星

うり家の札もよごれて今年竹

サガラ三少

ふり炬まつの消て夜深しほとゝぎす

タルキ水文水

真直に立三日や麻に風

素来

鶉ひわ鳴やいらく暑き麦の跡

月鳥

霖雨ながあめの晴くち見えて梅黄ばむ

炎天や老の手づよき鋤づかひ

ぬれ衣を日よけに椽のひるね哉

白雨ゆふだちの最中あげる舟荷哉

門掃てさして有戸や桐の花

柳よりひとかさ上の茂りかな

さする手に付て落けり瓜の砂

若葉見にかりて出にけり船むしろ

六印ノ部

温風や眠たく成し山の道

気ぜはしう雲雀鳴也麦の秋

あふれ水来て短夜は明にけり

呵しかられた児の寝入けり蠅の中

軸

ひとにごり来て澄すむくちや流れ苗

知石

鳳嶺

二ノ

知草

芦清

二鶴

々

青年

祝山

歩牛

対雲

春谷

嵐牛

柿園嵐牛評月並(嘉永六年)五月分 句員一千二百五十章

当季乱五句合

催主 蛭素堂

応山

天五クサマキ一竹

地七節 スン田中閑美

人五フカザキ貫一

三

三

三

卷中揮毫ノ部

五点ノ部—百二十九句掲載、翻刻省略—

沖の火のへるを算て涼哉

涛漁

まだ月の朧めく夜や時鳥

万里

涼しさやいつか来て居る迎ひ舟

四節

茸ふいて居る手に雨はしる菖蒲哉

タルキ 竹丸

生うまるるとのかぬ意地もつ蠨螂哉

完牛

夏菊や掃除しまへば日の登る

トハタ 士口

鶯の飛鳴しげし木下こしたやみ

谷雄

側近う来てから逃る鹿子哉

中ノ 一扇

涼しさやひざを崩してむかふ膳

ヲカ山 山月

枯た気で居たる接木の夏芽哉

春谷

花もまだ有あ藤棚の茂り哉

芦清

虫干や小うたひうたふ椽の先

日サカ 桑 陰

造化天工ノ部

もうつくやすすしとおもふわたし舟

閑 美

あつき日や羽をふりこぼす軒の木兔

蛩 堂

軸

さみだれや湖むく家のひとつ口

嵐 牛

柿園嵐牛評月並（嘉永六年）六月分 句員一千二百余吟

当季乱五句合

催主

蛩素堂 山来堂

天三 貫一

地三 波万女

人々

昔幼

五点ノ部―百十三句掲出、翻刻省略―

卷中揮毫ノ部

嵐上が上座なりけりすゞみだい

波万女

はつものゝ多き中にも茄子哉

昔 幼

秋近し浦風切て飛玄鳥

其 国

深霧に朝からあつき川原哉

步 牛

炎天や虫のくひをる桐の苗

椿 堂

人のいふ頃には晴ぬ帟が雨

幼 帟

御立符の神酒に酔けり蟬時雨

中ノ 鳳 嶺

打水の暫はふる木の葉かな

サガラ 吟 一

おほ沼のかわく匂ひや雲の峰

タンノ 幽 山

我がげに退て亦来るくひな哉

柳 明

造化天工ノ部

ぬれ馬のいくつも来るや椽のはな

貫 一

うつむけに剪て置けり百合の花

日サカ 青 年

物くれる人を寝てまつ鹿子かな

アサハ 雨 暁

○

麻かりやまつりの齋の洗ひ髪

嵐 牛

【備考】右、六月分の月並句合の清書卷は勝者の貫一に贈られ、ご子孫の鈴木健治氏宅に襲蔵される（図版、口絵参照）。丁摺と照合した結果、丁摺には清書卷で嵐牛が添削した後の句形で収めていることが判明した。詳しくは「柿園友垣抄（九）―柿園評月並の懇切な指導―」（「嵐牛友の会便り」第九号）参照。

柿園嵐牛評月並（嘉永六年）七月分 句員一千百八十章

当季乱五句合

催主 桂堂  
応素 山来

天<sup>五</sup>三<sup>五</sup> 可遊<sup>ミネダ</sup> 地<sup>タ</sup>順<sup>カケ川</sup> 桃園<sup>カケ川</sup> 人<sup>七</sup>五<sup>五</sup> 山<sup>ヲカ山</sup>月<sup>山</sup>

五点ノ部—百十九句掲出、翻刻省略—

卷中揮毫ノ部

秋暑しほろくとちる豆の花

文錦

雨晴の笹吹上や三日の月

川上花牛

撰待や置人のしれぬ花手桶

月彦

手をこめて哀さめけり瓜の馬

二ノ

出る人にとふて這入やきくの門

一格

青空にひらめく鳥やけさの秋

サイタ 嵐山

いなづまやいつより遅きむかひがね

祝山

栗焼たあと埋ておく炉の火哉

天真

造化天工ノ部

いさみたつ鷹や峙出の朝嵐

スミ弥左衛門 清流

留主の戸を明てをどりの仕度哉

ヲカ山 山月

流木や秋の螢のうき沈

中泉 笑澄

夜に入ば都にもうつ砧かな

ハマ、ツ 涼草

○

うつの山

木啄鳥のこだまひゞくや笠のうち

柿園

柿園嵐牛評月並（嘉永六年）八月分 句員一千四百章

当季乱五句合

催主 桂堂  
応素 山来

天<sup>三</sup>三<sup>日坂</sup> 歩牛<sup>七</sup> 地<sup>五</sup>土<sup>方</sup> 春風<sup>三</sup> 人<sup>五</sup>五<sup>完牛</sup>カトウ

五点ノ部—百三十一句掲出、翻刻省略—

卷中揮毫ノ部

素湯たぎる音の間ゆる夜寒哉

中イヅミ 旭斎

名のしれたのから折けり草の花

富竹

霧の跡煙のゝこる磯家かな

如昔

待人のそろはで終るせがき哉

春風

残月やさめて亦出る舟の酔

ヲカザキ 貫一

ほめたれば葉も見せにけり若貴わかたはこ

月の出てひとしめくらき山路哉

馬の目の頻しきりに光る夜寒かな

つる「後」にふそく心や秋の嶮かや

日まはりのおそき畑や秋の「蟬」

朝露に脚伴（絆）のつまる野道哉

造化天工ノ部

秋雨やよその煙のまどにいる

濁（注）らして見れば濁（注）や秋の水

十六夜の早ほのめくやいその松

寝る腹にものくふ秋の雨夜哉

橋落た印にむすぶ（す）芒（き）かな

○

月夜清水湊より三保へ渡る舟中

不尽（ふじ）むや月も亥中（みか）を過る影

々

寿童

敬山

トバノ 如石

ス、キ 文一

イシノ 捨石

歩牛

如草

日サカ 吟哦

里格

ヤカハ 砂石

嵐牛

柿園嵐牛評月並（嘉永六年）九月分

当季乱五句合

天（七印）キリ山

地（七印）ニツヤ

人（五）ナルタキ

五点ノ部―九十九句掲出、翻刻省略―

卷中揮毫ノ部

踏（ご）ろ霜と知てか鳴女鹿

稲づまや夜網仕舞て帰る道

我影を追ふ羽返しや夕とんぼ

暮て迄鳩鳴岨（まは）の紅葉かな

つゝと来て動きもやらぬ月の木兎（つぐ）

水汲の舟から来たり朝の月

朝寒や堤をこゆる川煙り

夕尾花人行かたへなびきけり

窓あけて見る間につのる吹雪哉

夕風の日をはつくくや行乙鳥（つばめ）

秋雨や呉（る）る餅（餅）を待軒（と）の鶏

催主

山来堂

桂

素

カトウ

イケシン田

ヲカザキ

ミツケ

トバノ

、

キリ山

上ヨシダ

スソフジエダ

、

カナヤ

梅

仙

はまめ

琴糸女

左右郎

松山

知（学）

造化天工ノ部

朝霧や明る戸口へなだれ込

くり綿の沢山たまる夜寒かな

雨冷や秋の螢の見えかくれ

駆登る堤の高し初月夜

早しぐれするや伊吹のそば畑

○

時雨見のどやくはひる<sup>とまや</sup>苦屋哉

ナラノ遊山

カモ栗山

松山

イヒタ如竹

ニツヤ秀斎

嵐牛

五六人聳入行や雪のくれ

鶏捨に往てのさみしや神の留主

山茶花や散た残りもひとさかり

造化天工ノ部

霜の羽をほして眠るや鴻一羽

雪折のふみ付て有山路哉<sup>ある</sup>

いらぬ湯の一日にへるしぐれ哉

○

木枯や今日もから手の獵もどり

川上吟古

トバノ知草

ヲノ許半

吟古

桃寿

アタゴ芦水

嵐牛

柿園嵐牛評月並（嘉永六年）十月分

当季乱五句合

催主 桂山 素来堂

天<sup>七印</sup>桃<sup>モロキ</sup>寿<sup>五</sup> 地<sup>スギ</sup>吟<sup>川上</sup>古<sup>三</sup> 人<sup>タ</sup>知<sup>トバノ</sup>草<sup>三</sup>

卷中五点之部——四十九句掲出、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

水仙や家鴨<sup>あひる</sup>を除る仮垣根

吹あげたやうなり冬の二日月

サガラ可耕

精山

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）正月分

当季乱四句合

催主 桂山 素来堂

天<sup>七</sup>春<sup>カケ川</sup>勢<sup>五</sup> 地<sup>スギ</sup>鯨<sup>ナルタキ</sup>巴<sup>三</sup> 人<sup>三</sup>万<sup>山ハナ</sup>外<sup>三</sup>

五点ノ部——二十二句掲載、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

ひたくと畔<sup>あせ</sup>こす水やはるの月

サガラ吟一改角田

福びきの崩れてはひるこたつ哉

ナルタキ 里格

板敷て梅見を通すぬかりかな

、 鯨 巴

やなぎ見て来てから内を起しけり

日サカ 歩 牛

眠るにも倦て蝶舞ふ小庭哉

ヨコスカ 万 里

うぐひすや遠音に成て日の闌る

フクロキ 梅 路

造化天工ノ部

長々と舟道ひくや春の海

春 勢

○

何せうと毎にちおもふ長閑哉

嵐 牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）二月分

当季乱四句合

催主 桂 山 堂

天<sup>ヌキカイツカ</sup>五 桂 翠

地<sup>フクデ</sup>順 々

春 谷

人<sup>カケ川</sup>順 々

玉 宝

五点ノ部―六十二句掲載、翻刻省略―

卷中揮毫ノ部

春雨や葉湯立し呼遣ひ

カトウ 完 牛

邪魔がるをなほ立かゝる接穂哉

桂 翠

先へ出て梅交とるや舟の人

春 勢

香のとほく成て雨ふる桜哉

々

高う行一羽陽やはるの雪

トバノ 知 学<sup>(尊)</sup>

をらせたき枝は残しぬ梅もらい<sup>(心)</sup>

春 谷

ぬれ馬を引込門や啼蛙

玉 宝

痒耳かけば聞えつ初蛙

如 竹

何気なく行ば鶴立霞かな

アタゴ 芦 水

造化天工ノ部

物うりも来ぬ昼舟や桃の花

ヲカザキ 貫 一

地におりて鼻鳴やわかれ霜

ヲカ山 山 月

ひきむすぶ手のうちゆがむ柳哉

一 豫

○

さめ切た火桶によりて雨の花

嵐 牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）三月分

当季乱四句合

催主 桂 山 堂

天<sup>七</sup>ヨコスカ  
三<sup>五</sup>美松  
地<sup>三</sup>五ヲカ山  
山月  
人<sup>七</sup>スンプチエダ  
三<sup>三</sup>月咲

五点ノ部——六十七句掲載、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

潮干見の暮て寒がる堤哉	ヲカザキ	鶴	歩
苦 <sup>とま</sup> をもる東風の冷つく夜明哉	、	柳	眉
鳩うつらく鳴出す春日かな	アタゴ	溪	川
ひとつかみ摘にも提ぬ若菜籠	カケ川	春	勢
宿とるにまだ日は暮ず藤の花	ムカサ	喜	齋
すみれ野や乞食のわける貰ひだめ	ヘイミ	一	醒
帰る気になれば小寒し花のかげ	ヒヂカタ	一	格
造化天工ノ部			
ちる花や <sup>うぐい</sup> 鹹の登る瀬の濁	中ノ	知	石
藪いりのゆるす朝寝はせざりけり		月	咲
桃咲や居るか留主かの知れぬ家		美	松
○ 声々にはしり出さうな雉 <sup>きぎす</sup> 子かな		嵐	牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）四月分

当季乱四句合

催主  
応山堂

天<sup>五</sup>ナルタキ  
三<sup>五</sup>里格  
地<sup>三</sup>スンプチエダ  
三<sup>三</sup>ほとり  
人<sup>々</sup>順  
吟哦

五点ノ部——四十七句掲出、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

下闇や木の葉をつたふ水の音	ヨコスカ	竹	葉
することの無て庭はく裕かな		如	昔
しげる葉の中やつゝじのおくれ咲	日サカ	青	年
椽ばたへ出して豆撰 <sup>よ</sup> の四月哉	ヲカザキ	柳	眉
馬埃笠によけゆく暑かな			
見返せば見かへして居る鹿子哉	ヲノ	許	半
造化天工ノ部			
逃こむで葉に顔 <sup>いた</sup> 出す鹿子哉	ヲカザキ知為改	椿	谷
○ 晴くちの雨ふく窓や若楓		嵐	牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）五月分

当季乱四句合

催主 応山 桂堂

天<sup>スキ</sup>三<sup>カトウ</sup> 完牛 地<sup>五</sup>三<sup>中ノ</sup> 志清 人<sup>五</sup>三<sup>カケ川</sup> 一枝

五点ノ部―百二句掲出、翻刻省略―

卷中揮毫ノ部

水音にはりあうて鳴水鶏かな

白牛

暑いともいはでゐる也はたの人

栗山

白雨のけしきをそよぐ草木哉

菊吾

茸て来て又見てまはるあやめ哉

圭

夕かげや川のむかふのねぶり花

里格

徒然や窓を明れば水鶏鳴

完牛

あさ篠の中やくひなの歩行音

一扇

曙や匠のあはれの鞆にまさる

飛節

造化天工ノ部

五月雨やはるかに虹の夕あかり

桃水

竹植て豆腐の使またれけり

貫一

もう橋も出る引水や夏の月

古勢

親をまち子を待はしる鹿子哉

サイゴウ 松月

五月雨や鹿伸上る草の中

嵐牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）六月分

当季乱四句合

催主 桂堂 応山

天<sup>スキラカザキ</sup>三<sup>初白</sup> 地<sup>五</sup>三<sup>頃雨</sup> 人<sup>七</sup>五<sup>里格</sup>

五点ノ部―八十二句掲出、翻刻省略―

卷中揮毫ノ部

にはとりの尾に引泥や五月闇

スン久兵へ 杜松

夏の来て月夜多しと思ひけり

ヲノ 許半

川狩や工みしことも十分一

アタゴ 芦水

戸を明る度に蚊の出る戸棚哉

カケ川 春勢

雨やけてひる顔の咲川原かな

モロキ 桃寿

五月雨や家うちに馴し雀の子

ヘイミ 保玉

見する灯のとゞき兼るや蓮の上

ヲカザキ 貫一

おもふ程わかで寂しき清水哉

、 初 白

白雨のさわぎにさめつ舟の酔

カトウ 完 牛

造化天工ノ部

炎天に沖は鯖さばつるさわぎ哉

ナルタキ 里 格

日のうつる鷺のぬれ羽や青嵐

スン久兵へ 誠 齋

○

窓に来て羽音さす也夜の蟬

嵐 牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）七月分

当季乱四句合

催主 桂 堂  
応 山

天五本所  
三 松月

地ヌキモリ  
三 一 圭

人五カイツカ  
三 桂 翠

五点ノ部——四十八句掲出、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

ゆられながら梢の鴟の高音哉

スソフジエダ 琴糸女

橋へ来て見頃になるや三日の月

大サカ 如 昔

玉棚や箸折ながらひとり言

モリ 一 圭

稲妻やたらひへあけるつとの鮒

二ノ

供の来て暮るさたいふ紅葉哉

カケ川 桃 水

昼日中鳴や荏えはたのきりくす

アサハ 知 石

軒にたつ鹿に驚く雨夜かな

フクデ 青 寿

朝がほや舟へわかるゝいとまごひ

ナルタキ 里 格

造化天工ノ部

萩の風上すべりして明にけり

スソフジエダ はまめ

岩角に来て見えすくや紅葉ぶな

ヨコスカ 竹 葉

○

十六夜や闇一ぱいに雨もやむ

嵐 牛

柿園嵐牛評月並（嘉永七年）閏七月分

当季乱四句合

催主 桂 堂  
応 山

天五シバ  
三 一 遊

地ヌキナルタキ  
三 里 格

人五上吉田  
三 左 太郎

五点ノ部——三十六句掲出、翻刻省略——

卷中揮毫ノ部

しみぐくと落る芭蕉のしづくかな

古勢

月の出る呼ほうもある舟場哉  
木鼠の尾のはたらきや秋の風

小ヌキ 見薺  
トシクボ 花楽  
山ナシ 玉水

入相のふつと鳴出すもみぢかな

敬山

いなづまにすぼし舟こぐ人の形

露深し顔振て行朝のこま

中イヅミ 東松

書ぬ子も起てさわぐやほしの歌

無理に夜をよびきして行踊哉

里格

移り香もおもひやほしにかし小袖

鹿笛の合ぬのも亦あはれなり

四ノ

手料理の蓼酢きくけりけさの秋

造化天工之部

一遊

朝がほを誉ながらはく脚半哉

高灯笼鷺の嗚をてらしけり

嵐牛

出る月にそむけてをしき渡し哉

○

きれあがる雲のすそより三日の月

嵐牛

取て来て見わけて貰ふ木の子哉

朝寒やしんぐとした水の色

ヨコスカ 李山  
ミサハ 溪月  
ヲカ山 岱中  
モリ 古山

柿園評月並（安政頃）七月分 句員一千一百余吟

当季乱五句合

催主 桂静幼 堂齋鯉

たて琴に風鳴のする夜明かな

天<sup>十五</sup> 椿谷<sup>ヲカザキ</sup>

地<sup>十三</sup> 竹女<sup>シシデ</sup>

人々 秋宇<sup>上イヅミ</sup>

尽詞之部―百三十六句掲出、翻刻省略―

造化天工ノ部

揮毫ノ部

虫なくや膝をたゝいて長ばなし

ミツケ 一路

清水にも墨のながれてけさの秋

サイタ 藤平

葉がくれの朝がほ吹てさかせけり

カケツカ 飛鳥

しその穂の秋まだ浅きにほひ哉

カドヤ 芝香

むくさるにかざす扇や薄もみぢ

山ナシ 龜遊

たち尽す鳴や風ふく水のう

大日 喜泉

早稲酒や柄杓の木香もひと風味

ヲカザキ 椿谷

黄昏の羽音や鳴と皆おもふ

竹女

○

今朝までの数も忘れず桐ひと葉

嵐牛

あたる日ともる日のかげや庭の萩

柿園嵐牛評月並（安政頃）九月分 句員一千余吟

当季乱五句合

催主 静幼 桂齋 鯉堂

天十六位ヲヌキ 見齋

地十六々モリ 乙雅

人十三位ナルタキ 里格

尽詞之部—百七句掲出、翻刻省略—

ヌキ（揮毫ノ部）

から堀をはしる水鶏やはつあらし

東ハキ 静嘉

鶏頭うる婆々を見てなく小犬哉

見齋

蔓のまゝ呉て行けりからす瓜

カイヅカ 花基

稲妻や水面はしる魚のそり

可楽

駕昇かじかきのきげんとりけり相撲とり

保玉

いなづまや毘ひなをのがれし獺をその声

其梅

材木の上を花火の座しきかな

里格

丁寧ぢんねいに折て揃そろはすあさぎばし

々

から乳ちちに児寝こねつかする夜寒哉

ムラマツ 光月

肌寒はだかや何心なく人をまつ

、 冠甫

とふ人の客きやくぶりもせず庵いほの月

ウメ田 洋々

だんくだんくにちさく成なけり月の山

マツバラ 箸友

手入した様に穂ほの出る芒やぶかな

マツバラ 箸友

七印（造化天工の部）

ひる月の流れてゐるや秋の川

一 醒

影かげ見えて峰みね歩あるく行也月の鹿

ヲカザキ 虚庵

駕籠かごおりてのびしてゐるや角力取

土方 一ヒ

柴垣しばがきや冬ふゆちかき日のさし通す

桃寿

○

田をかせぐ留主りゆうしゅの日和ひよりやきくの花

嵐牛

すべらして女のなまこにげる海うみ岸ぎし哉

柿園評月並（安政頃）十月分 句員七百余吟

当季乱五句合

催主 桂静幼  
堂齋鯉

天十六々中泉 旭齋 地十五々スンプチエダ 一記 人十三位ヲカ山 岳丈

尽詞之部—八十句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

たちくらむ程居過しぬ冬日南ふゆひなた 復山

冬至から窓の日脚のひづみけり 小ノ許半

ひき立てみせてかしけり雪の蓑 栗溪

朝市や氷ぐるみの計鮎はかりふな 恕柳

乞食の川原遊びや小六月 カサキ 玉齋

脱ともう重う成けり雪の蓑 旭齋

ふいと来てふいと立けり雪の鷺 々々

雪の猿梢見上てさげびけり 岳丈

造化天工之部

孤みなしのなきがほかくすさむさかな 復山

す(煤)の埒ほめてはいるやさかな壳 一記

高く行一羽鴟や初しぐれ

シンカキ 其道

○ 埋火やかくもる月もふりかはる

嵐牛

遣はれに一日見舞や冬ごもり

柿園評月並（安政頃）十一月分 句員八百余吟

天十三点位 鯨巴 地十三点 知碩 人十二点 亀尺

催主 幼静齋

五点之部—八十四句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

かた崩くづれして残りけり雪払 久円

にぎやかに客水汲くむやひと長屋 茶友

風呂敷に包だなりも鏡餅 東輪

夜をかけて市馬戻る枯野哉 齋月

山吹や柄杓かけたる井戸の垣 栗溪

桃咲や撫々起るあさね顔 岳丈

一頻り吹て止けりはるの風 松齋

万歳や出て行あとの高笑

ヲカザキ 虚庵

きじ立たあとを見に行小供哉

山竹

造化天工之部

鶯やすな吹あぐる川原道

ムラマツ 目玉

春の夜や嵐のつきし包つづみのし

ヲヌキ 梅笠

朧月木兎啼松にかたぎけり(傾)

ヲカ山 岱中

鶯の夜は明にけり竹のおく

ヨコスカ 金英

○

草の戸も火打ならして明のはる

嵐牛

来るほどの日がめでたくてうめの花

柿園評月並 (安政六年) 六月分 句員一千余吟

天十四点 風竹 地々 梅隣 人々 一水軒

サ静齋更杜 主イ 静四 嘉山 逸

尽詞之部——百十三句掲出、翻刻省略——

揮毫之部

起す人頼たのんで置おいてひるね哉

ムカサ 菊丸

雲の峰外に雲なき天気哉

サイタ 弘道

夕だちやおもひもよらぬ桐一葉

ヤクチ 谷松

月はもうなき夜となりぬ五月晴

山ナシ 風竹

打水にめし盛にける二かいかな

シンデ 千影

すゝませる積りでよぶやはたの人

ナルタキ 山竹

水打てまたるゝ輿のもどり哉

欠川 寿角

鬼灯ほほづきや青いうちからさぐり見る

フクロキ 喜眼

うち水をまたせてはひるとまり哉

馬場 涼雨

夕だちや繕ふちえで小酒こざぶもり

カナヤ 寿山

日をうけて牡丹つやく々咲にけり

ヨコスカ 以行

巻紙のころげて長し夏座しき

ヨコスカ 松の花

造化天工之部

日盛や何処へか往し市の鹿

復山

湯に遣ふ桃のはむしる暑かな

ハマッ 志雲

さめてから昼ねを乳母の恥にけり

寿山

○

夕がほや宵の床几に咲くづれ

嵐牛

柿園評月並（慶応元年） 四月分 句員一千百余吟

天十五点 四山 地々 茶烟 人十四々 露碩

尽詞之部―百二十五句掲出、翻刻省略―

揮毫之部

見とるれば水さへ眠き卯月かな

ふねの酒ひるね嫌ひに呑れけり

打水に汲ほされたる呼井（吹）かな

物くれる子を知てゐる鹿子かな

とほる人ごとにつきくる胡てふかな

児のはふや乳母がひるねの枕もと

さみだれを一日づゝも過しけり

かしはもちくうて立けり庭づくり

めのさむるやうな音也はすの雨

吹込だほたるにさわぐ二階かな

かた（片面）つらは帰る人つる蚊帳かな

玄鳥の上手にくゞるあやめかな

催主 山素涼竹

延松

秀学

一格

雨逸

送雨

春風

露光

花雪

竹鶯

林幸

長者丸

伯牛

流れねば水も暑さのひとつかな

あと先の暑あつさみてたつ樹下こしたかな

造化天工之部

ひるねして起て寝たひまをしみけり

やくそくをした計也けしの花

いつ見ても咲た計ぞかきつばた

〔能〕道にして待ば来ぬ鹿兒哉

ふねの蚊や夜明てみればふたつ三つ

○

行程はもどりても来るほたるかな

里格 一勢

菁々

四山

茶烟

々々

梅月

嵐牛

柿園評月並（慶応元年） 八月分 句員二千百余吟

天十六点 馳道 地十四々 月笑 人々 鼠来

尽詞之部―百二十二句掲出、次を除き翻刻省略―

尼寺は木魚のあとのきぬたかな

足音ぼふちに子こ子こどれもしづみけり

催主 松素里涼

中ゼンジ伯牛更 十湖

十湖

すゞしさや魚はつれねど柳かげ

揮毫之部

八朔やほむる計の風のふく

雨の日は俄ぐれしてしかの声

にはか雨日まけの桔梗咲にけり

闇にさへならぶ声也わたるかり

笹ふくや秋に成しとおもふよひ

声居すゑてなくや夜更のきりぐす

あはせ着てみればきてよき日也けり

関あんどんとりのひき出いださるゝをどりかな

行灯あんどんは子に向ておく野分かな

霧ふかし夜山案内の二手ごゑ

さとかたはしめりいはひやいねの花

かゝしをも見かけぬほどの山路かな

よふけまで居るや場末の西瓜みせ

ふね下りて八朔一日いはひけり

待かたのよ所そに上りし花火かな

朝さむや付木に移る火のかるき

十湖

岫雲

花山

翠竹

雪竹

尺樹

一勢

梅屋

桐雨

真猿

晴牛

四山

一格

葛谷

梅月

茶烟

其曉

キク川

造化之天工之部

もみぢ見のいひあてにけり夕日和

立秋やとる手も軽き笹ばゝき

みだれねばならぬ姿のすゝきかな

呑くひにふくれてねたも月見かな

身ふるへばほこり立也ひるのしか

手ぬかりも今日に成けりきくの花

船中

月澄や暈む手につく薄ばおり

柿園評月並（慶応二年）正月分 句員九百

天十六点 十湖 地十四々 梅明 人々 花陵

尽詞之部—九十二句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

雲ひとつ無ても降る寒哉

青空に鶴なく霜の夜明かな

馳道

ミッケ

文所

ミッケ

可応

横スカ

千広

タンノ

水巖

横スカ

美松

柿園

催主

長松素

楓

風里涼

三サハ

馳道

フクデ

晴笠

田のうへを棟木曳する氷かな 大サカ 千広

蝶追うて居ればまねくや渡もり 中泉秀学改何 羨

向ふにも見る人のたつ柳かな 、 春水

ぬくく〜と日の当けりふきのたう 中善地 十湖

気もつかでゐれば来る也節季候 カナヤ 梅春

造化之天工部 高バタケ 寸固

はなやかな岬のゆきや初日の出 ミソノ 席風

人殖たやうにおもふや花のはる ○

松ばらもある町中や春の月 柿園

柿園評月並（慶応二年）二月分 句員一千六百余

催主 素長 松里

天十六点 一記 地々 涼月 人十四々 真猿

尽詞之部―百六十三句掲出、翻刻省略―

揮毫之部

春雨や雀はさほどぬれぬ声 スンセト 華長

出もよひしことはわすれて春の山 ナルタキ 帰童

逢たがるねこ抱てゐる主かな 中善地 玉水

呵られて鳴直しけりうかれ猫 、 古勢

しかられて笑うて出るや華の木戸 天方 志風

菜のはなの果に一軒「そ」め家哉 犬居 朝霞

渡りこすこゝろに成や春の川 天リウ 朝霞

花のやど今客来るとさわぎけり 笹原ジマ 可応

ひと持籠てふとぶ中へ明にけり ○

ぬれたがる様なつれ也花の雨 中泉秀学更 何羨

今日ばかり寝酒にはせぬ社かな 一 記

唯もよき崖のけしきを梅一樹 スンセキガタ 志扑

牛の背にゐてもらひけり桃の花 、上ヤブタ 遠花

夏ちかしほたるちらほら草のやみ 、フチ枝 翠山

おひに札つけたる供や春のくさ 、 嵐馬

山吹のひまより白しさらし布 川西ニシガサキ 露松

雪どけやころく〜落る山のつち はらわた 一圭

腸にしむやねはんのかねのおと ヨコスカ 扑之

松杉の夜明はまたぬさくら哉

たまくも晴れば花の散日かな

馳道

鶯につまづく音を聞れけり

ヲカザキ 如雪

松曳や撰でみれば野もせまき

、白鶯

初雷のはや落もした噂かな

スン兵太夫 月彦

十分に田にもかゝるやはるの水

シノバ 送雨

造化天工之部

万才のわらひ残しを咲けり

池新田 佐略

ひとつねり散花とほる嵐哉

青水

ふみ出せば一里も旅ぞ笠にてふ

西ノシマ 燕里

起かねのうらみはしらず猫のこひ

扑之

○

夜はよくも明ずほちく花の露

柿園

陽炎やあとなきものゝめにとまる

【備考】以下に入木して嵐牛の発句七章を載せる版と余

白の版とがあり、ともに匡郭外に次の告知を載せる。

月並之儀、刻料等追々高直(ニ)相成候(ニ)付、

当三分分より一組入式四十二字(銭)づゝに相改申

候。尚、銭通用まぢくにてこまり入候間、暫之中、

天保・文久ビタ一文之外ハ御断申上候。

慶応元年(一八六五)閏五月五日、江戸幕府は銭貨不足の対策として、真鍮銭・文久銭・銅小銭の歩増通用を別表のように決めたが、混乱は収まらなかつた。ビタ一文は鉄銭に当たる(『幕末御触書集成』第四卷)。

種類	歩増
真鍮銭 [4文]	12文
文久銭 [4文]	8文
銅小銭 [1文]	4文
文銭・耳白銭	6文
天保銭 [100文]	100文
鉄銭 [1文]	1文
精鉄銭 [4文]	4文

柿園評月並(慶応二年か)三分分 句員三百余

催主

杜送山

逸雨竹

天十四点 月笑 地々 以行 人十三々 旦齋

尽詞之部—四十三句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

はる雨やせまき処に置ごたつ

里格

いそくさの香にたつ夜もおぼろ月

ムラマツときは

田つくりやはねたまゝなる反工合（そりくばひ）

月笑

さくら見や翌のはらみつしてもどる

ユカザキ 五嶺

はだかにはしてもふさがぬこたつかな

貫一

なの花や道をふさげるつなぎ牛

旦齋

造化天工之部

陽炎やわすれて過し活午房（生）

階梯

我声に調子づきけり田のかはづ

スンハナシ 貫成

○

藤さくや魃（うつくひ）飛瀬のゆふぐもり

嵐牛

人なれのすしよりはやし店奴

【備考】「慶応二年か」とした送雨ら三名催主の月並「三月分」「七八両月分」は句員が僅少で、応急の催しか。

柿園評月並（慶応二年）四月分 句員二千二百余

（催主）

素長松 涼風里

天十四点 駿嘉 地々 芦城 人々 晴雀

尽詞之部—二百十三句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

酒につけ茶につけ春をゝしみけり

玉見

持出した銭の威勢やはつがつを

松風

隣のは来たとて待る玄鳥（つばめ）哉

竹雅

はらくと来にけり花の根なし雨

佳風

きれば水ことしもかゝる柳かな

フクデ 知道

風てらく氷頻りに流れけり

梅寿

生（いけやう）様の下手をかくす柳哉

梅屋

皆如来の様にもおもふやなぎ哉

シマダ 竹香

うたのみの手伝も来る茶つみ哉

松里

桴（いかた）にもおせて貰（かか）うて花見かな

弄我

利（き）さうなあと（あか）の赤や二日灸

雨逸

青ぬたや風邪のぬけたる口あたり

雨逸

かたすみにひかえて母のひゝな哉

モリ 一 圭

つぎ下手の終におや木もからしけり

あられ

ぬりたてを覗てのくやすゞめの子

茶 烟

さくらにも酔たふりして戻けり

景 山

能井戸をもち崩しけりもゝの花

スンセト 如 徳

入たがる玄鳥待せて朝ねかな

ゝネギシマ 孤 舟

造化天工之部

昨日ほど今日も吹也春の風

モリ 炉 雪

ぬるむ水 鯉はちくくうきにけり

馳 道

下駄がけで江戸をふみ出す梅見かな

扑 之

花ふゞき水にも見事積りけり

スニ一色 長者丸

ゆ座敷の先や四月の花が咲

何 羨

○

灸屋から暮てもどるや春の雨

嵐 牛

柿園評月並 (慶応二年) 四月分 句一千四百余

催主

素長 涼風 里

天十六点 竹雨 地十四々 馳道 人々 露碩

尽詞之部—百四十六句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

ほたる見に出るや子供と泊り客

西 石

浮魚のはなにすり行玄鳥哉

シンデ 琴 浦

雫の雨には逃てもどりけり

可 応

手ぐり出す様に風吹柳哉

石 清

降出して今日かといふや席が雨

おなじく

日盛や滝に打れてひとやすみ

天方 花 風

覗かれもせぬ人がらやつくまなべ

馳 道

わか竹や枝もふらずに伸いそぎ

々 々

しぶくくの雨や火串の燃残り

椿 谷

白波や卯月曇の伊良古崎

椿 谷

地むしつる顔には罪も無りけり

扑 之

筍やおのが雲越根のしめり

ミノノ 帟 風

棟上のもちなげこすや桐のはな

中ゼンジ 風 哉

吹つけた様にとまるや松のせみ

素 涼

雨晴やひとつふたつのはつほたる

カクワ 兎 角

造化之天工之部

着て過し昨日のをしき裕かな

スシマダ 竹香

聞人にはつ音は有やほとゝぎす

何羨

あやめゆはおもひがけなし旅の宿

花遊

尼寺やたしなき畑にけしの花

中センジ 露桂

○

兄を打弟もある安居あんじかな

嵐牛

柿園評月並（慶応二年）五月分 句員一千八百余

天十五点 孤舟 地々 馳道 人十四々 孤舟

催主 長素 涼風  
松里

尽詞之部—二百二十二句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

嵩かみかけていふや祭のなべのかず

スシマ 延松

うぐひすやかはらぬ声を老て迄

遠花

梅雨（蛇）ばれやへみ伝ひ行笹のうへ

風月

すゞしいといひくまはる社かな

モリ 佩玉

水の出るさわぎに明る短夜哉

古勢

念入て蚤ほどの物ひねりけり

何羨

蚊にたくや庭木造りしはさみ屑

小ジマ 旭斎

つまづいた木根きねかき行かの子哉

涼湖

わか竹の雫ほちく月夜かな

水旭

打水をとめて一杓もらひけり

西石

ひるねした顔松風に吹せけり

月彦

結ばれてみたきわざ也布ざらし

孤舟

起し人も頼て入やひるねの間

一勢

出たまゝに曇る朝日や桐の花

雪竹

透すきもなき人の中行けいば哉

翠竹

一本の苗をはやしのほたるかな

馳道

居ぬといふ鹿兒かのこ顔出す小笹哉

玉見

造化之天工之部

かるの子やふね扱ばまた一羽

スシマ 玉見

あやめふくやねに日和の目利哉

ヨコスカ 水竹

起したるわびしてもどるひるね哉

欠川 竹雨

雇人の覗やとひとき歩行あらくや土用ぼし

可応

まねく手の風にそれ行蜚かな

孤舟

白雨ゆふだちや河岸は魚荷うまのとり捌さばき

馳道

○

駕かじのゆめさめぬほたるの膝にちる

嵐牛

柿園評月並（慶応二年）六月分 句員二千二百余

催主 松長里  
素涼

天十八点 旭齋 地十六々 梅雪 人々 朝光

尽詞之部——二百五十一句掲出、翻刻省略——

揮毫之部

夜の明て何処へか行し蜚哉

打上 梅屋

俄ばれにはかぐもりやせみしぐれ

スンセト 流翠

どう見ても葉がくれに成うきき哉

、 玉見

笠ぬぐや松は夏野の拾ひもの

、 華長

朝さうぢする中とほる蓮見かな

フクデ 知道

夜水くむ女の声や夏の月

三沢 馳道

蚊も蚤もしらぬいびきや男部や

々

酒の座へみせくうゝる門田かな

雪竹

はだか身にかゝへてもどる西瓜哉

西郷 鶴遊

巢立あと覗に来るや親つばめ

川上 一豫

いつか来て雀のよごす干飯ほしひかな

目木 柳古

ほとゝぎす寝るほどの夜も無りけり

高ハシ 井園

よけた日のすそ元回るひるね哉

成タキ 一勢

はたく(注2)と幌ほろ舞まひまつる暑かな

カナヤ 双楓

笹に手のゆけばこぼるゝほたるかな(注3)

カドヤ 放齋

一かすり上の声也ほとゝぎす(注4)

中ゼンジ 十湖

東とけば我からのばふあやめ哉

木舟 一哉

虚空蔵の俵はひ出る暑かな

スンネギシマ 松栞

冷しおく水より清し心太

ミソノ 帚風

ほとゝぎす(注4)なくや厚とほかりさしおくれ

素涼

雲のみねぬな萼なはほちく咲にけり

ヨコスカ 金英

ほとゝぎす鳴や降出すしほ頭

カドヤ 南海

みられにも出たる枯木のかんこどり

松栞

造化之天工之部

夏瘦むしこや虫籠むしこひとつを遊あそわさ

スン青シマ 延松

おもふより見たればちさし閑呼鳥

馳道

秋風や蓋のこぼるゝうるしまけ

欠川山 湧

寝をしめば樹かげに成ぬ夏の月

ヤカハ 千鶴

造化之天工

もどりぶねすしの殻箱とゞけゝり

一記

井戸ほりの吞て寒がる新酒哉

りかく

茎ながくたわむやゆりの二つ咲

双楓

朝さむや時計の水の盛こぼし

柿園

寝過した蚊帳しぶく昼けり

旭齋

朝さむや時計の水の盛こぼし

柿園

○

ぴんとする菜の辛みも土用かな

嵐牛

柿園評月並（慶応二年）八月份 句員一千八百余

柿園評月並（慶応二年か）七八両月分 句員二百章余

催主 素長 松里 涼風

天十三点 花融 地々 呑湖 人十一 古勢

催主 杜山 逸雨 竹

天十六点 水旭 地々 翠竹 人十四々 加羊

尽詞之部—百三十九句掲出、翻刻省略—

天十三点 花融 地々 呑湖 人十一 古勢

揮毫之部

尽詞之部—二十九句掲出、翻刻省略—

往た人の明ておきけり月の門

雨逸

揮毫之部

尻声は風にとらるゝをじかゝな

久登

朝さむや野守の家のひと煙

花融

坂下る馬はちんばか朝のきり

鯨巴

机ではかきにくがるや星のうた

里格

勝にけり今朝もはなしにした角力

亀堂

木のはくふむしをこぼすや初嵐

々々

待よひや酔せてかへす松づくり

梅子

明たてもせぬ戸の有や月の宿

呑湖

河越た足猶高し朝のしか

旭齋

はつたけや出たとおもへば早すがれ

おもふより遠く行けりはなし鳥

入た日の真赤にうくや二日月

ひく先の人後むくなるこかな

切筆の紙に音する夜寒かな

いそびきや人もいわしも砂まぶれ

木つゝきや知た人なき松のとし

中(注5)くみやうき世しらずの寺をとこ

今遣ふほどゝらせけり庵のいも

造化天工之部

ひき切て眠りのさめしなるこ哉

無袖も子供はふりてをどりかな

何ひとつせわも残さず行玄鳥

ひくい日にてらるゝ坂やはぎの花

○

いねへとてさそふきげんやあさ雀

十分の闇の中より廿日月

柿園評月並 (慶応二年) 九月份 句員二千余

亀 角  
青 水

古 勢

円 友

都 友

一 山

金 英

岳 丈

金 升

竹 香

清 橋

竹 月

嵐 牛

天十八点 雨石 地十四々 喜齋 人々 青水

尽詞之部—二百九句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

きつとした日和に成ぬ小鳥がり

祭見しはなしもなく柿くらひ

松ひと木立たちや花火のあがる方

わせのかやつゝみの腹(堤)の流行神

露しぐれ明るきほしの流れけり

背中から夜の更て来るほた火かな

あり明や顔なでゝある枝のさる

行秋やとなり迄来る流行咳

つきべりもしさうでへらずことし米

おさであるのが親らしきめじろ哉

朝日から暑き岨そは也はつもみぢ

ほちくくと柴はむ月の兔かな

催主  
松素長  
里涼風

大セ 禾 山

小 竹

水 巖

翠 竹

十 湖

中泉 よし也

旭 齋

可 応

梅 城

孤 舟

井 園

丹 雅

大寺のよさむやひかる柱かず

大サカ 素月

月の雁矢橋を横にくづれけり

スンプチ枝 竹介

赤いのを女のほめつきくの花

、 真猿堂

大沼やいつか渡りて雁四五羽

、 真猿

二度子まで無事で育て行つばめ

ヨコスカ (倉) 曉 嵐

くしざしの魚の泡ふく夜寒哉

喜 斎 古

ひた／＼とよる計也月のなみ

大サカ 千 広

新わらの上やころりと鶏の卵

喜 斎 古

造化之天工之部

菊の日や女計の料理方

雨 石

櫃のみや水に落てもかたき音

水 静

柿までもきるつもりにてかし座敷

椿 谷

闇がりへ水汲にゆく月見哉

青 水

かける手に鳴音のひゞくうづら哉

スンプチ枝 延 松

○

朝夕や待たすゞげもはやわびし

嵐 牛

柿園評月並 (慶応二年) 十月分 句員千七百余

催主 素松長 涼里風

天十九点 庭列 地十六々 雨逸 人々 雪鷺

尽詞之部―百五十三句掲出、翻刻省略―

揮毫之部

みの虫や鳴ずに居ても秋のさま

ミツケ 柳 翠

遠浅や登る水波にねぶる鶴

書 山

冬ごもり流行風邪をもひかぬ也

ナルタキ 鯨 巴

門前の家にぎはしき冬至かな

对 雅

むつくりと土竜の土やけさのしも

中方 春 谷

河啄(豚)さげて道々人に見られけり

スンプチ枝 静 溪

すゝ掃た夜や火哉(注6)くらたくゐるり

々

日の出見てすつくり立やゆきのしか

モリ 乙 雅

橇(かんじき)や歩行(あるき)よいかと履(はい)て見る

スンプチ枝 水 巖

たくはたの端をかりねの枕かな

スンプチ枝 一 記

算日(かぞへび)に成ても得手の朝ね哉

、シマダ 習 静

島山のけぶりひとすぢ小はるかな

雪 香

朝の日の登り榮する冬野哉

タカラ 玉露

折々は月にも成てさよしぐれ

嵐山

造化之天工部

多うする肩がふくるゝ紙衣かみこかな

旭齋

起るまでゆすりてみるや雪の竹

中方 晴山

○

十月やいほはもみちの曠はれびよ日和

嵐牛

柿園評月並（慶応二年）十一月分

—催主名欠—

天十九点 柳月 地十六々 春夢 人々 湖山

尽詞之部—百五十三句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

くらがりにへつよう打也をにの豆

青水

こほる夜やすゞりにあはぬ墨の音

土方 理学

巻はつるこよみに配る計也

清橋

ぬれて来た人とみかはるほた火哉

ヨコ山 晴江

火のしの火明あけてこたつにあたりけり

久登

呑ぶりにかくしごゝろや玉子酒

雨逸

雪打のこだまひゞくやつりともし

何羨

猶こはくおもふや河豚のうれ残り

梅屋

手伝うてみたき日和や大根引

柳月

たゝむときさうじ障子にひゞくふとん哉

雪香

後から見人みてのくづるゝ神楽哉

吏石

造化天工之部

つきかけたもちやめて併斯下しけり

可応

嘲もくふとくはぬやふぐと汁

ハシバ 三余

○

あすが来ふば翌日の事せん冬ごもり

嵐牛

柿園評月並（慶応三年）三月分 句員一千四百余

催主 青山 湖山

水山

天十八点 梅秀 地十六々 梅子 人々 円友

尽詞之部—百四十五句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

風情もつまでの事也夕柳

直夫

そよ／＼と風も吹也花日和

伊水

をらせぬといふ間に花はちりにけり

々々

鐘もつれさうなやよひの日和かな

白鷺

山水のとく／＼落るしげりかな

長風

もちかへて猶ひきづるや藤の花

文海

馬の爪きりちらしけり桃のかげ

々々

あちらにもぬれてみてゐる柳かな

琴雅

伏穂からひよく／＼出るやはるの水

玉見

なる鍋に遊せてあるしゞみかな

月彦

行春と野をみてゐれば暮にけり

試雪

田つくりやはね出た様な升こぼれ

逸波

春のよやをしい事には明やすき

雪香

藪入のもどり安さや里なまり

梅城

造化天工之部

うぐひすの鳴そこねても初音かな

佩玉

花もりは咲たもしらず遅ざくら

井園

山吹やひさくさしたる井戸のかき

梅秀

○

宮守の錆錠たゞく茂かな

嵐牛

素畳に暫しねてみる袷かな

柿園評月並（慶応三年）六月分 句員二千余

催主  
湖青長  
山水風

天十六点 富春 地々 梅柳 人十五々 少風

尽詞之部—百八十三句掲出、翻刻省略—

揮毫之部

降たほどしめらぬ雨や瓜の花

文水

釣た衆もまじる一座や初松魚

亀角

草にしたたふすもをしきあかざ哉

一山

ひそ／＼とはへおうてゐる神馬哉

丹峰

机にもひとすぢ松のおちば哉

雪鷺

苦にもせず児は寝入けりはへの中

井園

蚊遣したあともはらはず男部や

見水

麦秋もしまふや寺の大さうち

カケ川  
都友

ねた家や聞ばうつはの音のする

薬ほど呑てもおかずあやめ酒

ひるねしてしぶくがほや秣かひ

わらくさきけぶりの来るや木槿垣

かはほりや炬にふすべるいはや口

沢瀉や水おとしやる井のつまり

かはほりの今までゐたり下地窓

眠きめも最うかくされずせみの声

造化天工之部

おちつけば蝉もすゞしき木下かな

降すてゝ有やうき葉に夜の雨

あぢさゐや海蘿煮て有椽の先

残月や羽おりに付し柳の葉

○

ぬれ椽にしきもの待や三日の月

スンセト

涼月 梅隣

シマダ

松霞 無石

下小バヤシ

長風 一桜

欠川松里改

清風 富春

少風

梅春

東松

富春

嵐牛

柿園評月並（慶応三年）七月分 句員八百余

催主

湖山 長風 水

天十七点 井園 地十六 暁嵐（人）々 松鶴

尽詞之部——八十二句掲出、翻刻省略——

揮毫之部

見ぬふりをすればものくふ鹿児哉

雨はくもまたでをどるや宵のかど

おし水のあとやひよいく芒のほ

鎌どめもすゞめはしらずみのり取

裏ぶたと一所に落るひとは哉

むし鳴や亦もえあがる捨かゞり

飛入の下おびゆるき相撲かな

おく露の音する迄にすわりけり

小いわしやまけたくにつかみどり

くるゝまで吹もよわらず秋の風

造化天工之部

露明りして肌寒き野道かな

ヲカダ

石清 霞碩

湖山

馬旧

梅谷

水音

一山

梅秀

井園

さげて行ばたにからげる小蝶哉

梅 秀

○ 蓋あけた櫃はから也きりぐす  
(注8) 能空(注8)や便船もらふいねのうへ

嵐 牛

【備考】最後に収録した慶応三年七月分には、同じ湖山・

長風・青水の三名が催主を勤める別の七月分(年次未詳)の丁摺も伝わる。寄せ句数が一千句で、天が丹峯、地が逸波、人が砂白、軸の嵐牛句は

かきの花ちるや蛙のぬらす庭

かわいたる音してちるや竹の皮

で、ダブリの理由は不明。

(注1) 濁らして…この句は、『そのまま集六編』に作者知碩とある。120ページ参照。

(注2) 幌旃舞：推読。武者が合戦の時に身につける母衣(ほろ)(幌とも書く)を纏って舞を演じ、奉納する祭りが遺つており、それを詠むか。

(注3) 一かすり：少し上つ調子の鳴き方。

(注4) 辱：「戸」と「計」の合字で、「とばかり」と読み、暫時の意。

(注5) 中くみ：古酒と新酒の中間に醸造、酌む酒。季寄『俳諧をだ巻』(元禄四年・一六九二刊)に九月とする。

(注6) 火哉くら：意義未詳。火を焚く様子の擬態語か。

(注7) 鎌とめ：領主から刈り取りを禁じられた状態をいう。

(注8) 能空や…この句は椿谷宛書簡(嵐牛書簡集)(七)所収)に慶応三年六月分の月並丁摺の軸句「ぬれ椽に」とともに付記されている。

柿園摺物集

一 万延二年春興

【書誌】 奉書、横半切り。挿絵は「春隆（印）」で、朱・青・墨の三色摺り。本文巻軸は嵐牛。版下筆者不明。奥は「辛酉（万延二年・一八六一）のはる」。底本とした大竹裕一氏蔵本には袋（包紙）が備わり、「ひなのはる」と題が摺られる。

【解題】 柿園一門の春興摺物で、万延二年（一八六一）刊行。前半に遠江・三河両国の卓池門重鎮らの句を並べる。

画者の春隆は羽鳥氏。遺歌集『彩園遺稿』（明治三十二年）の序跋によれば、もと津島神社の神官であったが、職を解かれて上洛、国学・和歌とともに復古派の浮田（宇喜多）一蕙に大和絵を学んだ。元治元年（一八六四）七月、禁門の変の兵火を宇治に逃れ、やがて尾張国に下つて熱田政林寺（しょうりんじ）の宜慶禪師の許に寓し、その地に定住することになった。嘉永の頃、国学の知己石川依平を頼つて遠州

に流寓、依平像や嵐牛像（焼失）のほか、嵐牛らの俳諧・和歌短冊に下絵を描き遺している。句集贈来の嵐牛メモ帳に、門人らに託して金三分を京の春隆に送つたり、伊勢参宮序でに金銭を渡すよう依頼した文久二、三年（一八三三、三）頃のメモが見え、文通で摺物の挿絵を依頼していたことが判明する。春隆は明治十七年の没（68）。

【翻刻】

着替ずに出たをはぢるや

若菜つみ 完 伍

江の柳今朝のひと雨

はやけぶる 春 芙

日になれて流れ次第や

はるの水 塞 馬

日永しとみればとほるや鷺一羽

二月（まごころの月）やめやすく成しやれおすま

舞てふや澄きる空へきえて行

下草も青む柳のしづくかな

つみくさのこぼれてあるや町はづれ

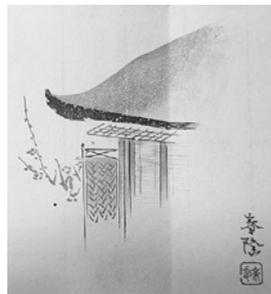
貞 山

蓬 宇

鳥 谷

聴 雨

筌（せん）露（ろ）



まじはりや海苔(のり)一牧(枚)をむしりあふ

杜水

いはゝれた水髻(ももどり)にのこりけり

貫一

初夢をおもひ出しけりより柱

知碩みながく

書ぞめや筆子の礼をうけながら  
二月(ふたつき)も梅のさかりの在所かな

鶴明

打くたく音や種井の氷のためし

山竹

わかな籠(かご)さげてよりけり行もどり

均堂

養父(やふ)入の門からくれる土産かな

岳丈

万才のほめてくれけり家づくり

閑里

おさへてもみる初夢のまくらかな

涼雨

はつ夢やまだみぬうちのたのもしき

送雨

蟻(あま)はふや水にほつとりうつる雲

燕居

つみに出るまでのさわぎや初わかな  
つら杖にゆめ見る宵や啼かはづ

三千丸みちまる

乙鳥(つばく)の来れば必よき日かな

其常

春の雪思ひもよらぬ朝つもる

敬山

眠い目をさまして寝るやはるの雨

四山

折ふしは眼にかゝりけり孕(はらみ)じか

秀山

元日とおもへば空もたゞならず

梅春

野の末をながるゝ水や夕がすみ

藤丸ふじまる

いねあげやさうじ明れば能日(よき)さす

雨竹

ふさがずに置いてやめたるこたつ哉

桃寿

すぢかひに居(すま)る机も恵方かな

松溪

水(き)まさやふと来し蝶の羽にくるふ

雨好

ゆるやかな声のはこびやはつがらす

里桂

鳩(は)なくや東風にそぼく降小雨

静嘉

長うひく声や今年へうつるかね

野乙

ほのふくと人顔白し齒(は)架(だ)に風

然山

あじろもる顔もせぬ也梅のぬし

晴笠

はつ春や伊達着揃(きまらひ)しすまひとり

平台

降(ふ)はふる遊先(あそびさき)あり御代の春

石翠

暗がりにとぶ腹しろき蛙かな

嵐牛

霞とはおもへど寒し山おろし

辛酉のはる

二 文久二年春興

【書誌】奉書、八ツ切り。挿絵、茶・朱・墨の三色摺り。画者の落款印二顆が捺されるが、不鮮明で難読。巻軸、嵐牛。奥、「文久壬戌（二年・一八六二）はる」。故田中明氏蔵本による。

【解題】文久二年の柿園摺物で、春興八句を収める。

【翻刻】

上じやうの間まや蓬菜ほうさいの外何もなし 素涼

むだ鳴なはませずさずがに

初はつがらす 為政

松しょうひきやよこるゝ裾を

苦くるにもせず 欣露

いとま乞せすれば出てありはるの月

遠里とんりの火もみゆる夜ぞはつかはづ

やぶいりの肩たゝかせて宵寝かな

打うちことしてうつ里の齋かな

伐き枝えだの登れば遠き柳かな

文久壬戌はる



涼送 素文 送雨 知碩 嵐牛

三 文久三年春興

【書誌】奉書、八ツ切り。挿絵は薄青と墨の二色摺り。画落款印、「松案古」か。版下、嵐牛。奥、「みづのとの亥（文久三年・一八六三）のはる」。故田中明氏蔵本による。

【解題】雨洗・尺波・嵐牛三名の小摺物。雨洗は未詳だが、文久二、三年に尺波（足立孫八）、その本家水音（足立孫六）と嵐牛捌きの連句三巻ほどに同座する。句も、この年、水音が丹野の三橋家から養子入りするのをうけ、花聳に水を浴びせて祝う正月の風習を詠んでいる。仲人役を務めた人物か、水音の兄三橋四郎次かであろう。

【翻刻】

水みづそれていはゝぬ袖も

ぬらしけり 雨洗

あてにするさきもおぼえぬ

いそなかな 尺波

雪ゆきちらゝく

野のは朝からのなづなつみ 嵐牛

みづのとの亥のはる



四 文久三年夏興

【書誌】奉書、横四ツ切り。挿絵は梅春筆で、青・茶・黄緑・薄墨・墨の五色摺り。軸句、嵐牛。奥、「癸い(文久三年・一八六三)の夏」。故田中明氏藏本による。

【解題】金谷連中と催した夏興摺物。軸前のみがく(塋)は俗名住川藤藏。嵐牛の一歳下で、前号は金波。「八百」は月並句合では八百子とも記される。みがくの妻か。この年夏、みがくらと連句を巻いているので、その折、発企したものであろう。「俳諧どめ連句一覽」参照。

【翻刻】

のび揃ふ太藪の先や

五月晴 梅 春

遠近の声つれあふや

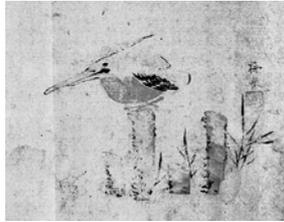
枝かはづ 一 湖

霞見て居れば動くや

芻釣瓶 寿 山

動かねど風振見ゆる「柳」かな

送り来て船は涼しう帰りけり



八百

みがく

行人に虹かけ移る夏野哉

癸い(文)

嵐 牛

五 慶応三年春興「美都組」

【書誌】奉書、横四ツ切り。挿絵は春隆筆で、紫・柿・砥の粉・薄墨・墨の五色摺り。版下、嵐牛。「丁卯(慶応三年・一八六七)のはる」の奥。底本は足立順司氏藏。大竹裕一氏藏本には袋があり、表に題が「美都組」と草体で摺られる。足立氏本と同版だが、膝の部分の紫色が濃紺となっている。

【解題】柿園一門の春興摺物で、慶応三年(一八六七)の刊行。

挿絵画者は、一の解題を参照。此君は晴笠別号。

【翻刻】

ふればふる 春隆(印)

雪うめ遅し

今朝のはる

此し 君



遊ぶさま巢ちかき鳥と見えにけり  
 おぼろよや四五本づゝの竹のくま  
 梅くさく成やさうじ(障子)のすきまより  
 手のとゞくだけむすばるゝ柳かな  
 うぐひすのなくやふろしきみせのうち  
 わかもちやふせやにゝくきおとのする  
 梅咲て誰をもとほす座しきかな  
 ゆきのうへはるめいた日のあたりけり  
 ほうらいやいつもどほりのおき所  
 ほろくゝとなくや田にしのみづ離れ  
 たしかにはなけれどたしかはつ蛙  
 啼なくきざしあるうぐひすか尾を立る  
 はつぞらや少し霞もうるはしき  
 うぐひすや筆をとらんとするときに  
 寒けれど机はうれしうめのはな  
 はるたつや雪にはまけぬ人ごゝろ  
 初てふのとび和らげる日和かな  
 うかゝと都道にて松のうち

ふじ丸まろ 尺波 素涼 佩玉はいぎよく 水音 文牛 春谷 橋夢 梅曉 梅明 積山 すんか かせつ 試雪 秋江 小竹 梅子 石翁

地あらしやうぐひすあらし声のきれ  
 まち中にふなおさへけりはるの雨  
 おさがりのよひやひそくもるはなし  
 かれて居野ゐるへおろし来るひばりかな  
 鶴がなく田づら一日かすみけり  
 丁卯のはる

乙雅 竹 梅春 其常 嵐牛

六 慶応三年春興

【書誌】奉書、横四ツ切り。挿絵は東峰筆で、薄墨・青・薄茶の三色摺り。軸句、嵐牛。奥、「丁卯（慶応三年・一八六七）はる」。故田中明氏蔵本による。

【解題】慶応三年、島田連中と催した摺物。雲水良大（翌年、芭蕉堂七世を継承）は来遊中で、嵐牛日記の二月四日〜七日に島田出杖と良大の句、十二日に摺物代の記事が見え、摺物は江戸に発注したことが判明する。

【翻刻】  
 おちづのや拾うた人のあてゝ見る 梅城  
 大かたは木のはの色ぞかむこ鳥 つかさ

さげて来た風呂敷とけぬ

西瓜かな 緑 香

雪のふねみなけぶらせて

もどりけり 梧 月

もらはれしあとの穴あく

ぼたにかな 友 清

つちにゐた様な色なしあらひ筆

光 谷

あかぬひのなるこならして戻けり

風 月

にのうまやこれらが春のひろひもの

竹 香

かひ間見のかほでする座へほたるかな

月 彦

をしむとしかね聞よはとまで成ぬ

一 記

背に雪は積るに鳥のうきねかな

至 山

常盤木のやみの中もおそぞくら

流 翠

松の月おぼろと成てふけにけり

習 静

たなはしの草に沈むや五月あめ

砂 白

草もちやむしろのあとをうらおもて

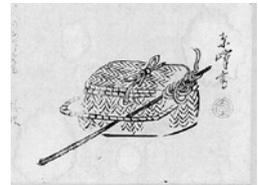
雪 香

はつゆめやこゝで見たれば爰の事

雲水 良 大

かもめなく田づら一日かすみけり

嵐 牛



丁卯はる

七 明治二年春興「うめびしほ」

【書誌】奉書、八ツ切り。挿絵、圭岳（印「原甫」）。薄

茶・薄緑・墨・薄墨・黄・朱の六色摺り。大竹裕一氏お

よび藤枝市郷土博物館蔵。後者は袋付きで、「うめびしほ」

と題を摺り、左肩に嵐牛の筆で「流翠君」と書き込む。

【解題】晴笠が催した明治二年の春興摺物で、巻頭が晴笠

（大竹清一郎）、ついでその妻きみ女、息知足（同氏清太

郎）、弟春谷（同氏万吉）、巻軸が嵐牛で、奥は「つちの

との巳のはる」。

なお、挿絵の画者原田圭岳は、大竹家に芭蕉翁の肖像

画（賛は芭蕉の句で、嵐牛書）および晴笠の肖像画（明

治二十年筆）も遺している。東京の本所一ツ目弁天横町

の住。四条派。

【翻刻】

圭岳 原甫

それはごをあふぎにうけてもどしけり 晴 笠

月のさす窓から梅のかをりかな

降雪の中にもわらの

けしきかな

知足

日当りに氷をふるふ

根芹かな

春谷

たるゝ羽をしめく

眠るこてふかな

嵐牛

つちのとの巳のはる

(注一) しめく…メ々(自筆一冊本「嵐牛発句集」)。

### 八 明治二年春興

【書誌】奉書、横八ツ切り、金箔散らし。挿絵画者は未詳、落款印は「<sup>温</sup>盞古」。朱・黄・墨の三色摺り。軸句、嵐牛。奥、「巳のはる」。故田中明氏蔵本による。

【解題】大竹晴笠・春谷とで発行した春興摺物。奥は「巳のはる」とのみで確定できないが、晴笠らの俳歴や他の柿園摺物から明治二年と判断される。

きみ女



### 【翻刻】

おぼろ夜や谷ぐち

のぼる魚の音 晴笠

やくそくも

せぬ人まつや

春のよひ 春谷

草の戸や海苔あぶるにも火ごしらへ

巳のはる

嵐牛



### 九 首夏摺物「むらわかば」

【書誌】奉書、横四ツ切り、銀箔散らし。袋題「むらわかば」。軸句、嵐牛。「み(明治二年)の首夏」奥。藤枝市郷土博物館蔵。袋の左肩に嵐牛の筆で「流翠君」と書き込む。

【解題】この年夏、颯川・文外らに招かれて連句を巻いているので、「俳諧どめ連句一覧」(参照)、与左衛門・兵太夫などの連中の要望に応じて発行したのであろう。

【翻刻】

けふひと日風も葵のかをりかな  
みほさきや茂りにつゝむ朱のとりゐ

声さへも真似ぬ声也ほとゝぎす  
公まろ

あぢさゐに水も夜明の気色かな  
素節

ふらでさへ名はあるものを帛が雨  
拙水

夏瘦のかほ塗ぬりばこにうつりけり  
雲眠

筆紙もよごしちらしてひるねかな  
花暁

蛸ぶゆはらひつゝよみ終る陀羅尼哉  
景松

五月雨にひとしほひくき伏家かな  
颯川

あわた注1口も草臥る日やわかかへで  
嵐牛

みの首夏

(注1) あわた口：粟田口。東海道で、山科から京への入口

に当たる。

十 明治三年秋興

【書誌】 奉書、八ッ切り。「庚午（明治三年）秋」奥。

藤枝市郷土博物館蔵。

【解題】 十湖（中善地）、岱阿（薬師）ら天竜川西岸の連

中による秋興摺物で、嵐牛句を巻軸に据える。

【翻刻】

ほし合は宵寝ををしむ始かな  
十湖

紅葉見る人や酒にも酔た兒  
良梅

風寒うくれて月夜の雁の声  
一鳳

笠覗く横もの暑き紅葉かな  
岱阿

三日月や手近きものは萩すゝき  
嵐牛

庚午秋

十一 明治四年春興

【書誌】 奉書、横四ッ切り。挿絵は「辛未（明治四年・一八七二）早春／南山（印「寿」）。青・緑・朱・薄墨・墨の五色摺り。版下、嵐牛。故田中明氏蔵本による。

【解題】 藤枝など駿河連中と催した晩年の摺物。明治三年に大井川の渡し場が廃止、駿河への出杖は頻繁となる。

【翻刻】

地けぶりに雨のふり込柳かな

颯川



辛未早春  
南山<sup>㊦</sup>

万歳やおぼえてゐたきこともいふ  
汲だゞけくぼむやう也はるの水  
野一ぱいはるの水なり日のひかり  
（注<sup>1</sup>）  
そりさうな鶴にかゞむや齋つみ  
あとからもつゞく声ありはつがらす  
山畑や木のはまじりのしつけ麦<sup>（注<sup>2</sup>）</sup>  
うちもせぬうちからうたふ齋かな  
はやき人年々はやき御慶かな  
児のとしを羽子板うりにとはれけり

菫 中  
菊 明  
雲 眠  
一 記  
松 堤  
如 水  
一 岩  
吉 夢  
閑 子

積やうも家の役あるとし木哉

子 桐

橋もりもまだぬぬ朝の柳かな

声 格

とし越やゐろりのきはの小酒盛

貞 花

用なしもねてはをられずもちの音

茶 烟

そこらにはなき花のちるふもとかな

松葉更 雲 泉

横雲のはしから見ゆる柳かな

嵐 牛

（注<sup>1</sup>）そりさうな：逸れそうな。とんでもない方へ飛んで

行きそうな。

（注<sup>2</sup>）しつけ麦：畑に種を蒔き、栽培する麦。

十二 為一追善摺物「ゆふもみぢ」

【書誌】奉書、横半切り。袋題「ゆふもみぢ」。挿絵は南山筆で、緑・薄墨・朱の三色摺り。「壬申（明治五年・一八七二）夏」奥。真齋書。藤枝市郷土博物館蔵（青島流翠旧蔵）。

【解題】瀬戸住、為一（前号、玉見）追善の摺物。巻頭の脇起こし追悼の五十韻は、流翠筆により明治五年の『俳諧どめ』に収められる（『俳諧どめ連句一覽』参照）。為

一については、嵐牛書簡集(五)の解題参照。

南山(印)



【翻刻】

戻らんとしては隙どる紅葉かな

為一居士

二日の月のをしき入際

少年保平

門口に小芋親いも撰よわけて

流翠

又はな紙の無心言はるゝ

鶯後

かくしても大工頭と見ゆる顔

亭々

卵のうちに雌雄めををさす也

凡乎

時の間にさらく雪の三四寸

梅隣

ほつちり匂ふ石路つはの初花

延松

下略

雨の度口軽ふなるかはづかな

明てくる夜におはれけり泊狩とまりがり

田へまはす程はながれず春の水

わやくといふや花見のぬれ仲間

酔さめて見ればひとりや花の下

陽炎や立ねぶりする小田の鶴

あはたゞし出舟まつ間の蜷汁

水ぬるむ濁りや鷺のさぐり足

菜の花の中に一枚水田かな

戻にはひとわたしある汐干哉

春の水土竜もぐらの穴へしづみけり

昼の鐘やぶ入の髪出来にけり

酒につけ茶につけ花を惜みけり

声高き朝看経あさかんきんやはな日和

見はらしや長閑のはての夕ぐもり

春の雁まだあるやうにおもひ見けり

うぐひすや湯火(注)のしさます障子越

ながめたり思ふたりして接穂哉

淇川

凡乎

馳煙

雲眠

可笑

声柳

杉鳩

洗我

鳥声

蘭園

蘭秀

如柳

延松

梅隣

雅友

且有

三巴

梅城

笑はれていねつむ顔を洗けり  
しめこみし蛇のさわがし窓障子  
鳴立て夜を浅くする蛙かな  
井戸堀た土の高さよもゝのはな  
(堀)  
島の鐘聞ゆる朝のかすみかな  
一本の茶をもむ庵のさわぎ哉  
山吹をほめればをれと進め(勳)鳧  
花守に闇の用意はなかり鳧  
永き日とい(ひ)ゝつゝ何もせざり鳧  
春をしむ宵やちらく飛蜚  
椿ちる下にちいさき祠かな  
為一居士追悼句 各前文略

梅年 魚藻 百歳 花長 登月 樂水 流翠 閑齋 樂山 鶯後 亭々 凡乎 梅隣 一記 亭々 延松 流翠

竹の子も伸して春の暮にけり 鶯后  
花七日ちり行けふをしみけり きよ女  
今更の袖に卵うの花下はなくだしかな 嵐牛  
壬申夏 真齋書(印)  
(注1) 湯火のしゝ湯の熱で布や紙の皺を伸ばす熨斗おし。熨おき  
などの火による火熨斗が普通なので、湯火熨斗といった  
のであろう。

十三 知碩新宅自祝摺物「たねおろし」(抄録)  
【書誌】奉書、横大摺。挿絵は弘道(印)「弘道」。薄墨・  
肌色・灰色・朱・墨の五色摺り。巻軸は、客分の杜水、  
師の風牛、催主の知碩。奥付年記は「安政七年庚申如月」。  
袋の題は「たねおろし」で、左肩に「晴笠詞長」と書い  
た紙片を貼付。大竹裕一氏藏。

【解題】加藤知碩が自宅を新築した折、師友などから贈ら  
れた賀句などを挿絵入りで摺物としたもの。本資料集の  
成稿後に発見された一枚摺群の中でとくに重要と判断さ

れたので、その後半部を急遽追録することにした。挿絵の画者は、名古屋の狩野派絵師、吉川弘道であろう。

【翻刻】

広からずせまからずよし

花むしろ 鳳嶺

移徒わたし(徒)のそれにも

みるや花ごよみ 石翠

友人知碩子、新宅をし

つらひけるに、おのれ

も同じ季にもものしつれ

ば

花の香や壁土もあ最合ふかき根ごし

家うつりの日頃や青むさし柳

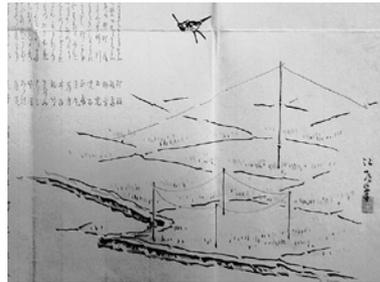
礎の墨色きよしはなの露

ひらくとてふもわたまし見舞かな

曲水や下戸は笹ぶね流しゐる

散てくる花もあたらし青だゝみ

さく花につどひうれしき日和かな



杏林更

竹明 鶴明 貫一 千影 三牛 得齋 春谷

あたらしう月もさしけり軒の花  
木香そうて花の香を吹ひと間かな  
色に香に賑ふやどや桃さくら

置土をふりかためけりはるの雨

花に名も高かれ棟もあらためて

新むろや玄鳥雀も巢のいそぎ

影しまる月やちりやむ花のうへ

なはしろに左右も広き住ひかな

折からの空もにぎはし花むしろ

此外に高い木のなき柳かな

やぶいりやさそはるゝまで髪なぶり

たしなきを又もらはるゝ若な哉

雨ひと日なくて立けりまつの内

初ゆめを見て待かねる夜明かな

うぐひすを朝から聞て崖づくり

一年の夢はさめけり初がらす

いつか夜の丸う成けりはるの月

炉だゝみのめだちて青し夏どなり

其常 燕居 涼雨 桃寿 静嘉 里桂 松溪 閑里 四山 岳丈 岳中 岱中 得岳 杜逸 山竹 梅春 中葉 然山 敬山

初花やもうちる事のおもはるゝ

三千丸

漣をけし／＼およぐかはづかな

耕齋

見卸すやかすみひた／＼さざら波

くにめ

てふ／＼の内へ入日と成にけり

雨竹

あじろ守兒もせぬなり梅のぬし

野乙

うぐひすや上手に持ば持て鳴

均堂

霜よけをのけた夕部や別れ霜

完牛

なはしろの神酒をうなひにすゝめけり

芦角

花の香も人もとゞまる住ひかな

平台

(注1) ある双紙に「宗とせよ」と言れたる

夏はしらず花に先よし門びらき

晴笠

家うつりやことに蛙の聞こころ

杜水

(注2) 「大廈成而燕雀相賀」、と雅室なりて騒客

何ぞよろこばざらんや。門生知碩、あら

たに家をつくりて苗代の芽千日和にわた

ましのむしろをものせむと、頓に音づるゝ

鳴子の音におどろかさされて、同じ田並に

句章を耕す誰かれ、彼燕雀のよろこびを

なして、花々しき一席を開けり。されば、

手作田の長穂のいねのなが／＼しく、此

室と共にあるじの風雅もみのりさかえん

事を賀(し)て

敷継やもえ出る靱の青むしろ

嵐牛

あやしの茅舎をつくりけるに、「いかでわ

たましのむしろを」と人々のすゝむるに

まかせんもおこがましけれど、そのいそ

ぎの中に

待花や壁のかわきのもどかしき

知碩

(注1) ある双紙：「家の作りやうは、夏をむねとすべし」

(『徒然草』第五十五段)。

(注2) 大廈成而燕雀相賀：「大廈成りて燕雀相賀し、湯沐

具わりて蟻蝨相弔す」(『淮南子』「説林訓」)。

# 連句の部

於青々処連句抄

【翻刻】

天保十四卯閏九月於

青々処

鳶啼てからく／＼落る木葉かな

卓池

ふゆがまへする確からうすの屋根

蓬牛

塩魚の扱ひ安う乾からびて

嵐牛

ちとのうち着る衿ひやゝか

波文

しらけてもきつきかり月のとりしまり

宇

秋芽伸たつ土堤つちづみのさし杉

池

ふたり(注)はりして竿(ま)の墨を打返し

文

又つゞくりのゆるむ水瓶みづがみ

牛

献上が済ば真桑の出盛て

池

こつそり誘ふ参宮まきみやのつれ

宇

襟刺た剃刀ちよと一寸砥にあはせ

牛

申刻前から部屋むまの小ぐらき

文

栗ばかりよけい茹ゆたる月待に

宇

絶た祭の道具たぎしらべる

池

鳴突なりつきのたゝかれ損あやに逃帰にげかへり

文

【書誌】「外題」「天保十四晚秋於／＼青々所由歌仙一折／種々記」(表紙に嵐牛の打付書き)。「書型・冊数」中本一冊。「書写者」未詳。「表紙」共紙(楮紙)。「丁数」墨付十五丁。「装幀」粘葉装。

【解題】底本は、「天保十四卯(一八四三)閏九月」、嵐牛四十六歳のとき、芭蕉百五十回忌の句会に参加するため、三河国岡崎の青々処に師卓池を訪ねた折、師や同門の人々と卷いた歌仙ほか連句七卷、京都の梅通の発句、卓池門古老水竹の粟津記行から抜粹した発句などを筆録する一冊で、その内、卓池の捌きを窺う資料として卓池出座の五卷(未満を含む)のみを収録した。

なお、他の伝本(諸本)にも収められる巻については、その校異を傍記し、依拠した校合本を( )入りで、『俳諧どめ』は「留」、蓬字稿本『年々十歌仙 六編』(天保十四年)は「年」とそれぞれ記した。

北へまはりてよはるから吹

苔もつ花にさし込沖明り

節句すだれを内でしあげる

春荷だけ桂(注2)子麻黄も丸残り(は(年))

稲荷へあげる手洗(てう)手ぬぐひ

結納(きま)の極りてからの身だしなみ(つ(年))

柏崎へはとほい日帰(ひか)り

運び雨降うち計涼(ばかり)しくて

おへど家鴨(あひる)の塹(とみや)へはいらぬ

年寄(としより)たものをいぢめるあら仕事

焼(や)たまゝある楠(くすのぎ)のふる株

どちら(どちら)からも寄付(よせつけ)わるき仮役(かりやく)処

魚舟(いさぶね)提た手のだるうなる

空冴(はげ)て兀(はげ)るもはやき月の暈(かき)

境の公事で炭の払底

煩(わづ)ひのうちを隣の世話(せわ)(に)なり

三疊(さんじよう)一間おもて替する

ごぼく(ごぼく)と研水(とみや)のぬける鼠穴

池 牛 文 池 宇 文 牛 宇 池 牛 文 池 宇 文 牛 宇 池 牛

薪前(まきまへ)とて市もはじまる

咲いそぐ俄日和のやぶの花

そつと重ねてしまふ紙雛

【備考】「○」は、初裏の五句目と初裏十二句目の二箇所に

「帰り」があり、同字の禁を犯しているとの指摘。

入山もあたりにはなし冬の月

風(かぜ)ざはく(は)と泓(ふち)のかれ声

買ものゝ数を付木に書付て

さましてわける飼桶(かひ)の豆

珍(うそ)しう鸞(うせ)の来て鳴屋(なりや)さがり

温泉(ゆ)口(ぐち)のかざのほそるあたゝか

曳(ひ)あれの小松(のまつ)の(留)あともならしかけ

菜畑(なはた)真黄(まおう)に城を見はらす

いつもよりしまひの早き畳(畳)さし

女房(にようぼう)もらふてあなどられけり

一降(ひとふり)の雨をやりこす浜(はま)浚(あ)へ

池 文 牛 池 古 牛 文 古 池 卓 波 嵐 牛

古	出てはあれども際だゝぬ月	古	ふとんのぜにををがむ駕かき
文	頂てもどる記念 <small>かたみ</small> のふるあはせ <small>拾(留)</small>	古	丹 <small>たん</small> 殼 <small>がら</small> の兎角手につく上鳥居
牛	やつとのがるゝ駒曳の宿	牛	突張せねばもたぬ裏木戸
古	黒ぼこもあい間透間に鍬いれて	池	あぶら <small>(注5)</small> 札兄を奉公のうしろ楯
池	皆は火かげのみえぬ芝やき	文	加賀でくらしたとしををしがる
牛	盛あげた様 <small>(注4)</small> に飛木 <small>とびき</small> の花ざかり	池	咲花に加減の違ふ鮎 <small>あし</small> のすし
文	御影御前に替る鉦 <small>かね</small> の緒	文	ぬるむに遅 <small>(注6)</small> きふせ越の水
池	からくゝと荷箱に乾く餛 <small>あめ</small> の鳥	池	川添の竹あからむや冬日和
古	そつと剃毛を捨る溝 <small>ほ</small> ばた	古	稲 <small>いな</small> がら直 <small>す</small> につゞく蕎麦架 <small>そば</small>
文	二人扶持もらふて居るも物おもひ	文	鑄掛屋 <small>(便飯(年)ちげ)</small> に出来合一餉振舞 <small>い</small> て
古	傾 <small>かた</small> ぎかゝりてはやき日のあし	牛	這 <small>(臆面)</small> まはる児の人おくめなき
池	敦賀 <small>から(留)</small> より先は片帆に風受て	池	半過丸 <small>なまばり</small> み持たるよひの月
牛	火桶かゝえし膝のぬくもり	池	帆棚をぬける風のひやゝか
古	土鳩の来てはとりつく塔の網	文	茎漬へ一所にいれる秋なすび
池	宿引男空をうけあふ	池	もらひ切にもならぬ温泉土産 <small>み</small>
古	薺 <small>あさ</small> は実 <small>がほ</small> になり菊は苔 <small>かた</small> たち	池	貫穴 <small>ぬきあな</small> に根気 <small>ね</small> のきれる菽槻 <small>やぶげ</small>
文	簾つたふて落たまる露	池	すつと並んで加持うける也
牛	有明も又磯臭き膳まはり	牛	

半日（年）で利根のあくのは稀な事  
小半日つかえて明し馬入川

明るみへ出て羽（年）蟻（年）なくなる

水たらず樽（年）を逆（年）に立かけて

別れもいはず行灯かゝげる

散花に一声鳴の古いたち

昼月の出る山の雪解

節句前（年）先芋種を取分て

見分（年）済と垣（年）に杭うつ

持こしてよい直（年）にうれし艦（年）ぶね

後家ぐらしでもあなどれぬ家

際やかに手染（年）の海松茶干揚て

願通りに杉の山出し

どかくと燃て焦つく湯（年）立めし

追々人の殖し題目

霜枯て取おき橋（年）をかける也

昼日中出て狐（年）うろくく

村中が遊ぶ大家の嫁入うち

よいかつぽこでなぶられて居る（注7）

さくくと石灰はたく月夜ざし

いつの野分も美濃はきびしき

放生会ことしは鳩の少くて

今に麻疹（年）のちくくとある

幾立（年）も裏へつり込砂糖桶

小砂利ちらしてしまる置土

一木づゝ花の盛のちがふなり

春は豆腐（年）のにがりひかえる

横雲や魚箔（年）の外行鳴の声

並木はづれて寒きから尻

継持（年）に石の割屑はこぶらん

少し低みへかはる虎落場（年）

欠始（年）て毎夜さはれる秋の月

一つもとらでもどる鳴突

煮つまりし間引菜汁に水さして

懸分（年）も済すかけ銭

室津（注8）へは僅一里の上の関

采

宇

牛

池

宇

采

池

牛

采

宇

牛

池

宇

采

池

牛

采

宇

牛

池

宇

采

池

牛

采

宇

卓池

茶岡

嵐牛

石采

岡

池

采

牛

池

ちらつく雪にわかれひまどる  
 埋火の灰のぬくみをかきまはし  
 むつく／＼起て牛の飼かふ  
 筋塀にそひし流れの澄わたり  
 花のおくより月の出かゝる  
 焼香のうち東風々の吹なづみ  
 鹿尾の酸気いまにとまらず  
 鋸のさやも木端にまぎれこみ  
 替る奉行の荷が舟で来る  
 (注9) 次かよひ

卓池 岡 池 采 池 岡 采 牛 岡  
 嵐 波 牛 文 池 牛 文 池 牛 文 池

見合濟して帰る仲立  
 余所目では様子たうまるのしれぬ舟問屋  
 肥立たつたけしの苔の葉がくれて  
 夏行げきやうの鉦かねのひゞく有あけ  
 雲助の縄(注10)のざまくに付直し  
 口こがしたる汁のたきたて  
 \* 以下、四句空白、作者名のみ

(注1) 竿はけ(木) :: 張木。勾張りこうば。穴を掘ったとき、土が崩れないよう水平に支える木材。底本や『俳諧どめ』は「竿」一字で「はりぎ」と読ませるつもりかもしれないが、『新刻増続字林集韻大全』(文化十二年)はこの字の音を「セン」、訓を「ハリ／ミツセキ」としており、『年々十歌仙』にも「竿木」とある。

(注2) 桂子麻黄：桂子けいしは桂の実。麻黄はマオウ科の常緑小

文 牛 池 文 牛 池 文 牛 池 文 牛 池

低木。和名、かつねぐさ・あまな。ともに漢方の薬として用いる。

(注3) 薪前：薪能の前。興福寺の修二会しゆにえの期間、二月六日から十二日まで演じられる神事能。

(注4) 飛木：磐田郡の方言で、特に生長している木をいう(『日本国語大辞典』)。

(注5) あぶら札：防水のため、紙に油を引いた川越えの切符。大井川の川会所などで発行した。

(注6) ふせ越：川の下などを通した暗渠あみきま。

(注7) かつぼこ：恰幅かつぱくに同じ。

(注8) 室津：山口県東南部熊毛半島の先端近くにある港。背後には半島と島々に挟まれる瀬戸内海の海峡があり、下関・中関とともに防長三関をなす上関かみのせきがすぐ西にある。

(注9) 次かよひ：以下の半歌仙は、次に岡崎まで通った時に詠み継ぎ、満尾させるとの意。

(注10) ざまくに：ぞんざいに。

## 夏げこもり

【書誌】「題簽」[夏こもり]。「書型・冊数」半紙本一冊。  
 「丁数」本文十丁、跋一丁、計十一丁。「序」なし。「跋」蓬宇。「奥・刊記」なし。「底本」永島勉氏および大竹裕一氏蔵。

【解題】卓池門の継承者と目される完伍の涼石居(豊川市牛久保)に遊歴中の素行を迎え、来合わせた同門の嵐牛、三河出身で京住の拾山の二人を加えて巻いた四吟四歌仙を一集にまとめて刊行したもの。跋はやはり同門、吉田(豊橋)の蓬宇。成立・刊年は明記されていないが、嵐牛の『俳諧どめ』や蓬宇の贈来俳書メモ『梓上集』、同じく嵐牛の贈来俳書留めにより安政二年の刊行と判断され、後者の記録には「○素行 東都中橋埋立/家主和泉屋吉兵衛」との書き込みがある。素行は笠栖氏で、出自など不明だが、甲斐国の嵐外門か。

なお、『俳諧どめ』との主な異同を傍記した。

【翻刻】

湖うみに影もちて根づきし雲の峰

完 伍

二見へちよつとかいける出代  
暮遅き空に度々時間て

牛 行

只真直にあつき松ばら

素 行

遣はれさうな筆のなき店

山 牛

口とりの殊勝に御馬いたはりて

嵐 牛

門前に嵩かさむ御堂の古瓦

行 山

酔折た笑ひのとまりかねけり

拾 山

なげばをさまる子供いさかひ

伍 山

ふりむけし膝に暮きる月明り

行 行

節季せきどろ候にとらする米を山計ばかり

山 牛

そよ／＼風のわたる芦垣

伍 行

溢れし水にひきあげる裾

牛 山

鷺きつねの髻まげのさびしき籠かごの中

山 山

尻口もあはぬ異見の理にかなひ

伍 牛

山さへ守ればくらさるゝなり

牛 山

浜のけいきの直る夕ばえ

行 牛

朔日はきつとかゝさぬ七つ起

伍 行

鳶とびの輪をかけそこなうて翦そて行

牛 山

いのる仏の名をかくしゐる

行 行

神の由来を咄す庭掃

山 牛

別れとはいはで寒菊いけなほ生直し

牛 山

息災で月待ほどの事もなし

行 山

冬は帰れぬ船の荷都合

山 山

木曾の夜寒に行灯あんどんかゝげる

伍 山

入る月に人の駈寄町はづれ

行 行

水上やまの築やなにも鮎あなのまだ落ず

山 牛

煩わづらふ雁かりのしげき羽たゝき

伍 山

懇こころにする文のとりおき

牛 山

栗茸りしひの汁に見せたる侘心

山 山

見次第にわたり乞食を送り出し

伍 山

とほした雨の壁に際つく

牛 山

滞とどなく済すし棟むねあげ

行 牛

裏からが却て花の折勝手

伍 山

風当る羽織うよくに花の吹かゝり

牛 山

汐干歸りにゆづる腰かけ

山

長々と苔みし花のひらき榮

山

かれ枝や生出の蟬の声はじめ

拾山

余所の蚕の上り見てゐる

山

すゞしい風のほそき坂口

嵐牛

持伝ふまでゞ用なき革葛籠

山

呑て退く釣瓶のあとを貫はれて

素行

川よけ杭の又公事になる

牛

元服前の大工たのもし

完伍

雪を訪はれし人に風呂たく

山

帳場まで月のさしこむ宵のうち

牛

竹買へば夫で調ふ年じまひ

伍

剪て来てある三七の花

山

出入屋敷にありつきし犬

行

揚泥も秋のかわきにかたづけて

伍

御手洗の末にもひとつ水車

山

きこえぬふりもされぬよび声

行

待てばかりもくらされぬ恋

牛

寝て居ては紛れやうなき物思ひ

山

影ぼしの振見て帯を下直し

行

納める札の残る天井

牛

ふな路で  
ふれ次てかへる島の柴蒨

伍

落てくる地震の返しの雨の音

行

むら／＼と野分をふくむ月の雲

牛

はなれし馬の関をこえけり

伍

黙止て居ればみのむしの啼

山

捻切た跡ふりほどくもつれ縄

牛

彼岸会のすむと味噌置堂の椽

伍

けふを限の質受に遣る

山

鎌倉道の普請したがる

行

髭計剃て旅だつ船都合

伍

六斎の市も晦日は日一ばい

山

春なほ冴るかへり舳

行

やう／＼傘をかり出しけり

牛

咲みちて足もと暗き山の花

落あふ水のぬるむあわだち

さみだれや鹿伸あがる草の中

夏も梢ほたたく山下の家

両掛(注1)へいれる着替たぐを取退ませて

手紙の反古の遣ひ口なき

訪ふ筈の人もまだ来ぬ宵の月

野分も余ほど西へよりけり

うつぶせにかわかしてある鰯船

工夫はやめて利薄あきなひ

夢いはひ夫それといはずに御酒ごしゅ上あて

雪見まねきの使しほらし

来る駕と出て行駕とすれ違ひ

木立涌きたる温泉のしぶくかぐれにしぶく温泉深みの滝

明ほそる月に折ふし鳩の声

彼岸ちかよる講の下世話

青くても秋の辛味の唐がらし

嵐牛

完伍

拾山

素行

伍

牛

行

山

牛

伍

山

行

伍

牛

行

勝手しらねばぬけられぬ路次

冷々と花の雫の吹こぼれ

濁ますに鱒ますのつれかゝるなり

養生に出て居る春の立安き

柱はふしの有もをかしみ

豆腐屋の遠いを称宜の嘆かるゝ

おさへそこねし昼のかはほり

河岸かしばた端はたに返事待間の納涼台なすみだい

御(注2)ひろひになる乳母のはからひ

焼物の海老のつゝばる小風呂敷

問屋の株のきまる山家荷

垣一重へだつ法座の鐘の音

月さす方を霰ふりこす

それ鷹おやくの夫役おやくにけふも駈回り

岩およそたり水のしみるすき腹

大和路およそを凡見はらすかけ造

医者しあはせの手柄は皆の仕合

うとくと風呂のぬくみに眠眠らむう成

山

牛

伍

山

行

伍

牛

行

山

牛

伍

山

行

伍

牛

行

山

牛

明日の節句の掃除調ふ

咲花を堀て藪から釣出し(吊)

田螺たじが啼てもちなほす空

去す手いにさからふ風や火取虫

たしなき雨のはるゝ水無月

飯はしのうちは畠に道付て

殿原達たごのよう揃ひけり

待月の黄昏たご前にさし昇

すゝきの外はそよりともせぬ

網やすむ折はいくらかも飛鱸すずき

うなづきあうて酒かひにゆく

誰も居ぬ二階の行灯消かゝり

身のをさまりもつかで産ぶこぞう

とりよせる序のほしき預物あづけもの

伊吹は今に降りしきなり

在明の川川面べり登る寒念仏

樹に棚かいて豆腐氷らす

捨扶持ときけば貰ふも一思案

御幸みゆき拜みに誘ひ出さるゝ

空癖(注)の曇も花に振かはり

五形ごけいすみれをゝしむ田がへし

簾れんなど懸て夏まつ別座敷

直なをするうちに皆よわる鯉

剃てまだ間もなき髪を又はやし

兄弟分の塔建たがる

天竜の中洲追々里になり

かさなりしま合つて峰作る雲

水あげの竹に口伝くでんのひと雫

末は兎ともあれ靡ひかする

前尼にわづかな事も気にかけて

落た所をのかぬ蟪蛄

澄遂て夜明に近き山の月

蕎麦盗人は衾宜の沙汰なり

入順をはづして残る長湯好

旅商りやうひに二間かりきる

牛

伍

行

山

伍

牛

山

行

牛

伍

行

山

伍

牛

山

行

牛

伍

どの店にあるも昨日の鮪らしき

木引のあとを概す春風

よりかゝり見上る花に腰のして

古巣にかよふ山雀似我蜂の声

行

山

伍

牛

二三子涼石居に夏籠のをりから、明暮のすさびに四歌仙なれり。おのれはさがりがたき事の有て、その員にはもれつれど、をりくとひおとづれて、梓にのぼせんことをそゝのかしける因ちなみのゝがれがたくて、うちつけに集の名をつぐるになむ。

蓬 宇

- (注1) 両掛：旅行用に、行李こうりを棒の両端に掛けて運ぶもの。
- (注2) 御ひろひ：敬語で、歩くことをいう。
- (注3) 五形ごけい：「五形ごけい」(「通俗志」三月)。「嵐牛発句集」(注16) 参照。

### およびごし

【書誌】「題簽」「およびごし」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序一丁、本文十三丁、計十四丁。「序」「文久元年(一八六二)西晚冬」、嵐牛。俳文集稿本『文章』諸本にも「五歌仙之序」などとして所収、ほぼ同文。「跋」なし。「刊記」後表紙張込めに「御すり物司／東洞院仏光寺上／きくや平兵へ」(朱印)。「備考」柿衛文庫蔵本には雲水曲川の「戌春」の送状(摺物)が挿み込まれ、発句三章を付記する。

【解題】来遊した曲川が完伍の涼石居で、来合わせた嵐牛と三吟した歌仙三卷、両吟した二卷を刊行したもの。

曲川(一八七〇—一九〇三)は俗名山内嘉一郎、出雲国松江の骨董商。壮年になって上京、万籟に師事、のち諸国を漂泊、晩年は帰郷して茶ノ湯と俳諧に遊ぶ(桑原視草著『出雲俳壇の人々』昭和56年)。安政二年(一八五五)まで月之、翌三年、曲川と改号する(『蓬宇連句帳』)。

なお、『俳諧どめ』文久元年分との異同を傍記した。

## 【翻刻】

虎(注1)のあなにいらざれば、とらの子を得ずと。そがほらに  
 いるこゝろ構して、涼石居におし入て、たがひにほこり  
 のひぢはりあひ、かつは彼(注2)が髭ひき、尾をふむのあやふ  
 きおもひをなしつゝ、からうじて四巻、いつまきの歌仙  
 をうめき出せり。然れどもおのれらごときほそかひなに  
 得もの有べき様やはあると、かひやり捨むも本意なけれ  
 ばとて頓板(注3)にのぼすることには成ぬ。かならずや虎(注3)を画  
 てならざれば、かへつて狗(注3)に類するのそしりはまぬかれ  
 じかし。

嵐牛しるす

文久元年酉晩冬

水にみなむかふ小家や枯すゝき

嵐 牛

けぶり傾くしもの朝風

曲 川

業(注4)ひも日脚(注4)のつまる冬の来て

完 伍

替た昼は掃も埒よし

月今宵蕎麦(注5)も好みの葉こね也

芙蓉の花の香をさそふ冷

彳(注6)めば傘にもつたふ霧しづく

手を打かねて牛を見直す

詠がらのありて此ごろ鴛の留主

襟剃にきてはなす中よし

染汁の桶にひらりとけし散て

かわかぬ壁に瘞(注7)の浮たつ

鷹も最(注8)う時(注8)出たさうに羽を鳴らし

月見て歩行(注9)下駄のひやく

甘干(注10)の架(注10)をざまくに懸わたり

法事とり越す内輪相談

初花に雨の雫もうつくしく

箕(注11)の氷ながれ出けり

居なりまで互に見するつとめぶり

灯明あかりかるも本意なし

指折れば旅の日数もよほどなり

牛 川 牛 伍 川 牛 伍 川 牛 伍 川 牛 伍 川 牛

深切にあふ買物の世話

縁づいてさびしがらるゝ御堀うち

人はさうともいはぬ夏やせ

参会の崩れはいつも呑直し

ほろくゝ雨の落るくらがり

仮葬かりさうのおもひしよりもひまの入

よい帯しめて子の見せにくる

朝月あさづきの間に風呂も沸かゝり

鴛うづらのむれにくらむ海面

腰蓑こしあにつかひはじめのことし藁

府中ふちゅうだよりに徳利あづける

空そらのもう直るか西へはしる雲

柱はしらのかげの移るくり椽えん

花咲ば鯛たいもさくらの色もちて

春はるはあそびもめはた目ゝぬなり

澄夜すみよには星まで澄て冬の月

入江いりえ々々々々にかれ尽すあし

曲川

完伍

柿板こけらいた積ただ小口も奇麗きれいにて

物いふたびに手をさげるなり

酔連よつれもありて眼立めだぬ初子はつねの日ひ

昼ひるから町も雪のとけ出す

梅うめも最もう仏の花はなに売歩うりあるく行

愛(注4)のよき児この人ひとにおくせぬ

皆みな覗のぞく七夜の餅もちのかけ服紗

何なにやらいうて袂ひかゆるひかるゝ

月つきさして涼み直しの竹床たけど几

飼かれたやうに水鶏みづけいきてなく

滞留逗の間に麦むぎもくひおぼえ

蘭らんの葉はぐみを書いて教しる

近欲(注5)の腹はらの底そこまで見みすかさ

むかしは木綿きわた今は絹きぬ市

雪吹ふぶきするほどに咲さつ樹き々の花

御影みえい供ぐもどり連つらもちりく

菓子かしなども糸いとにつなげば春はるげしき

二階にがいでみゆる矢野やの洲すのわたし場

嵐

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

日あたりへ出ればわするゝに(注6)がり腹

旅へとゞいた状のうれしさ

朝の間に参所廻丈は先はますまし

うたひの弟子のつめかけて居る

掛取もきげんとられて帰るなり

師走の空の往来ゆきまちく

ぼんやりと聞えた鐘(注7)の芝しらしく

長う書ねば氣のすまぬ文

待甲斐もなく月かげの更わたり

道に海月のあがる初汐

皆提る祭崩れのはだか弓

誉るはなしの脇で聞よき

つくばねも見ゆる所の夕すゞみ

誰やらふんだ敷砂のあと

幹までも若木の花のつやくし

一日啼けどあかぬ鶯

朝かげや雪つむうへの日和風

炭がまけふる山のふところ

雀ちる軒に俵の口くちといて

枅あじはむ椋のに木にかざる木のなき也

宿引に顔のぞかるゝ暮の月

ひやくととした柿の味ひ

たのまれて寺に寢起の彼岸前

先のくらさに旅へ出兼でかる

墨染の使に嘘うそもいひつくし

うは気な恋はつみもの少き

ちとは物もの入ねばすめぬ仮座敷

墓ひきにも水を打かけてやる

蚊柱の月に崩れてあともなし

羽織を門でぬいで行るゝ

散米に錢も四五文つゝみこみ

楠のうつろに花のやどり木

鼻の春は一ぱいむくつけく

素湯さゆなりと眠気あざましにほしう成

曲 嵐

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川

伍

牛

川 伍

小僧と経をつれぶしによむ

世にあれば俗のないのもどんな物鈍

山のやうにもたまる染帛そめかせ

袖乞にまで後添のちぞひのやはらかく

まだ七つ子に聳のいひこみ

張かへて天気のも直る外障子

笹の氷のしづくほちく

呼声を野飼の駒のよくしりて

焼めしわれば梅干の出る

胴の間はかたぐころから月のさし

順礼ひとり秋を寒がる

菊などもちらく見ゆる壁の穴

砥石あはせた水捨るなり

塗物あまけも雨気ひびなつゞきに埒まの明

くれる雛ひなを望ませに来る

何所どこのさた聞ても花はあたり年

夜明前から霞む三月

露ほどの物も数なり野の明り

月代つきしろらしき雲の端々

靱はくむしろあと掃塵も箕に受て

此ごろ遠き耳のことわり

炉びらきは子供の様なわざばかり

柴漬揚ふじづけあげにおそけれどやる

呵しかられてもどるは犬の行儀よし

逢れさうにもおもはれぬ宵

客衆きやくしゆの空ごといふもうけて居り

孔雀の羽根の玉をかぞふる

来る秋の塔の朝かげ横たはり

陰瓜かげり盗だあとわらふなり

月の外明ぬはをしき別座敷

出たばかりでも京は養生

かり下駄を手本に見せて買にやり

橋は前より後がさびしき

花さへもおくれに咲ばしをくくと

立ば鴉の巢もよそにする

曲川

嵐川

牛

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

蛤ににじり倦ては酒にして

歌よみひとり背なむきになる

にこくくと陣笠提て皆かへり

松吹風の寺は涼しき

奈良漬のうらへも受るひと日南

襷がけでも嫁の品あひ

いたゞいて渡す初穂をいたゞいて

御襖へだつ軒ごろく

透たとはいはねど誰も同じ腹

大方あんな山が姨捨

霧の香にむせる計りの朝月夜

戸口でわかる田刈いも堀

遷宮につれるくと楽しませ

縫あげとけば丁度づゝ丈

菓子料の豆銀ひとつ包なり

夜すがら降て明た青空

花の沙汰きかぬに人の群步行

柳の下に結ぶ腰かけ

々

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

牛

川

川

雨を待咲ふりもなき木樨かな

啼むしひとつ月の朝かけ

新洪の分てあるまでよくすみて

ごろく寝るが留主のたのしみ

しれて居る日をも指折松の内

あられのおとも春のやはらぎ

渡し舟海苔売ひとり乗おくれ

鴉とともに起て出し顔

撞ぞめのいひこみ多き鐘供養

筆持つかれ手をのぼしけり

廓でも人にしらるゝ気扱ひ

小娘までも酌をしたがる

七夕の月は甲斐なく入かゝり

ずいきばたけへ坂をおりこむ

中々に秋の清水のわきあまり

地蔵の袈裟の風にふわつく

はつ花に一文菓子のお店びらき

つばめの糞をはらふ糸だて

完伍

曲川

伍

川

伍

川

伍

川

伍

川

伍

川

伍

川

伍

川

伍

眼にたつて藪入ばかり城下めき

玉などさげる帯のうははじめ

息才(災)にそだてばはやき恋ごころ

とく買おきし朔日の神酒

間屋から節々(注10)せつく下くだし

晴るもまたず夏の雨掃(はく)

和尚(注11)日は雲水達も座を休み

ひと癖もちし物のいひぶり

ちんまりと羽織の下の小脇ざし

はや行水もすさまじう成

薄様(うすやう)の紙よりうすき月の雲

露草の猶露にしたしき

竹ぎれに垣結(かき)ふ針もつくるらん

ながい出入に内の気のする

餅搗の膳にも酒が先にたち

もらうた雛をほめぬものなし

とり分て花のあかるき(てんきあひ)天氣相

ながれおちつゝぬるむ山水

伍 川 伍 川 伍 川 伍 川 伍 川 伍 川 伍 川 伍 川 伍 々

御すり物司

東洞院仏光寺上

きくや 平兵へ

(朱印)

(注1) 虎のあなに：格言「虎穴に入らざれば虎兇を得ず」

〔後漢書〕「班超伝」による。

(注2) 彼が髭ひき、尾をふむ：「竜の髭を撫で、虎の尾をふむ」〔せわ焼草〕の比喩表現よる。

(注3) 虎を画て：「虎を画いて成らざれば反つて狗に類す」

〔後漢書〕「馬援伝」による。

(注4) 愛：愛嬌。

(注5) 近欲：「ちかよく」。「近飢え」と同じく、次から次とものを欲しがること。

(注6) にがり腹：苦々しいおもい。

(注7) 鐘の芝らしく：芝、増上寺の鐘は江戸最大で、遠くまで響いた。

(注8) 渡す：『俳諧どめ』は、中七以下「わたす内証の願

はつ穂」を「わたす初穂をいたゞいて」と推敲訂正。

(注9) いひこみ：「言ひ込み」で、申し込みの意。

(注10) せつく…責付(せつつ)くに同じ。「下くだし」は、

京(都)などから地方へものを配送、通達すること。

(注11) 和尚日…和尚にとつて特別の日、当番の日、逆に休

日などをいうか。「座」は修行、講習の集会。

## あられ灰

【書誌】「題簽」「あられ灰」。「書型・冊数」半紙本一冊。  
「丁数」序一丁、本文十四丁、計十五丁。「柱刻」序には  
なく、本文に「一(十四)」。「序」「蓬宇／文久元年(一  
八六一)酉十一月」。「奥」「文久元辛酉初冬」。「跋・刊記」  
なし。

【解題】序に「杜水子が編る」とあり、巻軸に杜水の秋葉  
山遥拝の発句が据えられる。出雲の曲川を迎え、嵐牛と  
で三吟した歌仙二巻、諸家発句、見付の鳥谷・聴雨を加  
えて曲川と四吟した歌仙一巻を収める。

編者杜水は見付東坂の人。通称鎌田屋、俗名加藤幸太  
郎。前号、都水。別号、五峰庵・樸園。中世の辞書では  
「樸」にユヅリハとの訓が付され、音はヨウ。近世前期の  
季寄にはほとんど「ゆづりは(讓葉)」と記され、「樸」  
との記載は『通俗志』(享保二年・一七二七序)が最も早い。

なお、『俳諧どめ』所収の巻は校異を傍記した。

【翻刻】

むかし何(注1)がしの君達きんだちの衣紋えもん正しくして案じ給ひ、桐火桶

にうちかゝりて案じ給ひしなど、その趣意異なり。こゝ

に今度、友人杜水子が編る此集よ、櫛園の炉辺にて、し

めり灰、しめやかなる雨夜のすさびに、三巻の歌仙をつ

らねて面白とおもふをば、遠山(注2)のとほき国人の句さへも

とりそへて、かの其趣意(注3)のふくさ灰、くさく異なるを

あつめられたるは、巻の名におふあられ灰の玉なす句ど

もなれば、たれ人も小波大波よりくくにもてはやすべし

といふ。

文久元年酉十一月

蓬 宇

石をふところにさせんといはるゝ櫛園ぬ

しの露路をつたひて

実をいとふ葉(注4)ぶりや霜さねの五味子かづら

箒もあてぬ冬がれの庭

船頭にわたす包の目もいうてみに札つけて

起されついですぐに起けり

曲 川

杜 水

嵐 牛

川

影細(注5)き月に向うて蚊喰鳥かむどり

煮酒がのすめば蔵がもひつそり

表具屋の来る間ならべる小ぎれ物

剃た当座は勝手へも出ぬ

猫の鈴音細いのよいのかへてやり

傾城じみて縫針もする

代参の加茂のもどりの待遠く

最もう三日月のあるはづはなし

居らいつでも小家こやが西瓜の番に成

餌ねざしの腰はかに頬赤あかちゝめく

火うつりのわろき火口わろいほくちをもみちらし

掃除のすんだ板間見わたす

八重だけに少しおくるゝ垣の花

外のもまぜて桜貝うる

奉公に遣る子一日遊ばせて

木母寺(注6)出ればくれぐれになる

おもふ事打消やうにかねが鳴

十のもまくらをくばる寝どころ

川 牛

水 牛

川 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

川 牛

水 牛

案事あんどたる鰯いわしはほめきもなく仕舞

暖簾のれんもらふが何なによりもよし

昨日きのうとは今朝けさの天気あまの裏表

餞別せんべつわらじ立派りっぺいなりけり

半石はんせきはたしかあがりし暮くれの稽古

七夕たなばたまつる椽えんの青笹

眠ねがるを背せなにゆさぶる月つきあかり

うしろの山やまに鹿かのよう啼な

いさゝかな流ながに紙かみもさらすらん

御祖師おんそしの徳とくを歩行あるく間まもいふ

かいわいで指折さしおほどに家富けふちて

入らぬ内うちから蚊帳かやをつくろふ

九日くじつも十日じゅうじつもつゞく花日和

つゝじを笠かさにもどる夕榮

水鳥みづどりの水みづにあきてや岩いわのうへ

入際いりぎはの日のぬくきかれ芦

綿種わたづねを俵はたけにつめる冬ふゆの来て

膳ぜんにもつかず茶漬ちまじさらく

月つきのあるうちからはやす棟木曳むき

暑あつさはしらぬ秋あきになりけり

木屋きやの香かよりもつよき丁子風炉ていしふうろ

最もう気がはりの見ゆる寵愛ちゆうあい

親おやに遣つかる文ぶんのながさに暮くれかゝり

松前まつまへわたり待間まちま久ひさしき

梅漬うめじの塩しほも隣となりへ聞きあはせ

めいく釣瓶つるべ提ひてゆく井戸

楠くすのぎが鎮守ちんしゆで宮みやもなかりけり

己おのれがさはした月つきに啼な木鬼きおに

風寒かぜく寝顔ねがほに笠かさを引ひかぶり

情なさけをしらぬ寺男てらおとこども

けふるほど花掃はなはらおろす崖がきの口

たらりと蜜みつのさがる蜂はちの巣

草くさの餅借馬もちかひまにくれてひと休み

かすれた疵きずに唾つよつけておく

汲ひに出て皆みながよろこぶ浚川せうせん

水

牛

川

水

牛

川

水

牛

川

水

牛

川

水

牛

川

水

川

牛



山うけてはやきながれやきじの声	羅村	行もどり一日旅やはつあはせ	雪簫
解ただけ雨の降なり田の水	星岬	朝冷やおもひもよらぬ初松魚	貫平
遠浅とのみおもひけり春の海	清民	見えそめて鞠垣まはる牡丹 <small>(牡丹)</small> かな	有節
ちよつとした沢にもみちて春の水	姑山	卯の花のしらく暮るながれかな	一止
水上は木々の雫やはるの水	鼎左	さびしみの何所からつくぞ青薄	蒼山
てふ飛や日永の里の団扇店	市猿	紙漉の小床几かりてかきつばた	孤柳
渋い茶も時にとりてぞ初ざくら	李曠	しらげしの一重におもき曇かな	鶴老
魂の入るとき花のこぼれけり	柿玉	聞ほどの鶯遠し若葉時	花海
材木のあつかひあらし花のかげ	碩水	みじか夜の闇もみじかし水明り	晴江
咲みちる桃に静な小里かな	悠平	啼ずにもとぶ夜のあるか郭公	公成
山吹やするとき茨をうしろ楯	羽洲	釣人の笠もうごかずほとゝぎす	赤甫
やまぶきや中で日永き花のいろ	春湖	いかな日も鴉は啼て五月雨	如草
笠ぬげば野はくれてあり春の月	菖雨	夏花 <small>(げばな)</small> 折おとや雀も起ぬうち	鶯眠
もどりにもよき小松野や春の月	きく雄	庭先やきらひな夏も夕げしき	奇泉
別霜あやめは水にそだちけり	完鷗	青鷺のすいと来てたつ曇かな	蔣池
沖見ても夏のはじめの日和かな	松朗	青鷺のめだつや青きものゝ中	椿山
墨すれば手の冷るなり初袷	三楓	たえぐくに有明近し桐の花	貞山
清水へまゐりたき日や初あはせ	拾山	念入た啼やうもなし行々子	雲外

秋の露木にも草にもあまりけり	背伸するさまや案山子の夕日かげ	海山にあまるは月のひかりかな	夜を少し木の間にのこせけふの月	三日月の入ほどはあり庵の竹	秋の野をやしなふ露のひかり哉	暮前や風も日和の稲のおと	露ほどに雨はたもたずをみなへし	ゆれながら風にたもつや萩の露	分わびて立もどりけり萩の原	椽はなや灯籠あかりに小酒盛	川おとや風もながれてきりぐす	秋たつやありし暑を其まゝに	秋たつや掃除に来たる庭づくり	草の根に埃りしづみてけさの秋	乞食も掃おこされてけさの秋	空高く夜かげやはらぐみそぎかな	生垣や入梅のゆふ日に蝶ひとつ
蓬	九	青	御	嵐	芦	涼	聴	醒	麦	不	月	抱	不	五	帆	半	春
宇	起	可	風	牛	舟	呼	雨	花	鳥	染	栖	藍	退	律	道	窓	芙
蔵ひとつ浮世めきけり冬の里	待としもなく待るゝ冬至かな	屑炭や箸にかゝるはひとつづゝ	櫻栢の葉を音なくなりぬ夜半の雪	蜜柑むく子等の手元の寒かな	おとばかり霜枯にけり小笹原	待あはすさまにながれてをしの妻 <small>(鶯巻)</small>	山茶花のはつ花散て見られけり	ちさい手で干瓢むすぶ十夜かな	ひとしぐれ過て枯木の雫かな	薺根掃箒のおとや神無月	若かりし時はおぼえずあきの夕	架の稲不二の雪見ておろしけり	水霜にひとかをります黄菊かな	今暮て夜のことぐし後の月	雁に日のさして雨降泓田かな	何ゆゑのあはたゞしさを鶯の声 <small>(鶯)</small>	只居るによきころあひや露明り
漣	卓	波	菊	筌	素	良	曲	尋	芹	文	鳥	見	塞	可	等	水	野
山	郎	同	也	露	屋	可	川	香	舎	海	谷	外	馬	大	栽	壺	井

眠る鶴師走の様をはなれけり

鳥 谷

そら手に褌もとれぬ新絹

谷

傘かりによりてゆるくとしわすれ

黙 池

板敷へならべし鱸はねかへり

雨

節季候の見かへりもせず己がかげ

一 清

友にするにはものしりた人

水

春まつや又ひとつとる年ながら

多代め

定まらぬ時候を花の定らん

谷

中くぼに見おろす里の砧かな

烏 谷

野飼の牛の春をよろこぶ

川

真空に成し月の静さ

曲 川

朝雲雀風にもおちずのしあがり

水

今年酒燭をつけぬも一入に

杜 水

顔を洗て提る茶の水

雨

片膝たてゝ棚のものとる

聴 雨

顔を洗て提る茶の水

川

売に來た葉竹にふさぐ明り先

川

顔になれば家内も納りて

雨

氷柱こつくく贅太がをる

谷

経帷子をわたくしで買

谷

土おとすこにやく玉の室出して

雨

ばたくと団扇のおとの人どほり

水

断物多き産のあと

水

惣嫁は軒で身じまひをする

谷

頼まうのお声は願ふこちらより

谷

はづかしい事がないなら世はやすく

水

盥涼しく刀研さす

川

浅草市のがされぬ用

川

口明は蠅の飛こむ蠶

水

役がはりしたやちがふ供まはり

雨

礎のみに名の残る不破

雨

羽織ひらくさはる生壁

川

しのお間はひと雲ほしき月の照

川

夕顔のふらりとさがる暮の月

雨

田のむしざたもなくゆたかなり

雨

見物のよる間角力の稽古して

雨

鏡に当る賽銭のおと

むら鳩のたてる羽風のこゝろよき

日むきに桶をかたむけて干ほす

身二つもほしいとおもふ花ざかり

たばこ火までも匂ふ海苔鹿朶

水 谷 川 水 雨

秋葉の山は、常に西荘の庭前よりはるかに

拝しながら

朝ばれや雪の御山を机先

杜 水

文久元辛酉初冬

(注1) 何がしの君達の衣紋正しく案じ給ひ…『正徹物語』

などに見える藤原定家の逸話。次はその父親俊成の逸話で、定家著に仮託した『桐火桶』などに見える。

(注2) とほき国人…曲川のこと。『およびこし』解題参照。

(注3) ふくさ灰…ふかふかと柔和な灰。

(注4) 五味子…真(実)葛。モクレン科のつる性常緑木。その

の果実を漢方では健胃剤・強壮薬とし、『倭漢三才図会』

などでは五味子と表記。『俳諧どめ』に「玄及」と記すのも本草学での別称「玄及(藤)」による。

(注5) 蚊喰鳥…コウモリの異称。

(注6) 木母寺…拐かどむかされて奥州に下る途中、隅田川の渡し

場近くで亡くなった梅若丸を念仏供養するために建てられた寺。謡曲「隅田川」などで知られる。

(注7) 棒鮫…鮫皮をかぶせた棒鞘。

(注8) 惣塚…そうか。下級売春婦。江戸という夜鷹。

## ともすゞめ

【書誌】「題簽」「ともすゞめ」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序一丁、本文九丁、計十丁。「序」「文久元年（一八六〇）西冬」、柿園嵐牛。「奥」「文久二（一八六三）戌春」。「跋・刊記」なし。「備考」柿園文庫蔵本には、「仲秋」の日付、石翠・其常・燕居・知碩連名による送状が挿み込まれ、発句各一章が付記される。

【解題】前出の二冊につづき遊歴中の曲川を迎え、柿園の師友が巻いた歌仙三巻を小冊にしたもの。

最初の巻の石翠は二俣（浜松市天竜区）の住で、俗名塩崎平兵衛。二巻目の其常・燕居はともに鳥羽野（袋井市）の住、俗名は溝口時三郎・金原弥一郎（以上、「柿園門人録」参照）。知碩は中野（磐田市豊浜中野）の住、俗名加藤吉重。最後の巻の瑩・梅春はともに金谷の住（「柿園摺物集」四を参照）。文久元年秋から冬にかけ、曲川を伴って門人連中を歴訪、風交した成果の一端を上梓し、

門生への励ましとしたものであろう（風交の詳細は「俳諧とめ連句一覽」参照）。

なお、序は『文章』諸本にも所収、それにより補った部分分を（ ）入りで示し、『俳諧とめ』との異同を傍記した。

## 【翻刻】

いかぬいかぬといふは俳諧の事也。へ（注1）此春もいかぬ（く）といひあひて、などむかし伊賀人すらいへりしを、ましておのれらごときにはいかぬ業なれど、こたび曲川子が留杖を幸に、社友の人々をそゝなかにして此巻々はつゞり出しぬ。さるを其いかぬく（注2）をも（注3）弁（注4）ざるや。なほ、伊賀人のいひしい（注2）いかぬこそおもしろけれ。何が月に成（注5）、何が花になる、いかぬこそおもしろけれ、とあるをおもしろしとにや。こを桜木にもせむとて、やがて草稿なして端書をと責らる。とゞむれどもとゞまらざれば、終（注6）に筆さしぬらすことには成ぬれど、恥（注7）らくは、こはいかぬく（注8）と一ひら二ひらと見もて行人も（注9）あらざるべし。

柿園嵐牛

文久元年酉冬

夜寒さや見ふるしたれど天の川  
 しばしは待もたのもしき月  
 そつくりと鮎の白焼串ぬいて  
 くりぶねだより聞ておかるゝ  
 馬市の買ふ手もあはぬ冬枯に  
 深山つゞきは雪のちらく  
 たゞ人と見えぬ包みのからげやう  
 酔てもうたふ節は違はぬ  
 手枕の顔に葱の雫して  
 かざつて置た兎よこるゝ  
 たにざくは皆公家衆のうたばかり  
 好きな事には十露盤もなし  
 沢山にいわしのひける朝の月  
 ゆられて起るをどり草臥  
 台所の寺はゆたかな盆の内  
 尾のふりやうものろきむく犬

石 嵐 曲 石 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲  
 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川 翠 牛 川

にこくと花に庄屋の先立て  
 袋の煎葩(葩煎)のぼろくとちる  
 終日おなじ曇りのあたゝかさ  
 岩の平に骰子なぶりする  
 願の瘤は見しらぬ者もなし  
 いつも七里の派手なこしらへ  
 中居等のそら近従も意地交り  
 ならんだ間へ来てははさまる  
 御神楽も濟ず日かげは暮かゝり  
 大火のほこり宙へ広がる  
 星崎は爰から横へきれる也  
 定家袋の重き甘ぼし  
 月までに最一回りと温泉をすゝめ  
 きらひでないにくさい木屋  
 つくろひは弟子でも出来る兎穴  
 癪をおして貰ふ身がまへ  
 明たとて行灯しめせば薄ぐらく  
 鳥の餌をする音のからく

嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲 嵐 曲  
 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川 牛 川

ついでらぬかほにも花はこひ安く

わたりごゝろもはるの水なり

各十二句

余所よそからもうれしがられつ菊日和

砂すなふく音も秋のしづかさ

数々の新酒の樽に札さして

橋までふねのかよふはつ潮

大分に暑もさむるよひの月

見かけ次第に泊すゝむる

提ものにはな出す犬をしかる也

温泉ゆのたちものを念頃に聞

きりたがる髪はこちにもほしき色

祭の朝に行ちがひけり

逗留と極れば雨もはたとはれ

板間（注）の泥を惣々（注）してふく

宵月の間は顔に蚊もさはり

はたけ村まで深い露ふむ

嵐牛

曲川

其常

曲川

燕居

嵐牛

知碩

其常

曲川

燕居

嵐牛

知碩

其常

曲川

燕居

嵐牛

相撲取の古郷もどりを振舞て

誰に見せても遣はれぬ金

咲花の床几にくぼるたばこ盆

しほ干の風のかるう吹出す

鳶鴉雲にも入いずにくまれて

湯だての竈かまどあたふたと築つく

西からと計ばかりの使うたがはし

嬬かかの気前をみなほめてある

手早くも鱈の包をきりほどき

てらくゝあがるよひの明星

讓あふ医者のはなしの長々と

根津の隠居がの今日はくる筈

紙人もゞ木はづせば出来上り

いわしゝと呼るゆふ月

踊ても最う能い触の様子也

粟も岡穂まがほもむしまけはなし

めつたには遣はぬ家も牛飼うて

わたり大工の終に有つく

知碩

其常

曲川

燕居

嵐牛

知碩

其常

曲川

燕居

嵐牛

知碩

其常

曲川

燕居

嵐牛

知碩

其常

曲川

膏藥も納所なつしよにいへばくれる也

茶釜の水のたらぬ音する

ちりかゝる花にとめ端も無りけり

麦のそよぎにそゝなかすてふ

其常 八句 曲川 七句

燕居 七句 嵐牛 七句

知碩 七句

人殖て屏風を畳むこたつ哉

蕎麦湯に箸のたらぬくれ方

鉄棒のあとに家鴨あひるの鳴立て

船場へちかき数ぬける也

月の雲雨もこぼさずちりしまひ

つらずともよいかやを釣つるるゝ

葍落へたおちと断て出す盆の柿

まけをしむ碁碁にうとき黙算目

透とほる百日紅の夕日かげ

待人おそし犬も顔見る

燕居

嵐牛

知碩

其常

瑩みかぐ

曲川

梅春

嵐牛

曲川

瑩

嵐牛

梅春

瑩

曲川

うたひ出す子守のうたの耳ざはり

かはる住持寺もまだ若きなり

麻殻のぼつくと燃て湯もわかず

鮫洲へまでは秋の夜も有ある

露ぬれ注9の操荷ほどく月明り

常に袴のすそを引ずる

見ぐるしと取らする花の力杭

穴からむしのいくつともなし

不二の雲翌あ日ものどかのつゞくらん

出来た二階へ寝ころびに行

うるさゝに世帯渡せばものさびし

閨まがないと晩まが年まこし

あらましに画もかた付て立じたく

仕舞込てはさがす目薬

姉らしう流行は遊女の口利て

こゝろ有まげに使うなづく

下さかゝる時のはげしき米相場

又この盆も大坂の月

梅春

嵐牛

曲川

瑩

嵐牛

梅春

瑩

曲川

梅春

嵐牛

曲川

瑩

嵐牛

梅春

曲川

嵐牛

梅春

曲川

(注10) 生酌も残暑後にのみおぼえ

萩見てゐれば友達が呼

尼寺に隔つ流れのしよろくと

よい臭かぎのする張板の藍

静さは格子造りの軒ならべ

残りの住連注をはづす精進日さうじひ

咲花に天氣の小口見えかゝり

麦の上ふく風の和らか

瑩 六句 曲川 十句

梅春 十句 嵐牛 十句

文久二戌春

嵐牛

梅春

曲川

嵐牛

梅春

曲川

嵐牛

梅春

(注1) 此春もいかぬ：以下、『猿蓑』(元禄四年・一六九)所

収の付句「この春も盧同の男居なりにて(史)邦」をい

うか。出代りにも奉公先をかえない盧同(唐の隠士)の

下男の実直さを虚構した作。

(注2) いかぬこそおもしろけれ：『文章』A本は底本に同

じだが、『同上』B本・D本ではこの部分を削り、続く部

分も「何か花に成、何か月に成」と「月」「花」の順を入  
れ替える。

(注3) 七里：「七里飛脚」の略。近世、各藩で七里ごとに

飛脚を置いて通信・運送に当たさせた。

(注4) そら近従：「空近習」で、うわべだけ従順な振りを

して仕えること。

(注5) 星崎：名古屋市南区星崎。歌枕鳴海湾に面し、芭蕉

の「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」の吟で知られる。

(注6) 定家袋：錦や金欄を張り合わせた布帛で包んだ文匣ぶんげい

で、口に括り紐が付けてある。「甘ぼし」は干柿。

(注7) 惣々して：総出で。大勢で。

(注8) はたけ村：三河国渥美郡(現、田原市福江町)の畠

村であろう。蕉門の杜国が罪を得て所払いとなり、蟄居

したところ。のち保美(同市保美町)に移る。

(注9) 操荷：近世には「緑」を「操」と誤用した例が多く、

ここでは「括(り)荷」に用いたか。

(注10) 生酌：焼酌の当字か。暑氣払いに飲まれた。

# 俳文の部

嵐牛文集

【書誌】 発句の部『嵐牛発句集』参照。

【解題】 刊本『嵐牛発句集』の後半十六丁に付録される「嵐牛文集」（内題）で、以下に題名を掲げる嵐牛の俳文十二篇を収録する。

- 一 小夜中山賦
- 二 『其仮集』ノ序
- 三 囊解
- 四 夢中罵風辞
- 五 隣圈中虎辞
- 六 蛙辞
- 七 釣辞
- 八 須磨琴辞
- 九 買笑解
- 十 愛墨説
- 十一 『何問答集』ノ序
- 十二 祖翁忌発句正式序

なお、自筆の半切や懷紙、刊本、稿本『文章』（四種）に同文の見えるものについては、主要な異同を傍記した。

【翻刻】

嵐牛文集

一 小夜中山賦

小夜の中山は日坂のすくより九折を登れば、左右深谷(宿)にして、一峰長き道はつゞみの上に似たり、と長明(鼓(B本・D本))の記にも見えて、行程一里のほど、遠近の眺望処々にして姿態あり。(注2)西行・阿仏・羅山が詩歌、猶古今の吟詠挙て算へがたし。(注3)淡々・大尾・秋葉・大日が嶽(待)は手に携るが如く一望のうちに峙ち、良(注4)の方に雲のごとく煙りのごとく遥の空に見渡さるゝものは、へ(注5)さやにも見しか、と詠じたる『古今集』の歌の姿にして、甲斐(注6)の白根なるべきか。猶、飛弾(彈)・信濃の諸峰をちこちに並(なみ)たち、不二・足柄(足高(B本))のながめは相賀(あか)・千葉根の頂きを續けて眺望のさまたげを(注7)なし、布引(注8)が原は布をひきはえたるが如く大井川の半をさへぎり、川井(注9)が淵・仙人が滝には雨を祈り、八坪沢(注10)・鱸(うなぎ)の清水は早に汲(ひ)て尽(つく)ず、菊石・亀石・夜泣石・夜泣(注11)の松の来由は縁起に残り、白菊姫(注12)のふるごと、光親卿(注13)のおくつきは菊川(注14)の里に灼然(あきらけ)く、此里もと宿(すく)にして、中御(注15)

門宗行卿こと有て鎌倉に下り給ひし時、南陽県の菊水の  
 一聯をやどりの柱に泪ながらにもものせられしとか、今猶  
 哀深き処のさま也けり。(注16) 小山・諏訪の原の古趾は、梵刹  
 とかはり社頭とかゞやき、白山の半鐘・八から鉦は、公  
 任卿の滝にはあらねど、今音たえてひさし。(注19) 御幕場は陵  
 谷の変を遷して、古松老杉生茂りて、行かひ股ふるふ計  
 也。さて南の方、路傍の岩上に立て見おろせば、城東・  
 榛原の両郡、数百の村落こなたかなたに、千頂万頂の田  
 づらひらけ、三年の貢物のみゆるしを待ずして、民屋け  
 ぶりにぎはへり。猶首をかゝげて見渡せば、白羽沓・御  
 前岬・牛の御前・あし高巖(注21) 澳は名におふ遠江灘七十五  
 里、東西する征帆、局上に碁を打ちらすに似たり。亦、  
 東に顧れば天女のもすそを吹かへすが如く、洋中にたゞ  
 よふものは伊豆の一国にして、名だゝる七島、蓑かけ、  
 田子島、浅間門など、煙波のうちに雄飛雌伏して、天城・  
 高草の秀峰、国を隔ながら伯仲をあらそひ立るがごとく、  
 風色筆を投ぜんとす。

爰に小夜中山久延寺は御由緒の御寺にして、宝物什物

沢なれど、いづれもやごとなきみわたりのものにしあれ  
 ば、憚りて記さず。山中の家々、餅と飴とを旅客にすゝ  
 むるをもて業とす。(注27) 其もちは雪をきたへ、其飴は琥珀も  
 恥べし。されば往来の貴賤老若となく、是が為に襟をつ  
 くらひ、容をあらたむ。(注28) 樂天曰、「勝地本来無三定主、  
 大都山属三愛レ山人」と。我、此賦をつくりて、この山  
 のあるじたらむと欲すれど、さやの中山なかくくに、山  
 も笑はん、人もわらはんとぞ。

【備考】底本のほかに自筆の豎幅と稿本『文章』（B本・  
 D本）所収のものがあり、自筆豎幅には、「明治四辛未晚  
 秋日 右さよの中山の賦 柿園買笑老人」の奥書がある。

（注1）長明の記：『海道記』（貞応二年・三三三）を江戸前  
 期に『鴨長明海道記』（寛文四年・一六四）の書名で出版、  
 流布したことから誤伝された。小夜中山について「左も  
 深き谷右も深き谷、一峰に長き路は堤の上に似たり」な  
 どと記される。

（注2）西行・阿仏・羅山：「前書略 年たけて又こゆべし  
 と思ひきや命なりけり佐夜の中山 西行法師」（『新古今

和歌集」)。「十月」廿四日、昼に成て、さやの中山越ゆ。

(中略) 山陰にて嵐も及ばぬなめり。深く入ま、遠近の峰  
続き、異山に似ず、心細く哀也」(阿仏著『十六夜日記』、  
弘安二年・三十九年)。「小夜中山 円位法師が、いのちな  
りけり小夜の中山、と詠ぜしは、爰にての事なり(漢詩、  
略)」(羅山著『丙辰紀行』元和二年・二六)。

(注3) 淡々・大尾・秋葉・大日が嶽：粟ヶ岳(532m)  
は掛川市初馬・倉真・東山の境界にあり、近世には多く  
淡ヶ嶽(岳)と書く。山頂近くに磐座があつて、阿波波  
神社がある。すぐ下に無間の鐘で知られる観音寺があつ  
たが、今は廃寺。大尾山(671m)は掛川市居尻にあ  
る山。修験道の山で、頂上近くに遠州八坊の一つ大尾山  
顕光寺がある。『そのまま集二』の(注15)参照。秋葉  
山(885m)は浜松市天竜区春野町領家にあり、火伏  
せで知られる秋葉寺(廃寺)、秋葉神社で有名。大日ヶ嶽  
は、現在、大日山(881m)と呼ぶ。森町の島田市と  
の境界近くで、大日山金剛院があり、行基の作と伝える  
大日如来を本尊とする。

(注4) 良：東北をいう。

(注5) さやにも見しか：「甲斐歌 甲斐が嶺をさやにも見

しかけ、れなく横ほり伏せるさやの中山」(『古今和歌  
集』)。「しか」は願望を表現。「け、れ」は「こころ」の  
東国方言。

(注6) 甲斐の白根：山梨県西端の北岳(3193m)、間ノ  
岳(3193m)、農鳥岳(3026m)の総称。

(注7) 相賀・千葉根：小夜中山から見て東北に当たる島田  
市相賀の西端に高山(568m)、その東側の同市千葉の  
西端に千葉山(496m)が聳え、後者の山頂近くには  
千葉山智満寺(天台宗)がある。『文章』(B本)は「相  
賀・千葉根の木だちがくれ」、『同上』(D本)には「すは  
の原木だち隠れ」とある。

(注8) 布引が原：牧之原市布引原。新幹線で大井川橋梁を  
掛川方向に渡り、暫く走るとトンネルに入るが、そのト  
ンネルの南の辺に当たる。

(注9) 川井が淵・仙人が滝：不明。戦前の小夜中山探勝記  
念絵ハガキ三枚セットに「仙人ヶ滝」の一枚が含まれる。  
「川井が淵」とともに菊川の上流、佐夜鹿地区と思われる  
が、特定できない。

(注10) 八坪沢・鱧淵：前者は略縁起には「矢つぼ沢」と表  
記、小夜中山の南にあるという(略縁起『遠州佐夜中山

刃雉子三位高実卿退治由来」ほか)。後者「鱷淵」は略縁起に見える「桜が淵」か。菊川の上流にあるのであろう。

「汲て尽ず」は「文章」(B本・D本)には「汲て山上の数家を養ひ」とある。

(注11) 菊石・亀石・夜泣石・夜泣の松：佐夜鹿の小字大鹿に菊形(きくがた)の石がある(『東海道名所図会』)。(注13) 参照。

「夜泣石」は東海道の路中であつた伝説の大石(国道1号線沿いに移され現存)。『東海道名所図会』の「佐夜中山」の挿絵にも描かれ、「夜泣松」は同書に「夜泣石の東志町ばかり左側にあり」として同じ挿絵にも描かれている。

『遠州佐夜中山子育観音夜啼石敵討由来 上』遠州佐夜中山刃雉子三位高実卿退治由来 下」などの略縁起が同地の茶店で売られ、無間山観音寺の無間鐘の由来、菊石、亀石、白菊姫、夜泣石、子育館の伝説が人口に膾炙した。

(注12) 白菊姫：「菊石」「菊川」に因んで虚構された主人公で、地元庄司の娘。(注11)の略縁起参照。

(注13) 光親卿のおくつき：『太平記』の謬説に導かれて「宗行卿塚」を誤つたもの。菊川の立場(たてば)近くにある中納言宗行と俊基朝臣の碑(文久三年・一八三三建立)で、そこにヒビの線が菊花文様に見える菊石もある。

(注14) 菊川の里：菊川は中世には宿駅だったが、近世には立場となった。『文章』(B本・D本)には「菊川の里にぞ伝はる」とある。

(注15) 中御門宗行卿：承久三年(二二二二)七月、反乱に加わつた罪で鎌倉に護送され、途中、菊川の宿で地名を詠み込んだ漢詩を宿の柱に書き付けた(『承久記』ほか)。引用は詩の前半「昔南陽県之菊水、汲ツ下流ツ延ツ齡ツ」を指し、中国河南省「南陽」から出る「菊水」の川水は長寿を保つ、との意。後半は「今東海道之菊川、宿ツ西岸ツ亡ツ命ツ」。

(注16) 小山・諏訪の原：菊川から金谷への途中にある諏訪の原(牧ノ原ともいう)と榛原郡吉田町片岡にあつた小山の両城は、武田氏が遠州の徳川氏と対峙、防衛する拠点とされた。小山城は、弘長二年(二二六二)創建、臨濟宗妙心寺派の能満寺がある丘の上であり、同寺は日本三大蘇鉄に数えられる天然記念物指定の蘇鉄で有名。諏訪の原の城趾には諏訪祠があり、そこからの呼称。

(注17) 白山の半鐘・八から鉦：佐夜の中山に白山社があるようなので、そこに吊され、叩かれなくなった半鐘のことか。「八から鉦」は歌念仏から発した大道芸の一つで、八挺鉦ともいう。『掛川誌稿』(化政期)に、「(佐夜の)

中山民戸の童子、十二三のもの、八ツの鉦を繩を以て腰に結び付て、くるくると回りながら打つ。一人太鼓を打て旅人を慰む。是を八柄鉦と呼て業とせしものあり。今は絶たり」とある。

(注18) 公任卿の滝：「小倉百人一首」に所収の「滝の音は絶えて久しくなりぬれど名こそ流れてなほ聞こえけれ大納言公任」。

(注19) 御幕場：諏訪の原城の陣幕を張った場所。天正元年（一五七三）、武田方の室賀氏と小泉氏は、浜松に居城する家康の軍勢に攻められ、小山城に逃れた。以下、D本には「陵谷の変にかゝりてや松逆に生かゝりぬ」とあつて、「行かひ：計也」はない。B本は、同上の文章を底本のよう  
に訂正。

(注20) 千頃万頃：「頃」は畑の広さをはかる単位で、一頃は百畝。「田づらひらけ」は、『文章』（B本）等には「稲莖を敷つらね」とある。

(注21) 三年の貢物のみゆるし：江戸時代、村請むらひけの新田開発は三年間免税された。

(注22) 白羽浮・御前岬：自筆豎幅（明治四年）には「志る波かた」とある。遠州灘に面した東端、御前崎とそ

や西にある白羽海岸。『万葉集』には「志留波磯」として見える。『そのまま集三』の（注21）参照。「牛の御前」「あし（足）高巖」は未詳だが、往古沖合で九十頭の馬が輸送中に遭難、一頭のみが岸にたどり着いた地に出来た駒形神社、残りの馬は沖の御前岩（駒形岩）と化したとの伝承があり、それに関わるか。

(注23) 蓑かけ・田子島・浅間門など：「蓑かけ」は南伊豆町大瀬、石廊崎いろうさきの東辺にある島の名。「田子島」は西伊豆町にある島の名。「浅間門」は西伊豆と南伊豆の間、松崎町雲見にある島「千貫門」。近くの雲見崎に浅間神社せんげんがあるので誤記したか。以下、『文章』（B本・D本）には「坏名をならべ」とある。

(注24) 高草：焼津市の北方、藤枝市との境界にある山（501・4m）の名。眺望がよいことで知られる。D本には「遠黒・高草の数山波袂に抱入るが如く」とあり、B本では「遠黒・久能・高くさの数山、国隔ながら伯仲を争ひ立るが如く」と訂正。「遠黒」は天城連峰の一つ「遠笠（山）」の誤記か。

(注25) 小夜中山久延寺：『東海道名所図会』に「子育て観音」の見出しで、「久円寺といふ、真言の草堂なり」とある。

(注26) 餅と飴：略縁起に因んだ子育飴(水飴)と餅を売る数軒の茶屋があった。餅は飴餅で、山内一豊が久延寺御殿で、関ヶ原に向かう家康に献上した「御開運餅」がはじまりとの由緒を伝える(児玉幸多監修『東海道五十三次を歩く』(3))。

(注27) 業とす。：『文章』には以下に一文があり、B本では「其処女どもの粧ひ貴妃が紅粉を施し、昭君が裳をひきざらずして鶯の舌をふるひ」とあり、D本では同文の最後を「ふるふ」と訂正。

(注28) 楽天曰：「勝地はもとより定まれる主なし、おおむね山は山を愛する人に属す 白」(『和漢朗詠集』)による。原典は白居易(楽天)著『白氏文集』。

## 二 『其俛集』ノ序(発句の部、『そのまま集四編』参照)

### 三 囊解ふくろかい

ある人、ふくろを好みて種々の異類をもてあそぶの余り、人々に乞得て、あるは袋のこと葉、或は弁など書せ

て、是をひとつのたのしみとせり。我にも「解、書てよ」と責らる。己もとよりの貧しき囊中、「何をかは」といなめどもゆるさず。「さらば」とて受ひく折から、園中来啼鶯蛙のうた袋は紀氏が筆頭に芳く、四条大納言の褒詞をさめたる、範永朝臣の重宝ぶくろは生涯の面目にして、月の光りよりも猶かゞやかし。ノ貫がダン袋、布袋和尚のとり込ぶくろ、ともに至極の弁理にして、我もおもふ折々も少からず。爺婆が浮世袋には鏝に散米をまじへ、樽蒲が懐袋には粒金を鳴らし、爰に葉鬻ぐ門の大袋は神農氏の百物を貯へられしにつたはり、太秦の袋法師がふくろには、たわやめの眉を擧め、亦まゆをひらかす。大黒殿の負ふくろは、八上姫のよばひに幸を得玉ひしをみそ上玉ふ御こゝろより、今猶すて玉はぬ御姿にやあらん。日本武尊は東征の日、其御叔母倭びめの授玉ふ袋ものして群賊を焼つくされ、科戸の神の御袋も初春のなごやかなるにうち愛給ひて、いさゝかもらし玉ふはつ東風には梅が香をさそひ、柳の糸をくり伸す。然れども神の御こゝろあらび、彼くちを恣にし玉ふ時は、樹をぬき

家を拆さき、たなつものを害をふに至るは、本意なき御みしわざに似たれども、弘安のむかし、蒙古の六万余艘を唯ひと吹に打碎かれし御勲功も、全く此袋のとり扱あつかひによれる成べければ、強あなちには申まうしがたし。又宗祇法師が髭袋は古今好事の冠たるものにして、青砥(注16)どの、滑川の腰袋の危なめりは天下に名高し。范蠡(注17)もひと度菟裘の袋に知計(注18)を抛なげてふた、び陶(注19)にさかえ、登通(注18)が豪富も私錢(注18)の婪(注18)に終には底をふるはれたり。かにかく此ものゝ口を守ることは、かたきが中のかたきにして、己も斯(注20)そざること書ちらして、袋のうち見すかされんことおもなきことより、今更筆をさしおく。

【備考】本作には自筆本双幅があり、「為木田友成雅伯 栴園老人（印）」と奥書きする。主な異同を傍記した。

(注1) 紀氏が筆頭：「花に鳴く鶯、水に住む蛙の声を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を詠まざりける」

(紀貫之ら撰進『古今和歌集』仮名序)。

(注2) 四条大納言：出家した四条大納言、藤原公任が範永の詠「住む人もなき山里の秋の夜は月の光もさびしかりけり」を見せられ、「範永誰人ぞや。和歌、其体を得た

り」と絶賛、その賛辞を記した詠草を範永が錦の袋に入れ、宝物とした逸話が『袋草紙』などに見える。公任は藤原道長全盛の頃、宮廷歌壇の指導的立場にあった歌人で、『和漢朗詠集』のほかに『拾遺和歌集』の撰者とも見られている。範永朝臣は藤原氏。生没年未詳。和歌六人党の一人。家集に『範永朝臣集』がある。

(注3) ノ貫：ノ桓、ノ観とも書く。安土桃山時代の茶人。陀茶を専らとし、清貧・奇行で知られる。「ダン袋」は駄荷袋が転訛した語で、布製の大袋。

(注4) 布袋和尚：唐代の禅僧。名は契此。腹の肥えた体に杖を持ち、日用品を入れた袋を背負って町の中を歩き、吉凶や天候を占ったと伝える。日本では七福神の一として親しまれる。

(注5) 浮世袋：絹を三角に縫い、中に綿を入れ、上の角に糸を付けたもの。遊女屋の暖簾や匂い袋、子供の玩具などとした。

(注6) 鐙：鐙銭。一文銭。

(注7) 樽蒲：樽蒲一。中国渡来の賭博の一。「粒金」は一分金。

(注8) 神農氏：中国古伝説中の帝王。三皇の一。敬称で、氏を付ける。人々に医療と農耕の術を教えた。

(注9) 袋法師：十四世紀頃成立の春画絵巻、『袋法師絵詞』

の主人公。法師は太秦の御所に仕える侍女や尼御前と情交を重ね、その間、袋に隠匿される。

(注10) 大黒殿：大黒は天竺(インド)の神で、七福神の一。

左肩に大きな袋を負い、右手に打出の小槌をもち、米俵を踏まえた姿をしている。発音から大黒主命と混同される。

(注11) 八上姫：大黒主の兄弟、八十神らとともに因幡八上の姫を訪れて「婚よはふ」(求愛する)けれども、袋を負わされた従者、大黒主の愛を姫は受け入れる(『古事記』)。

(注12) みそ上給ふ：「みそ」は手前味噌。自慢する。

(注13) 日本武尊：父景行天皇に東征を命ぜられ、伊勢に寄り斎宮の叔母大和姫に草薙の剣と火打石の入った囊を与えられ、焼津で相模の国造に欺かれて野火に囲まれたとき、その剣と火打石で難を逃れる。

(注14) 科戸の神：風の神、級長戸しなとべのなと刃命(『日本書紀』神代の巻)。風神の姿は、裸形で風袋を負うとされた。

(注15) 宗祇法師：連歌師飯尾宗祇は鬚を伸ばし、香を焚きしめていたことで有名(『宗祇諸国物語』貞享二年・一六八五刊)。ただし、髭袋については不明。美髯公と呼ばれ、鬚を自慢にしていた関羽は、曹操から錦でつくった鬚袋

をプレゼントされる(『通俗三國志』卷十)。

(注16) 青砥どの：青砥藤綱。鎌倉期の御家人。滑川に十文の銭を落とし、五十文の続松たいまつを買って来させ、探し出した有名な逸話(『太平記』ほか)。

(注17) 范蠡：越王を助けて呉国を破った范蠡は、五湖に舟を浮かべて斉国に逃れ、斉王がその賢を聞いて召し出し官丞相に至ると、丞相の印を返し財を朋友に分ち、ひそかに陶に至り、父子で耕し交易で巨万の富を築く(『通俗異越軍談』)。

(注18) 菟裘：中国古代、魯国の隱公が隱棲の地と定めたところ。ひろく官を辞して隱棲する地をいう。『文章』(B本)で、「菟裘の袋を」に傍書し、「菟裘に知計の袋を」と推敲。

(注19) 鄧通：『史記』の「侯侯列伝」に見える、漢の文帝の寵臣。蜀郡南安の人。文帝から何度か一億銭の褒美をもらい、銅山を与えられて銭を鑄造、その銭は天下に広まる。文帝の死後、罷免されると国外で不法に銭を鑄造、通報されて財産とともに没収され、ついに一銭ものこらず、他人の家で亡くなる。

(注20) おもなきことより：『文章』(B本)などには「おも

なのことよと」とある。恥ずかしいことと。

#### 四 夢中罵レ風辞

園のさくら・楓、若枝さしそひ、いと小ぐらきに、雨さへ降つゞきてものむつかしき日、あしたより机に憑れば、老懶早眠りをもよほし、忘夢さまぐなる中に、大なる風ひとつ捫り出せり。掌に居てとふ、「汝いかにして爰に來りて我にせまるや。明らかにもものせよ。速ならずは辛き目見せん」といひおどすを、聊沈勇も有げにて、ひと言をも出さず又もとの縫目に入んとす。又曰、「汝いかなれば綾羅錦繡を愛せず、つゞり垢づきたるを好むや。去からに、木導には乞食のいきれならんと誘られ、支考にはぬけまゐりの異名を呼れ、彼安石が髭に蠢きて、あらぬわらひを殿上にとらす。是らは罪にかぞへんや。洒落といはんや。報恩のためには命をもて薛嵩が刺客をあざむき、紀昌が弓の丹練には窓に釣られたり。且文事の上にもいかなる宿縁か有て、「阿房宮の賦」を吟ずるの韻を

なして、蘇隱が寢覚の枕を驚かし、宇都宮遯庵先生には「風文選」をかゝる。こはさゝやかにものしたれば、目したるなるべきか。さらばきさゝ(文選)とも有べきを、風と有のまゝにせしは、をかしまをとられたるにや。爰に汝等、観音の異名あるこそいぶかしけれ。何ごとも誰いひそめしとも知がたけれど、我籍に是をおもふに、仏身より血を出せしものは罪五百生をのがれずと聞ば、汝爪甲の憂目を見ん為にかく工みたる成べし。いかに命のをしければとて、菩薩の尊号を浸すはいかにぞや。汝かしらにをれば黒く、身につけば白し。玄素定まれる質なければ、東坡居士は垢脂より生ずといひ、今一人は綿絮よりと終に争ひをなして、去大和尚に定めを乞れたれど、和尚もあやしき説をなして、冷陶餓陀の喰にげしたるは、全く仏のをしへにももれたりけん。汝いよく素性をいはずは、彼味檀の丘の例にならひて、にえ湯あびせん」と一声上るとおもへば、やがて夢は覺たりけり。

(注1) 老懶：年を取ってものぐさなこと。自身を謙遜、自嘲していう。

(注2) 木導：江州亀城（彦根城）の武士。直江氏。『本朝文選（風俗文選）』所収の「天狗弁」文末に、「虱は乞食のいきれなる事、慥なるべし」とある。

(注3) 支考：各務氏。蕉門の論客で、美濃派（獅子門）の祖。編著・別号、ともに多数。「ぬけまわりの異名」について未詳。『文章』（B本）には「我翁も、へいまだ取尽さず、とぞうめき玉ふ」とあり、「支考には：」は書き込み傍書。

(注4) 安石：王安石（一〇二九～一〇八六）。中国、宋の撫州臨川（江西省）の人。詩人で、唐宋八大家の一人。絶句に妙を得た。『五雜俎』十六に、王安石がある朝、禹王に侍している、虱が安石の髭に這い上がったのを見て神宗帝が笑った。安石がそれを知らずに、聞き知った禹王が従者にそれを取り去らせ、安石に虱の功を頌する一言を獻じさせた逸話が見える。ただし、『文章』（B本）などの上部余白に依拠した文献名「墨客揮犀」の書き込みがある。

(注5) 薛嵩：薛嵩（七三〇～七七三）の誤記か。中国の唐代、山西省絳州万泉の人。弩力・騎射に卓越、人となり豪邁、

安禄山・史思明の戦乱で功を上げた。「刺客をあざむ」いた逸話については不明。

(注6) 紀昌：『列子』や『蒙求』（『紀昌貫虱』）に記される弓の名人。師飛衛の助言、小さなものを大きく見えるように修行、虱を窓につるして毎日に見つらみ暮らし、ついに燕角の弧、朔蓬の箛で虱を射抜く。中島敦の短編「名人伝」でも知られる。

(注7) 阿房宮の賦：杜牧之作で、『古文真宝後集』に収められる。秦の始皇帝が長安の西北、阿房に造らせた壮大な宮殿。

(注8) 蘇隱：『文章』（B本・D本）の上部余白に書名の書き込みのある『潜確居類書』（明代の陳仁錫編）に収める怪奇譚の主人公で、揚州の人。寝っていると夜具の下から「阿房宮の賦」を吟ずる人声がきこえるので、夜具をはいでみたところ、人の姿はなく、豆粒ほどの虱が十数いて、殺すと声が止んだという。

(注9) 宇都宮遯庵：江戸前期の儒学者（一六三三～一七〇七）。名は的。字は由的。周防の人。松永尺五に師事。岩国藩儒となる。『文選音註』ほか中国の詩文集の訓点・注釈書を多数刊行し、『遯庵詩集』『遯庵先生文集』ほかの著書が

ある。「虱文選」については未詳だが、細字で記した「文選」を譬喩的に称したか。

(注10) きさゝ文選…「きさゝ」は蟻で、虱の卵。「文章」(B本・D本)により「文選」を補う。

(注11) 観音の異名…「くわんおん」とは、しらみのこと。「新撰大阪詞大全」。

(注12) 仏身より血を出せしものは…仏道で、「出仏身血」(仏身を傷つけること)は五逆(罪)の一つに数えられ、無間地獄に落ちるなどとされる。

(注13) 爪甲…ともにツメの意。虱は、爪先でつぶして殺す。

(注14) 菩薩の尊号…観音は、観世音菩薩などの略称で、菩薩の一つ。

(注15) かしらにをれば黒く…「虱ハ頭ニ処テ黒ク、鬢ハ栢ヲ食テ香シ」(『文選』)。

(注16) 東坡居士は垢脂より生ずといひ…『東坡詩話』に、東坡と友人山谷(黄庭堅)とで、虱は何から生じるかを論争、東坡は垢や脂からと答え、山谷は綿からと主張、どちらが正しいかを親しい僧仏印に判定してもらう逸話が見える。仏印は二股かけて、両者の説を半分ずつ支持して、両者から約束のご馳走をして貰おうとする。

(注17) 去大和尚…「文章」(B本)などは「仏印和尚」とする。

(注18) 冷淘餛飩…「冷淘」は水で冷やした飯、「餛飩」はホウトウ(うどん)。両者からご馳走して貰う食べ物で、底本は誤刻。

(注19) 味噌の丘…奈良県明日香村豊浦の甘櫃坐神社では、「盟神探湯」といい、正しい者は煮沸した釜の熱湯に手を入れても焼け爛れないとする裁判が古代に行われ、その神事が今も伝えられる。

## 五 憐<sup>ム</sup>圈<sup>ノ</sup>中<sup>ノ</sup>虎<sup>ノ</sup>二<sup>辞</sup>

(注1) 虎嘯けば山野風烈しく、雲みだれ、百獸<sup>ノ</sup>脳裂、人猶<sup>ノ</sup>慄く。むべなるかな、やゝもすれば老を害<sup>ノ</sup>ひ兒を攫<sup>ノ</sup>み、すべて<sup>ノ</sup>のものゝ命をあやまることいくそばくぞ。さればさ<sup>ノ</sup>しもの李<sup>ノ</sup>広もあわてゝ石にあだ矢を射<sup>ノ</sup>当<sup>ノ</sup>て、子路は尾をとりて下土の憤りを発す。然れども、国清寺の禪師と眠りを共にせしは、仏縁にひかるゝあやにくなる方も有にや。且、耆域<sup>ノ</sup>・思遠<sup>ノ</sup>に跨<sup>ノ</sup>がれて、尻<sup>ノ</sup>うたるゝをもちとはずして駈めぐりしは、聊仙味を窺<sup>ノ</sup>ふにも似て、其やさしき

趣は画にもかゝれ、文にも見えたり。夫を汝(諸本)いかにあやまりてか、人の手にわたり、(注6)圈中に蹠(注6)のくるしみをうけ、此国にさへわたされて、都会の人に見ふるされ、今は田舎わたらひして、爰(注7)の木かしの辻と、張菰(注8)のうちに児女の見物ともてはやされ、わざおぎめきたる事をさへまねびつるは、汝にして口をしからずや。さて、欲する処はと見るに、唯鶏豕(豚)の腐肉をまち、皿桶の水を啜(す)るを快しとす。されど折にふれては、朝三暮四の憤りもなごかなからん。(注10)商山・馬跡の雨嵐も、いかでしのばざらん。嘻(あゝ)、汝おもへ、皆汝がなせる暴虐の報のよる処にして彼和尚とともに眠りしも、道家に愛せられしも、全く一時のそらぼけなるべければ、よくく思惟するに、是もにくむべきのひとつなれば、いかに辛き目見んとも、更々恨とすべきにあらず。さはいへ、爰に哀ともいふべきは、大將軍の佩もの、尻鞞(しりざや)に威をふるひ、且馬蹏(ばせえ)に花をかざるは、汝が身後の曠(はれ)なるを、斯(か)まで命の薄ければ、(注14)悪趣に落入らん日、かならず罪者を呵責するもの、腰のあたり(注15)に纏(まと)はれ、えもいはれぬむさきめ見むことあきら

けし。

〔注1〕虎嘯(ウシフ)けば…「虎嘯(ウシフ)而風烈(シク)、龍興(ヲコト)而致(ツケ)雲(ツバ)」(『文選』)。

「獅子吼(シシノ)ユレバ野干(キツネ)、腦裂(ニウ)ク」(『臨濟録』)。「毎(タビ)則(レバ)百獸辟易(ヒク)」(『和漢三才図会』「獅子」)。「虎吼(ウシ)声(ノ)

如(ノ)雷(ノ)、風從(フ)而生(シ)百獸震恐(ヒル)」(『同上』「虎」)。「文章」(A本)は「虎山野に嘯(ウシフ)ば風烈(シク)」、B本・D本は底本に同じ。

〔注2〕李広(リク)：前漢の人。騎射に卓越、匈奴から漢飛將軍と恐れ呼ばれた。『史記』の「李広伝」や「蒙求」の「李広成蹊」に、草中の虎を射たところ、石に矢が刺さっていた。他日、同様に石を射たけれども、矢を射立てること

は出来なかつた話が見える。

〔注3〕子路(シロ)：孔子の弟子。『衝波伝』によると、孔子が子路に水を汲ませに山に行かせたとき、虎にあつて戦いその尾を攬(と)り、帰った。孔子に虎を殺したときどうするかを問うと、上土は頭、中土は耳、下土は尾を攬ると答えたので、それを聞いて羞じた子路は、尾を捨てたという(南方熊楠「十二支考」)。

〔注4〕国清寺の禪師：唐代、中国天台山国清寺の豊干(フカン)。弟子と伝えられる寒山・拾得と虎の四者がいつしよに眠る

「四睡図」で有名。

- (注5) 耆域・思遠：前者は西晋の末、天竺（インド）から中国に來た人。粗衣のため渡舟に乗るのを断られ、虎に騎つて渡つた（『高僧伝』）。後者の鄭思遠は唐末の人。符祝呪水を以て人の病をよく治し、神医と称された。母虎を殺された二頭の虎を育て、恩義を感じて従う父虎の背に跨つて治療に出掛けたという（『有象列仙全伝』）。（注10）を参照。

(注6) 圈中：『文章』A本には題名・本文ともに「檻中」とある。B本・D本は底本に同じ。「蹠蹠」は身体を屈曲させた状態。

(注7) 木：誤刻で、『文章』諸本の「市」が正しい。

(注8) わざおぎ：俳優。技芸をして見世物とする人。

(注9) 朝三暮四：中国の故事。狙公が飼っている猿に餌の橡の実を朝三つ、夕方四つ与えようとしたら怒つたので、朝四つ、夕方三つにしたら喜んだという（『莊子』ほか）。

『文章』諸本には「朝四暮三」とある。

(注10) 商山・馬跡：以下の一文、『文章』A本にはなく、B本以下で補つたもの。「商山」は中国陝西省商嶺の東部にあり、四皓の隠棲地として知られる。「馬跡」は『文章』

(B本)の上部余白に「馬跡山、思遠住シ処」との書き込みがある通りで、『有象列仙全伝』には、「廬江ノ馬迹山 中二居ス」とある。

(注11) 佩もの：礼服の腰に付ける装飾物。「尻鞆」は刀剣の鞆を包む革袋。

(注12) 馬氈：馬の鞍の居木の上に敷くもの。

(注13) 身後：死後。

(注14) 悪趣：仏語で、悪業の結果、死後に趣く苦界。

(注15) 罪者を呵責するもの：地獄の獄卒（鬼）。

## 六 蛙辞

蛙々、嘻、かはづ、ころくくと汝が初声聞そむる頃、

草庵にひちを曲る宵まどひのよみく、宵まどひのひちを曲る宵々は(A本)(注1)あひな 価千金も猶軽しと

せん。去ば、(注2)あがく、よな、れいじん 詩人は蛙衆と称て伶人に数まへ、(注3)きし 紀氏は歌よ

みの列にくはへて、(注4) 遍昭・小町に肩をならべさせんとす。

はた我道の芭蕉翁は、(注5) 汝(A本)人(A本) なが飛込水音に眼をさまして、一

身を打失すとかや。(注6) さる美談おほきを、いかににくまれ

て、(注7) 催馬楽にはちからなき蛙々とくり返し謡はるゝらん。

蛙々、あゝ、かはづ。

(注1) 価千金：蘇軾の七絶「春夜」の起句「春宵一刻直千金」による。

(注2) 蛙楽：連歌論書「筑波問答」に見える語。ただし、

中国では「蛙咬」「蛙声」など、蛙の鳴き声は淫らで、喧しいとされた。「伶人」は楽士。

(注3) 紀氏：紀貫之。「古今和歌集」「仮名序」に蛙や鶯も歌を詠むと述べる。

(注4) 遍昭・小町：『古今和歌集』『仮名序』に『万葉集』時代の代表的歌人人麿・赤人を挙げた後、近き世の代表的な歌人として僧正遍昭・在原業平・文屋康秀・僧喜撰・小野小町・大伴黒主の六人を挙げ、論評する。

(注5) 芭蕉翁：「古池や蛙びこむ水の音」は「蛙合」(貞享三年・二六六)の発端となり、蕉風開眼の句とされる。のち駿河国原、松陰寺の白隠禪師が蕉翁の肖像画に「連歌宗匠 誹諧達人 聞蛙投井 打失心身」と賛をしている(白隠画賛集『播磨船』)。

(注6) さる美談おほきを：『文章』(A本)には「然るを」とのみ。

(注7) 催馬楽：「力なき蝦、く、骨なき蚯蚓、く」(催馬楽「無力蝦」)。

## 七 釣辞

白鷗(注1)々社をなさんの高み(注2)もなく、竜の都の聳(注3)にならんと

の望にもあらず。唯ものに倦(うら)るのこゝろやりまでに、この橋つめ、かしこの柳かげに竿を投じて魚をまつ。針は

むかふへ曲らねども、もとより赤下手にして一頭をも釣得たる事なし。さるを或人これをよからぬ事として、(注3) 積

氏のことをもて我を戒しむ。さて、釈(注4)氏の教はともかくも、老のうへ似つかしからぬに似たれども、(注5) 国にして此

禁有ことを聞ず。彼魯の老先生も是をばゆるされしにあらずとや、言をもどけば、かれ又強(あなごち)に滄浪の水ともうた

はず、舷(かたはた)にはあらぬ手をうちたゞきて、我をそしめるおもむきして、わかれてともにもいはず。

(注1) 鷗社：鷗を友とする脱俗の交わりを「鷗盟」という。

(注2) 竜の都の聳：海幸彦・山幸彦の神話による。弟の山幸彦は道具を交換、釣り針をなくし、塩椎(しほづち)の神から与えられた小舟で海神の宮(竜宮)に至り、海神の娘豊玉姫と結婚する(「古事記」「日本書紀」)。

(注3) 釈氏：お釈迦様。

(注4) 魯の老先生：孔子のこと。春秋時代、魯の国に生まれ、魯に仕えた。のち、容れられず諸国を遊説。

(注5) もどけば…とがめれば。

(注6) 滄浪の水：滄浪は、中国漢水の下流をいう。屈平（屈原）の「漁父辞」（『古文真宝後集』）の文末「漁父莞爾として笑ひ、樵（ふなばた）を鼓して去る。乃ち歌うて曰く、滄浪の水清まば、以て吾が纒を濯ふべし。滄浪の水濁らば以て吾が足を濯ふべし、と。遂に去つて復与に言はず」による。D本は「強にもせず」と略記する。

## 八 須磨琴辞

一弦琴は行平中納言の須磨の浦に左遷玉ひし折から、  
わびにわび玉ひし折々のこゝろやりまでの手づさみより  
起れりと欵。さるからに、須磨琴とさびたる名をさへお  
はせたるを、何事もさかしらする世にしあれば、今は都  
鄙となく雅俗となくもてはやして、唱歌も藻しほたれつゝ  
わぶにはあらで、種々につゞりなして、花のむしろ月の  
まどぬにも是をかきならし、是を打て戯る。斯うつりに  
うつり行なば、終には（文君に酒瓶をあらはするのあやま

ちを）ひき出すともがら有ん。猶此上あやしき曲をあや  
つり出すものあらば、罪は先蹤にしたがひて、彼浦にも  
しほ焼せんぞ。

【備考】本作には自筆の豎幅が二本あり、一本には「明治  
四辛未六月望の日 右、須まことのことば 柿園買笑老  
人（印「多陰」「柿園）」、今一本には「明治四辛未夏六  
月 右、須磨ことのことば 買笑老人（印「嵐牛之印）」  
の奥書がある。主な異同を傍記する。（参考）「ある人來  
りて一弦琴弾に、垣ほのむしのちりく」と似かよひたる  
声して鳴出たるをかしさに／糸にさへる哀さやきりぐ  
す」（『句集草稿初編』）。「一絃琴」の主要な参考文献に  
は、上田芳一郎著『一絃琴』（大正三年）、白井繁太郎著  
『阿闍梨覚峰の伝』（昭和三十三年）、須磨琴保存会編『須  
磨琴』（昭和六十一年）がある。

(注1) 行平中納言：在原行平（八八〇～八九三）。業平の兄。文  
徳天皇朝（八五〇～八五八）に事に坐して須磨に蟄居したと  
いう。かつて須磨は、西国街道の畿内と西国との境界で、  
関があった。須磨琴の起源については、『関田次筆』（文

化三年・一八〇〇に、行平が須磨謫居を慰めるため造ったと伝えるけれども典拠不明で、河内国の寺僧(覚峰)が弘めたこと、近年、国学の隆盛につれて須磨琴も流行するようになったことが記される。とくに幕末期には愛好され、稽古会が志士らの密会の名目に利用された。「須磨の浦に」は、『文章』B本には「かの浦に」とある。

(注2) 左遷給ひし折から…この部分、『文章』B本にはない。

(注3) 藻しほたれつゝわぶ…「わくらばに問ふ人あらば須磨の浦に藻塩たれつゝわぶと答へよ 在原行平朝臣」(『古今和歌集』)による。

(注4) (文君に…以下の( )内を脱落。自筆本及び『文章』B本により補う。「文君に…」は『蒙求』の「文君当壚」による。富家の娘で若い鰥卓文君は、来客司馬相如の美貌と演奏する琴の音に魅了され、その夜駆け落ちした。貧しい相如は生計のため友人を頼り、借金を申し込んだが断られ、車・騎馬などを売り払って酒店を手に入れた。文君に売場を任せた。「嵐牛文集拾遺抄」十六の(注2)参照。

## 九 買笑解

(注1) 原憲が笑て過し貧にもあらず、屈原をわらひし漁父に  
てはもとよりなく、月の前、花の本にもわらひ、友ある  
にも亦無にもわらひくゝて、かくばかりへがたき世を笑  
てすます翁有。そのわらふこゝろはしるべくもあらねど、  
其号を買笑とぞよぶ。(注4) 五条入道はふじのなるさはを讀あ  
やまりてなるさの入道とわらはれ、又ある左大臣は名な  
しの大將の異名をとる。この翁もいさゝか俳諧の狂句を  
好めば、彼名なしの酒、なるさのたぐひの讀ひがめはお  
ほかるべければ、自買笑の称もあるにやととひこゝろむ  
るに、かぶりもふらず、うなづきもせず、唯わらひてこ  
たへねば、我も又わらひてもくす。

(注1) 原憲…孔子の弟子。春秋時代、魯の人。字は子恩。  
清貧に安んじて道を楽しむ。

(注2) 屈原…中国戦国時代末、楚の人。名は平。字は原。  
楚の王族で懷王に仕えた。文辞をよくし、王の信任を得  
たが、讒言に遭い疎外された。懷王の没後、襄王に仕え、  
再び讒言に遭って江南に追放され、汨羅に身を投げた。

「漁父」の笑いについては、七「釣辞」の(注6)参照。  
 (注3) かくばかりへがたき世：「かくばかりへがたくみゆる世の中にうらやましくもすめる月かな 藤原高光」(『拾遺和歌集』)。

(注4) 五条入道：五条京極に居宅があつたことから藤原俊成の通称をいう。「富士の鳴沢」を誤読した逸話は『無名抄』に見える。また、同じところに、後徳大寺実定(左大臣)が「無明の酒」を「名もなき酒」と読み、「名なしの大將」と称された逸話が記される。

(注5) 読みがめ：読み誤り。

## 十 愛墨説

唐子西、(注1)「古硯の銘」に、筆硯墨の鈍鋭寿夭を論じて生を養ふを得たりといへり。よし硯、静にして寿也といへども、終には欠すゞり・底ぬけ硯の譏はまぬかれず。されば命長きものは恥おほしとか。筆は是にくらぶれば尤とし、鋭ものはあやまると、(注3)献子が工手も禿筆数瓶にもり、(注4)高野大師の碩徳も此ものには謬を伝へられたれど、(注5)いまだ墨の説を聞ず。墨は鈍鋭の中間に位して、聖人も

中をとるといはれたり。されど、さる論ひがましきことは暫くおきて、其人々の好む処にしたがひて、濃くも薄くも雲とかをり煙ときえて、あさましき形をとゞめず。おはりの速なるぞ、墨のほまれとこそいはめ。

(注1) 古硯の銘：『古文真宝後集』に収められる。筆は鈍く、墨はこれに次ぎ、硯は鈍きものとし、鋭きものは天(短命)、鈍きものは寿(長命)である。これによつても養生法が判るとする。作者は宋代、四川省の人。唐庚、字は子西。

(注2) 命長きものは恥おほし：「富則多レ事、寿則多レ辱」(『莊子』)。「命長ければ辱おほし」(『徒然草』)。  
 (注3) 献子：『文章』(B本・D本)には「献之」とある。献上者をいうか。「工手」は作り手。

(注4) 高野大師：空海(七四〇八五)。弘法大師。真言宗の開祖。三筆の一人。「献子が工手も禿筆数瓶にもり」とか「此ものには謬を伝へられ」という文言は、「弘法筆を選ばず」の俚諺を踏まえたもの。

(注5) 聖人も中をとるといはれたり：「堯曰く、咨爾舜、天の曆数、爾の躬に在り、允に其の中を執れ」(『論語』)。

堯・舜は、ともに中国古代の聖王。

十一 『何問答集』序

如草法師、東行のかへるさ、一冊子を懐にし来りて、  
 是に端書してよ、と乞すて、出行ぬ。とりて見るに、題  
 号「何問答」と有。あなめづらし、いかなる問答にやと  
 開見もてゆくに、何がし上人の「大原問答」、我道の『湖  
 東問答』などいへる、かたきふしづくにはあらで、只今  
 の世の諸風子たちの高風を書つらねたる句双紙也けり。  
 是に「何問答」と冠らしめたるは故こそあらめ、とつら  
 くおもひめぐらすに、「若くは『万葉集』中、貧窮問答  
 の意なるべきかと心にうかむことあれども、此人肌寒か  
 らんとよむべき父母なく、こひて泣らむとある妻子ある  
 を聞ざれば、是にてもあらざるか」といふを、傍に人有  
 て、「父母妻子なきもの、貧窮にあらずして何ぞや」と言  
 をかへさる。実にもとおもひかへすに、此坊このとし頃、  
 其身さへ病がちながら、好める事として東西に杖をひかる  
 れども、去し年、秋風やみのむしさへも家はあはる、と

うめき出されしこと有。是かれおもひあはするに、今は  
 五十にもちかき身の、みのむしうら山しきこゝろあるは、  
 さる事也。さればとて、旅袋のうち、いかに探りもとむ  
 るとも、こゝろの山にうかれたる花の塵、かしこの浦に  
 かじけたるちどりの懐紙やうのものゝ外、一物もあるこ  
 となかるべし。是も又さること也。さはあれどならびが  
 丘の法師の、「よね玉へ、今ひとつのものほし」などゝ、  
 うまくよむべき工もなく、亦洒落もなく、例の質朴口お  
 もく、只何の一字に、嘆きのおもむきも、願ひのこゝろ  
 も、深くおしこめられしならんか。「いかで四方の諸君  
 子、此集上木して机上に至らん日、坊がみのむし浦山敷  
 老心をはかり憐み玉ひて、うまく問答し玉ひてよ」とお  
 のれひそかに自問自答して、それと打も出さぬ祈ごとを  
 巻首に筆とるも、いとつゝましきわざながら、やむこと  
 を得ざれば斯なん。

(注一) 如草法師：『蓬宇連句帳 十一編』(安政五年・一八五  
 八)の「作者姓名録」には「如草 江戸中橋富樫町、加

島氏」とある。文頭の「東行のかへるさ」によると、江戸に出て暫く滞在したらしい。なお、『何問答』（版本の題簽に「集」の字はない）及び『文章』（諸本）の文末には「酉仲夏」の日付があり、文久元年（一八六二）辛酉の成立と目されるが、嵐牛の贈来本のメモ帳、文久二年八月十三日の記事に、門人山竹に託して京の相応軒（淡節）宛に金を送るついでに、如草の香料式朱も頼んでいるので、その頃、京で亡くなったことが判明する。

〔注2〕何がし上人の大原問答…文治二年（一一八六）、法然源空が大原の勝林院で奈良の諸大寺や延暦寺などの学僧を相手に浄土念仏の教理について行った論議、問答。

〔注3〕湖東問答…蕉門の去来が、李由編『篇突』の所論について卯七らの質問に答えた問答書で、元禄十二年（一六九九）自序。はじめ『弁篇突』『旅寝論』などの書名で写本として伝わったが、宝暦十一年（一七六一）、桃鏡により『去来湖東問答』の書名で刊行された。

〔注4〕貧窮問答…『万葉集』に収められる山上憶良の長歌・反歌、「風交り 雨降る夜の…我よりも 貧しき人の 父母は 飢る寒ゆらむ 妻子どもは 乞ふ乞ふ泣くらむ 云々」とある。

〔注5〕旅袋のうち…『文章』（A本）には「旅袋の底、いかにさぐり…」とあり、『同上』（B本）は底本と同文で、版本『何問答』には「旅袋の底、いかにさがし…」とある。

〔注6〕こゝろの山…『文章』諸本には「こゝの山」、版本『何問答』には「爰の山」とあり、底本は誤刻か。

〔注7〕花の塵…『文章』（諸本）、版本『何問答』ともに「花の反古」とある。

〔注8〕ならびが丘の法師…『続草庵集』に収められる、兼好法師と頓阿の沓冠の贈答歌で、兼好の「よもすずしね ぎめのかりほた枕もま袖も秋にへだてなきかぜ」の冠が「よねたまへ」、沓が「ぜにもほし」、頓阿の「よるもうしねたくわがせこはてはこずなほざりにだにしぼしとひませ」の冠が「よねはなし」、沓が「ぜにすこし」。

〔注9〕よむべき工…版本『何問答』には「よまれたる工」とある。

〔注10〕おもむきも…『文章』（諸本）、版本『何問答』ともに「おもひも」とある。

〔注11〕机上…『文章』（諸本）、版本『何問答』ともに「机上」とある。

〔注12〕巻首に…『文章』（A本）には「おし計て巻首に筆と

るも、いとつゝましき…」とあり、『同上』（B本）は底本と本文で、版本『何問答』には「おし計て巻首にさかしら」と書つゝくるも、いとつゝましき…」とある。

## 十二 祖翁忌発句正式序(注1)

(注2) 翁木魚の銘にいはいはく、うてば其声妙にして、黙々とうたざる時(注3)は何麼生もくくく。そのもくくく(注4)のひゞきをよすがに眼を閉、氣を吞て黙座すれば、縮地千里、眼前(注5)に聚あつまると。実げにから崎の松の朧、不二の雲霧、星崎のちどり、伊良古の鷹など、目にうかみ耳にひゞく。されば(注6)こそ晋子しんしもいはれたれ、誠におそるべきの幻術なめりと。斯ものすれば、幻術自在の俳仏成とほこりかにも聞ゆめれど、しかにはあらず。今日は翁の忌日にしあれば、此道に在ける友どちをつらねて、いかで其妙なる響きを出させ玉ひねかすと、我も黙々、人ももくくくとして、像の御前に小夜更よぐるもしらず、つかへまつるになん。

(注1) 祖翁忌発句正式序…『文章』A本には「嘉永四年翁

忌正式序」と題、B本には「同(嘉永)四年翁忌」、C本には「翁忌」とのみ。異文の「翁忌発句正式会之序」は「嵐牛文集拾遺抄」の五に収録、参照されたい。なお、「正式」は「本式」ともいい、通常の俳席は略式で行うが、とくに「本式俳諧」や「追善興行」では本式の式目によって催し、連句と発句(各一章)のセットで詠出した。

(注2) 翁木魚の銘…B本には「ある人の木魚の銘」とある。

(注3) 何麼生…禅宗で、疑問の意を表する語。さあどうじゃ。

(注4) から崎の松の朧…以下、芭蕉の発句「辛崎の松は花より朧にて」(『野ざらし紀行』)、「霧時雨富士を見ぬ日ぞ面白き」(同上)、「星崎の闇を見よとや啼く千鳥」(『笈の小文』)、「鷹ひとつ見付けてうれしいら」(同上)による。

(注5) 晋子もいはれたれ…「猿に小蓑を着せて、誹諧の神を入たまひければ、たちまち断腸のおもひを叫びけむ、あなたに懼おそるべき幻術なり」(『猿蓑』「晋其角序」)による。

嵐牛文集拾遺抄

【書誌】主に底本として使用した『文章』A本は嵐牛自筆の稿本で、中本二冊。一冊目は表紙に「文章 柿園」、二冊目は「明治四辛未春 柿園／其二／文章」と墨書され、『文章』諸本の中では最晩年のもの。他の底本については、各作品の解題に略述するに止めた。

【解題】「嵐牛文集」に漏れた嵐牛の俳文を、刊本の序跋や嵐牛の俳文書留『文章』（A本→D本）、嵐牛発句集草稿類、遺墨などから適宜抜萃、次の二十一篇を収録した。

- 一 賀<sup>ス</sup>青々老師<sup>ヲ</sup>転庵<sup>ニ</sup>
- 二 賀<sup>ス</sup>法顕師<sup>ヲ</sup>於入峯<sup>ニ</sup>辞
- 三 東室鴉山坊<sup>ヲ</sup>追善
- 四 (与<sup>フ</sup>雪太郎東寿老翁<sup>ニ</sup>)
- 五 翁忌発句正式序
- 六 『玉々集』ノ序
- 七 『四時行』ノ序
- 八 『清白集』ノ序
- 九 『青梅集』ノ序
- 十 夕晴亭<sup>ヲ</sup>記
- 十一 『一不尽集』ノ序
- 十二 高平山月見<sup>ノ</sup>序

十三 三調子追善会長明会のはし書

十四 薬食のことば 十五 放亀称言

十六 (耳の弁) 十七 (むじな川の句文)

十八 (月に恥よの句文) 十九 (もちつきての句文)

二十 訪<sup>フ</sup>雪中友人<sup>ヲ</sup>ことば 二十一 戒<sup>ム</sup>猫<sup>ヲ</sup>ことば

なお、「一」で括ったものは、原本には題名が無く、仮に編者が付けた題名である。

一 賀<sup>ス</sup>青々老師<sup>ヲ</sup>転庵<sup>ニ</sup>

【解題】初期の文章を書き留めた『文章』C本に収録。題は「天保十五年（一八四四）辰五月／賀 青々老師転庵。大儀義雄「卓池年譜」（『青々卓池と三河俳壇』所収）の弘化元年（天保十五年十二月二日改元）のところに、「○初春、燕岡庵を人に譲って本家に近い菅生蟹沢（岡崎市菅生町、満性寺の東）の新庵に入る。（中略）二月六日完成」とある。

【翻刻】

冬、春の日かげもたのもしく、夏、秋の月にもうとか

らず、と老師こたび居を菅生の川上にうつさせ玉ふ。すべて住付し処を離るゝ事はかたきならひなるを、露はかりも厭はせ玉はざるは、もとよりものにほだされざる心操の「康け」ればなるべし。其庵や、棟に縄引はへて、鳶鴉おどしたるといへる煩しき物好もなく、只草屋八九間といへる計にして、自後檐をかくす柳も有。はた、前裁には、わざとならぬさまに石など重ね、心のまゝに生出たる野松のすがくしきをあまた植たり。かの西上人の、へ千代経べきものをさながら集とも君がよはひにしらんものかは、とも問んには、いかなる人の賀事に読出けんかはしらねど、かゝる愛たき庵造らせ玉ふにつけて、なを此庭の松の杖つくまで、この石の苔むす迄、この庵をば住ふるし玉ひねかして祈つるあまりに、かゝる古人の高詠をさへ、おもひ出るまゝにこゝに書付侍るになん。たのみある心すゞしや松と石

(注1) 棟に縄引はへて：『徒然草』第十段に、後徳大寺実定の寝殿や小坂殿の棟に鳶や鳥対策で縄を引っ張つてある話が見える。

(注2) 草屋八九間：陶潜の「帰園田居」(其一、「古詩源」所収)の第十、十一句の「草屋八九間」「榆柳蔭後檐」。質素な住居ぶりをいう。後檐は後ろにある檐(のき)。

(注3) 西上人：西行法師。引用される歌は『山家集』の「賀歌」に所収。

(注4) 杖つくまで：推諷。庭の松が年老い、這い伸びて幹や枝を棒で支えた状態をいう。

## 二 賀法頭師於入峯辞

【解題】『文章』A本に拠り、他本との主要な異同を傍記した。題は「弘化四未年(八四七)六月/賀法頭師於入峯辞」、C本は「弘化四未六〇、法頭師が入峯の発杖(を)賀す辞」。法頭については未詳だが、大尾山頭光寺の僧であらう。同寺については『そのまま集二編』の(注15)参照。

### 【翻刻】

とし頃の志願時至れりと、地も裂、石も鏝ばかりなる炎暑をおかし、水無月の末つかた、三上山の雲搔わけ、

(注<sup>2</sup>) 小笹の露ふみ払ふて聖祖<sup>(注<sup>3</sup>)</sup>両師の杖のあと尋んと笠に緒つけ、草鞋に塩ぬるものは役沙門<sup>(注<sup>3</sup>)</sup>法頭師也けり。其発杖をことほぎて、いさゝかおもふこゝろをのぶ。

あはれ風雲に起臥して、一乗の靈窟<sup>(注<sup>4</sup>)</sup>に入、鹿<sup>(注<sup>5</sup>)</sup>敵穢の藤衣はくたすとも、行法ゆめゆるがせにし玉はで、<sup>(注<sup>6</sup>)</sup>九万八千の神祇、冥泉を天より降し、三十六処の金<sup>(注<sup>7</sup>)</sup>(剛)蔵王を地より涌出させ、<sup>(注<sup>8</sup>)</sup>かの醜神を深底<sup>(注<sup>8</sup>)</sup>に転抛<sup>(注<sup>9</sup>)</sup>しつるまでに<sup>(注<sup>9</sup>)</sup>行ひすまして、なほそれがあまりにはかしこけれど、<sup>(注<sup>10</sup>)</sup>半月も半天にすみわたる、と聞えたる久米路の御製、<sup>(注<sup>10</sup>)</sup>もらぬいは屋にしぼられたる僧正行尊の袖のわびさへ味ひものしてとくく帰<sup>(注<sup>11</sup>)</sup>りてよ、とそゞろごとかきつけおくるものは、<sup>(注<sup>11</sup>)</sup>潮ながるゝ丘のわたりの野人、<sup>(注<sup>12</sup>)</sup>藤嵐牛。

(注<sup>1</sup>) 三上山：「山上ヶ岳」の誤記。大峰の主峰で、1720メートル。

(注<sup>2</sup>) 小笹：実際の笹だけでなく、修験道当山派が中興の祖とする聖宝<sup>(注<sup>3</sup>)</sup>が秘法を伝授された大峰の靡<sup>(注<sup>3</sup>)</sup>(なびき、行場)の名「小笹」も踏まえた表現。

(注<sup>3</sup>) 聖祖両師：真言宗醍醐寺を開創し、当山派中興の祖

とされる聖宝(八三〇九)と修験道の開祖とされる役小角<sup>(注<sup>4</sup>)</sup>(役行者、伝三〇七〇)をいう。

(注<sup>4</sup>) 靈窟：大峰の靡には、笹の岩屋をはじめ六十以上の岩屋がある。

(注<sup>5</sup>) 鹿敵穢の藤衣：粗末で汚く、藤の繊維で編んだ衣。襦者<sup>(注<sup>5</sup>)</sup>などが着た。

(注<sup>6</sup>) 九万八千の神祇：「日本六十余州、大小の神祇をこもらせたまひ、九万八千の金剛童子、金峯大権現を治め、云々」(「不動尊五大の文」)による。

(注<sup>7</sup>) 金(剛)蔵王：金剛蔵王菩薩、略して金剛蔵王をい、[剛]の一字を脱。当山派では、聖宝が近畿の三十六寺の修験者、三十六正大先達を率いて吉野から峰入りしたと伝えられている。ここではそれを混同、山上ヶ岳の岩から涌出した「金剛蔵王菩薩」の伝承を、三十六処から涌出したと誤まって記している。

(注<sup>8</sup>) 醜神：一言主の神。葛城の神とも。役行者<sup>(注<sup>8</sup>)</sup>に使役されたが、容貌を恥じて夜間のみ吉野山へ岩橋を架ける作業をしたと伝えられる(謡曲「葛城」)。

(注<sup>9</sup>) 月も半天にすみわたる：底本には、「新千載、かづらきや久米路の橋は月もなほ半天にこそすみわたりけれ亀

山院御製」との頭書がある。

(注10) もらぬいは屋…「大峰の生の岩屋にてよめる／草の庵なにつゆけしとおもひけん漏らぬ岩屋も袖はぬれけり

曾正行尊」(『金葉和歌集』)。

(注11) 潮ながるゝ丘…嵐牛の居住地塩井川原の近くにある

鯨鯢山。竜神が雌雄の鯨と姫を奪い合い、失恋を恨んで塩

井川へ潮を出したとの俚談が伝わる(『東海道名所図会』)。

(注12) 藤嵐牛…「藤」は、相手に合わせ、姓の「伊藤」を

中国式に一字で表記したもの。B本には「伊藤嵐牛也けり」とある。

### 三 東室鴉山坊追善

【解題】「文章」A本により収録、C本との主要な異同を傍記する。題は「嘉永二年酉七月廿八日、東室鴉山坊追善」(C本には「東室」を欠く)。本文中に鴉山坊が「此国に始めて来たられし」のは「早廿年近くになん成にける」と記され、天保元年(一八三〇)の二、三年後の来遠ということになり、事実、天保三、四年の「蘭英堂少風評月並五句合」や同人編の『三節帖』(歳旦帖)に「行脚鴉山」も

しくは「行脚東室」として句が見え、それ以後は他郷へ漂泊したためであろう、句を見ない。嵐牛の『自筆発句集』(初稿)には、「行脚鴉山坊身まかりぬと人の告たるに、其告たる人もいづこにてといふ事はしらざりければ／去年の秋とかた便きく夜寒哉」と記し、抹消の○印を付けている。嵐牛の初学の師が判明し、貴重な一篇である。

### 【翻刻】

垣穂の草露にしほれ、虫の音しめやかなる夕つ方、老いの袂いとゞしめり勝なるに、柱によりて中秋のあはれ、あはれとうちながめらるゝ折から、ふとずんじいづる出方は、(注1)世の中にあらましかばとおもふ人無なきが多なくも成にける哉、と何がしの君のよみけん、げにあはれ深き詠「成」けり。とてもかくても有はてぬこそうつし世の有さまに有けれ。其なきが多く成行数々なる中に、東室鴉山老人、此国に始めて来たられしを、か(注2)なべみれば、早廿年近くなん成にける。おのれ等、彼坊にまみえたりしは更にうまなひひ学の頃なりしを、其教ねもごろにして、吟有毎に誉も呵りもしつゝ、兎かくすにこしらへて、此道に深く引い

れんとひたぶるに心遣ひし玉はれしによりて、いさゝか俳諧の魂居りしも、またく此坊がせちなる教よりなし出せるなれば、己等にとりては師とも仰申べし。さればさきにおもひ起して此時をこそと申物から、教を受たりし友だち、兼てかたらひ置つれば、こゝろ計の蕙をまうけ、彼宝篋印陀羅尼にかへまくほりするにつきて、其むかしなつかしと、坊が筆すさみ置れしもの、彼是とり出して見もて行に、おのれらに示されたる言葉の中に、「和歌は古言にして直くたゞしく、いはゞ米のめし也。連歌色有て染飯也。俳諧もつぱら、俗言のとり扱にして麦めし也。(注5)さまくめしともいはゞいはん。なほ処の風俗、其人々の好さまぐこのみにして、春は菜めし、くこめし、海苔飯がたぐひ、夏はしそめし、空豆めし、秋は木子飯、芋めし、冬は大根めし、蕪飯かぶら。さて、裏にうつりては鯉めし、鱧めしうなぎ、ごもく飯、其外自由自在たるべし」など、時にふれてをかしき教のみ多かりしを、かたみにいひ出し、おもひ出して泣も笑もしつゝ、あるは火たき、或は水くみ、各手づからみづから

塩かげん心もとなき供物たきおろし、はた、芋めしの芋のころくと粒も揃はず、ごもくめしのごみくしく、海苔めしの香も浅く、しそめしの手や／＼をかしくもあらざる一卷をつらね出して、御前に備つるを手向つるを(C本)、なほあきたらぬこゝちのすなればとて、坊が示されたる種々の飯の名を一句に結びて、各題をさぐり、一ひらの紙にものして是も又備たり。其おもむきをいさゝか初に筆とるものは、無が多く成行数々なる中に入はぐれたる白童子嵐牛也。

わすられぬ(C本、初案を訂正)  
身にしみる色香やめしのちらし紫蘇

嵐牛

友ほしや雨のいほりのぬかご飯

東寿

香は有やなしやに有てぬきな飯(注6)

鳳嶺

月更て香りしたしや木子飯

栗谷

柴栗の渋にそまりし御供哉(注7)

物外

露のもの皆持よりてごもくめし

素木沙城(C本)

芋めしや箸にかゝらで膳の上

せい可

(注1) 世の中に…『拾遺和歌集』ほかに所収の藤原為頼の

和歌で、「昔見侍し人々多く亡くなりたることを嘆くを見待て」の前書がある。返しは右衛門督公任の「常ならぬ世は憂き身こそ悲しけれその数にだに入らじと思へば」。底本はこの応酬を本文の欄外に細字で書き込む。

(注2) かゞなべみれば：経った日数を数えれば。

(注3) 阿弥陀精舎：掛川市成滝にある阿弥陀寺。浄土宗。

(注4) 宝篋印陀羅尼：釈迦が、路傍の朽ちた塔を如来の全身舍利を集めた宝塔と見、その功德や陀羅尼を説いた故事による。「かへまくほりする」は「かへまほし」と同意で、願望の意。

(注5) ざまくめし：手軽に調理したご飯。

(注6) ぬきな飯：間引き菜を炊き込んだご飯。「拔菜」は秋の季語（「二見頁」）。

(注7) 御供：お供物で、ここでは栗飯をいう。

#### 四 「与雪太郎東寿老翁」

【解題】『文章』A本により収録、諸本との主要な異同を傍記する。題を欠く。近隣山鼻の雪太郎東寿が死期を予感、嵐牛の句をながめながら最期を迎えたいと請われ、

交友を回顧しつつ草した一篇。東寿は駿河の完梁編『葛栗』（文政五年・一八三）に入集、嵐牛より年齢・俳歴ともかなり先輩と目される。「蒼虬書簡」（嵐牛書簡集）受信の部（一）参照。

#### 【翻刻】

雪太郎東寿老翁、此年頃病して、月花のまどみにも絶てもものせざりけり。一日、病床を訪ひ、何くれと物語けるに、「今年はわきて寒さも身にしみ、立居さへこゝろのまゝならず。「病瘦形如鶴」とか有しからうたのさまにて、斯ばかり憔悴したれば、とても斯でも世に有はつべ<sup>有べくも</sup>うもあらざめり。されば、辻髪<sup>注2</sup>のむかしより、かくむつびかたらひつるも、いかなるすくせのちなみにか有なまし。いかで其あらましを一ひらの紙にもおのして、発句ひとつそへてよ。それを枕上にもおのして、此世の外のおもひ出種<sup>でぐさ</sup>に命終らんまでながめくらさむものを」と、と泪さへながされてくり返しこはれ玉ふ。

さて過來し其あらましをおもひつゞくるに、実にさおもはれつるもことわりにこそ、花とくらし、時鳥と明し、

紅葉を尋ね、鹿を聞くと、こゝの野山、かしこの浦と吟  
 ひ歩行、時雨・雪のあした夕べ、埋火の本に額を集め、  
 かたみに推敲の膝をすゝめ、肩をそびやかしていひ出せ  
 る言ぐさをよしとなづき、且かぶりふりつゝ、形の影  
 にしたがひ、音のひゞきに応ずるが如く、いづれの吟席  
 にも此人をかく事のなかりしを、かくちからなき事望れ  
 て、何をかいひ、何をか書つくべき、と筆さし置つれど、  
 (注3) 望(B本)  
 をちが需にそむかんも亦本意なければ、あながちにも  
 せん物を、と紙おしのぶるに、手なへ、胸ふたがりて、

かけばにじみいふにはどもる寒かな

と物して始よりよみ返しみるに、いさゝかなぐさむるわ  
 ざにはあらで、老翁に見せなば中々に嘆をそへ、且まは  
 らぬ筆して拙事書おくらんよりは、とかいまろね捨たり  
 しを、誰かつたえ聞えけん、ほ句さへ誦し出して、「とま  
 れかくまれ見まほし」といはるゝに、(C本)  
 今のはがるべき方  
 もなければ、そがまゝ見せまゐらせぬ。(注4)  
 をぢいふ、「彼へ  
 葉の下の寒哉、かゝる折から、など興をさぐり、作をも  
 とむべき。此まゝに一ひらの紙に早く書きてよ(C本)  
 且夕もしれざる命を」と

せちにいはるゝに、なほかたへの人もすゝむれば、いな  
 みがたくてかくなん。  
 (A本傍記)

(注1) 病瘦形如鶴：『白氏長慶集』に見える語。

(注2) 辻髪：童児の髪型。

(注3) をち：老翁をいう。

(注4) をぢいふ：「をぢいとよろこぼひていふ」(B本)。

(注5) 葉の下の寒哉：版本『去来抄』に見える、芭蕉の病  
 床で門人たちが詠んだ中で唯一芭蕉が誉めた文章の句。

上五は「うづくまる」で、「かかる時は、かゝる情こそう  
 ごかめ、興を催し景をさぐるいとまあらじとは、此時こ  
 そおもひしり侍りける」と付記される。

## 五 翁忌発句正式序

【解題】『文章』A本により収録、諸本との主要な異同を  
 傍記する。題は「嘉永三年(一八五〇)神無月掛川於連福寺  
 興行／翁忌発句正式序」。ほぼ同文の自筆豎幅が遺存し、  
 (注1)  
 それには題が「安政六年(一八五九)神無月祖翁忌発句正式  
 会之序」とある。嘉永四年のものは異文(『嵐牛文集』十

二参照)。

【翻刻】

「行持あらん一日は尊べきの一日にして、行持無らん百

年はうらむべきの百年なり」とある聖のなげき申されし  
りとして(C本)

とか。かゝる道らしきこと、引つけいふべきにはあらね  
ど、神無月十二日は祖翁の忌日なればとて、像の御前に

集ふ誰かれ、俳海淵源のふかきをも探るべき行持真修の  
心ざし有人々にはあなれど、いまだおのく凡情憎愛の

域にひかるゝ身にしあれば、己を始として、彼尊べき行  
持有ん一日はまれにして、皆ながらうらむべきの百年と

も申べからんか。龐老が所謂「双耳如聾、眼如盲」と

其「如聾」「如盲」、是非凡情の域をはなれて、今日一

日はせめて尊べきの行持有まほし、と人々を「さへそゝ  
のかして、法蓮田居のはじめに斯筆をとる。極めて二盲

亀の空谷に入」といふ譏も有んかし。

(注1) 連福寺：掛川市肴町にある信縁山蓮福寺。真宗大谷派。

(注2) 行持あらん一日は：以下、道元禪師著『正法眼蔵』

の「行持(ぎやうち)」について述べたところに見える。

「行持」は仏道の修行を継続すること。現在、曹洞宗では

「修証義」の中で説く。

(注3) 龐老：龐居士。唐代の人。馬祖について禅を修め、

その法嗣となった。「双耳如聾、眼如盲」は「毒語心経」  
に見える語だが、『伝灯録』などの「龐居士伝」に、他の

禅者から舞い落ちる雪片をめぐって問答を仕掛けられ、  
「眼見如盲、口説如啞」とやり込めた逸話が見える。

(注4) 盲亀の空谷に入：『碧巖録』第十二則に見える「跛  
鼈盲亀入空谷」による。極めて覚束なく、無謀なこと  
の比喩。

六 『玉々集』序

【解題】「文章」諸本に収録され、原題「玉々集序」。A本

では初稿を書いてから推敲、第三稿まで記している。第  
三稿を底本とし、B本・D本との主要な異同を傍記した。

なお、成立は曲川が来遊した文久元年(一八六一)冬の頃

か。曲川編『玉々集』の刊本の存在は確認できない。大  
阪から類似の『今人三十六歌仙』(菊也編、慶応三年・一

八六七) が出版されたため、未刊に終わったのかも知れない。曲川については連句の部『およびごし』解題参照のこと。

【翻刻】

こゝに一綴の玉有。(注1)縁のむかし、伊賀の山中方出て其世をてらし、今をかゞやかすばせを翁の方寸よりみがかき出せる玉也。其数百をもて算ふる中より、大江戸の大梅老人、(注3)玲々の声有物、六々の数を撰出して、常にそが座右(注4)ものせられしを(注5)出雲の曲川、行脚(注6)の頃、老人の座机(注7)辺(注8)に乞得て、旅文庫の中を放(注9)ず、玉とも玉と朝暮口に(と)なへ、心にしるして、既に廿年余り、終に其うるはしきひゞきを胸中に移し得て、今年、なにはに寓居(注10)ことほぎにとて今一つを撰(注11)び、そへて三十七歌(仙)、玉々集(と)題し、桜(木)にものして、東西(注12)の義故に送らんとなり。其よし、始に一言をこはる。こは玉をかざるに瓦礫をもてするのそしり有んを、辞すれどもゆるさゞれば、終に柿園。(注13)

(注1) A本の二稿で以下にあった「楚珩隋璧の類にはあらで」を削除する。

(注2) 大梅老人：俗名児島筠。市河寛齋・山本北山門の漢詩人で梅外と号したが、のち大梅と号して道彦に就き、俳諧師となった。一七三二—一八四一。

(注3) 玲々の声：玉の触れ合う美しい音。

(注4) 桜(木)にものして：出版して。第二稿は「上木して」、B本は「桜木にちりばめて」。

(注5) 義故：第二稿は「知己」を「義故」と推敲。恩義のある縁故者。

(注6) 終に柿園：初稿の「終に柿園の瓦窓のもとにするす」を第二稿で「終(に) 柿園」と推敲。B本は「終に柿園春夜の眠りを払てしるす」とする。

七 『四時行』序

【解題】相応軒淡節の年次集『四時行』(半紙本二冊)の序で、「申初秋」の目付。『文章』諸本にも収められ、それには「万延元年(一八六〇) 申初秋」とある。

淡節は伊予国松山の出身で、上京して梅室に入門、師

の相応軒を継ぎ、その遺子辰丸を養育するとともに、嘉永三年（一八五〇）以降、『四時行』も継承する。両者の交流は十五年來で、遠州を代表する俳人として嵐牛の名が京俳壇にも浸透していた証左となっている。

## 【翻刻】

〔注一〕よしの山去年のしをりの道かへて、とよまれたる歌は、みる人のこゝろに随て、いづれのみちの朶しきりともなさば成べし。都、相応軒のあるじ、此うたの意をいちはやく味ひ得て、其葉をさぐり、みちをおし広めて、今はつくしのはて、津がるのおくまでも至らぬくまなく、吟詠に名高き人々の花実を拾ひとりて、四時行と名づけて年々編集、乾坤二巻に、ほひみちたり。されば彼山にひとめ千もののおく口のながめあるにもおもむきの似かよひて、開見ん香もおのづからとりぐに深かるべし、とおよびごしながら、はじめに筆とるものは、とほつあふみの嵐牛

申初秋

〔注一〕よしの山：「花歌とてよみ侍ける／吉野山こそぞのし

をりの道かへてまだ見ぬかたの花をたづねん 西行法師」  
〔『新古今和歌集』春上。〕

## 八 『清白集』序

【解題】淡路の俳人、清白堂しよらち蔣池の一周忌追善集『清白集』（半紙本一冊）の序。「辛未（明治四年）九月」の跋があり、序と跋により生前にもとめられて寄せた序とわかる。巻首に「清白堂句集」と題する蔣池の四季発句、つづいて蔣池発句脇起百韻一順（明治辛未九月興行、宗匠曲川、会主助郎）、蔣池・洋々・曲川・介居・曾秀の五吟歌仙一卷を収めるが、後者に一座する洋々は介居と同じく淡路国津名郡の人で、嵐牛息の洋々とは別人。  
なお、『文章』諸本にも「蔣池家集序」などと題して収め、若干の異同がある。

## 【翻刻】

〔注一〕おちたぎつたきのみなかみとし積老つひらおにけらしなくろきすぢなし、と昔人のよまれけんその年の、いまはいとつもりぬればとて、あはぢの蔣池主、「ことし家の集つく

らむのこゝろ有て、そが序かきてよ」とはろくどまう  
 しおこされし文のはしに、「世の笑ひ種にはあるべけれ  
 ど、云々」と有。「風雅のまじはり、みちにかさを傾けて  
 も古人の如し」といへど、我いまだ池子に笠をかたぶけ  
 ず、其集の趣(趣)もしらねば、筆下すべくもあらざめれど、  
 こゝにいひたきひとくだりあり。是までもれ聞る句ども  
 の風格高く、「愈頭風」といふの少からず。そをしも「笑種  
 ならむ」といはるゝは、「此一是非、彼一是非」と南華老  
 仙のいはれし、世に広うせんには、かならず是非の沙汰  
 あらん。是もとよりと知つゝ、其是非には馬耳風にして、  
 彼無何の本郷(注6)に老をたのしまんとの広莫の意ならんかと  
 おしはかれば、その広莫(注7)にひかれて吾つたなきをわすれ、  
 もとより一端をもしらざることをさへわすれて、滝の糸  
 なすかしらうちふりつゝ巻首に筆とるものは遠江の嵐牛、  
 こは道にかさをかたぶけしまじはりにも過て、いとゞみだ  
 りがはしくこそ。

慶応二丙寅春

(注1) おちたぎつ…『古今和歌集』所収で、作者は壬生忠岑。

(注2) みちにかさを傾けて…行脚し、風交すること。

(注3) 愈頭風…「頓愈頭風疾」で、吟ずると頭痛も治

るほどすばらしい詩。元稹の詩による(『字類抄』)。

(注4) 此一是非…原文は「彼亦一是非、此亦一是非」で、

『莊子』(齊物論第二)による。南華老仙は莊子。

(注5) 馬耳風…「馬耳東風」に同じ。

(注6) 無何の本郷…「無何有の郷」に同じ。『莊子』に記さ

れる無為自然の境地。

(注7) その広莫に…『文章』(B本・D本)には「我も其広

莫に」とあって、「吾つたなきを」の「吾」はない。

## 九 『青梅集』序

【解題】淡路国津名郡机浦住の島田介居が五十を自祝した  
 年賀集の序。半紙本一冊で、題簽欠。扉題は「青梅集」。  
 介居・三外・曲川の三吟五十韻、掣春・介居の両吟歌仙、  
 曲川・蔭池の賀句模刻、後半は諸国俳家、巻軸に三外・  
 介居の発句各一章を収める。倉島利仁藏本による。

なお、『文章』(B本・D本)にも収められ、異同を傍

記した。

【翻刻】

「むかしみたりの翁、酢すを舐なりてあましといひ、或あるはにがしと、亦のひとりわづかに酸すしいはれし」と聞きも、みなその道々をたつる赴趣によるにや。島田介居ぬしが五十のはるをむかふるをほぎて、東西の親知より送れる吟どもに、今の世に芳名聞えたる人々の佳什かじふをさへひろひそへて木にのぼせんとは、みちにとりてうへもなきほぎ種ぐさとこそいはめ。きく、「巻頭（注1）の俳諧、自賀梅華の吟成なる」と。さらば、集名梅花ともあるべきを、青梅とひねられたるは、いさゝかにがみ有有げに聞こゆ。これをおもふに、介子件（彼B本・D本）の酔しあましをとく味ひしりて、猶人にもこゝろみさせ、ひとをも試んとにや。其こゝろはしるべくもあらざれ（あらざれどB本・D本）、「かにかく（注3）青梅のまだしきならぬ（ならぬもB本・D本）を、今より後、老のいとまにいよゝ勉強（ナシ）してば、終にはいかなる味ひかあちはひ出して彼翁（注4）たちの世に化しおはせし（注5）にならひ、みち広う行はれしに効なひてよ」と此序にえせことくはふるものは、遠江さやの中山のふもとち

かき里人、買笑嵐牛。

慶応二丙寅孟春

（注1）みたりの翁、酢を舐りて…画題「酢吸三聖」（三酸図）とも）で知られる。蘇東坡が黄山谷とともに僧仏印を訪ねたとき、仏印が得た桃花錯とうかきくを甚だ美味だというのとともに嘗なめ、眉しを擡しかめた故事。東坡が儒教、山谷が道教、仏印が仏教をそれぞれ信仰するので、俗に孔子・老子・釈迦の三聖として描くものが多く（『東洋画題綜覧』ほか）、三教一致を説く画ともされる。

（注2）巻頭の俳諧、自賀梅華の吟…「自賀／山水や取つきからの梅の花 介居」。

（注3）かにかく…ともかく。

（注4）世に化し…「文章」（B本・D本）は、「道広う行はれしにならひ、化しおはせしにならひてよ、といはひがてら（に）」とある。

（注5）えせこと…いい加減なこと。

## 十 夕晴亭の記

【解題】『文章』A本に収録。題は「夕晴亭の記」。明治四辛未孟春の奥。犁春の仲介で執筆を頼まれたとのことで、夕晴亭、田村婦牛については淡路国津名郡木曾の人というほかは未詳。与えられた縮図をもとに、夕晴亭を取り巻く山海の景観や名所旧跡などを、芭蕉の「洒落堂記」や「幻住庵記」などに倣って綴ったもの。

## 【翻刻】

(注1) わきも子にあはぢの島なる田むら婦牛主、木そ原山中といふに新墾の功成て、其田守の真似して、其辺に閑居をかまへ、夕晴亭と呼よし。西東のあらましを図して、こたび犁春法師が東行にことづけて、記書てよと望る。(注3) 縮図を窺ふに、前に松山広く辱暑に涼をひき、嚴寒に北風をふせぐにたよりよく、波除、隱居の清韻を樂しみ、右にかくれの宮千木高し。左に高座山、千光寺は真言宗にして秘密の窓ふかく戸ざすとかや。こは、日本最初の山と申伝ふるなり。遙に讃岐小豆島、豊しま、家島杯軒をならぶるが如く、煙波のうちに雄飛雌伏し、猶とほく

見さくれば、備前、はりまの乱山參差として伯仲をあらそひ立るに似て、彼「呉楚東南にながれ、秦晋西北につらなる」といふ一聯もおもひ合され、近き松帆には定家朝臣の「やくやもしほ」を朝風にながめ、遠き明石には「島がくれ行ふね」をおもひ、猶舞子、須摩、絵島をはじめ、島々浦々、算尽すべくもあらず。古人曰、「景にあうては唾する」と、造化自然の絶勝を前に置いて、拙筆下すべくもあらず。殊に伝中の暗作なれば、彼「警者の象のあしを探り、尾を撫て全象を語る」類ひ多かるべし。

さて、あるじ常に酒、碁と狂句を好て、杯をふくめば、眼前に漁とつころの鮮を得て、友を止て杯盤のうちに夕ばれを愛し、句をおもふときは眺望に向て古を味ひ、今をしたひて雅情を勵し、亦ある時は局上鳥鷺のあらそひに晦朔の代謝をわすれて明しくらすも、皆此亭の閑と眺望のもてなす処なるべし。おのれも、一たびこの夕晴に臨んこ(と)を祈て斯なん。

明治四辛未孟春

(注1) わぎも子にあはぢの島：「わぎも子」に「会ふ」から同音の「淡路」などにかかる枕詞。

(注2) 木そ原：旧津名郡の南部で、現、淡路市木曾。木曾上・同下・同上畑などの小字がある。

(注3) 犁春法師：京都の人。一道居と別号。明治三年来遊。嵐牛と両吟歌仙二巻を唱和している(「俳諧どめ」)。

(注4) かくれの宮：伊弉諾尊が亡くなり、その霊を祭った「幽宮」をつくつたと伝える(「日本書紀」)。現、淡路市多賀にある伊佐奈伎神社。木曾のやや北方。

(注5) 高座山：現在は高倉山と表記。木曾からすぐ南にある266メートルの山。

(注6) 千光寺：先山(448メートル)の山頂にある寺。伊弉諾・伊弉冉の両神がまぐわい最初に出来た淡路島で最初の山と伝える。洲本市上内膳。

(注7) 参差：長短不揃いで散らばるさま。

(注8) 呉楚東南にながれ：杜甫の詩「岳陽楼に登る」に見える「呉楚東南に坼け」、それをアレンジした芭蕉の「幻住庵記」の「魂呉楚東南にはしり」が知られる。

(注9) 秦晋西北につらなる：春秋時代の秦晋兩國が隣接。晋から見て秦が西北に当たることから言ったもの。「呉楚

東南：」と対句となっており、ともに景のスケールの大きさを表現するが、そうした対句で記した文献は確認できない。

(注10) 松帆：淡路島の北端の地。藤原定家の和歌「こぬ人を松帆の浦の夕なぎに焼くや藻塩の身もこがれつつ」(「拾遺愚草」)で知られる。

(注11) 明石は島がくれ行ふね：「ほのぼのと明石の浦の朝霧に島がくれ行く舟をしぞおもふ」(「古今和歌集」所収)による。詠み人知らずだが、明石に人麻呂神社が建てられ、一般的には柿本人麻呂作とされている。

(注12) 舞子、須磨、絵島：松帆の対岸が神戸市垂水区(たるみく)の子で、東方神戸側に須磨、逆の加古川方面に明石があり、播磨灘と呼ばれる瀬戸内海には絵島(家島)を中心とする家島諸島が浮かぶ。

(注13) 古人曰、景にあうては唾する：『麦林集』の「自遁庵之記」には「古き詞に侍るとかや」、「俳諧旅のひとつ」には「東坡のいへるごとく」と付言して引用するが、出典不明。

(注14) 伝中の暗作：伝聞で想像、よくわからないままの作をいう。

(注15) 警者の象のあしを探り：「衆盲模象」(「祖庭事苑」)、

「群盲象を評す」(「六度経」)などによる。

(注16) 鮮：鮮魚。

(注17) 烏鷺のあらそひ：白石と黒石で勝負を争う碁。

(注18) 晦朔の代謝：月日の推移。

十一 『二不尽集』序

【解題】島田宿の門人、雪香が編んだ小集に草した序。江戸帰りの犁春(京住)を引き止めて越年、両吟した歌仙を巻頭に、その頃来遊した名古屋の梅裡・羽洲、吉田(豊橋)の蓬宇、江戸の春湖らと巻いた歌仙、計四巻に駿河名所などを詠んだ諸家発句を付載して刊行したもの。嵐牛の序は明治四年孟春の日付で、ほかに歌仙一卷に出座、建穂寺で詠んだ花の発句を寄せている。雪香については「柿園門人録」を参照。なお、『文章』A本所収のものには小異があり、主要なもののみ注記した。

【翻刻】

島田のすくなる秋野雪香、犁春法師が東行の帰るさを

引とゞめて、「おほる川の川風もいと寒し。(注1) いねくといはるゝ年の暮にも成ば、いかで我草堂のもちのおと聞てんや」、とそゝのかされて、つひにはるを待待るに、あるじ、(注2) 初夢に見ぬふじみたり、とうたひ出すを、春子、へ杖におく手にかゝる朝東風、とうまき相植にこゝろ動そめてこゝの梅かしこの鶯と、終に賤機・建穂の花、有度・草薙の秋のけしき、人々の吟ながら其景情におもひあはするに、やがて「鬼貫が禁足日記のおもむき有」杯たはぶれて、月頃秘おける巻どもをさへ引出して、名処に因有を一二書そへて机上にもてあそぶに、猶こゝろの動やまで、終に梓にのぼすことには成ぬ。斯匆卒より起りしことなれば、集ぶりのふつゝかなるも見ゆるし玉ひてよ。

明治四孟春

嵐牛誌(印「買笑」)

(注1) いねくといはるゝと人はいはれつ年の暮路

通(「猿蓑」所収)による。

(注2) 初夢に見ぬふじみたり：巻頭歌仙は、「我有嘉園にと

しを迎へて郊外に出れば／はつ夢に見ねども見たりふじ  
の山 雪香」の発句で始まる。

〔注3〕禁足日記：『鬼貫句選』下巻所収。元禄三年（一六九

〇）成。在宅しながら、空想で綴った旅日記。

〔注4〕さへ引出して：『文章』所収文には「春子引出して」  
とある。

## 十二 高平山月見の小序

【解題】『文章』（A本）所収。平宇の門人足立水音・尺波  
が嵐牛のため太田川の鮎漁を催して饗応、その夜、高平  
山の月を賞したときの文章で、題は文末に記されている。  
高平山は森町下飯田にある小高い山で、山頂に遍昭寺が  
あり、境内の大仏で有名。催しに参加・協力した直喜・  
島桂とともに森町の門人だが（『柿園門人録』参照）、網  
を打った喜弘については未詳。『句集草稿 二編』にも所  
収（異同を傍記）、冒頭に「川逍遥詞」と頭書きされる。  
成立は明治四年秋か。

## 【翻刻】

何をかおもしろしとし、何をかたのしとせん。<sup>とはせん</sup> 足立水

音、尺波両子にもよほされて、太田川に遊ぶ日、喜弘が

網の術をふるひ、直樹・島桂が彼よ是よと心遣ひして、

終に平かなる川原を直にむしろと瓶を開けて、やがて酔

もよはぬもこちよきおもちにて、いざのぼれ嵯峨

のあゆくひに、とうたへば、又たぐひながらの鮎なま

す、とつゞくるに、月はや高平山に差出たり。嘻、何を

かおもしろしとし、何をか樂しとせん。

ぬれあみを川原にほして月見かな

〔注1〕いざのぼれ：「角田川にて／いざのぼれ嵯峨の鮎食

ひに都鳥 貞室」（『あら野』所収）。

〔注2〕又たぐひ：「前書略／又やたぐひ長良の川の鮎食」

（芭蕉）（『笈日記』所収）。

## 十三 三調子追善會長唄会のはし書

【解題】『文章』（A本）所収。長唄の師匠であった望月三  
調の追善長唄会に乞われて草した手向けの句文。歌舞伎

の長唄囃子方の望月太左衛門が有名で、安永頃から活躍、初代から現在、十二代まで続いているが、三調は望月流の宗家ではなく、傍流であろう。宗家の代々も俳諧を嗜み、俳号をもっていた。三調も俳諧を好んだというが、遠州の俳書には息三幽とともにその作品を見出せない。

「明治五壬申秋」の奥。

【翻刻】

先人の好まれし事とて(注1)靈牀(れいしょう)に琴を鼓(こ)し、はた驢鳴(ろめい)をなしてなぐさめしもむかし有と聞て、孝子望月三幽、おくれたる父三調君の為にとて、生涯に嗜れし長歌(唄)の門人はた在し世の友たち、今の世の其道の人を集(つど)へて一会を催し、靈上に手向んと成(也)。且、先考(注2)、音曲のかたはら狂句をすかれしとて、「此花(注3)ずりのはしに一句そへよ」と乞ふ。我又疎からざりしかば、

きくの花恋しきものは昔かな

明治五壬申秋

（注1）先人の好まれし事とて：『晋書』の「顧榮伝」に、榮が琴を好んだので亡くなった後、家人がその靈座に常

に琴を置いたことが記され、『世説新語補』巻十四の「傷逝」に、王仲宣が驢鳴を好んだので、弔問客は驢鳴を一声作(な)して葬送したとの故事が見える。

（注2）先考：亡父。

（注3）花ずり：長唄会の曲目を書いた目録の料紙が、秋草の花摺(ざ)だったのであろう。

十四 葉食のことば

【解題】『文章』A本所収。ある知己から鯉を料理して贈られた折の文章で、句はない。前出、明治五年秋の奥の文章の後に記され、その頃の作と推定される。

【翻刻】

老楽(注1)の来んと知せば門さして、との歌知ざりしかば門戸もさゝず、うかく老も極行(きはまり)まゝに、氷風凌(こぼ)がたく寒苦鳥の夜なくの声も身にしてみて覚(おぼ)れば、人の教ふる（に）随ひて、葉ぐひと云事を始んとす。去ど、猪・鹿・泥亀(すっぽん)の類には箸もとらねば、鯉・鮒・鯛やうのものとゞけん、或知己のもとより鯉みそ調じてひと鉢送り越し

ぬ。其心ざしのうれしく、まして「此もの食たる日は毛髪もそゝけず」とさへ聞ば、先試るに、此上の上味なれば、日夜是を嘗つゝ、老のなぐさ(め)に、ある双紙の片端見もて行に、中御門左府、後徳大寺左大臣の御もとに渡り玉ふに、ゆきたかと云人を召て、鯉切らせられけり。左府の玉ふ、「調じ様は存たりとも、食様はしらじ。食て見せん」、との玉ひけり。いかさま様有げにてめでたかりけり、と有。さて、其切様・食様さへ有を、唯むざんに食に食こそこゝろなしとはおぼゆれど、前の件の鬢髪もそゝけずと有をたのみに、ひたもの舐りにねぶりけるとぞ。

(注1) 老楽の：「老らくの来んとしりせば門さしてなしとこたへてあはざらましを」(『伊勢物語』九十七段)。「老楽」は「老らく」と記すべきところ。

(注2) 此もの食したる日は：昔からの俗信。『そのまま集 初編』の(注6)参照。

(注3) ある双紙：『古今著聞集』卷十八「後徳大寺実定徳大寺の亭に作泉を構へて饗宴の事」による。

(注4) 中御門左府：中御門は禁裏の待賢門の異称で、そこ

に通じる東西の大通りをもう。左府は左大臣のことで、ここは藤原実房。後徳大寺は藤原実定。

(注5) ゆきたか：行孝。藤原北家、魚名流で、左衛門尉藤原為定の男。包丁の家として知られる四条流の一人である。ろろう。

## 十五 放亀称言

【解題】『文章』A本所収。原題による。駿河の蝸堂が亀の命を屢々救つて来た功德を称揚した文章で、句はやはりなく、俳味は乏しい。亀は長寿で縁起のよい生き物なので、代表的な放生の対象であった。蝸堂は静岡江川町の絞り油商で、通称は吉津屋平七、明治に入ってから嵐牛に師事、その没後は東京の春湖に師事、二世小築庵を継承している(中川雄太郎著『駿河の俳句』水韻社、昭和五十一年)。

## 【翻刻】

駿河国静岡、蝸堂ぬしは商家に生れて、常に東西する人也。或時、我遠江国三ヶ野坂にて、生亀の水ほしげに

はひまはるをあはれみ拾ひ上て、兼て生るをかなしむ情

有人、殊には言の葉つかひにも心がけるなれば、(注2)「幸に鶴

が池も近し。鶴亀のひゞきもよし」とて、則其池に放ち、

其后又三川国宮崎(注3)にて此事有に、いさゝかなやめる所も

有さまなれば、其を遷し所を勞し、養ひ来りて、「豊川の

御地は殺生も禁(注4)なるべければ、住易からん」とこゝに放

けるとぞ。扱(注5)おもふに、むかし天智天皇の御世、近江国

栗本郡村主何(注6)がしが家の庭に鑰匙二つ降来るを、妻とり

て夫にあたへしに、いとゞよろこびて秘藏せしに、其家

いたく富榮しとなん。こはいかなる報にか。事こそかは

れ、堂子が亀も万寿は誰も欲する所にて、此上(注7)の宝

又有べからず。去(注8)ば求ずして幸に生るをしばくすくひ

し徳の必身にも家にも及ばん事、疑有べからず。

(注1) 三ヶ野坂：見付宿の台地から、袋井方面、三ヶ野の

低地に下る坂。

(注2) 鶴が池：三ヶ野坂の北一キロぐらにある池。

(注3) 宮崎：旧額田郡（現、岡崎市）宮崎町。中世以来の

郷名で、拳母街道沿いにある。

(注4) なやめる：病んでいる。

(注5) 天智天皇の御世：以下、『日本書紀』天智天皇三年十

二月に見える致富譚。

## 十六 「耳の弁」

【解題】『文章』A本所収。古稀を過ぎ、耳も遠くなった

嵐牛が、逆に耳に対しての関心を強め、句はないものの、

俳人らしい視点から綴った文章である。成立年次は、明

治五、六年頃であろう。

### 【翻刻】

耳は六根の一にして大有用なる事、今更云べくもあら

ず。去年の秋八月の頃、大に野分吹あれしより、逆上(注1)の

氣(注2)発りていさゝ（か）耳の遠きを覚ゆ。去れば虫の音傾

けそめ、ましてみの虫の細音、霜夜のきりぐくすをうた

がひ、ちどりに手をかざし、小笹小夜しぐれに全く遠き

に定ぬれば、うぐひすに袖を引れ、此后、時鳥にはいかゞ

あらんと、今よりくやしき心持す。爰に至りて、耳のと

ほき近き徳をおもふに、彼蚊(注3)の眉の落るも知と云大藏卿、

はた卓文君が糸の色音の身にしてみても、やがて其人の形をさへ忍びわびて、終に身をはふらかすに及ぶ。是等あまりの清耳のあやまちと云ん。はた、許由が洗ひしと云も、頑に似たれども、賢者の上は知ものが悪臭をかぎて鼻を洗ひ、不浄にふれて眼を洗んや。許氏、など耳計をやかましういはれけん。聖賢、都て「聞事なかれく」といはるれど、耳は聴役にして、善悪の区別は耳のあつまる所に非ざるを、唯に耳々といはるゝは、耳もいたく彼六根の数に上られたる大役の迷惑ならん。実に疾もいらざる事を聞て捨んとすれども、底残りはたくとも、あなどられて眼前にさゝめ事せらるゝは、見て逢ぬ恋の心持こそせめ。「耳あれば聞候」、と誰やらが一言、いと手軽てをかしくこそ。

(注1) 蚊の眉の落るも知…『枕草子』二百五十九段に見え、それには「蚊の睫の落つるも…」とある。『古今和歌六帖』に「蚊の眉に国こほり(郡)をば立てつとも人の心をいかが頼まん」の歌があり、混同したか。

(注2) 卓文君が糸の色音…漢の武帝の頃の女性。四川省の

富豪、卓王孫の女。早く夫を亡くし、寡婦となる。官を辞し、蜀に帰る途中の司馬相如が招かれて王孫の家に寄り文君を見染め、琴に託して恋情を伝えると、その清澄な音色と閑雅な姿にこころを奪われた文君は、親の許しを得ぬまま駆け落ちし、成都の相如のもとに奔つた(『史記』の「司馬相如伝」、「蒙求」ほか)。

(注3) 身をはふらかす…身を抛つ。卓文君の駆け落ちを指す。  
(注4) 許由…中国古代の伝説上の高士。堯帝がその高潔な人となり故に、天下を譲ろうとしたところ、汚れたことを聞いたといつて潁水で耳を洗い、箕山に隠れた(『唐物語』、「蒙求和歌」ほか)。

(注5) 耳あれば聞候…慈鎮和尚が「…いかに聞けとか庭の松風」と歌を詠み掛けたところ、相手側が「…耳しあれば聞きさぶらふぞ軒の松風」と返歌した、『井蛙抄』に見える逸話による。

## 十七 「むじな川の句文」

【解題】『文章』A本所収。長上郡大瀬(現、浜松市東区大瀬町)の榎木夷苜にもとめられ、居宅の近くを流れる

猪川むじながわに寄せた句文。その父夷白は、晩年、地元判者として活躍した人で、俗名は要右衛門（卓池『諸国門人録』）。俳諧は小枝来圃門、のち雪中庵対山・鶴田卓池門。別号は朝日園・猪川堂かくせんどう・年立庵など多数。明治元年九月十二日の没、享年七十二。

成立年次は不明だが、『俳諧どめ』に当たると、夷白は夷白の亡くなった翌年、明治二年の秋、もと夷白の門人だった松島十湖とともに来訪、嵐牛と両吟歌仙を一巻ずつ遺している。

因みに、夷白門の十湖は慶応元年頃から柿園評月並に参加していたが、この秋、正式に入門し、他にも十名ほどの西遠連中が入門している（『柿園門人録』参照）。松島勇平「十湖関連年表」（『十湖発句集』平成三年、所収）によれば、夷白の一周忌には十湖の年立庵で追善句会が催され、三回忌には夷白が追善集『桐の落葉』を編んでいる。堂号継承の披露を兼ねて刊行したのか。

本作は知碩編『柿園発句集拾遺』（稿本）にも見え、主要な異同を傍記、もしくは注記した。

【翻刻】

山にまれ、海にまれ、川にまれ、はた何にまれ、かにもまれ、ものゝ名は、其唱よなへによりて凶おそろしくも、やさしくも雅にも聞ゆるものにて、此わた（り）に近き天竜川天の川といへばいかめしく、稲佐細江と聞ばやさしくも雅にも有が如し。爰に大瀬の里中を流（る）、むじな川と云有。聞にさへむくつけく覚ゆれど、其流、いとさわやかに水清く、愛すべき小川也けり。其里に住来れる榎（木）夷白、先考より猪川堂と家の号よびてと呼と。其名のよる所、故よしは備はらざるよし。唯清ら（注一）に流るゝを愛す。我にも一章をと有に、

わたり見れば春の水也むじな川

（注一）愛す。：『柿園発句集拾遺』には、「愛して我にもむじな川の一章をと有に」とある。

十八 〔月に恥よの句文〕

【解題】『句集草稿初編』（秋）に所収。同書は門人平台が嵐牛の遺句集刊行のため、四季別に集収・浄書した句

集の内の一冊で、半紙本。扉の裏に「句頭○点水音（以上朱筆）／句下、○八十湖」との書き込みがあり、句頭の「、」は、本文と同じ平台の筆による印であろう。

内容は、茶道の第一人者千利休の遺語に託して幼童に教訓した句文で、貫一もしくは息樗谷に与えた自筆の豎幅（鈴木健治氏蔵）では、幼童常吉に与える文面部分がなく、文末も「寝ればねるかげさす月のさうじ哉」のみで、字数が少なくなっている。「さうじ（障子）」と「さうち（掃除）」の掛詞は仮名違いなので、別案の句を詠み直したのであろう。『句集草稿初編』では「月に恥よ」の句に三名とも印を付け、二句めの「ねればねる」の句に印はない。俳味に乏しいけれども、嵐牛の教育者としての側面を知る材料として採録した。【参考】に自筆豎幅の本文も掲出した。

【翻刻】

ある人、利休居士に掃除の事をとはれしに、「人の見ぬ処を第一にせよ」といはれしとか。げにく／＼おもしろき教なりけり。こはさうぢのみかは。すべて人の見ざる処

をいさぎよくするこそ、誠のいさぎよきには有れとおもほゆる折しも、幼童常吉、一ひらの紙もて来り、「是にもの書てよ」、とこふ。其心ざしのやさしさにいふ、「ゆめ主意に背ことなかれ、勤におこたるなかれ、我意に募事なかれ、かの居士が示されたるごとく、人の見ざる処を第一にせよ。」

○、月に恥よこゝろに雲のおこるとも○、  
ねればねるかげさす月のさうじ哉

【参考】

ある人、利休居士にさうぢのことをとはれしに、「人の見ざる処を第一にせよ」といはれしとかや。こは掃除のみならず。人の見ざる所をいさぎよくするこそ、まことの潔には有べけれど、此をしへの至りふかき感じて、  
（印「嵐古」）寝ればねるかげさす月のさうじ哉

白童子嵐牛（印「柿園」）

十九 「ほろつきての句文」

【解題】『句集草稿二編』の秋（半紙本一冊）に所収。森

に出杖した折、連句初学の若い門人たちが付け倦んで、オハギを作ろうと言い出したときの顛末をユーモラスに描いた句文。成立年次は不明だが、慶応二年（一八六六）から四年にかけて森の若手が集中的に入門しているので、その頃か（「柿園日記抄」「柿園門人録」参照）。

【翻刻】

森の里に遊ぶほど、連句にもつけうみてか、「餅つくるまいか」とひとりいひ出に、皆同じころの下戸達にて、「いざ我米かしがん、君小豆煮てよ」と立さわぎて、頓火の事はてゝ、いざ丸めんとするに、もとよりかゝる事にぞ、ふつにくらき若人達なれば、みづの汲やうやあしかりけん、米は和らかに過、小豆はころくともちには得ならざりけるをかしさに、

ほろつきて手にもとられず萩の花

（注1） ぶつに…まったく。

（注2） 萩の花…花の名と粒餡をまぶした餅の名とに掛けた表現。

二十 訪雪中友人ことば

【解題】軸装懐紙で二本あり、ほとんど同文。標題は一本冒頭の原題によるが、別本には奥に「右、雪中友人を訪ふことば 柿園」とある。又、『文章』B本にも「訪雪中友人」と題して収められ、冒頭の部分を推敲して改めたことが判明する。嵐牛の居住地、掛川辺では滅多に雪は降らなかつたと思われ、珍しく雪の降つた日の風流人としての言動を、俳味溢れるタツチで描いた好文章だが、締め的一句がなく惜しまれる。

【翻刻】

みよし野の里ならねど有明の月と見る迄に雪の降る朝ほらけ（B本初案）  
東雲かけて降出る雪のやがて皿の如く成が頻に成ければ、（注1）いかに見るにやと日頃の友がり訪ふに、とりもあへず主出来たりて「かゝることもやあらむとかねておもへれど、東坡が妻の貯も心もとなさに、とく一徳利沽おけり。されど、客に巨口細鱗おぼつかなし」、など戯れいひつゝ、垣穂のあたりかきわけて、青みあるものはかれつまみ集て撃見せながら、（注5）我衣（手）にと古歌誦しつゝ、（注6）厨の方へ入と、やがて薺根汁といふを調じて、ころろよ

りたる梅も(B本)  
 く咲たる梅ひと枝折そへたり。其まうけのさまのをかし  
 さに寒けさも打わすれて終日昔今の物語して(B本)呑くらせば、をやみな  
 き雪もこゝろありげにこそ。  
心有さまに終日降くらしぬとぞ(B本)

柿園老人(印「嵐牛」)

(注1) いかに見るにや…「徒然草」第三十一段に、雪の降つた朝、手紙を使わずと、相手から、「この雪、いかが見る」と一筆云つてよこさぬ人のいうことは聞き入れることはできない、と返事を書いてよこした話が記される。「友がり」は友の許もと。

(注2) 東坡の妻…蘇東坡(蘇子瞻)の「後赤壁賦」に、「客曰く、今者の薄暮、網を挙げて魚を得たり、巨口細鱗にして、状松江の鱸かたらしやうこうの如し。顧ふに安んか酒を得る所あらんやと。帰りて語を婦に謀る。婦曰く、我に斗酒有り。之を蔵すること久し。以て子(あなた)の不時の需もとめを待つと」に依る。「松江(ズンコウ、とも)の鱸」は最も美味とされる。

(注3) 巨口細鱗…大きな魚や小さな魚。種々の魚。  
 (注4) 青みあるもの…早春の頃、生え出ようとしている野草。  
 (注5) 我衣手に…「君がため春の野にいでてわかなつむ我

衣手に雪はふりつつ 光孝天皇(「古今和歌集」)。

(注6) 藪根汁…藪垣に生えてきた野草を使った汁をいう。

二十一 戒猫めねこことば

【解題】『文章』B本を底本とし、『同上』D本との異同を傍記した。

【翻刻】

汝、産は笠土(注1)にして、三藏法師の経をとりて来る時、携たづなへもどりしが、唐にては広まれりとかや。仏の御国に生れる、彼大徳に伴れ来れるなれば、殺生の一戒にてもたもてるにやと見るに、兎はもとより、大空の羽音をうかざひ、秘蔵の籠鳥かごどりに命がけの働をなし、戸棚・つりだなの香にひかれ、鯉節こいせつの音に耳をそばだつ「守(注2)レ口如(瓶)レ并せよ」と唐にては鼻をば正しきものに譬たるを、汝、其鼻を守る(注3)こと、其猥みだりにして、毎度、此処より過あやまちをひき出すは何事ぞや。又汝、本土(注3)にては、歌舞岐俳優(伎)やうのものゝ再生(注4)にても有にや、老僧の留主をうかゞひ、やゝもすればとも延(注5)きて仏殿を舞台と見(注5)こなし、諸化寮(所)を楽屋(所)とゝり

ちらし終夜宵々の踊に妙を我を尽して庫裏婆をの夢をやぶり、内所坊(注6)納  
主の臆病より大評判となれば、もとの如くも住かねて、  
終には寺を飛出、野良猫、山猫の汚名をとるも是非なし  
や。(注7)或書に、彬師ひんしといふ僧、弁才有て、戯に「汝に五つ  
の徳を蒙もららむ。其一、二をいはゞ、客有(り)て、饌くひものを設る  
ときは、則駢出かひいっ、是、礼なり。食物をよく蔵かくすといへど  
もよくぬすむ、是、知成」と戯れながら、彼、盗みと鼻  
を慎しまざるときは、何れの国、いづれの辺にわたると  
も、彼、やごとなき御わたりの御膝ひざに眠る事は叶かなふべか  
らず。「必我やごの此ことばに横綱(注8)ひくことなかれ」といましむ。

(注1) 竺土…天竺。現在のインド。

(注2) 守口如瓶せよ…「守口如瓶、防意(「心」とも)如  
城」の格言による。原拠は朱熹の『敬齋箴』だが『書言  
故事大全』や『明心宝鑑正文』などで流布した。

(注3) 本土…ここでは仏土、天竺を指す。

(注4) やゝもすれば…『文章』(D本)では、「老僧の…」  
の前に置かれる。

(注5) 所化寮…修行中の僧が住む所。以下、「妙を尽して」

までの部分を『文章』(D本)では抹消。

(注6) 納所坊主…下級の、会計や庶務を担当する僧。

(注7) 或書…清代の類書『淵鑑類函』。「猫」の条に猫の五  
徳を挙げ、ほかの徳は単を見ても捕らないのが仁、単に  
食物を譲り与えるのが義、冬季、月毎に竈に入るのが信  
だとする。

(注8) 横綱ひく…強情で他人の言に従わないことを譬えて  
「猫綱」といった。それと同義で、反発、抵抗することを  
いうのであろう。

# 日記の部

### 柿園日記抄

【書誌】半紙本三冊。元治二年分—「外題」「元治二年乙丑／柿園／日記」。「丁数」三十一丁。「備考」氷壺編『早緑集 六編』などの紙背を利用。未製本。元日から三月三日まで記載。慶応三年分—「外題」「慶応三年丁卯 柿園

／日記」。「料紙」罫線入り楮紙。「丁数」四十五丁。「見返し」「文所」は田やあら吉／早馬 滝田弥五兵衛」と両端に門人・彫工についてのメモ。慶応四年分—「外題」なし。「料紙」罫線入り楮紙。「丁数」四十四丁。「備考」冒頭「慶応四戊辰」。

【解題】嵐牛晩年の日記。元治二年（一八六五）分—記事は三月三日までだが、維新前夜の動乱期に相応しいシヨッキングな事件が書き留められる。慶応三年（一八六七）分—「ええじゃないか」の伝播過程と実態が具体的に記録される。慶応四年（一八六八）分—幕府側の將軍慶喜や仙台・会津藩の歎願書、藩・郡・領主役所からの達書・御触れ、

木版冊子の体裁で創刊された新聞の記事などが写されている。いずれも貴重だが、長文のものは割愛した。

俳諧の分野では、招かれて遠駿各地の門人の連句指導、柿園評月並や寺社奉納句合の加評、来訪する門人・遊歴俳人への対応など、多忙な宗匠生活の日常が窺えて興味深い。

#### 凡例

- 一、読解の便宜を図り、全体にわたって多くの注記を加え、片仮名はそのままの表記にした。
- 一、紙幅の節約のため、作者不明の漢詩・俗謡、他に活字化されている公的文書の類は省略した。
- 一、到来する俳書・摺物・文音から摘録する句は、原則として一句にとどめた。

#### 【翻刻】

元治二年乙丑 柿園日記

元日、快晴。大霜、寒つよし。旭、見事也。風なし。南部侯、日坂どまりにて、通行大勢、<sup>（魏）</sup>魏々たり。寺ヶヤ（掛

川市本所) 十郎、年始。ナゴヤ行脚、而后来訪。信濃より秋葉越に來れりといふ。杜水(見付住) たのミ、駿府行一封並添書いたし、鶴叟迄頼遣す。

いねつむや重るとしを高枕

后

(注) 南部侯は南部利剛。二十万石。前年元治元年(一八六四) 七月十九日、萩藩兵が御所の諸門を襲撃し、幕府軍に敗れる「禁門の変」が起き、同月二十四日、幕府は萩藩(長州) 征討の勅命をうけ、十一月、徳川慶勝らが広島に本營を置く。翌二年、即ちこの年一月十五日、萩藩主毛利敬親父子の服罪により幕府は親征を中止する。而后は名古屋益屋町の味噌・醬油商。臥床、のち塊翁門。慶応元年(一八六五) 十一月九日没。享年八十一。

二日、快晴。朝日ぬくし。夜、山竹(塩井川原住) 年始。今日も歩兵方数百人下り、太鼓打、足並みそろへし組も有。松里(掛川住) 返草、雪鷲(土方住) 分、四山(掛川住) 迄返草。

(注) 返草については、「柿園嵐牛評月並句合抄」の【解題】参照。

三日、朝晴、又曇る。松前侯帰駕、大勢堂々たり。石川

年始。夜雨。

(注) 松前侯は松前崇広。二万石。「松前豆州侯、長(州) 伐御用済、御下り。御供中間七人御昼餉をまうく。へ歩兵、浮浪追伐御用済諸隊、帰府」(吉田住蓬宇日記「此夕集三十四」元日)。石川は、先師依平の遺族。

四日、明方より雨止。朝霧、追々晴にむかふ。けふも歩兵、大小銃衆、大勢くだる。其外器械おびたし。

昼、殊ニぬくし。筆始す。見付、「般」齋、仁和寺之「御影」[を] どりの贅いたし遣す。其句、

「身後堆」金柱、北斗、不<sub>レ</sub>如<sub>二</sub>生前一樽酒<sub>一</sub>

とむかし誰やらもいひしとか。此手ぶり「五」樽を尽してか、十樽をかたむけてか。

打こけて埋れてミせよ花のゆき

戲吟のミ。本所平「」殿年始。

(注) 「身後…」の詩句は、白居易の「勸酒」詩による。

五日、曇る。やす(嵐牛後妻)、見付年始にと出行。今日も薩兵玉葉方、多く下し。清三郎(掛川住、伊藤氏)、西町(掛川市) 竹藏始、年礼来。笠間牧野侯上る。万水方

諸士、代に成られ上るよし。此ほどの諸侯には替りて表立たる武備なし。殊之外のおだやか、天下平安之心持す。

(注) 牧野侯は牧野貞明(貞直)で、常陸国笠間藩、八万石の藩主。三河国吉田藩主、七万石、松平信古に替わり、元治元年(一八六四)十一月朔日から慶応四年二月二十日まで大坂城代を勤める。「御城主様、大坂方御下り、当日御入城御通行拜見として広岩主来遊」(蓬宇日記「此夕集三十四」正月二十九日)。「万水」は「満水」(掛川市)の当て字か。

六日、天気ぬくし。向笠(磐田市)人来、乞評、即評。山竹へ春興下書遣す。使、与一。夕方より雨降出。

七日、朝雨、やがて止。今日ハ訪ふ人なく、ことにつれべく也処で一句、

人の日も人なし草のいほ  
更に

人なき草のいほ「り」かな

夕月よろ「し」。又曇る。

八日、雨止、曇る。角丸(各和、掛川市)、松四郎年始。人来ず、閑寂。

九日、雨、余不降。

十日、雨止。朝日暫くさす。やす、かへる。シノバ□□年始来訪。松四郎かへる。伊十ラフ人。

十一日、天気。極楽寺帰杖来訪、横スカ(掛川市)雲外僧来訪。書画帖たのミ。尚、自書る書、一枚おくらる。(丹) 旦雅(西之谷住)年始。蕭風(小出住)同。シマダ与平年始帰り、梅城(島田住)・頃雨(同)へ文通頼遣す。尚、金谷床場行へも頼遣す。今日ハ手習入学、子どもせはし。

(注) 極楽寺は森町一宮にあり、行基開創と伝える。「手習入学」の「子ども」は、孫(「嵐牛書簡集」(二)ノ②書簡参照)。寺子屋に通い始めるのは、七、八歳から。この年二月十七日の記事によれば、手習師匠は山竹(嵐牛門人、既出)だったようである。

十二日、曇る。禾守、帰来。

(注) 禾守は行脚俳人で、一旦、来訪後他出、再来訪したのである。十四日記事の注を参照。

『言葉正道 三』野々口隆正著

都にこと有し時

高ねにハさハラざりけり大うちの

山の下風立さわぐとも

隆正

(注) 野之口隆正(二七九—二八七)は国学者・歌人。本姓今井氏で、津和野藩士の子として生まれ父から家督を継いだ。脱藩・亡命し、野之口と改姓。国学を平田篤胤に学び、和歌・音韻学を村田春海に学ぶ。岩見国大國村で大國主命の古跡を発見、以後、大國を姓とした。『言葉のまごみち』は天保七年(一八三六)序の一冊本なので、「三」の意味は未詳。「都にこと有し」は、前年(元治元年)七月十九日の「禁門の変(蛤御門の変)」をいう。

十四日、朝天気。昼方雨。ふじ丸留杖。禾守と三吟、二巻はじめ。己も守と両吟二巻はじめ。寺ヶ谷(掛川市本所)菊蔵殿伴入学之事、頼来。

(注) 禾守・ふじ満・嵐牛の三吟・両吟は『俳諧どめ』に収められるふじ満・禾守との三吟二巻、禾守との両吟歌仙二巻に当たる。禾守は馬田江公眠(大坂住)の門人で、馬田江撰の『鈴音集 初篇』(内題「類題鈴の音集」、万延元年・一八六〇、淡路洋々序)を賜谷とともに校合。「菊蔵伴入学」云々は、嵐牛の孫が、門人山竹のところに手習に通いはじめたので、一緒に通わせて貰えるよう口添えを頼まれ

たのであろう。

十五日、なほ、雨徳(未詳)が入学。けふも三吟に目をくらす。角丸(各和)、小松主人、江戸下り欵。香墨式丁、頼ミ遣す。たゞし、壹丁ハタンノ(丹野)藤九郎、代料金式分、即渡す。

月にてらされ花にハふ「か」れ

せめてことばの花なりと

中島文吉

十六日、けふも雨。今日ハ諸人來ず、静也。三吟、目を暮す。

おろかなる身にも弓矢の幸を得て

都の花とちるぞうれしき 大和水郡浅香即齋二男

々五郎武「貞」

ものゝふのつくす誠ともみぢ葉は

ちりての後ぞにしき成けり おなじく

ものゝふのかばね苔むす荒野らに

咲こそにはへ「大」和「な」でしこ

河内人浪士伴林六郎光平

攘夷祝

処得し古やの軒の蜘蛛の巢も

払搔べき時は来にけり

我たまハ世(なほ世にしける)にうづもるゝミさゝぎの

おざゝをわけてすまんとぞおもふ(の上におかん)

天の川陣中にて

扨にハ千代のミさほもうづもれん

雪ふりかゝるそのゝくれ竹

銚とりて夕こえ来れバ秋山の

もミぢのまより月ぞきらめく

捕とらる時とき(囚れの身となりける時)

かぢをなみのりてのがれぬ世(ん)ならねバ

岩ふね山もかひなかりけり

辞世

君が世きハいはほと共に崩れくだけずバ

くだけてかへれ沖津しらなみ

人長ひとをさのとるや禰のかゞミはに

うつるハミよのすがた(光)成けり

月が瀬にて

々

々

々

雲にのる人こそすまめ八重かをる

峰のたをりの梅の下庵 是迄光平

ますらをのいはほをくだくこぶしにも

手をれバかをる山ざく「ら花」

大坂住隆正男野々口正武

(注) 安積五郎武貞は徳田武著『清河八郎伝』(二〇二六年、勉誠出版)第一章「安積五郎との交友」によれば、安積あつみと読み、江戸の売卜家安積光徳の息で、東条一堂の漢学塾で清河八郎と親炙、尊王攘夷の志士として行動をとりにした。文久三年(一八六三)八月、天誅組の乱に加わり、捕縛されて、翌元治元年二月十六日、京都の六角獄舎で処刑された(37)。「大和水郡」との記載意図は不明だが、天誅組は淀川を下って堺に上陸、河内富田林の豪農で勤王家として知られる水郡善之祐邸に宿泊、翌日、楠木正成の首塚に参拝し、千早峠を越えて大和国に入るの、「おろかなる」の歌は『殉難後草』に辞世として所収するが、水郡邸で同志とともに詠み遺した作かもしれない。

伴林光平は浄土真宗の僧。還俗して加納諸平かぬからに国学・和歌を学び、勤皇派の志士となり、文久三年(一八六三)八

月、天誅組の大和拳兵に加わって逃亡中に捕縛され、元治元年二月十六日、京都で処刑される。享年五十二。辞世の歌は、文久元年の自画像賛や歌碑などには上句下五「くだげずバ」が「動かねば」とある。『伴林光平全集』（大正八年刊）所収の「南山踏雲録」などとの異同を（ ）入りで示した。「人長の」以下の詠は、『全集』九「和歌雑之部」には「春日御神楽の夜人長の舞を見待りて」と前書する。野之口正武は野之口正隆の男で、国学の著書や歌集も遺している。「攘夷祝」は、文久二年（一八六三）九月二十一日、朝廷が攘夷を決定したときの詠。

十七日、快晴也。安ま（浜松市東区安間）より鷺の卵、四ツおくらる。

十八日、晴且くもる。シノバ（篠場）送雨年始、且歳旦すり・句合巻、持来。此頃風交中、いとまなれば、夜をこめて点。夜ハ夜べより詠史題ほ句、今宵もおなじく句案。（送）雨、とまり。

十九日、天気。平台（掛川住）金谷行、立寄。年始かね。五明（掛川市）得岳、年始。平台、夕方帰る。見合（嵐牛の出杖中止）淋しとて金谷文通、頼まる。送雨、夕方

かへる。月並板下、（送）雨書。

廿日、快晴。大しも。西方（菊川市）涼月、法多詣。山竹へ月並板下彫刻取次、頼ミ遣す。潮源兵衛（牛尾村、鈴木氏）・四郎右衛門、年始。清四郎（金谷横町住）へ山西ヤ行紙代金壺両、あとらへ遣す。是も年始。梅春（金谷住）より年始・歳末文通、即返事したゝめ、清四郎（へ）頼遣す。掛川藩より点取巻、井蛙催也。

（注）「法多」は法多山尊永寺（袋井市豊沢）、遠州三山の一。『そのまま集 初編』（注14）参照。

二十一日、天気。中方（掛川市）人、招待ニ来。廿六、七日出杖、引合（問合わせ）遣す。尚、中方すりもの出来、見せらる。

廿二日、曇且晴、ぬくし。茄子苗代つくる。横須賀蒼古来泊。夕方、雨降出。

『西籍概論』平田、三冊、五冊

（注）右は上部欄外書き込み。篤胤の講述した儒学批判を門人たちが安政五年（一八五五）に刊行。

廿三日、雨、明方（つ）よし。終日、雨つよし。夜晴。

廿四日、快晴、風つよし。日ハぬくし。

今朝、俳諧満尾。殊之外ニ長風交にて、都て十日。

其後久々御便もなく、如何と案じ罷在候。愈無御別

事候や。夏頃之御返事ハいかゞ。頃日、例の秋すり

出来候而、夫々差出候間、尚積為御聞有之たく

候。上方風説とり々、形勢不レ一様子、何とぞ早

く治り候様にと、日夜相念じ候事也。さて当五月上

京、学習院へ参上、報国之一端にもと建白ニ及候所

東久世殿等、御披露之由、非藏人面々茂、御書付も

申受候。此儀、当方にてハひめ置候得ども、乍極内

申入候。御よろこび玉(は)り度候。何分独手間、

委細ニ不能ニ不尽候。

八月廿三日

公眠

禾守子 まゐる

尚々、周防曲斎も三十丁計之もの同包、さし上候也。

(注)「長風交」は禾守を迎えて門人富士丸と巻いた連句四

巻を指し、「俳諧どめ」所収の風牛・禾守・ふじ満三吟歌

仙の末尾に、「右、正月十五日始、廿四日満尾」との書き込みがある。

「学習院」は、弘化四年(一八四七)、京都御所に設置された、公家師弟の教育機関。「上方風説とり々、形勢不一様子」は文久三年(一八六三)八月十八日の公武合体派による宮中尊攘派一掃クーデターを指し、三条実美ら七卿が長州に逃げ落ちている(所謂「七卿落ち」)。

東久世はその一人で、東久世通禧。したがって、本書簡は政変のあつた直後、文久三年八月二十三日の執筆であろう。

公眠は「瓢之種」(明治二十年)によれば、馬田江四世。塞馬筆録の俳人名録に「可庭 浪華・南本町一丁目、馬田江更、公眠」(深津三郎編『板倉塞馬全集』)とある。

禾守は風牛と風交後、二月廿二日、吉田の蓬宇を訪問、両吟し、『蓬宇連句帳 十八編下』には、通称が「大坂大宝寺町三休橋東へ入高津橋 馬田江耕平 号、三大居」と記される。禾守は三月廿四日、御油に向けて発杖(『此夕集 三十四』)。

○土州屋敷裏門之橋ニ懸候首之添書

此方從<sub>レ</sub>先年一種々様々姦佞之手伝被<sub>レ</sub>致、其身高位ニ乍<sub>レ</sub>在不儀之栄花を極、島田左近之余、悪人へ心を通じ、家来加川肇<sub>(賀)</sub>を以、高位高官之方々を悪道へ引入、実ニ有間敷国賊也。依<sub>レ</sub>之乍<sub>レ</sub>憚、是頭を申請、此処迄致<sub>三</sub>持参<sub>一</sub>、居<sub>サ</sub>へさらけ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

國中浪士

下立売千本東へ入

千種殿家来

加川肇<sub>(賀)</sub> 年四十五才

右、肇方へ廿八日四つ時分、帯刀人五人計被<sub>レ</sub>越、肇ばかり及<sub>三</sub>殺害<sub>一</sub>、首持帰、壁ニ左之通認置。

壁書

此一条ニ付、町内めいわく懸間敷様、取置可<sub>レ</sub>有之事。

- 一、献毒之事
- 一、叡山僧呪詛之事
- 一、両嬪之事
- 一、島田之事
- 一、近衛老婆<sub>(女)</sub>之事

一、岡本肥後守之事

右、加川罪状者、目明し文吉白状也。

一、与力加納・渡部<sub>(辺)</sub>申合之事

一、正月十五日之夜、両嬪之奸、再出内願さし出候所、御下ゲニ相成、十二月廿九日、大炊御門・千種殿同意にて高畑式部女宅へ参り候事。右ニ付、加<sub>三</sub>誠戮<sub>一</sub>候也。

(注) 右は文久三年(一八六三)京都で起きた事件の書留で、公眠から翌元治元年(一八六四)八月廿三日付の禾守宛書簡とともにもたらされた情報か。

賀川肇は千種有文の家来(雑掌)。島田左近の志士弾圧に協力、志士の憎しみを買い、文久三年(一八六三)一月二十八日、家に押し入った土佐勤王党の岡田以蔵らに斬殺され、壁に罪状が貼られた。

土州(土佐藩)屋敷は中京区備前島町、現在、立誠小のある辺で、東側を高瀬川が流れている。土佐藩主の山内豊信(のちの容堂)はこの年正月上京、公武合体のために種々の画策をした。しかし、賀川肇の首級は一橋慶喜の宿舎、東本願寺の太鼓楼上に晒された。「裏門之橋ニ懸候」とするのは、千種家に入りする唐橋村総助を斬って木札

を立てた事件と混同したものを。

「献毒之事」は同月十二日、或者が岩倉具視らが和宮降嫁に抵抗する孝明天皇を亡きものにしようと、天皇の寵愛を得ていた実妹堀河紀子（右衛門内侍）をそそのかせて鳩毒をもった疑いがある、と攻撃の書付けを四卿（後出の四奸）邸に投じ、二日以内に洛中を退去しないと首級を四条河原に晒すことになるだろうと脅迫した件を指す。

「両嬪」は「四奸両嬪（二嬪とも）」と称されたそれで、公武合体を画策、皇妹和宮の降嫁を推進した内大臣久我建通・左近衛権中将岩倉具視・左近衛権少将千種有文・中務大輔富小路敬直の四卿を「四奸」、岩倉の実妹堀河紀子（右衛門内侍）・千種の義妹今城重子（少将内侍）を「両嬪」といい、ともに攘夷派志士たちの標的となった。八月二十日、朝廷は志士らの天誅と称する相次ぐ暗殺・威嚇を恐れ、岩倉ら公武合体派の公卿や官女を蟄居、辞官・落飾（剃髪）させた。

「両嬪之奸、再出内願」は堀河・今城兩名復職の動きがいい、志士らはもしそれが実行されれば天誅が下るのであろうと恫喝した。

島田左近は島田左近正辰で、九条家の侍。当初、修好通

商条約調印に反対であった九条尚忠を幕府側の賛成派に内応させ、紀州藩主徳川慶福（のち家茂）を次期將軍に擁立させた。安政の大獄では、井伊直弼の指令で尊皇攘夷派の志士たちを次々と捕縛、弾圧した。その結果、志士らに付け狙われ、文久二年（一八六二）七月二十日、暗殺された。

「目明し文吉」は島田左近の手先となって志士を摘発した人物で、島田の高利貸しも手強い、金子を法外に取立て志士たちから恨みを買った。

近衛老女は、安政の大獄で水戸藩家老安島帯刀（獄中切腹）や同藩家来鵜飼吉左衛門（死罪）・幸吉（獄門）父子らとともに処罰された津崎矩子。寛政十年（一七九八）から近衛家に仕え、中臈を経て老女となり、村岡（局）と称した。主公近衛忠熙の信厚く、安政三年（一八五〇）島津斉彬養女篤姫が忠熙の養女として十三代將軍徳川家定に輿入れする際に養母役を務めた。その時、島津側の世話役が西郷隆盛で、西郷や攘夷運動の指導者である梅田雲浜、清水寺本坊成就院住職月照らと主公忠熙のパイ役をつとめ、条約勅許や將軍継承などの画策に加わった。安政五年秋、梅田雲浜らにつづき、十二月六日、三条家の儒臣富田織部らとともに捕縛され、六角牢屋敷に投獄された。翌六年正

月、京都町奉行所での詮議後、二月二十五日、江戸に護送され、十月、評定所の裁許が下され、押込め三十日、松平丹波守（松本藩主戸田光則）預かりとなった。維新後、北嵯峨の直指庵を再興して余生を送った。明治六年没（88）。

岡本肥後守は、同年六月二十六日、皇居堺町御門下馬札の下に、典葉寮岡本肥後守保徳は島田左近・加納繁三郎と通謀、近衛忠熙・三条実方ら四卿を落飾させた罪科により天誅は免れないと張り紙され、恐怖のあまり高野山に逃れた。

与力加納・渡辺はともに京都西町奉行所与力で、加納繁三郎と渡辺金三郎。志士弾圧の先兵だったため、志士らに狙われ、危険をいち早く察知した加納は京都を脱出して無事だったが、渡辺は文久二年（一八六三）九月二十三日、ほかの与力三名とともに江戸に下る途中、追跡されて近江国石部宿で斬殺された。以上、『維新史』（昭和58、吉川弘文館復刻）及び岩波文庫『元治夢物語』（二〇〇八年）参照。

高島式部は女流歌人（一七六五～一八一）。香川景樹門、後千種有文の男有功に師事。志士から千種の一味と賀川が殺された翌日、身の危険を知らされ、その夜中、救いをもとめて松尾多勢子（後出）の仮寓を訪れ、松尾家の定紋の付

いた提灯を借り、志士らの包圍網を突破、大坂を経て名古屋まで落ちのびた。市村威人著『松尾多勢子』（信濃郷土叢書第十七編、昭和五年）参照。

屋方ふじ丸帰る。岩波（未詳）中村氏被<sub>レ</sub>見。

○寝ても起ても扱歩くにも、どうぞくくと唯ひと筋にころがけたら終埒明た。経や陀羅尼を唱ふるよりも、直に仏の御姿となる。未来蓮（華）ハまだるい事よ、西も東も南も北も、蓮花ならざる処はないぞ、直に足もとそりや鼻の先。是も見性の眼がなけりや、どこもかしこも三途の地獄、又ハつるぎの山とも成ぞ、とかくみなさん○見性すれば、生死ひらけて明らかせかい、さとりひらかぬ御寺にやましよ。○色や博<sub>（変）</sub>菱の御咄ならば、昼夜ねずともおもしろろが、こんな咄は氣に入まいと、心深くも云聞すれば、みんな身よりも汗水ながし、笑止顔して我家へ帰る。

（注）以上、白隠禅師（一六八五～一七六八）の戯作『御洒落御前物語』に依る。（一）入りで異同を傍注した。

○生れ来し古へとへバ何もおもはぬ此心

来たる如くに心をもてバ直(この身が生如来)に心が皆仏

右、盤珪禪師

(注) 右二首は、盤珪(二六三〜九三)著『うすひき歌』による。(一) 入りで異同を傍注した。

君が為ミつぎ学びしともかくも

ならぬハそれも老にける哉

黒沢翁丸(満)

『言霊(ことだま)のしるべ』三卷 同人著

(注) 黒沢翁満は桑名藩士、転封して忍藩(おし)士。国学者・歌人としても知られ、歌集『葎居集』(安政五年・一八五刊)、説話集『藐姑射秘言』(同六年・一八五九跋)などがある。

○消息文案

八束穂のしげる飯田(あぜ)の畔(あぜ)にさへ

君につかふる道ハ有けり

あられなす矢玉の中は越来れど

すゝミかねたる駒の山本

右、二首信濃路登りの浪士の中、中川慎之助詠

(注) 元治元年(一八六四)三月、水戸浪士らの尊皇攘夷派「天狗党」が筑波山で挙兵、これを鎮圧しようとする藩内

保守派の「諸生党」や近隣諸藩などと交戦の末、同年十一月、京都を目指して常陸国大子村を出発、同月二十日、信州の和田峠で高島藩・松本藩兵と交戦して勝利、その後、伊那路に這入る。天狗党が伊那谷から木曾谷へ抜ける東山道を進軍するのを支援したのが松尾多勢子で、書留めた箇所は別々になっているが、情報源は一つであろう。詠者は亀山嘉治(よしはら)が正しい。二首目の「駒」は、馬のそれと駒ヶ岳の掛詞。

【備考】 以下は三条実万(みよひ)の儒臣富田織部、本姓後藤一郎(いちろう)基建(きま)こと坦堂(たんだう)が罪を問われ、江戸に送致、評定所で詮議を受けた後、京に帰り着き、亡くなった主公の廟に額づくまでの記録。他の箇所(箇所)の書留と同じく禾守の携行する雜記帳に依拠し、「長風交」の間に書留められたものか。

なお、武家伝奏だった主公実万は、江戸の幕府側と交渉中、安政四年(一八五七)、日米修好通商条約への勅許をめぐって幕府側と協調路線を取ろうとする関白九条尚忠(ひさただ)と対立する。翌五年(一八五八)四月、彦根藩主井伊直弼(なおすけ)が大老になると、六月、幕府は勅許の得られないまま、米

国総領事のハリスと日米修好通商条約を調印し、七月には蘭・露・英、九月には仏とそれぞれ修好通商条約を調印。朝廷では八月、尊皇攘夷派が公武協調派の九条尚忠を辞職に追い込み、幕府や水戸藩に無勅許調印を難詰する勅諭を下す。これに対し幕府側では、九月、老中間部詮勝あきかつが上京、尊皇攘夷派の志士らをつつと逮捕し、吉田松陰を処刑、弾圧を加えた。尊皇攘夷派の実方は、その年四月、儒臣の坦堂富田織部を松平土佐守（土佐藩主、山内豊信とよひ、のち容堂、妻は実方の養女）らへの密使として江戸に派遣。この間の記録が「富田織部東行雜記」（日本史籍協会叢書125『三条実万手録二』に付録所収）で、そうした画策に荷担した廉かどで、翌安政六年（一八五九）正月、坦堂は捕縛され、江戸に送られたのであろう。一方、主公実方は、同年四月、謹慎の処分を受け、十月六日、隠棲中の一条寺村で没。

元治乙丑二月

坦堂先生「簑笠記」拔萃

安政六己未年正月元日壬申、癸酉立春也。四日、有リ沙汰これ之レ、二条奉行詰問、遂遭レ厄ニ。六日、七日連日詰問、有リ難事一。

うき世とハ兼てしれどもしかすかに

かゝるべしとハおもハざりけり

（注）京都には東西の町奉行所があり、いづれも二条城に隣接していた。

二月二十日、入リ幽谷ニ、綫縲中、百罹且千憂。

春たつものどけからねバ鶯の

しのびねもなにかごのうちかな

二十五日、発チ京檻ヲ送ル閑東ニ。初旧臘八人、次十一人、

今日十三人、凡三十二人、猶在リ獄中者数人。

三月十日、送リ江戸ニ、分ル属於諸侯之邸ニ、基建（坦堂）

属ス於飲肥藩邸ニ矣。

廠かん 緇 白 雲 外 愁 子 有ラン 誰 憐ま  
人 間 絶 消 息 断 鴻 鳴 暮 天

すがのねの永に春日を今日も又

つまはじきして暮しける哉

(注) 当時の飢肥藩主は伊東祐相。因みに村岡(七十四歳)

は松平丹波守、松本藩主戸田光則邸に預けられた。「嚴錮」は監禁、「断鴻」は断罪の身の比喩表現。「すがのね」は

「ながし」にかかる枕詞。

二十日、出<sup>いで</sup>乎<sup>ニ</sup>評定所<sup>ニ</sup>、三奉行<sup>ノ</sup>訊問畢<sup>ニ</sup>、反<sup>はん</sup>邸<sup>ニ</sup>。

檻<sup>かん</sup>中<sup>ちゆう</sup>咫<sup>し</sup>尺<sup>せき</sup>天<sup>てん</sup>知<sup>ち</sup>足<sup>そく</sup>世<sup>せ</sup>悠<sup>ゆう</sup>愁<sup>しゆう</sup>  
唯<sup>ただ</sup>懷<sup>わい</sup>府<sup>ふ</sup>君<sup>きん</sup>事<sup>じ</sup>時<sup>じ</sup>々<sup>じ</sup>淚<sup>なみだ</sup>作<sup>つく</sup>川<sup>がは</sup>

(注) 「府君」は坦堂の主公、三条実万を指す。

四月

ゆめぢにハ関しあらぬかあやしくも

ふるさと人に逢ぬ日ぞなき

患<sup>うれ</sup>難<sup>がた</sup>不<sup>な</sup>易<sup>い</sup>処<sup>ところ</sup>將<sup>まさ</sup>樂<sup>し</sup>命<sup>いのち</sup>兼<sup>あ</sup>天<sup>てん</sup>

肅<sup>しゆ</sup>々<sup>々</sup>容<sup>ゆる</sup>躬<sup>ゆる</sup>外<sup>の</sup>丹<sup>に</sup>心<sup>しん</sup>自<sup>みづか</sup>浩<sup>くわい</sup>然<sup>たる</sup>

(注) 「丹心」はまごころ。

五月

昊<sup>こう</sup>天<sup>てん</sup>无<sup>な</sup>所<sup>ところ</sup>怨<sup>うらみ</sup>世<sup>よ</sup>間<sup>かん</sup>不<sup>な</sup>咎<sup>とが</sup>人<sup>ひと</sup>

太<sup>たい</sup>一<sup>いつ</sup>滿<sup>まん</sup>腔<sup>かう</sup>子<sup>こ</sup>浩<sup>こう</sup>々<sup>々</sup>養<sup>やう</sup>吾<sup>われ</sup>真<sup>まこと</sup>

(注) 「昊天」は空。「太一」は太初。「滿腔子」は全身。

六月

身ハこゝにとらはれながら心のミ

遊びいたらぬそらなかりけり

胸<sup>むね</sup>擁<sup>よう</sup>肉<sup>にく</sup>易<sup>い</sup>睡<sup>ね</sup>夢<sup>ゆめ</sup>俱<sup>とも</sup>莊<sup>しやう</sup>蝶<sup>てつ</sup>遊<sup>ゆう</sup>  
不<sup>な</sup>識<sup>し</sup>浮<sup>う</sup>世<sup>せ</sup>裏<sup>うら</sup>身<sup>み</sup>是<sup>こゝ</sup>在<sup>こゝ</sup>獄<sup>ごく</sup>中<sup>ちゆう</sup>囚<sup>い</sup>

(注) 「莊蝶遊」は、夢に蝶の遊び舞うのを見て、別乾坤の世界にトリップした莊子の故事(「莊子」)。

七月

よとゝもに物おもふミのあぢきなきさ

さりとても又わすれかねつゝ

雙<sup>すう</sup>雁<sup>げん</sup>未<sup>いま</sup>得<sup>え</sup>信<sup>しん</sup>双<sup>すう</sup>魚<sup>ぎよ</sup>無<sup>な</sup>寄<sup>よ</sup>来<sup>き</sup>  
仰<sup>おほ</sup>天<sup>てん</sup>且<sup>かつ</sup>長<sup>なが</sup>嘯<sup>せう</sup>城<sup>じやう</sup>北<sup>ほく</sup>暮<sup>ぼ</sup>鐘<sup>しゆ</sup>僅<sup>わずか</sup>

番士某等、交代して日向の国へかへるを、わかれける

時よめる。

遠つ人まつらさよひめひれふりし

心づくしハむかしのミかハ

八月、出<sup>いで</sup>乎<sup>ニ</sup>評定所<sup>ニ</sup>、訊問事畢<sup>ニ</sup>、反<sup>はん</sup>邸<sup>ニ</sup>。

むさしのゝすゝきのほだしいかにせん

あふさか山にこまむかふ頃

三十六星伝一夜柝 柳宮城 外月如霜

一声過聽 颯心緒 愁人倚檻 頻望郷

我君のすめる心になぞらへて

空にさやけき月を見る哉

〔注〕「三十六星」は、江戸城の外郭にある三十六見付をいう。

九月、罹脚氣、浮腫時瘥又発。十三日夜、撞心、殆將

危有命哉。医薬能応焉、幸得克起矣。初自二月

一至十月、凡百二十日而愈矣。

雁は来て秋はいぬめり哀れなほ

うきめながらの我身かなしも

〔注〕「撞心」は心臓が激しく鼓動を打つこと。

秋

秋暑難勝 将暴冷 阪東瘴氣 感人深

天涯独坐 思何極 風弘病床 悲暮礎

〔注〕「暴厲」は荒々しく激しいこと。

十月

かみな月時雨のミかハおとたてゝ

さばへなす神あられふるらし

番士語云、日州有仙果。称当(当称)久年保。大若

干、味無比、云々。因戲賦云尔。

聞道 飢城香 橘子 人間稀有 好生長

乞君 投与相帰館 一菓芳音 万斛情

〔注〕「久年保」は、『古事記』などに田道間守が垂仁天皇

のとき、常世の国に派遣され、十年後に不老長生の果実、

「非時香菓(ときじくの)」を持ち帰ったものと記されていて、

クネンボ(九年母、九年保とも)の名はその間の年月に由

来し、漢名を橘・香橘などという。

七日、出乎評定所、裁許各有差。余坐禁錮、於是

免繯綬、而宿于旅館、待沙汰。而保養数日。

〔注〕「余坐禁錮」との記述は、『維新史』に記されるこ

とく「押込め」処分に相当。『狭蠅乃佐夜藝』(田崎哲郎編

著『三河地方知識人史料』所収)に紹介される「封回状」

にも、「押込 三条殿家来富田織部 未四十五才」ほか三

十二名の裁許結果が列記されており、坦堂は軽微な「押

込」(蟄居)の処分済んだ。

十四日、有<sub>リ</sub>可<sub>ニ</sub>帰<sub>ス</sub>京<sub>ス</sub>之沙汰<sub>上</sub>、則<sub>テ</sub>発<sub>ス</sub>江<sub>ノ</sub>戸<sub>ヲ</sub>。上途、今晚止<sub>ニ</sub>於<sub>リ</sub>河崎<sub>ノ</sub>駅<sub>ニ</sub>、赴<sub>ル</sub>告<sub>メ</sub>来<sub>テ</sub>始<sub>メ</sub>聞<sub>ク</sub>公<sub>ノ</sub>之喪<sub>ヲ</sub>。

こしぢよりなきてわたりし雁がねの

こぼす泪やかゝる玉づさ

旅衣寒けき夜半の月かげを

あやなくやどす我なミだかな

(注) 主公三条実方は、安政六年(一八五九)十月六日の没。

「赴告」は訃報。

十五日、早発、憩<sub>フ</sub>神奈河<sub>ニ</sub>。遥眺<sub>ニ</sub>横浜<sub>ヲ</sub>、推場<sub>ニ</sub>見<sub>ル</sub>洋人<sub>ノ</sub>徘徊<sub>一</sub>、窃<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>作<sub>レ</sub>。

金川曲

天祖

天孫立<sub>テ</sub>皇極<sub>ニ</sub>

神州靈武、猛兼<sub>メ</sub>寛

仮令<sub>「</sub>雖<sub>」</sub>許<sub>ニ</sub>和親<sub>ノ</sub>約<sub>ヲ</sub>

莫<sub>カ</sub>レ作<sub>レ</sub>羶<sub>ニ</sub>洋<sub>一</sub>、一刊<sub>レ</sub>看

(注) 幕府は安政六年六月以降、神奈川・長崎・箱館三港

で、露・仏・英・蘭・米との自由貿易を許可した。「推場」

は「権場」とも書く。専売税を徴収する運上所で、横浜税

関をいう。横浜が開港され、大量の生糸が横浜から輸出さ

れ、外国人貿易商が住む居留地も出来た。「和親約」は安

政元年(一八五四)と翌年に幕府が調印した和親条約よりも、前年に調印した修好通商条約を意識したものであろう。「羶洋」は肉食する欧米人をいう。「一刊看」は一瞥すること。

十八日、浮島原を過、此あたりふじのよければ、昔御供し侍りしたび、御ひろひ玉し事どもおもひ出されしまゝによめる。

あづまぢのたごの浦波立かへり

かへすくも昔おもほゆ

(注) 「御ひろひ」は歩行の敬語表現。

二十二日、濟<sub>ニ</sub>遠江<sub>ノ</sub>新居<sub>ノ</sub>駅<sub>ニ</sub>、小憩。曩<sub>ニ</sub>本陣<sub>ノ</sub>金刺<sub>ノ</sub>温徳<sub>一</sub>、

接<sub>シ</sub>檻輿<sub>ニ</sub>、問<sub>フ</sub>水頭<sub>ヲ</sub>懇情<sub>ヲ</sub>難<sub>レ</sub>忘<sub>ル</sub>。今幸得<sub>レ</sub>還<sub>ル</sub>、為<sub>レ</sub>過賦<sub>シ</sub>一

詩<sub>ヲ</sub>以<sub>テ</sub>謝<sub>ス</sub>。

雨晴渡御、辺風急、抱<sub>ク</sub>前<sub>ノ</sub>前<sub>ヲ</sub>

長江連碧海、富岳聳<sub>ユ</sub>青天<sub>ニ</sub>

愁人泣上船、津吏涙<sub>ヲ</sub>沾<sub>レ</sub>掌<sub>ヲ</sub>

豈<sub>ハ</sub>斟<sub>ニ</sub>有<sub>リ</sub>今日<sub>ニ</sub>、相<sub>ニ</sub>値<sub>ヒ</sub>且<sub>ニ</sub>相<sub>ニ</sub>憐<sub>ム</sub>

(注) 新居駅本陣の当主は、通称飯田武兵衛温徳。金刺は本姓。その父武兵衛昌秀は三河国宝飯郡西方村(現、豊川

市御津町(西方)の山本兵三郎茂義の二男として生まれ、飯田家の養子となった。本居大平に国学を学び、天保三年(二八三)の没(40)。実弟(四男)が羽田野敬雄で、やはり三河国吉田の田町神明社及び羽田八幡社(官羽田野家に養子として入る。本居大平のち平田篤胤に国学を学んだ。武家伝奏で江戸に往復する三条実万が、嘉永三年(一八五〇)、新居駅の本陣飯田家で昼休みをとった折、学習院の執奏(奏上役)で、書家でもある実万に、温徳は羽田文庫の額を揮毫してもらう(羽田野敬雄著『万歳書留控』)。そうした縁故から、坦堂が密使として江戸に下った折にも、懇篤な接待を受けている。志士たちが奪還をねらっているとの情報が流れ、江戸に護送する「京囚」は網乗物又は鶴鷄籠に乗せ、その周囲を護衛の与力・同心ら数十人が抜き身の槍・鉄砲・切火縄を携え、道中筋にあたる諸大名が多数の人数を派した(『維新史』)。そうした敵戒態勢にもかかわらず、敢えて接近、労りの言葉をかけてくれた温徳の真情に心打たれたのである。

二十五日、自<sub>リ</sub>関東<sub>ニ</sub>至<sub>ル</sub>。

十一月

十二月五日、嬰兒急病。忽<sub>ニ</sub>殤<sub>ス</sub>(夭折の意)、関<sub>ス</sub>月<sub>ヲ</sub>才<sub>カニ</sub>九。

あけくれになでつさすりつしら玉の

ゆきともにもけぬぞかなしき

はらからの基備が一子も先にはかなくなりて、いとかなしむとなんきこえければ、よみてつかはしける。

うつゝさへ猶ぬばたまの夢としれ

さめあへぬまはうき世成けり

十七日、於<sub>ニ</sub>二条(奉行所)免<sub>ス</sub>禁錮<sub>ヲ</sub>。自<sub>リ</sub>帰京<sub>ニ</sub>至<sub>ル</sub>今日、凡五十日。

除夜、謁<sub>ス</sub>君所<sub>ニ</sub>。

(安政) 七年庚申春正月三日戊辰、拜<sub>ス</sub>故前内相大府公於祠堂。謁<sub>シ</sub>画像<sub>ニ</sub>、有<sub>リ</sub>遺恩<sub>一</sub>矣。方喪<sub>如</sub>今。

六日、詣<sub>ス</sub>小倉山二尊院<sub>ニ</sub>、拜<sub>シ</sub>先公廟<sub>ヲ</sub>、哭泣哀慕<sub>ス</sub>。

ふしておもひあふぎてしたふぬば玉の

をぐらの山に袖ぬらしつゝ

坦堂先生ハ、三条前内府実万公ノ儒臣、富田織部、藤原基建ノ号、蕩々山人、又葆光舎等ノ号アリ。此記ハソ

ノ甥、三上義胤ノ秘書中ヨリ写シトリテ、正気ヲ逆ダテ、  
邦ヲ憂ル人ニオクル辞（ヲ）識。<sup>ス</sup>

○一身許国死兼レ生 豪氣直欲レ斃<sup>ニ</sup>海鯨<sup>ヲ</sup>

丈六、鉄槍 三尺、劍 秋風躍馬 向<sup>ニ</sup>神京<sup>ニ</sup>

浪士 牧<sup>（真木）</sup>和泉守保臣

〔注〕「許国」は、身を捨てて国に尽くすこと。「海鯨」は、  
外国の軍艦を比喻した表現。「神京」は都の意。真木保臣  
は久留米水天宮の祠官。従五位下和泉守。尊皇攘夷派の活  
動家として著名。各藩の浪士で組織した義軍を指揮して上  
京したが、禁門の変で敗れ、元治元年（一八六四）七月二十  
一日、天王山で自刃した。享年五十二。

○皇<sup>（治）</sup>の神のしきます うつし世の人にあれ出し かひ  
や何<sup>（五）</sup>あれも男ならバ ミすゞかる しなのゝ真もり 左  
手に手にきりもちて つるぎたち 腰にとりはぎ 家わ  
すれ 身もたなしならず 其道に出<sup>（で）</sup>てつかふハものゝふ  
の 数ならずとも 御名<sup>（みな）</sup>方<sup>（かた）</sup>の 神のミたまを 賜りて やま  
と心を ふり起し いさみたげびて 道しらぬ 人の心の  
横浜に いよゝつどへる たふれらに しこのえミし

らひとりなく やらひてましを むらぎもの 心はやれ  
どかにかくに 足さへたゝぬ ひるの子の せんすべを  
なミ こひつゝぞをる

たわやめのミをくひあかしなまよみの<sup>（梅）</sup>

かひなき事を書かぞふ我は<sup>（生詠）</sup>

吹風の末野の花うら枯て<sup>（尾）</sup>

さびくさはぐむさしのゝはら

加茂川やちどりの声もあだなみの

立さはぐ世をうらミてぞ鳴<sup>（ぶれ）</sup>

右、信州飯田在友塾村 松尾氏多世子<sup>（勢）</sup>

〔注〕松尾多勢子（一八二〇—一八九四）は信濃国伊那郡山本村（現、  
飯田市）の出身で、竹村氏。十九歳のとき、伴野村（現、  
豊丘村）の松尾佐次右衛門元珍に嫁いだ。元珍は漢詩文を  
能くし淳齋（醇齋とも）と号した。多勢子をはじめ飯田の  
福住清風、のち掛川の石川依平に和歌を学び、自筆稿本  
『柳園詠草』の嘉永七年（一八五四）のところに、「三月二日、  
信濃国伊那郡伴野村松尾元太郎英珍（長男誠）来る、母多  
世子入門」との記載がある——「門人録」（後藤肅堂著『歌  
人石川依平』昭和四年）には夫の松尾佐次右衛門元珍、伊

奈郡伴野村、嘉永四年、四十四歳」として記される——。国学は地元の岩崎長世、のち平田派没後門人となる。文久二年（一八六二）、夫の許しを得て上京、尊皇攘夷の活動に携わり、上京した平田鏡胤の寓居に親しく出入りした（『都のつと』）。一旦帰郷、元治元年（一八六四）十一月、水戸浪士（天狗党）の伊那谷通過を助けた。その後再び上京、岩倉具視と志士との連絡役を務め、岩倉家の「女参事」と目される。明治二年（一八六九）、帰郷。

此春は花鶯も捨にけり

我なすわざ（ぞ）八国民の事

安き世にひとりも早くわたらばや

いすゞの川の流汲身は

こと人も我いむ人も夕立の

かくすみやけく過て行けかし

右、三首、今上皇帝（孝明天皇）御製

大君のおほみ心をそよとだに

こち吹風の我につたへよ

三条大納言実美卿、長州にての詠

（注）実美は、実万の三男。二男が早世したため実万亡き

後を継ぐ。文久三年（一八六三）八月十八、公武合体派による政変で尊皇攘夷派の東久世通禧ら六卿とともに長州藩を頼って京から逃れ、さらに元治元年（一八六四）の第一次長州征伐で福岡藩に預けられ、太宰府に三年間幽棲した。右の詠は、太宰府に左遷された菅原道真の「東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて春を忘るな」（『拾遺集』ほか）を踏まえた作。

笹竹の世八なほかれとおもふのミ

我うきふしのねがひ成けり

大納言 三条西殿、是も長州にて之詠

（注）三条西季知（一八一〇）の詠。季知は和歌・国学を

能くし、やはり文久三年（一八六三）八月の政変で京から長

州へ逃れた勤皇派七卿の一人。

長州軽輩浪人 水井 精一

別府にて薩州 山本 誠一郎

交易船、油を 同国郷主 高橋 利兵衛

やく事 薩州交易船持 大谷 仲之進

大阪御堂門前切腹之事

（注）元治元年（一八六四）二月十二日、周防国上関に駐屯す

る義勇隊士水井精一らは、外国と密貿易をするのを咎め、近くの別府浦に停泊する薩摩藩御用商人大谷仲之進の持船加徳丸を積荷とも焼き払った。同月二十六日、大阪南御堂門前で水井と山本の二人は切腹、三月十日、周防の室津浦で高橋が切腹した。のちに「上関三土」と呼ばれ殉難者扱いされ、靖国神社にも祭られた。

（泊天草洋）  
天草夜泊

雲耶山耶具耶越 水天彷彿青一髮  
万里泊舟天草洋 烟横蓬窓日漸没  
瞥見大魚跳波間 太白当船明似月

山陽先生

〔注〕『頼山陽詩集』卷十二所収で、異同を（ ）内に記した。文政元年（一八一八）の作。

詠史（田氏女玉葆画常盤抱孤図）

（灑）  
雪庄笠簷風卷袂 呱呱求乳如何情  
（叱叱スルハ）  
他年鉄拐峰頭峽 呵叱三軍是此声

星巖

〔注〕梁川星巖（一七八九〜一八五八）は美濃国の出身。江戸に

出て山本北山に学び、江戸詩壇に雄飛。弘化二年（一八四三）帰郷、翌年上京して勤皇の志士らと接触、安政の大獄で身に危険が及ぶ直前、コレラで急逝した。梅田雲浜と並ぶ攘夷運動の中心人物。右の詩は『星巖乙集』卷一所収で、異同を（ ）入りで傍記した。文政六年（一八三三）の作。當時、大評判となり、祝して鉄拐山人の印を贈られたという（伊藤信著『解註星巖全集』昭和三十一年）。常盤が牛若ら三児と雪中を落ちる場面は画題として流布した。

真田兄弟

二番芽も早摘れたる茶木かな

水竹

長篠

長雨にもちこらえたるいちごかな

卓池

〔注〕「真田兄弟」は戦国時代から江戸前期にかけての武将で、兄が信幸（のち信之）、弟が信繁（幸村名は俗説）。水竹は卓池の高弟。吉田（豊橋）の人。嘉永三年没（65）。

「長篠」は新城市の地名で、古戦場として知られる。武田勝頼軍に包囲された長篠城の城主奥平貞昌は、家臣鳥居強右衛門を密使として派遣、岡崎の徳川家康に援軍をもとめた。強右衛門は無事使命を果たしたが、帰城時に武田軍

に捕まり、城門の前で磔刑死を覚悟、城内の味方に援軍が来ることを告げた逸話が有名。

(元治二年正月) 廿五日、快晴。禾守、今日、見付行。平川(菊川市)、リウセン老人被<sup>みえられ</sup>見、扇書べく望まる。されど、此頃筆とらざ(り)けれバ断。「」書よと、扇預けゆく。且掛川御山の□上もて『白氏文集』廿一より廿五迄五冊かし遣す。夕方、平宇(袋井市)水音、来泊。石川(依平)筆八品かし遣す。

(注) 禾守は、この後、二月廿二日、吉田の蓬宇を訪問、風交両吟する。正月廿四日の禾守の注記参照。

廿六日、中方(掛川市)春彦、迎ニ来。朝過出杖。水音も帰る。平川西林寺にて発句会、夜もすがら。

廿七日、尚おなじ処にてほ句会。夜に入、果。

廿八日、帰杖。中方、春園おくる。留主中、知碩(中野住)来。大工惣七、敷居造。

廿九日、快晴。惣七尚来。マスケ老人へ之文通したゝめ、尚『其まゝ集』二冊封す。

卅日、天気。中泉(磐田市)森謙三郎一葉、御陣中、稲

荷奉灯卷遣し、即評。月岡(菊川市)タウロ稲荷奉灯卷、即評。

(元治二年) 二月一日、曇る。京登銃砲歩兵、通行夥し。駿河越後島、甲賀珍種文通。年始歳末状也。詠草入足助行状、日阪本陣出し。使ハ先方<sup>きりや</sup>来序之人ニ頼む。森森町)鬼外・瓢水催奉灯卷、即評。掛川豊川(稲荷)奉灯、松里・中堂来、即評。

二日、曇る。小田原侯、御下り美々し。潮海寺(菊川市)松寿年始。向笠連中豊川奉灯卷並大海(新城市)奉灯卷共ニ即評。昼方雨、夜尚降。

(注) 小田原侯は、十一万三石余、大久保忠礼(たひら)向笠の豊川は、豊川稲荷から茶枳尼尊天の分霊を勧請したと伝える  
豊栄稲荷のこと。

三日、快晴。森新町人来、書もの頼。是仁<sup>このじん</sup>は、日坂藤兵衛二男成を養子せしと也。若人久しく不<sup>みざれ</sup>見は見そなふ。中野(磐田市豊浜中野)雨好年始、来泊。知碩よりも配もの万婁<sup>纏</sup>文通種々。此頃、おも家の庭樹、鶯<sup>きやう</sup>来鳴。

四日、朝、天気。今日、初午也。雨好、帰る。今日は森

人之頼もの、唐紙式ひら書かき。

(注)『俳諧どめ』所収の知頌との兩吟、雨好との兩吟、知頌・雨好との三吟は、この頃のものの。

五日、天気。今日ハ風邪いやまし、頭痛・涕洟はなな。素涼(大島住)年始、来。とまる。スノ府流雲、来訪。

六日、快晴。ナゴヤ梅裡文通。ミノ行、羽洲へ文通也。

我竟(名古屋住)へ清民(須賀川住)頼文とゞけ、尚指石さき(名古屋住)へも頼遣す。星岬せいしか(星崎住、後号芝椿)へ文通。是ハ有松有橋へ頼遣す。尾州文通、すべてトバノ為舟いせ行ニ付、頼遣す。素涼かへる。「」来泊。

七日、天気。やす、篠場年始。「」くトバノ為舟、年始来、名古屋書状たのミつかはす。屋後帰る。為舟も屋帰る。やす、夕方帰る。

(注)『俳諧どめ』所収の素涼・為舟・嵐牛の三吟、為舟・嵐牛の兩吟はこの頃のものの。

八日、朝、小雨降。今朝も鶯を聞。今日ハ誰も来ず、終日得かんをえ閑書見、日を暮す。風邪もいさゝか快し。

九日、天気薄曇り。ヲカ山(袋井市)岱仲来訪、年始。

けふははこべらの水、ランビキにかくる。ひま入、わるくさし。難義(儀)千万也。西垣の山吹、今朝一輪始めて開く。鶯、今日も来啼。

十日、曇る。欠川年始行、夕方かへる。

十一日、快晴。今日ハ川崎行とせしかど、股之いたみ、やむ。

のどかさの眼よりも先や朝ごころ 鶴老

水色も青ミかつたる「柳」哉 流「雲」

此頃之文通、落墨。

十二日、快晴。朝、なみふれしといふ。己ハしらず。新居宿田町、山村ヤ与吉より評卷、到来。

十三日、快晴。風寒し。日ハぬくし。秋葉山山中月爪げつさより卷、到来。欠川信太郎すけがわ次。

十四日、天気。寒。吉田呉井(蓬宇)文通。封中一宮ノ「粥占」一葉、五十句、日々に吟ずる詠草。猶、俳諧百卷いたすとの事、申来。

金川茶暁より之とゞけもの、封中「横浜画図」一ひら、「横浜奇談」一とぢもの、状封じ紙外、たにざく五葉入、

『横濱奇談』一とぢもの、状封じ紙外、たにざく五葉入、

「是をしたゝめよ」と有。

初雁や明ぬ夜ながら朝心

暁

欠川四山、来。南蘋なびん沈詮（詮）が孔雀の画、大幅を見る。おもしろし。句評卷一卷、即評。

〔注〕「杜水主人および嵐牛老人へ年始文出す」（『此夕集三十四』二月八日）。茶暁は神奈川連中の中心人物の一人。吉川氏。弘化三年（一八四六）から嘉永五年（一八五二）にかけて逐次刊行された『神奈川集』（金）（初編〜五編）の編者の一人。「横浜画図」は明治三年再刻版によれば、横浜弁天通の師岡屋伊兵衛、錦港堂の蔵版で、本紙の中央上に「横浜明細之全図」と銘打ち、袋には「横浜画図」とある。色摺りで橋本玉蘭斎貞秀画。『横浜奇談』は中本一冊、題簽が「横浜奇譚」、見返しが「美那登能波奈／横浜奇談／錦港堂蔵」、尾題が「港の華横浜奇談」。序は菊苑老人誌。ともに横浜の開港を当て込んだ出版物。

十五日、天気、ぬくし。今日、掛川四山催会に行。途中、岳丈・貫一（ともに岡崎住）にあ（ひ）て、夕方帰庵。両子とまる。留住宅へ小出簫風巻、来有。

〔注〕簫風は簫風とも書かれている。別字だが、どちらの

つもりかはつきりしない。

十六日、曇る。シノバ知丈尼、来泊。雨降出。川西大瀬（浜松市西区）月声、巻持参、即評。是も雨故とまりに成。書もの種々。

十七日、朝、快晴。やがて曇る。知丈尼、東山へと出行。声も帰る。此頃、日々、山竹（塩井川原住）へ手習子供遣すに、月並二枚出来ぬ。夫それ二遣し書状したゝむ。

〔注〕この頃、山竹は柿園評月並の催主三人の内の一人。「柿園嵐牛評月並句合抄」慶応元年四月分を参照。

十八日、天気。

十九日、快晴。新ゐ・藤枝・御油文通、本陣出し。素涼（大島住）・送雨（篠場住）行、シノバ尼僧（知丈尼）あたらへ遣す。明日、川崎へ出杖、したくせはし。今日、小松（各和住）、江戸より帰、たのみの墨、紅花・墨二挺、持来。

〔注〕川崎は中世からの地名で、近世後期には南方に近接する相良城下と藤枝宿を結ぶ街道沿いの市場町として発展、近代に入って静波村と改称、ついで榛原町となり、さ

らに合併して現在は牧之原市静波と改称、市役所のある中心地となっている。西北の内陸部から勝間田川が町に流れ込み、河口辺で微高地となっているための地名で、流れは西側に迂回して釘ヶ浦で太平洋に注ぐ。

廿日、天気。川崎出杖。途中、東風寒し。

鳴い<sup>ヒ</sup>耳去<sup>リテ</sup>山<sup>ノ</sup>間<sup>ノ</sup>蟪<sup>ケ</sup>蛄<sup>ト</sup> 明<sup>ノ</sup>眸<sup>ヲ</sup>隔<sup>テ</sup>霧<sup>ヲ</sup>見<sup>ル</sup>蟬<sup>ヲ</sup> 春<sup>ノ</sup>来<sup>ル</sup>朋<sup>友</sup>音<sup>ノ</sup>書<sup>ヲ</sup>少<sup>ク</sup> 只<sup>リテ</sup>有<sup>ル</sup>二<sup>ノ</sup>瓶<sup>ノ</sup>梅<sup>ノ</sup>独<sup>リ</sup>慰<sup>ム</sup>憂<sup>ヲ</sup>

水雲

〔注〕作者名のない三首は省略。「蟪蛄」はニイニイゼミ。前半は老耄のさまを形容。水雲は宮本茶村（七三〜一八六）の号。常陸国潮来村の庄屋、のち郷士。江戸に出て、山本北山（七三〜一八三）に漢学を学び、門下十哲に数えられる。

【備考】以下、連句指導の間隙に本草書『掌中名物筌』から「冷滑石」以下の本草物品名を二丁弱にわたり筆録するが、省略に従う。

目勝（川崎住）ぬしの家があるじとす。

廿一日、曇る。空寒く堪がたし。両吟はじむ。昼後、坐釣子見えらる。『掌中名物筌』といふ書を見る。伊賀越知

武戢謹撰とあり。横本也。

〔注〕両吟は「俳諧どめ連句一覽」参照。『掌中名物筌』は福井春水輯、横本一冊、天保四年（一八三三）刊。「伊賀越知武戢謹撰」とあるのは序の署名で、日付は「壬辰（天保三年）晩秋」。

廿二日、曇る。漸今朝、脇出来たり。

【備考】以下、同様に『掌中名物筌』から二丁弱にわたって本草物品名を筆録するが、省略。

廿三日、快晴。ぬくし。夜□かけ、漸おもて出来。

【備考】以下、同前の筆録、省略に従う。

廿四日、晴、又曇。

廿五日、あけがた、江戸より舟登る。

廿六日、天気。今日ハ出船とて、あるじせわし。やはり

昨日登りし船也。米・炭積込事おびたゞし。連句やすみ。

夕方、出帆。

廿七日、天気。朝空薄様霞。

廿八日、快晴。誠にのどけし。

【備考】以下、季吟の伝書『誹諧埋木』（延宝元年・一六

三刊)などから三丁余にわたって筆録するが、省略した。

廿九日、夜雨。俳諧満尾。

(元治二年)三月一日、帰杖。途中、雨にあふ。

二日、快晴。朝、蒼山来訪。こしかけながらはなし。見付へとて行。

(注)蒼山は陸奥国長湯(現、山形県赤湯町)の出身。上京して梅室に俳諧を学び、別号を摩訶庵といつた。蒼山は、見付の宗匠鳥谷が亡くなると、その遺言により門人たちから招かれ、文久四年(二八六四)、鳥谷亡き後の黙養庵に入り、さらに安間(浜松市東区)の木潤邸に転じ、この頃、下石田(同上)の小池古心邸へ移った。明治二年(二八六九)一月二十日没(52)。

三日、天気よし。向笠・大坂・スン請所巻、評。

慶応三年丁卯 柿園日記

元日、快晴。

二日、おなじく。

三日、おなじく。

四日、天気。ふじ丸(丹野住)、年始来。夜、曇。

五日、雨。タンノ、帰る。薰風(小出住)、来。ナゴヤ酔

雨、来訪。

此間、落墨。

十四日、シノバ(篠場)送雨、来。夕方、帰る。天気よし。

し。

ふじこそは 二無山 其布土能

布土古曾波 二無如 吾思有 君爾因弓波

いふすべも 将語別母 無而明志都

右、一首 歡逢歌 俊夫

右、送雨持来、見せらる。

(注)俊夫は木下氏。掛川宿問屋役人。石川依平門。明治二年(二八六九)没(60)。

十五日、快晴。宣三郎、秋葉登山。松四郎(各和住)、欠

川使。スンセト（駿・瀬戸）玉見使、来。入門申来。是人も秋葉行之序也。書もの預り置、帰杖迄御請引。

〔注〕玉見の入門については、「嵐牛書簡集」所収⑤の②書簡参照。

十六日、曇。松四郎、帰。松里（掛川住）、年頭。長風（徳泉住）・松寿（潮海寺住）・飯田（森町）人参合、終日にぎはし。

十七日、雨しぶく。伊水（森住）文音。島田出杖之事、申来。

さらくと傘する闇の柳かな  
ミ（燈）かく  
先日、尾張酔雨、上りがけ来訪。

しのばず 足もとニ鞆のうく池や枯る蓮 雨

上の 日ハぬくしさくらのもミぢ散敷て  
久しく御側につかへ奉りし君（尾張藩主徳川茂栄）の一橋御家をつがせ玉ふ折から、御酒・御さかななど玉ひ、ふかき御ことばを下候て、あつき御品を御手づから玉はりしありがたさに、猶別れ奉るとおもへば、

いかにせんわたくし雨に氷る袖 雨

セト（瀬戸）使、帰り来。書もの遣す。猶、島田山本氏（習静）行、借もの頼遣す。大工、来。棚こしらふ。

〔注〕酔雨は、尾張藩士の吉原五左衛門数馬、俳号黄山の五男。「藩士名寄」によれば、天保三年（一八三二）、御右筆部屋留役御側懸留役兼の井田鏡六郎の養子となり、井田寛三郎を称し、明治二年（一八六九）、家督御切米を継承。「愛知県（尾張国）第一大区名古屋四小区長島町七丁目十二番地 吉原東海 号竹意庵 酔雨」（（はるな）精知輯「化聞人名録」明治九年）。口絵図版の「柿園風牛翁吟」参照。

十八日、猶雨。十湖（中善地住）な歳旦すり、来。是も前来、落墨。鳳雛文音。是ハ南部美濃守様御内、大沢潔巳と通称也。還曆之加章、頼来。

時めくや小雪のかゝるくばり鮭 雛

〔注〕「江戸南部美濃侯御内土沢鳳雛君より旧臘廿四日付之文来る」（蓬宇日記「此夕集 三十六」正月九日）。

十九日、天気。板下書。

廿日、天気。杜水（見付住）、来泊。丹雅（西之谷住）もとまる。

廿一日、水・雅、ともに帰。ヲカツ（岡津）小竹父、来

訪。モリ(森)試雪、スルガ(駿河)行序(ついで)、立寄。京、古沢肥後大掾文音、村上碩水添書、肝胆円、売広め之事、申来。

白川のほとりに居を移して、

六月やよい友ふえし水のぬし

碩水

(注) 上部余白に「碩水、東山知恩院門前袋町」と書込み。

廿二日、我妻十三回忌。源作、年頭、折ふし来合、さけの(む)也。古宮(掛川市)この、清四郎(金谷横町住)、牛尾(島田市)二人、知碩(中野住)・雨好(同住)も年始、とまる。小竹父、帰り来訪。暫くはなさる。寒桜、咲出す。

(注) 嵐牛の先妻、戒名寂窓妙室大姉は安政二乙卯年(一八五五)正月二十二日の没(過去帳)。源作は嵐牛と先妻の間(小)に生まれた次女の息で、豊浜(磐田市)住、伊藤氏。

廿三日、曇る。牛尾人、帰る。ミがく(金谷住、瑩)文通。

笹やぶをくれば雪也としの雨

ミがく

島田塚本(未詳)・大坂(掛川市)千広(ちひろ)、来訪。清四郎、

帰。ミがく返書、梅春(金谷横町住)へ一封遣す。

廿五日、天気。平宇(ひらう)(袋井市)水音、来泊。ムカサ(向笠、磐田市)巻、初馬(ハツマ、掛川市)巻、二巻来。

廿六日、小雨。音子、昼方西方(菊川市)へ被(季)行。早朝、江戸人来。書もの乞。扇二本書て遣す。

廿七日、快晴、のどか也。杜水より江戸四方庵友史(季)小すり並書状、水子たにざく(短冊)二葉、したゝめ送らる。

往尽す松植てゐた子日かな

水

朝市の河豚糺る声もよかん哉

友史

(注) 「江戸、四季庵幽止、友史と改名、文音有」(『此夕集三十六』正月十八日)。

長風(徳泉住、月並催主)、来。浜松へ、またして遣す。霜月(二)・十一月板下、滝田(弥五兵衛、浜松市早馬住)へ遣す。あつミやへたにざく三葉進上。板刻料金壺両、少(小)生、まにあひ代金壺両、風子へあとら(詠)へ遣す。すべて西手返草もの遣す。十月分月並也。

廿八日、曇。森より巻来。一記(藤枝住)よりちらし同封、請所(うけしよ)(焼津市治長請所)茶烟歳末、来。

廿九日、天気。朝、スン（駿）薮田（藤枝市）遠花、来訪。一記・玉見（瀬戸住）行十月分返草、頼遣す。見付・中泉、川西（天竜川以西）返草、長風浜松行ニあとらへ遣す。

（慶応三年）二月一日、高橋（菊川市）井園、来訪。江戸より頼にて、もの書遣す。十月分月並・するが万句合返草、森・ヲカザキ（岡崎、袋井市）外近在分、古勢（掛川住）迄返草。萱間（カヤマ、袋井市）人、一ノ宮（小国神社）奉額巻、持来。ヲカ山（袋井市）連、奉納巻持来、泊。但、二人。

二日、天気。昨日の二子帰り、今日ハ人なく、静也。

三日、快晴。高はしよりちらし来。夜べ、江戸其常（鳥羽野住）より書状。墨、竜涎巻丁、漱金巻丁、筆四対、此

内二対、常子年玉也。西郷（掛川市）人評巻持来、即評。

四日、島田出杖。先、ミがく（金谷住）ぬしを訪ふ。同伴せん事、せん事（衍マ）をさそふ。風邪にて不達。梅春同伴にて川端に出る。そこに一湖（金谷住）ぬし出役にて有し

をそゝのかして、是も同杖、秋野氏（号、雪香）へ行。

来訪人習静（島田住）・梅城（同上）五名、歌仙はじむ。桜じまより評巻来。

〔注〕「桜じま（島）」については未詳だが、九起編「俳家人名録」（明治二年・一八六九）に「駿河島田駅桜島 森定 四郎／杜若園清節」とあり、島田宿の小字と判明。

五日、朝小雨、やがて止。夜べの巻点。良大とハ遊曆（歴）、

桜島に留杖（ま）なる来、始てあふ。終日終夜咄す。請ぜし清介老も来、咄す。

〔注〕良大は太田氏のち内海氏、公成門（まみなり）。「柿園評月並」合本に混入する、島田・焼津・藤枝連中の句合（判者公成、

「慶応元丑季秋」奥）があり、師公成の代理として派遣され、来遊したのであろう。

六日、朝日よし。梅春帰る。夕方、一湖も帰。

水食雲棲の身は、

はつゆめやこゝでミたればこゝの事

大

大子、俳諧はじむ。夕方かへる。九如（未詳）・塚本、昼る出席。梅城（棒線抹消）・雪香（島田住）三吟、梅城・塚本とハ両吟はじむ。

〔注〕良大の句は「柿園摺物集」の六に所収。淡節編「四時行」(慶応三年)には「水食雲棲／はつ夢や爰に寝たれバこゝの事 雲水良大」と小異がある。

七日、天気よし。竹香(島田住)はじめて見ゆまみ。今日八兼ての約とて桜島より迎来る。昼より一座、打連て行。夜半迄遊、帰る。月晴、をかしけれど、帰路西風、いと寒し。

八日、天気よし。猶風寒し。月彦、来。

此間、落筆。

十二日、天気。今日ハ少し寒さゆるむ。梅城・塚本・習静、来。気賀きが(浜松市北区細江町)、山口ヤ源右衛門雪溪、卷遣す。即評。書物ハ残るかきもの。

式両式分二朱ト式匆五分 すりもの代

外、式朱ト式百文 江戸よりすりものとゞけちん

九百文 此方より両度ちん

〆八両三分卷貫百文

廿二人わり卷人分

此間、落筆。

〔注〕「すりもの」は「柿園摺物集」の六を参照。

廿四日、島田より帰杖。大坂や平助殿(彫工)、来訪。

廿五日、トバノ(鳥羽野、袋井市)大納・為舟、来泊。

廿六日、雨。昨兩人、帰る。長風(月並催主)、来訪。ちらし・すりもの封す。森より人、参。卷、返し遣す。

廿七日、長風、帰る。松寿(潮海寺住)、来。夕方、花見。

廿八日、天気。今日、いさゝか閑暇を得、留主中東西文

音、開封。大津絵師亦平、培茅、(又)「筆華帖」といふを送ら

る。是、画作の生徒(の)よし也。序詞に見えたり。尾

(州)芦錐「初かをり」、史彦春之すりもの、あはぢ(淡路)介居「青梅集」、介居他参たまたまとして弟三外といふ人より来。

〔注〕「高家衆由良信濃守様御内、御目付役史彦君来臨」

〔此夕集 三十六〕二月八日。『青梅集』は嵐牛序(嵐牛文集拾遺抄)の九に所収)で、三河国吉田の蓬宇から転送

〔此夕集 三十六〕正月十日)。

鷺の行あとや水にも色のつく

外

同じ事仕あかぬものよ三ヶ日

芦錐

崖の梅折れぬ計も見事也

羽洲

庭だけ八人に掃せず冬の梅

梅裡

としくや松の木かげにひく小松

我竟

白浜ハ松まばら也秋の風

士前

若竹の傘かざす也肘枕

三楓

やむ時ハはやあともなし春の雪

史彦

『あら磯集』碩水集

呼水の音ハ静に青柳

水

〔注〕「浴、猿蓑庵より『あら磯集』到来」〔此夕集 三十

六〕二月十二日。

『むしろ機』三水集

向のよき肱かけ窓や冬(の)梅

三水

落も来よ高根すべりて雪の窓

春湖

『初懐昏』露心より

元日や別に明たる夜でもなく

心

〔注〕蓬宇日記『此夕集 三十六』では、正月廿日出の「す

り物」が三月十五日に着き、三月廿日、江戸穂家露心宛に

「すり物」礼状を出す。

「太平楽」黙地(池)方か 一朵餅花一円金

草の名や粗(ほ)千金のかざりもの

地(池)

「去年今年」春湖方

白魚や投網(とあみ)にあげた塵ながら

湖

可候文通 下総香取郡高萩里、石橋伝蔵、可候

御さがりにぬらして伸ぬ袖の皴

『青俵』尾陽素陽集

〔注〕蓬宇日記『此夕集 三十六』二月三日の記事に「尾張

素陽ぬしより一集到来」、同人の『梓上集』にも同日で「青

俵」の贈来メモがあり、「尾張今市場村、石田源助素陽主

より」とある。

指石・羽洲(ともに名古屋住)文通

空よりも山のミどりや初日出

風音ハ空にこそあれ窓の春

石(洲)

大虫(江戸住)文音

衾(ふすま)より頭出せバ遠齋(とほろづな)

虫

「露明り」大すり。是ハ晴霞多よめ(須賀川住、慶応元年

没) 追悼すり也。男桃丘より。清民(多代女高弟) 文音そふ。

(注) 「露明り」の大すりは、『俳諧摺』(須賀川市立博物館、平成十年刊) 所収の②「晴霞仏(多代) 追悼摺」に該当、嵐牛の悼句(嵐牛発句集) 所収も載る。奥は「慶応丙寅(二年) 仲秋 檀齋書(印「弘美」)」。左の句は、清民が文音に書き添えた吟。

行をしる夜の更よ様ふけやほしの空 清民

晴霞仏、早くも一めぐりにならんとする  
寂しさに、

目学問それにも月ハとゞまらず

尚多けれど略。弘美(江戸住) 文音。

寒う成日の表也筑波山

ものぐさもさすがに恥て宿のはる

義言文音、書もの頼来。

打かさね見るや春立松と竹

(注) 文久元年(一八六) 五月、三河国牛久保(豊川市)の「涼石居(完伍亭) 信友会」で蓬宇・義玄・完伍との四吟

歌仙で嵐牛は同座し、所収する『蓬宇連句帳 十四編』(文久元年奥) の巻末に通称が「義玄 同 八橋尾張二村山麓金子源兵衛隠居 在原寺看主」と記されている。尾張国愛知郡沓掛(現、豊明市)の人で、前号は宜彦。秋拳門。  
ミのゝ国、竹苗

遠近に鶯鳴や根津谷中

(注) 「美濃高富本庄侯藩士、丹羽竹苗雅子、江戸帰路來訪」(『此夕集 三十六』二月十日)。

見外(江戸住、菊守園) 方四季歌仙『竹ノ秋』能登竹外、  
『いそわかな』上毛千鳥連、皆、見外老次也。

二言とハいはぬそぶりや梅もらひ 外

そと山の風情尽すや枯を花 泰民

ぬれ色や鯖も松魚もけさの秋 梢雨

夕顔や神の宮もと垣一重 禾暁

染たのハ皆うつむいて唐がらし 鳳雛

『横文字早学』・『英米通語』、森人恵。初馬(掛川市) 春山父、卷持参。尚、スン(駿) 焼津人、雪堂の追善催卷、持参。川崎横町(牧之原市静波)へすりもの遣す。

(注)『横文字早学』は慶応二年(八六六)、横浜の錦港堂の刊行。『英米通語』は見返し題が「飛良賀奈英米通語」、元治元年(一八六四)、横浜の師岡屋伊兵衛(錦港堂)版。

廿九日、夜べ、小雨有。石川(伊達方、依平遺族)より申来反古、見分。大しま(磐田市豊浜)利兵衛ぬし、夜に入、来泊。

卅日、天気。江戸より『槻弓集』、「いなさ東風」といふ大摺も到来。大しま、書もの数葉。

春の水雁鴨鈍にミられけり 驢年

二言と八いはぬそぶりや梅もらひ 外

森社中より積山(前号乙雅)、迎に来泊。されどさハる事有て断。

(注)「東都菊守園(見外)より『槻弓集』到来、驢年よりすり物来る」(『此夕集 三十六』二月三十日)。「梓上集」によれば『槻弓集』は二十二編。

(慶応三年)三月一日、鈍天。山子、帰る。終日、人なし。庭花、雪とちる。

二日、曇。夜べ、小雨有。明て猶降。今日、人来らず。

一日閑を得たり。

三日、朝もやふかし。徳泉長風(月並催主)、来。平尾(菊川市)川田氏、来。いなり奉納句合、持参。タンノ(丹野、菊川市)ふじ丸、来泊。雨、降出。

おゝぞらに身やうかされて初ひばり 蒼山  
丸子、かへる。

四日、終日雨。松里(掛川住)・長風(月並催主)、来。石川(依平)反古之事申。浜松よりあつミヤ、書もの、是も長風、持来。

五日、快晴。川田氏巻、点に来。尚、書もの。湖山(成滝住、月並催主)、夕方来、大椎茸もらふ。

六日、天気。サ、原(磐田市笹原島)可応、来。小笠山(掛川市板沢、小笠神社)奉額巻、持参。昼方帰る。初馬より巻、取に来、返す。大坂(掛川市)菊吾使、月並奉灯巻、持参。即評。

七日、天気よし。山なし(袋井市)風竹(未詳)、原河(掛川市)奉灯巻、即評。さゝ原巻、評。

八日、天気。よべ、小雨有。秋葉山麓(犬居)生風より

卷、来。例之月並奉灯也。もり人、持来（る）試雪（森住）文音、社中待わぶと有。小出（菊川市）蕭風、来。九日、森連中へ発中。<sup>（杖）</sup>途中、雷・氷雨、難義。駿嘉<sup>（森）</sup>（森住）、「柿園門人録」参照・伊水（同上）・試雪、トワタ（戸綿）峠迄迎来。宿八例の駿嘉亭。其人々来話。上川原（森町草ヶ谷）皆介ぬしにあふ。駿嘉方にて酒肴出してもてなさる。夕方帰る。

十日、天気。今日、俳諧はじむ。飯田（森町）、一木氏石清、入門（「柿園門人録」参照）。其日も夕方より帰。人々大勢夜遊、更て皆帰。

（注）森滞在中に入門する石清や後出琴雅・露光ら遠州連中は、雪門の鳳洲編『日暮帖』（慶応三年）と『柿園評月並句合』（慶応年間）の両方に投句しているケースが多い。

十一日、天気。戸綿、齋藤<sup>（安）</sup>士口入門（「柿園門人録」参照）、俳諧はじむ。何れも同じく夜更迄連句、或ハほ句。猪原春城老（未詳）、来訪。石川（依平）之書もの二枚、遣す。同子、夜更帰。

十二日、天気よし。朝過、万ヤのぼたに（牡丹）見に誘

はる。円友・片風（山崎住）・多少、夕方帰。此夜、連多く、連句・ほ句、深更二及。

十三日、天気。石清・琴雅（天方住、「柿園門人録」参照）、来。則、雅子入門。多勢、深更皆帰。

十四日、朝、小雨。今朝、松魚来、賞味す。大二味有。頓に句、出来ず。弄我（向笠上村住、「柿園門人録」参照）・竹酔（竹之内住、「柿園門人録」参照）、飯田直喜（飯田住、「柿園門人録」参照）、来。乙雅（積山、「柿園門人録」参照）方赤飯二重貫ふ。喜子、よねまんぢう一重。夜、雨風つよく、雨もり。大勢深更ニおよぶ。

十五日、雨止、風強し。我・酔・雅・清・喜の五子、夜べの雨にとまり、今日も尚遊ぶ。谷川（ヤカワ、森町）露光、入門（「柿園門人録」参照）。

十六日、暁、いさゝか寒し。今日は「花供養」（芭蕉追善会）とて朝からにぎはふ。飯田直喜、カヤマ（菅間）青山（晴山）・丸山・秋山・松里<sup>（もんい）</sup>門入（以上、「柿園門人録」参照）、会凡十八人。

十七日、天気。川西内野（浜松市浜北区）人、評卷持参、

即評。スンプ人、来訪。弄我、来。竹酔、昨日より留杖。川西人、かへる。夜、露光・可樂(未詳)、来。今日八夜べ(昨夜)の勞れにて終日眠、夜まで臥。

(注) 内野の評卷は、杜水・嵐牛兩評「内野村氏神庚申永代奉額」(慶応3・3)の題で丁摺(二丁)を發行。川西は、天竜川以西をいう。

十八日、曇、小雨。朝より書もの。水音・尺波(ともに平字住)、来遊。皆、ほ句。雨も終日つよし。

十九日、雨晴、天気よし。今日も猶、内野人巻取に來。

廿日、朝晴。やがて曇。冰飛、むかさ(向笠、磐田市)

人評卷、持來。猶、聯式杖したゝむ。落墨。昨日、長風(徳泉住)來、クツベ(久津部、袋井市広岡)卷二卷評、書もの。円友(森住)、若鮎を送らる。夕酒、賞翫す。

波・音、ふ(た)り夜に入帰る。

廿一日、天気よし。今日、すん可(駿嘉)・試雪・乙雅同伴にて、飯田(森町)弘法堂に詣。猶、可睡齋、庭見物。

帰路、村松(袋井市)古山ぬし亭、牡丹見物、訪。あるじ大ニよろこび、茶・酒など出す。居合する人、村松五

郎兵衛・市場武太夫・川井(袋井市)人など、大勢酒席にぎはへり。牡丹四十余种といふ。そが中、黒牡(「丹」脱)有。いと珍らか也。終夜に入て帰る。

(注) 可睡齋は、袋井市久能にある曹洞宗の古刹。応永八年(二四〇)開創で、徳川家康により改称。遠州三山の二。

廿二日、毎日例の人々訪来、遊ぶ。得水(「柿園門人録」参照)・すん可(駿嘉)・積山(乙雅)・伊水・試雪・樂水(「柿園門人録」参照)・佩玉(同上)・鶴仙(以上、森住)の八子より年甫のほぎ事にとて熊皮送らる。たゞし、もミ革也。

廿三日、夜べより雨つよし。雅・喜、とまる。

落墨 村松氏にて句を望まれて、

見処も一輪づゝのぼたに(牡丹)かな

雅・喜、朝過帰る。雨止、天気よし。露光、来。今日、人少く、連句はか行。終日、人少すくなく静也。

廿四日、雨止、風つよし。天気よし。石清(飯田住)、来。山なし(袋井市)卷、評。村松々齋、初児を祝せと人々の言出れば、猶此松サヤしらぬ人にもあらざれば、

おひさきや今年をちよの初ミどり

としておくる。山なし巻、評。

(注) 森の松齋は常連ではないが、『柿園評月並(句合)』の慶応二年六月分などに句が見える。

廿五日、天気よし。蓮花寺詣。いとかみさびたる苔也。

築山などを(か)し、すべて一別かまへなどをかし。夜、

人々来。石清、糖一重、試雪、海雲一鉢。

(注) 蓮華寺は、森町大門にある行基開創の古刹。

廿六日、曇。未明の頃、鉦数鳴が聞なされバ、何故にや

とおもひつゝ不起。おきてきけば、「新町(森町森)火

事有」とさわぐ。よくく聞ば、古人五岳が蔵也。十年

の昔(安政四年・一八五七)、此処の大火有し事おもひ出ヅ。

二又(浜松市天竜区)石翠、来泊、「いかでも来よ」といふ。

廿七日、天気。今日、終日書もの。大二巻て頭痛。夕方

人々と釣に出、上気少々をさまる。今宵人少く、今日の

勞に早くふす。

廿八日、明方、又、例之かね鳴に驚、起出見るに、ほど

近き所、火ミゆる。聞バ、我宿の隣町也。されど、やが

て火納りければ、又臥す。天気よし。鹿島(浜松市天竜

区二俣町)秋江外三人、巻為し持人遣す。雨竹(二俣住)

添書、即評。夜に入、春月(岡津住)ぬし被見、酒肴持

参して出す。成たき(掛川市)一勢、城下ニ在とて来訪。

掛川へとて行。夜、人々来。

廿九日、晴。今日、帰杖せしととく起、夕方帰庵。

(慶応三年)四月一日、此程留主中、諸国文音。尾間箱館

中川徳左衛門葱玉『屑俵集』。上毛春海子『笛吹集』。琴

堂ぬし「屏山賦」、半切すり。

(注) 葱玉の通称は、定説では伊兵衛。「甲府春海生より

『笛吹集』到来」(『此夕集 三十六』九月十二日)。春海は

信州南佐久郡白田町の人で、直江姓を称する。本姓は荻原

氏で、通称庄蔵。地元の小林葛古や江戸の春湖、京の公成

などに師事、諸国を行脚、万延元年(一八六〇)、甲斐におい

て『笛吹集』を刊行。蒼山にも親炙した関係から、その伝

手で旧著『笛吹集』を送って来たのであらう。この後、拳

山と改号、翌四年六月四日、来訪する(矢羽勝幸「豪放俳

人直江金石」、「佐久の俳句史」参照)。

手ざはりもはじめてすゞし竹箒

春海

寒き夜の我罔両に逐れけり

琴堂

上毛大戸駅、一籟居、琴堂

七草も来ぬのに粥よ庵の春

葱玉

武州髻史、来訪。折節留主。書残されし句。

つたの細道

ちりがほや松原の中の遅ざくら

史

昨日、積山(乙雅)送り、今朝帰る。長風・湖山来、月並書。

(注)「髻史、武(州)深谷宿海老亭」(『明治八百題』明治二年)。長風・湖山はともに「柿園嵐牛評月並句合」本年三月分の催主。

二日、天気。川崎(牧之原市静波)橋夢、来訪。直に帰る。

三日、天気。やす、頭痛つよく、臥す。茶を子供等と俱に遊ぶ。

四日、天気よし。

五日、天気。長風(月並催主)、来。柳園(依平)反古、

しらぶ。尚、月並巻開。参野(浜松市南区)人来、巻か

へす。同人持来、大ツカ・ライマ(老間、ともに浜松市

南区)巻、鶴見稲荷(同上)奉額、預り。

六日、谷川(森町)、静岳ぬし、来訪。島田行、梅城・雪

香ぬし行、種々あたらう也。

七日、天気よし。大坂(掛川市)人来巻、即評。十二

十二月分すり並島田ちらし、横スカ(掛川市)行迄あと

(ら)う也。吉田(吉田町)人、書画持来。

八日、雨、今日八降。まかや(馬ヶ谷、袋井市宇刈)人

巻、即評。初馬(掛川市)人、おなじくヨコチ(横地、

菊川市)丹峯・湖山(月並催主)、来。森行書状、マカヤ

人ニあとらへ遣す。

九日、快晴。スンプ雨石、来。連句始。

十日、天気。石子、猶来。受所茶烟文音、年玉。ネギ島

(祢宜島、焼津市)孤舟子八万句合残巻、持来。新町擣齋

子、来。夜、孤子ニ遣す時鳥之句案。

十一日、曇。孤子、帰る。雨石、来。やす、今日、掛川

木町行。見付行書状、やす持行、喜町より差出す。八ツ

橋行書もの、本陣へ出す。島田習静より文通。花の句、来。かつをぶし一れん、来。ひるま、小雨降出。

(注)「八ッ橋行書もの」は二月廿八日の「義玄文音、書もの頼来」に応じ送ったもの。

十二日、雨。習静、通書したゝむ。丁海寺(菊川市)松寿、来。兼ての石川(依平)反古、わたす。猶、代料受取。

十三日、何羨(中泉住、前号秀学)より月並、来。返草、同酒ヤ人足に遣す。庭列(菊川市打上住)行巻、十湖行返草、もめんや桐雨(浜松住)行、皆、見付(磐田市)文所子へ差向出す。使スンプ雨石、買事序。其後、人來ず。今日ハ静也。書見。

十四日、天気。島田梅城月並。

十五日、天気。ヲイマ(老間)人三人、巻取に來。久登(金谷住)へ返草。先工案、竜光(浜松市東区)、旬夢・登山方巻、来。

十六日、快晴。中泉(磐田市)何羨より一言(磐田市)連巻、来。古宮老人、来。「禪録」、持來。酒、昼後帰ら

る。

十七日、天気よし。道原(焼津市)人來、茶烟(請所住)方書画帖、持來。尚、扇。又、古宮老人、来。湖山(月並催主)、来。

十八日、天気。雨石、帰來。先日之連句、満尾。昼後返る。上裁町二丁め三川(河)や龍次郎雨石、入門(柿園門人録)参照)。

十九日、快晴。道原人、秋葉(詣)より帰。請所書もの、ネギシマ(焼津市)巻、此人ニあとらへ遣す。俊夫案内にて欠川大夫、太田主殿君(資美、十四歳)、日坂八幡へ參詣之序とて立寄らる。こしかけ、茶・たばこ火、外侍衆二、三人、本陣沢野、御供連にたにざく望玉ふにつき、二葉したゝめ呈す。

(注)俊夫はこの年正月十四日の記事に見える歌の作者掛川宿問屋役人の木下氏であろう。

廿日、天気。富士丸(丹野住)、來訪。『其假』(板)判下書。去年点取もの出板すり、同封。

廿一日、曇。

廿二日、雨。人、来らず。小供大平に行て、板木持来。

〔注〕「大平」は「大坂や平助」の略記。この年二月廿四日の記事参照。

廿三日、雨止。鈍天。(曇) タシノ(丹野住富士丸)、『其俣』調にとて来、手伝ふ。森試雪、仏法僧の事、申来。五月中頃、さかり鳴よしなり。

仏法僧聞ほどもなく明にけり 雪

廿四日、快晴。丸、猶逗留。『其まゝ』調、夕方帰る。谷川(森町)露光来、小卷即評。

廿五日、小雨。今日ハ来らず。夕方、湖山(成滝住、月並催主)、来。朝、青水(同上)へ清書、為持遣す。夜雨。

廿六日、晴。見付喜平、大頭竜(神社、菊川市加茂)詣しとて来泊。夜雨。

廿七日、朝晴。喜平、帰る。

廿八日、晴。上毛いせを、来訪。付回し歌仙二卷、尚書もの頼まる。山花(掛川市千羽山鼻)へ宿る。

〔注〕「常陸太田内堀丁柴田牧太、いせを老人来遊」(蓬宇

日記「此夕集 三十六」四月廿六日)。

廿九日、いせを、又来。書もの・付、いたし遣す。尚、シマダ(島田市)梅城行、点取もの、景物、玉見(瀬戸住)へ返草、一記(藤枝住)へ景物もの一封、皆、いせをに頼遣す。五峯庵(杜水)文音、尚とゞけもの頼也。

さまざまの花見尽して更衣 五峰

浜松在、天新田(東区天王町)旅館、文山(豆州稲取住)文通。月の本社と有。昨冬、駿嘉方にて遇と有。此人、覚なし。

もゝさくや都と里のわかれ道 山

羽洲(名古屋住)文音、醉雨(同上)より之状、在中。

日直るや鷺の来て立春の水 洲

家に帰らんと東都をおもひ立日ハ、師走晦日也。をりしも春の立ければ

春と今朝ともに立たる旅路かな 醉雨

嵐牛老人を訪ふ

火に酔た顔のめでたし梅(の)花

蓬宇老人(を)訪ふ。ゆるくもの

がたりす

打かけて出迎れけり宵齋

〔注〕「尾張醉雨君、江戸より帰杖、来訪、風話」(『此夕集三十六』正月六日)。醉雨は本年正月十七日に既出。

気をつけてミレバつくばも更衣ころもが

芳泉

鳴といふ里にも住ん郭公ぼとぎ

佳節

秋田、雪貢集、等裁(江戸住)次

〔注〕「雪貢集」は『あきうり集』(慶応二年仲秋、等裁序)のことで、『秋田俳書大系 近世後期編』に翻刻所収。

広沼に水鶏鳴けりひと処くひな

栽

夕顔は瓢ひょうに成ぬ賜もの声

貢

『ひとへけし』粟地追善集、男柳坡ぬしよりさうち

〔注〕「名古屋柳坡ぬしより『一重けし集』到来」(『此夕集三十六』三月廿三日)。「ひとへけし 一重芥子 丁卯

三月廿三日 尾張一色柳坡主より見めくまる恵」(『梓上集』)。「風

牛糞句集」の(注37)参照。

きじ鳴やけぶり算へる朝の家

坡

『言の葉ぞめ』の小集、京蕪外(郷)より

〔注〕「京四条橋西詰、金吹屋蕪郷『言の葉初集』到来」

〔此夕集三十六〕三月廿九日。

明しらむ山より早し雉の声

郷

上泉(焼津市)『素朴追善集』、男弥太郎輯、見付より来。

友永(袋井市)連中奉額卷、到来。

卯花や露も歎かず昼に成

いせを

晦日、天氣。

(慶応三年)五月一日、快晴。見付波静・竹雨(掛川住)・

松里(同上)・長風(月並催主)、四月八閏月とて来(閏

月は五月)。夕方帰る。風、猶とまる。島田習静文音。此

頃男児まうけしとて、其祝句をとこひ、よこす。夕方、

雨ふり出。

二日、風、帰る。快晴。クツベ(久津部、袋井市)連中

卷、来。夕方、宮ノ一色(磐田市)露碩卷持参、とまる。

三日、碩卷評。杜水(見付住)行状、預遣す。昼方雨ふ

り出づ。島田習静、をの子まうけたりとて、一句祝すべ

く申来、則、祝之句、たにざくにしるし遣す。夜雨。

〔注〕「山本習静ぬし、をのこまうけたるを祝して／竹の子

やたけに成のも見るがうち 嵐牛」(自筆短冊)。

四日、快晴。雀子を放つ。夕方、又とらふ。

五日、曇。友永（袋井市）人巻、取に来。ヲカ山（袋井市）梅委卷持来、即評。書もの。

六日、天気。けふは人來ず。風つよく、凧よく上る。

（注）五月四日付の三千丸宛書簡（「風牛書簡集（二）ノ②」）参照。

七日、天気。山梨（袋井市）風竹卷、即評。大坂（掛川市）菊吾卷、即評。今日もいか（凧）上る。高はし井園より巻来。風竹卷、済し遣す。松里分来、小鮎ミやげ。

八日、昼方掛川出杖、夜に入帰庵。草臥る。

九日、曇。門口梅の実、落す。案内升数あり。

十日、雨。森試雪、来泊。入出（湖西市）久保田、今年還曆として付回し百韻卷、送らる。則、次員いたす。

（注）「久保田」は、「笠露 入出郷、久保田養碩」（卓池筆録「諸国人名録」A本）。

十一日、雨晴、快晴。昼方雪子かへる。

十二日、天気。高橋井園、来。なかつた橋、五倉主人（未詳）見舞。

十三日、雨。けふ八人來ず、静也。

十四日、曇。夜、大雨。

十五日、雨止、天気。

十六日、天気。江戸巍海士（未詳）来、たにざく望る。

朝の目は朝のまゝ也五月雨

海

十七日、雨。朝、大平（大坂屋平助）、板（木）持来。

十八日、大雨。長風（月並催主）、来泊。月並返草。可久

和（掛川市）連卷、即評。

十九日、快晴。風子、かへる。中泉・見付・大しま・横

須賀すべて、欠川・欠川在返草もの、頼遣す。犬る（浜

松市天竜区）卷、村伊（掛川の紙屋か、十二月廿日記事

参照）よりミがく月並草来る。三州岡崎伝馬町万や次郎

左衛門仙菊より評卷、是八日坂より。ナゴヤ諸子へ文音、

本丁壺丁め指石迄差出す。京芹舎・碩水・黙池・蕪外

ばせを堂（公成）行状、皆、ばせを堂志封ニ差向遣す。

夜に入り、江戸巍海、又来、たにざく望。

廿日、丹雅（西之谷住）、来。

廿一日、雨。

廿二日、快晴。文山、来。「白童子」(嵐牛別号)石印巻くわがま、頼被らゐ惠ゑ。ミつや老人(未詳)、来泊。夜、湖山(月並催主)、来。

(注) 文山は四月廿九日・八月十一日の記事参照。

廿三日、曇。ふじ丸(丹野住)、来泊。飯田(森町)石清・琴雅、来。森佩玉はいきく、巻持参、即評。小山(袋井市)人巻、即評。

廿四日、丸、帰る。

廿五日、天気。スンプ雨石、来。俳諧はじむ。中田(磐田市)人巻、即評。

(注) 右の「俳諧」は、「俳諧どめ連句一覽」参照。

廿六日、曇。石、半日遊あそび、面おもて(六句)行。

廿七日、雨。朝、浜松藩来、書もの頼。心ち不よろし宜からずして断る。長風(月並催主)、来。クツ部(袋井市)巻、評。月並清書。

廿八日、晴且曇。三州岡崎(惟)唯一男、江戸より帰、画、頼のたにざく七葉、書遣す。ヲカツ(岡津、掛川市)竹支と云人巻、即評。清風(各和住)、来。夕方帰る。太助、

トバノ(袋井市)金原へ遣、丸薬一巡り分来る。十王町(掛川市)巻、来。

(注) 惟一は千賀氏、後号可蛟、連尺町の呉服商で卓池門。晩年は不藏庵龍溪門の茶人として知られ、「茶道開花早まなび」(明治十一年刊)・「茶道為国弁」(同二十二年刊)の著書がある。男は伝十郎、俳号固抵(「拾山日記」「同人名録」)。「トバノ金原」は、「香奩帳」に「鳥羽野村、金原為舟」とある。元治二年二月六日の記事参照。

廿九日、十王巻、評。成たき(掛川市)青水巻、即評。尚、書もの。

(慶応三年)六月朔日、雨。上原(磐田市藤上原ふじかんばら)沢柳来、改名をもとむ。成蹊と改遣す。

二日、天気。スンプ雨石来、俳諧。疝腰いたみ、清太頼む。

(注) 雨石と五月廿五日に始めた両吟を継ぎ、満尾させたのであろう。

三日、石、帰る。シマダ習静、来。俳諧はじむ。青シマ(藤枝市)延松、役所行として立寄。快晴。又、清太、来。(注) 駿河国志太郡の下青島村など九ヶ村は、遠江国横須

賀藩の所領。

四日、静、俳諧。カクワ（各和）文月、来。書もの致し遣す。

五日、天気。静、俳諧。平宇（袋井市）水音・尺波、来泊。連句始。朝、川崎（牧之原市静波）坐釣訪ふ。

六日、曇。三子、風交。静子、昼方帰る。

七日、雨天気（訂正）。三子、帰る。（延）松、横須賀（掛川市）より、川（止め）心元なしとて立ながら（すぐに）行。薬師（浜松市東区）人巻、持来。

八日、天気。二又（浜松市天竜区）くに子（石翠妻）、来。

九日、雨。小山（袋井市）連巻、即評。

十日、天気。今日ハ（人）来ず、終日静也。

十一日、雨止。森試雪、来訪。犬る晓風文音。仏法僧聞きにとうながす。

夏草や植たほどなき花の数

嵐

聞た名の里に来にけり閑呼鳥

雪

十二日、今日も曇る。薬師人巻、持行。金指かなさし（浜松市北区引佐町）、山口や源右衛門巻、来。催主溪雪・琴思と

有。

（注）二月十二日記事に、「気賀、山口や源右衛門雪溪」とあり、「溪雪」は誤記。

十三日、天気。今日、平宇出杖。

十四日、俳諧。

（注）右の連句は、「慶応三卯水無月於水音宅興行」の嵐牛・水音・尺波三吟歌仙（「俳諧ども連句一覽」）。

廿五日、森連中へ移り、

（注）この間の作は「俳諧ども連句一覽」参照。

廿八日、岡津（掛川市）大庭小竹子へ移り、

（慶応三年）七月一日、岡津より帰庵。

二日、天気。和月（掛川住）巻・簫風（小出住）巻、評。

尚、処々之文音開。つくし臼杵うすきニ帰如渚（未詳）、留主

（二）来。書置「帖」の中、

炎天や椎が根に來て草臥くたがえる

渚

江戸桂堂驢年『初日集』、見外次つぎ

葉かげ迄ふかミをミするぼたに哉

驢年

寐ほうだいねてひとり身の四月哉

見外

(注)「江戸菊守園(見外)より『初日集』到来」(『此夕集三十六』六月十五日)。

三日、天気。川西、来。たに(「ざく」脱)たのむ。

四日、殊ニ暑し。人來らず。

五日、天気。馬良(未詳)・湖山(成滝住)卷、即評。け

ふハ子供等の七夕祭の色紙・たにざく造。

六日、天気。今朝ハ子供等、七夕のうた書にて、まだき

ら来、さわぐ。島田秋野氏夫並習静取、即評もの有。二

卷、久つべ(袋井市)連中卷、大サカ(掛川市)菊吾卷、

いづれも即評。

七日、曇。蕭風(小出住)・春園(中方住)・春彦(同上)、

尚、西谷(掛川市)小右衛門同伴。夜に入、帰る。杉谷

(掛川市)磯船(未詳)卷、持来。琴雅(天方住)、来泊。

八日、昼方白雨。琴雅、又雷におこられてとまる。杉谷

人來、卷預り置。

九日、雅、帰る。知碩(中野住)方句、来。書物持来、

預置。猶、書物数葉書。昼方かへる。夕方、いさゝか夕

立あり。夜、掛川西町連來、一卷即評。

十日、朝霧深し。スンプ雨石來、風交。森鶴千、盆会卷評。ナガヤ(長谷、菊川市)梧好卷、評。五百濟(掛川市上内田)人卷評。

(注)雨石との「風交」は、「俳諧どめ連句一覽」に収める両吟半歌仙であろう。

十一日、曇。小山人卷、即評。石、帰來、付句。夕方帰

る。江戸其常(鳥羽野住)文音。墨筆送らる。使、クツ

べ竹川也。竹川、色々書画持來。

十二日、天気。かやま(萱間、袋井市)人、來。

十三日、天気。此頃中、虫干。書物調。大二暑し。難義

也。

此間落墨。

十六日、島田より迎人、來。十七日、荷物先送。

十八日、島田出杖。金谷、朝五ッ過に行、清四郎(金谷

横町住)方ニ而梅春・月塘杯來、酒。夕方、漸大井川を

わたり、秋野氏(三)至。梅城・習静・笠霜、とくつど

ひ待居たり。

(注)「秋野氏」は、島田の雪香(吉之丞)亭。

十九日、俳諧始。雪香・砂白・梅城・習静・清節（島田宿桜島住）・松雨・無石・井田。

（注）以下、島田留杖中の連句は「俳諧どめ連句一覽」参照。

廿日、暑し。連衆来、俳諧。

廿一日、天気。竹香・梅城・習静・あるじ連。

廿二日、おなじ。

廿三日、暑し。今日、長徳寺（曹洞宗、島田市新田町）

に避暑、俳諧。

廿四日、天気。今日も寺に遊。

廿五日、おなじく。いさゝか曇たれば、いさゝかすゞし。

廿六日、朝より晴て暑し。松里（掛川住）、月並巻持来。

廿六夜にて社中一席、十四楼に集。延松（青島住）、来。

里・松、共に秋野氏宿。梅春来、即帰る。

二十七日、同天気。セト（瀬戸）人梅隣、来。長徳寺遊、

二子、夕方帰る。

廿八日、松里、朝帰。今日も長徳寺遊。小屋より雷鳴、

白雨。夕方、大ニすゞし。松、留杖。

廿九日、昨日、雨にて冷氣いさゝか覚。

（慶応三年）八月一日、セト流翠・宗高（焼津市）人、巻

持来、即評。両士、夕方帰る。夜、花火有。おもしろし。

夜既、鶏明近（鳴）二至る。

二日、けふ昼前、主も起出、人も来らねバ、夜べのつか

れ、眠勝（ねむりがち）に過ぐ。

三日、延松、来。昼方桜島行。終日終夜連句、或ほ句。

夜半帰る。

四日、朝、村雨有。月彦（藤枝市兵太夫住）、来。九如

ぬしも夕方より来。

五日、夜雨有。明方、殊ニつよし。去故にや、大井川と

まれりといふ。今日ハ家に帰らんとせしを、川水まされ

りとハいかに。せん方なし。「朕が心にも叶はぬもの、山

法師とかも川の水」、とのたまれし（ひ）などおもひ出るもかし

こかれと。

六日、今日ハ是非早朝帰宅せんと疾起出しを、大井川と

まれりと聞バ、是亦せん方なくとゞまる。夜に入、閑取

小野川、遊に來。酒・小唄・三味線などよくせられて、

更たけるまで遊て帰らる。弟子などつれ来り、相伴人など多く、大ニにぎはへり。

七日、快晴。今日、人ニさそはれて大すまう見に行。場処、大井川原にて、風ハあれど、石原ほめきつよし。七ツ（午後四時頃）前、打出し。帰路暑し。今日ハ大ニ草臥て、宵より臥。

〔注〕「金谷町史 資料編二 近世」六九二ページに、「角力せわ人／町内中老」が「番生寺村／御衆中様」宛ての「六百拾壹文」の費用を受納した、八月廿二日付けの証文「角力世話人金子請取覚」が収められる。小野川は筑後国山本郡出身、本名森光（のち川村）幾藏。前の醜名は虹ヶ嶽柚右衛門。この年十一月、東関脇、五勝四敗一休が最終の記録（「相撲人名鑑」）。この年の「俳諧どめ」に、

文月十八日初メ 於有嘉園興行／両吟

角力取に近付出来て盆の月

習静

大事々々におろす初薯蕷

嵐牛

以下の歌仙が収められる。

八日、今日、帰路におもむかんとてとく起出。川原、猶小夜中山暑し。昼、帰庵。

九日、朝曇りす。水音（平宇住）、風交に来泊。

〔注〕「風交」は、「俳諧どめ連句一覽」参照。

十日、未明、やす、ヒサマリ神事詣。此頃中、留主へ来りし巻ども評す。

〔注〕「ヒサマリ神事」は比佐麻利命を祭神とする矢奈比売神社（見付天神）の行事。福田で浜垢離をした氏子たちが、八月十日、宵闇の天神境内をふんどし姿で乱舞（鬼踊りと称する）、その後、灯火を消した町内の闇のなか神輿をかついで総社、淡海国玉神社に走り込む。奇祭で有名。

十一日、天気。おなじく評。湖山（成滝住、月並催主）、夕方来、帰る。豆州文山、来。暫はなし。是も夕方帰る。月よし。音子とともに句をおもふ。

〔注〕豆州文山はこの年四月廿九日記事参照。

十二日、朝すゞし。湖山、又来。八幡奉額巻評、取（に）来。

十三日、天気。句案。夜更而、月清光。

十四日、天気。夜、八幡宮詣、音子同杖。

十五日、暑し。中田（磐田市）維石外彦人、飯田なほき

(直喜)、来。水音、帰る。丹峯(横地住)も来。

十六日、天気。フ(府)中雨石来、風交始。秋葉山麓暁嵐、使来。

(注)「風交」は、「俳諧とめ連句一覽」参照。

十七日、夕立。一色(焼津市)人、巻持来。

十八日、一色巻、評。

十九日、天気。石、浜松迄とて出て行。久しぶりでなし。今日ハ静也。明方より雨、永々降。

廿日、夜べより小雨、尚降。

廿一日、雨。前野(磐田市)玉寿評巻、持泊。

廿二日、同じく雨。寿子、帰。初馬(掛川市)人評、持参。

廿三日、溝口時三郎(其常、鳥羽野住)、来訪。腰かけにて帰。カヤマ(萱間)人、二人来。

【備考】以下、「カクワ清風持来横須賀御触之写しヲ又写」として来八月一日より実施する関所規定の変更についで横須賀藩の御触れを書き留めるが、省略に従う。なお、各和は横須賀藩と旗本久保田氏の相給(掛

川市史 中巻)。

清風、夕方かへる。

廿四日、雨晴。八月一日頃か、三州吉田辺、伊勢御被(お札)降さた有。又五日頃、浜松辺降、夫(に)引つゞき、中泉・見付(ともに磐田市)降て、彼地、もちを搗、又蒔銭杯いたし、大ニにぎはへりとの沙汰聞うち、掛川処々へ降は、いせハもと(よ)り、秋葉山、又ハ金比ら・住吉大明神の御札降しよし。此節は殊ニにぎはひ、町々宮をかざり、酒樽かゞミをぬき、旅人ふ(る)まひ、又、まき銭いたし、若人杯ハさまぐ異形なの形をなし、旅人を駕にのせ、大ニさわがしかりと聞。今日廿四日、日坂宿之人々、おかげ参りとて、門出したるよし。一昨日、其常のはなし、江尻(静岡市清水区)・府中(静岡市葵区)も降しよし也。又、森(森町)・山梨(袋井市)、又近在にも早降し処も有よし也。三州岡崎在、上佐々木村(岡崎市)、太田太郎右衛門楚江といふ人、巻おくれり。夜に入、欠川人等彼のおかげ参とて、日坂八幡宮へ参詣とて蒔銭杯いたし、さまぐ形をつくり、三味線を引、

大勢来。

〔注〕渡辺和敏著『ええじゃないか』（あるむ・二〇〇一年）などによると、七月十四日七ツ時分、三河国大西村の多治郎屋敷に御札が降ったのが最初とされる。近隣、吉田の蓬宇日記『此夕集 三十六』には、六日後、七月廿日の記事に「松島新田之宮前に御祓降て、いはひとて広岩家ニよバるゝ」とある。「掛川市史 中巻」に紹介される『御賀げ帳』によれば、八月九日、三州吉田の天王宮に伊勢神宮と秋葉三尺坊の御札、八月十日、浜松の神明に大神宮の御姿・御祓のお札、十四日から廿一日にかけては森の各処に大神宮の御札が降ったという。『金谷町史 資料編二 近世』に収録される鷺山次右衛門著『万附込控帳』（慶応三年）には、「九月上旬方諸々神々様御札ふり、西辺者八月方ふり候趣、掛川辺者八月末方九月上旬、日坂辺茂金谷宿村田屋・会所藤屋者九日前後ニふり、云々」と記される。

廿五日、曇。岡崎在、上佐々木村行巻、評。夜べ（昨夜）、山花（掛川市千羽山鼻）へも、二所御祓降しといふ。成滝（掛川市）へも降と聞。夜、大ニにぎはふ。夜、雨降出。

廿六日、雨。新田原（未詳）へも降しと也。こは今朝の事か。昨日、高橋（菊川市）より虚空藏奉額巻、今日、点はじめ。昼より森人、巻持参、即評。夜に入帰る。夜、大ニ雨降。

廿七日、尚、雨不止。されど小降也。松前春潮（未詳）文音、すりもの送る。使則門人春溪、夕暮（二）及べばとめる。夜雨。

廿八日、猶降。湊子、尚、留杖。今日ハ大井川とまれば也。書画、裏打はじめ。春潮が吟。

金水や露を粧の花ごころ

潮

深見（袋井市）人露川巻持来、預り置。本所村（掛川市）、御札降。御札さわぎ、寺ヶ谷（掛川市本所）へ来、娘ども男髪、大たぶさに白手拭鉢巻、角力のかたち、尤長刀一腰ぶつ込だり。幟、笠鉾を先に立、其あと皆つゞき、かの男ども扇を持ってをどる。今日ハ日坂、処々へ降。

廿九日、夜べより雨。朝、猶、暫しつよし。湊子、裏打。クツベ（袋井市）巻、即評。スンプ雨石帰、来泊。夜雨。晦日、朝雨。溪、唐紙張、雨石連句。夜、おかげいはひ

の若人来、をどる。伊達方ニ而見。猶、牛頭村ごうずよりも来たりしなれど、更たれば行ず。

(慶応三年九月)朔日、細倉謙左衛門蕉露といふ方、掛川本陣泊にて、使侍来、「本陣迄」といはれたれど、少々気分あしければ、断申遣す。高橋(菊川市)井園より使、卷遣す。猶、あと巻も来。

尾州有松、橋本有橋文通、書もの申来。使之人、江戸行、直に木曾路を帰るとて、「直に書ものせよ」といふ。則、書て遣す。此夜、おも家へ秋葉山御札降。

明たての襖に出来て秋の風

橋

(注)蕉露は、贈来した京の蕪郷編『言の葉ぞめ』に序を寄せている。蓬宇日記『此夕集 三十六』八月二十八日の記事に、「夜、細倉蕉露大人来訪。やがて羽洲・杜堂・言」と共に御旅館升屋に伺堂して亥のかしら(午後九時頃)まで風談」とある。『柳営補任』(『大日本近世史料』)によると、同人は文久二年(一八六二)に御勘定吟味方改役並出役、翌三年(一八六三)に浦賀奉行支配組頭、元治元子(一八六四)四月七日に天守番之頭、同年五月廿九日に二条御城御門番之頭格となり、慶応二年(一八六六)九月、二条城の

警固が見回組に一任され、二条城御城番組が廃止、任を解かれて江戸に下る途中、来訪。在洛中、同門後輩の拾山と交流、その紹介で蓬宇や嵐牛を訪ねたのであろう。

二日、曇る。今日ハ彼御札之祝ひとて、町中集(り)、大さわぎ始る。日坂人等も多く来る。終日をどる。夜に入、寺ヶ谷・日坂数々をどり、夜もゐねらず。

三日、天気よし。江戸蕉露来訪、はなす。京都芹舎ノ談ことにをかし。例のにはか、今日もさわがし。土牛(未詳)・丹峯(横地住)来、雨石かへる。

四日、曇る。春溪、江戸へ立。

都の知己をうしろに旅立ける、大津にて、

うそ寒や山一ッ越ふたつ越

蕉露

松里(掛川住)来、月並巻掛。十湖(中善地住)、来泊。

(注)蕉露には次の近詠句がある。

洛の良夜に又あふ事のありやなしとおもへば

明月やあかぬ木の影山の形なり

エド蕉露

(淡節編『四時行』慶応三年葉月序)

六日、天気。湖子帰る。古宮老人、来。折々小雨。夜ハ

人なく、静也。

七日、小雨。板沢（掛川市）巻、評。梅城（島田住）文音。封中一記（藤枝住）、又、京方良大。

秋立や眼も及ばねど京の山 大

八日、天気。（秋葉山）麓曉嵐文音、巻。梅城へ昨日の返翰。

九日、快晴。尾半田、小栗六郎錦水頼書たのみもの、直に封す。向カ（？）ヒ老母来、酒。

（注）錦水は小栗伯圭の六男。俗名末吉、のち六平。兄も豊水と号して俳諧をよくした（『半田市誌 文芸篇』）。「向カヒ」は「川向」で、日坂の小字であろう。

十日、曇。麓巻評。見付桂子女、文音。

時鳥待しも過て秋もたつ 子

夜、裸多く通行。

十一日、曇。終日来らず、静也。夜ハ例の裸参りにて、門さわがし。半田行状、日坂出し。

十二日、快晴。川崎（牧之原市静波）目勝文音。「こゝろおくれを嘆くことバ」てふ文詞をおくらる。

十三日、曇。月くらし。

十四日、快晴。「領家（掛川市）〆巻、預り置。ふじ丸来泊。

十五日、晴。

皆溜り蓮の奥にやしミづ哉 春湖

蓮のかのいふ計なしひるね起 同

世田谷びたる豪徳禅寺に宿して、環溪禅師

に呈す

米つきに慧能えのう居るべき茂かな（以上、「内朱筆」拾山集、加賀柏葉集、到来。但、杜水（見付住）〆来。

（注）春湖は「江戸三老」の一人。環溪は春湖の俳友で雪主と俳号。この年、慶応三年七月、武州世田谷の豪徳寺から城州宇治の興聖寺に転住、江戸新川河岸の酒問屋百丈の十七回忌追善集「菩提子」（息莫作庵三水編、八月春湖跋）

に、洞上沙門環溪と署名する序を草しているので、春湖の文端に添えられた近詠を書き留めたのであろう。慧能（六

三六〇七三）は中国禅宗の第六祖で、禅宗の大成者。出家直

後、文字が読めなかつたため、行者あんじやとして寺の米搗きに從事した。——なお、環溪は明治四年、曹洞宗大本山永平寺

の任職となり、翌五年には新政府の教部省から七宗と禅三派の管長、大教正を命ぜられ、明治六年三月末、俳諧師も教導職に登用すべきことを建白する——。

到来の二集については蓬宇の『此夕集 三十六』に、「拾山集、加州牧野柏葉ぬしより『浅野川』到来。六月卅日出、羽洲転致」(八月十三日)、「遠江浅羽郷知碩生より来状、此便ニ柏葉子之集、杜水子へ転致」(八月廿二日)との記事が見え、同人の『梓上集』には「感得集 慶応三年丁卯四月／洛白鱗舎(拾山)より見贈おくら」との書留がある。名古屋の羽洲、吉田の蓬宇、見付の杜水経由で届いた模様。『浅野川』(題簽「あさの川」)は犁春編で、慶応三年二月自序。

十六日、快晴。南部盛岡、於おそ曾啓之丞、此しい一文音。甲斐嵐外廿三回追善集、送らる。蟻道といふ人、同封書状有。国なし。蟻道といふ人、いまだしらず。右集をおしてミるに、前に同じ名の人有、是にや。いかゞ。

明安き夜にも入なり海の月  
葉  
鶯こほりや知らぬ郡こほりもゐれば鳴  
蟻道

(注)「南部盛岡於曾此一君より『花の塵集』到来」(此夕

集三十六)九月十七日)。題簽は「花のちり」、四月春湖序。

十七日、晴。此間、日記おこたる。

十八日、スルガ小川こがは(焼津市)人、来。巻評、申来。掛川へ泊中、シノバ(篠場、掛川市)連巻、来。

十九日、小川人、帰る。巻評取来、遣す。尚、上泉(焼津市)・大石(菊川市)行、京より之書状、あとらへ遣す。見付より取次、福田みづで(磐田市)巻、来。

廿日、天気よし。人來らず、終日閑を得たり。

廿一日、天気。

廿二日、おなじく。

廿三日、天気。夕方、見付権作殿、用事とて金谷へ行。

廿四日、天気。横須賀(掛川市)、立石葛谷、来訪。見付苗屋、金谷へ行とて立寄、金山寺豆売る。

(注)葛谷との両吟歌仙を巻くか(俳諧どめ連句一覽)。

廿五日、快晴。古宮老人、三門みわた(袋井市)太郎右衛門翁  
同伴にて来泊。

廿六日、朝、小雨。猶、曇。

廿〔七日〕の二字脱か) 横須賀出杖して

(慶応三年) 十月九日、帰杖。掛川のすく(宿) (留) 召かる。

十日、人なし。静也。されど長風(徳泉住、月並催主) 来り、月並清書、頼遣す。

十一日、雨。

十二日、天気。翁忌。人、来らず。会津人傘雫、代人を以(「て」脱) 奉書もの等遣し、夜分書遣す。此夜しぐれ。

(注) 「会津人、神屋傘雫主、来訪」(『此夕集 三十六』十月十一日)。

十三日、今日、朝方時雨止、天気。

十四日、犬居(浜松市天竜区) 暁風文音。平台(へいだい)(兵藤氏、掛川住)、京坂紀行之吟ども、来。

十六日、平宇(ひらう)(袋井市) 水音ぬし方、出杖。是、此頃中帰杖儀も、風邪くらゝにて、日記おこたり。

(注) 平宇では、遊歴中の拾山が見付から来て同座、拾山・嵐牛・尺波・水音・其常(途中から)の五吟二巻を巻く

が、前者は三十二句、後者は三十一句と、体調不良のためいずれも未滿に終わっている(『俳諧どめ』)。

(慶応三年) 十一月八日、天気。東西文通、開封。

『見つき、つ集』尾張素水(八月十三日)。『あすの反古』同華岳(同上)。『北日和集』加賀金沢悠平(九月廿七日)。

『人真似』兔尺改卓志、京祇園新地薬湯町富永町上る(八月十三日)。『下陰(木がくれ)集』信州飯田荒町等覺寺裏門通、不爭庵木甫(十月廿二日)。『御慶帖 二編』、上

毛大戸宿、一籟居琴堂。大江舎、又行庵(酒雄)次(九月十二日)。

(注) 「大江舎」は「貫宇 武州忍、池田氏」(『蓬宇連句帳 十一編』)。( )内の月日は、『此夕集』記事での到着日。

町中へ聞ゆる様になる子かな 羽洲

八生(やへなり)や花かと思えてたうがらし 酔雨

のりそだ師さしてへらしぬ秋の海 五峰(杜水)

「一匹くるへば、千疋の馬とて狂ふ」とかや。若き人にさそはれ、こゝかしこ遊山しめぐりて

老松も若者だてのミどりかな

鳥さし料に成べき竹は、まれ成もの也。弓にも  
笛にも直成すくこそよけれ。ゆがみたるハ、竹馬に  
も成がたし

くせ馬かゆがみてのらぬことし竹

右二章、雛屋立圍画賛也。横須賀(掛川市)普文寺(門)にて  
一見。昨日より風邪にて引入。

(注) 普門寺は、行基開創の古刹。法相宗のち天台宗。  
九日、十日、人来ず。

十一日、溝口其常(鳥羽野住)来泊、終夜咄。

十二日、昼立にて、常子いそぐ。

十三日、甲州来、駿ふじ郡人之巻持来、即評。三州御油  
人巻、尚、書もの送。

十四日、天気。一記(藤枝住)、集紙之事、書状来。

十五日、天気、昼方雨。長風(月並催主)、来。大池(掛  
川市)奉額、即評。

十六日、天気。人、来らず。一記文通、返書。

十七日、曇。江戸きく守(見外)、『つき弓集』、おくら

る。平尾(菊川市)三平巻、同西ノ谷(掛川市)竹雅巻、  
是ハ即評。

十八日、快晴。灸。十湖(中善地住)、来泊。

十九日、十湖、昼方じん帰。ナゴヤ・京書状、見付宛、(白  
鱗)舎拾山迄頼遣す。今時集、六巻かし遣す。

(注) 拾山宛書状は贈与された『感得集』の礼状で、見付  
住の杜水經由の逆ルートを利用。「十一月十九日/一夜夏

書 ナゴヤミヤゲ 何問答 ひと夜問答 軒合六編 か  
なへ集 都すべ 六巻 へ十湖」(慶応三卯霜月/書籍貸借  
控)。

此間、又、落筆。

廿三日、瀬戸(藤枝市)巻、来。日坂本陣事二つきて、  
いと女、来。

廿四日、快晴。今日ハ中西(牧之原市)。天気、よろこば  
し。

又、落筆。

廿八日、流翠(瀬戸住)帰、巻遣す。尚、梅城(島田  
住)・玉見(瀬戸住)書状、頼遣す。本陣家内一条に付、

日坂出杖。島田より紙来、ちん(簀)。

(注)「紙来」は、十一月十四日、同十六日の記事を参照。

廿九日、天気。やす、たるき(垂木、掛川市)へ行。素涼(大島住)来泊。

卅日、天気。素涼、帰。夜雨。

(慶応三年)極月一日、長風(月並催主)、来泊。本陣主人来、夜帰。

二日、天気。やす、垂木へ行。岩滑(掛川市)、来。長

風、帰。見付より文音とゞけもの、土前(名古屋住)集『顧月集』、柿谷・芝椿企。

(注)「尾張星崎芝椿・柿谷之両士より『顧月集』見恵」(『此夕集 三十六』十一月廿六日)。芝椿は土前養子で、永

井荷風の祖父。

朝毎にわたりぞめ也霜の橋

土前

庭はきハにくさうにいふしぐれ哉

十二童三橋

折々ハ畳にもちるもミぢ哉

柿谷

川風のこもりてぬけぬ頭巾かな

芝椿

三日、吉田(豊橋市)文音。

初しぐれ雨のちからもかはりけり 蓬宇

三州足助(豊田市)、池田や七右衛門殿文音。隠居塞馬老、八月より不快、霜月廿四日遠行之由、訃音なり。八十六、七にもや成けん。

(注)塞馬は板倉氏、卓池門。享年は八十。嵐牛亭には二度来遊(深津三郎編『板倉塞馬全集』『続板倉塞馬全集』)。

ミの高富侯内、丹羽静一郎竹苗文通。去(日)、留主宅へたにざく置行、此催促状なり。

(注)竹苗は本年二月二十八日、留守中に来訪。菊雄輯『化開人名録』(明治九年)には、「岐阜県管下美濃国第八大区山

県郡三小区高富郷二番地 丹羽副次 号翠蓋処 竹苗」とある。

火の酔ハさむるも早し鳴千鳥 竹苗

四日、やす、たるき行。

五日、天気よし。玉見(瀬戸住)文音、「行かりの」ゝ句遣す。

六日、同じく天気。スンプ雨石来、風交始む。深更におよぶ。○平台(掛川住)文音、ほ句有。朱引して返す。

七日、夜べよりかけて小雨有。石、尚、風交。

八日、天気よし。石、猶風交。春園（中方住）来、句評。

九日、風立寒し。石、見付へ行。新川柳月（磐田市鮫島住）砂糖一瓶送らる。横地（菊川市）丹峯、来。

十日、むかさ（向笠、磐田市）人、来。書もの、頼まる。

十一日、時三郎殿（其常）家来、江戸より帰、来泊。金箔十八枚、大硯とゞく。使、久つべ（袋井市）人。

十二日、曇。久つべ人、有。梅城（島田住）文音。昨日の其常文音、開。

箱根 しぐれにハさしかまひなし不二の山 常

十三日、曇。おもや、すゝはき。

十四日、夜べより大雨。されど寒ゆらぐ。人來らず静。書見。

十五日、猶、雨。平野（掛川市）連卷、評。雨石帰、来。夕方、雨ハやし。

十六日、簫風（小出住）、来。

十七日、森試雪、来泊。タンノ（丹野住富士丸）も来。夜に入、帰る。己が句集遣す。

十八日、雪、帰る。己も掛川迄同伴。唐紙、村伊にて買入。欠川木町連きまちより卷。

十九日、天気。書物ちり払。スン（駿）月彦（兵太夫住）より卷、来。江戸、其常子より筆、来る。使ハ御やしき人成よし。

廿日、木半（木町連のことか）への卷、返す。使、小平源作。唐紙（競合）せらふ。村伊方買入。藤枝一記（まひる）書付参。金式両一分式朱渡す。使、島田宿、紙ヤ吉藏。尤、請取書取置（とりおき）。

（注）集の紙についての関係記事は、十一月十四日、同十六日、同二十八日の記事を参照。

【備考】この年十二月九日、朝廷は王政復古の大号令を発し、幕府は廃され、有栖川宮熾仁親王（たろひと）が総裁となり、新政府が成立。十二月十二日、將軍慶喜が京都の二条城を退去し、大坂城に入る（『日本近世史年表』）。

以下には、翌四年、京都の新政府から掛川藩や地方代官に発せられ、森の西脇役所から領地の名主宛に回達した達書・触書などを写すが、省略に従う。

慶応四(年) 戊辰

元日、快晴。

二日、おなじく。

三日、おなじく。セト玉見より使。年玉紙、去年おこせし歳旦すり、匂合の巻、取に來。是ハ去年暮、日坂本陣迄出せしを、いかに違しにや、使之人を本陣へよらす。

猶、去年知碩(中野住)より聞、京ばせを堂(公成)よりの大封、是も違て兵太夫(藤枝市)赤堀八藏方へ行を、

此序ついでおくり來。今日ハはつ子なれど、去年暮より腰いたみ、歩行覚束なくて行ず止む。

四日、天気。人來らず。江戸瀬戸物町島屋すけゑもん佐右衛門(三

度飛脚)思樂文通。一封之中、余滴庵(芳泉)より番付、

(本町)日本町二丁目樽華兄、歳旦小すり、杜水行同封ニ有。猶、思樂より番付、來。

(注)「多湖思樂老人より十一月四日出、番付四種到來」

『此夕集 三十六』十一月十八日。嵐牛の名が見える番付は、①万延元年(二八六〇)東都鬼遊堂発行の「段付無懸直」(青木美智男編『決定版 番付集成』所収)、②文久二年

(二八六二)発行の「現存名家鑑」(林英夫・芳賀登編『番付集

成』所収)、③慶応三年(二八六七)正月滑稽山人発行の「例

の戲」(青木美智男編『決定版 番付集成』所収)、④発行

年次未詳の「正風俳家鑑」(八段から初段までで、東西に

分けず)の四点を確認でき、嵐牛にもたらされた番付は③

であろう。華兄の住所「日本町二丁目」は誤記。『辨明治八

百題』(明治二年)に「東京本丁、樽氏」などあるのが

正しい。

方今形勢

行としや上方へむく馬の尻

樂

示文端、奥スカ川清民、当月九日没す、と有。此人旧知

己、近き頃わきて親しき文音有しを、あゝあはれく。

若水や人より先の汲くみくら

芳泉

扱々あまりにはかに計也

花のはる人も言葉のほひ哉

華兄

ちどり見たけしきほうせて磯の梅

中方なかばう(掛川市)連すりもの到来。是ハ春園、持來。園子

書もの頼、即書遣す。今朝、太助、金谷年礼、梅春へ文

通。則、返事來。伊豆三島宿、山本猪三郎玉光文通。

鳶二つ一日舞て春(の)空

春

五日、落墨。ふじ丸(丹野住)年礼。

六日、春水(中泉住)年頭。千広(大坂住)同、丹峯(横

地住)同。

七日、天気能。直樹(飯田住、直喜)年礼。猶、「雛合」

持参。ふじ丸、帰。新阪斎十、本陣今午年礼。夜、雪降。

八日、天気よし。風烈しく寒し。平台(掛川住)年始、

咄し。当三日昼頃を伏見にて、京方薩州・土州・越前・

尾張・加藩・宇和島、関東方一橋・会津・紀州・若州・

桑名、関東方伏見へ御出御、二三陣迄会津之手にて打勝

候所、山崎に控し長州勢打かゝり、是手にて関東<sup>(総)</sup>双敗軍

に成しと也。猶、伏見は自焼に被<sub>レ</sub>成候由、大阪は敵を焼

しと也。大阪へ御引取之処、京方よりおしかゝり候由也。

(注) 一月三日、旧幕府軍、鳥羽・伏見で鹿児島・萩藩兵

と戦い敗れる(一月四日 鳥羽・伏見の戦。戊辰戦争お

こる)(『近代日本総合年表』)。

九日、天気。猶、風はげし。

十日、見付より文音。東西とゞけもの、ばせを堂(公成)

『花供養』。猶、吉野可樵遺稿集。『落穂集』、木甫より送  
らる。是ハ青坡居士(卓池門)追福集也。五峯(杜水)  
より小すり式。

(注) 「可樵 永田氏、称藤兵衛、深茂亭と号す、大和吉野  
人で嘉永年中(没)」。『新選俳諧年表』。「信州飯田社中よ  
り『落穂集』到来」。「此夕集 三十六」十二月廿日。『落  
穂集』は『続板倉塞馬全集』に翻刻所収。

来てとまる鳥も替りぬ枯柳 成

木は火や毬栗一ツもえのこる 甫

関くる日や落葉の霜の乾く音 武栗

掃てとる軒端のちりやゆきの朝 葵悠

あいさつもざつとして置寒かな 青圃

「六十にして五十九(の)非」と荘

子の言ハしらず。己、今春、其齡を

重ねて

いはひけり今年ハわけて御代(の)春 波同

(注) 「五十<sup>ニシテ</sup>而四十九年之非ヲ知ル」(『童観抄』、原典は

『淮南子』)。

初雪や朝の心を降のぼし

羽洲

梅程に香をあらせし福寿草

五峰

十一日、天気。曉嵐(犬居住)・砧台(未詳)来、秋葉奉  
灯卷、即評。唐紙半切式枚、月爪(秋葉山中住)へあと  
らへ。長風(月並催主)、来泊。

十二日、おなじく天気よし。

十三日、知碩(中野住)、来泊。夜雨。

十四日、雨、昼後より止。碩子、逗留。

十五日、欠川、よる頃、碩同伴。松里(掛川住)来、点。

猶、川西長鶴(浜松市東区)人、来泊、即評一卷。

十六日、やす、見付行。長鶴人、帰る。葛谷(横須賀住)

文音。

十七日、天気、風寒し。人來らず静也。夜、本所(掛川

市)火災有。

十八日、快晴。朝ぬくし。そのがや(掛川市)火災。

十九日、廿日、西ノ谷(掛川市)人来、評。

廿一日、やす、返る。(婦)吉原(富士市)在人文音、評・書

もの。籥風(小出住)年礼。

廿二日、天気、寒し。岩滑(掛川市)中村(森町)年礼。

三島在、伊豆佐野村(伊豆市佐野)、勝俣猶右衛門連水、

家之裏に滝有とて滝の句、乞おこす。

(注)富士山の自句百句を収めた『雲霧集』(明治二十六年

犁春序)の奥に「文音所 伊豆国君沢郡北上村大字佐野三

十六番地 勝俣連水ノ号滝之本」とある。『勝俣文庫目録・

郷土館所蔵図書目録・教育関係図書目録』(三島市郷土館

編、一九八四年)および『嵐牛発句集』の(注15)参照。

廿三日、吉原在巻、本陣へ向、出す。江戸人方雄といふ

歌人訪ふ。たにざく二葉書置行。尚、好二付、依平先生

たにざく一葉遣す。横町(金谷)清四郎年始。江戸其常

(鳥羽野住)文通、筆三本送らる。直様遣ひみるに快し。

岩滑・中村年始。

(注)「山田方雄 越中富山、大正七年没(86)、鉄胤ほか

門」(『和学者総覧』)。

廿四日、快晴、風有。丹峯(横地住)とふ。

廿五日、清風(各和住)来。羽洲(名古屋住)、見付より

文音。

廿六日、今日までふじ丸(丹野住)風交。猶、見付へ出

杖せんとするに、丸、同杖せんといふ。

廿七日、五峰庵（杜水、見付住）風交始、羽洲・章和あ  
るじ。

〔注〕羽洲の住所・俗名は「尾張名古屋杉之長島町東へ入  
松浦九右衛門」〔蓬字連句帳 廿一編冬〕。俳諧は芝石・  
而后・土前に学んだが、卓池の指導も仰ぎ、その縁で親交  
があった。別号六松庵。のち羽洲園徂康と改める。章和の  
住所などは、「同（尾張名古屋杉ノ町）七間町東へ入 田  
島屋儀助」〔蓬字連句帳 廿一編〕。

廿八日、太田（磐田市）引杖。

〔慶応四年〕二月五日、風交済、帰庵。羽洲・章和同杖、  
欠川に日ぐれ。大ニ勞れ、掛川より駕にて帰庵。

六日より風交始。

十一日、風交済。小夜中山に遊ぶ。

十三日、羽・章二子、見付へ帰る。御油六洞（未詳）へ  
返草外文音。皆、章・羽にあつらふ。

〔注〕羽洲・章和は二月十六日〜十八日、三河国吉田に滞  
在、十九日、名古屋へ帰杖（『此夕集 三十七』）。

十四日、天気。森（森町）人積山・楽水・試雪、むかさ

〔磐田市〕竹酔来泊。

十五日、泊人四人、今朝帰杖。

十七日、曇。

十八日、雨。相良（牧之原市）野乙老、来。中泉（磐田  
市）白花文音。

十九日、曇。カクワ（掛川市）清風、来。犬る（浜松市  
天竜区）生風より巻。

廿日、晴。今日ハ森出杖とおもひしを腰いたみ、見合す。  
夜に雨。

廿一日、つとめて猶降。

廿二日、曇。タンノ（丹野、富士丸）来。平宇（袋井市）  
へ行と聞ば、『宇治拾遺』二卷、『随齋俳話』二卷、すべ

て四卷、あとらへ遣す。大しま（磐田市豊浜）素涼、来。  
欠川迄とて帰る。領家（掛川市）之巻、二まき来。知碩

（中野住）文音。

〔注〕二月／宇治拾遺／随齋俳話 タンノニ頼遣ス 水  
音〔書籍貸借控〕。水音は丹野の三橋家の次男で、文久

三年（二八三）、足立家の養子となった。

廿三日、天気よし。薩州・長州官軍、御下りあり、日坂どまり。人数、凡千もやと人いふ。猶、機械之具(?)、其外玉葉をはじめ、兵具おびたゞし。皆、袋井御泊のよし。

(注) 二月九日、総裁熾仁親王(なるひと)(有栖川宮)、東征大総督となり、東海・東山・北陸三道の軍を指揮(近代日本総合年表)。「御親征御先鋒御通行ニ付、丁内相談」(『此夕集 三十七』二月十八日)。「御撫先鋒、大村・佐渡原(土)・長州・薩州、当駅御泊」(同上、二月十九日)。

廿四日、快晴。尾州・紀州、御二方御人数おびたゞし。

(注) 一月二十日～二十五日、尾張藩、佐幕派の重臣十四名を斬首、藩内を勤王に統一する。二月七日、十六代尾張藩主義宣、新政府から官軍の東海道先鋒を命じられる(桜井芳昭著「幕末の尾張藩」)。「尾州侯御内、兼松又兵衛君上下五人、御やどまをす」(『此夕集 三十七』二月廿日)。

廿五日、天気。肥後御同勢、備前勢、きのふ一昨日一流して大軍也。高橋藤太夫と申人、丹波笹山御陣屋、堀之内(菊川市)詰衆頼とて、書もの申来。

廿六日、快晴。柳原殿・橋本殿、御通行、目を驚す迄美々たり。伊州侯、御守護たり。人数・武器おびたゞし。御

供井上侯・亀山侯、是ハ家人のみ。中泉(磐田市)何羨来。書もの頼、二葉したゝめ遣す。

(注) 「中外新聞」第三号(慶応四年三月二日発行、三月下旬再板)の「雑報」に「東海道鎮撫將軍橋本少将・柳原侍従は尾州並に薩州等の兵を率ゐて既に箱根に到着す」と見える。

廿七日、天気。周円阿闍梨七回忌、呼れ行。飯田(森町)石清年始、来。

廿八日、曇る。折々小雨。カトウ(河東、菊川市)完牛来、年始。

廿九日、夜べより雨。三州西端原田官平、号頭白ぬし、とはる。

(注) 西端は碧南市湖西町に当たり、西尾城主本多家が分家した旗本本多氏の領地で、天明三年(一七六三)から陣屋が置かれていた。

初鶏やわすれし窓にさす明り 頭

晦日、雨。夕方、西明(にしあかり)。今日ハ人来ず、たにざく紙裏打。(慶応四年) 三月一日より落墨。

四日、ふじ丸（丹野住）、来泊。曇。

五日、猶留杖、風交。『今人三十六歌仙』、大坂菊也より送らる。横小本也。

〔注〕『今人三十六歌仙』横一冊、鰻溪舎菊也編、慶応三丁卯秋奥（〔編輯〕連歌俳諧書目録）。嵐牛入集。

七日、森へ出杖。途中、小竹（岡津住）が年始に来るに逢ふ。友なひて大池（掛川市）にてわかる。駿嘉とまり。

楽水・乙雅・積山・佩玉・得水（以上、森住）来、一夜はなす。試雪（森住）は他行とて来らず。風寒し。

八日、前の人々ニ猶、試雪・円友（森住）も来。今朝、梅林（院）に花を見る。今日ハ風寒し。」

〔注〕「梅林（院）」は、森町にある曹洞宗の寺。

九日、今朝は風も風、いとうらゝか成とてあるじ嘉子がすゝむるに、松が岡（未詳）に詣。花、処々にほころびたり。宅方醉楽亭（未詳）（に）遊（び）帰。平宇二士来、左之詩、見せらる。

赫々、東藩八万兵襲来屯在浪花城  
高杉信作

我喚快士知何日笑待四辺発砲声

〔注〕高杉晋作は萩藩士、号は東行。久坂玄瑞とともに松下村塾の双璧。江戸に遊学、藩校の都講を勤め、攘夷論の急先鋒となる。帰藩後、奇兵隊を組織。元治元年（一八六四）八月、英・仏・米・蘭の連合艦隊による砲撃で下関砲台が占領されると、萩藩は講和協定を結び、奇兵隊を解散させ、幕府へ恭順を示す。晋作は同年末と翌慶応元年（一八六五）一月、下関新地会所を襲って占拠、藩内を倒幕・尊皇攘夷に傾ける。その年五月、將軍家茂は十万の幕府軍を率い長州再征討に江戸を出発、大島・芸州・石州・小倉の四方面から侵攻。長州海軍総督晋作の軍艦は、周防大島沖に停泊する幕府海軍の艦隊に夜襲を掛けて優勢、翌二年七月二十日に家茂が大坂城で急死（21）、再征討は頓挫。右の詩は、元年六月の作で、晋作著『東行遺稿』所収の「絶句」との異同を（ ）入りで示した。「曹」は、仲間の意。晋作は翌三年四月十四日に肺結核で病死（27）。

勤王為一朝敵攘夷成幕仇  
天無憐勉士何是可死秋

毛利長門守

(注) 萩藩主、毛利敬親たかひらの作。文久二年(一八六二)七月、攘夷を藩の方針とし、翌三年四月、藩庁を萩から山口に移し、五月、外国船の打ち払いを開始、米・仏の軍艦から報復攻撃を受けた。元治元年(一八六四)六月、池田屋事件で会津藩麾下の新撰組により多くの長州藩士が殺害・捕縛されたため、藩は京に出兵して、七月、御所諸門を襲撃するが、会津藩らの幕府軍に敗れた(「禁門の変」)。翌八月、米英など四国連合艦隊に下関砲台を攻撃・占領されると、講和の協定を結び、奇兵隊などを解散、三家老に切腹を命じ、萩に謹慎して幕府に恭順を示し、官位を剥奪された。

十日、雨。琴雅(天方住)・石清(飯田住)来。草雨(未詳)入門。

(注) 琴雅及び石清と両吟するか(「俳諧どめ連句一覽」)。

十一日、雨晴、天気よし。ぬくし。例の連衆也。百丈(中田住)入門。一圭子(森住)来訪、風交始。スン(駿兵太夫新田(藤枝市)司、判卷持参。宿ねとり居士即評望、帰る。

十二日、晴。朝過、安あ(「た」脱か)児詣こ、広前花盛也。西の方へ下りて今日も松が丘二行。道筋、さくら有、盛

有、まだしき有。道すちにみる也。連衆来。司、帰らる。

(注) 森町周辺の「あたご(山)」及び「松が丘」については未詳。前者は天宮あめのみやの愛山神社のことか。十八日の記事に「あたご山花見」として再出。

十三日、天気。夜べ試雪(森住)どまり。朝、静なり。花会はなえ(前年日記では「花供養」)十七日、取掛り、東西書状したゝむ。落墨。

十一日より新町(森町森)石川伝久郎殿宅へ移候。是ハ連衆の借序ついで也。(試)雪どまり。

十四日、天気よし。いつもの連衆。積山どまり。

十五日、曇。嘉門老人、来。梅明、抱(牡丹)一ぼたにの画、持来。鉢植蘇鉄、持来。ヲ、ロ琴といふ、一圭所持として持来。音、いとよし。鶴明老人(二保住)・ふじ丸(丹野住)、来。

(注) 「ヲ、ロ琴」は未詳。マレーシア(馬來西亜)に大呂琴院という音楽学院があり、インターネットの画像によると、楽器は七弦琴と判断される。長さ約一一〇糎、巾三〇糎ほどの琴柱こしらを用いない小ぶりの琴で、三千年の歴史をもつ。中国から日本に伝わり、平安時代や江戸時代に演奏さ

れた。中国では、現在、古琴コシンと呼ぶ。中国音楽の十二律の二番目の高さを大呂ダイリョ（たいりよ・たいろ）といい、それを湯桶ユウボク読みした別称かもしれない。

十六日、ぬくし。ふじ丸・鶴明二子、来。杜水（見付住）・弄我（向笠住）文音。

十七日、天気。今日ハ花会なるを、快晴うれし。杜水・文所（見付住）・波静（同上）・知碩（中野住）・十湖（中

善地住）・風哉（同上）外、此頃中連、都すべ而て廿人余、夜を明して五十韻満尾。（杜）水子宗匠、ふじ丸執筆也。

十八日、お（「な」脱）じ処に終日遊あそびくらす。夕方、あたご山花見、雨降出。ふもとより駿河亭（嘉）に帰る。夜、大雨。丸・波三人、するがヤどまり。

（注）駿河亭とあるのは駿嘉亭の誤記だが、「するがヤどまり」と記すので、駿嘉は屋号の駿河屋から採った俳号と判明する。

十九日、雨止。例のやどに帰る。終日眠し。

廿日、夕方より雨。夜、尚降。中田（磐田市）萩花といふ人、巻持来。波帰、水来。則、とまる。

廿一日、雨止晴、ぬくし。水子、猶在。

廿二日、曇。連衆、例の人々。

襲来 百万鎮西兵 喚ビ待ッ 四辺金鼓轟クラ  
東奥 男兒有リ心胆 唯知リ今死ヲ不レ知シ生ヲ

（注）右の作者未詳。「鎮西兵」は薩長等の官軍をいう。「金鼓」は戦陣で用いる鉦かねや太鼓。本年二月廿三日の記事及び（注）を参照。

廿三日、雨。今日、玉潤大徳、梅林（院）にて受戒会はじむ。ふじ丸、使来、帰宅。予、昨日より風邪氣にて薬など用、宵より臥。あるじ・女、受戒会にとて出行。

廿四日、雨止、快晴。風邪、頭痛も止、快方。連衆、例之通。

廿五日、快晴。風邪之氣、こゝろよく、月額（月並句額）・奉額（奉納句額）、今日ハ書ものせんとて駿嘉亭に移る。夜に又、玉潤禪師說法聴聞、三帰戒をとく。誠ニ明弁。

（注）「三帰戒」は、「仏・法・僧」の三宝に帰依せよと説いた戒め。

廿六日、快晴。今日も数々書もの、肩いたむ。

廿七日、曇。されど天気ハよろしく、今日ハ中田（磐田

市）へ越んとす。試雪（森住）同伴。アハタラ酒屋、持

家あるじ、途中より同道、則酒屋へ案内、牡丹を見る。

是ハ駿嘉亭にて酒や主人と一杯かたむく。其折、「牡丹盛

也。見よれ。道筋なれば」といはれたれば也けり。道、

大ニ遠く、酒後、よろめきつゝやうく、維石（中田住）

亭にいたる。其夜、三子来。勞たれば、宵より臥。よひ

よりいさゝか雨。

廿八日、雷光。松里（掛川住）、晴山（中方住）、友永（袋

井市）古栗、川会（袋井市）永実など、其外多勢来。運

座のまどゐ有。終日雨。

廿九日、猶雨降。直喜（飯田住）・鬼外（森住）、例之連。

朝過より快晴。駿嘉、新茶ひとつまミ送らる。千霜（未

詳）入門。露光（谷川住）昭会。猶、可遊（未詳）同前、

維石（中田住）昭会。積山・得水（ともに森住）、来。夜、

帰る。喜ハとまる。

卅日、快晴。朝、山梨（袋井市）月額（月並句額）、判に

行。昼頃、在所（自宅）迎、来。直様返る。使千藏。途

中日暮、草臥たり。

（慶応四年）四月一日、快晴。留主中、諸方文通、開。

猶、点。スンプ雨石来、風交始。

（注）雨石との両吟歌仙は「俳諧どめ連句一覽」参照。

二日、天気よし。石、逗留。

三日、天気。石、猶風交。飯田木甫来、暫く咄。乞に任

（せ）、金谷（島田市）横山逸溪へ副書。夕方、雨降出。

大和屋へ丁ちん、返す。

（注）夜、信州木甫老人来遊、一泊。木甫老人、雅談して

遠州へ遊杖（『此夕集 三十七』三月廿六日・廿七日）。木

甫については三年十一月八日の記事及び小林郊人「漂泊俳

人木甫と井月」（『信濃の俳人』昭和十九年）参照。

四日、猶小雨。石、猶風交。蒼山文音、羽洲・章和・も

くち。

門松やちよつちよと鶴の羽袴

街道へ声つき出して暮のきじ

摩訶庵（蒼山亭）即事

山 洲

鶯も黙てはぬる十五日

佐夜中山

心なき山にふじミる二月かな

天降る神あまくたや時雨に清めして

春のよの嬉し因のむすびふと

文音、オク（奥）スカ川壮山・漸風。

老師宿病

懐に手を組てゐる十夜哉

臨終の枕にすがりて

うづくまる身ハたゞ氷る思ひ哉

追善

寒ぎくに師走九日の泪(?)かな

(注)「奥州須賀川壮山ぬしより摺物来る」(『此夕集 三十

七』三月廿九日)。正月四日、思楽文通の文端記事参照。

老師(清民)は慶応三年十二月九日没(75)。多代女の高

弟。

荒風も垣によければ春日哉

海手へもひとつ別れて初鶉

黙池

下フサ可候

オク壮山

々

同漸風

梅裡

静処

藪寺や見よい処にねはん像

浮て行氷にそふか日のあゆミ

松のうち過て頭巾の礼者かな

一たんハかれ溜たる池の氷かな

ふつゝかな走様也「池」のきじ

目薬の利きいた朝也初ざくら

汐ぬきに網打きしの柳哉

鶏も露を拾うてけさの秋

正月の炭火にぬひとまくき一間哉

大知波山中

滝有と聞しあたりに鹿の声

(注)大知波は湖西市。「遠湖月見、大知波ノ鹿間に、羽

洲・秋夢・杜堂ら八人同行」(『此夕集 三十七』九月十三

日)。

笠占かさうらにのこる日あしや冬時雨

衣の里

市の立町たちと聞しにさよ砧きぬた

雨石、日坂へとてかへる。

流翠

華岳

竹漕

指石

酔雨

素溪

素宇

蓬宇

三川杜堂

秋夢

半仙

言之

五日、雨晴。朝日よし。猶、終日曇。人來らず、静也。

雨晴の朝日の外やわか楓かへで 即事

六日、曇。此迄落墨。加陽眠鶯「青簾集」。『たより参り』といふ集、清芬社と有候。素屋社中か。

(注)『月明文庫目録』には『加能俳諧史』に依拠し、文久三年に「あをすだれ 半 一冊 眠鶯編 金沢 有文堂」を配列。蓬宇の『此夕集 三十七』では慶応四年二月三十日「加賀金沢眠鶯生より『青簾集』到来」、三月二日に礼状を出している。

植たわが田にひるがへる乙鳥つばめ哉 屋

『其梅集』越中太田村安倉安兵衛早芽集、黙池より蒼虬集十冊、羽洲より送りもの、宇治人形、角上画賛、貞柳、紫野合作もの、「仏供養」。

(注)「越中太田村三友生より『其梅集』到来」(『此夕集 三十七』二月三十日)、「越中早芽ぬしへ『其梅集』礼状」(『同上』三月二日)。「蒼虬発句集 横一冊 蒼虬著 黙池編 慶応三年卯秋九月 京越後屋治兵衛ほか刊」(『月明文庫目録』)。「角上画賛」は、現在、衝立に張り交ぜられ、絵は垣根に咲く朝顔、賛は「槿花還笑あざな人うとハ氣のつかぬ

もの多し／薺はたハけと人を笑ふらん」、署名落款は「瞬しゆん比亭ひてい／角上(印二顆)」。「紫野合作」は、現在、屏風に貼り交ぜされ、絵は紫野宣乞(印「春米」)、賛は紫野太室(印「宗辰」)。後者太室は臨済宗大徳寺二十世で、弘化四年(一八四七)示寂(85)。

七日、雨。川(大井川)の口明くちあきにて、往来にぎはし。(雨)石子、来。太助、金谷行。梅春へ書状遣す。

八日、雨止、快晴。日坂、常現寺伝 痰薬

半夏一両 葛根一両 陳皮一両 茯苓一両 甘草二匁 雨石、西手へ出かく。辰平(日坂駅、成瀬氏)豊川行とて訪ふ。則、吉田(豊橋市)呉井(蓬宇)へ書状あとらへ遣す。黙池より来るばせ(を)堂(蒼虬)集一冊、雨石へ遣す。中方(掛川市)春彦、来。書ものいたし遣す。

(注)「風牛おぢより文来る」(『此夕集 三十七』四月九日)。

九日、天気。梅春(金谷住)書状、来。神ノ郷かみ(牧之原市坂口)人評卷、即評。

十日、曇る。鍋島侯、御下り。

山そまもたゆへか早し秋の風 眠鷺

十一日、出杖、岡津（掛川市）どまり。

十二日、猶、をかつ。

十三日、小松（浜松市浜北区）どまり。

十四日、中田（磐田市）。

十五日、猶、中田。

十六日、森（森町）行。

十七日、猶、森。

十八日、平宇（袋井市）。

廿九日迄平宇。

〔注〕尺波と両吟歌仙三巻を巻くか〔俳諧どめ連句一覽〕。

晦日、帰庵。

〔慶応四年〕閏四月一日、快晴。谷川村（森町）佐野庄兵

衛三碩、中田（磐田市）伊藤岩吉洗我、入門。是ハ中田

にて。伊豆松崎、依田始耕文音。青霞・松宇、五年前遇

し。更にしらざりし。

梅よほど過てかへるや曲り道 耕

〔注〕三碩と両吟歌仙二巻を巻く〔俳諧どめ連句一覽〕。

「伊豆松崎」については、『そのまま集 三編』所収「伊豆入湯記行」の句を参照。

多湖思楽文音。江戸、猶おく筋、違変申来。猶、新聞ちらし、来。

大宮のたしかに晴て時鳥

楽

〔注〕「中外新聞」第一号は慶応四年二月二十四日発行で、半紙本の木版。三月に再板、それによると最初の二丁（柱刻に「第一号」とある）に「中外新聞」とタイトルし、発行の趣旨を謳い、定価は江戸相場で毎号表紙に記すと述べ（所見の号では平均一匁）、文末に「慶応四年戊辰二月／会訳社執事」の日付と署名がある。次の丁から第一号の紙面となっているので、最初の丁はチラシを兼ねたものであろう。蓬宇の『此夕集 三十七』には、四月廿八日のところに「江戸多胡氏より『中外新聞』『内外新報』五本来り」と記されている。思楽は本年正月四日の記事に既出。

おく春斎書状・大すり、此一（盛岡住）・思楽次。青柳（吉田町神戸東青柳）より巻来、評。セト（藤枝市）玉見へ返巻。平宇書状、飛込遣す。犬み（浜松市天竜区）巻、来。湖山、豆州より帰来。土産種々。猶、巻一、評。

二日、快晴。大井川、口明。今日ハ欠川平台亭に遊ぶ。夕暮にかへル。途中ノ道くらし。十湖(中善地住)書状、来。

三日、朝曇。

○江戸落着之事

一橋公・田安公、宮様へ歎願之趣被<sub>レ</sub>為<sub>二</sub>間召<sub>一</sub>候次第。

一、徳川慶喜、逆賊之罪可<sub>レ</sub>行<sub>二</sub>死罪<sub>一</sub>之所、徳川家二百余年之治国、格別之対<sub>二</sub>仁慮<sub>一</sub>、慶喜死罪御免被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、

水戸城へ引籠慎<sub>ミ</sub>可<sub>レ</sub>有<sub>二</sub>旨<sub>一</sub>、被<sub>レ</sub>仰候事。

一、徳川一味随徒之者、死罪御免被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之事。

一、御本丸明渡し被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、当分、尾州公へ御預ケ之事並

武器不<sub>レ</sub>残御取放候。追而徳川家再興、録(録)之多少相当之

武器、可<sub>二</sub>相渡<sub>一</sub>事。

一、御本丸後室方、田安家へ可<sub>二</sub>引去<sub>一</sub>旨、被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>之事。

右之趣にて一旦相治り候との事、承候。

四月十八日

(注) 四月十一日、江戸城開城、徳川慶喜、水戸に退隱のため江戸を去る(「近代日本総合年表」)。「中外新聞 外篇」

卷十八(慶応四年五月発行)に「一橋大納言上書」(慶応四年戊辰閏四月付)を掲載。

四日、曇る。タンノ(丹野)文音。雨ぬれ、よしかね、

茶仕上、草臥候。夜、早く臥す。

五日、曇。やす、成滝(掛川市)行。夜雨。

六日、猶、曇。大島(磐田市豊浜)伊蔵家内、利平子、

来泊。中山詣。

七日、曇。大島客もどる。「其まゝ集」撰。

八日、晴。やす、ぬきな村(貫名、袋井市広岡)へ稲荷

詣。「其まゝ」、あられました(なると)成。

九日、雨。人、来らず。大降。

十日、快晴。

(注)「新聞」と欄外に頭書きして、以下に「中外新聞」から記事を引用。主な異同を( )入りで示した。

小沢雅楽之助(テシ)(といふ者)、元は関東(の)□□(なりしが)、偽て勅使(の)先導と号し、甲州二人(て)、云々。

(注) 小沢雅楽之助一仙は、伊豆国出身の宮大工。幕末の尊攘運動家で、政府軍鎮撫隊を結成、勅命のないまま甲府

に入り、偽勅使として慶応四年三月十四日に処刑される(39)。「中外新聞」第三号(慶応四年三月二日発行、三月再板、四月合本第三板)の「雑報」掲載記事によるが、後半は省略。

○(或る処にて)按摩渡世する盲人の家に隱居(た)る浪人一人を召捕り、其所持之荷物を改しに、神社仏閣之札の板木を沢山持居たり。去年、諸国に神符之類、降らせし者、皆、此輩之所業也し事、(いよく)明白也。

(注) 同じく「中外新聞」第三号の「追加」記事による。

○コルクの黒焼留飲並(に)コロリに効能有説  
民間医方の書に、留飲の癖有人、毎日コルクノ黒焼ヲ粉ニシテ、水ニテ一日ニ三度ヅ、用フレバ、必効能有トイフ説ヲ記セリ。然ルニ、新聞紙ニ左ノ奇説有。

コルクはフラスコノ栓ニスル木也。

英吉利船、去年、海上ニテ俄ニコロリを煩ふ者三十人程出来セシニ、コルクの黒焼を粉ニシテ、水と乳汁トニテ頻に用ヒ、皆全快セリ。是は天然地方ニテ民間ニ用ル薬方ナリトゾ。

(注) 同じく「中外新聞」第三号の掲載記事による。コロリは、安政五、六年(一八五八、九)に流行した伝染病コレラのこと。富士川游著「日本疾病史」(昭和十九年、東洋文庫復刻)に日本で流行した時の記録や症状・治療法について記述するが、コルクの黒焼きの療法には言及しない。

【備考】以下に大阪への遷都を主張した「薩藩大久保市藏の建白書」を書き留めるが、割愛。この建白書は一月二十三日、太政官の会議に提出されたもので、「中外新聞」第七号(慶応四年三月十八日発行、四月再板、同合本第三板)に掲載される。

○ 帝鑑間・雁間・菊間の諸大名、通計四十三藩 君上に代りて謝罪の歎願書を 天朝に捧ん事を議し、其内四家之重臣、先総名代となりて上京し、当三月二日、太政官弁事伝達処へ罷出、中川大炊に頼て、右書面を差出せしに、東園殿御落手相成、追て御沙汰可有之旨、被仰聞一候。

右、名代四人は佐倉の倉治甚太夫、小田原大久保弥右

衛門、上田の掛山政右衛門、佐野の西村鼎、(是)也。戸沢・諏訪両家も初は連名成しが、追而除名せし由。其故未詳。

外様ニ而は、仙台・二本松・米沢をはじめ、徳川一氏(一)の為に力を尽し、寛大之御所置を乞ふもの多し。一橋玄同殿も東海道へ出て 勅使に哀訴せられ、勝安房守等も周旋尽力少からず。

(注) 以上、やはり第七号による。一橋玄同はもと尾張藩主徳川茂栄。なお、一橋家(前出三日、「江戸落着之事」の注参照)や四十三藩などの歎願書は、「中外新聞 外篇」(慶応四年四月発行)に掲載記事がある。

大樹公、上野の岡に寺ごもりし玉ふよし  
承りければ、  
井上 文雄

あはれ君かきこもります此上の  
世の中いかに成か行らん

述 懐 (作者不詳)

自い古し英レ雄多奇一 胡な為大樹棄連枝  
断腸 三顧 許身日 揮涙南柯 入夢時

万死報恩志未遂 半途墜業恨何涯  
暗知氣運推移去 月黒橋頭啼子規  
或(目)云、会津公之作(侯)

(注) 二月十二日、徳川慶喜、江戸城を出て上野寛永寺(大慈院)に閉居(『近代日本総合年表』慶応四年=明治元年)。

「中外新聞」第九号(慶応四年三月廿八日発行、同年四月第三板合本卷二)によるが、詩の後に「或云。会津侯之作。」の付記がある。同新聞の「篇外」卷之二にも掲載、それには、「去る二月廿日会津侯国許へ発足の節、上野御門前三橋の辺にて下乗、山門の方へ向ひ良久しく遥拝被レ致、家来共ハ悉く下座罷在、其後出立相成候。上野辺通行の者並に市中の輩ともがら不おぼ覚感涙を流ながし候」との前文がある。「大樹」は將軍徳川慶喜、「連枝」は実弟である自身(松平容保)を指す。「三顧」は、慶喜(当時、將軍後見職)らに京都守護職就任を再三固辞したにもかかわらず執拗に迫られ、終に受諾、文久二年(一八六二)閏八月一日、初代の同職に就いたことをいう。「南柯の夢」は、唐の淳于棼が酒に酔って邸内の樹下で眠り、南柯郡の長官になり二十年経った夢を見、覚めると樹下に蟻の国があったという唐代の伝奇小説「南柯太守伝」による語で、人生のはかな

さのたとえだが、後醍醐天皇が笠置山に臨幸した際、南向きの枝（南柯）の下に設えた玉座につく夢を見てそれを楠と判じ、楠木正成を召した、『太平記』卷三「主上御夢事付楠事」の故事をも踏まえる。「報恩志」は、先帝、孝明帝が容保への信頼・寵愛を伝える御宸翰・御宸筆を度々賜った高恩に報いんとする志（会津藩の田中土佐外連名「歎願書」、「中外新聞」第九号所収参照）。「月黒橋頭」は、廿日の月に照らされる上野惣門（黒門）前の三枚橋辺をいう。容保は江戸城登城を禁じられ、歎願書を幾度となく送るけれども受け入れられず、国元で戦うことになる。

題しらず 伊達自得 紀藩

三吉野の雲ゐのさくら此春は

いかなる色に咲にほふらん

風をのミうらむもあやな桜花

さきすさびてハ我と散らん（なり）

向島の桜の枝にゆひつけゝるうた

よミ人しらず

都にておもひしよりもおもしろし

すミだ川原の花の夕ばえ

〔注〕「中外新聞」第九号（慶応四年三月廿八日発行、同年四月第三板合本卷二）に掲載。

○天子ハ去廿二日、一万人計の兵を引率して大坂へ御幸座御座候。

〔注〕同上第九号の卷末に掲載、「三月廿六日」付。

○仙台へ遣されたる 勅使九条殿並沢殿、薩長の兵を率ゐ、松島へ軍船にて到着し、瑞巖寺に一泊、其後、養賢堂といふ学校に滞留のよし。

題しらず 大神 御牧

けがれつる御名をバすゞげ何事も

しのぶのをかの花の白雪

○ 四月二日御触書

此度一橋殿・田安殿御連名之御歎訴状、一橋殿御持参、東海道官軍 大総督宮御方へ御参上、且若年寄・大目付・御目付にも同様、為歎願罷出候処、上様御恭順、御謹慎之御誠意相頭はれ候ニ付ては、寛大の思召を以て御沙汰之品、御先鋒総督より 勅定を以 仰出さるべく候段 仰渡され候ニ付ては何れも此上兼ての御趣意厚く相守り、

弥相慎ミ居候様可レ致候。

右之趣、向々へ早々可レ被<sub>二</sub>相触<sub>一</sub>候。

四月

亜墨利加にて買入たる鉄船、去る二日、横浜に着す。軍艦役並小笠原健藏・岩田平作、乗込て来ル。

(注) 以上、「中外新聞」第十一号(慶応四年四月五日発行、同年四月第三板合本卷二)に掲載。

題しらず (よみ人しらず)

君と臣<sup>おみ</sup>うからはらからいどミあふ

都もひなもあさましの世や

あたひなき玉てふ玉も何かせん

瓦と共にくだけ行世は

或曰、安房守義邦詠(勝)

うての使来りし頃 よミ人しらず

あはれく、我世も同じ浮雲の

上野のさくら今<sup>(か)</sup>ハちるらん

(注) 右三首、「中外新聞」第十二号(慶応四年四月十日発行、同年四月第三板合本卷二)に掲載。「うて」は討手。

三月六日、大総督府、三月十五日に江戸城を総攻撃する

旨命令。三月十三日、大総督府参謀西郷隆盛と旧幕府陸軍

総裁勝安房守、江戸鹿兒島藩邸で会見、江戸開城を交渉。

三月十四日、交渉成る(『近代日本総合年表』(慶応四年)。

【備考】以下に「仙台侯の建白書」と鴨西外史評が「中

外新聞」第十三号(慶応四年四月十三日発行、同年四

月第三板合本卷二)により書き留められるが、長文の

ため省略する。

○去月廿六日 皇帝陛下、自(ら)御船に乗じ玉ひ、天

保山辺に碇泊したる外国(船)を巡見し玉ふ。此時、諸

船より祝砲を発す。其声天に轟くといふ。是(れ)、横浜

新聞に載る処也。

(注) この年、天皇は大坂行幸に際し、三月二十六日、天

保山沖で諸藩の軍艦を叙覧。「中外新聞」第十三号に掲載。

第十四号(慶応四年四月十九日発行、同年閏四月第三板合

本卷三)に掲載の「大坂よりの書状写」にも類似の記事が

ある。

○三条殿、中御門殿並毛利淡路守、各其嫡子を学芸伝習

の為に英吉利に遣はせり。

○英人サトウ曰、新聞紙は成丈事実をよく糺して実説を載する様にすべし。其故は天下(の)人民に信用せらるゝ物なれば、其關係小ならざるを以也。大久保氏の建白、会津藩の歎願書などを出したる、最佳也。吾、既英文に訳して新聞局へ贈れり。是、日本の事情を外国人にも広く知(ら)しめんが為也。

(注) 右二件も「中外新聞」第十三号に掲載。

○歎願書

一、城の儀は、徳川家相続の者、相定候迄、一時、田安へ御預被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>候様、奉<sup>レ</sup>願候。甚見越候儀を申上、奉<sup>二</sup>恐入<sup>一</sup>候得とも、尾張家へ相続被<sup>二</sup>仰付<sup>一</sup>儀は、御免奉<sup>レ</sup>願度事。

一、軍艦銃砲は、徳川家名相立被<sup>二</sup>成下<sup>一</sup>、高並に領地相極<sup>きはまり</sup>候上、差上候様仕度事。

右二ヶ条、格別の寛典を以、御差免相成候様御尽力の程奉<sup>レ</sup>願候。素より有罪の私共、右様之件々奉<sup>レ</sup>願候儀、上は 天朝の御怒に奉<sup>レ</sup>触候も難<sup>レ</sup>計、下は主人□□の趣意に背き候儀には候へども、此際に当り、百年の生命の

為に千載の汚名を捨置、恨を含で命を奉<sup>レ</sup>候様にては、海陸両軍、臣子節操相立不<sup>レ</sup>申候間、私共一同(の)心中御賢察被<sup>二</sup>成下<sup>一</sup>、幾重にも相貫(き)候様御執成奉<sup>レ</sup>願度、此段歎願仕候。謹言。

四月 日

海陸両軍一同

○来月五日頃、御発輦にて南都へ 御越、夫より 御帰京と申事ニ御座候。

(の書状写)  
大坂より書状の端に

○静寛院宮様 実成院様は田安御殿へ御移 天璋院様は、一橋御殿へ御移御座候。

上様は去る十一日、水戸表へ 御発途相成候。

(注) 四月十一日、徳川慶喜、水戸に退隠のため江戸を去る(『近代日本総合年表』)。「□□」の部分は伏せ字で、外の歎願書などの引用にも同様の処置がされている。ほとんどが「慶喜」とあるべきところ。

○信州路報告

此程、相楽捻三といふ者並外七人、信州追分宿にて梟首(せ)られ、外十余人の者、片鬢・眉剃落し追放に相

成候。右者捻三巨魁にて、無頼の悪徒を集め、官軍先鋒嚮導隊と唱へ、総督府の命と偽り、信州の村々を乱妨し、良民を劫し、金銀を貪り、其悪事露顕せし故也と承及申候。云々

(○) 箱館来状(の)写

此表にてハ江戸の様子、委敷相分らず、甚心配仕候。会津追討の儀、仙台へ被<sup>レ</sup>命候由、とりぐの噂に御座候。何故か仙台隣国の諸侯、仙台城下へ追々使者差出し、殊之外混雜の由に御座候。

(注) 以上の四件、「中外新聞」第十四号に掲載。最初の件は「三月廿八日」付。

【備考】以下には、「中外新聞」第十号(慶応四年四月初日発行)に掲載される、閏四月四日付けで、会津藩家老田中土佐らが、仙台など十三藩家老の添書および宸翰・御詠とともに九条総督に渡された歎願書が書き留められるが、長文のため割愛。総督は沢副総督らの意見を求めた上で拒否、同月十七日、会津城への攻撃を命じた。「会津侯の歎願書」(二月付)は第二十一号

(閏四月六日発行)に掲載。

○喧嘩はめつたに始むべからずといふ話

児童教導書一則を訳出す。

(注) 以下、本文省略。「中外新聞」第九号(前出)に掲載の記事による。

是迄新聞抜萃

十一日、曇。昼、小雨。

十二日、猶曇。風つよし。

十三日、おなじ曇。領家(掛川市)人来、一卷評。大井

川、明(く)。

十四日、曇。川向主人、たにざく・書もの頼、酒出す。

薰風(小出住)、来。タンノ(丹野)・高橋、去七日詠草、あとらへ遣す。

(注) 「川向」は日坂の小字。

十五日、雨。おも家、田植。

十六日、曇。

十七日、晴。

十八日、雨。

十九日、雨止。されど曇。見付、病者とて、やす、見舞行(く)。

廿日、曇。

廿一日、天気。やす、かへる。

廿二日、晴曇。

廿三日、雨。犁春りゆん、来泊。

〔慶元〕は豊臣氏の終り也。徳川氏は「元慶」とぞ。

〔注〕「歎願書」の文言に触れたメモ。犁春の住所は、「京都祇園社内梅之坊中、北川氏」(「蓬宇連句帳 廿一編冬」明治元年冬)だが、この頃からは諸国を漂泊、明治三年末から四年春にかけて(「嵐牛文集拾遺抄」十、十一参照)、六年冬と初夏の頃にも来遊し(「俳諧どめ連句一覽」参照)、その頃の番付「俳諧三幅対」に犁春は「雲水」と肩書きされてゐる。

廿四日、天気曇也。春、風交始。

廿五日、曇。やがて雨降出、終日不止。今日も風交。

(注)風交は「俳諧どめ連句一覽」参照。

廿六日、曇。

廿八日、雨。高田(掛川市)人、試雪(森住)状持来。雨は終日。島田行状、本陣へ出せしを、此高田人、駿府迄行二付、本陣より取もどしあとらへ遣す。

(慶応四年五月) 三日、鳥部(未詳)・十王町(掛川市)、句評。今日ハ、聊雨いささか、いとま有。我里、田植仕舞。人々よろこぶさま、めでたし。

四日、晴。又曇。昼後方雨。水音(平宇住)、来泊。

五日、雨。音子、風交始。清風(各和住)、来。

(注)風交は「俳諧どめ連句一覽」参照。

六日、雨止。昼後方又雨。音、猶逗留。

七日、雨止。音、朝過帰。灸をすえる。平宇、かへる。

八日、朝過、やがて雨降出、終日大雨。水上、支度なしで大きにさわがし。清風、来。夕方かへる。南田(磐田市)人、巻持来。

九日、快晴。ふじ丸(丹野住)、来。夕方帰る。春(犁春)、百員満尾、校合。

十日、天気。明日ハ丹野(菊川市)へと、是彼ものして昼宵寝す。

十一日、又雨。けしかる事也。近年不<sup>おぼ</sup>覚霖雨也。欠川新町巻、即評。南田巻、評。中方（掛川市）春園来巻、即評。昼方川水大ニ増、家居迄も来んなど、あたりさはがし。され（「ど」脱）来らず、水引<sup>ひく</sup>。

（注）「けしかる」は、「怪しかる」で、異常をいう。

十二日、朝より雨つよし。

十三日、おなじく雨つよし。昼、いさゝか雨間有。

十四日、終日雨つよし。

十五日、やはり朝から雨。

十六日、雨止。昼、タンノ（丹野）へ出行。

十七日、八日、雨。

十九日、大雨。川水高く、水上などゝさわぐ。されど畑迄ハ来ず。

廿日、快晴。目勝（川崎住）文音。

廿一日、おなじく昼又雨。

廿二日、雨。

廿三日、天気。

廿四日、天気。下川原柳川家、調練有。

（注）「調練」は兵士を訓練すること、安政三年（一八五〇）三月、幕府は江戸駒場で洋式訓練を実施。各藩でも行われ、農兵を集めても訓練した。掛川藩でも慶応三年七月頃から農兵を取立てたようなので「掛川市史 中巻」、そうした訓練が塩井川原の近くでも行われたか。

廿五日、曇。菅ヶ谷連衆不動尊奉額句合、米丸（袋井市浅岡）人巻、三巻預り置。シノバ（篠場）送雨弟巻、即評。

廿六日、天気よし。大井川口明、三十二日め口明といふ珍らしき川支也。ヨコチ丹峯来、風交はじむ。

廿七日、快晴。峯子、猶留杖。此ほど中湿気、書物しめり、風入。阿州侯兵卒下る。

廿八日、おなじく。

廿九日、あつし。

晦日、おなじく。蕉露子給士、江戸敗軍、上方辺立寄。南田（磐田市）人巻、遣す。見付、彦右衛門殿、文音。卯平殿、来泊。

（注）「給士」は給侍、召使い。「蕉露」については前年（三

年) 九月朔日の注を参照。蕉露は幕府崩壊後、俳諧師になり、明治四年の俳諧師番付「蕉俳位附」には「九百弗 東京蕉露」として見える(「遠江風牛」も九百弗)。

(慶応四年六月) 朔日、快晴。暑し。石清(飯田住) 外八人点取巻、即評。浜松在安松村、稲波巻、来。ミがく・梅春(ともに金谷住) 文音。

朝がほに蛸たぶくゞり込朝かな

ミがく

明易き夜の養ひや朝げしき

梅春

二日、暑し。昼方神鳴。杜水(見付住) 文音。浜松侘助、

『其まゝ集』之事、申来。紙、裏打。

手拍子にひとつ咲けり杜若

水

いせ紀行

半田亀崎 此ほどの煮酒に浦の曇かな

岩戸 ひるの灯の猶ことこしたやみくし木下闇

三日、暑し。犁春、川崎(牧之原市静波) より帰来。

四日、春、留杖也。しなのゝ拳山、来。多五右衛門屋へ

泊遣す。山なし(袋井市) 人、来。額面したゝめ、頼。

夕方、丹野(富士丸)、来。

(注) 「行脚拳山坊、来遊」(「此夕集 三十七」七月十一日)。拳山は、前号春海で既出、三年四月一日の記事と注参照。山梨の額面については本年三月三十日の記事を参照。

五日、春子、平宇(袋井市) へ行。早立。野野(母)、帰る。

六日、村松(袋井市) 人巻、即評。暑あたりにて臥。

七日、おなじく。ヲイデ(小出) 簫風、来泊。

八日、深見(袋井市) 人巻、即評。風子、帰る。三州奥

殿加藤源之助山水子巻評・書(き) 物、到来。日坂本陣

へ出す。但、岡崎宿能見町(岡崎市)、さかなや三代藏殿

(へ) 差向出す。

(注) 「三州奥殿」は岡崎市奥殿町にあった、大給松平家奥

殿藩の陣屋をいう。なお、この日、簫風に俳書を書す。「水

無月八日「四時行」乾坤四巻 簫風」(『書籍貸借控』)。

九日、夕立有、夜半。

十日、又いさゝか降。

十一日、又夕立、夜にかけて降。雷稲光。カマタ(鎌田、

磐田市) 野風来、即評。神ノ郷(牧之原市坂口) 人巻、

即評。知碩(中野住) 文音。

十二日、曇。中山素冠(未詳)・久雅(駿府住)奉額卷、久登(金谷住)持参、預りおく。

十三日、十四日、落墨。日々昼夜、白雨有。島田習静文音。

十五日、今日も小雨。雨石(駿府住)来、風交始。新町(掛川市か)人来卷、評。

(注) 風交は「俳諧どめ連句一覽」参照。同月二十二日、歸途寄つて満尾するか。

閏四月廿九日

徳川亀之助へ

慶喜服罪之上者、徳川家名相続之義、祖宗以来功勞被思召、格別之叡慮を以(て)田安亀之助へ被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候事。

但、領地録<sup>(録)</sup>高之義者、追而可<sub>レ</sub>被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候事。

後四月

右者、徳川亀之助、御和出しに相成候処、病氣之趣にて名代として一橋大納言登城、大監使三条左大将殿付属万<sup>ま</sup>里小路<sup>でのこり</sup>弁殿参謀西四条殿並下参謀軍監列座之上、左大将

殿より、右 勅諭御渡相成候処、難<sub>レ</sub>有仕合奉<sub>レ</sub>存候旨、御受申上退去、云々。

徳川亀之助

駿河国府中城主被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、領地七十万石被<sub>二</sub>下賜<sub>一</sub>候旨、被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候事。(但、駿河国一円、其余は遠江・陸奥两国に於て下賜候事。)

本多紀伊守

今般、徳川亀之助殿、駿府城主被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>、同国一円被<sub>二</sub>下賜<sub>一</sub>候(二)付、追而処替被<sub>二</sub>仰付<sub>一</sub>候(三)付、兼而用意可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之事。

滝脇丹波守

水野出羽守

一橋大納言

田安中納言

自今、藩屏之列ニ(被)加へ候旨、被<sub>二</sub>仰出<sub>一</sub>候事。<sup>(二)付、御礼上京可致事。</sup>

(注) 「中外新聞」第四十一号(慶応四年五月廿七日発行)に、「〇去廿四日被仰出之趣」と見出し、徳川亀之助への達書を書き留める。五月二十四日、徳川家相続の徳川亀之

助〔家達〕を駿河府中に封ずる（七十万石、のち静岡藩と改称）（『近代日本総合年表』）。

十六日、雷鳴少し、夕立有。石、猶逗留。

十七日、夜べより夕立。日向延岡、七瀬宅右衛門流扨、甲府出陣、立寄、ばせを堂（公成）書状、持来。

白雨や鵜も一先は水を立 流扨

都にも泣子もをらず夕涼 公成

青柳（吉田町神戸）一捨巻持来、即評。前玉（牧之原市坂部）釣月巻も持来。猶、杜水行巻、預り置。雨石（駿府住）、西へ出行。薩州一番手、日坂どまり。

〔注〕この年一月の鳥羽・伏見の戦いで、譜代の延岡藩は、幕府の命により大坂の藩兵が警備の任に当たっていたため、朝敵と見なされた。国元にいた藩主内藤政孝に代わり京都に詰めていた重臣が新政府に弁明、薩摩藩などに周旋を依頼、政孝も新政府に恭順の誓約書を提出、五月十日、謹慎百日余の処分を受けたのみで許された。以後、戊辰戦争では、甲府城勤番などの後方警備を命じられている。

元薩摩藩士の歌人、八田知紀は、この六月五日、京都を出発、薩摩藩兵とともに東行、その著『白雲日記』（春隆

編、明治二年刊）によれば翌十八日、日坂に泊まっている。

十八日、曇。カクワ（各和）清風来、風交。夕方かへる。  
十九日、曇。今日も薩州侯大砲、玉葉、東行おびたゞし。  
廿日、廿一日、朝曇。加茂（菊川市）文錦・梟山家藏扇・書画、持来。数種被見、珍しき有。カトウ（河東、菊川市）完牛同伴、上野郷（神ノ郷、牧之原市か）人巻、即評。夜半小雨。

廿二日、雨。雨石（駿府住）帰来、風交。夕方、日坂迄行。

廿三日、天気。月岡（菊川市）人巻、持来。

廿四日、天気。

廿五日、おなじく。

廿六日、天気。領家（掛川市）巻評。小松、江戸行、紅花墨、頼遣す。

〔注〕「小松」は元治二年正月十五日の記事にも見え、香墨式丁を頼んでいる。

廿七日、晴曇。紀伊様江戸引払、女中登る。

(注)「三月頃より、諸侯並びに妻室、大方在所へ帰国あり、御旗本衆も知行所へ赴かれたる輩多し」(『武江年表』明治元年)。

廿八日、朝雨。森(森町)得水、来。駿河(森住)母遠行、初盆会奉灯卷、即評。

廿九日、晴。今日ハ大頭竜御被に詣。大ニ暑く、草臥。留主へ松村(未詳)卷、来。日坂桂齋来、菱湖(巻氏、江戸の書家)書並手本被見、見事也。尚、杜水(見付住)よりの伝言、文端。又、五峰(杜水)の「蓮咲しニより見にこよ」と也。越中晴池すりもの、京相応軒(淡節)より取次書状。

五月雨も埒の明たり朝ぼらけ 淡節

さほひめや曙匂ふ山の色 越中晴池

(慶応四年)七月一日、松村使、卷遣す。きのふ大頭竜、大ニ草臥。今日も猶足だるし。横須賀(掛川市)清水氏より卷、伏覽より来。

二日、天気。さめ島(磐田市)信彦、翠竹卷持来、預り置。尚、屏風六枚折、頼来。紙、預りおく。

三日、天気。カクワ(掛川市)人卷、即評。太五右衛門殿、唐紙、サメ島屏風、書(き)遣す。

(注)「太五右衛門」は六月四日の記事に見える「多五右衛門屋」に同じか。

四日、天気。かたせ老人、帰る。細谷(掛川市)卷、即評。たにざく残、裏打。

五日、一、二日あと浜松胤来、甲府御かためより帰るさ、来訪。

(注)胤来は浜松藩士、堀川幸七、早馬住(寺田良毅著『遠州の俳諧』)。一月の鳥羽・伏見の戦いで旧幕府軍の一員として新政府の軍と戦つて敗れた新撰組の近藤勇らは江戸に下ると、勝安芳から幕府直轄領の甲府を押さえるよう命じられる。近藤らは甲陽鎮撫隊と名を改めて出陣、三月六日、甲府城に先着していた新政府軍と勝沼辺で戦闘、八王子に退却を余儀なくされて解散、江戸に敗走した。新政府軍はこれを江戸に追尾するが、甲府城防備のため、朝廷に恭順を誓つた先の延岡藩同様(六月十七日の記事と注を参照)、浜松藩(藩主井上正直)も出兵を要請され、胤来もその任に当たつたのである。先に帰途に就いた藩兵が頼ま

れて嵐牛に伝言したのであろう。

六日、雨。島田雪香使巻、即評。

七日、猶雨。欠川巻、十王（掛川市）連、猶■■■■（抹消）大井川下釜口竹雪、即評。

甲斐がねに残してもどる暑哉

胤来

岩測 正面にミるやはじめてふじの山

（注）竹雪の巻は、胤来が甲府城から帰還する途次、同好の作者に頼まれて持参したものと判断されるが、「大井川下釜口」に該当する地は存在せず、富士川舟運最大の難所として知られる釜口峽（富士宮市）の下流に当たる所であろう。岩測は東海道の吉原宿と蒲原宿の間の宿で富士川の渡し場があり、富士川舟運の下流側の河岸として栄えた。

八日、水たり（垂）巻、島田巻、初馬巻、マカヤ（馬ヶ谷）巻ドモ、即評。

九日、富部（掛川市）巻、瓶谷（未詳）巻、即評。古宮老人、川向主人（古宮・川向はともに日坂の小字）、来。

十日、田川巻、評。老人、帰る。是より十三日迄落墨。

十三日、又雨。本郷（掛川市）人来巻、即評。

十四日、猶雨。又落墨。

十七日、ふじ丸来、風交始。昼晴、又犁春来。是又前の百韻、次んといふ。目勝（川崎住）文音。夜明、月よし。

青々と晴ての後や秋の雲

目勝

（注）「前の百韻」は、六月三日、四日の滞在中に詠み始めた犁春の両吟百韻（「俳諧どめ連句一覽」参照）。

十八日、又雨。両名風交。高瀬（掛川市）人来巻、評。夕方水増、驚く。

（注）「両名風交」は、ふじまろ・犁春との三吟歌仙（「俳諧どめ連句一覽」）。

十九日、朝暫曇。快晴、大ニ暑し。

廿日、又朝曇。朝過快晴。曇や来る。やす、欠川行。

廿一日、晴曇。田中（藤枝市）良雅巻、そのがや（掛川市）より来、即評。

廿二日、タンノ（富士丸）帰る。マカヤ人巻評。領家（掛川市）巻評。

廿三日、夜、湖山（成滝住）巻評。百員（犁春との両吟）満尾。

廿四日、犁春、見付へ立。ナゴヤ羽洲之書状、雲州曲川行、石川（依平）筆在中。右二封、犁春ニ頼遣す。二又（浜松市天竜区）行、ばせを堂（公成）状、知碩（中野住）行状、是も春子へ頼遣す。見付より来、拾山『威得集』。

腰かけるうちの雨間や杜若

山

〔注〕「犁春ぬし、遠江より七月廿三日付之文、油紙包一ッ添来る」〔此夕集 三十七〕八月十日。『威徳集』は「戊辰の春」素知園春松跋。吉田の蓬字には七月十三日に届いている（『此夕集 三十七』）。

廿五日、快晴。島田へ出杖。先、梅春（金谷住）亭一泊。

廿六日、大井川渡る。

■八月十七日迄、秋野（雪香亭）留杖。

〔注〕この間、習静と両吟歌仙二巻、雪香と両吟歌仙二巻、砂白と両吟歌仙、雪香・梅城と三吟歌仙を巻く（『俳諧ども連句一覽』参照）。

（慶応四年八月）十七日、セト（藤枝市）小沢氏に移る。

廿三日、城腰（焼津市城之腰）夜松へ移り、夫より小川

（焼津市）、又、与左衛門新田（藤枝市）留杖。

〔注〕この間、流翠・つかさ・竹溪・玉見・梅隣・月笑・子友・董雨・文外らと連句を巻く（『俳諧ども連句一覽』参照）。

（慶応四年）九月三日、又秋野迄帰り、二夜。

五日、帰庵。夫より筆とるひまなく、日記しるさず。

【備考】八日、慶応を明治と改元。

十三日、月よし。八幡宮へ夜詣。

十四日、曇。

十五日、種々之事にて筆とらず。

（明治元年）十月一日、快晴。此頃、御東行之事につきておも家せはしく、在庵。往来地、持家二垣などのしつらひにてせはし。可久和（掛川市各和）家内、来。

〔注〕九月八日、明治と改元し、一世一元の制を定める。

九月二十日、天皇、東幸のため京都出発。十月十三日、東京着、江戸城を東幸の皇居とし、東京城と改称（『近代日本総合年表』）。なお、東幸に際しては、「往還通在町家居、見苦敷無之様」、また、「諸木往還通江生ひ茂り候ハ、御道具之障りと不相成様、伐取可申事」などの御触れが

二月廿四日付で郡奉行所から村々庄屋などに回された。『慶  
応四辰年 番生寺村／御触書写帳』（『金谷町史 資料編  
二近世』所収）参照。

二日、同天気よし。弁事、秋月侯御とほり。かくワ家内、  
帰る。

（注）「弁事」はこの年太政官の総裁局に置かれた職員。  
翌年廃止。「秋月侯」は日向児湯郡の高鍋藩主、秋月種殷。

三日、天気。往来筋、さうぢ、殊之外きびし。己等之麻  
神社御取調之事ニ付、欠川御とまり迄、繁右衛門・小作  
出、種々御尋有よし。されど証なしと帰り来。諸あれど  
も、是と申事なし。

（注）「己等之麻神社」は『延喜式』には「己等乃麻知神  
社」、中世以降は事任神社と通称、また蒼田八幡宮とも呼  
ばれた（『東海道名所図会』ほか）。

四日、未明、大原中将様御付、平田信太郎様外御一方、  
八幡やしきへ御入、色々申上候処、造営之事御尋之時、  
神主（の）力ニ不<sub>レ</sub>及処は氏子中、猶力およびかね候節  
ハ、欠川東往還筋、猶、左右村産（土）神はいづれも有<sub>レ</sub>

之候得ども、此御社を大氏神と唱へ来、此氏子どもより  
も力を合（せ）造営仕候由申上候処、平氏様仰に、「そ  
れら古格の証也。夫にてよろしかるべし」由仰られ候処、  
猶御神領は大氏神と称来（り）。村方にも有<sub>レ</sub>是、近村  
処々、日坂裏通りにも有<sub>レ</sub>之趣申上候処、「夫往昔ハ余程  
大社なるべし」など御咄有。直々御勅使様へ申上候処、  
御神前神二枝、座具、御手洗水杯之御仰有て、直様可<sub>二</sub>參  
詣<sub>一</sub>、勅使立候也。御奉納金千匹被<sub>レ</sub>下候。御拜有、直様  
御帰被<sub>レ</sub>遊候。尚、始大原様外御一方、御やし（き）へ  
御入、種々御調候処、御勅使御屋敷へ御入来候。取あへ  
ず玄関之脇之間へ御案内申上候。奥へは御入なし。勅使、  
屋敷御立寄之事も不<sub>レ</sub>寄<sub>レ</sub>存候事故、御茶子の用意もなく、  
唯常之煮花之御茶にて事済、何とも恐入候御事也。御鳥  
居額、東西諸社取はづし候処、此度往来取纏は掛川侯御  
かゝりにて、出役は名波弥右衛門とか申方、此人心中有  
にて、当社之義ハ格別之御社柄故、額下候にも及間敷と  
被<sub>レ</sub>申候様、其ま、被<sub>レ</sub>置、御勅使御立寄候砌、平田氏へ  
うかゞひ候処、別段之御格合之御社故、額下るに不<sub>レ</sub>及と

被<sub>レ</sub>申候故、御額は下<sub>レ</sub>ずニ相濟候也。欠川出役、名波氏之先見感<sub>ス</sub>ず。

五日、御局方御下り、三位之局・伊予局・新内侍・大和いのかげのまぬ典侍局など、其外数多御下り也。夜べ雨有しかど、今朝ハ雨止かた、見事也。

○今般、御東巡ニ付、御道筋住居之者、八十歳以上金三百匹、七十歳以上金貳百匹、為<sub>二</sub>慰老下賜事<sub>一</sub>。

明治元年辰十月

弁官事

〔注〕日付の頭部欄外に「年号改」と書き込む。「弁官事」は、弁事（前出）に同じ。

六日、因州侯御下り、大勢。ナカヤ（中谷、浜松市天竜区）書雲来訪。

〔注〕「因州侯」は鳥取藩主、池田慶徳。

五日落墨、己七十一歳ニ付、金貳百匹頂戴。誠ニおもひもかけず御恵、身余説（悦）（の）程、涙をこぼし畢（をはんぬ）。近隣の人々へ、右よろこび、酒まゐらす。

〔注〕貳百匹は二千文で、現在の約五万円相当。

七日、曇。欠川へ行。

八日、猶曇。熱田之社中之人、安房国へ配札之戻とて立寄。是ハ江戸見外へより候一封持来る。頼につき、たにざく一葉したゝめとらす。同人、話。

不二

大空を覆ふ霞の袖にだに

余るハふじの高ね也ける

文隆

聞きしより見るに勝れるふじの根は

名計高きたぐひならめや

千浪

よにふれば強きもなふぞせられぬる

心はるけきミぶの川風

清直

竹 いかにかと見つゝぞおもふ竹のよの

曲るをためん力なければ

夏蔭

見外一封、例の『槻弓集』也。

花そばやめくら蒔したおこし畑

外

〔注〕和歌四首は尾張国熱田社中の御師が江戸で見聞した作を書き留めたもので、文隆は未詳。千浪は加藤氏、江戸の住。清直は貝塚氏、出羽秋田郡の人、夏蔭門。夏蔭は前

田氏、江戸の人で、元治元年没(72)。「此夕集 三十七」  
十月九日の記事に、「東京菊守園より『槻弓集』廿四編到  
来」とある。

落墨此間。

(四) 廿五日、晴。平宇(袋井市)水音、江戸よりかへる。春  
湖の句を見る。尚、おく話、あい津、先月廿日、降参。  
親子、白衣にてあらごもの上に二日夜歎願、城中之人、  
士民、猶親子、切腹べくとの事之由。仙台も開城、寺入  
との事。上杉は早く降参にて、羽も上杉のすゝめにて降  
参之由也。庄内侯、手づよかりしよし。会津、白川口は  
早く切明しかど、越後口手がたかりしよし。

(注) 八月二十三日、新政府軍、会津若松城を囲む。会津  
藩白虎隊、飯盛山で自刃。九月二十二日、藩主松平容保、  
開城降伏(『近代日本総合年表』)。

此ほど他出、筆怠る。

(明治元年) 十一月廿九日、快晴。スン(駿)青島延松、  
来訪。セト(藤枝市)書状有。松寿(潮海寺住)来。徴  
兵七番隊輜重方、新良田左兵衛と云人、来訪。画帖、

書遣す。

(明治元年) 十二月三日、因州士、登玉子来訪、おく争戦  
ばなし有。いせ山田人、来訪。

戦争にのぞみて

玉入の筒持ながら月見哉

東京へ陣を引て

長い夜を夢に明しうきね鳥

太助大島(磐田市豊浜)行、知碩(中野住)・素涼(大島  
住)へ文通。応山(塩井川原住)、金谷詰弥藏行。

(注) 因藩士河崎藤祿、登玉君、来遊、風話(『此夕集 三  
十七』十二月五日)。十月六日記事参照。

四日、天気。

五日、おなじく。カクワ(掛川市)巻。

六日、おなじく。

七日、曇。甲斐人雷石文音、圭五来訪。掛川侯、途中よ  
り御帰駕。

(注) 甲州圭五ぬし来訪。安田雷石ぬしの手紙持参、直に  
返事認与ふ(『此夕集 三十七』十二月十一日)。

八日、月岡(菊川市)里雲巻、評。中方(掛川市)春園来。書もの、石川(依平)たにざく・翁像三ぶく、己たにざく二葉、書遣す。

九日、二又(浜松市天竜区)雨竹、横浜より帰るさ、た(に)ざく五葉、書遣す。さけ。

十日、天気。なほき(直喜、飯田住)評巻、持来。猶平宇(袋井市)手状、水音(平宇住)病氣之由ニ驚。評ハあとよりとて、直ハ帰る。太助、カクワより日詣。

十一日、久つ(部)連松翠、巻持来。

十二日、おもや嫁、引取。

十三日、雨。至尊御上りニ付、徳川家御家老、戸川君御馳走出役、休息ニ茅屋ニ御入。御通行、夜に入、松寿(潮海寺住)・里雪(未詳)拜見に来。終日雨。

十四日、雨止。中泉・三ツ門客有。里鶴(横須賀住)来訪。

十五日、快晴。

秋ちかき入道雲も緋のころも

蒼山

其入道もしらぬ夏やせ

## 【参考】

『拾山日記』(永島勉氏蔵)から明治元年十一月九日と十日の記事を以下に引用する。なお、拾山については「連句の部」所収の『夏ごもり』、「書簡の部」所収の「六拾山宛一通」の【解題】参照。

○九日、去る夜之竜の夢、符合之事あり。出立。夕方、山なしより平宇之水音亭へ着、泊。

○十日、水音・尺波之兩人より集料・餞別到来。出立。午刻後、柿園へ着。老人留主中ながら泊る。(下略)

○十一日、出立。大島(磐田市豊浜)の政右衛門素竜子(涼)方を訪ふ。嵐牛老、福田(ゆで)より来る。同宿。

○十二日、嵐牛老・知碩・素竜(涼)、右乗合舟中にて酒、一興。夕方、福出(田)之大竹清太夫晴笠方着、泊る。対山之認物、可亭の印、芹舎・有節兩人之短尺等、相わたす。春谷行も同断。夜、少し時雨。

(注) 大島政右衛門素竜は、『柿園日記』慶応四年二月廿二日には「大しま素涼」、嵐牛没時の『香奠帳』(明治九年)には「大島村／伊藤素涼」と記される。

# 書簡の部

嵐牛書簡集

凡例

- 一、片仮名はそのままとした。
- 一、紙幅の節約のため、書簡の本文と付記された句は改行のところも追い込んだ。

一、書簡は、以下の通り宛名別に分類して収録した。

- (一) 晴笠宛二通      (二) 三千丸宛五通
  - (三) 水音宛五通      (四) 月彦宛三通
  - (五) 玉見(為一)宛十三通      (六) 拾山宛一通
  - (七) 椿谷宛一通
- 一、参考として【受信の部】を設け、以下の四通の嵐牛宛書簡を収録した。
- (一) 蒼虬発信一通      (二) 依平発信一通
  - (三) 烏谷発信一通      (四) 土前発信一通
- 一、その他は全体の翻刻凡例と同じ方針によった。

(一)晴笠宛二通

【解題】磐田市福田の大竹裕一氏蔵。嵐牛門の四天王として知られる大竹晴笠、此君園宛の書簡。①に付記する「月に見る…」の句は、文久二年(一八六二)の『俳諧どめ』に収められる嵐牛・春谷・晴笠・拾山の四吟歌仙の発句で、同年二月の年始状と判明する。②の文面に記される駿河国瀬戸の流翠は慶応四年(一八六八)の入門で(「柿園門人録」)、「御一新(維新)」の文言から、明治に改元されたからのものであろう。

【翻刻】

①如月二日付 此君園宛 柿園

新年之佳慶、千里同風、愛たく申納候。先以(注1)暉家御揃御越年可被遊、欣然之至ニ候。草庵無事重齡、御休神可被降候。此節庭前梅咲出、且鶯二三朝ほのめき申候。御地いかゞ。猶、詩風もえ出候ハゞ、御序御恵可被下候。今年は殊之外多忙、御文音延引、御海恕可被下候。先八年甫之御祝辞申上たく、匆々頓首。

如月二日

柿園

此君園様御もとに

月に見るものゝ始や梅(の)花

鶯のうちへ舞込よかむかな

(注1) 暉家…貴家に同じ。

(注2) 御休神…御安心。

(注3) ほのめき…少しずつ鳴きはじめ。

(注4) 年甫…年始。

②十月十二日付 大竹兄宛 柿園

久々御不<sup>ごぶいん</sup>言、御安全之由、奉<sup>ほう</sup>賀候。其後御風流いかゞ御入候哉。扱<sup>さて</sup>、此仁ハ、スン、セト(駿、瀬戸)と申<sup>いり</sup>處、

流翠と申(す)野老社中之人ニ御座候所、此たび売事筋<sup>すい</sup>

ニ付、御地迄罷<sup>まかりいで</sup>出候様子。若此人望<sup>もし</sup>之売物、御地ニ御

座候ハ、ちとく御手引き可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下様、御頼申上候。

御地之事ハ更ニ不<sup>しらざるよし</sup>知由故、野老より無<sup>よんごころなく</sup>扱、御頼申上候。

扱々風流人も此様な手紙書様な事も御一新也。先ハ凡<sup>おほよそ</sup>

急用迄。

冬中に貴地へも出杖之心組(ニ)御座候。されど老ぼれ、

寒さにも向事故、難<sup>はかりがた</sup>計候。先は、追々金玉は御目にか

け可<sup>レ</sup>申候。勿々頓首。

十月十二日

大竹兄 几下

柿園

(注1) 売事筋…売買、商売の件。古く、「売」には「ウル」

「カフ」の両訓があつた。俗用なので宛名も俗名となつて

いる。

(注2) 出杖…旅に出ること。ただし、ここでは泊まりがけ

で門人指導に出掛けること。

(注3) 金玉…自句を冗談めかして書いたか。雅用で出す場

合、文端に近詠句を書き添えるのが通例。

(二)三千丸宛五通

【解題】静岡県史編纂室提供の複写による。三千丸は横須

賀藩士で、俗名は森山伴藏、俳号桃園三千磨(「柿園門人

録」)。嵐牛の『俳諧どめ』には両吟二巻を収めるのみで、

安政六年(一八五九)に入門しているけれども、連句指導は

ほとんどが文通によるものであつたことが以下の書簡に

よつても判明する。駿遠両国は早くから江戸の一派、雪

門(風雪系)が地盤としていた土地柄で、とくに横須賀

藩には門人が多く、その一人三千丸は慶応元年（一八六五）に雪中庵鳳洲から文台を免許され（塚本五郎著『郷遠江の調査研究』昭和24年刊）、同三年の鳳洲編『旦暮帖』（歳旦帳）には「他邦文台席」という地方宗匠グループの末席に横須賀の金英とともに句が収められている。なお、横須賀は早くから風揚げが盛んで、②の書簡によると嵐牛に風をプレゼントしたところ、孫には上手く揚がらず、助っ人を頼んで揚げようとした文面が見え、微笑ましい。

【翻刻】

①日付欠 三千丸宛 嵐牛

嵐牛

三千丸様几下

花墨<sup>(注1)</sup>拝見 仕<sup>(注1)</sup>候。追々寒威はげしく御座候所、益<sup>(注1)</sup>御安靜可<sup>(注1)</sup>被<sup>(注1)</sup>遊<sup>(注1)</sup>御座、奉<sup>(注1)</sup>賀上<sup>(注1)</sup>候。然者、御付<sup>(注2)</sup>拝見、則次<sup>(注3)</sup>員いたし上候。なほ、追々可<sup>(注2)</sup>承候。此節も兎角雅事<sup>(注4)</sup>しげく、ふるひく相つとめ候。先般申上候福田<sup>(注5)</sup>一会、未出杖不<sup>(注5)</sup>仕候。然らば、是非と存候へども、一兩日の寒風、骨を徹し、尻込いたし居候。其中御左右申上候可候<sup>(注6)</sup>。

起出るや火も出来雪も降さたに  
此節はこゝらにて朝暮<sup>(注6)</sup>過し申候也。

ものかくやおくれ先だち狩の犬

春越

手ばなせバはやいぶかしきつぎ穂かな

刈口にはやのびこしてあしの角<sup>(注6)</sup>

先<sup>(注6)</sup>けしき有や白魚のはつはたご

野に山にたゞあまりけり春の水

御評。乱書御免。

(注1) 花墨…相手の手紙をいう敬語表現。

(注2) 御付…相手の付句をいう敬語表現。

(注3) 次員…次韻。連句で、付句を詠むこと。

(注4) 雅事…俳諧をいう。

(注5) 福田…ふくで。山名郡、現在の磐田市の地名。大竹晴笠・春谷兄弟などの門人が居た。

(注6) 御左右…お知らせ。お便り。

②五月四日付 ミち丸宛 嵐牛

此ほど中、失礼仕候。さて、御恵被<sup>(注6)</sup>降候<sup>(注6)</sup>八巾、上見候

処、トンボ返りいたしこまり候と申(し)、孫の揚見て具  
よと責候。され(ど)今朝ハ書状認、外にも尋候事の  
有<sup>これあり</sup>之、ひまなく、未取あげてミ不<sup>いまだ</sup>申候。明日ハ頼置候  
手段にて、上可<sup>まじ</sup>申と楽しミ居候。手製納豆少々呈上、も  
つともふた之処、入ものなく、古曲物有合にて呈上候。  
曲は随分あらひ申候。早々

五月四日

嵐牛

ミち丸様几下

(注1) 尋候事…調べ物。

(注2) 明日…日記では、慶応三年五月六日と七日に風を揚  
げた記事が見え、年次が判明する。

③ 文月十七日付 三千丸宛 柿園

朝夕冷気(ニ)相成候所、益御安全可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>遊<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>、奉<sup>レ</sup>  
賀候。然者、御製之うちは沢ニ御恵被<sup>レ</sup>降、忝<sup>かたじけなく</sup>奉<sup>レ</sup>謝  
候。何うちは二一句一章ハ有さうなものと存候へども、  
盆前より殊(の)外いそがはしく、猶、近日他出之心組  
故、更にいとま無<sup>これなく</sup>之、其中御礼一句仕べく候。次韻被<sup>レ</sup>  
遣、尚ほ句相添候様之御文端之処、御詠草御取落しにや。

左ニ少々鴨舌印(記)上候。御評可<sup>くださるべく</sup>被<sup>レ</sup>降<sup>レ</sup>候。勿々頓首  
文月十七日 柿園

三千丸君御もとに

末広な方が浅瀬か天の川  
朝さむや谷に溺るゝせみの声  
つたがまゝひさご釣<sup>釣</sup>けり道具店  
いなづまや人の目先へ消に来る  
一はちる風すうと来る袂かな

御評

(注1) 鴨舌…「鴨」は「駄」が正字。自作を謙遜し、けた  
たましただけのモズの鳴き声に譬える。

④ 如月廿六日付 三千丸宛 柿園

如<sup>おぼせのしりぞ</sup>レ仰暖和(ニ)相成候処、益御安康被<sup>レ</sup>遊<sup>二</sup>御座<sup>一</sup>、奉<sup>二</sup>  
賀上<sup>一</sup>候。然バ、御歳末御佳義として一封御恵被<sup>レ</sup>降、忝  
受納仕候。以来、必御心配被<sup>レ</sup>下候間敷奉<sup>レ</sup>存候。御付、  
次韻御句、点かけ上候。御入手可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>降<sup>レ</sup>候。尚、拙句少々  
左ニしるし上、御評可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。勿々頓首。

如月廿六日

柿園

三千丸様貴下

(別紙)

雪卒の先見えそめぬ春の月  
 やど入の駕に酔けり霞かな  
 くらがりを飛ばら白き蛙かな  
 かゆ杖や廊下の闇にさぐりあし  
 もの書バ落字しにけり花にかぜ  
 風がそふまでにはさえずのり(注1)礎また  
 折指の起ぬ間にちる桜哉  
 眼ふたつの外にもなき白魚哉

御評可被降候。

(注1) のり礎：海苔の質を和らげるために使う木槌。

⑤八月二日付 三千丸宛 柿園

久々御不音、御なつかしく奉存候。残暑之節、「益」御  
 安全、奉賀候。先般御状被降、忝拜見。早々御返書も  
 差上可申所、今年ハ不計はからず、するが路に両度出杖、百日  
ばかり計遊申、存外日数費し、殊ニ東西大ニ流行、ナゴヤ梅裡、  
 吉田蓬字など杯出杖、彼是多忙。それ故か、ふ与何れへと申

にハ無之、全体野老がおこたり、是ハ御案内にて、御用  
 捨可被降候。扱、もはや御なじみ被遊候半はん、奉察  
 上候。貴国風雅家盛んと承およびる候。定而お楽しミ  
 可被遊候。横須賀ハ四五度かた、後は雅事さつぱり音  
 も沙汰も無之相成、其後、野老も出杖不仕候。例之乱  
 書、二三書ちらし呈上。差上候もいかゞなれども、野老、  
 格別之老衰も無之、夫を御しらせ申度迄。しかし、よつ  
 ぽどハ草臥申候。今は御察可被下候。裡(注1)と宇、例之両  
 吟、御目ニかけ度候得ども、何分いとま無之。何卒御幸  
 便之節、御近作承度、猶御国人、高雅の御次手に可被  
 降候。先久々之御疎声迄、匆々頓首。

八月二日

柿園

三千丸様御もとに

(別紙)

居すまて出る手におぼえけり疇(注2)まさり  
 あけばついで遊びけりかし小袖  
 袖引ひて出て行今日や星むかへ  
 さびしさのいひとりにくき芒かな

(注3) 清少納言の筆すさみに、博士の打つゞきて女子

うませたる、すさまじきもの、と有に

(注4) 積奠の人あしらひや膝に児

箒からゆふてさうぢや今朝の秋

さびしさのいひとりにくきすゝきかな

御評可被下候。

(注1) 裡と宇：前出する名古屋の梅裡と吉田(豊橋)の蓬

宇。明治三、四年頃、遠州来遊。

(注2) 畴まさり：鷹が畴(鳥屋)ごもりをした後、それ以前より勇猛になることをいう。秋の季語。

前より勇猛になることをいう。秋の季語。

(注3) 清少納言の筆すさみに：『枕草子』の第二十二段(能

因本)に「すさまじきもの」として列挙するなかに、「博士のうちつづき女子うませたる」とある。

(注4) 積奠：せきてん。二月上の丁の日、大学寮や藩校な

どで孔子と弟子の十哲の像を掛け、供物をそなえて霊を

祭る行事をいう。八月にも行われたが、季語では二月の

方を重視し、春とする。

### (三)水音宛五通

【解題】足立順司氏藏。自庵や滞在先から水音宛に送った

五通を横長、八段八面に表装したもののマクリ。水音は

天保十四年(一八四三)、城東郡丹野村(現、菊川市)の素

封家三橋家の次男として生まれ、文久三年(一八六三)、平

字の豪農、足立家の養子となり、六代の孫六を継いだ。

分家の足立孫八、市太郎が尺波と号し、嵐牛に入門して

おり、養子になつてすぐ、その誘いで水音も一緒に嵐牛

の指導を受けた。明治四年(一八七二)の『そのまま集六

編』では二十九歳の若さで序文を書く。その間の経緯を

伝える書簡も交じり、嵐牛が水音の才能や人柄などを高

く評価し、頼りにしていたことが判る。後号、湛水。「文

久三年春興」(「柿園摺物集」三に所収)、「終焉之記」(「柿

園嵐牛悼控」所収)、嵐牛一周忌追善『山月集』序を参

照。

照。

### 【翻刻】

①一月七日付 水音宛 嵐牛

春湖より之一書、元日兄君(注1)御頼、遣候。もはや

相達し候哉、いかゞ。

新曆之佳慶、千里同風、めでたく申納候。御揃御越年可被遊、欣然之至ニ候。『其俣』<sup>(注2)</sup>夏之部、漸えらミ出し、差上候。宜御頼上候。扱旧冬、少々御不快之様承候。先日、兄君方承候処、とく御順快之由、大慶候。今年ハ先御地へと存候処、駿河社中やかましくかまへ、先かしこへ出杖之積にいたし候。帰杖次第ニ伺申上候べく候。ほ句も山々なれど、先ハ拝眉ニと少々しるし上候。先右迄、勿々頓首。

一月七日

嵐牛

水音君御もとに

(注1) 兄君…水音の実家、丹野の三橋四郎次のこと。

(注2) 其俣…『そのまま集六編』の版下浄書を依頼した文言で、同集は、明治四年水音の序である。

②十日付 水音宛 嵐牛

御状拝見。寒冷之節被遊御安全、珍重候。御頼委細承知仕候。尚、此頃御手透之由、参上可仕候。野生、見付より直に帰りしは持病いたミまし、夫故候。此程又試雪

の家内小言、一兩日中ニ出かけ可申存ぬも、全体、彼集<sup>(注3)</sup>入連句之主ニ付、其序、貴堂(ニ)任候心組之処、時分柄故、いかゞあらむと存候処、御手透とは幸之事ニ候間、いづれ出杖可仕候。少々小用中にて取込、先あらく御返事のミ。万事は拝眉。早々頓首。

十日

嵐牛

水音兄几下

足立水音様 嵐牛

貴答

(注1) 持病いたミまし…水音の「終焉之記」(「柿園嵐牛悼控」所収)によれば、晩年、痔病に悩んだ。

(注2) 試雪…森住の嵐牛門人。

(注3) 彼集入連句…水音が序(明治四年)を書いている『そのまま集六編』には連句は収録していないが、当初、その予定だったのであろう。

③六日付 水音・尺波宛 嵐牛

「先」日中は永々「と風交」、且御馳走「御」老母始皆々

様「へ」宜御致声奉頼候。扱、野老、眼鏡「ど」こで  
 失候哉、見えず。もし、貴家ニ落ては「居」不申哉。か  
 け心「ミ」之眼がねハあれど、かけ不申候故、甚あひか  
 ね、此節ハ盲人同様之事にて、誠こまり入候。もし「も  
 全処（ニ）」ゐ候ハ、幸便御遣し可被下様奉頼候。  
 ころも風交、今一日二日ニ相成候。「」

六日

嵐牛

水音様

尺波様

几下

(注1) こゝ…本書簡で行方不明となった「眼鏡」が見付か  
 り、「わすれもの、見付へ御差出し被降候由」に触れた  
 文面が④の書簡に見えるので、「こゝ」は見付と判明す  
 る。

④「十一」月一日付 足立孫六宛 嵐牛

御安全奉<sub>レ</sub>寿候。先「日ハ」寛々難<sub>レ</sub>有、奉<sub>レ</sub>「謝候」。其節  
 わすれもの、見付へ御差出し被<sub>レ</sub>降候由、承知仕候。野

老、トバノ（鳥羽野、袋井市富里）風交中、少々気分そ  
 こね候まゝ、見付へ不出、直ニ引取申候所、今日迄在庵  
 仕候。明日ハ横須賀の方向ニ而出杖之積ニいたし候。帰  
 杖之頃、うかゞひ可<sub>レ</sub>申とハ存候得とも、夫も当<sub>レ</sub>ハ成  
 不<sub>レ</sub>申候。いかゞ小築庵、御風交被<sub>レ</sub>遊候哉。此頃之御文  
 「通」にて面計とノ事。今迄、帰路にと野老待候也。ど  
 うぞかり舎ノ一時、風交いたし度候事、走使之人を引とゞ  
 め、一書呈上。頓首。

「十」月一日当賀

平字村

塩井川

足立孫六様貴下

嵐牛

(注1) わすれもの…③の書簡で探索を頼んでいる眼鏡。  
 (注2) 小築庵…春湖の庵号。明治三、四年頃、来遊（契史・  
 春湖共編『十州紀行』明治四年臘月奥）。書簡①の尚々書  
 き参照。

(注3) 面…歌仙（連句）の面六句。

(注4) かり舎ノ一時…春湖の旅泊中の短期間をいう。

⑤四日付 水音宛 嵐牛

御安全奉<sub>レ</sub>寿候。『其まゝ』、不足人も、野生方にてもや  
り知不<sub>レ</sub>申。半醉<sup>(注2)</sup>、岩水寺小僧様也。其外相分可<sub>レ</sub>申、其  
内可<sub>二</sub>申上<sub>一</sub>候。昨日、其常ぬし御見<sup>(注3)</sup>、幸便あたらへ候。<sup>(注4)</sup>

是彼見渡し候処、十卷計不足<sup>(注5)</sup>ニ相成候様也。いかゞ可<sub>レ</sub>  
致哉。追摺いたさせ可<sub>レ</sub>申哉。先其まゝ捨置可<sub>レ</sub>申や。先  
日、仰越<sup>(注6)</sup>れ候二卷差上、あとをそれぐ<sup>(注7)</sup>に当見候所、よ  
ほど不足、こまり申候。御地ニあまり有バ、やたらに人  
ニ遣らぬ(様)、御とゞめ置可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。右勿々。

四日

嵐牛

水音様

句なし

行ぬけに裏は湖也月の宿  
ながれ汲ひさくの音や初月夜  
何処やらで放した鳥か月の前  
つらにくき鴉や放つ心にも  
いつも能音を殊更落し水  
小気味能音や高ミの落し水  
追ば又来る意地の有とんぼかな

蜻蛉や音する程の羽「な」らず  
飛石や蜻蛉のけバ日のさめる  
三日月や池は降たる漑水<sup>(注8)</sup>

ねぐらまで入て鶴鳴野(づ)ら哉  
鳴捨た口きれいなうづらかな  
遠浅も心二千海へ秋の夕  
遣ふともなく墨するや今朝の秋  
星にさへ今宵は有をわび枕  
むし鳴や夏のまゝなる旅衣

○

残火に吹立風や川社  
蜘蛛の子のちるや机も持て立<sup>(注9)</sup>  
負たものゆり上てつむいちごかな  
垣間見や螢を打てまぎらかす  
川虫も羽のきく日也雲のミね  
蝨ほちく朝日のわたるなへのうへ<sup>(注10)</sup>  
座日も一日ハほしき田植哉<sup>(注11)</sup>  
雨あとの露に日のとる夏野哉<sup>(注12)</sup>

浮出たものとハミえぬはちすきは哉い

(注1) 其まゝ、年次集『そのまま集六編』のことであろう。

①②書簡参照。以下、配冊部数が十冊ほど不足しそなたとの文面である。

(注2) 半醉：豊田郡岩水寺の僧。明治二年、同寺の住職行慶、俳号月查とともに入門〔柿園門人録〕参照。岩水寺については『嵐牛発句集』の(注21)、および『山月集』解題参照。

(注3) 其常：山名郡鳥羽野(現、袋井市富里)の人。俗名は溝口時三郎〔柿園門人録〕参照。文久二年(一八六二)に亡くなった足立本家五世孫太郎の香奠帳によれば、同家とは縁戚関係にあつたようである。

(注4) あとらへ：あつらえ。

(注5) 十巻：十部(冊)の意で、以下の「巻」も同様。

#### 四月彦宛三通

【解題】浜松市立中央図書館蔵(宝林書屋旧蔵)。未表装。

①には緑色で葦の葉を摺った下絵がある。駿河国志太郡兵太夫新田(現、藤枝市兵太夫)の月彦に宛てた書簡。

二通は春興摺物にかかわるもの、一通は三尺坊奉額句合のチラシの送り状。

塚本五郎氏遺稿(4)「北堀月彦の句碑」〔俳諧静岡〕第95号、平成17・2・2)によれば、月彦は八左衛門新田の開發者北堀八左衛門の9代目、俗名八蔵。明治十八年の没(78)。②の連名宛名雲眠、前号か司は息の玉平で、慶応四年に入門〔柿園門人録〕、親子で嵐牛の指導を仰いだ。しかし、③の宛名に「月彦詞長」とあり、かつ「御社中」との文言から近隣連中の指導者だつたことが判かり、地元の寺社への奉灯(額)句合を催したり、選評した番付も伝わっている〔俳諧静岡〕第91号、平成16・5・5に図版掲載)。⑤の⑫に付載した月彦催主、嵐牛評句合チラシ参照。

#### 【翻刻】

①二月十五日付 月彦宛 柿園

逐日融和(ニ)相成候所、御安全奉賀候。然者、春興(注1)すり、御送り被か下た忝は、扱さ々見事ニ出来申候。猶、御面被お遣、任ま貴意点かけ上候。いづれもおもしろく承候。

今年ハ正月よりナゴヤ人参り風交、無<sub>三</sub>寸暇、やうく  
昨日皆帰り申候也。ちと御出かけ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊候。前文風交  
いとまなく、ほ句更々出来不<sub>レ</sub>申候。されど二、三しるし  
上、御評可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。先、匆々頓首。

二月十五日

柿園

月彦様几下

(注1) 春興すり：近世後期、歳旦や春興などの発句を摺物  
にし、交換することが流行した。多く彩色した挿絵を入  
れるので、「見事」はその感想。本書所収「柿園春興摺  
物」参照。

(注2) 御面：歌仙連句の面六句をいう。

②十月廿四日付 月彦・雲眠宛 嵐牛

弥<sub>いよいよ</sub>御安静奉<sub>レ</sub>寿候。其後は御ぶ音いかゞ御風流被<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>入  
候や。近在、<sup>(注1)</sup>三尺坊奉額、相催ニ付、ちらし参り候。則  
差上、宜<sub>よしく</sub>御補助被<sub>レ</sub>下度、御頼申上候。大の川裾辺、一  
切不案内ニ而、ちと遠方なれど、御地は御序可<sub>レ</sub>有<sub>レ</sub>之、  
宜御頼申上候。時候宜相成候。ちと御出かけ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。  
猶、野(老)も大の川越候心組にて、羽づくろひいたし

居候也。先ハ早々。

十月廿四日

嵐牛

月彦様

雲眠様

御下

(注1) 三尺坊奉額：秋葉山秋葉寺の三尺坊大権現。火防の  
ご利益で広く信仰された。上りの東海道では掛川から秋  
葉山道が分岐、一の鳥居がある。ただし、秋葉寺は明治  
六年の廃仏毀釈で廃寺となり、三尺坊大権現の御真体は  
久能(袋井市)の可睡齋に遷される。

③師走廿一日付 月彦詞長宛 柿園

御状拜見、如<sub>レ</sub>命寒冷之節(二)御座候所、御安全之由、  
奉<sub>レ</sub>賀候。然者、春興すり御催之由にて、御句被<sub>レ</sub>遣、任<sub>三</sub>  
貴意一点かけ上候。猶、此方催すりもの、御加入被<sub>レ</sub>遊候  
由、承知仕候。そは別紙ニにし、上候。久々にて御句  
沢ニ拜見、上々、<sup>(注1)</sup>老染甘舌仕候。都而御社中御出情相見  
え、大慶候。先、御返書まで、匆々頓首。

師走廿一日

柿園

月彦(注2)詞長御もとに

(注1) 老染甘舌…句を舌頭に吟じ、老いた身にしみじみと感じ入ること。

(注2) 詞長…詩文の大家。詩宗・宗匠に同じ。

(五)玉見(為一)宛十三通

【解題】嵐牛俳諧資料館新収の十三通で、⑫に関連する月彦催主の句合チラシ一枚を参考として収録する。「柿園門人録」によると、玉見は駿河国志太郡瀬戸(現、藤枝市)の人。俗名は岩本吉藏。以前から柿園評月並に参加していたが、慶応三年仲春に入門してからは島田連中の有力メンバーとして柿園評の月並興行に協力したことがこれら書簡群からも判明する。

【翻刻】

①師走廿五日付 玉見宛 嵐牛

未得<sup>(注1)</sup>貴意<sup>(註)</sup>候得共、益御安全奉<sup>ニ</sup>賀上<sup>一</sup>候。扱々年中月並、御出情被<sup>レ</sup>下候而、忝奉<sup>レ</sup>存候。霜月分点取もの、巻<sup>まき</sup>開いたし候得ども、何分判出来かね、延引相成候。点取

ものにハ、御手柄有<sup>レ</sup>之候まゝ、今日、幸便差上候。御入手可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。明年八月並立候。未<sup>いまだ</sup>ちらし出来かね、いづれ不<sup>レ</sup>遠、御目(二)かけ可<sup>レ</sup>申候。匆々頓首。

師走廿五日

嵐牛

玉見様几下

(注1) 未得貴意…まだお目に掛かってない、との意。従つて入門(慶応三年仲春)以前で、「判(板)出来かね」という出版状況から、入門直前、慶応三年末の発信と推定される。

②正月十六日付 玉見宛 柿園

新曆之御よろこび、奉<sup>レ</sup>賀候。然「は」入門之義、御仰越<sup>おほほせし</sup>承知仕候。ちと遠路、御不都合成べく候得ども、御寸暇之節は、御出杖可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>成候。愚老事、二月中頃、島田迄<sup>まかりいで</sup>罷出可<sup>レ</sup>申、事<sup>(注1)</sup>二よれバ、請所原川氏迄も可<sup>レ</sup>参哉。左二候得バ、御門前通行成べく候間、御めニかゝり可<sup>レ</sup>申、道へ「幡」御出し可<sup>レ</sup>被<sup>レ</sup>下候。先ハ返書迄、匆々頓首。

正月十六日

柿園

玉見様几下

入門伺之義、一封被<sub>レ</sub>下<sub>二</sub>送状<sub>一</sub>、入手仕候。尚、御年玉として扇御恵投、是又忝受納仕候。景物<sub>けいぶつ</sub>もの失念之所、右もの被<sub>レ</sub>遣、揮毫、差上候。宜御頼申上候。未寒さもつよく、手かゞまり、甚不出来至極、汗顔之至ニ候。月並も板行師<sub>注3</sub>せはしく、出来兼、延引仕候。今年ハ見合之積り之所、此頃人々すゝめニ付、題ほりかけ候。近日之中、御めニかけ可<sub>レ</sub>申候。返上。

(注1) 請所原川氏：駿河国請所（現、焼津市治長請所）の原川治三郎、俳号茶烟で、「柿園門人録」によれば元治元年（一八六四）の入門。

(注2) 正月十六日：慶応三年の正月十六日。前日、正月十五日の日記に、「スンセト玉見使、来。入門申来」、同月十七日に「セト使、帰り来。書もの頼遣す」との記事が見え、秋葉山詣からの帰途の使者に「書もの」（揮毫した扇）を託したのである。

(注3) 板行師：板木師、彫工のこと。

③五月廿三日付 玉見宛 柿園

御安全奉<sub>レ</sub>賀候。四月分差上、宜御頼申上候。先日島田へは御出無<sub>レ</sub>之、残念候。翁忌頃には又大井川越之心組ニ

候。其頃くり合、一寸も御伺可<sub>レ</sub>申と存候。先、流翠<sub>注1</sub>ぬしよりも梅城<sub>注2</sub>迄御書被<sub>レ</sub>遣候由ニ候得ども、何分日限つまり、出杖不<sub>レ</sub>仕、御序よろしく。何れ来月ハ御めニかゝり可<sub>レ</sub>申候。先は匆々頓首。

五月廿三日

柿園

玉見様几下

(注1) 流翠：駿河国志太郡上青島瀬戸の人。俗名青島徳藏。

(注2) 梅城：駿河国志太郡島田宿の人。俗名梅島彦兵衛。

(注2) 梅城：駿河国志太郡島田宿の人。俗名梅島彦兵衛。慶応二年の入門（柿園門人録）。

④文月廿日付 玉見宛 柿園

御状拝見。如<sub>レ</sub>命秋暑つよく御座候所、御安全之由、大慶不<sub>レ</sub>過<sub>レ</sub>之候。御出も有<sub>レ</sub>之哉と日々御待申候処、無<sub>レ</sub>其儀、残念候。野老、来月三日頃迄ハ在留仕候。御透も御座候ハ、御出杖可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊候。御詠草御送り、会所へ先日も被<sub>レ</sub>遣候『其まゝ集』<sub>注1</sub>加入の句は少々御座候而、加入いたし置候。是も兎角判木師<sub>板</sub>せハしき故、今年中も相かゝり可<sub>レ</sub>申候。其中御めニかけ可<sub>レ</sub>申候。御詠草、青島にあ

とらへ差上、御入手可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。先、御返上迄、匆々頓首。

文月廿日

柿園

玉見様貴下

よき獵をして子のもどるよさむかな

ぬれ椽に敷もの待つや三日(の)月(注<sup>2</sup>)

いなづまや流し灯ひとつ風の中

(注<sup>1</sup>) 『其まゝ集』加入：玉見は『そのまま集六編』(明治

四年)に七句、追加に玉見更為一で一句入集。

(注<sup>2</sup>) ぬれ椽に：慶応三年晩夏の『俳諧どめ』所収の嵐牛・

水音両吟半歌仙の発句、慶応三年六月の「柿園評月並句

合」にも見え、発信年次が判明する。

⑤八月四日付 玉見宛 柿園

朝夕(脱字)相催候所、御安全奉<sub>レ</sub>賀候。扱、先日御詠草

被<sub>レ</sub>遣候使之御帰待候得ども、御立寄下されず、残念候。

此四五日前、島田宿へ出杖、此節風交中(注<sup>1</sup>)(三)御座候。

ちと御出かけ被<sub>レ</sub>下度、奉<sub>三</sub>待上<sub>二</sub>候。いづれ野老義も、藤

枝迄一寸は出かけ候心組に候間、其節一寸おうかゞひ可<sub>レ</sub>

候、御社中宜御致声可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。延松・茶烟・月彦三子も御序も御座候ハゞ、御通じ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。御出杖可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>遊候。彼御詠草、先、差上度、一書呈上候。匆々頓首。

八月四日

柿園

玉見様

飛ちから後へあまるいなごかな

我のミと人もおもふか秋のくれ

芦のはにてりつく潮や初あらし(注<sup>2</sup>)

御評可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

(注<sup>1</sup>) 此四五日前、島田宿へ出杖：日記によれば慶応四年

七月廿五日の出杖。

(注<sup>2</sup>) 芦のはに：本書簡を受け取った玉見は、島田に出掛

け、この句を立て句に嵐牛と両吟歌仙を詠んでいる(『俳

諧どめ』所収)。

⑥十月廿二日付 玉見宛 柿園

御安全奉<sub>レ</sub>賀候。然バ先達而御詠草被<sub>レ</sub>遣、則墨引いたし

差上候。先日、流翠子被<sub>レ</sub>見候間、帰りニあつらへ候半ん

と存候所、浜づたひニ被<sub>レ</sub>帰候にや、音なし。今日、幸便

御座候間、差上候。尚、野老事、御地辺、又うつ谷落

葉見に出かけ候心組之処、追々寒さにむかひ候はゞ、い

かゞためらひ候。諸君よろしく。もはや春興すりも

の時も近く相成候間、春の句拝見いたし置度、追々いそ

がはしき時にハ相成候得ども、御透おすきあらバ、御いひだめ

可レ被レ成候。先ハ匆々、重便(の)期に、頓首。

十月廿二日

柿園

玉見様几下

⑦正月廿四日付 玉見宛 嵐牛

好物金山寺味よろしく、日々たのしみ、茶漬飯一杯

づゝ余分すゝみ、大分に損いたし候。

御安全被レ遊ニ御座ニ奉レ寿候。然バ去冬よりたんざく代、

キン山寺ミそ、大のり入、色々御恵、外一封被レ降、受納

仕候。猶、此たびは御句、沢山ニ遣され、いづれもおも

しろく覚、猶追々可レ楽候。もはや追々暖気相催候。不レ

遠大の川越候心組ニ御座候。万端其節とたのしみ候也。

先は匆々頓首。

正月廿四日

嵐牛

玉見様几下

⑧九月十日付 玉見宛 嵐牛

御安全奉レ寿候。先日被レ遣候詠草、今便差上候。御入手

可レ被レ下候。猶、切紙御申越之義ハ、其紙へしるし上候。

何れ九月末迄ニは罷出候心組ニ御座候間、其節上べく候。

先は匆々。

此節(注1)羽洲子、御地ニ留杖之由、定而御風交之こと(と)

奉ニ察上ニ候。

九月十日

嵐牛

玉見様几下

(注1) 羽洲子：『俳諧どめ』によると、明治二年の秋に来

遊、嵐牛と両吟歌仙二巻を残しているので、その年の書

簡か。羽洲については「柿園日記抄」慶応四年一月廿七

日の(注)を参照。

⑨霜月一日付 玉見宛 柿園

御安全奉レ賀候。今年は月並、板師不都合故、太はなはだおくれ

勝ばかりに計相成候。漸六月分出来、御めニかけ、宜御頼申

上、匆々。

霜月一日

柿園

玉見様几下

⑩極月十五日付 玉見宛 柿園社

御安全奉<sub>レ</sub>賀候。月並大延引仕候。判木師、久々不快故、

残念(二)候。十月分も近日之中、御めニかけ可<sub>レ</sub>申、宜

御頼申上候。

極月十五日

柿園社方

玉見様几下

(注1) 不快：病気の婉曲表現。

⑪日付欠 玉見宛 柿園

御安全奉<sub>レ</sub>賀候。去年分月並大延引、何分判出来かね、こ

まり入候。しかし、残り、追々御めニかけ可<sub>レ</sub>申、何分宜

御頼候。猶、遠方(三)御座候者、御序宜御頼申上候。

玉見様几下

柿園

⑫文月廿二日付 為一様 嵐牛

流翠行之序ニ

御安全奉<sub>レ</sub>寿候。又々御面倒、御頼申上候。初馬村連中ち

らし、君と月彦ぬし、補助ニ御頼申上度由、知石ちらし

差上、宜御頼申上候。ちらし少分なれども、先、到来候

分差上、何分よろしく。猶、先達而、御改名之名、考上

候。如何。問合聞候や。もしあしくバ、又々考差上可<sub>レ</sub>申

候。勿々頓首。

文月廿六日

嵐牛

為一様几下

(注2) 灯ともせといひおくれけり秋の夕

(注3) 雁はまだ空のもの也朝げしき

(注4) かま上る焚上頃やかりの声

こゝろなき蟹がけぶりも秋のくれ

御評可被下候。

(注1) 御改名：嵐牛に頼んで、玉見から為一に改号。『その

まま集 六編』(明治四年)の追加の句に「玉見更為一」と

ある。

(注2) 灯ともせと：明治三年晩夏の『俳諧どめ』所収、嵐

牛・尺波両吟歌仙の発句。

(注3) 雁はまだ：明治五年仲秋の『俳諧どめ』所収、嵐牛・

野風両吟半歌仙の発句。  
(注4) 焚上：神社などで祈祷のために火を焚き、病氣や災

厄を被い除く修法。富士講では「仙元大菩薩」のお身被  
けと称するものを身に付け、その前で火を焚く。

【参考】催主月彦・嵐牛評句合チラシ

嵐牛宗匠

(注1) 入花百孔

(注2) 待うけ

(注3) 二ノ半〇

春夏乱吟三句合 催主 月彦

三月五日メ切、秀逸出版、早々御返草仕候。

(注1) 百孔：「孔」は穴の開いた一文銭で、百文。

(注2) 待うけ：当時の月並句合では、判者が旅に出る留主

中も句合を催し、帰着してから判者が評点・開卷するの

を「待ち受け」と称している。このチラシの句合は近隣

の初馬（掛川市）での催しなので、嵐牛がメ切り後、初

馬に出掛け、応募作者たちの面前で評点することから「待

うけ」といったものか。

(注3) 二ノ半〇：〇は隠語で、銭貨の意。二組目の句の応

募料金は半額、すなわち五十文との意。

⑬ 二月一日晩方付 為一宛 嵐牛

初馬月並御手がら、右巻野生迄。(注1) 差上候詠草之儀、催主

一切之初心故、銘々(注2)もふ致、一からミいたし、閑廬迄(注3)

遣し候。この節、取込こまり入候。どふぞ御苦勞ながら

それへ御遣し可被下候。君ラ預ものは進候。野老

罷出候迄ニ、持参可仕候。左ニ御承知可被下候。御礼

も可申上ニ義も、其節差延し、不申上、匆々。

(注4) 二月一日晩方

嵐牛

為一様几下

(注1) 右巻：⑫に続く書簡で、「初馬村連中」の月並句合を

嵐牛が評、月彦と為一が補助。催主が経験不足で、開卷

後、誤って句合の清書巻と応募の詠草を嵐牛のところ

一括して届けてよこしたのである。「御手がら」との文面

から、句合の勝者（最高点）は為一と判断され、清書巻

は為一に贈られ、応募「詠草」は高点句の摺物（丁摺）

とともに応募各人に返送される筈のところ。

(注2) 銘々もふ：銘々が勝手に行動すること。

(注3) 閑廬：自庵をいう。弊廬。

(注4) 二月一日：明治四年の初秋に改号、翌五年の没なの

で、本書簡が為一（玉見）宛最後の書簡となる。

(六) 拾山宛一通

【解題】永島勉氏藏。遠州遊歴中に寄せられた地元連中の句稿を一括りにした内の書簡で、別に無署名の句稿二枚も含まれ、一枚の末尾には拾山の筆で嵐牛の住所と俗名、俳号が書き込まれており、併せて翻刻する。

拾山は三河国宝飯郡上之郷（現、蒲郡市神ノ郷町）の人で、俗名永島重次郎。兄、藤十郎、号梶岡とともに卓池に俳諧を学び、はじめ茶岡、のち拾山と改号。卓池の没後、上京して花之本宗匠の桜井梅室に就き、行脚修行のち京に白鱗舎と呼ぶ庵を結び、二条家から宗匠格を免許された。維新後、請われて和歌結社国風社の副社長となり、俳諧分局を経営。編著は多数。明治十七年の没（67）。

拾山との交流は天保末年にまで遡り、本書に収める『夏ごもり』（安政二年・一八五）では卓池門継承を図る完伍を塞馬・嵐牛・蓬宇とともに盛り立てるなど親密な間柄であった。遠州にも度々来遊し、嵐牛門人とも親交があった。

嵐牛は慶応三年（一八六七）十月十六日から出杖、平宇

（袋井市下山梨）の水音亭に滞在、来遊中の拾山、分家の尺波と四吟歌仙二巻を巻きはじめたものの体調を崩し、未満のまま這々の体で帰庵する（「柿園日記抄」参照）。半月後、拾山から手紙で、歌仙を満尾させたいと出杖を要請されるけれども、風邪で断つたのである。

【翻刻】

○十一月廿三日付 拾山宛 嵐牛

御安全、奉<sub>レ</sub>賀候。先日ハ御早々之至（二）候。野老事、いまだせき出、残念ながら此たびハ御風交出来かね候。定（而）此節おもしろき御事、御浦（山）しく候。尚、御頼申し置候三川行一封、御面倒ながら御とゞげ可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。其後、句なし。残念ニ候。かしく。

十一月廿三日

嵐牛

拾山君

御もとに

（別紙）

両のひぢかくれバ眠き火ばちかな

伐た松をしミに出たり冬ごもり  
掃たびの嵩に見上る木のはかな

冬枯や夜市をのぞく獵もどり

よき日ぞと出でたつ門や山ねむる

はき替たわらぢのちさき寒かな

船ひとつ干上りてゐる冬田哉

はつ雪やものぐさ垣のきくすゝき

両のひぢかくれば眠き火鉢かな

大空八星一ぱいの寒かな

ばせを忌の中やあるじの旅もどり

居回りの田に水はりて冬がまへ

根水迄さそふてかるゝすゝきかな

鵲舌のミ。御評。

遠州塩井川原伊藤清左右衛門、柿園嵐牛

(注1) 居回り：「ゐまはり」で、家の周囲。

(七) 椿谷宛一通

【解題】鈴木健治氏藏。日付欠。宛名の椿谷は城東郡(袋

井市)岡崎の人。柿園門四天王の一人貫一の息で、俗名は鈴木松次。明治三十四年二月二十四日没。椿谷は幕末期の柿園評月並句合に参加し、書簡の文面も月並の摺物発行が板木師のせいで遅れがちなことをぼやいている。付記する句から慶応三年(一八六七)秋、恐らくは月並の返草・摺物に添えられた送り状であろう。共通する文言や句が玉見宛書簡⑨、⑩に見える。

【翻刻】

○日付欠 椿谷宛 柿園

御安全、奉賀候。今年八月並、板木師不埒にて、兎角延引仕候。開卷七月出来候得ども、何分こまり入候。今年八月もよろしかりしかば、定(而)御盛吟有之候半ん。御泄可被下候。頓首

柿園

椿谷様

(注1) ぬれ椽に敷もの待や三日の月  
(注2) 能空や便船もらふいねのうへ

御評可被下候。

(注1) ぬれ椽に…慶応三年六月の「柿園評月並」などに所収。

(注2) 能空や…慶応三年(?)七月の「柿園評月並」などに所収。「便船(が)能空をもらふ」と擬人化して表現した句。

【参考】受信の部

(一)蒼虬発信一通

【解題】嵐牛俳諧資料館蔵。闌更門で、京の芭蕉堂を継いだ蒼虬の書簡。蒼虬は天保六年(二八三五)に芭蕉堂を弟子の千崖に譲り、八坂に対塔庵を結んだというから、その頃の書簡と判明する。師の卓池が健在中、嵐牛ら遠州連中が京の有力俳人に加評を仰いでいたことが判明する。

【翻刻】

○二月廿日付 嵐牛・東寿・亀兆宛 蒼虬

尚々、芭蕉堂ハ千崖と申す門人ニ相讓申候。

追々春暖、弥御清福珍重ニ存候。然者、去秋は評卷為御登候所、去年中は始終病氣にて延引、申訳なく候。

其上、去冬は隱宅普請取かゝり候処、いろく故障之事有レ之、病中ながら、極月引移り、漸此せつ快氣ニ而、致レ評進候。其せつ、為御挨拶与、金百五十疋御惠投、忝落手いたし候。御地、かけ塚青江、原川可月、是等の巻ども、評、去春より登り居候所、此度一夜(「度」と訂正)ニ致レ評程之事ニ御座候間、已来ハ早速致レ評進可レ申候間、為御登可レ被レ成候。尚、追々「可」レ得「芳慮」候。以上。

二月廿日

蒼虬

嵐牛様

(注4) 東寿様

(注5) 亀兆様

円。

(注1) 隱宅…八坂の対塔庵のこと。

(注2) 金百五十疋…一、五〇〇文。現在の約三七、五〇〇円。

(注3) かけ塚青江…掛塚大塔町、回船間屋、吉田屋、鶉飼長兵衛。青草とも号する。

(注4) 東寿…山鼻(掛川市千羽の小字)の人。「嵐牛文集拾

遺抄」三及び四の本文と解題を参照。

(注5) 龜兆：伊達方の人。東寿とともに完梁編『葛葉』(文政五年・一八三)に句が入集。

三月十二日  
嵐牛様  
依平

(二) 依平発信一通

【解題】大竹裕一氏藏。国学・和歌の師である伊達方の石川依平がもとめられて書き与えた嵐牛宛の紹介状(添書)で、上段に袁卿宛千蔭書簡が合装してある。晴笠の所蔵となった経緯は明確でないが、記念に与えたものか。「貴宗匠」とあるので、嵐牛が宗匠活動を本格化させた嘉永七年(一八五四)以降、恐らくは依平の晩年、安政頃のものであろう。

○三月十二日付 嵐牛宛 依平

此御方者、濃州笠松村麟子与<sup>と</sup>被<sup>レ</sup>仰候御人ニ而御座候よし。中泉、斎藤甫十郎様より御書中ニ而、貴宗匠へ御尋<sup>(訪)</sup>申度、私より一声そへ候やうにと御書中ニ御座候。御逢被<sup>レ</sup>下候様、奉願候。頓首。

(三) 鳥谷発信一通

【解題】大竹裕一氏藏。鳥谷は讃岐国丸亀の人で、西鳥氏。弘化二年(一八四五)には嵐牛と歌仙二巻を両吟している、その頃までに遠江国に來遊、見付に黙養庵を結び、近隣連中を指導、文久三年(一八六三)二月十五日に没した。嘉永末年、地元連中が催した句合では、嵐牛とともに鳥谷が判者をつとめており、恐らく指導を受けていた晴笠に宛てた鳥谷の年始状に嵐牛宛も同封、來訪した嵐牛が一読、そのまま大竹家に遺したのであろう。

○正月三日付 嵐牛宛 鳥谷

青陽慶賀申納候。<sup>(注1)</sup>癒<sup>(いよひよ)</sup>御多祥、奉<sup>レ</sup>寿候。小生無為<sup>(注2)</sup>、今治ニ而春を迎候。御休神可<sup>(注3)</sup>被<sup>レ</sup>下候。さて、昨年ハ、讃・藝州にあそび、殊に豫松山辺にて、所々に引とめられ、意外長滞留<sup>(なが)</sup>ニ相成候。たへて御句も不<sup>レ</sup>承、御なつか

しく奉<sub>レ</sub>存候。もはや速に帰路におもむき候。やがて拝眉  
与<sub>レ</sub>申上<sub>レ</sub>留候。(注4)年甫、御祝詞まで如<sub>レ</sub>(此)御座候。頓首。

正月三日

鳥谷

嵐牛先生

時処はれ<sub>レ</sub>くしさを福寿草

壁<sub>ゴ</sub>ごしに笑ひかへすや春の宵

きじの声光て来るや波のうへ

柴の戸にかぶさる雨の柳かな

雪に穴ちよつばりあきてふきの臺<sub>とう</sub>

貴評可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

嵐牛様

(注1) 青陽…五行説で春。新春をいう季語。

(注2) 無為…ぶい。無事と同意。

(注3) 御休神…御安心。

(注4) 年甫…年始。

【四士前発信一通】

【解題】 故田中明氏提供複写による。門人の追善摺物の送

り状で、見付の杜水に宛名連名で六名分を送ったときの  
もの。発信者の士前は尾張国星崎荒井村の旧家の人。晩  
年、名古屋に出て俳諧宗匠となった。「柿園日記抄」慶応  
三年極月(十二月)二日記事参照。

【翻刻】

○七月念付 杜水・舒堂・三奏・平台・嵐牛・太年宛

士前

各様残暑御凌ぎ、御盛りと珍重ニ奉<sub>レ</sub>存候。野生無事、御

放念可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。こたび門人追善すりのいたし、御句

も加入、さし上申し候。御笑評可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

○杜水君へ申上候。八朔頃は、(注1)とよ橋へ御出、ことによ

れば岐阜迄も、鵜舟御覧の御催のよし、蓬字を承り申し

候。必御寄、奉<sub>二</sub>待上<sub>一</sub>候。

今般は諸国へ文通にて、何事も略し、御連名御免可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>

下候。以上

(注2)七月念

士前

杜水様

舒堂様

三奏様

平台様

嵐牛様

太年様

御願達可<sub>レ</sub>被<sub>レ</sub>下候。

(注1) とよ橋：明治二年(一八七〇)六月の版籍奉還で、吉田は豊橋と改称した。従って、それ以降の書簡。

(注2) 七月念：連名宛願達のため、所要日数を考えて「念」

(廿)とだけ記したもの。

# 追善の部

柿園嵐牛悼控

【書誌】「編者」平台松夫書写で、同編。「外題」共紙表紙に「柿園嵐牛悼扣」と打付け書き。「書型・冊数」横小本一冊。大和綴。「丁数」十五丁。「序」「始」として平台松夫の追悼の前書と二句を置く。「跋・奥」跋代わりに同門、吉田の蓬宇の前書と追慕吟一章を据える。

【解題】明治九年（一八七六）五月二十八日、七十九歳で亡くなった嵐牛に手向けられた悼句や、初盆の追善句、十月二十八日、日坂の法讚寺で興行された脇起こしの追善俳諧などを、掛川の高弟、平台松夫（兵藤氏）が筆録したものの。門人の悼句の多くは心情を吐露して思慕の深さを伝えているが、なかでも水音の「終焉之記」は哀切を極め、珠玉篇と評してよい。翻刻に当たっては、読みやすいよう適宜改行して段落に分け、嵐牛句の引用には句頭に「へ」を付した。

【翻刻】

始

柿園翁大人ながくいたつきの床に侍り、此としのさつきの闇とゝもに、亡人の数にいりしを、遺懐のあまりにおもほへて、むなしき塚をうごかして泣く。

無人やおもふことみな皐月雨（やみ（同））

なき人のしらせのころか時鳥

平台 松 夫

悼柿園嵐牛大恩師

眼に耳にものみなかなし庵の夏

御魂こそ不老不死なればとゞぎす

嵐牛師翁のなきがらを、其柿園のうしろ

の丘におさむ

夏草や露にかなしき野辺送り

大恩師柿園嵐牛居士のふた七日に当の日、

碑前に香花を奉りて

夏草の露わけ来れば木下やみ

ちからなき椎の落葉や塚のうへ

あさ冷や心きえ行木下やみ

十湖

探広柿園居士の墓に十湖子とともに詣て

手向ばや穂は出いでなくも青すゝき

悼柿園嵐牛恩師

「あり」たきは今一声ぞほとゝぎす

探広柿園居士の碑にぬかづきて

おもひすてしこゝろもどらぬ夏木立

立よれば空わくる也夏木立

知堂

多年親み深かりし柿園の老人、身まかり

ける追悼に申送る

芍薬の花に崩るゝ齡かな

東京深川佐賀町一丁目 橘田 春湖

したはしや此静さに蓮のちる

浜松元魚町八百屋

堀川義郎 胤来

柿園の計を聞て

肩計り(注1)でもなし今日の涙雨

くづ折て見分かぬ入梅の草木哉

月追て西に飛(注2)のれほとゝぎす

同手向

数珠摺じゆすればひばり曇や墓詣

しつゝこき蠅も許すや鬼祭り(注2)

月查

悼嵐牛宗師

をしまるゝわくら葉もろく散にけり

啼たあと空に残りて不如帰(注2)

此ごろやいづくもおなじ五月雨

美濃国山県郡高富村

丹羽副次 竹苗

師翁いまそがりし時めで玉ひし草庵の前

裁にて、そとうちながむるに、猶懐旧の

涙とゞめがたくて

夏草やむかしに似たる華をさく

旧庵

誰がために茂るぞ桑の風通

水音

師のみまかりたるを聞て

月落て拳をにぎる夏野かな

露たるゝけしに照日もあはれ也

夏草やかくす泪の(注3)ところろ

去年の夏、老師と枕を並、草々(種々)かたらぬ

たる事、わすれがたく

ほとゝぎす友に寝で夜も夢あたり

師にははなれ、友は多くの山川を隔て

時鳥ひとり聞こそ哀なり

同墓を拝して

夕虹の明り残すや五月空

一日づゝ立ほど咤(詫)しけしの花

墓へ来て鳴か可愛き閑子鳥

雨石

柿園の訃を聞て

おどろくやたしかに響(なり)し雷の音

柿園の忌日五月廿八日なれば

是からは我呼てよと(ゝ)らがあめ

悼

園淋し草々落てかきの花

やみ眼かと問へば答て夏書(けがき)かな

手向

数珠(じゆず)摺ればひそまるむしやはか詣

後に送る

月查

柿園ぬしの名残りをしみて

耳そこに残る高音やほとゝぎす

初盆をとぶろふ

みそはぎや不断はそれと知ぬ花

竹里

居士世(に)います時を思ひ出して

昼寝した跡をなでつゝ眼のくもり

入月のあと見て鳴や枝蛙

恋しげに鳴や水鶏の小屋過

初盆の手向

魂棚に淋し螢の夜もすがら  
合す手になみだかくして墓参り

たつ女

師翁の遠行をいたみて

是からは塚をたよりや夏木立

知碩

柿園老人をいたむ

命なりふたゝびこさぬ夏の山

梨<sup>(掣)</sup>春

師の初盆、旅中で

ものたらぬ秋と思ふや只ひとり

秋来ても尚忘れ「ずに」松の風

旅の空月を灯籠に手向かな

此秋は萩とおなじや袖の露

静岡上石町貳丁目

三浦龍次郎 雨石

悼柿園嵐牛居士

夏の夜の露ときへぬる命かな

知堂

悼

五月雨やおもひがけなき桐一葉

降雨もかなし五月の桐ひとは

ちる日猶雨にさびしや柿の花

柿の花ちるや曇りにしづむ空

試雪

鳴立し跡の野末の一時雨

焚さしの火鉢にくゆる夜寒哉

ふしてさへ広き一間に雨の月

此頃の居処広く寒<sup>さむか</sup>かな

小田野乙

十月念八日、日坂駅法讚寺に於<sup>おい</sup>先師の追

善ものしけるに、おのれも霊前にぬかづ

きて手向のころを

備へたきものゝ数也不尽の雪

みじか夜の月とゝもにはかなくならせ玉

ひし師翁の病中の伽にも侍らず、野辺の

送りの数にももれぬるおのおこ(た)

り、今さら悲しみの種とはなれり。

入かげを見ぬ身うらむや夏の月 加藤 雨竹

身ま(か)りける父の只ひとことのいひ

遺されし事もなきは、彼風雅の徳にこそ

と述懐のあまりに

のこさぬもかなしと思ふ臯月空

洋々

柿園翁の追福にあひて中山を過る

なれてさへ時雨しぐるるむねを夜啼石(注4)

島田 秋野貫一郎 砂白

(注5) 師翁の肖像を模して

佛はうつせど菊の匂ひかな

月査

柿園翁追善を営奉る

庭たづみ乾かぬうちに夕時雨

島田 海野善三郎 為一

柿園翁居士の御靈前へ供へ奉る

光りある月はかくれて啼ちどり

茶の花や手折て来れば黄昏るゝ

島田 秋野橋太郎 雪香

追福

一時雨すぎても染る名の木かな

見付 前島 舒堂

頭陀とかむ庵もがもな夕時雨

米室

枯てさへ月を友との尾花かな

木潤

物よみてはやゝなげき、筆とりては泪を

ながし、師翁の靈前にぬかづきて

叱られしことおもひ出す時雨かな

知碩

さる事とはしらで在しに柿園翁の身(ま)

かり給ひて、追善の事ありとのをとづれ

にうち驚きて

明る戸に今朝はかなしき一葉かな

直なほき

追悼

いざぬれむかゝる忌日をはつしぐれ

知堂

山茶花に黄昏ヨリモもがな精進時

米室

「人命不ムコト停速トニ於山水ヨリモ」といふ題にて、

へ行灯をけすひと吹、とものせられしは、

亡師柿園廿余年のむかし也。そのとし月

のひさしかりしちなみをわすれがたくて、

只遺懐のあまりに

行灯もしぐれてしのおむかしかな

平台

柿園居士の追善に

落し夜の嵐をおもふ園の柿

ふじ満ま

手向

殊更のこゝろしまりや露時雨

雲眠

茶の花の深きにほひに嵐かな

守考

追福

咲とげて散さへおしや柿の花

凡乎

手向

菊枯て猶なつかしき香りかな

芦雪

燃香

膝に散る紅葉も寒し水の音

半醉

手向

身にしむや此暁の霜の声

芦春

夜飼する鳥も放して寒念仏

島田 清水龍藏 友清

柿園翁、根の国にまかりしをふかくいた

みけるに、こたび追福を管れける、その

法蓮につらなりて

立ならぶ樹々の紅葉を手向かな

延松

われ親とも頼みし柿園翁の、此世を去り

たもふ方此かた

出はいりに見返す門の紅葉かな

応山

凡おそものみな始ありて終あらざるはなし。

予、先師にまみえて其師に遊べる年あり

しも、今年夏のはじめ、天寿をもて此世

を辞し玉ひし師翁のことをおもひつゞけ

て、さみだれし袖の泪のいまだ乾かざる

に、時なり今日に至りて追悼の事あり。

おのれもその席末につらなり、一燃(燃)の香

を捻じて、ひそかにけふの終あるを嘆じ、

猶懐旧の涙とゞめがたく

夕雲もそはず成けり枯尾花

十湖

終焉之記

今日のうつゝは翌あすの夢にして、そのゆめは又後の悲かなしみなるべし。賤のおだまきの繰返してかひなき昔を思ふに、

師翁いまそがりし時、常は東坡が三養の一、分を安ずといふ語を守りて、大根のきざみ膾や、と興ぜられ、経済の道にも関給へり。華陀が五禽の術にならひて運動に形をこなし、動かねば水も氷ぞ、と詠ぜられて、健全の学をもよくし玉ひしが、齡高く成て、唯痔疴のひとつのみなやみて、枕がちになり玉へり。

されば風骨は雲にさらせる梅のごとく、益からびていよく芳しく、去る明治七年の頃にや、けふの初日まことに今日の初日哉、と杖に病を扶けられて、草庵の庭に立出つ、正風不拔の骨髄を顕し玉へり。

此年の秋九月、同庵植田氏のいまだ末あるべきよはひのはかなく此世を去られたりき。老の病床に在ては杖柱ともたのみ玉ひけむを、さきだゝせぬるかなしびは、いかばかりかおはしけむ。ある日墓前に詣て、朝寒やおもひまはせば昔の下、と嘆きて、浅からぬ情を述玉へり。明る八年の春、門人尺波、心やさしき者にて深く師のこゝろにもかなひけるか、「我齢ひにもあやかりて、めでたき笑ひを買へよ」とて買笑といひし師翁の別号を給ひ

たり。たびていく日もあらずして、尺波身まかりぬと聞玉ひける時ぞ、世事のいよくたのみなきを深く感泣し玉ひたりける。

此年の四月、十湖・平台・知堂の諸門生等、記念といはぬかたみの風交に十余日の病褥をはらひ、十余巻の俳諧をものしたりき。是ぞ生前交詠の終り也ける。

すべて病痾は肺肝をせむるにあらず。老軀たゞ槁木のごとく、虚心只死灰の如くおはして、孝子洋々夫婦の浅からぬ介抱よろづうちまかせ玉ひ、薬は門人耳介が調剤をもて終始替させ玉はざりけり。孝行のうしろをかむや霜水、と詠じ給ひたるは去年の冬にて、父子の情のこまやかなる、聞く者たれか涙を流さざらむ。

今年五月のはじめの頃、家中にきげむとられて更衣、ときげむよかりしかむばせもその甲斐なくて、其月の廿八日の夜、病にもあらず、痛めるにもあらず、天然の寿をもて終り玉へり。嗚乎、悲しいかな、此日はいかなる日ぞや。正風の俳諧に東海道の咽喉を占めて風月の権「を」専有せられしも長く棄て、江山に帰し給へり。あゝ

悼ましい哉、袂の雨いまだ乾かず、うつゝの嘆は過て夢となれり。今の夢は又後の恨とならざらめや。

過しことのしぐるゝ今の袂かな 水音

明治九年十月廿八日、於日坂宿法讚寺興行

柿園翁居士追善俳諧之連歌

秋風の衣を通す夕辺かな 嵐牛居士

見送る月のやゝ遠きかげ 洋々

草紅葉<sup>かげひ</sup>の水のほそるらん 平台

ものをもいはず斧<sup>と</sup>研<sup>い</sup>である 月査

幕うちて俄造りの一座敷 水音

すゞめのおろすはゝきめの跡 延松

しつかりとおさへを利す凍覆ひ 守考

使はるゝ子も氣げんよき冬 雲眠

いくさしも装束櫃のさし荷ひ 舒堂

不尽は見ゆれどこゝは三河路 直き

千石のうちにひとりも医者<sup>くすし</sup>なし 守考

こぼれし水に引上るすそ 雨竹

再縁ものぞまぬくせになまめきて くらがりながら涼みにぎわふ

時鳥西東から啼わたり 芦春

またゝくうちに見えず成<sup>な</sup>船

山の端に出かゝる月のかげきよく

りすの飛かふ色かえぬ松 直き

すゞかけをぬぎ置笠のそゞろ寒 松寿

貧乏ゆすりもせぬは関守 舒堂

親里へ便りほしがる花の頃 水音

田<sup>たに</sup>螺<sup>し</sup>にかへる鯛の身おごり 雲眠

羽<sup>は</sup>のしゝて苦もなく巢立燕の子 月査

自まん咄しをとがめられけり 直き

門徒寺留主は擅<sup>とく</sup>に預りて 木潤

ゐ候にも女房もたする 知堂

隠してもちらと見らるゝいはた帯 月査

簾ふり込雪のさらく 守考

興<sup>こ</sup>あげに酒の嫌なものはなし 平台

礫<sup>つぶて</sup>くらうて犬の吼<sup>ほ</sup>だす 延松

知碩

待侘る静岡便りけふも来ず

立て袴のちりはたきけり

思ふ凶に太秦垣の出来上り

石の祠に砂をはらく

さはる物なく名月のかゞやきて

それと思はぬ鹿の啼やう

口べたのひりつく汁の唐がらし

えな桶買にたのまるゝ婆々

桧扇にかくす眉墨うるはしく

午時のほこりもたらぬうち水

裏町へ回れど鉾はまゝ見えて

むづかる児を手伝に遣る

くるくゝと巻ては背負よちひごは

回をやめてほめらるゝなり

面白き事こそつもれ月の頃

引板やさうづを手枕で聞

裏長屋夕食既に出来上り

曇ともなくもる朝空

十湖

舒堂

雨竹

守考

延松

平台

舒堂

守考

月查

芦春

平台

知碩

雨竹

守考

十湖

舒堂

ふじ満

雲眠

見残すも何(や)らをしき嵯峨の花

よしのぞかるゝ鮎汲の籠

嘸に銀のきせるをくはへつゝ

喰丈扶持もいたゞいてある

めくらでも長頭丸は流石也

きもにこたゆるほどの海鳴

砂道はどう歩行てもあとじさり

翌の朝から大寒になる

法印の祈禱に汗をかゝさるゝ

やたら笑ひもたゞごとでなし

美しき身を持たながら縁遠き

朔日丸の匂ひこぼるゝ

深川は碁盤割ともいへぬ也

忘れた処のしれぬ鳩杖

支度やの窓にうすく朝の月

かう鳴ものかこのごろの虫

巢を替る野鼠ちらす露の玉

あぐらをかいて直す草臥

平台

知碩

守考

知堂

平台

雨竹

知碩

守考

延松

月查

木潤

守考

舒堂

雲眠

雨竹

知碩

北寿

十湖

折角(注15)と来て艶(ウツ)郎(ロウ)をかき本屋

あはひにつれて時計鳴なり

どうぞして鏡の像は拝(ウ)たき

さみだれ過(あ)も明(あ)ぬ川(が)どめ

夫婦(ふ)づれ旅(り)売(う)ひの背(せ)負(お)ぶり

芒(あ)で切(き)た指(ゆ)をいたはる

すはといふ間(ま)もなく月のさしかゝり

蟪蛄(こ)の這(よ)ふすてぐらのかげ

勝角(か)力(り)寄(よ)てかゝつてほめそやし

がつくり抜(ぬ)てころぶ下駄(げ)の齒(は)

咲花(さ)の小夜(せ)の中山(な)なつかしく

冷(ひや)つきつよき春(は)の暁(あ)

○

捻(ひ)らして香(か)に重(おも)しや入(い)梅(う)の空(そら)

ぬかづきし手心(て)重(おも)し袖(そで)の露(つゆ)

ともし火(か)もこゝろに暗(くら)し五月(ご)雨(う)

おもひ出す言(こと)の葉(は)寒(ふ)し仏(ぶつ)間(ま)哉(や)

延松

北寿

知碩

直き

舒堂

知碩

知堂

守考

十湖

延松

水音

執筆

十湖

小出  
蕭風

々

々

々

暮(く)さへ寂(さ)しき時(とき)を閑(かん)呼(こ)鳥(う)

時鳥(とき)我(が)は泪(なみだ)に夜(よ)もすがら

袂(たもと)にも乾(かわ)かざりけり菊(きく)の露(つゆ)

佛(ほとけ)にふけ行(い)夜(よ)部(べ)の寒(ふ)かな

初盆

魂(たま)棚(たな)やむせく香(か)の一(ひと)捻(ひ)り

○

名残(なごり)ともしらで聞(き)しを時鳥

霍(ほ)公(こう)鳥(う)聞(き)ても済(す)ぬ心(こころ)かな

急(いそ)来て汗(あせ)ふきあへぬ別(わか)かな

世話(せわ)やきて明(あ)し戸(と)忍(しの)ぶもみじ(ぢ)かな

○

聞(き)て来た(きた)道(みち)行(い)絶(た)て五月(ご)闇(やみ)

呵(か)らるゝ身(み)のうら山(やま)し盆(ぼん)の月(つき)

はかなくも待(まち)この道(みち)や時鳥

五月(ご)雨(う)や晴(は)ても落(お)る木(き)の雲(ぐも)

○

々

々

々

々

々

々

中方  
春彦

々

々

々

中方  
土筆

々

々

々

たのみ有灯はふと消て時鳥 高瀬村 梅山

迎はるゝ先は蓮の台かな 々

立騒ぐ迄の闇也ほとゝぎす 々

斯く散らば見て置しもの夜の蓮 々

○

ほとゝぎすさめへしげな明かな 中方 春園

耳にしむ其一声や時鳥 々

影消てはかなき風の蜚哉 々

○

ゆめの世のゆめにはあらぬわかれかな 船木村 梧園 董平

音もなき時雨にぬるゝ袂かな 同村 三学

定めなき世のしほり也露と雲 大柳 蕙 畝

居士生前に前栽のくだものをもてなされ 水野 良介

し事を、今のやうにおもひ出て

なつかしきその柿園よ十六里 蓬 宇

（注1） 扉：大磯の遊女虎御前。五月二十八日は愛人曹我十郎の命日なので、毎年その日には十郎のことを偲び、その涙が雨となって降るといふ俗説が流布し、「虎が雨」の季語となった。後出、月查句参照。

（注2） 鬼祭り：魂（霊）祭りの誤写であろう。

（注3） とくどろろ：「ところどころ」を縮めた表現か。

（注4） 夜啼石：小夜の中山にあった夜泣石。伝説が流布し、広重の東海道五十三次「日坂」にも描かれる。

（注5） 師翁の肖像：口絵図版および『山月集』参照。

（注6） 東坡が三養：中国宋代の詩人蘇東坡が「群談余採」の中で唱えた三養訓の一、「安分以養神（分をわかまえて、精神を養うこと）」をいう。他は「寛胃以養氣（胃に負担をかけず、心身の元気を養うこと）」、「省費以養財（無駄遣いをやめて、財産を養うこと）」。

（注7） 大根の：下五は「蔵びらき」（『嵐牛発句集』）。

（注8） 華陀：中国漢末、魏初の名医。麻酔薬による外科手術や、五禽戯と称する体操などを始めた。

（注9） 動かねば：下五は「動かねば」で、前書が「歟とるものは炎天水風をいとはず、こたつに打入ものは透間の風をいとふ。人としてつとめてや有べき」とある（『句集

草稿二編)。

(注10) 同庵植田氏：嵐牛の後妻。伊藤家過去帳に没年は明治七年戌九月二十一日、法名は得室妙牛大師とある。日記によれば、俗名やす。

(注11) 尺波：周智郡平宇(袋井市下山梨)の人。水音こと足立孫六の分家で、俗名足立孫八。没後、可睡齋の境内に句碑が建てられた。

(注12) 知堂：豊田郡長命村(浜松市東区中野)住、富田文平、号一志。明治八年入門(柿園門人録)。のち一志庵知堂(『十湖発句集』)。「十卷」を詠んだとあるが、『俳諧どめ』によれば七巻で、末尾に「右七巻卯月卅日満尾」と記す。

(注13) 長頭丸：貞門の祖、松永貞徳(二五二〜二六三)の晩年の別号。

(注14) 朔日丸：毎月朔日に服用すると、その月は妊娠しないという避妊薬。丸薬。

(注15) 艶郎：洒落男。おめかしした男。

## 山月集

【書誌】「題簽」「山月集」。「書型・冊数」半紙本一冊。「丁数」序二丁、本文二十一丁、跋二丁、奥付一丁、計二十五丁。「序」「明治十年(二七七)の秋 足立湛水識」。「跋」「明治十年丑秋 知碩識(印「碩」)。「奥付」「明治十一年九月 柿園社中藏」。

なお、内山真龍資料館蔵本には送り状が挟み込まれている。「明治十一年九月」付、発信者名は水音更湛水・十湖・平台・知碩の連名。文末に、四名と月查・洋々・雨竹三名の発句各一章を添え、文音所として松島十湖・小築庵春湖兩名の住所・氏名が摺られる。

【解題】明治十年秋、旧知春湖(東京深川住)の来遊を機に、月查の住持する岩水寺で催した追善俳諧と参加者の手向吟各詠に、東京その他諸家の新年、四季発句を付載した小祥忌(一周忌)追善集。脇起こし追善俳諧の発句は、前年日坂法讚寺で営んだ時と同じ「秋風の衣をとほ

すゆふ辺哉嵐牛居士」。刊行は、明治十一年九月。

なお、「追善之俳諧」と「悼之吟」は洋々の『俳諧どめ』（明治十年）に筆録され、それによると「追善之俳諧」の作者名は一句ずつ一巡の五十韻になるよう操作したものである。主な異同を傍記した。

【翻刻】

先師嵐牛翁いまそがりしとき、風雅の余興山水をふかくこのまれ、草庵にほとりちかき小夜の中山の賦をつくりて、「我此山のあるじたらん」といはれたりしに、今は恨の数に成ゆきて、長く江山風月の境に去遊せられにたり。されば去年の冬、門人知碩・平台・十湖・雨竹および世子洋々等をはじめ、旧知の人々寄つどひて、其中山のふもとなる日坂のさとに靈を祭り、一韻の聯句をものして、夜泣石の悲しきおもひをうちつゞけぬ。然してことし東京の春湖叟、本州に遊べり。叟は翁の旧友にして、その交も浅からざりければ、さきの人々懐旧の情を起して、又もや龍宮山なる月查が岩水精舎にふたひ祭筵を設けぬ。此山や、名にしあへる秀岩麗水の地にして、翁もしばく

杖を曳て愛せられたりし勝景なるに、時秋にして月色清く、人は旧好の袖を絞て、おぼえずも文台に詞章堆を為せり。あゝ去年といひことしといひ、かゝる靈勝の地に於て、かゝる優雅の弔祭をなしぬるは、おのづから翁の所好にそむかざりけりとて、二筵の吟を蒐めて一集となし、名をさへ山月と冠らしめぬ。

明治十年の秋

足立湛水識

(注2) 追善之俳諧

秋風の衣をとほすゆふ辺哉

柿園嵐牛

只あふぎ見る山の月影

ならびよく雁はいくつも鳴つれて  
人ちるあとにけふる吹がら

おりあげてはや用だつる藁筵

けふの客にはいらぬ出迎へ

まだ雪にあうた事なき竹も有

ちひさき橋のかゝる冬枯

畳まれて椅子は便利な取回し

晴雨平十平湛十知水月雨洋知

晴 雨 平 十 平 湛 十 知 水 月 雨 洋 知  
笠 音 竹 台 湖 々 台 々 水 湖 碩 音 查 竹 々 碩



みゆきの道に荷をふ土もち

弁当のからを押こむ御膳籠

風にまはりて結構晴な空

祥月にあはねど花は其匂ひ

着かざる春も二十八日

下略

悼之吟 各詞書略す

声なくてかなしさゝぐる秋一枝  
山の月むかしのかげに似てかなし

月清しむかふる魂も岩水寺  
なきあとや思ふ事皆皁月關

是からは塚をたよりや夏木立

わすられぬ紫苑しをんの花を手向哉

西の空さして飛しかほとゝぎす

木屋を反魂香ぞ経机

明あきほのや千草の色も露しぐれ  
今さらに千草も染むか露しぐれ

此寺に暫し迎へて魂祭

月の雲今宵かゝりて哀なり

夏の夜の夢さへ早く明にけり

雲 眠々

竹 華

石 清々

春 湖

竹 外台

水 音

湛 水

平 台

知 碩

十 湖

晴 笠

月 査

雨 竹

知 堂

耕 斎

秋 江

空広し四手の田長も帰り来ず

かくれたる月を又見る法今よひ会哉

爰こゝに来て鳴む年々ほとゝぎす

ちる露やしろき蓮はちすを台うてなにて

ひとゝせをひと夜の夢や月の影

仏手柑ふしめかんに匂ひうるほふ袂かな

明る戸に今朝はかなしき一葉哉

たのむべき樹も枯果し夏野哉

柿まきこ枯ぬ孫彦生はなを茂らして

こゝろにも身にも余るや皁月雨

杜宇ほととぎすきかぬ別れば猶悲し

かりそめに濡ても置ず柿の露

蘭の香も月落してしる今宵かな

秋またでおもひがけなし桐ひと葉

夏氷つゝむ袂をぬらしけり

落し夜の嵐をおもふ園の柿

咲とげて散るさへをしや柿の花  
露たるゝけしき照る日も哀なり

然 山

国 女

素 涼

春 谷

竹 碩

知 碩

半 醉

直 醉

湖 洲

可 雄

島 桂

楽 水

維 石

み 女

試 雪

石 清

不 丸  
雨 彦  
石



魂来ませ秋を懐紙の染模様  
 猿の手のとゞかぬ月を記念かな  
 新米の精や居士の備もの  
 佛は枯ずにのこれちる柳  
 あはす手に涙かくして墓参り  
 其かげの身にしむ柿の紅葉哉  
 しら露を扇にのせて手向けり  
 香を慕ひ蝶も来にけり菊の花  
 おもひよる手向のけふや露時雨  
 散るかげも身にしむ露の光り哉  
 岩に照るかげ猶清し柿紅葉  
 月きよみ明易からぬ夜もがな  
 ほととぎすとゞろきし名も遠江  
 世は闇になれとか月の雲隠れ  
 けしの花又見ぬ日とはしらざりし  
 黄鳥の音人や人に慕はせて  
 身にしむやこの暁の霜の声  
 菊枯て猶なつかしきかをり哉

可 夷 文 子 紫 紫 釘 桃 桃 半 燕 煙 葛 曲 円 千 菊 芦 芦  
 有 昔 雅 明 石 石 浦 江 溪 子 柳 谷 外 山 広 吾 春 雪

有明の静を露の光かな  
 萩折て手向ん露のまゝながら  
 臥てさへ広きひと間に雨の月  
 やゝ寒くすわる手向の筵かな  
 定めなき世のしをりなり露と雲  
 法筵にあふも幸也旅の秋  
 命なりふたゝび越ぬ夏の山  
 なつかしき其柿園よ十六里  
 名も骨も清きがうへに蘭の花  
 卯の花も終に涙のおぼろかな  
 新年之部  
 間に出るものならねども初鳥  
 千鳥にはおくれも取らじ初がらす  
 もり上るまでや初日に波の花  
 井びらきに雀の朝寝起しけり  
 太筭や木香もさすがに松山  
 戸明ればはやどやくと御慶哉

史 竹 野 雪 蕙 竹 竹 犁 蓬 春 洋  
 敬 城 乙 山 畝 外 宇 湖 々

一合の砂にも咲て福寿草

年玉も尾鱗ものなり漁処れはうら

稚子も居り直して雑煮哉をまご すわ

替あうて七草の数揃ひけり

摘人の声もやさしき若菜かな

粥草かめくさや野菜市場の朝みどり

春之部

梅が香やうしろは雪(注り)の弥彦山やひこやま

きえ残る雪やほつく梅の花

田も少しつまあが爪上りなり梅の花

梅を折る音はるかなり野の日和

うめ咲て人にしらるゝ小道かな

梅折て塵なき袖を払ひけり

紅梅に見ゆるよ日裏日のおもて

用のない橋こえて見る柳かな

鶯や隙で聞身に鳴はまり

うぐひすのねぐら定めし林かな

静処

隄風

梅下

翠玉

百嶺

五休

舜岱

周策

陳年

石芝

愛我

松里

禾か啓けい

木甫

はじめ

乙人

鶯に年寄耳はなかりけり

遠山の浅黄に晴て舞ふ雲雀ひばり

囀りの耳に残りて野は暮ぬ

雉子鳴や一谷くろむ杉ばやし

茶事保吟

初蝶は垣に残して数寄屋入

飛ぶ塵もいやしげのなしむしり海苔のり

刈すつる色とてはなし春の草

雪どけや持てば崩るゝ竹箒

等閑なほせりに過し夜多し春の月

吹風も流るゝ水も長閑なり

香にすゝむ竹の子鮓も彼岸哉

隙ひまなりといふ人に逢ふ花見かな

豆腐やく手際もどかし雨の花

花と気の付まで寒し峠越

惜き日の暮て行なり花の上

花を雲外には何もなかりけり

ひと景色持て暮るや花と雲

霞城

大喬

朝逸

乙瓢

羽洲

文種

雪江

藍庭

禾雄

堯年

精知

等栽

閑茶

星城

圭笠

胤来

烏石

晴際のしばらく寒し山の花

風哉

宵々や戸ざせばやがて鳴水鶏なくくひな

卓志

三十年を経て再吉野に山踏す

犁春

老を啼鶯谷へもどりけり

蝉台

めでたしとおもひぬ花に我命

素春

水がくれ木がくれ鳩にほの浮巢哉

省華

暮る日のもどるこゝちや花に月

素水

初螢はし居みする夜と成にけり

南齡

一日見し花や二日の気草臥

春柳

蔓草の葉うら見えすく螢哉

雪宇

ちるをさへいそがぬふりや遅桜

五菖

蚊帳かやといふかくれ家持がて草の庵

雪潮

藤咲て柳はゆれず成にけり

月所

そら解とけのするもをかしき粽ちまみ哉

寿水

夏之部

蝶の道かはりし朝やはつ裕あはせ

蓬宇

入替り汲めど流るゝ清水かな

碩水

思ふより着る日のたらぬ袷哉

素山

むしろ帆のさし出がましや青嵐

此山

山水の里によごれて燕子花かきつばた

盛虬

縄捌きする間に進むあら鶴哉

正所

幾日路もたゞ島山の田植哉

拾山

早瀬こぐ舟や鶴はまだ籠の中

鴛笠

駒鳥の茂りになくや二子山

露牛

夏菊も有さうな名ぞ籬島(注10)まがでしほ

琴丸

日をいとふまでの軒端や夏木立

桃宜

かくすれば濼も詮あり蓮の花

桑古

風のいろ見ゆるや頓やがて郭公ぼしとぎす

可転

鯀とらやうじ 荷の泡こぼし行暑さかな

斧舟

明る戸にくり込声やほとゝぎす

二葉

櫛とらやうじ いたれたやうな柳や雲の峰

其残

一戸前火をこふ酒やほとゝぎす

羊山

瓜の桶包丁までも冷しけり

三牛

栄枝

周夢

形代の障るものなく流れけり

閑里

みの虫や鳴と思へば鳴もする

雲李

秋之部

飛石もはや初秋ぞ踏ごゝろ

晴雲

閑古鳥居ぬがせめてよ秋の暮

対几

何処となく秋たつ味や川手水

帰童

独居

雀芝

ひとつよし二つうれしき灯籠哉

茂精

秋の夜を秋の夜とまで思ひけり

曲川

聳つれて嘶しながらや墓参

西美

秋風や暮て明るき水の面

翠園

大空の青みやのせて桐一葉

守中

雨後

翠園

垣うらへはや日の回る木槿哉

九成

七合は出しほの水や利根の月

完鵬

露くさく成るや萩見の小盃

露桂

名月や船で行人もどる人

柳甫

雨の萩こゝろ有氣に撓みけり

周里

風炉釜もすゑて山家の月見哉

翠影

雨晴や桔梗にうつる朝ごゝろ

素石

さびしさにせまりて立坎暮の鳴

竹苗

蓮の香のあらばと思ふ芙蓉哉

香芸

下り催ひするかみだるゝ雁のつら

翠月

咲のぼる末もおとらず鳳仙花

流美

地にしかとつかぬさわぎや風の雁

文器

吹風の沁りて来るや萩の声

金令

山畑に日雇らしきかゝしかな

樽風

色に出て暑ささめけり鶏頭花

連水

引よりも落す田水やこゝろよき

帯雨

こゝろ澄む夜ごころと成ぬ虫の声

みき雄

行灯も張かへごころの夜寒かな

恭道

消る灯もふたつとはなし虫の宿

勤堂

とろゝ花咲家に昼のきぬた哉

永機

ひとしきり母にかはりて砧かな

(注11)  
環溪大禪師に謁す

こと問ぬこゝろを秋のしをり哉

答

山彦の声でことしれ秋の山

ともし火はうつらぬ色や后の雛

何処となく香も初穂らしことし酒

火移りの重きも味よ若たばこ

逆水のしたゝる菊やひと束ね

しら菊にさす指先やけさの霜

夕風にさそふかるみや初紅葉

ひとりづゝ来て紅葉見の揃ひけり

染分たやうに夕日の紅葉かな

冬之部

初冬や木の間に残る夕明り

菊畑は菊の露ほど初時雨

しぐるゝや行あふ顔のうろ覚え

山静

春沙

雪主

沙山

宇山

泛湖

是三

花朝女

雅仏

亀明

素流

三楓

黙平

寿道

落かゝる岩を押へて霜柱

天龍やかれて筏の水加減

背を風に向て枯野の立咄し

何となく奇麗な朝や神の旅

咲やうを忘れても居ず帰花

風雲の二三日風てかへり花

ちよつと日のさすや八つ手の花の上

から崎の松葉もかゝる竹筍かな

水鳥や寒うなる程我世顔

柵棚や皆家居より高い処

炭売のはいて来にけり雪袴

人からのどうやらゆかし桐火桶

ふる吹や雇ひし馬士も膳につく

袴着や人は氏よりそだちがら

人のものかりた気持や紙ぶすま

簑笠に誰はゝからぬ雪見哉

捨るもの見てゐる雪の鳥かな

むつまじき並びやう也雪の家

採花女

蝸堂

草国

芹舎

由地

幻史

稲処

其隣

木圭

栢葉

旭齋

他山

思丈

富水

素陽

丁花

芳洲

年の尾や筒にまうけの梅柳 一鼎

かぞへ日の中のゆとりや衣配り

青宜

煤掃や人をましても日一ぱい

遠江省 我

相伴しどうばんに馬もやすみてとし忘

晩香

餅搗の湯気に和らぐ柳かな

潮水

〔注13〕世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くも、とある

ふるき歌のこゝろはむべなるかな。かのもこのもの雅友

をふるき人の数により来し中に、師叟嵐牛子は平素すこ

やかなる事、衆の右に出たりしを、はからざりき、明治

戌の春の比ころほひより精神やゝおとろへて、惜むべくは同

じ子の夏、帟が雨の雫とゝもに八十ちかき齡にして泉下せんか

の客と成られしなり。阿叟雅客とよく和し、且かつ、門生に

教へを伝ふることいとねもごろなりければ、いづれも見

むとおもひし花ちり、聞んと待し時鳥の飛去りし思ひを

なせども詮せんなく、せめてはなきかげを慕んとて、ことし

小祥忌に秋風の詠意を継て、あやしきひとつのとちもの

としけるは、いさゝか師恩に報ゆるしるしなせるもの也。

斯かく此集のなれるは、睦みの篤あつき所にして、同志のもの豈あに喜ばざらんや。

明治十年丑秋

知碩識 碩

明治十一年九月

柿園社中蔵

〔注1〕岩水寺：『嵐牛発句集』の〔注21〕を参照。

〔注2〕追善之俳諧：『俳諧どめ』（明治十年）には、「柿園

嵐牛追善集五十員下俳諧、但岩水寺おゐて春湖さばき、

明治十（年）九月九日務直ニ出来、直シ追善正式俳諧百

韻也。席上三十六人、集入俳諧五十韻也」とある。

〔注3〕臍団子：表面中央がへこんで臍のようになった団子。

〔注4〕秋坊：加賀国金沢の人で、奥の細道の来遊時、芭蕉

に入門。その風流隠者ふりが闍更著『俳諧世説』（天明

五年・一七五刊）に伝えられる。

〔注5〕三平：「三平二満（さんぺいじまん）」で、お多福顔

のこと。『俳諧どめ』は「マルガホ」とルビを振る。

〔注6〕佐倉の池：『嵐牛発句集』の〔注73〕参照。

〔注7〕二枚折：二枚に折り畳める屏風。

(注 8) 奥の世並：陸奥の米の作柄。

(注 9) 弥彦山：新潟県中央部にある霊山で、麓に弥彦神社がある。

(注 10) 籬島：陸奥の代表的な歌枕で、塩釜湾の小島。源

融とら(八三〇八九五)が六条河原の院で塩を焼かせ、千賀の

塩竈の景を再現させたことなどで知られる(謡曲「融」)。

(注 11) 環溪大禪師：俳号雪主。「柿園日記抄」慶応三年九月

十五日の記事(注)参照。春沙は梅室の息、桜井能監

宮内(省)書記。嵐牛後輩の拾山とは昵懇だった。

(注 12) 竹筍：水底に円筒状の竹の籠を沈めて魚を獲る器具。

筍、竹瓮、胡篋とも書き、「竹筍」は『通俗志』(享保二

年・一八〇三序刊)に初出。

(注 13) 世の中に：「嵐牛文集拾遺抄」の三(注 1)参照。

## 柿供養

【書誌】奉書、横半切り、一枚摺り。故田中明氏本は袋題「柿供養」。挿絵・題辭「百事大吉／庚寅(明治二十三年)春／汪水漁者(印「小山」「汪水」)」。朱・緑・肌色・藍・単色他の多色摺りだが、嵐牛俳諧資料館本と田中本とは柿の実の色が異なる。浄書者の奥、「明治廿二年暮秋晴之書(印「晴之」)」。刊記、「遠江／二香堂印刷／中泉(袋裏に朱印)」。表紙カバーの図版参照(田中本による)。

【解題】嵐牛の十三回忌に催した追善の歌仙俳諧一卷と手向の各詠二十九章を収めた一枚摺り。歌仙は嵐牛の遺句による脇起こし。脇から七句目までと巻軸の発句を詠む四名は松夫に率いられる掛川連中で、催主と目される。息の洋々は二ノ折表五句目を付ける。門下の四天王知碩・晴笠・湛水(水音)、それに中善地の十湖も参加するが、岡崎の貫一は明治十二年に亡くなっている。

挿絵の画者小山汪水(一八五〇—一九三五)は掛川の葉種商

で、俗名は伝次郎。画を渡辺小華に学んだ（中道朔爾著

『遠州画人伝』一九六六年刊）。

【翻刻】

柿供養（袋題）

百事大吉

庚寅春

汪水漁者

（印）（印）



柿園翁追善

鳴なきの行向（注）ふの岸もゆふべかな

かげもさびしき水底の月

別座敷秋を、しみに立出て

嵐牛居士

平坡

松里

俵こぼれを掃寄る也

今降て来さうな雪の雲運び

こりし年木もつめば山ほど

すり火打するにも念仏口の先

牛に曳れて道もゆたく

遠まさる殿の御跡はや一里

あきらめられぬ訳は此帯

滝の音只たうくと聞すまし

木間このまに冷を吹おこす風

たちまちに昇た月の照わたり

をどりといへばやがて松坂

ひく車人又人をおしわけて

潮もさし込堀は御屋敷

花盛謡うたふは幕の内なれや

春は誰かれなしのたのしみ

うまくと御出稲荷も早十日

きよめの雨か今のはらつき

棟上のもちを拾うてめでたがり

一玉

松通

一勢

甫扇

暉完

湛水

送雨

思静

竹夫

知碩

米室

三湖

思成

青溪

半谷

雪香

清玉

松逸

酒は樽から勝手放題

あばたと引よせがひもなき女

眠らでしまふみじか夜のこひ

行徳へ一番のりのふなよとてひ艀

鳴もさそふ波のたゞよひ

どこからも見ゆる供養の鐘ついて

笠や忘れし扇たづねる

一人寄り二人寄りする月の友

(注し) 天井守り好なればこそ

椽えんばなでかぶれた足を撫さすり

いつより早うともす行灯

荷になうたも背おふも市の戻りにて

からりと風にふゆ蛸ゆの振舞

祥月も近しと塚に残る花

待々まちまち夏も二十八日

各詞書略

置かへていよく深し塚の露

好月

洋々

晴笠

江誠

文牛

探水

南玉

十湖

湖洲

春野

松子

南可

淡香

松夫

野風

青溪

ひやゝかな(儀)礼義也けり石に水

朝寒や苔にしみ込そゝぎ水

いろしるき柿の梢や露しぐれ

香計かばかりも心ばえして手向菊

佛もさめぬかをりやきくの花

香をしたふ人のまことやらにの花

月影やしめる袂も秋深き

佛の塚に残りぬ秋のかぜ

身にしむや立去かぬる塚の前

秋深しちぎり残りの柿の味

呵かられし昔語よ秋のくれ

おきかへて光露けし塚の苔

露霜や塚に望みの清めほど

百とせの色も見えてや墳つかの松

ちるもみぢ塚にながめもうつりけり

夕影や額(づ)くひざにちるもみぢ

居並ぶや手向し菊の香にむせぶ

湛水

雪香

米室

送雨

花中

探水

くにめ

野風

雨竹

みねめ

十湖

知碩

一玉

半谷

松子

三湖

一勢

りうたんや風もさはらぬ塚のかけ  
秋雨や絶てひさしき物おもひ

しら萩のそれにもぬるゝ袂かな

かげほつと秋の螢の名残哉

風の間やおもひ出しては鳴いとゞ

しら萩の雫冷たし膝がしら

墳に水月も名残の光かな

秋深し柿園墳を東光寺(注3)

香を炷く塚に秋しるゆふべ哉

碑をかざし咲もゆかりぞ萩の花

おもひ寄る心露けし塚の前

明治廿二年暮秋晴之書

晴之

(注1) 向ふ：底本では「ゆかふ」と読めるが、『嵐牛発句

集』等に従い「向ふ」と翻刻した。

(注2) 天井守り：蕃椒しょうがらしの一種。秋七月の季語。

(注3) 東光寺：掛川市十九首じゅうじゅうしゅの成田山東光寺。明治二十年、

松夫とその弟子たちにより門前に「桜見し心しづまる牡丹かな」の嵐牛句碑が建てられた。

思 静

暉 完

鶴 夫

千 花

竹 夫

春 野

松 夫

松 里

平 坡

甫 扇

松 通

遠 江

二香堂印刷

中 泉

## 嵐牛略年譜

- 寛政10年・1798 (01) 佐野郡塩井川原(掛川市八坂)に生まれる。名は清三、別号柿園<sup>その</sup>、城国亭、多陰、白童子、買笑など。父清左衛門は農家・鍛冶を兼業。
- 文政02年・1819 (22) 父、没。戒名、歩岳常運居士。通称とともに家業を継ぐ。
- 文政05年・1822 (25) 秋、駿河国田中藩士の完梁、遠州遊歴の途次、来訪か。
- 文政08年・1825 (28) 麻陵編『百人一句』に肖像・賛句載る。三河の卓池に入門。長男清一郎、生まれる。後、洋々と俳号。
- 文政12年・1829 (32) 近隣伊達方の国学者、石川依平<sup>よりひら</sup>に入門、豊蔭<sup>とよかげ</sup>を称する。
- 天保03年・1832 (35) 相良住の蘭英(53)評月並句合3月分に句が載る。以後、蘭英(翌年、少風と改号)の月並句合・歳旦帖に句を寄せ、交流。
- 天保04年・1833 (36) 大巢評月並句合に句が載る。この頃、大巢や千里閑人など名古屋判者の月並句合や卓池評の奉額句合、雪門の月並句合などに句が散見。
- 天保08年・1837 (40) 卓池古稀賀の『竹春集』に句が載る。
- 天保12年・1841 (44) 卓池社中編、暁台50年忌の『円満集』に句が載る。
- 天保14年・1843 (46) 10月12日、卓池ら、岡崎の宝福寺で芭蕉150回忌の句会を催し、これに参加。この前後、師友と連句を巻く(→俳諧どめ連句一覽)。
- 天保15年・1844 (47) 10月、鳳嶺ら、磐田市鎌田の医王寺に芭蕉句碑を建立、その碑面を揮毫。翁忌の追善連句を興行(→俳諧どめ連句一覽)。
- 弘化02年・1845 (48) 卓池編『俳諧こぼれ炭集』(芭蕉150回忌)に、芭蕉発句に付けた脇と発句入集。発句は遠江作者23名の筆頭。
- 弘化03年・1846 (49) 8月11日、師卓池没(79)。追善の『夕沢集』(社中編)、『雲明集』(流芝編)に句を寄せる。
- 弘化04年・1847 (50) 初夏、三河国足助の同門塞馬<sup>あすけ</sup>、後輩茶岡<sup>さいば</sup>(後号、拾山)を同伴、師の追善集・句碑の基金集めに駿府まで勧進、その帰途来訪。
- 嘉永元年・1848 (51) この頃、「柿園評月並句合」始まる。催主は塩井川原住の応山で、当初は隔月興行。
- 嘉永03年・1850 (53) この頃、尾張国津島出身の大和絵師、羽鳥春隆、遠州に流寓、依平・嵐牛の肖像ほかの作品を遺す。安政末から嵐牛らの一枚摺に挿絵を描く。
- 嘉永04年・1851 (54) 8月、塞馬が先師著『青々処句集』校合で煩わせた依平に謝するため来訪、これと風交(→櫃をさめ他)。
- 嘉永05年・1852 (55) 8月6日、塞馬の案内で、岡崎の円光(燕岡)山に建てられた師の句碑を拝む。
- 嘉永06年・1853 (56) 4～5月、三河国牛久保の涼石居で同門完伍・塞馬・蓬宇・笠露と連句を巻く(→俳諧どめ連句一覽ほか)。
- 嘉永07年・1854 (57) 3～4月、浅羽方面中野の鳳嶺・知石、岡崎の貫一<sup>ふくで</sup>、福田の芦清(晴笠)らを歴訪し連句を指導、門下となる。前年頃から「柿園評月並句合」も催

主3名、毎月興行となり、宗匠生活が本格化。

- 安政02年・1855 (58) 正月22日、先妻没。夏、三河国牛久保の涼石居で完伍・素行・拾山・蓬宇・筌露と連句を興行。初秋、江戸の笠栖素行が来訪、風交。10月末、須々木の芦角亭を訪ねて連句、これを機に嵐牛門に移る(→俳諧どめ連句一覽)。
- 安政03年・1856 (59) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・初編)。11月、出雲の曲川来遊、風交(→俳諧どめ連句一覽)。
- 安政04年・1857 (60) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・2編)。芦角序。
- 安政05年・1858 (61) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・3編)。夏、「伊豆入湯記行」。完伍編、卓池13回忌の『にしづき夜』に句を寄せる。
- 安政06年・1859 (62) 7月15日、相良の長野少風没(81)。9月4日、国学・和歌の師、依平没(69)。
- 文久元年・1861 (64) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・4編)。5月、牛久保の涼石居信友会で、完伍・塞馬・蓬宇・義玄・拾山らと連句を巻く(→俳諧どめ連句一覽)。8月、同門、吉田の蓬宇来遊、小夜ノ中山から横須賀まで案内(此夕集30)。10～11月、吉田・牛久保で蓬宇・曲川・完伍と風交。冬、柿園社中が曲川を迎えて巻いた歌仙3巻、曲川が涼石居で諸家と巻いた歌仙5巻をそれぞれ小冊にまとめて刊行、それらに序を寄せる(→ともすゞめ・およびごし)。
- 文久02年・1862 (65) 正月28日、鳳嶺没(55?)。塞馬編、卓池17回忌・秋挙37回忌の『はなておけ』に句を寄せる。
- 文久03年・1863 (66) 2月15日、讃岐国丸亀出身、見付住の烏谷没(50余)。4月26日、須々木の芦角没(61)。
- 文久04年・1864 (67) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・5編)。塞馬序。
- 慶応02年・1866 (69) 春、淡路の蔣池『清白集』、介居『青梅集』に序を寄せる(→嵐牛文集拾遺抄)。
- 慶応03年・1867 (70) 11月24日、同門の先輩、塞馬没(80)。
- 慶応04年・1868 (71) 1～2月に名古屋の羽洲・章和、5月に京の掣春、それぞれ来遊、風交(→柿園日記抄)。
- 明治02年・1869 (72) 10月23日、同門の後輩、牛久保の完伍没(64)。
- 明治04年・1871 (74) 柿園社中の年次集刊行(→そのまま集・6編)。水音序。春、雪香編『一不尽集』に序を寄せる(→嵐牛文集拾遺抄)。
- 明治07年・1874 (77) 9月21日、後妻のやす没。
- 明治08年・1875 (78) 4月、十湖らに最後の連句を指導(→俳諧どめ連句一覽)。
- 明治09年・1876 5月29日、嵐牛没(79)。10月28日、息洋々ら日坂法讃寺で追善俳諧興行、平台松夫、社中・知友の悼句とともに小冊とする(→柿園嵐牛悼括)。
- 明治11年・1878 9月、柿園社中、3回忌追善集を刊行(→山月集)。
- 明治13年・1880 3月、柿園社中、遺句文集を刊行(→嵐牛発句集・嵐牛文集)。

## 柿園評月並地名別作者一覧

■遠江国地名(50音順)	作者名 (注)*は「柿園門人録」に、→は別の地名にも見える作者
青屋(浜松市南区)	芦水(→阿多古住) 春涛
青柳(吉田町神戸)	花柳 百歳(→駿・瀬戸住) 花春 着飛
明けしま(掛川市)	穂並
秋葉山(浜松市天竜区)	霞笑 雪丸 月爪(→西ヶ崎住)
朝比奈(御前崎市)	礫松
浅羽(袋井市)	*涼雨(→才田, 馬場住) 一醒(→へイミ住) 知石(碩) (→中野住) 風嶺(→中野住) 我之
飛鳥(掛川市垂木)	*一笑 志等
阿多古(浜松市天竜区)	芦秀 谷柳 柳齋 溪川 藤齋 芦水(→青屋住) 谷雄 富明 素流 素陰 條雨
天方(森町あまかた)	*琴雅(改花風) (→飯田住)
あゆつり(未詳)	喜月
飯田(森町)	草花(→神ノ郷住) *石清 花外 桃栄 古梅 法笠 琴雅(改花風) (→天方住) 花蝶 文水(→垂木住) 白川(→深見住)
家代(掛川市)	松谷 如竹
家山(島田市川根町)	松が根
五百濟(掛川市いおすみ)	吞生
五十岡(袋井市いかおか)	対雅 其雪 月光(→初馬住)
いかいし(未詳)	臥牛 花友(→岡崎住) 花両 川牛
井口(島田市)	仰山 松寿 可好 一胤
池新田(御前崎市)	かすみ 井龍
池田(磐田市)	田所 藏人 佐略 誠齋(→駿・久兵衛新田住) 文甫 一穂 友撰(仙) 千代丸
石岡(浜松市北区)	松保
石田(浜松市東区)	馬旧
石野(袋井市愛野)	柳翠 抱節
板沢(掛川市)	茂谷 古白 湖石(→門屋住) 花石
一色(袋井市浅羽一色)	雨逸
稻荷部(菊川市下内田いなかべ)	如水(→横須賀住) 一馬
犬居(浜松市天竜区春野町)	柿校(核) 菊賀
入野(浜松市西区)	秋下 *暁嵐 みつ恵 可笑 生風 梅雪 満恵女
岩滑(掛川市いわなめ)	亀友
上村(浜松市東区)	素白
牛飼(森町)	素守
	阿丘

牛尾(鳥田市)	竹里(→成滝, 駿・オウカ住)
打上(浜松市東区)	庭列 梅屋 錦蔦 三余(→橋羽, 駿・藤枝住) 南英
梅田(袋井市)	竹流 竹之 尺樹(→岡崎住) 南々 来耳 四山(→掛川, 駿・石脇住) 芳英 竹水(→岡津, 金谷住) 竹子
梅橋(掛川市)	稻雀 思声
江口(磐田市豊岡)	醉翁 保笠
小出(菊川市おいで)	いはつ 露神 蕭(簫) 風
老間(浜松市南区)	三芳 一枝(→掛川, 小島方, 水垂住)
大池(掛川市)	花鳥
大川(浜松市天竜区)	竹都
大坂(掛川市)	* 柳月(→岡山住) 双花 如柳(→門屋, 西ヶ崎, 袋井, 駿・玉浦住) 一溪 * 千広(改魚哉) 茶丸 素月(→福田住) * 菊吾 如昔 扇風 宗柳 守道 環月
大瀬(浜松市東区)	禾山 一声(→コウゴシヨ, 中泉住) 兄山 花也 芦城 琴古
太田(袋井市)	恵山
大野(掛川市)	橘山 鱗二 雨石 鱗扇 如青 其谷 竹詠 寺石
大山(浜松市西区)	静斎
岡崎(袋井市)	椿谷(改知為) 尺樹(→梅田住) 五嶺 白鷺 林幸 立水 翠竹(→岡山住) 雪竹 二毛 麦英 志川 如雪(→下山梨住) 以行 愛山 吾竹 * 貫一 帶月 其深 初白 柳眉 雨色 鶴歩 寿童 金声 知鶴 如醉 吾友 成峯 当戸 柴山 花友(→イカオカ住) 渡暁 霞石 完斎 青牛 秀山 嵐山(→掛川住) 旭峯 旭山 梅月(→金折, 垂木, 土方, 駿・ドウバラ住) 玉露 鶴山
岡田(鳥田市)	愚千 竹水(→岡山, 金谷住) 露昇 春月 * 小竹 一葉 里山 酒山
岡津(掛川市)	
岡原(掛川市大淵)	玉月
岡村(磐田市岡)	喜月
岡山(袋井市)	花雪(→庄内住) 松丸 * 岱仲(中) 梅寿(→浜松, 松原, 弥太井住) 柳月(→大坂住) 寿月 春波 月升 二秀 梅秀 寿山(→金谷, 目木住) 露光 卓明 柏秀 春江 * 岳丈 春湖 翠雅 竹外 山月(→掛川, 城之崎住) 教惟 竹山 翠竹(→岡崎住) 花遊(→土橋住)
落合(鳥田市)	三水
小貫(掛川市おぬき)	梅笠 見齋 兎山 齋月
小野(浜松市北区細江町)	竹志 許半
小山(袋井市おやま)	完守
貝塚(磐田市)	桂翠(西貝塚) 花基
各和(掛川市)	蛩(桂) 堂 * 清風 花陵 直夫 亀角 楚山 陽里 雪ぬし 一嶺

	松齋 幾女 氏人
掛(欠)川(掛川市)	古勢 桃水 富春(改松里) (→萱間住) 山江 竹馬 雲月 布谷 玉花 竹雨 烏蓼 寸尺 晴雀 都友(→横須賀住) 松勢 雀鳥 花暁 山涛 名丈 思輕 霞松 亀勢 和月 都水 五得 抱雪 調那 金升 春勢 白牛 玉宝 旦水 清星 一枝(→老間, 水垂住) 茂子(女) 嵐山(→岡田, 才田住) 寿鶴 雨来 櫻江 たき女 三花 山月(→岡山, 城之崎住) や太郎 玉艶 桃園(→諸井住) 湖西 雪窓 四山(→梅田, 駿・石脇住)
掛(欠)塚(磐田市)	未松 和風 飛鳥
笠井(浜松市東区)	鶯竹 梅香 柳花 梅松 一省 百之 玉高 双亭
鹿島(浜松市天竜区二俣町)	* 秋江
河東(菊川市かとう)	五柳 松霞 完牛
門屋(御前崎市かどや)	嵐桜 如柳(→大坂, 西ヶ崎, 袋井, 駿・玉浦住) よし江 寒鯉 雪花 湖石(→石野住) 放齋 松鶴(→木舟, 毛森住) 南海(改三橋) 芝香 鉄賀
金折(浜松市南区)	梅月(→岡田, 垂木, 土方, 駿・ドウバラ住)
金指(浜松市北区引佐町)	田子 琴思 溪雨 溪雪
金谷(島田市)	* 梅春 吟月 久登 花山(→徳泉, 初馬, ふくたち住) 鳴戸 歌良 歌祐 八百(子) (八重子) 竹逸 升羅 五道 清月 貴友 双風(楓) 逸溪 寿山(岡山, 目木住) 茶友(→相良住) 桃二 陶由 竹女(→鮫島, 新出住) 杉雪 雅呈 祖石 克省 竹月 ことぶき 梅仙 竹水(→岡津, 梅田住) 榎塘 天真 喜谷 金奴
鎌田(磐田市)	梅里 都牛 路白
神ノ郷(牧之原市坂口さくち)	小蝶 二蝶 草花(→飯田住)
上石田(浜松市東区)	真冬
上庄内(牧之原市勝保)	馬年 少鹿
上のよし(未詳)	田子人
上前島(浜松市東区大島町)	亀耄
上村(袋井市浅羽町)	素守
上吉田(榛原郡吉田町)	只有 左太郎 鶴遊(→西郷住) たせ女
加茂(菊川市および磐田市)	芳太 文錦 松人 栗山 対嶋 対雲
萱間(袋井市)	* 松里(→掛川住) 鈴玉
川井(袋井市)	席竹 東松 澄水(→向笠住) 閑里
川上(菊川市)	吏石 蛙心(改吟古) 一豫 吟昔 花牛 帰雪 柳古
川尻(吉田町)	溪漁
気賀(浜松市北区細江町)	竹声
菊川(菊川市)	其暁

城之崎(磐田市)	寿谷 山月(→掛川, 岡山住)
木舟(浜松市東区和田町)	*一哉 均夫 生民 笠露(改登山)(→龍光住) 雪外 梢雨 峩竹 泰虚 文谷 松鶴(→門屋, 毛森住) 寿白
久兵衛(掛川市)	雅友
久津部(袋井市)	笠峰 柳舎
久保(掛川市)	松月 花明
くもおり(未詳)	硯龍
倉中瀬(浜松市浜北区中瀬)	石柳
倉真(掛川市くらみ)	鶯袋(岱) 枝雪 *一笑 雪雲
気子島(磐田市げごしま)	花若 秀菽 立志
毛森(掛川市)	景山(→瀬戸ノ谷住) 湖月(→保六島住) 青葉 露水 松雀 (→門屋, 木舟住)
高御所(掛川市こうごしょ)	月江 一声(→大瀬, 中泉住) 布山 雲丹
小島(磐田市)	あられ 菱丸 月哉
小島方(磐田市豊浜)	近潮(湖) 二鶴 文梁 知山 一枝(→老間, 掛川, 水垂住) 敬之 一生 笑声 丘湖
小松(浜松市浜北区)	五燕 帛来 丈湖 声雀
駒場(磐田市)	椀里 禹迹
五明(掛川市ごみょう)	*得岳 竹雪
西川(浜松市天竜区龍山町大嶺さいがわ)	瀑布
西郷(掛川市)	柳道 柳都 諸石 敬斎 鶴遊(→上吉田住) 花月(→西方住) 伍伯 雨逸(改静鯉) 順玉 松月 梅花
西山寺(牧之原市)	蘭岱
才田(未詳)	*涼雨(→浅羽, 馬場住) 弘道 嵐山(岡田, 掛川住) 藤平 柳枝
相良(牧之原市)	茶友(→金谷住) 可道 角田(改吟一) 雷雪 精山 遠枝 来雪 野乙 雲外 龍枝 均堂 可耕 呂仙 一太 三少 秋園
坂口・さくち→神ノ郷	
笹原島(磐田市)	*可応
さほか(未詳)	松月(→本所住)
鮫島(磐田市)	*莞(完)立 竹女(→金谷, 新出住)
塩井(川)(掛川市)	応山 一嶺 *山竹 梅松
篠場(掛川市)	*送雨 一絃
柴(袋井市浅羽)	一遊 三遊 野風 蒼波 松山 竹鶯 柳山 風月(→駿・花倉, 駿・石脇住) 趙山
下小林(浜松市浜北区)	一桜
下俣(又)(掛川市)	雪春 春花
下山梨(袋井市)→山梨	如雪(→岡崎住)

庄内(牧之原市勝俣)	万左(佐)久 花雪(→岡山住)
白井(牧之原市)	愛実 志耕 里風
白鳥(浜松市東区)	兄波
白羽(御前崎町)	菊也(女)
新貝(磐田市)	如障 涼宝 其道 南戸 里松 知白 花木 素琴 松花
新庄(牧之原市)	木臥
新出(磐田市しんで)	文海(→見付住) 幸見 竹嘉 茶交(更) 琴浦 三牛(→土方住) 千影 美山 竹女(→金谷, 鯨島住) 竹風 子子子
末島(浜松市東区豊西町)	草居 五葉
末本(袋井市鷺巣)	露石
杉谷(掛川市すぎや)	春扉 加羊 令花 月鳥 逸花 硯友 硯水
菅ヶ谷(牧之原市すがや)	竹齋
須々木(牧之原市)	如風 文人 古柳 芦角
頭陀寺(浜松市南区ずだじ)	可笑
千手堂(磐田市せんずどう)	菜花
善地(浜松市浜北区)	知鳩
千羽(掛川市)	堅甫(→西之谷住)
藺ヶ谷(掛川市)	素来
大海(磐田市だいかい)	花柳 唯静
大日(袋井市宇刈)	栗里 喜泉 凌雲 栗溪
高尾(袋井市および島田市)	玉露
高瀬(掛川市)	梅山 白露 戸山
高塚(浜松市南区)	一星 いし子 車牛 水月
高橋(菊川市)	井園 春萩 如松 松人 睦園 松風 いろは 松藤 舎山
高畑(浜松市浜北区たかばたけ)	寸固 文青
竹之内(磐田市向笠)	* 竹酔(→向笠住)
田尻(浜松市南区)	柳子 不倦 春泉
伊達方(掛川市だてがた)	梅窓
立野(磐田市たての)	古風
棚草(菊川市)	芦石 瓦石
垂木(掛川市たるき)	鹿丸 梅月(→岡田, 金折, 土方, 駿・ドウバラ住) 泉里 竹丸 秀山 文水(→飯田住) 古川
丹野(菊川市たんの)	水巖 * 其水 富士丸 雪丸 幽山
潮(丁) 海寺(菊川市)	* 松寿 月川 一嵐 和吹 曙雲 可好 高竹
月岡(菊川市)	柳齋 * 旦雅 東川
土橋(菊川または袋井市)	茂庭 花遊(→岡山住)
鶴松(袋井市)	扇風
寺島(浜松市浜北区)	如雄

寺田(未詳)	五白
寺谷(磐田市てらたに)	ちとせ 月庭 窓月
天新田(浜松市東区天王町)	和曲 柳甫
天竜(浜松市天竜区)	朝霞 桂花 露朝 露桂 溪霞 笑庵 庭蛙
同笠(袋井市どうり)	朝光(→向笠住) 清水(→中泉住) 一兔 菁莪 霞月
徳泉(掛川市)	長風(改花山)(→金谷, 初馬, ふくたち住)
鳥羽野(袋井市富里)	為舟 桂(圭) 舎 西月 守耕 如好 大納 珍哉 知草(蜘蛛) 里伯 *燕居 *其常 麦斗 如石
富塚(浜松市中区)	祢風
友永(袋井市)	可堂 古栗
戸綿(森町睦実)	*土口 梢月 古因
中泉(磐田市)	*何羨(改秀学) 其雪(→イオスミ住) 能臣 水哉 春水 * 旭斎 溪霞(→天竜住) 柯月 清水(→ドウリ住) 知哲 敬旭 梅園 よし也 丸々 東松(→川井住) 昔幼 一帆 兎角 柳風 笑澄 冬陽 十菊 静月 漁遊 一声(→大瀬住) 幽光 傍成 知 照 掃月 風皓 琴宝
長尾(川根本町)	雪朝
中里(牧之原市)	和泉 文介
中新田(袋井市)	梅志 藤丸 小溪 露角
中善地(浜松市東区豊町)	*十湖(改伯牛) 素外 風哉 露桂 玉水
中田(磐田市)	*維石 古石(→貫名, 駿・田中住) 焉(円) 丈
長鶴(浜松市東区)	水嵐
中野(磐田市豊浜中野)	*雨好 *知(石)碩(→浅羽住) 金賀 雨暁 普山 志清 竹明 一扇(→西之谷住) 欣雅 風嵐(→浅羽住)
中方(掛川市なかほう)	高山 土筆 如星 春彦 晴山
長溝(袋井市)	露勇 竺仙 季蕉 曙光 亀玉 芳雨 我阿人
中村(袋井市)	一瓢
中山(未詳)	久円 素冠 聖七
流(袋井市浅羽)	菁々
奈良野(菊川市)	英泉 遊山
成(鳴)滝(掛川市)	里柳 一勢 里山 青水 鯨巴(→岡崎住) 柳里 丸石 思哉 (斎) 万寿 竹月 湖山 帰童 山第 里格 満石 国静 延亭 松 下 山竹 琳斎 竹里(→牛尾, 駿・オウカ住) 耕斎 物外
新野(御前崎市)	双戸 茂月 時味(美) 流水 千石 見水 栄丸 一亭 丸寝
新堀(袋井市または浜松市浜北区)	雪月(→西方住) 啓道 露巖
西ヶ崎(袋井市)	露松 月爪(→秋葉山住) 竹宇 如柳(→大坂, 門屋, 袋井, 駿・玉浦住) 梅静 可涼
西方(菊川市)	右一(改亀命) 花(華) 月(→西郷住) 旦秀 池月 雪月(→新

	堀住) 涼月 其道 亀尺 亀丸 東月 成月
西川→サイガワ	
西之島(磐田市)	笑声 燕里
西之谷(掛川市にしのや)	一扇(→中野住) *丹雅 堅甫(→千羽住)
日坂(掛川市)	吟哦 歩牛 青年 石水 桃醉 桑陰 我堂 四節(思雪)
貫名(袋井市広岡)	巴友 古石(→中田, 駿・田中住) 月窓 綺石
野賀(掛川市のか)	柳水
野中(掛川市大淵)	風山
延久(袋井市のべひさ)	三盛 可道
橋羽(浜松市東区天竜川町)	三余(→打上, 駿・藤枝住) 三玉 艶花
初倉(島田市阪本)	嘯(尚) 月
法多(袋井市豊沢はった)	静波(→見付住) 酒遊
初馬(掛川市はつま)	花生 富仵 書山 水旭 片山 花山(→金谷, 徳泉, ふくたち住) *春山 月光(→イオスミ住) 池上 少風 梅谷(→森住) 柳川
馬場(袋井市浅場ば(ん)ば)	*涼雨(→浅羽, 才田住)
浜松(浜松市中区)	魚交 桐雨 諸水 松谷 朶来 桃花 亀友 登月(→駿・瀬戸住) 芋谷 江柳 可交 涼草 ふぢよみ人 夏柳 竹山(→松原住) 梅寿(→岡山, 松原, 弥太井住) 涼風 志雲
春埜山(森町はるのやま)	礫松
東脇(磐田市)	*静嘉
土方(掛川市)	桜月 雪鷺 十竟 一格 三牛(→新出住) 沈流 春風 梅陰 一橋 喫茶 理学 梅月(→岡田, 金折, 垂木, 駿・ドウバラ住) 春山 亀川 玉尾 一ヒ 学中 雪覆
平宇(袋井市下山梨ひらう)	潺々 水音(後号湛水)
平川(菊川市)	隆石 一二三 素涼(→見付住)
平口(浜松市浜北区)	圭支
平田(浜松市中区)	均堂 夕蛙
平間(磐田市)	萊菁 李方 *素竹
平松(磐田市)	亀鶴
深見(袋井市)	白川(→飯田住) 月川(→潮海寺住)
ふくたち(未詳)	一笈 花山(→金谷, 徳泉, 初馬住)
福田(磐田市ふくで)	涼月 秋溪 双山 素月(→大坂住) *晴笠(改芦清) 如常 宗月 可雪 知道 些々園 梅遊 春谷 花葎
袋井(袋井市)	月汀 千歳 金瓦 野萩(女) 蒲丈 寿寛 如柳(→大坂, 門屋, 西ヶ崎, 駿・玉浦住) 池泉 陳平 安路 一水 梅人(女) 梅門 文月 橋保 喜眼
藤川(川根本町)	文量(→駿・藤枝住) 暁山 放牛

伏方(牧之原市勝田)	其白
二つや(未詳)	秀斎
二俣(又)(浜松市天竜区)	* 鶴明 雪春 * 松寿 くに女
舟明(浜松市天竜区ふなぎら)	東静 雪柳 桂水 東輪
平民(袋井市浅羽へいみ)	一醒(→浅羽住) 保玉 可楽 知伯 柳蛙
方丈(袋井市)	光柴 せき女 生涼
保六島(磐田市豊島ほうろくじま)	松霞 花月(→駿・請所住) 湖月(→毛森住)
菩提(袋井市)	宝所
堀越(袋井市)	一志 里雀
本所(菊川市)	松月(→さはか住) 麦里
前野(磐田市)	運昇 泉賀
摩訶耶(浜松市北区三ヶ日町)	千松
松原(袋井市)	有成 何草 流水 蟻城 啓居 右之 梅寿(→岡山, 浜松, 弥太井住) 丈山 北山 松雨(改佳風) 啓水 如月(改涼湖) 涼竹 為撲 楞雨 如山 出山 竹山(→浜松住) 箸友
まんぎ(未詳)	風馬
万斛(石)(浜松市東志町)	洗布 烏石 芋里
三亀谷(牧之原市坂部みかか <sup>2</sup> )	唐竹
三方(浜松市北区)	涼月 花風
御厨(磐田市鎌田みくりや)	梅雪
三沢(袋井市)	馳道 等沢 圭雨 養志
美園(浜松市浜北区)	帟風 対月
見付(遠府とも, 磐田市)	花谷 山園 甲山 杜碩 文所 一固 鶯水 松園 素涼(→平川住) 公甫 蕙畝 志芳 土敬 文海(→新出住) 静波(→ハッタ住) 青浴 柳翠 * 文牛 秀嶺 鶴巢 まさ子 一路 聴琴 波青
水垂(掛川市みづたり)	茶醉 哥山 露醉 一枝(→老間, 掛川住)
南島(磐田市)	梅支
南田(磐田市)	梅沢 梅子 梅暁 梅鳥 梅柳
宮之一色(磐田市)	* 露碩 柏園 飛節
向笠(磐田市むかさ)	* 竹醉 菊丸 * 弄我(改桂山) 露雪 喜斎 竹麿(丸) 朝光(→ドウリ住) 喜悅 呑湖 澄水(川井住) 里仙 一亀 喜竹 常盤(磐) 里山 光月 目玉 冠甫 源亭 桃花 土牛 異仏 土住
村松(袋井市)	可久
女神(牧之原市めかみ)	可久
目木(菊川市もつき)	寿山(→岡山, 金谷住) 橋山 柳古
森(森町)	廬雪 * 佩玉 梅明 円友 一圭 * 積山(改一(乙)雅) 古山 * 駿嘉 鶴夫 朝花 * 伊水 止杖(改鬼外) 花鳥 鶴千 * 得水(改鶴丈) 試雪 花(華) 玉 浦春 斯画 喜醉 山耕 吾心 碧翠 静岳 二石 梅谷(→中野住) 松斎 誰山 酒好 仙荷 素兆

	完裡 帛勢 松竹
諸井(袋井市もろい)	* 桃寿 白園 枝月 寿茂 湖青 桃園(→掛川住) 東秀
谷川(森町やかわ)	* 露光 千鶴 砂石
薬師(浜松市東区)	岱阿
谷口(浜松市中区上島やぐち)	谷松
弥太井(磐田市浅羽町)	梅寿(→岡山, 浜松, 松原住) みつか山
山崎(掛川市および袋井市)	片風 里鳥
山梨(袋井市上山梨・下山梨)	梅生 梅叟 風竹 琴馬 里晴 松下 谷川 松風 玉水 亀遊 松玉 山重
山鼻(花)(掛川市逆川)	万外 玉泉 吟昇
横岡(島田市)	景水
横須賀(掛川市)	美松 蒼古 素文 半翁 * 三千丸 葛谷 松人 北昔 昇軒 かと女 千代女 朴之 然山 牧牛 有馬 蒼山 雪松 紫雲 水竹 千里女 里鶴 一徳 一山 醉月 金英 如水(→一色住) 虚谷 桃里 梅里 雪山 尽遊 竹葉 空人 松の花 万里 怨柳 * 柳翫 省馬 文英 知晴 岨雲 春斎 荻声 鶏山 雄巴 都友(→掛川住)
横地(菊川市東横地・西横地)	丹峯 梅少 峯山 梅夕
横山(浜松市天竜区)	晴甫 清雪 菊甫 晴江 晴柳
与五郎(吉田町)	醉竹
吉岡(掛川市)	文里
米丸(袋井市)	桂泉 少草
らいふく(未詳)	素亨 穂波 完翠 素斎 素志
龍光(浜松市東区)	春夢 登山(→木舟住) 千来 青翠 自足 虚白
和口(磐田市)	如磔
渡瀬(浜松市南区)	石保

### ■駿河国地名

青島(藤枝市)	作者名
新屋(焼津市あらや)	* 延松 静(清) 溪 盛 北斎 梅隣
石脇(焼津市)	柳涯 翠石 歌長
伊太(島田市)	* 四山(→梅田, 掛川住) 風月(→柴, 駿・花倉住)
一色(焼津市)	良敬 可学 二笑
請所(受処とも, 焼津市)	長者丸 花逕 錦詩 一茶 一馬 雪城 * 茶烟 花月(→保六島住) 神谷 幾丸 草山 茂山(→駿・弥左衛門住)
越後島(焼津市)	* 珍種
相賀(島田市おうか)	寸山 亀川 竹里(→牛尾, 成滝住)
大島(焼津市)	竹雅 秋山 きた女 葉盛 たか女 幼扉 一江 思后
大村新田(焼津市)	暮雪

大柳(烏田市)	野熊 復山 也有
岡部(藤枝市)	其梅(改快山)
小柳津(焼津市おやいづ)	月止
方之上(焼津市)	竹英 哥月
上泉(焼津市)	其国 秋宇(改貞甫)
上小田(焼津市)	小堂
上当間(藤枝市)	花蝶
上藪田(藤枝市)	遠花 亀笑
川根(烏田市)	里石 半山
久兵衛新田(藤枝市)	誠斎(→池新田住) 杜松
小土(焼津市こひじ)	梅始 歡長 梅明
五平(藤枝市)	松陰 帷静
坂本(焼津市)	亀齡 沢堂
三軒家(藤枝市上青島)	松月 水静 流翠(→駿・瀬戸住) 竹平 柳汀 西石(→駿・瀬戸住) 竹堂
島田(烏田市)	*竹香 岫雲 花楽 晴雨 *梅城 梧月 醉古 頃雨 柳我 *友清 西圃 *砂白 *雪香 *習静 笠霜 氷香 *一釜 無石 江山 静月 儀石 邦孚 連枝 玉芝 水心 祝山(→駿・兵太夫住)
駿府(静岡市)	久誰
関方(焼津市)	花朴
瀬戸(藤枝市)	*玉見 *竹溪 貞良 梅隣 百歳(→青柳住) 梅二 西石(→駿・三軒家住) 花(華) 長 *流翠(→駿・三軒家住) 梅林 登月(→浜松住) 如徳
瀬戸ノ谷(藤枝市)	景山(→毛森住) 百風 樹木 曲川 如休 春宵 秋水 風卵
たかや(未詳)	花庭
高柳(藤枝市)	柳水
田尻(焼津市)	藤葉
田中(藤枝市)	あや女 吐雲 柳居 和翠 古石(→貫名住) 里盛 雪堂 閑美 一帯 袋蜘蛛 硯山 橋守 草玉 少年涼風 閑美
玉浦連(焼津市)	如柳(→大坂, 門屋, 西ヶ崎, 袋井住) 不如 旭窓
築地(藤枝市)	閑久 池栖
道原(焼津市どうばら)	石山 梅月(→岡田, 金折, 土方, 垂木住) 水牛 和香 和来 勢遊 鳳山
飛島(静岡市清水区袖師町)	雲外 露静
中根(焼津市)	至山 次陸 秋景
中藪田(藤枝市)	千奥
二丁(駿府遊郭, 静岡市葵区)	玉寿

祢宜島(焼津市)	孤舟 松楽 和宵 月山
旗指(島田市はさし)	楠洞
花倉(藤枝市)	風月(→柴, 駿・石脇住)
葉梨(藤枝市)	貫成
兵太夫(藤枝市)	月彦 松雄 梅栄 つかさ(後号雲眠) 祝山(→駿・島田住)
藤枝(藤枝市)	月笑(咲) 花屋 春窓 一記 竹泉 嵐馬 真猿 清橋 竹葉 梨谷 止風 自風 茂里 松佳 木栄 涛(掬) 漁 井丸 晴牛 浦月 不及 翠雨 暁花 亀堂 吐月 春雪 三余(→打上, 橋羽住) 文量(→藤川住) 三代丸 久米 はま女 ほとり 琴糸女 牧牛 志え女 美彦 蒼園 蓮山 卯格 教女 竹堂 旦齋 清友 半農 梅里 胤足 桜山
保福島(焼津市)	文枝 哥丸(→駿・八幡住)
水守(藤枝市)	寿三 慶遊 山風
本中根(焼津市)	初月 子桐 雪山 楠居 楠洞
八楠(焼津市やぐす)	清流 茂山(→駿・請所住)
弥左衛門(藤枝市)	東柯 哥丸(→駿・水守住)
八幡(藤枝市)	景松 花暁 子友 庭松
与左衛門(藤枝市)	
<b>■三河国地名</b>	<b>作者名</b>
御油(豊川市)	巴川 海水 守誰 青峨 菊風 友威 素白 松夕 桂糸(女)
吉田(豊橋市)	秀竹 流美
<b>■伊豆国地名</b>	<b>作者名</b>
久連浦(沼津市くづらうら)	呉笠
<b>■相模国地名</b>	<b>作者名</b>
小田原(小田原市)	完山 杜石 至孝 芦村 喜暁 西山 柳明
<b>■武蔵国地名</b>	<b>作者名</b>
江戸(東都)	賀石 竹史

## 俳諧どめ連句一覧

## 凡例

- 一 嵐牛・洋々の連句書留『俳諧どめ』に収録される連句を年代順に配列した。
- 一 「成年番号」は、成立年次（推定を含む）の西暦と収録の順番を記したものである。
- 一 原本に書き込まれた書名は様々なので、年代が判るよう仮に書名を付した。整理保管のため付した番号「写27～75,93」を各冊の最初に記した。ただし、写93の「弘化二年俳諧どめ」は翠台初石が筆録識語した年次による仮題で、それ以外の成立や、嵐牛の出座しない作品も交じっている。
- 一 興行年月日や場所などを記した前書は、／を付して句の後ろに記した。
- 一 連衆が多い場合は、6名まで挙げ、最後に「ほか」と記した。
- 一 殆ど同じものが重出する場合は、備考欄に→を付して成年番号を記し、参照出来るようにした。
- 一 他の選集や稿本などにも収録される場合は、備考欄に＊を付して書名を記した。
- 一 初期の連句は、「参考」として『俳諧どめ』以外からも収録した。

成年番号	書名	発句	句数	連衆	備考
参考	写27	天保十四年(1843)			
184301	於青々処	連句抄 鳶啼てからから落る木葉かな ／天保十四卯閏九月尽、於青々処	36	卓池 蓬宇 嵐牛 波文	*弘化二年俳諧どめ他
184302	同上	入山もあたりにもなし冬の月	36	嵐牛 波文 卓池 桐古	*同上
184303	同上	川添の竹あからむや冬日和	36	卓池 嵐牛 石采 蓬宇	*同上
184304	同上	横雲や魚箔(やな)の外行鴨の声	18	卓池 茶岡 嵐牛 石采	
184305	同上	初水見た日ぬくとく暮にけり	18	波文 桐古 嵐牛	
184306	同上	元日はあらたまりたる寒かな	14	卓池 嵐牛 波文	
184307	同上	落て迄風の離れぬ落葉かな	18	石采 多含 茶岡 桐古 嵐牛	
写93	弘化二年～三年(1845～1846)				
184401	弘化二年俳諧どめ	初時雨猿も小囊をほしげなり	18	芭蕉翁 嵐牛 鳳嶺 近嶺 吟風 五岳 四節 玉翠 青年 素来 義石 晴雨 初石 久雄	(注)本巻は巻頭に収録。天保十五年(1844)、鳳嶺らが鎌田(磐田市)の医王寺に芭蕉句碑(嵐牛書)を建てた折の興行と推定される。
184501	同上	喰物のうへに雨ふる花見かな	36	卓池 嵐牛 蓬宇 完伍 波文	*年々十歌仙
184502	同上	酒やめておろかになりぬ花盛り	36	卓池 祖郷 蓬宇 嵐牛	
184503	同上	山蔭や昼ある霜に鳴青雀(あをじ) ／弘化二年十一月上旬両吟	36	嵐牛 鳥谷	
184504	同上	枯々の野に麗かな朝日かな ／弘化二年十一月上浣興行両吟	36	鳥谷 嵐牛	
184505	同上	おくれては親の跡追ふ鹿の子哉	36	年雄 初石 嵐牛	

- 184506 同上 鮎汲や覗によればふいと行 36 嵐牛 吟風 近嶺  
 184507 同上 土舟の堀川登る霞かな 35 嵐牛 近嶺 吟風  
 184508 同上 起るから一日隙や鶯(うそ)の声 36 嵐牛 桐古  
 184509 同上 先の夜も閉たになるや初蛙 36 桐古 嵐牛  
 184510 同上 紅梅や片側朽て一むかし 36 卓池 水竹 嵐牛  
 184601 同上 あはで聞(く)嘆や月の宵あした 36 嵐牛  
 /卓池追善, 九月十一日山花ニ而興行 (注)卓池, 弘化3・8・11没  
 184602 同上 起たればさのみ音なし五月雨 18 旦齋 嵐牛  
 184603 同上 虹あしの水にひく日や葦(ぬなは)うく 18 嵐牛 旦齋  
 184604 同上 青梅のおもげにゆれる梢かな 36 嵐嶺 嵐牛
- 写37 嘉永四年(1851)
- 185101 俳諧どめ 遥か往て水影さしぬ暮の鴨 36 嵐牛 一庵(塞馬) \*櫃をさめ  
 /嘉永四辛亥中秋下浣, 於柿園  
 185102 同上 雲毎に心もとして月一夜 36 一庵(塞馬) 嵐牛 \*同上  
 185103 同上 たのまねば行灯もおかぬ夜寒哉 36 塞馬 洋々 \*同上
- 参考 嘉永五年～六年(1852～1853)
- 185201 蓬宇連句帳・五 44 蓬宇 稲玉 嵐牛ほか44名  
 月夜よしよゝしと梅のかをりかな  
 185301 嵐牛等俳諧どめ 36 完伍 筌露 嵐牛  
 時鳥啼や夜川の風あかり  
 185302 同上 葭すだれ夏待さまに掛わたし 18 (完)伍(せん)ろ(嵐)牛  
 185303 蓬宇連句帳・六 36 蓬宇 嵐牛 塞馬 完伍  
 にごり江のすむ方出来し卯月哉 \*嵐牛等俳諧どめ  
 /於涼石居興行/四歌仙  
 185304 同上 川岸へ出て夕空広き若葉哉/其二 36 完伍 塞馬 嵐牛 蓬宇 \*同上  
 185305 同上 はれくちの雨ふく窓や若楓/其三 36 嵐牛 蓬宇 完伍 塞馬 \*同上  
 185306 同上 ひやひやと芦間を出たり夏の月/其四 36 塞馬 完伍 蓬宇 嵐牛 \*同上
- 写34 嘉永七年(1854)
- 185401 嘉永七年俳諧どめ 36 嵐牛 鳳嶺  
 留主しらすまでのしまりや花の木戸  
 /嘉永七寅年三月興行  
 185402 同上 咲そめし桜や頓て花の宿/生類之俳諧 36 嵐嶺 嵐牛  
 185403 同上 葉まけして盛の遅し山ざくら 36 嵐牛 知石  
 185404 同上 日の直る朝風寒し黄み麦 36 知足 嵐牛  
 185405 同上 葉づたひに吹るゝ蝶や麦のうへ 36 嵐牛 竹明  
 185406 同上 おへど猶たゆまぬ声や行々子 36 竹明 嵐牛  
 185407 同上 何せうと毎日おもふ長閑かな 18 嵐牛 貫一  
 185408 同上 声ごとに走り出さうなきゞすかな 36 嵐牛 芦清 \*両吟二歌仙  
 185409 同上 葉桜や[往]たなり[見え]ぬ暮の相手 36 芦清 嵐牛 \*両吟二歌仙  
 185410 同上 何せうと毎日おもふ長閑哉 36 嵐牛 春谷  
 185411 同上 上る日の東雲寒き四月かな 36 春谷 嵐牛

- |        |                                      |                                    |    |     |                           |
|--------|--------------------------------------|------------------------------------|----|-----|---------------------------|
| 185412 | 同上                                   | 住つかぬ旅のこゝろや置巨燵<br>／同五月 脇起独吟         | 36 | 芭蕉翁 | 平台                        |
| 185413 | 同上                                   | 塵吹て机に居る寒かな                         | 36 | 嵐牛  | 得岳                        |
| 185414 | 同上                                   | 一葉提て見上る桐の梢かな<br>／嘉永七寅八月興行          | 36 | 嵐牛  | 知石                        |
| 185415 | 同上                                   | 十六夜や闇一ぱいに雨もやむ                      | 36 | 嵐牛  | 嵐嶺                        |
| 185416 | 同上                                   | きれ上る雲のすそより三日の月                     | 36 | 嵐牛  | 竹明                        |
| 185417 | 同上                                   | 秋風や下りて山の高さしる                       | 18 | 嵐牛  | 貫一                        |
| 185418 | 同上                                   | 枯葉ふく音や秋行夕日和                        | 36 | 嵐嶺  | 竹明 嵐牛 知石                  |
| 185419 | 同上                                   | 待宵や松を離るゝ五位の声                       | 36 | 竹明  | 知石 嵐嶺 嵐牛                  |
| 185420 | 同上                                   | 木枯や有明しらむ松の上<br>／嘉永七寅九月、於石翠亭興行      | 18 | 石翠  | 平台 嵐牛                     |
| 185421 | 同上                                   | 山も雪積るに尽し景色哉                        | 18 | 石坡  | 平台 石翠 嵐牛                  |
| 185422 | 同上                                   | 又一荷あふも菊也朝月夜                        | 36 | 嵐牛  | 石翠                        |
| 185423 | 同上                                   | 塀越に埃りのかゝるばせをかな                     | 36 | 石翠  | 嵐牛                        |
| 185424 | 同上                                   | いざよひや闇一ぱいに雨もやむ                     | 36 | 嵐牛  | 石坡                        |
| 185425 | 同上                                   | 草の戸は今朝も[ ] 柚味噌哉                    | 36 | 石坡  | 嵐牛                        |
| 185426 | 同上                                   | [十六夜]の闇や立派に[は]げかゝる                 | 30 | 嵐牛  | 鶴明                        |
| 写35    | 安政二年(1855)                           |                                    |    |     |                           |
| 185501 | 安政二年三年俳諧どめ                           | 蟬(こほろぎ)や暮いそぎする藪の家<br>／神無月末すゝき芦角亭にて | 36 | 文一  | 嵐牛 芦角                     |
| 185502 | 同上                                   | 遠き人よけて居る也雪の道                       | 36 | 嵐牛  | 文一 芦角                     |
| 185503 | 同上                                   | 鐘の音のつく袖に入寒哉                        | 36 | 嵐牛  | 芦角 文一                     |
| 185504 | 同上                                   | 登る日や同じ高みの雪の山                       | 36 | 嵐牛  | 松斎 吟古 筆                   |
| 185505 | 同上                                   | 顔洗ふうちに初雪晴にけり                       | 36 | 野乙  | 嵐牛 雷雪 吟古<br>芦角 桂堂 →185507 |
| 185506 | 同上                                   | 岩角に鶯の捻むくあられかな                      | 36 | 嵐牛  | 野乙                        |
| 185507 | 同上                                   | 顔洗ふうちに初雪晴にけり                       | 18 | 野乙  | 嵐牛 雷雪 吟古<br>芦角 桂堂 →185505 |
| 写37    | 安政二年(1855)                           |                                    |    |     |                           |
| 185508 | 俳諧どめ                                 | さみだれや鹿伸あがる草の中<br>／於三州牛久保四吟         | 36 | 嵐牛  | 完伍 拾山 素行<br>*夏ごもり         |
| 185509 | 同上                                   | 去(いな)す手にさからふ風や火取虫                  | 36 | 素行  | 拾山 完伍 嵐牛 *同上              |
| 185510 | 同上                                   | かれ枝や生出の蟬の声はじめ                      | 36 | 拾山  | 嵐牛 素行 完伍 *同上              |
| 185511 | 同上                                   | 湖に影もちて根づきし雲の峰                      | 36 | 完伍  | 素行 嵐牛 拾山 *同上              |
| 写34    | (注)以下五巻、素行が来遊した安政二年(1855)夏の作品と推定される。 |                                    |    |     |                           |
| 185512 | 嘉永七年俳諧どめ                             | 老るまで鶯人に知られけり<br>／涼石居(完伍亭)興行        | 36 | 蓬宇  | 嵐牛 拾山<br>*ふくろさうち          |
| 185513 | 同上                                   | 松風のすむ山里やほとゝぎす                      | 36 | 完伍  | 素行 嵐牛                     |
| 185514 | 同上                                   | 玉巻てはや雨はじくばせを哉                      | 36 | 嵐牛  | 蓬宇 素行                     |
| 185515 | 同上                                   | 青いのに寂葉あり唐がらし                       | 18 | 笠露  | 素行 嵐牛 拾山                  |

185516	同上	寝転で遣ふ月夜のうちはかな	36	素行 拾山 嵐牛
<b>写37 安政二年(1855)</b>				
185517	俳諧どめ	筍の竹になる日やひとあらし ／安政二年卯六月下旬四日始	36	静和 洋々
185518	同上	おもふことはづるゝ中にほとゝぎす	36	静和 嵐牛 洋々
185519	同上	時めくや晒処の朝あらし	36	嵐牛 静和
185520	同上	雨ひと日降て眠なるゝかゝしかな	36	素行 洋々
185521	同上	七夕と寂しがりけり寺男	36	素行 嵐牛 洋々
185522	同上	魚光る鴈(みさご)の鶯や初あらし	36	嵐牛 素行
<b>写35 安政三年(1856)</b>				
185601	安政二年三年俳諧どめ	雉子鳴や旅の寝覚の七つから／安政三辰春	36	波同 嵐牛
185602	同上	折て来て桶も盥もつゝじ哉	36	嵐牛 波同
185603	同上	夏近き気味をそよぐや小笹原	36	嵐牛 奇泉
185604	同上	此頃は鳥もとまるやさし柳	36	奇泉 嵐牛
185605	同上	三日月の入明りさす若葉かな ／四月はじめ、於帷子園興行	36	嵐牛 石翠
185606	同上	葉がくれもなく咲立ぬけしの花	36	嵐牛 雨竹
185607	同上	曙の水霽しるし夏木立	18	石翠 嵐牛 耕斎 平台 雨竹
185608	同上	若竹や雨干ぬ庭の宵月夜	18	嵐牛 耕斎
185609	同上	夏近き心に成りし二三日	18	耕斎 嵐牛
185610	同上	さゝ波をけしけしおよぐ蛙かな	36	耕斎 嵐牛 平台
185611	同上	蝙蝠のうちへ入りけり春の宵	36	雨竹 平台 嵐牛
185612	同上	花もまだながるゝ川の卯月かな	36	平台 石翠 嵐牛
<b>写36 安政三年(1856)</b>				
185613	安政三年俳諧どめ	照(る)中にはしる光や冬の月 ／安政三年辰十月、於石翠亭興行	18	嵐牛 石翠
185614	同上	わかるゝもむれるも早き千鳥かな	18	嵐牛 鶴明
185615	同上	芦かれてもの怖するや泓(ふち)の鶴	18	嵐牛 正武
185616	同上	枯芦の折勝にさへ成りにけり	18	嵐牛 雨竹
185617	同上	有明の下や千鳥の鳥がよひ	18	嵐牛 耕斎
185618	同上	まだ紅葉ながら高根の小春哉	18	耕斎 平台 嵐牛
185619	同上	梅一木見付しのみ岡見哉	18	嵐牛 平台 雨竹
185620	同上	湖を見る心ふとつくしぐれ哉	18	石翠 平台 嵐牛
185621	同上	霜にたくむつみ覗かん松葉搔	36	嵐牛 平台
185622	同上	大竹の露にしぐるゝ小竹かな	36	嵐牛 平台 物外
185623	同上	照(る)中にはしる光や冬の月／霜月興行	36	嵐牛 曲川 →185646
185624	同上	梅さぐる鳥か日和の藪づたひ	36	曲川 嵐牛 →185632
185625	同上	此ごろはわするゝ門の落ば哉	36	平台 嵐牛 曲川
185626	同上	あら海を末に枯野の日和かな	36	洋々 曲川 嵐牛 →185636

185627	同上	たのかりや鶯往ねばはととある ／二月中旬，帷子園興行	35	嵐牛	石翠	
185628	同上	水掃た箒立けり花のかげ	36	石翠	嵐牛	
185629	同上	笛の音の近う聞えて谷紅葉	36	石翠	嵐牛	雨竹
185630	同上	隣見る迄の隣や秋のくれ	36	嵐牛	石翠	雨竹
185631	同上	白鷺の洲に蹠まり秋の風	36	雨竹	石翠	嵐牛
185632	同上	栗掃む手にとゞきけり朝日かげ／光明山中	16	耕斎	嵐牛	
<b>写37 安政三年(1856)</b>						
185633	俳諧どめ	梅さぐる鳥か日和の藪づたひ ／安政三丙辰霜月，於柿園興行	36	曲川	嵐牛	→185624
185634	同上	留主居してしる水仙の匂ひかな	36	曲川	洋々	
185635	同上	此ごろはわするゝ門の落葉哉	36	平台	嵐牛	曲川
185636	同上	あら海をすゑに枯野の日和かな	36	洋々	曲川	嵐牛 →185626
185637	同上	産捨がひよこに成ぬ麦の秋	36	嵐牛	烏谷	
185638	同上	卵の花のおぼろ覚すや水の音	36	烏谷	嵐牛	
185639	同上	初夜過や小松のうへの夏の月	36	烏谷	洋々	
185640	同上	若竹や月の清さをひとり言	36	洋々	烏谷	
185641	同上	足もとの朝もはやなし舞雲雀／安政三辰年	18	波同	洋々	
185642	同上	ふりもなく伸る若木の柳かな ／安政三卯(辰)年三月	36	奇泉	洋々	
185643	同上	郭公鳴や夜更の藪根汁／安政三辰	18	嵐牛	松鷗	
185644	同上	イば木陰はやよき四月かな／安政三辰	18	松鷗	嵐牛	
185645	同上	生た百合忘れて居ればひらきけり	36	松鷗	洋々	
185646	同上	照(る)中にはしるひかりや冬の月 ／安政三丙辰霜月，於柿園興行	36	嵐牛	曲川	→185623
<b>写42 安政六年～七年(1859～1860)</b>						
185901	安政六年俳諧どめ	戸一枚さし残しおくしぐれ哉	36	嵐牛	平台	
185902	同上	おち葉した跡もこぼるゝ榎実哉	36	嵐牛	平台	
185903	同上	葉ゆるみのして水仙の咲にけり	18	嵐牛	一笑	平台
185904	同上	河靄の晴行門の幟かな	36	波同	姑山	嵐牛
185905	同上	石菖や煽た風のやゝたもつ	36	嵐牛	波同	姑山
185906	同上	かれ萩や留主もよほどゝ見ゆる庭	36	嵐牛	平台	物外 洋々 桂堂 晴笠 雨竹ほか
185907	同上	藻屑から撫出す麦の落ぼ哉	36	姑山	嵐牛	波同
185908	同上	さくさくと凍踏浦の梅見かな ／安政七年申弥生，於此君園	36	春谷	嵐牛	晴笠
185909	同上	暖い砂ふみ草臥て啼ひばり	36	嵐牛	晴笠	春谷
185910	同上	露しぐれ夜はかたよるこゝろかな	36	嵐牛	柳甃	
185911	同上	寂しさのかぎりて鹿の遠音哉	36	一山	嵐牛	
185912	同上	飛々に麦黄みけり山日和	36	嵐牛	梅春	

- \* 安政七年(1860)
- 186001 安政六年俳諧どめ 咲花もほどなく見えて夜道哉 36 嵐牛 静和  
 /安政七年申壬弥生上旬、於柿園
- 186002 同上 夜毎にはまだ鳴兼る蛙かな 36 晴笠 春谷 嵐牛  
 /安政七年申弥生、於此君園興行
- 186003 同上 遠い水汲にをりけり更衣 18 嵐牛 貫一
- 186004 同上 麦粉練る勝手もさわがし子規 36 嵐牛 莞立  
 /万延元年壬三月、於武田氏
- 186005 同上 春雨や鶴はゆつたりと浮てゐる 36 莞立 嵐牛
- 186006 同上 雨を見に座しき替する新樹哉 18 嵐牛 定雍 →186012
- 186007 同上 深靄にうときあたりの呼子鳥 18 定雍 嵐牛
- 186008 同上 葉ざくらや硯洗うて目の覚る 18 嵐牛 莞立 笑庵  
 /於竜山精舎興行
- 186009 同上 いつもあく木かげはなれて夏の月 6 曳牛 嵐牛
- 186010 同上 此頃の隣したしき雪げ哉 36 嵐牛 知碩
- 186011 同上 風軽し玉巻とくる真葛原 36 嵐牛 閑里
- 186012 同上 雨を見に座敷替する新樹哉 36 嵐牛 定雍 →186006
- 186013 同上 香にひと日引れ歩行や木子山/端書略 18 嵐牛 貫一 静嘉 四山 知石  
 岳丈ほか
- 写43 万延元年(1860)
- 186014 万延元年俳諧どめ 36 嵐牛 姑山  
 月までもしたゝる山の夜明かな
- 186015 同上 短夜を吹しらますやみねの松 36 姑山 嵐牛
- 186016 同上 虫の声風造る夜と成にけり 36 閑里 嵐牛
- 186017 同上 羽遣ひに声のせて飛ちどりかな 36 嵐牛 みがく
- 186018 同上 麦秋や空より上の山日和 36 嵐牛 石翠 鶴明 雨竹 耕斎  
 \* そのまま集四編
- 186019 同上 風邪声や夜てもどる網代もり 36 嵐牛 然山
- 186020 同上 立方へ闇の回るや川ちどり 36 嵐牛 敬山
- 186021 同上 まだ明ぬ空にふじ見る寒哉 36 嵐牛 みち丸
- 186022 同上 物取に立棚高き寒かな 36 柿園 秀山 →186206
- 186023 同上 梅さくや風に潮気もなきあたり 36 拾山 嵐牛
- 186024 同上 すゞしさや筆とる事も無ひとり 36 嵐牛 拾山
- 186025 同上 野のすみも山の端もなし今日の月 36 嵐牛 閑里
- 186026 同上 ひとつつとやゆふべの凍もしらぬ蝶 36 嵐牛 旦水 平台
- 186027 同上 今日も鳴遠雷や冷し汁 36 嵐牛 平台
- 186028 同上 村中へ咲移りけりうめの花 36 嵐牛 如艸 →186101
- 186029 同上 門並に松魚きる火や夜もすがら 36 嵐牛 松夫
- 写44 文久元年(1861)
- 186101 文久元年俳諧どめ 36 嵐牛 如艸 →186028  
 村中へ咲移りけり梅の花
- 186102 同上 手離せば早いふかしき接穂哉 36 嵐牛 梅春 →186137
- 186103 同上 杖ひきや座頭たゝせて土筆摘 36 嵐牛 山竹 →186148

(注)以下八巻は、5月21日～6月2日、涼石居興行十歌仙の内(『此夕集 三十』)。

- |        |    |                                 |    |        |    |    |                      |
|--------|----|---------------------------------|----|--------|----|----|----------------------|
| 186104 | 同上 | 今朝もまだ水に有也夏の月                    | 36 | 嵐牛     | 蓬宇 | 青可 | 塞馬                   |
| 186105 | 同上 | 山の井のかひなく深しさつき晴                  | 36 | 蓬宇     | 義玄 | 完伍 | 嵐牛                   |
| 186106 | 同上 | 袖までは風のとゞかぬ夏野哉                   | 36 | 嵐牛     | 桃乙 | 春芙 |                      |
| 186107 | 同上 | 留主の戸を叩てみたる暑かな                   | 36 | 義玄     | 嵐牛 | 敬止 | 青可                   |
| 186108 | 同上 | 生垣や入梅の夕日に蝶ひとつ                   | 36 | 春芙     | 拾山 | 嵐牛 | 完伍                   |
| 186109 | 同上 | 白露の秋に成けり山かづら                    | 36 | 完伍     | 拾山 | 嵐牛 |                      |
| 186110 | 同上 | 草樹さへあれば鳴也秋の虫                    | 36 | 青可     | 嵐牛 | 完伍 |                      |
| 186111 | 同上 | 稲妻や月夜の松をくゞり行                    | 36 | 嵐牛     | 春芙 |    |                      |
| 186112 | 同上 | 虫の声風過る夜と成にけり                    | 36 | 閑里     | 嵐牛 |    | →186139              |
| 186113 | 同上 | 野の隅も山の端もなし今日の月                  | 36 | 嵐牛     | 閑里 |    | →186140              |
| 186114 | 同上 | 暮たりと山見てゐれば秋の月                   | 36 | 嵐牛     | 曲川 |    |                      |
| 186115 | 同上 | 露ほどのものも数也野の明り                   | 36 | 曲川     | 嵐牛 |    | *およびごし               |
| 186116 | 同上 | 草の戸やふた色三いろ菊(の)花                 | 36 | 嵐牛     | 燕居 | 知碩 | 曲川 其常                |
| 186117 | 同上 | 余所からもうれしがられつ菊日和                 | 36 | 其常     | 曲川 | 燕居 | 嵐牛 知碩<br>*ともすゞめ      |
| 186118 | 同上 | 菊の花唯居る朝にかをりけり                   | 36 | 曲川     | 其常 | 嵐牛 | 知碩 燕居                |
| 186119 | 同上 | 人殖て屏風を畳むこたつかな                   | 36 | 瑩(みがく) | 曲川 | 梅春 | 嵐牛<br>*ともすゞめ         |
| 186120 | 同上 | 山茶花の初花散て見られけり                   | 36 | 曲川     | 瑩  | 嵐牛 | 梅春                   |
| 186121 | 同上 | 夜寒さや見古したれど天の川                   | 36 | 石翠     | 嵐牛 | 曲川 | *ともすゞめ               |
| 186122 | 同上 | 暮るゝ空見あげて立や雪の鹿                   | 36 | 嵐牛     | 石翠 | 曲川 |                      |
| 186123 | 同上 | 十月の障子を登る蠢かな                     | 36 | 曲川     | 鶴明 | 嵐牛 |                      |
| 186124 | 同上 | 水鳥の水に倦てや岩のうへ                    | 36 | 杜水     | 嵐牛 | 曲川 | *あられ灰                |
| 186125 | 同上 | 打楫やはやあとに成一しぐれ/天竜川にて             | 36 | 嵐牛     | 曲川 | 杜水 |                      |
| 186126 | 同上 | 実をいとふ葉よりや霜の玄及(さねかづら)            | 36 | 曲川     | 杜水 | 嵐牛 | *あられ灰                |
| 186127 | 同上 | 菊かをる溪にそひ行小はるかな                  | 36 | 嵐牛     | 蓬宇 |    | *蓬宇連句帳・十四            |
| 186128 | 同上 | 澄空や名月といふ外はなし                    | 36 | 曲川     | 嵐牛 | 蓬宇 | *同上                  |
| 186129 | 同上 | 澄夜には星まで澄て冬の月                    | 36 | 曲川     | 完伍 | 嵐牛 | *およびごし               |
| 186130 | 同上 | 朝かげや雪積うへの日和風                    | 36 | 完伍     | 嵐牛 | 曲川 | *およびごし               |
| 186131 | 同上 | 船曳のかほ見合るあられ哉                    | 36 | 完伍     | 菊也 | 嵐牛 |                      |
| 186132 | 同上 | 初冬や松は散しくわらびさし                   | 36 | 菊也     | 春芙 | 完伍 | 嵐牛                   |
| 186133 | 同上 | たわみては雪待竹のけしき哉<br>/霜月十二日、涼石居にて翁忌 | 36 | 翁      | 完伍 | 嵐牛 | 春芙 曲川ほか<br>*蓬宇連句帳・十四 |
| 186134 | 同上 | しぐれては時にさわぐ鴉かな                   | 36 | 梅春     | 嵐牛 |    | →186138              |
| 186135 | 同上 | 水に皆むかふ小家やかれ芒                    | 36 | 嵐牛     | 曲川 | 完伍 | *およびごし               |

写45 文久元年(1861)

- |        |      |                       |    |    |    |  |         |
|--------|------|-----------------------|----|----|----|--|---------|
| 186136 | 文久元年 | 俳諧ども控<br>黄昏るゆとりを門の柳かな | 抹消 | 梅春 | 嵐牛 |  | →186146 |
| 186137 | 同上   | 手ばなせばはいかゞしき接穂哉        | 36 | 嵐牛 | 梅春 |  | →186102 |
| 186138 | 同上   | 時雨ては時にさわぐ鴉哉           | 36 | 梅春 | 嵐牛 |  | →186134 |
| 186139 | 同上   | むしの声風過る夜と成にけり         | 36 | 閑里 | 嵐牛 |  | →186112 |

- |        |    |                                  |    |          |         |
|--------|----|----------------------------------|----|----------|---------|
| 186140 | 同上 | 野の隅も山の端もなし今日の月                   | 36 | 嵐牛 閑里    | →186113 |
| 186141 | 同上 | かねの音や処々にくるゝ花                     | 抹消 | 嵐牛 一湖    | →186144 |
| 186142 | 同上 | がぶがぶと夕波よする霞哉                     | 36 | 嵐牛 然山    |         |
| 186143 | 同上 | 鳩のあと追うて遊ぶや鴛一羽                    | 24 | 嵐牛 然山    |         |
| 186144 | 同上 | 鐘(の)音や処々にくるゝ花                    | 21 | 嵐牛 一湖    |         |
| 186145 | 同上 | 広き野の朝日に梅の一枝哉                     | 36 | 嵐牛 みがく   |         |
| 186146 | 同上 | 黄昏るゝゆとりを門の柳哉                     | 36 | 梅春 嵐牛    |         |
| 186147 | 同上 | よし切や来し羽も入らず鳴てゐる                  | 14 | 嵐牛 ふじ丸   |         |
| 186148 | 同上 | 杖ひきや座頭立せてつくしつむ                   | 36 | 嵐牛 山竹    | →186103 |
| 186149 | 同上 | 寒くともこらえ能日や梅の花<br>／正月廿八日始、福田晴笠亭興行 | 36 | 晴笠 嵐牛 春谷 |         |
| 186150 | 同上 | 伐枝の登れば遠き柳哉                       | 35 | 嵐牛 春谷 晴笠 |         |
| 186151 | 同上 | 伐枝の登れば遠き柳哉                       | 36 | 嵐牛 然山    |         |
| 186152 | 同上 | 菜の花や西の開けし野の夕日                    | 36 | 嵐牛 三千丸   |         |
| 186153 | 同上 | 宿入の駕に酔たる霞哉                       | 36 | 嵐牛 秀山    |         |
| 186154 | 同上 | 初空に我した様に明がらす                     | 16 | 嵐牛 知碩    |         |
| 186155 | 同上 | 出処も見ね【ど】宵々春(の)月                  | 22 | 嵐牛 知碩    |         |
| 186156 | 同上 | 袖迄は風のとゝかぬなつのかな                   | 8  | 嵐牛 然山    |         |
| 186157 | 同上 | 引汐に船江らせて蜩かき                      | 30 | 嵐牛 山竹    |         |
| 186158 | 同上 | 草の戸や壺本有も遅ざくら                     | 29 | 嵐牛 山竹    |         |
| 186159 | 同上 | 机場の物もへらして更衣                      | 6  | 嵐牛 時彦    |         |
| 186160 | 同上 | ふうわりと伐枝落るわかば哉                    | 36 | 嵐牛 然山    |         |
| 186161 | 同上 | 葩(はなびら)に風吹けしのひとつへかな              | 36 | 嵐牛 みち丸   |         |
| 186162 | 同上 | ふうわりと伐枝落るわかば哉                    | 36 | 嵐牛 貫一    |         |
| 186163 | 同上 | をし一羽また来る池の新樹哉                    | 18 | 嵐牛 巢古    |         |

## 参考

- |        |          |  |    |              |  |
|--------|----------|--|----|--------------|--|
| 186164 | 蓬宇連句帳・十四 | 雨遠し風寒し梅の猶白し／辛酉初懷紙                      | 36 | 蓬宇 井義 嵐牛(1句) |  |
| 186165 | 同上       | すくみゆくや馬上に氷る影法師<br>／文久紀元辛酉冬、聖眼寺興行／松葉会脇起 | 36 | 翁 文青 嵐牛(1句)  |  |

## 写46 文久二年(1862)

- |        |          |                |    |          |         |
|--------|----------|----------------|----|----------|---------|
| 186201 | 文久二年俳諧どめ | 常盤樹も見おとる朝の若葉哉  | 36 | 松溪 嵐牛 里桂 |         |
| 186202 | 同上       | 百里来し足も休めぬ夏のかな  | 36 | 嵐牛 里桂 松溪 |         |
| 186203 | 同上       | 時過の一輪高し蓮のはな    | 36 | 里桂 松溪 嵐牛 |         |
| 186204 | 同上       | 暗がりに飛腹白き蛙かな    | 12 | 嵐牛 松夫    |         |
| 186205 | 同上       | けしき見てゐれば撞也はるの鐘 | 13 | 嵐牛 平台    |         |
| 186206 | 同上       | 物取に立棚高き寒かな     | 36 | 嵐牛 秀山    | →186022 |
| 186207 | 同上       | 同じ様に蝶も動くやけしの花  | 22 | 梅春 嵐牛    |         |
| 186208 | 同上       | 引先は夕雲かゝる鳴子かな   | 21 | 嵐牛 梅春    |         |

- |                |           |                               |    |                |                |                |                |                |
|----------------|-----------|-------------------------------|----|----------------|----------------|----------------|----------------|----------------|
| 186209         | 同上        | 広き野の朝日に梅のひと木哉                 | 15 | 嵐牛<br>然山<br>晴笠 | 曲川<br>芳泉<br>春谷 | 春芙<br>等裁<br>素涼 | 完伍<br>杜水<br>知碩 | 其常<br>尺波<br>静嘉 |
| 186210         | 同上        | まだ明ぬ空にふじみる寒かな                 | 16 | 嵐牛<br>文青<br>晴笠 | 春芙<br>等裁<br>春谷 | 蓬宇<br>芳泉<br>知碩 | 曲川<br>杜水<br>ほか | 完伍<br>雨洗       |
| 186211         | 同上        | 波を出る日の円なる冬至かな                 | 36 | 拾山             | 嵐牛             |                |                |                |
| 186212         | 同上        | 寒ぎくや生(いけ)て程経てひと雫              | 36 | 嵐牛             | 拾山             |                | *明意集・二         |                |
| 186213         | 同上        | 何せうとおもふ日毎の霞哉                  | 18 | 嵐牛             | ふじ磨            |                |                |                |
| 186214         | 同上        | 吹起す笹のけしきや冬の月                  | 36 | 晴笠             | 拾山             | 嵐牛             | 春谷             |                |
| 186215         | 同上        | 月に見るものゝ初めやうめの花                | 36 | 嵐牛             | 春谷             | 晴笠             | 拾山             |                |
| 186216         | 同上        | 蝶の羽や草には早起風の吹                  | 36 | 嵐牛             | 拾山             |                |                |                |
| 186217         | 同上        | 絶て又吹ものとかや松の声                  | 36 | 拾山             | 嵐牛             |                |                |                |
| 186218         | 同上        | 散敷て雨干ぬ庭のもみぢ哉                  | 36 | 嵐牛             | 雨洗             |                |                |                |
| 186219         | 同上        | 松杉の珍らしう成しぐれかな                 | 36 | 嵐牛             | 尺波             |                |                |                |
| 186220         | 同上        | 時雨ゝや市に並べし鯛のつや                 | 36 | 雨洗             | 嵐牛             | 尺波             |                |                |
| 写47 文久三年(1863) |           |                               |    |                |                |                |                |                |
| 186221         | 文久三年俳諧どめ控 | 伐枝の登れば遠き柳かな<br>／文久二戌きさらぎ始     | 27 | 嵐牛             | 其常             |                |                |                |
| 186301         | 同上        | 日和さへよければ吹や春の風<br>／文久三亥きさらぎ八日始 | 8  | 嵐牛             | 柳月             |                | *186221の前に収録   |                |
| 186302         | 同上        | 拾ふたる天児(はふこ)にここに春の草            | 35 | 嵐牛             | 送雨             |                |                |                |
| 186303         | 同上        | 日和さへよければ吹や春の風                 | 10 | 嵐牛             | 送雨             |                |                |                |
| 186304         | 同上        | 柳見や額の雨を撫てたつ                   | 11 | 送雨             | 嵐牛             |                |                |                |
| 186305         | 同上        | 鷹化した鳩やら一羽友ばなれ                 | 15 | 嵐牛             | 山竹             |                |                |                |
| 186306         | 同上        | 盈(こぼ)すとも見ゆる田植の手元哉             | 35 | 嵐牛             | 山竹             |                |                |                |
| 186307         | 同上        | 行人に虹かけ移る夏野かな                  | 36 | 嵐牛             | 目勝             |                |                |                |
| 186308         | 同上        | 山ゆりやひよろつく茎に花の数                | 36 | 嵐牛             | 金上             |                |                |                |
| 186309         | 同上        | 井戸替や朝のみじかき夏に成                 | 18 | 嵐牛             | 三千丸            |                |                |                |
| 186310         | 同上        | 熨斗(のし)のまゝ粽かけたる柱かな             | 18 | 嵐牛             | 秀山             |                |                |                |
| 186311         | 同上        | 行人に虹かけ移る夏野哉                   | 36 | 嵐牛             | 燕居             | 其常             |                |                |
| 186312         | 同上        | 膝過る水あやふみてあやめがり                | 36 | 嵐牛             | 其常             | 燕居             |                |                |
| 186313         | 同上        | 出処はみねど宵々春の月                   | 36 | 嵐牛             | 知碩             |                |                |                |
| 186314         | 同上        | 日和さへよければふくや春の風                | 36 | 嵐牛             | 素涼             |                |                |                |
| 186315         | 同上        | 肥過て葉も片張や秋海棠                   | 36 | 嵐牛             | みがく            |                |                |                |
| 186316         | 同上        | 波と迄ならぬうねりや月の海                 | 36 | 嵐牛             | 梅春             |                |                |                |
| 186317         | 同上        | 最う秋の模様運びぬ草の風                  | 36 | 梅春             | 嵐牛             | みがく            |                |                |
| 186318         | 同上        | 初雁や袂軽しとおもふ朝／平宇足立氏にて           | 36 | 嵐牛             | 其常             |                |                |                |
| 186319         | 同上        | 出た山はからりと晴て秋の空                 | 36 | 嵐牛             | 尺波             |                |                |                |
| 186320         | 同上        | むし狩や茅萱(ちがや)の雨に濡て来る            | 36 | 水音             | 嵐牛             |                |                |                |
| 186321         | 同上        | 秋風や狩倉濟し山のあれ                   | 34 | 嵐牛             | 水音             | 其常             | 尺波             | 雨洗             |
| 186322         | 同上        | 暑日が入ば道つく芒かな                   | 18 | 嵐牛             | 雨洗             |                |                |                |

- 186323 同上 田にひとつ棚なし小袖(舟)しぐれけり  
／三州牛久保風交, 十月上旬
- 186324 同上 引汐に舟すべらして蜺かき
- 186325 同上 柴の戸や壺本有も遅桜
- 186326 同上 越かけて夜明道(坂?)やきじの声
- 186327 同上 紅葉ちる後に暗き木立哉
- 186328 同上 水仙も垣ねぐさ也畑処
- 36 蓬宇 嵐牛 羽洲
- 35 嵐牛 山竹
- 36 嵐牛 山竹
- 8 平台 山竹 嵐牛
- 36 嵐牛 波文 完伍 蓬宇
- 36 杜水 羽洲 蓬宇 嵐牛
- 写48 文久四年(1864)
- 186401 文久四年俳諧どめ  
正月は雪のうへにも掃めかな
- 186402 同上 鶯や庵の窓の明はなし
- 186403 同上 向にも蝶みる道や麦に風
- 186404 同上 なの花の限か爰は青まじり
- 186405 同上 夕栄のさくら明るし雲のおく
- 186406 同上 高みへものすればのりて春の水
- 186407 同上 砂川やぬるみをさそふさゝ濁
- 186408 同上 ふと立し蠅の行方や暮の秋
- 186409 同上 月代のかゝる明りや雨のまつ
- 186410 同上 葉の備へ過て小ぐらしばひの花
- 186411 同上 庭かぜや桜楓の五月あめ
- 186412 同上 砂原や昼顔の外草もなし
- 36 嵐牛 坐釣
- 29 松谷 嵐牛
- 35 嵐牛 目勝
- 36 目勝 嵐牛
- 35 嵐牛 其常
- 36 嵐牛 為舟
- 36 為舟 嵐牛 其常
- 36 目勝 嵐牛
- 36 嵐牛 目勝
- 36 嵐牛 ふじ満
- 36 嵐牛 松朗
- 36 松朗 嵐牛
- 写50 元治二年(1865)
- 186501 元治二年俳諧どめ  
とけくちの凍にふみ込水簞(みすず)かな
- 186502 同上 すて鶏のうたひに來たり庵のはる
- 186503 同上 下どけとしるやふみ行やまの雪
- 186504 同上 うらわかき空やかすみも有やなし
- 186505 同上 ぼたぼたと田づちの音や夕がすみ
- 186506 同上 とけくちの凍にふみ込水簞かな
- 186507 同上 春の野や立とゞまりて鐘を聞
- 186508 同上 咲梅のうしろはすぐに広野かな
- 186509 同上 咲たればふち棚低く思ひけり
- 186510 同上 門せまきほどの柳と成にけり
- 186511 同上 立どまりみるや谷間の梅わかな
- 186512 同上 下どけとしるや踏行山のゆき
- 186513 同上 ぬれたまゝ夜の明て有柳哉
- 186514 同上 恋猫の乗りこす雪の籬哉
- 186515 同上 曇る日もおもむき付ぬ花のころ
- 36 嵐牛 禾守
- 36 禾守 嵐牛
- 36 嵐牛 ふじ満 禾守
- 36 ふじ満 禾守 嵐牛
- 36 嵐牛 素涼
- 36 嵐牛 知碩
- 36 嵐牛 雨好
- 36 知碩 嵐牛 雨好
- 36 紫涼 為舟 嵐牛
- 36 為舟 嵐牛
- 36 目勝 嵐牛
- 36 嵐牛 目勝
- 36 嵐牛 尺波 水音
- 36 水音 嵐牛 尺波
- 36 尺波 水音 嵐牛
- 写53 慶応三年(1867)
- 186701 慶応三年俳諧どめ 宵月の珍しう成若葉かな  
／慶応三卯水無月, 於水音宅興行五十韻
- 50 嵐牛 水音 尺波

- 186702 同上 たるゝ羽をしめしめ眠る胡蝶哉  
 186703 同上 笹くゞり来るやささら春の水  
 186704 同上 角力取に近付出来て盆の月  
 /文月十八日初め、於有嘉園興行  
 186705 同上 やすやすともらはれにけり唐がらし  
 186706 同上 穂に出しを曠(はれ)げにそよぐ芒かな  
 186707 同上 打水や何処へも行ぬ風そよぐ  
 186708 同上 暇乞する人をしむ夜寒かな  
 186709 同上 風ほそし磯聞夜のひとへ藪  
 186710 同上 朝がほのとり付庵の簾かな  
 186711 同上 先からははなさぬ友や秋のくれ  
 186712 同上 塵ひとつ持て歩行や菊の庭  
 186713 同上 ぬれ椽にしきもの舗や三日の月  
 186714 同上 五月雨や鹿伸上る草の中  
 186715 同上 秋のくれ煙もたてぬ浦屋かな  
 186716 同上 あらはるゝ岩にもおくや月の露  
 186717 同上 機嫌よく遊ぶあはれや秋の蝶  
 186718 同上 塩がまの火を搔て来る月見かな  
 186719 同上 寒空や鳥一羽うく朝の水  
 186720 同上 有明や早海士が家は朝煙  
 186721 同上 窓有ば夜明たのもし冬籠  
 写59 慶応四年(1868)  
 186801 慶応四年俳諧どめ  
 心とまる山もなくてや閑子鳥  
 186802 同上 苗代やどう並ても色紙がた  
 186803 同上 稲妻や斯ては闇もうつくしき  
 186804 同上 宮守の錆鎖たゝく茂り哉  
 186805 同上 鶯やきれいにいけたばこの火  
 186806 同上 湯座敷の次の間もあく日永哉  
 186807 同上 吹さわぐ樹におり着や渡り鳥  
 186808 同上 菜の花や旅もある日の草履がけ  
 186809 同上 稲へとてさそふきげんや朝雀  
 186810 同上 家々に灯の端ちかし夏の雨  
 186811 同上 おのづから水鶏のやどぞ田の庵  
 186812 同上 篠の子も葉に成留主の戸口哉  
 186813 同上 野一面出水の色やほとゝぎす  
 186814 同上 見つゝ来て跡をわするゝ柳かな  
 186815 同上 夕顔や月もたのまぬ咲処  
 186816 同上 芦の葉にてり付汐や初あらし  
 36 嵐牛 なほ喜  
 36 嵐牛 琴雅  
 36 習静 嵐牛  
 36 雪香 嵐牛  
 18 嵐牛 晴波  
 36 嵐牛 習静  
 18 嵐牛 松雨  
 18 嵐牛 無石 松雨  
 36 嵐牛 砂白  
 18 嵐牛 清節  
 36 梅城 嵐牛  
 18 嵐牛 水音  
 36 嵐牛 雨石  
 18 柿園 雨石  
 32 拾山 嵐牛 尺波 水音 其常  
 \*俳諧どめ(水音)  
 31 嵐牛 拾山 水音 尺波 其常  
 \*同上(「慶応三卯春、於松園興行」)  
 36 嵐牛 雨石  
 36 嵐牛 然山  
 36 嵐牛 葛谷  
 20 嵐牛 三千丸  
 36 嵐牛 尺波  
 \*俳諧どめ(水音、「慶応四辰夏」)  
 36 嵐牛 三傾  
 36 嵐牛 尺波  
 36 嵐牛 尺波  
 \*俳諧どめ(水音、「慶応三卯夏両吟」)  
 36 野風 嵐牛  
 36 嵐牛 琴雅  
 36 嵐牛 なほき  
 36 嵐牛 石清  
 36 嵐牛 水音  
 36 嵐牛 犁春  
 36 犁春 嵐牛  
 36 嵐牛 水音  
 100 嵐牛 犁春  
 36 嵐牛 雨石  
 100 犁春 嵐牛  
 36 嵐牛 ふじ満 犁春

- 186817 同上 石踏で行や雪踏のすまひとり 36 嵐牛 習静
- 186818 同上 吹移りゆくや小笹も萩の声 36 嵐牛 雪香
- 186819 同上 立まじる篠も似なり萩の露 36 嵐牛 習静
- 186820 同上 芦の葉にてり付汐やはつあらし 36 嵐牛 砂白
- 186821 同上 露ひとへおもうて撫る杖かな 36 雪香 嵐牛 梅城
- 写60 慶応四年(1868)
- 186822 慶応四年俳諧どめ  
秋かぜの衣を通すゆふべかな 36 嵐牛 雪香
- 186823 同上 能(よき)空や便船貰ふ稲の上 36 嵐牛 流翠
- 186824 同上 青空や背くらべ松の若みどり 36 嵐牛 つかさ
- 186825 同上 暮ゝ日になればすみやかな紅葉哉 36 竹溪 嵐牛
- 186826 同上 夜もすがら竹こぼらせて今朝の霜 6 翁 竹溪 嵐牛 流翠 玉見 梅隣
- 186827 同上 芦の葉に照付汐や初あらし 36 嵐牛 玉見
- 186828 同上 飛ちから後へ余るいなごかな 36 嵐牛 月笑
- 186829 同上 いらぬ間の多き座敷やきりぎりす 35 嵐牛 子友
- 186830 同上 聞よりもおもふに遠し鹿の声 18 嵐牛 董雨
- 186831 同上 吹移りゆくや小笹も萩の声 19 嵐牛 坦々
- 186832 同上 終宵こゝろにうとし雨の月 34 文外 嵐牛
- 186833 同上 いざよひの闇に出ばるや伊豆岬 18 坦々 嵐牛 文外
- 186834 同上 芦の葉に照つく潮や初あらし 36 嵐牛 雨石
- 写64 (65) 明治二年(1869)
- 186901 明治二年俳諧どめ  
うぐひすと枕はちかし草の庵 36 嵐牛 習静  
／明治二己巳年三月、於有嘉園興行、両吟
- 186902 同上 きじ鳴や鐘(こじり)のあたる下り阪 36 習静 嵐牛
- 186903 同上 餅の皮むいて喰日や桃の花 36 嵐牛 雨石
- 186904 同上 まがひなき島の鐘鳴柳かな 36 雨石 嵐牛
- 186905 同上 梅が香や闇は覚悟のもどり道 35 柿園 砂白
- 186906 同上 餅腹の一日重し桃の花 36 嵐牛 雪香
- 186907 同上 一里余も来た草臥や遅桜 36 雪香 嵐牛
- 186908 同上 足弱を連に山越日永かな 36 嵐牛 雪香
- 186909 同上 花ちりてしみじみ闇き雨夜哉 36 嵐牛 夢南
- 186910 同上 剪たさをけふもこらへる牡丹哉 36 嵐牛 流翠 夢南  
／同三月中旬、小沢氏に而
- 186911 同上 片里や噂過てのはつ鯉／同 36 流翠 夢南 嵐牛
- 186912 同上 打先を鳶のすり行畑かな／同 36 嵐牛 流翠
- 186913 同上 御手洗の落葉のうへや春の水／同 36 夢南 嵐牛 流翠
- 186914 同上 陽炎や流樹こなす斧遣ひ 18 雪香 習静 嵐牛 雨石
- 186915 同上 下闇や水より立し鳥一羽 18 嵐牛 雨石 雪香 習静
- 186916 同上 三日月のかたぐ迄鳴雲雀哉 18 習静 雪香 米室 嵐牛 砂白  
雨石

- |                      |          |  |    |                   |
|----------------------|----------|--|----|-------------------|
| 186917               | 同上       | がぶがぶと樋の口出るや春の水   | 18 | 砂白 米室 習静 嵐牛 雨石 雪香 |
| 186918               | 同上       | 爺婆の藪(脱字?)年貢の実梅哉  | 18 | 米室 砂白 雨石 雪香 嵐牛 習静 |
| 186919               | 同上       | 掃除して有に留主也若楓  | 36 | 玉見 梅隣 嵐牛          |
| 186920               | 同上       | いつも凶に乗た声也行々子   | 36 | 嵐牛 玉見             |
| 186921               | 同上       | 我庭のうちにも有や木下闇   | 36 | 嵐牛 玉見 梅隣          |
| 186922               | 同上       | 朝寒や括分たる菅簾  | 36 | 嵐牛 穎川             |
| 186923               | 同上       | すゝ風やうきうき笹の流来る  | 36 | 文外 嵐牛 平岸          |
| 186924               | 同上       | 人音に神馬顔出す若葉哉  | 36 | 嵐牛 穎川 文外          |
| 186925               | 同上       | ふじ咲や降ねど池のうす濁り  | 36 | 穎川 文外 嵐牛          |
| 186926               | 同上       | いつも凶に乗た声也行々子   | 36 | 嵐牛 文外             |
| 186927               | 同上       | 五月雨の降続きけり人の顔   | 36 | 文外 嵐牛             |
| 186928               | 同上       | 取着力残るやせみの殻   | 23 | 嵐牛 延松             |
| 写65 (64) 明治二年 (1869) |          |  |    |                   |
| 186929               | 明治二年俳諧どめ | ひと葉ちり二葉ちりして桐涼し<br>／元(明)治二巳仲秋、於五峰庵興行、三吟                             | 36 | 梅裡 杜水 嵐牛          |
| 186930               | 同上       | 嶋の行方夕やけ雲に移りけり／其二<br>(注)『いまのうら』(明治2)『句集草稿二編』ともに「夕やけ雲に」は「夕やけの空に」とある。 | 36 | 嵐牛 梅裡 杜水 *いまのうら   |
| 186931               | 同上       | 高桐の残る一はも散にけり   | 36 | 水音 嵐牛             |
| 186932               | 同上       | 桐一は拾ふやひとりおもしろき   | 36 | 嵐牛 水音 尺波          |
| 186933               | 同上       | 袂吹稲葉の風や今朝の秋  | 36 | 嵐牛 尺波             |
| 186934               | 同上       | ちかき香のして見当らぬ菌哉  | 36 | 嵐牛 十湖             |
| 186935               | 同上       | 飛ちから後へ余る蟲(いなご)かな   | 36 | 嵐牛 半醉             |
| 186936               | 同上       | 軽き音するやこぼるゝ笹の露  | 36 | 嵐牛 雪山             |
| 186937               | 同上       | 蓮の実や夜(の)机に飛をしる   | 36 | 嵐牛 月杵             |
| 186938               | 同上       | 今宵也雨筋にさへ月の照  | 36 | 嵐牛 拳文             |
| 186939               | 同上       | 嶋の行方夕やけ雲に移りけり  | 36 | 嵐牛 十湖 →189630(注)  |
| 186940               | 同上       | 朝寒やくゝる計の藪処   | 36 | 嵐牛 夷苔             |
| 186941               | 同上       | 山姥も打は月夜のうちきぬた  | 18 | 嵐牛 子明             |
| 186942               | 同上       | 秋の野は(の)おくは芒にかくれけり  | 36 | 蓬宇 嵐牛             |
| 186943               | 同上       | こゝろにも秋のしみけり雨の月   | 36 | 嵐牛 蓬宇 杜堂          |
| 186944               | 同上       | さまざまに月とりなすや雲ひと夜  | 36 | 水音 蓬宇 嵐牛          |
| 186945               | 同上       | 木の実まであたりどし也渡り鳥   | 36 | 嵐牛 杜堂             |
| 186946               | 同上       | きせわたや雀の足のそゝかしき   | 36 | 嵐牛 羽洲             |
| 186947               | 同上       | 残月や松毬(ちちり)を塵の浦一里<br>／三保より久能にいたる途中                                  | 36 | 羽洲 嵐牛             |
| 186948               | 同上       | 献立に芋の先だつ月見かな   | 36 | 月杵 十湖 嵐牛          |
| 186949               | 同上       | 追中に待ば恥ししかの声  | 10 | 嵐牛 楽水 試雪 駿何(嘉) 得水 |
| 186950               | 同上       | 三日月やおもはずわたるいしの橋  | 36 | 嵐牛 野風             |
| 186951               | 同上       | 日をうけてこぼるゝ霜の紅葉哉   | 36 | 嵐牛 十湖             |

186952	同上	走炭並べた膝も掛けり	36	嵐牛	十湖
186953	同上	折ば散る紅葉となりぬ雪びより	36	嵐牛	拳山
186954	同上	さらさらと水脚はやし冬の月	36	拳山	嵐牛
186955	同上	飛咲のわけて色よき杜若	36	嵐牛	素節
186956	同上	水しまぬ花流来る日和かな／竹堂亭懸額	10	嵐牛	夢南 竹堂 流翠 玉見 梅隣ほか
写66 明治三年(1870)					
187001	明治三年俳諧どめ	傘さして出るも嬉しきむ月かな ／む月九日始	18	嵐牛	習静
187002	同上	春風や消て出来る水の泡	18	習静	嵐牛
187003	同上	酒出して谷たづぬるや夕柳	36	嵐牛	雨石
187004	同上	ぬるき風梅ちりさうに戦(そよぎ)けり	36	嵐牛	雨石
187005	同上	花ちらちら飛ばし夜明の吹おろし ／賤機山にて	36	嵐牛	雨石
187006	同上	上置も今日たんぼゝや俄ばし	36	嵐牛	雨石
187007	同上	障子打虻や朝寝のまくら元／如月廿三日発	36	嵐牛	其水
187008	同上	古尼の出して遣りけりうかれ猫／同	36	嵐牛	其水 青溪
187009	同上	雲に入てまたれても見よ鳶鴉	36	嵐牛	青溪
187010	同上	初花の見えて入よし耕地道	36	青溪	嵐牛
187011	同上	声なしに逢ふほそみあり猫の恋	35	嵐牛	蝸堂
187012	同上	連翹や散ても枝の撓み癖	36	嵐牛	嵐牛
187013	同上	揚るにも似ぬ気みじかや落雲雀	36	嵐牛	五拙
187014	同上	素足でも行るゝ道や桃の花	36	五拙	嵐牛
187015	同上	嶺は早散か花舞ふ町の空	36	柿園	夢南
187016	同上	山水の砂押流す汐干哉	36	夢南	柿園
187017	同上	上るには似ぬ気短や落雲雀／両吟	36	嵐牛	流翠
187018	同上	身にしむや彼岸過ての春の風／三吟	36	流翠	嵐牛 鶯後
187019	同上	町を曳奉納松やおぼろ月／同	36	嵐牛	鶯後 流翠
187020	同上	花の日のけふも一日過にけり／同	36	鶯後	流翠 嵐牛
187021	同上	峰もはや散るか花まふ町の空／同両吟	36	嵐牛	鶯後
187022	同上	降が中を約束に来る花見かな／三吟	36	玉見	柿園 梅隣
187023	同上	障子打虻や朝寝の枕もと／両吟	36	柿園	梅隣
187024	同上	くれる声またではや折桜哉／両吟	36	柿園	玉見
187025	同上	花ひらひら寒し夜明の吹おろし	36	柿園	長草
187026	同上	数飛とさきあらそはぬ蜚哉／首尾	12	嵐牛	流翠
写67 明治三年(1870)					
187027	明治三年俳諧どめ	声なしにあふ細み有うかれ猫	36	嵐牛	拙水
187028	同上	春の水東しらみの移りけり	36	嵐牛	雲眠
187029	同上	京人を恥かしがりて茶摘かな	36	柿園	延松
187030	同上	木隠れや桜浴行落し指(ざし)	36	延松	柿園

187031	同上	有丈で仕舞た様ぞ春の雪	36	嵐牛	月彦
187032	同上	朝やけや走る計のほとゝぎす	36	嵐牛	颯川
187033	同上	雲に入ば待れもせうに鳶鴉	36	嵐牛	茶烟
187034	同上	はつ蟬の唯一日に古びけり	36	嵐牛	月彦
187035	同上	案内者に呼もどされてはつ桜	36	嵐牛	雲眠
187036	同上	新敷おもふ天気やころもがへ	36	素節	柿園 月彦
187037	同上	はつ蟬の唯一日に古びけり	36	嵐牛	素節
187038	同上	氷(雹)走る跡の月夜やほとゝぎす	36	嵐牛	雲眠
187039	同上	めざましに鳥も濡(ぬるる)か花の露	36	嵐牛	長草
187040	同上	菜畑を抱(へ)込けり冬構	36	玉見	嵐牛
187041	同上	山越の日かげ短し厚氷	35	嵐牛	玉見
187042	同上	かへり見もとまかぬ頃や花にかね	36	柿園	雨石
187043	同上	はつ蟬のたゞ一日に古びけり	36	嵐牛	犁春
187044	同上	摘からず桑の木暑し道すがら ／曾代(そだい)にて	36	犁春	嵐牛
187045	同上	花の名も木隠れ時や夏座敷 ／静岡花屋敷にて	36	梅裡	雨石 嵐牛
187046	同上	五月雨やこなごを活す貰ひ水	18	嵐牛	米室 梅裡
187047	同上	打よする荒布や波の置みやげ／七里が浜にて	18	梅裡	米室 嵐牛
187048	同上	水さびしほたる処の夜明方	36	嵐牛	夢南 梅裡
187049	同上	暑き日の峰に立たる枯樹哉	36	夢南	嵐牛 梅裡
187050	同上	夏山のみどりしたゝる流哉	36	梅裡	延松 嵐牛
187051	同上	ふと鳴らす扇響ぬ建長寺	抹消	梅裡 嵐牛	→187054
187052	同上	砂川も薄いろ時やあやめ草	36	嵐牛	雪香 梅裡
187053	同上	ほとゝぎす待やをさなく覗く空	18	嵐牛	習静 梅裡
187054	同上	ふと鳴らす扇ひまきぬ建長寺	35	梅裡	嵐牛

→187054

\*一不全集

写68 明治三年(1870)

187055	明治三年俳諧どめ	蘭に水をつければ近きくひなかな	36	嵐牛	雪香
187056	同上	あら鷹のころもゆるむ土用かな	36	習静	嵐牛
187057	同上	今朝川に後たみちや茨の花	36	嵐牛	習静
187058	同上	初せみの唯一日に古びけり	36	嵐牛	阿笠
187059	同上	今朝川に後たみちや茨の花	36	嵐牛	阿笠
187060	同上	来る程の人が云也花盛	36	嵐牛	夢南 玉見
187061	同上	水鳥の梢に遊ぶ新樹哉	36	夢南	嵐牛
187062	同上	拭てとる椽のほめきや萩の花	36	嵐牛	池栖
187063	同上	蓮かをる夜はもどかしう明にけり	18	池栖	嵐牛
187064	同上	葉ざくらの花や夕餉のすまし汁	28	嵐牛	夢南
187065	同上	ばゝさからゆうてさうぢや今朝の秋 ／明治三年葉月下旬、於水音亭興行	36	嵐牛	水音
187066	同上	たゝかせて暫し置けり月の門	36	水音	嵐牛 尺波
187067	同上	灯ともせといひおくれけり秋の夕	36	嵐牛	尺波

187068	同上	とけ口の凍にふみ込水簍かな	36	嵐牛	其常
187069	同上	くらがりや一葉とおもふ瓜(瓜)ざはり	36	嵐牛	其常
187070	同上	澄安き菜汁澄けり今朝の秋	36	嵐牛	試雪
187071	同上	宵闇の笠にこ当るしぐれ哉	36	嵐牛	杜水
187072	同上	放生にあうた鳩なく月夜かな	36	嵐牛	尾正 杜水
187073	同上	人のらぬ筏のよるや若ばかげ	36	嵐牛	梅宇

## 参考

187074	明治三年拾山書留	草の戸の花とありけりはつ時雨	2	杜水	嵐牛
--------	----------	----------------	---	----	----

## 写70 明治四年(1871) (注)写69と順番逆

187101	明治四年俳諧どめ	水に浮底のちからや苗代田	35	嵐牛	十湖
187102	同上	柿の葉のから付畑や小麦蒔	36	嵐牛	雨石
187103	同上	初ざくら旅に安堵のおもひかな ／辛未如月張行	36	蓬宇	嵐牛
187104	同上	声若き鶯やさくらの朝日和／其二	36	嵐牛	雪湖 蓬宇
187105	同上	際立て花に明るし星ひとつ／其三	36	雪湖	蓬宇 嵐牛
187106	同上	鶴からりころり空よし朝眼よし ／同三月上浣興行	36	嵐牛	犁春
187107	同上	植た田の直に干てある浦辺かな ／弥生廿六日、竹室にて興行	36	嵐牛	蝸堂
187108	同上	ほのぼのと白し行手に田植笠	36	蝸堂	嵐牛
187109	同上	移り出す末たづら也春の水	12	青溪	嵐牛
187110	同上	薄わたの不足も今日はぬぎにけり	12	嵐牛	青溪
187111	同上	へたへたと風のおさへる若葉哉	36	嵐牛	なほき
187112	同上	卵の花や川こして来る人のかげ	36	嵐牛	なほき
187113	同上	ふたば三葉濁りに蓮の浮葉哉	36	尺波	嵐牛 水音
187114	同上	水広し螢どころの夜明方	18	嵐牛	水音 →187137
187115	同上	笹そよぐかげより軽し柳鯨	36	嵐牛	水音 尺波
187116	同上	今朝はまだ水にあるなり夏の月	36	柿園	雨石
187117	同上	涼しさや馬に見て行朝の月 ／こんのふが原にて	36	雨石	柿園
187118	同上	ひく波の海底けづる暑かな ／水無月、於含章亭興行	36	嵐牛	董平
187119	同上	よい人の昼寝に来るや蓮の花／其二	36	董平	嵐牛
187120	同上	拭てとる椽のほめきや萩の花	36	嵐牛	藍崖
187121	同上	釣(吊)たかや取のけて待躍かな	36	嵐牛	蕙畝
187122	同上	踏[足]も忘れて涼し戻り道／其二	36	蕙畝	嵐牛
187123	同上	つまむには手くらがりなる螢哉	36	嵐牛	拙水
187124	同上	拾ひ見る鷹の鳩羽や木下闇	36	嵐牛	月彦
187125	同上	東雲を手もと明りや草苗も	36	為一	嵐牛
187126	同上	まづしさも今朝はわすれて更衣／其二	36	嵐牛	為一

187127	同上	人に膝向ける後や秋の夕／其三	18	為一	嵐牛	
187128	同上	柵機や咳払して覗く垣／其四	18	嵐牛	為一	
写69	明治四年(1871)	(注)写70と順番逆				
187129	明治四年俳諧どめ					
		つかふでもなき墨するや今朝の秋	36	嵐牛	雪香	
187130	同上	今朝秋の立証抛也松の風	36	習静	嵐牛	
187131	同上	用ひとつ済こゝろ也桐ひとは	36	嵐牛	習静	
187132	同上	更たとて水も寂しや飛螢	36	雲眠	嵐牛	
187133	同上	上直しあげ直しけり初雲雀	18	嵐牛	雲眠	
187134	同上	をかしみのあるひとり寝や虫の声	36	尺波	嵐牛	
187135	同上	流れくむひさくのおとや初月夜	36	嵐牛	尺波	
187136	同上	ほかほかと未だ夜はふかし蚊遣の火 ／化物茶屋	36	水音	嵐牛	
187137	同上	水広し螢どころの夜明がた	36	嵐牛	水音	→187114
187138	同上	白雲の秋といふべき天気かな	36	嵐牛	習静	
187139	同上	初雁や初といふのも今の声	36	習静	嵐牛	
187140	同上	初雁やはつといふのも今の声	36	習静	十湖 嵐牛	
187141	同上	空遠きながめ也けり後の月	36	十湖	嵐牛	
187142	同上	白雲の秋と言べき天気かな	36	嵐牛	十湖	
187143	同上	刈株を鶺(引)ぬくこほりかな	21	嵐牛	雪香	
187144	同上	爛のよくなれば酒なし夕もみぢ	36	嵐牛	晴波	
187145	同上	明行や小笹にもどる萩の声	21	雪香	嵐牛	
187146	同上	棒鱈の口も結ばぬ寒かな	36	嵐牛	蕙畝	
187147	同上	氷(る)鐘しみじみと夜は更にけり	36	蕙畝	嵐牛	
187148	同上	鴛やものうきさまはなき風情	36	舞巾	嵐牛	
187149	同上	刈株を鶺引ぬく氷かな	36	嵐牛	舞巾	
187150	同上	刈株を鶺引ぬく氷かな／明治四年霜月興行	36	嵐牛	連梅	
187151	同上	泊りあふ人としたしむ時雨哉	36	連梅	嵐牛	
187152	同上	啼捨し口きれいなる鶺かな	36	嵐牛	雨石	
187153	同上	草の戸や月の芒も垣のまゝ	36	嵐牛	雨石	
187154	同上	輪にすれば袖へもは入柳かな ／未十一月、森にて	36	柿園	試雪 楽水	
187155	同上	雁はまだ空のものも夕げしき ／申中秋、於柿園	18	嵐牛	野風	→187244
187156	同上	雉子たつてなほうたがはし夜泣石 ／明治五申初冬	34	嵐牛	木和	
写72	明治五年(1872)					
187201	明治五年俳諧どめ	声長うひくやいかりも初鶺 ／明治五壬申正月、於日坂駅片岡亭興行初会	36	嵐牛	試雪 松夫 其常 知碩	
187202	同上	若水や直に常のも一つるべ ／申睦月、草庵に而	36	柿園	雨石	
187203	同上	鶺や雪の小藪にはれがまし／同	36	雨石	嵐牛	

187204	同上	かへり見もとゞかぬころや花にかね ／壬申仲春、於古瓦園張行、建徳寺の帰るさ	36	嵐牛	水音
187205	同上	朝ゆふのほかの露もつ柳かな	36	嵐牛	尺波
187206	同上	一ぱいに出かゝる月やすゝき原	36	嵐牛	なほき
187207	同上	京の用ためて待たる祭かな	36	柿園	雲泉
187208	同上	あとも啼さうな空也郭公	36	雲泉	柿園
187209	同上	糸遊ふや熊手さし出す松葉かき	36	嵐牛	均童 蛙心
187210	同上	ちる花やきのふの道の裏通	36	均童	蛙心 嵐牛
187211	同上	ほつかりと裏日のさすや花曇 ／晩春、於含章亭	36	嵐牛	蕙歎
187212	同上	夏近き宵やささは竹のかぜ	36	蕙歎	嵐牛
187213	同上	色づくは麦の外なき四月哉	36	舞巾	嵐牛
187214	同上	青空に盛り出にけり朝の花	36	嵐牛	舞巾
187215	同上	松魚売喧嘩仕捨に走り鳧(けり)	36	嵐牛	楽山
187216	同上	背負ふものゆり上て摘いちご哉	36	嵐牛	凡乎
187217	同上	名月の下の闇飛蜚かな	36	凡乎	嵐牛
187218	同上	戻らんとしては隙どる紅葉哉 ／卯月五日、新福寺興行、為一仏追悼之俳諧	50	為一居士	少年保平 流翠 鶯後 亭々 凡乎 梅隣ほか
187219	同上	春とても日暮はさびし呼子鳥	36	雲眠	嵐牛
187220	同上	足袋の底ふるひ出しけり花のかげ	35	嵐牛	雲眠
187221	同上	門番の籠忽ゆるすや松魚売	36	嵐牛	淇竹
187222	同上	三日月の出所かはる茂りかな	36	之石	柿園
187223	同上	鶯の飛鳴しげきわかばかな	36	柿園	之石
187224	同上	呵らるゝ迄のり出る矢数かな／卯月中旬興行	36	嵐牛	穎川
187225	同上	聞た連(とて)はなすうち也郭公	36	穎川	嵐牛
写73 明治五年(1872)					
187226	明治五年俳諧どめ	椎櫛も落葉時也閑子どり	36	嵐牛	五拙
187227	同上	盃のあるや昼寝の枕もと	36	五拙	嵐牛
187228	同上	五月雨やうみ亭をみたす台処／五月雨両吟	36	嵐牛	李郷
187229	同上	竹植て風もすゞしきゆふ哉／三吟	18	李郷	雨石 嵐牛
187230	同上	かり堰を乗越水や流れ苗	36	嵐牛	兎洲
187231	同上	青鷺や濁うたがふ足はこび	36	嵐牛	譚石
187232	同上	啼うちに曙さめる水鶏哉／集	36	雨石	五拙 嵐牛
187233	同上	葉ざくらやふすべ掃けす湯立跡／集	36	嵐牛	蝸堂 青溪
187234	同上	水にまで朝やけのして閑子どり	18	嵐牛	蝸堂 備後枳園
187235	同上	木兎のそらぞら時やほとゝぎす	18	蝸堂	備後枳園 嵐牛
187236	同上	かげふみてさびしく成りぬ夜の花／脇起	36	泰吏居士	李郷 嵐牛
187237	同上	採くちを明るもをしき早苗かな	36	柿園	雨石
187238	同上	掬上る清水皆もる皴手かな	36	嵐牛	雨石
187239	同上	鶯のついと立行清水かな	9	五拙	嵐牛 李郷
187240	同上	風軽し咲たばかりのけしの花／集	36	蝸堂	青溪 雨石 五拙 嵐牛
187241	同上	鶯の入る山もちて老にけり／集	36	青溪	雨石 嵐牛 蝸堂

- |                        |          |                                   |    |                               |         |
|------------------------|----------|-----------------------------------|----|-------------------------------|---------|
| 187242                 | 同上       | 砂川も薄色時やあやめ草／集                     | 36 | 嵐牛 其水 蝸堂 青溪 罇石<br>李郷ほか        |         |
| 187243                 | 同上       | ぬるゝとも幹のもと也花の雨                     | 36 | 雪香 嵐牛                         |         |
| 187244                 | 同上       | 雁はまだ空のものも夕げしき／申中秋                 | 18 | 嵐牛 野風                         | →187155 |
| 187245                 | 同上       | 行雲に唯見とれけり秋のくれ                     | 36 | 嵐牛 尺波                         |         |
| 187246                 | 同上       | 手まぐらの時は来にけりきりぎりす                  | 36 | 尺波 嵐牛                         |         |
| 写75 明治六年～八年(1873～1875) |          |                                   |    |                               |         |
| 187301                 | 明治六年俳諧どめ | 山路出た拍子にうれし田植唄<br>／明治六年六月          | 36 | 犁春 嵐牛                         |         |
| 187302                 | 同上       | 豆麩きる薄刃にひゞく氷哉                      | 36 | 嵐牛 犁春                         |         |
| 187303                 | 同上       | わらひたるもちつまみけり散る紅葉                  | 36 | 嵐牛 均童                         |         |
| 187304                 | 同上       | 暮るまでぬくしひと島大根曳<br>／十一月下旬張行         | 36 | 嵐牛 蛾琴                         |         |
| 187305                 | 同上       | 水涸て猶長橋の長さ哉／矢矧にて                   | 36 | 蛾琴 嵐牛                         |         |
| 187306                 | 同上       | 仏には香もかゝせず冬ごもり<br>／明治六年酉ノ十二月       | 36 | 柿園 試雪                         |         |
| 187307                 | 同上       | 真闇き門を出て行寒さかな                      | 36 | 嵐牛 得水                         |         |
| 187308                 | 同上       | 松風の上や静に天津雁                        | 26 | 雨石 嵐牛                         |         |
| 187309                 | 同上       | 寒声や萩にさはらばをぎの声                     | 27 | 嵐牛 雨石                         |         |
| 187310                 | 同上       | 苗松やほこりもつかぬ若みどり<br>／同十二月           | 36 | 嵐牛 犁春                         |         |
| 187501                 | 明治八年俳諧どめ | 川筋や若葉見船の笛つゞみ<br>／明治八年亥四月、柿園ヲ(ニ)於て | 36 | 嵐牛 十湖                         | *道の乗    |
| 187502                 | 同上       | 今ぬいだ羽織も花の吹雪かな／其二                  | 36 | 十湖 嵐牛 一志                      |         |
| 187503                 | 同上       | 折兼て岩と崩しぬ百合の花／其三                   | 36 | 一志 十湖 嵐牛                      |         |
| 187504                 | 同上       | 柴垣や鶯きゝの忘れ杖／其四                     | 36 | 平台 十湖 嵐牛                      |         |
| 187505                 | 同上       | 葉桜や拭て乾かす椽の雨／其五                    | 36 | 嵐牛 一志 十湖                      |         |
| 187506                 | 同上       | 菜の花や雲の上にもひと畑／其六                   | 36 | 雨石 十湖 一志 平台 嵐牛                |         |
| 187507                 | 同上       | 庭歩行して座にもどる牡丹哉／其七                  | 36 | 十湖 松夫 嵐牛<br>*「右七卷、卯月卅日満尾」(奥書) |         |

## 柿園門人録

\* 自筆の短冊により、  
50音順に配列

号	本名	住所	現住所	入門年月日
伊水	黒川伊三郎	周知郡森町	森町	慶応二年寅九月(1866・09)
維石	鈴木猪兵衛	周知郡中田村	森町中川	慶応二丙寅九月(1866・09)
彝中	万勝寺	遠州豊田郡万正寺村	磐田市万正寺	安政三年丙辰八月晦日 (1856・08・30)
一湖	川井小才治	榛原郡金谷宿	島田市金谷	文久元年酉三月(1861・03)
一哉	中村藤治郎	当国長上郡木船村	浜松市浜北区貴布祢	明治二己巳仲秋(1869・08)
一志 (後号知堂)	富田文平	豊田郡長命村	浜松市東区中野町	明治八乙亥年四月二十八日 (1875・04・28)
一笑	近藤深次郎	当国佐野郡飛鳥村	掛川市下垂木 (たるき)	安政四年巳十月(1857・10)
一得	渡辺喜次郎	駿府新若町	静岡市	文久元酉年七月(1861・07)
一釜	海野善三郎	駿河国志太郡島田宿	島田市	年次不明(?)
雨好	秋野貞次郎	山名郡中野村	磐田市豊浜中野	万延二辛酉正月廿五日 (1861・01・25)
雨石	山崎龍次郎	駿府(上石町式丁目 —柿園嵐牛棹控)	静岡市葵区	慶応三年丁卯初夏 (1867・04)
雲眠	北堀玉平	駿河国志太郡兵大夫 新田	藤枝市兵太夫	慶応四年辰八月(1868・08) * 前号つかさ(司)
栄山	栗田栄太郎	遠州周知郡犬居領家村	浜松市天竜区春 野町領家	明治二己菊月(1869・09)
燕居, 桃斎	金原弥市郎	山名郡戸羽野村	袋井市富里	安政七申正月廿五日 (1860・01・25)
延松	飯塚久作	駿州志太郡下青島村	藤枝市下青島	慶応三丁卯仲春(1867・02)
可応	鈴木梅太郎	豊田郡笹原島村	磐田市笹原島	慶応二丙寅年正月 (1866・01)
岳丈	今城今七(石黒 十郎平—浅羽町史)	山名郡岡山村	袋井市浅名岡山 —浅羽町史	安政四丁巳十二月(1857・12) * 1872・10・25没(42)—浅羽町史
荷溪	大石徳三郎	当国豊田郡雲岩寺村	浜松市浜北区根堅	明治二己巳年八月 (1869・08)
可都良	太箒竹七郎	当国豊田郡中瀬村	浜松市浜北区中瀬	明治二年己巳仲秋 (1869・08)
貫一, 晴岡居	鈴木治郎八常直	城東郡岡崎村	袋井市岡崎	嘉永七庚寅四月(1854・04)
丸山	鈴木忠吉	周知郡茅間村	袋井市萱間	慶応三年卯三月(1867・03)
完立 (後号莞立)	武田五左衛門	遠州豊田郡鮫島村	磐田市鮫島	安政三丙辰年八月 (1856・08)
菊羽	伊藤庄作	当国龜玉郡宮口村	浜松市浜北区宮口	明治二年己巳仲秋(1869・08)
菊吾	伊藤八兵衛	城東郡大坂村	掛川市大坂	慶応二丙寅晩夏(1866・06)
其常, 盛楨園	溝口時三郎	山名郡戸羽野村	袋井市富里	安政七申正月廿五日 (1860・01・25)
其水	永田輔弥	城東郡丹野村	菊川市丹野 (たんの)	慶応二寅年六月(1866・06)
岐白	安藤嘉十	当国城東郡平河村	菊川市上平川	年次不明(?)
曉嵐	栗田富三郎	遠州周知郡犬居領家村	浜松市天竜区春 野町領家	明治二己菊月(1869・09)

号	本名	住所	現住所	入門年月日
杏林	近藤晋良	山名郡福田村	磐田市福田 (ふくで)	安政四巳年四月(1857・04)
曲外	宮本吉六	城東郡横須賀河原町	掛川市横須賀	明治三庚午歳初冬 (1870・10)
玉見	岩本吉蔵	駿州志太郡瀬戸町	藤枝市瀬戸	慶応三丁卯仲春(1867・02)
旭斎	山田勘兵衛	中泉	磐田市中泉	明治二巳年八月(1869・08)
琴雅	天方桂次郎	遠州周知郡天方村	森町天方	慶応三年卯三月(1867・03)
月查	釈行慶	遠江国豊田郡岩水村	浜松市浜北区根 堅岩水寺	明治二己巳歳仲秋 (1869・08)
茶烟	原川治三郎	駿州請所村	焼津市治長請所	元治元年子十月十日 (1864・10・10)
砂白	秋野寛一郎	駿河国志太郡島田宿	島田市	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
土口	安藤弥吉	遠州豊田郡戸綿村	森町戸綿	慶応三年卯三月(1867・03)
之碩	佐野庄兵衛	当国周知郡谷川村	森町谷川 (やかわ)	慶応四年辰四月十四日 (1868・04・14)
十湖 (じっこ)	松島吉兵衛	当国豊田郡中善地 (なかぜんじ)村	浜松市東区豊西 町	明治二年己巳文月 (1869・07)
秀学	和光院秀学	豊田郡中泉村	磐田市中泉	慶応二年寅正月(1866・01)
秋江	大角桂次郎	当国豊田郡北鹿島村	浜松市天竜区二 俣町鹿島	明治己巳秋八月(1869・08)
秋山	片桐伝蔵	周知郡萱間村	袋井市萱間	慶応三年丁卯三月 (1867・03)
習静	山本貞蔵	駿河国志太郡島田宿	島田市 (島田六丁目一 拾山人名録)	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
春谷, 楓園	大竹吉太郎豊久	山名郡福田村	磐田市福田 (ふくで)	嘉永七年庚寅三月廿一日 (1854・03・21)
春山	松坂弥兵衛	城東郡大坂村	掛川市大坂	慶応二丙寅初秋(1866・07)
春田	薬品熊治郎	駿河国志太郡島田宿	島田市	慶応二丙寅初冬(1866・10)
松溪	足立市太郎	周知郡平宇村	袋井市下山梨	安政七申年二月廿五日 (1860・02・25)
小竹	大庭新八	岡津村	掛川市岡津	慶応二寅六月(1866・06)
松里	松井寅松	周知郡茅間村	袋井市萱間	慶応三年卯三月(1867・03)
駿嘉 (すんか)	安藤嘉兵衛	遠州周知郡森町	森町	慶応二年寅七月(1866・07)
静嘉	山下保次郎	山名郡東脇村	磐田市東脇	安政四丁巳十二月 (1857・12)
静岸	辻ヶ堂屋佐兵衛	越中新川郡東水橋	富山市水橋	慶応元乙丑六月(1865・06)
青溪	大村文蔵	駿河国安倍郡静岡	静岡市葵区材木 町	明治三年午三月(1870・03), 観峰居, もと雪中庵権陰門一 中川雄太郎著『駿河の俳句』
晴山	青木忠右衛門	周知郡茅間村	袋井市萱間	慶応三年卯三月(1867・03)
清風	萩田浅次郎	佐野郡各和村	掛川市各和	慶応三年丁卯初春 (1867・01)
晴笠(前号芦 清), 曠所斎	大竹清太夫豊広	山名郡福田村	磐田市福田 (ふくで)	嘉永七庚寅四月(1854・04)
積山 (前号乙雅)	渡辺市左衛門	遠州周知郡森町	森町	慶応二年寅七月(1866・07)

号	本名	住所	現住所	入門年月日
石翠	塩崎平兵衛	豊田郡二俣村	浜松市天竜区二俣	嘉永七寅九月(1854・09)
石清	一木高司	山名郡飯田村	森町飯田	慶応三年卯三月(1867・03)
石坡	米山和右衛門	豊田郡二俣村	浜松市天竜区二俣	嘉永七寅九月(1854・09)
雪香	秋野吉之丞	駿国志太郡島田宿	島田市 (大津小路一拾 山人名録)	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
雪山	太箸六郎	当国豊田郡中瀬村	浜松市浜北区中瀬	明治二己巳年八月 (1869・08)
洗我	伊藤岩吉	遠州周知郡中田村	森町中川	慶応四戊辰四月十六日 (1868・04・16)
送雨	宮川峯藏	佐野郡篠場村	掛川市篠場	万延二辛酉正月(1861・01)
素竹	門奈権左衛門	遠州豊田郡平間村	磐田市竜洋	安政三丙辰年八月 (1856・08)
素節	福村重二郎	駿志太郡与左衛門 新田	藤枝市与左衛門	慶応四年辰九月(1868・09)
岱中	水野嘉平(水野 治郎八一浅羽 町史)	山名郡岡山村	袋井市浅名岡山 一浅羽町史	万延二辛酉正月廿五日(1861・ 01・25) * 1906・10・23没 (76)一浅羽町史
且雅	修験学宝院	遠州城東郡月岡村	菊川市月岡	元治元年子十一月 (1864・11)
丹雅	鈴木紋三	城東郡西之谷村	掛川市西之谷 (にしのがや)	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
竹溪	小沢保作	駿国志太郡上青島村	藤枝市上青島	慶応四年辰八月(1868・08)
竹香	虎岩専藏	駿国志太郡島田宿	島田市	慶応二年初冬(1866・10)
竹醉	長谷川藤七郎	遠州豊田郡竹ノ内村	磐田市向笠竹之 内	慶応二寅七月十五日 (1866・07・15)
竹明, 涼々齋	秋野郡次郎嘉明	山名郡中野村	磐田市豊浜中野	嘉永七庚寅年卯月 (1854・04)
千広 (ちひろ)	名倉孫右衛門	城東郡大坂村	掛川市大坂	慶応二丙寅晚夏(1866・06)
眺江	寺田新一郎	遠州豊田郡見取村	袋井市見取	慶応二年寅七月十五日 (1866・07・15)
珍種	甲賀伊兵衛	駿州益津郡越後島村	焼津市越後島	元治元年子十月十二日 (1864・10・12)
島桂	相羽伊藤治	遠江国周知郡福田地村	森町睦実	明治二年己七月(1869・07)
桃寿	戸塚銀兵衛	山名郡諸井村	袋井市諸井	安政四年己水無月 (1857・06)
得之	竹内宇兵衛	周知郡森町	森町	慶応二丙寅四月(1866・04)
得水	大隈丈輔	遠州周知郡森町	森町	慶応二年寅七月(1866・07)
直喜 (なおき)	内藤長吉	山名郡飯田村	森町飯田	慶応三年卯三月(1867・03)
佩玉	加藤房吉	遠州周知郡森町	森町	慶応二年寅七月(1866・07)
梅春	伊藤助右衛門	遠州金谷横町	島田市金谷	安政六年己未卯月 (1859・04)
梅城	梅島彦兵衛	駿国志太郡島田宿	島田市	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
半醉	岩水寺	当国豊田郡岩水村	浜松市浜北区根 堅岩水寺	明治二己巳八月(1869・08)
百丈	石黒彦兵衛	遠州周知郡中田村	森町中川	慶応四年辰三月(1868・03)

号	本名	住所	現住所	入門年月日
不明	伊藤伝助	不明		慶応元乙丑歳七月 (1865・07)
不明(草雨?)	村松朝負	山名郡飯田村	森町飯田	慶応四年(1868)
文外	向坂弥平治	駿河国志太郡小川村	焼津市小川	慶応四辰九月(1868・09)
文牛	江塚昇	遠府	磐田市見付	慶応二年四月(1866・04)
米室	八木泰吉	駿河国志太郡島田宿	島田市	年次不明(?)
米水	杉上十五郎	遠州周知郡犬居領家村	浜松市天竜区春野町領家	明治二己卯月(1869・09)
三千磨(丸), 桃園	森山伴蔵	横須賀藩中	掛川市横須賀	安政六己未年十一月 (1859・11)
茂齋	長谷川文次郎	不明		慶応三年丁卯七月朔日 (1867・07・01)
友清	清水龍蔵	駿河国志太郡島田宿	島田市	慶応二年丙寅初冬 (1866・10)
栞水	福川鉄冶郎	遠州周知郡森町	森町	慶応二年寅七月(1866・07)
里桂	足立慶吉	周知郡平宇村	袋井市下山梨	安政七申年二月廿五日 (1860・02・25)
柳翫	小野長次郎	遠州城東郡横須賀	掛川市横須賀	安政六未年八月(1859・08)
柳月	実際寺	遠州豊田郡鮫島村	磐田市鮫島	安政三丙辰年八月晦日 (1856・08・30)
柳月	松浦作之丞	当国城東郡大坂村	掛川市大坂	文久三年亥二月・行年四十二 (1863・02)
流翠	青嶋徳蔵	駿州志太郡上青島村瀬戸	藤枝市瀬戸	慶応四年辰八月(1868・08)
涼雨, 翠亭	小池次郎八	山名郡馬場(ばんば)村	袋井市浅羽	安政七申正月廿五日 (1860・01・25)
弄我	青嶋啓次郎	豊田郡向笠上村	磐田市笠梅	慶応元丑年十一月廿一日 (1865・11・21)
露光	藤田啓二郎	周知郡谷川村	森町谷川	慶応三年卯三月(1867・03)
芦春	石川貞吉	当国豊田郡柴本村	浜松市浜北区於呂	明治二己巳八月(1869・08)
芦清(→晴 笠), 曠所齋	大竹清太夫豊広	山名郡福田村	磐田市福田 (ふくで)	嘉永七年庚寅三月廿一日 (1854・03・21)
露碩	三谷初蔵	豊田郡宮ノ一色村	磐田市宮ノ一色	慶応二年寅正月(1866・01)

## あとがき

嵐牛は当家の五代目、私は十代目になります。十代前の祖先は、森町の方より当地に移り住んだと口伝されています。敷地は東南側を東海道に面しています。掛川宿と日坂宿の間にあり、日坂宿までは約三キロ、掛川宿まで約六キロの位置にあります。裏側には新しく国道が出来、周辺の様子は嵐牛時代とはすっかり変わったとおもいます。嵐牛の庵号を柿園といっただけあり、異なる種類の柿の老木が何本もあります。この家で生まれた百歳近くになる叔母が「太さが昔と変わらないね」と最近言っていました。柿の木は成長が遅く、老木は嵐牛生前からのものでしょう。草庵に生い茂る芭蕉から庵号を芭蕉庵と名付けた芭蕉翁の聲ひそみに倣ならい、柿の木を植えたのでしょうか。俳諧だから「シエン」と音読するのではないか、とご意見を頂いたりしますが、庵号を「カキノ」、俳号を「ランギユウ」と読む、というのが我が家の口伝です。由来ははっきりしませんが、芭蕉翁にあこがれていて、京都の「嵐山」「落柿舎」を知らない筈がないので、その辺りかと想像しております。ほかに、晩年には白童子、買笑、多陰などの号も使っていました。

嵐牛はひろく学問の必要を自覚し、地元よりひらの国学者石川依平よりひらに入門、国学の教えを受け、和漢の典籍を手元に置いて学びました。俳書のほかにも沢山の江戸期の版本が当家には残っています。襲蔵書の整理を始めた三十年ほど前、岡崎市美術館の鶴田卓池展に出かけたところ、会場入口近くに掲出されていた卓池の年表の中に、「嵐牛、二十八歳で入門」とあるのを見つけ驚いたことを今でも覚えています。卓池に入門してから文通によるだけでなく、三河の岡崎や豊橋・豊川方面まで度々出掛け、師の指導を受け、同門の

人々と切磋琢磨し、熟年に達した幕末期以降は遠州屈指の俳人として全国に盛名を馳せました。そうした大雑把な評価は従来もされていましたが（伊藤鎌次郎著『柿園嵐牛翁』昭和六十二年刊、ほか）、今回刊行の資料集にその活躍振りがはつきり可視化され、子孫としては有難い限りです。

息子の洋々も父嵐牛の指導の下、家業の傍ら俳諧にいそしみ、父の没後、柿園の別号を継承しました。洋々の息子以降は、俳諧や俳句に興味を持つ者はいなくなりました。その頃は、日本の経済が急成長し、当家も裕福であったようです。次の二代は昭和の恐慌、第二次世界大戦を経験し、関係していた銀行の倒産、戦後の農地解放等で破産状態でした。それにもかかわらず血筋でしょうか、この二代も芸術への関心は強かったようで、日本画や写真を趣味としました。私も血筋でしょうか、明治大学マンドリン倶楽部に所属し、学業よりもそちらに多くの時間を過ごしました。今でも地元祭囃子の会で、笛吹として活動しています。当家の男は芸術（道楽？）でどの代も家族に迷惑を掛け続けています。

私がおの心ついた戦後すぐには、米蔵、中の蔵、東の蔵と三つの蔵が並んでいました。戦後すぐ米蔵は解体し、しばらく二つの蔵が使用されてきました。東の蔵は雑庫とし、それ以外の衣類、寝具、陶器、漆器、掛軸、版本、その他は中の蔵に収めておりました。東の蔵は二十年ほど前に蔵風の建物に建て替え、現在は家業の建築設計事務所として使用しています。東の蔵を建て替えたのを機に、中の蔵も改修しました。収めるものは嵐牛時代のものに限りました。現代はコンピュータの時代で、インターネット上で「バーチャル蔵美術館」として改造計画を模索、実行しました。一階は所謂生活雑器で、壺の部屋、茶道の道具の部屋、漆器の部屋、焼物の部屋と四つの部屋に分類しました。二階は掛け軸、本類の紙物を収めました。蔵の中は公開を原則に考えています。ご覧になりたい方は御一報の上、お越しく下さい。

さて、エクセルを用いて収蔵品をデータベース化して一通り形にしたものの、整理に限界を感じていた頃、

「俳諧静岡」の主催者、田中明氏に出会いました。氏から、書画の屏風・軸物・短冊だけでなく、写本・版本（典籍）も整理しないと駄目だと言われました。そのころは仕事が忙しかったので、氏に整理を委ねましたが、氏のご高齢と体調不良が重なり、整理の進展を見ないまま、平成二十一年、物故されました。幸い「俳諧静岡」の若手会員で、田中氏の協力者でもあった倉島利仁氏が引継ぎ、田中氏との連名で「俳諧静岡」に「嵐牛蔵美術館蔵書目録稿 版本の部（一〜十二）」を連載して下さいました。続いて「写本の部」の目録化を目指しておられたのですが、草稿の段階で公表には至っておりません。

平成十九年夏、倉島氏の大学時代の恩師加藤定彦先生が来訪され、嵐牛遺品の芭蕉・曾良・等躬自筆の「三子三筆卷子」をお目に掛けたところ、真筆に間違いなしとの鑑定を頂戴し、加藤先生と倉島氏の連名で翌年の学会誌『連歌俳諧研究』に発表されるに至ったのは、まったく想定外の展開でした。

それを機に蔵書の整理・活用が急速に進展しました。平成二十六年八月、加藤先生により俳文学会東京例会の訪書旅行が企画され、それに併せて「三子三筆卷子」及び嵐牛を中心とする特別展を掛川市立大東図書館に於いて開催することが出来ました。担当職員木佐森道弘氏のご尽力に改めて御礼申し上げます。訪書旅行に参加された二十七名の方々を拙宅にお迎えし、特別展だけでなく主要な蔵書を手にとってご覧頂きました。

一昨年、加藤先生の発案で、「嵐牛友の会」及び「友の会便り」が発足しました。嵐牛俳諧資料集の出版を支援する組織にしたい、とその意図を伺いました。資料集はともかく、嵐牛顕彰の方法として私も考えないではなかったのですが、とても叶いそうもない夢物語とあきらめていました。もろ手をあげて賛成したのはいうまでもありません。お陰様で友の会は順調に回を重ね、この八月に三回目の見学会も実施、三十名近くの参加者でした。

こうして刊行されるに至った資料集は、加藤・倉島両先生が原本に当たるのはもちろん、諸本とも照合、厳密に校訂し、読解し易いように振り仮名や注も施して頂いたものです。この場を借りて両先生のご労苦に御礼申し上げますとともに、皆様に閲読・利用し、嵐牛や門下四天王の作品だけでなく、ひろく幕末・維新期駿遠の大衆文化に触れて頂くよう念じてやみません。併せて今まで大変お世話になりました故塚本翠子、故田中明、桑原武、足立順司、鈴木健治、佐藤清隆の皆様、大竹裕一・靖子御夫妻にも御礼申し上げます。末筆ながら資料の調査・撮影等でご協力頂いた所蔵者各位にも心より感謝申し上げます。

平成二十九年九月吉日

嵐牛俳諧資料館長（旧嵐牛蔵美術館）

伊藤 鋼一郎

---

〈編著者紹介〉

---

加藤定彦（かとう さだひこ）

---

昭和22年生まれ 立教大学名誉教授 嵐牛友の会顧問  
日本近世文学・俳文学専攻  
著書 『関東俳壇史叢稿』（若草書房、2013年刊）ほか

---

倉島利仁（くらしま としひと）

---

昭和45年生まれ 静岡学園高校教諭 嵐牛友の会幹事補佐  
日本近世文学・俳文学専攻  
著書 『おくのほそ道』（共著、三弥井書店、2007年刊）ほか

---

柿園  
嵐牛俳諧資料集

二〇一八年三月三十一日 発行

編著者

加藤 定彦  
倉島 利仁

発行者

伊藤 鋼一郎（昭和十九年生まれ）  
一級建築士  
株式会社工設計代表取締役

発行所

嵐牛俳諧資料館

〒四三六-10004  
静岡県掛川市八坂四三四-1  
電話 090-1147212972（携帯）

印刷所

城島印刷株式会社  
〒八二〇〇三 福岡市中央区白金二一九-六



——「柿園」扁額——

甲午(明治27年)十月上浣

成瀬大域・温書



—— 柿園現況(嵐牛友の会会場) ——